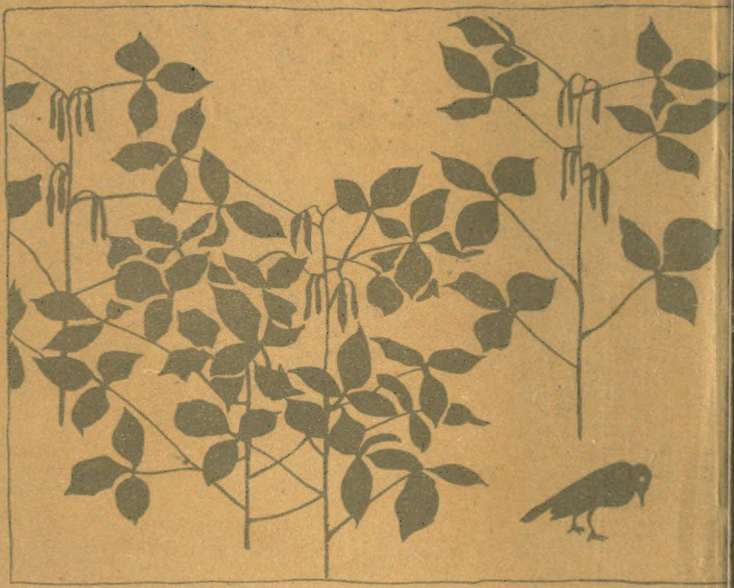
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03020 4721



大正十三年八月二日印刷
大正十三年八月五日發行

漢文叢書
醉古堂、菜根譚

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地
編輯者　塚本哲三

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行兼印刷者　三浦理

東京市神田區錦町三丁目九番地
印刷所　有朋堂印刷部

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所　有朋堂書店

不許複製

釋氏隨緣。吾儒素位四字。是渡海的浮嚢。蓋世路茫茫。一念求レ全。則萬緒紛起。隨レ寓而安。則無二入不一レ得矣。

釋氏の隨緣(一)と吾が儒の素位(二)との四字、是れ渡海的の浮嚢(三)なり。蓋し世路茫茫(四)たり。一念全きを求むれば(五)、則ち萬緒紛起す(六)。寓(七)に隨つて安んぜば則ち入るとして得ざることなからん。

(一) 因緣のまゝにまかせて身を處す (二) 其位に素して行ふ (三) 人生の海を渡る浮きぶくろ (四) 世渡の路ははるかにして限りなし (五) 一念の完全ならんことを求む (六) 多くの心緒むちがり起る (七) 境遇にしたがひ滿足すれば何處に往くも自得を得ざることなし

菜根譚終

此生哉。

天運之寒暑易避。人世之炎涼難除。人世之炎涼易除。吾心之氷炭難去。去得此中之氷炭。則滿腔皆和氣。自隨地有春風矣。

茶不求精而壺亦不燥。酒不求洌而樽亦不空。素琴無絃而常調。短笛無腔而自適。縱難超越羲皇。亦可匹儔嵇阮。

(一)天運の寒暑は避け易く、(二)人世の炎涼は除き難し。人世の炎涼は除き易く、(三)吾が心の氷炭は去り難し、此中の氷炭を去り得ば、則ち(四)滿腔皆和氣、自ら(五)地に隨つて春風あり。

(一)天然自然の運行よりなる寒暑は防ぎやすし　(二)世の人情のフケサメは除きがたし　(三)吾が心中の冷熱常ならぬ感情は去りがたし　(四)胸中皆溫和の氣　(五)到るところとして春風の吹き來るを感ず

(一)茶は精を求めず、而して(二)壺も亦燥かず。酒は(三)洌を求めず、而して(四)樽も亦空しからず、(五)素琴絃なくして常に調ひ、(六)短笛腔なくして自ら適ふ。縱ひ(七)羲皇を超越し難きも、亦(八)嵇阮に匹儔す可し。

(一)茶は上品なるを求めず　(二)茶壺の底のかわかぬほどに蓄へ置く　(三)强烈　(四)酒樽を空にせず　(五)飾無き琴は絃なけれど常に調子調ふ　(六)短き笛は穴無くして自然わが心にかなふ　(七)支那太古の君主太昊伏羲氏　(八)昔の隱士嵇康阮咸と匹敵す

波浪兼レ天。舟中不レ知レ懼。而舟外者寒レ心。猖狂罵レ坐。席上不レ知レ警。而席外者咋レ舌。故君子身雖レ在二事中一。心要レ超二事外一也。

(一)波浪天を兼ぬるも舟中懼るゝを知らず、而して(二)舟外の者は心を寒くす。(三)猖狂の坐に罵るは席上警むるを知らず、而して席外の者は(四)舌を咋む。故に君子身は(五)事中に在りと雖も、(六)心は事外に超ゆるを要す。

㊀波浪高く天を拍つも舟中の人はおそろしと思はず　㊁舟の外のものはキモを冷す　㊂猛り狂ふものゝ座上に罵るは其の同席の人之を制することを知らず　㊃舌をかみて苦りきる　㊄事がらの中に在る　㊅心は事がらの外に超越せざる可からず

人生減二省一分一。便超二脫一分一。如交遊減。便免二紛擾一。言語減。便寡二愆尤一。思慮減。則精神不レ耗。聰明減。則混沌可レ完。彼不レ求二日減一而求二日增一者。眞桎二梏

(一)人生一分を減省すれば、便ち一分を超脱す。如し(二)交遊減ずれば便ち紛擾を免れ、(三)言語減ずれば便ち愆尤も寡し。(四)思慮減ずれば則ち精神耗せず。(五)聰明減ずれば則ち混沌完うす可し。彼の(六)日に減ずることを求めずして、日に增すことを求むる者は(七)眞に此生を桎梏にするかな。

㊀人此の世に在りて爲すべき雜事の一分をへらす　㊁交際がへればゴタゴタをのがる　㊂口數へれば過失も少なし　㊃くだらぬ考へを減ずれば精神を勞せず　㊄聰明の度合を減ずれば本性を全く保ち得　㊅日にこれらのことを減ぜんと心がく　㊆此の人生をカセをはめし如く不自由なるものになす

出二此場中一矣。一事起則一害生。故天下常以二無事一爲レ福。讀二前人詩一云。勸レ君莫レ話封侯事。一將功成萬骨枯。又云。天下常令二萬事平一。匣中不レ惜千年死、雖レ有二雄心猛氣一。不レ覺化爲二氷霰一矣。淫奔之婦。矯而爲レ尼。熱中之人。激而入レ道。清淨之門常爲二婬邪之淵藪一也如レ此。

一事起れば則ち一害生ず。故に天下常に(一)無事を以て福となす。(二)前人の詩を讀むに云く、君に勸む話すこと莫れ、(三)封侯の事。(四)一將功成つて萬骨枯ると。又云く、天下常に(五)萬事をして平ならしめば、(六)匣中惜しまず千年死するをと。(七)雄心猛氣ありと雖も、(八)覺えず化して氷霰となる。

(一) 何事も無きを幸福とす (二) 古人 (三) 土地を封ぜられし大名 (四) 一人の大將は功名成れども衆卒の骨は空しく朽つ (五) 萬事が平和なりしならば (六) 箱の中に千年間死するも遺憾とせず、是は劍の詩句なり (七) 雄壯なる氣象 (八) われ知らず化して氷や霰の如く消え死す

淫奔の婦は(一)嬌つて尼となり、(二)熱中の人は激して道に入る。(三)清淨の門は、常に(四)婬邪の淵藪となること此の如し。

(一) 節をためて尼となる (二) 利慾に熱する人は一旦激して佛道に入る (三) 清らかなる佛門 (四) たはれよこしまなるもの、巣窟

鄙略而天眞渾具。若一失ニ身市井驅儈一。不レ若下轉ニ死溝壑一神骨猶淸上。

非レ分之福。無レ故之獲。非ニ造物之釣餌一。卽人世之機阱。此處著レ眼不レ高。鮮レ不レ墮ニ彼術中一矣。

人生原是一傀儡。只要ニ根蒂在一レ手。一線不レ亂。卷舒自由。行止在レ我。一毫不レ受ニ他人提掇一。便超ニ

㊀山林にかくるゝ士 ㊁淸らかに苦しむ ㊂高尙の趣味 ㊃野鄙粗略 ㊄天然の眞性十分に具備す ㊅町中の賤しき車夫馬丁のなかまに墮落す ㊆ミゾやタニにころがり死ぬ ㊇精神の淸きを保つにしかず

分(一)に非ざるの福、故なきの獲(二)は、造物の釣餌(三)に非ざれば、卽ち人世の機阱(四)なり。此の處眼(五)を著くること高からざれば、彼の術中(六)に墮ちざること鮮し。

㊀身分不相應なる幸福 ㊁理由なき儲もの ㊂造物者の人を釣る好餌 ㊃人生のおとし穴 ㊄高き處に眼をつく ㊅造物者や人生の手だてに乘らざるもの少なし

人生は原と是れ一傀儡(一)なり、只根蒂の手に在るを要す(二)。一線亂れず(三)、卷舒自由(四)、行止我に在り(五)、一毫も他人の提掇を受けず(六)、便ち此場中を超出す(七)。

㊀一つのアヤツリ人形 ㊁根モトは己が手中にあらねばならぬ ㊂一筋も知れず ㊃卷くも伸ばすも自由自在 ㊄行くも止まるも自分の意のまゝ ㊅少しも他人のあやつりを受けず ㊆此の舞臺の中を超越す

間灌漑。野禽不レ受二世間豢養一。其味皆香而且冽。吾人能不下爲二世法一所中點染上。其臭味不二迥然別一乎。

栽レ花種レ竹。玩レ鶴觀レ魚。亦要レ有二段自得處一。若徒留二連光景一。玩二弄物華一。亦吾儒之口耳。釋氏之頑空而已。有二何佳趣一。

山林之士。淸苦而逸趣自饒。農野之夫。

して且冽(四)なり。吾人能く世法(五)の爲に點染せられざれば、其臭味(六)迥然として別ならずや。

(一) 肴などの如き山林に生ずる食物 (二) 野菜の如く水をひくことなし (三) 禽などの如く飼養せられず (四) 其の風味淸香しくてあざらけし (五) 世俗の惡習に染まず (六) おもむきを遙かに異なり

花を栽ゑ、竹を植ゑ、鶴を玩び魚を觀る。亦(一)段の自得の處あるを要す。若し徒らに光景(二)に留連し、物華(三)を玩弄せば、亦吾が儒(四)の口耳、釋氏の頑空(五)のみ、何の佳趣かあらん。

(一) 一つの悟りが必要 (二) 景色におぼる (三) 折々の景色をもてあそぶ (四) 儒家のいふ口や耳の快樂 (五) 色即是空ならざる唯一の空虛

山林(一)の士は淸苦(二)にして逸趣(三)自ら饒し。農野の夫は鄙略(四)にして天眞(五)渾て具る。若し一たび身を市井の駔儈(六)に失せば、溝壑(七)に轉死して、神骨(八)猶は淸きに若かず。

不問著レ物我兩忘。世人爲二榮利一纏縛。動曰二塵世苦海一。不レ知雲白山青。川行石立。花迎鳥咲。谷答樵謳。世亦不レ塵。海亦不レ苦。彼自塵二苦其心一爾。

花看二半開一。酒飲二微醉一。此中大有二佳趣一。若至二爛漫酕醄一。便成二惡境一矣。履二盈滿一者。宜レ思レ之。

山肴不レ受二世

ちも忘る

世人(一)榮利の爲に纏縛せられて、動もすれば(二)塵世苦海と曰ふ。知らず、雲白く山青く、(三)川行き、石立ち、花迎へ鳥咲ひ、(四)谷答へ樵謳ふ。世も亦塵ならず、海も亦苦ならず。彼れ(五)自ら其心を塵苦にするのみ。

(一)榮晉利慾のために束縛せらる (二)俗塵の世苦痛の海 (三)川水は流れゆき石は峙つ (四)谷間は谺してこたへヤコリはうたふ (五)自分から其の心を塵俗にし苦海にするのみ

花は半開に看、(一)酒は微醉に飲む。此中大いに佳趣あり。若し(二)爛漫酕醄に至らば、便ち(三)惡境を成す。(四)盈滿を履むものは宜しく之を思ふべし。

(一)酒は飲んでもホロヱヒの程度にす (二)花は咲き亂れ酒は醉ひつぶれ (三)殺風景の境涯 (四)十二分の滿足にゐるもの

(一)山肴は世間の(二)灌漑を受けず。野禽は世間の(三)豢養を受けず、(四)其味皆な香しく

清、鳥啼而欣然有ㇾ會。花落而瀟然自得。何地非二眞境一何物無二眞機一。

子生而母危。鏹積而盜窺。何喜非ㇾ憂也。貧可二以節一ㇾ用。病可二以保一ㇾ身。何憂非ㇾ喜也。故達人當二順逆一一視而欣戚兩忘一。

耳根似二飈谷投一ㇾ響。過而不ㇾ留則是非倶謝。心境如二月池浸一ㇾ色。空而

㊀情に任せて動くところより眞性を亡失す　㊁心をすまして靜かに坐す　㊂空に雲出て悠々と我と共に行き去る　㊃雨したゝりて冷然として吾と共に消し　㊄鳥啼くをきゝて喜んで快と感ず　㊅サツパリと自ら覺る　㊆眞實の境地　㊇眞實のハタラキ

子生れて母危く、鏹(一)積んで盜窺ふ。何の喜か憂(二)に非ざらん。貧以て用を節すべく、病(四)以て身を保つ可し。何の憂か喜に非ざらん。故に達人(三)は當に順(五)逆一視し、而して欣戚(六)兩ながら忘るべし。

㊀鏹サシ多くつもりて盜人之をうかゞふ　㊁如何なる喜びも心配の種ならざるものなし　㊂貧乏は憂ふべきものなれど爲めに節約の念生ずべし　㊃病氣は憂ふべきものなれど自然養生して身を保つ事となるべし　㊄順境逆境を同樣に見なす　㊅喜びと憂へと雙方とも忘る

耳根は飈谷の響を投ずるに似たり(一)、過ぎて留めざれば(二)、則ち是非倶に謝す。心境(三)は月池の色を浸すが如し、空にして著せざれば(四)、則ち物我兩ながら忘る。

㊀耳はツムジ風が谷に吹き込んで音を立つる如し　㊁通り過ぎて後に何物をも留めざれば是非善惡も其の場かぎりの聞きのがし　㊂心は月影をうつす池が月色を映ずる如し　㊃空虛にして執著せざれば則ち外物自我どち

就二一身一了二一身一者。方能以二萬物一附二萬物一。還二天下於天下一者。方能出二世間於世間一。

人生太閒。則別念竊生。太忙則眞性不レ現。故士君子不レ可レ不レ抱二身心之憂一。亦不レ可レ不レ耽二風月之趣一。

人心多從二動處一失レ眞。若一念不レ生。澄然靜坐。雲興而悠然共逝。雨滴而冷然俱

一身(一)に就いて一身を了するものは、方に能く萬物(二)を以て萬物に付す、天下(三)を天下に還へす者は、方に能く世間(四)を世間に出す。

(一) わが一身について一身のことを悟りつくす (二) 萬物を萬物自ちにまかせ置きて私欲に供せず (三) 天下を天下自ちに還し置きて爭奪せず (四) 世間を世間其のものに出して敢へて世間より遁れんとせず

人生太だ閒(一)なれば、則ち別念(二)竊に生じ、太だ忙なれば則ち眞性(三)現れず。故に士君子は身心(四)の憂を抱かざる可からず。亦風月(五)の趣に耽らざる可からず。

(一) 甚だ閑暇 (二) 本心以外の念慮 (三) 眞實の本性 (四) 身と心との苦心をせねばならず (五) 風流の趣にふけるほどの餘裕なかるべからず

人心多く動處(一)より眞を失ふ。若し一念生せず、澄然(二)として靜坐せば、雲興(三)つて悠然として共に逝き、雨滴(四)りて冷然として俱に淸(五)く、鳥啼いて欣然として會する有り、花落ちて瀟然(六)として自得す。何の地か眞境(七)に非ざらん。何物か眞機(八)無からん。

曠。臨流使人意遠。讀書於雨雪之夜。使人神清。舒嘯於丘阜之巓。使人興邁。

心曠則萬鍾如瓦缶。心隘則一髪似車輪。

無風月花柳。不成造化。無情欲嗜好。不成心體。只以我轉物。不以物役我。則嗜慾莫非天機。塵情即是理境矣。

書を雨雪の夜に讀めば、人をして(四)神清からしめ、(五)嘯を丘阜の巓に舒ぶれば、人をして(六)興邁かしむ。

㊀ 高き山に登る ㊁ 人の心をひろ〴〵とする ㊂ 人の心を遠大にす ㊃ 精神を清らかにす ㊄ 岡の上に登りに靜かにうそぶく ㊅ 興味を深からしむ

(一)心曠なれば則ち(二)萬鍾も(三)瓦缶の如く、心隘なれば則ち(四)一髪も車輪に似たり。

㊀ 心闊ければ ㊁ 鍾は六斛四斗にて大祿なり ㊂ 價値なき土燒きの器 ㊃ 一本の髮の毛も車輪の如く大きく見ゆ

(一)風月花柳無ければ造化を成さず。情欲嗜好無ければ(二)心體を成さず。只我を以て(三)物を轉じて、(四)物を以て我を役せざれば、則ち嗜慾も(五)天機に非ざるなく、(六)塵情即ち是れ理境なり。

㊀ 風月の趣花鳥の興なければ造化の妙用全からず ㊁ 心の本體全からず ㊂ わが精神を以て外物を支配す ㊃ 外物を以てわが精神を使はず ㊄ 天然の妙用 ㊅ 俗情即ち眞理の境

心遠處。自無二車塵馬迹。何須レ痼疾丘山。

草木纔零落。便露二萌頴於根底。時序雖二凝寒。終回二陽氣於飛灰。蕭殺之中。生生之意。常爲二之主。即是可三以見二天地之心。

雨餘觀二山色。景象便覺二新姸。夜靜聽二鐘聲。音響尤爲清越。

登レ高使二人心

㊀ 塵俗の心やむ時月登り風吹き來る趣あり ㊁ 苦しみの人生とも限らず ㊂ 心曠遠なるところ ㊃ 車の轍馬の足迹の如き俗臭なし ㊄ 山水を樂しむ持病となつて山水を求めてのがれずともよろし

(一)草木纔に零落すれば、便ち(二)萌頴を根底に露す。(三)時序凝寒と雖も終に陽氣を(四)飛灰に回す。(五)蕭殺の中、生生の意、常に之れが主と爲る。即ち是れ以て天地の心を見る可し。

㊀ 草木始めてしぼみ落つ ㊁ 芽生へが根もとにあらはる ㊂ 春夏秋冬の順序の結果として來る嚴寒 ㊃ 陽氣來復して春のきざしあり、竹筒に灰を入れ一陽來復すれば筒中の灰飛び出しかけにして陽氣のきざすを知ると古代にあり ㊄ 秋冬の際霜雪萬物を枯らす中に生々した氣象が常に主となりて含まる

雨餘に(一)山色を觀れば、(二)景象便ち新姸なるを覺ゆ。夜靜かに鐘聲を聽けば、音響尤も(三)清越たり。

㊀ 雨上り ㊁ 景色新しく鮮かなるを感ず ㊂ 清くして調子高し

(一)高きに登れば人をして心(二)曠からしめ、流れに臨めば人をして(三)意遠からしむ。

區。皆念想造
成。故釋氏云。
利欲熾然。即
是火坑。貪愛
沈溺便爲苦
海。一念清淨
烈焰成池。一
念警覺船登
彼岸。念頭稍
異境界頓殊。
可不愼哉。
繩鋸木斷。水
滴石穿。學道
者須加力索。
水到渠成。瓜
熟蒂落。得道
者一任天機。
機息時。便有
月到風來。不
必苦海人世。

ば、即ち是れ火坑(四)、貪愛(五)に沈溺すれば、便ち苦海と爲る。一念清淨なれば烈焰(六)も池と成り、一念警覺(七)すれば船彼岸に登る。念頭稍異れば(八)、境界頓に殊なる。愼まざる可けんや。

㊀ 幸福なる境遇と不幸なる境遇　㊁ 心の中より造りなす　㊂ 利欲が火のもゆる如く盛ん　㊃ 火のもゆる坑　㊄ はしいかあいに溺るれば此の世は即ち苦みの海　㊅ はげしき焰も清涼なる池水となる　㊆ 心がさとりさむれば船彼方の岸に達して極樂涅槃の境に入る　㊇ 念慮少しくちがへば境遇もにはかに變化す

(一)繩鋸も木斷ち、(二)水滴も石穿つ。道を學ぶ者は須らく(三)力索を加ふべし。(四)水到れば渠成り、瓜熟すれば蔕落つ。(五)道を得る者は天機に一任す。

㊀ 釣瓶繩も長く使用すれば井桁を斷ちきる鋸　㊁ 水滴も斷えず滴つれば堅き石を穿つ　㊂ 骨折り求む　㊃ 水が流れて來れば自然と溝ができる　㊄ 道をさとるものは自然のハタラキの妙用にまかす

(一)機息む時、便ち月到り風來る有り。必ずしも苦海の人世ならず。心(三)遠き處、(二)自ら車塵馬迹(四)なし、何ぞ痼疾(五)の丘山を須ひん。

野鶴一。而起二超絶之想一。遇二石澗流泉一。而動二澡雪之思一。撫二老檜寒梅一。而勁節挺立。侶二沙鷗麋鹿一。而機心頓忘。若一走二入塵寰一。無レ論三物不二相關一。即此身亦屬二贅旒一矣。

鹿を侶として機心頓に忘る。若し一たび走つて塵寰(一〇)に入らば、物の相關せざる(一一)に論なく、即ち此身も亦贅旒(一二)に屬す。

(一)山間の住居は胸中サツパリ (二)物にあたりて皆快き感じあり (三)はなれ雲と野の鶴 (四)世間を超越する考へがおこる (五)岩間の谷水と流るゝ泉 (六)俗念をあらひすゝぎし如き高尚の考へがおこる (七)古き檜と寒中に咲く梅を撫でて (八)強い節操のぬきんで立つをおもふ (九)沙上の鷗や鹿の群を友達として人間の偽る心を一時に忘る (一〇)俗塵の世界に入る (一一)物と關するところなく超越するにかゝはらず (一二)無用の長物

興逐レ時來。芳草中撒レ履閒行。野鳥忘レ機時作レ伴。景與レ心會。落花下披レ襟兀坐。白雲無レ語漫相留。

興(一)時を逐うて來れば、(二)芳草の中履を撒いて閒行す。(三)野鳥機を忘れて時に伴と作る。(四)景心と會すれば落花の下襟を披いて兀坐し、(五)白雲語なく漫に相留まる。

(一)感興が時々刻々に起り來る (二)芳しき草の中を履をぬぎてしのびあるく (三)野の鳥も捕へらるゝ懸念を忘れて時に友達となる (四)景色が心にかなふ (五)襟もとをくつろげて獨坐す (六)白雲言葉なけれどそゞろに人と相とゞまる

人生福境禍區

人生の福(一)境禍區は、皆念想(二)より造成す。故に釋氏云はく、(三)利欲の熾然なれ

欲而不レ乱。以澄二吾静體一。操持既堅。又當レ混二迹風塵一。使二此心見レ可レ欲而亦不レ乱。以養二吾圓機一。

喜レ寂厭レ喧者。往往避レ人以求レ静。不レ知意在レ無レ人便成二我相一。心著二於静一便是動根。如何到二得人我一視動静兩忘的境界一。

山居胸次清洒。觸レ物皆有二佳思一。見二孤雲

風塵に混ずべし。此心をして欲す可きを見て而も亦亂れざらしめ、以て吾が圓機(七)を養ふ。

㊀手にて握ること未だ確からずして心落ちつかず　㊁塵に汚れ騒々しき世に出づべからず　㊂欲しいと思ふものを見ずして心を亂れさせず　㊃心が靜かなる本體をジツとすます　㊄とりもつ所の信念堅くならば　㊅社會の風塵中に出向くべし　㊆圓轉活脱なる心のハタラキを修養す

(一)寂を喜び喧を厭ふ者は、(二)往往人を避けて以て靜を求む。(三)知らず、意人無きに在れば便ち我相を成すを。(四)心靜に著せば、便ち是れ動根。如何ぞ人我一視、(五)動靜兩ながら忘る的の境界に到るを得ん。

㊀靜寂を喜び騒々しきを厭ふ　㊁人を避けかくれて靜かならんことを欲す　㊂人無きことに意をとむれば則ち一の我に執することゝなるを知らず　㊃心が靜寂に執着するときは則ち是れ動亂の根本　㊄動と靜と雙方を忘るゝほどの境遇に到りがたし

(一)山居は胸次清洒、(二)物に觸れて皆佳思あり。(三)孤雲野鶴を見て(四)超絶の想を起し、(五)石澗流泉に遇うて(六)澡雪の思を動かし、(七)老檜寒梅を撫して(八)勁節挺立し、(九)沙鷗麋

增ニ其障一。物本一物。何待ニ於齊一。莊生曰レ齊レ物者自剖ニ其同一。

笙歌正濃處。便自拂レ衣長往。羨三達人撒ニ手懸崖一。更漏已殘時。猶然夜行不レ休。咲三俗士沈ニ身苦海一。

把握未レ定。宜レ絶ニ迹塵囂一。使ニ此心不レ見レ可レ

ふ者は、自ら其同を剖くなり。

㈠心の中に妄念雑慮が無ければ何ぞ心を觀察することあらんや ㈡佛教者 ㈢かへつて煩悩の障碍を重ね増すといふもの ㈣萬物は皆一物同體に歸すべきもの ㈤如何にして莊周のいふ如く物をひとしうするの必要あらんや ㈥莊子、名は周、楚の蒙の人、著書三十二篇あり ㈦物を齊しうすといふはつまり同一のものを兩面に分ちていひしなり

(一)笙歌正に濃かなる處、便ち自ら衣を拂うて長く往く。(二)達人の手を懸崖に撒するを羨む。(三)更漏已に殘る時、猶ほ然も夜行して休まず。(四)俗士の身を苦海に沈むるを咲ふ。

㈠笙や歌の興酣なるとき自ら決然衣を拂うて立去る ㈡達識の士が危きキリギシの如き場所に手を放つて行くごとくにて羨まし ㈢水時計の水も殘りすくなになり夜更けて後までも思ひきりわるく彷徨して休まず ㈣俗人の自身を苦海に沈めて苦しむをわらふ

(一)把握未だ定らざれば、宜しく迹を(二)塵囂に絶つべし。此心をして(三)欲す可きを見ず而して亂れざらしめ、以て吾が(四)靜體を澄す。(五)操持既に堅うしては、又當に(六)迹を

雪月之空清、唯靜者爲之主。水木之榮悴、竹石之消長、獨閒者操其權。

田父野叟語以黃鷄白酒則欣然喜、問以鼎食則不知。語以縕袍短褐則油然樂、問以袞服則不識。其天全故其欲淡。此是人生第一個境界。

心無其心何有於觀。釋氏曰觀心者重

獨り閒者(六)其權を操る。

(一)風吹き花咲くサッパリしたる景色　(二)雪降り月照るカラリとしたる景色　(三)靜寂を樂しむもののみ此の景色の主となる　(四)水や木の盛衰　(五)竹や石の變化　(六)心の閒適なるものが其れを支配す

田父野叟(一)は語るに黃鷄白酒(二)を以てすれば、則ち欣然として喜ぶ。問ふに鼎食(三)を以てすれば則ち知らず。語るに縕袍短褐(四)を以てすれば、則ち油然(五)として樂しむ。問ふに袞服(六)を以てすれば則ち識らず。其天全し(七)、故に其欲淡し。此れは是れ人生第一個の境界(八)なり。

(一)百姓の老父　(二)毛の黃色なる雞と白き濁酒　(三)鼎にて煮たる美食　(四)ドテラと短き毛織の衣服にて賤者の着るもの　(五)滿足氣に樂しむ　(六)高位のものの着する服　(七)其の天性全くして害せられず　(八)第一等の境遇

心(一)に其心無ければ、何ぞ觀にあらん。釋氏(二)心を觀ずと曰ふ者は、重ねて(三)其障を増す。物(四)は本一物なり、何ぞ(五)齊うするを待たん。莊生(六)の物(七)を齊うすと曰

遇レ病而後思二強之爲一レ寶。處レ亂而後思二平之爲一レ福。非二蚤智一也。倖レ福而知三其爲二禍之本一。貪レ生而先知三其者二死之因一。其卓見乎。

優人傳レ粉調レ硃。效二姸醜於毫端一俄而歌殘場罷。姸醜何存。奕者爭レ先競レ後。較二雌雄於著子一俄而局盡子收雌雄安在。

風花之瀟洒。

病に遇ひて而して後に強の寶たるを思ひ、（一）亂に處して而して後に平の福たるを思ふは（二）蚤智に非ず。福を（三）倖つて而して其の禍の本たるを知り、（四）生を貪つて而して先づ其の死の因たるを知るは、其れ卓見なるか。

（一）亂世にあひて後に平和の幸福なるをおもふ　（二）先見の明　（三）原文「而」の次に「先」の一字を脱するに似たり　（四）壽命を慾ばる

（一）優人粉を傅け硃を調へ、（二）姸醜を毫端に效すも、俄にして（三）歌殘り場罷めば、（四）姸醜何ぞ存せん。（五）奕者先を爭ひ後を競ひ、（六）雌雄を著子に較ぶるも、俄にして（七）局盡き子收まれば雌雄安にか在る。

（一）俳優が白粉をつけ朱を調色して塗る　（二）美と醜とを刷毛のさきで作る　（三）歌聲止み幕しまる　（四）美醜何ぞ存在せんや　（五）碁をうつもの　（六）石をおろして勝負を爭ふ　（七）一局が終り石をしまふ

（一）風花の瀟洒、（二）雪月の空清は（三）唯靜者之が主と爲る。（四）水木の榮枯、（五）竹石の消長は

以レ不レ動爲レ歡。棊以レ不レ爭爲レ勝。笛以二無腔一爲レ適。琴以二無絃一爲レ高。會以レ不二期約一爲二眞率一。客以レ不二迎送一爲二坦夷一。若一牽レ文泥レ迹。便落二塵世苦海一矣。

試思二未レ生之前有二何象貌一。又思二既死之後作二何景色一。則萬念灰冷。一性寂然。自可下超二物外一遊中象先上。

ざるを以て勝と爲し、(三)笛は無腔を以て適と爲し。(四)琴は無絃を以て高しと爲し、(五)會は期約せざるを以て眞率と爲し、客は迎送せざるを以て(六)坦夷と爲す。若し一たび(七)文に牽かれ迹に泥まば、便ち(八)塵世苦海に落つ。

(一)世捨人の淸らかなるしわざはすべて己が心にかなふにあり　(二)酒は無理強ひせざるをよろこぶ　(三)笛は穴無きを以て快適とす　(四)琴は絃なきを以て高尚とす　(五)會合は前より約せざるを以て天眞爛漫　(六)ノンキとす　(七)虚飾に引かれ形式になづむ　(八)きたなく苦しき世の中に

試に未だ生れざるの前は、(一)何の象貌か有ると思ひ、又既に死するの後は、(二)何の景色をか作すと思はば、則ち(三)萬念灰冷し、(四)一性寂然たり。自ら(五)物外に超え、(六)象先に遊ぶべし。

(一)如何なる形なりしかをおもふ　(二)如何なるありさまになる　(三)萬づの念慮冷靜になる　(四)本然の性靜かに澄む　(五)物質以上に超越す　(六)天地萬象の未だ出來ぬ前

衰颯氣象一矣。以ㇾ我轉ㇾ物者。得固不ㇾ喜。失亦不ㇾ憂。大地盡屬二逍遙一。以ㇾ物役ㇾ我者。逆固生ㇾ憎。順亦生ㇾ愛。一毛便生二纏縛一。

理寂則事寂。遣ㇾ事執ㇾ理者似二去ㇾ影留一ㇾ形。心空則境空。去ㇾ境存ㇾ心者如二聚ㇾ羶却一ㇾ蚋。

幽人清事總在二自適一。故酒

(一)我を以て物を轉ずる者は、(二)得も固より喜ばず、(三)失も亦憂へず、(四)大地盡く逍遙に屬す。(五)物を以て我を役するものは(六)逆は固より憎を生じ、(七)順も亦愛を生ず。(八)一毛便ち纏縛を生ず。

(一)わが本心を主宰として外物を支配するもの (二)成功 (三)失敗 (四)廣大なる地上皆わが自在に往來する所なり (五)外物をもつてわが本心を追ひつかふ (六)逆境は之を憎み恐る (七)順境になれば之を愛着して失はざらんとす (八)一毛の微も自分の身心を束縛す

(一)理寂なれば則ち事寂なり。(二)事を遣つて理を執する者は、(三)影を去つて形を留むるに似たり。(四)心空なれば則ち境空なり。(五)境を去つて心を存する者は(六)羶を聚めて蚋を却くるが如し。

(一)道理が空寂にして眞實ならば事實も空寂 (二)事實を離れて道理に執着す (三)影を去つて形だけを留むるに似て無益 (四)心が空虚なれば境涯も空虚 (五)境涯を去つて心のみを存しておく (六)ナマグサイものを集めて蚋を打ちはらふ如くムダなり

(一)幽人の清事は總て自適に在り。故に(二)酒は勸めざるを以て歡と爲し、棋は爭は

猖狂。收者入於枯寂。唯善操身心的。𣏾柄在手。收放自如。

當雪夜月天。心境便爾澄徹。遇春風和氣。意界亦自沖融。造化人心混合無間。

文以拙進。道以拙成。一拙字有無限意味。如桃源犬吠桑間鷄鳴。何等淳龐。至於寒潭之月古木之鴉。工巧中便覺有

いふ　(五)身體と精神とを一つにまとむ　(六)心一筋に凝りかたまる　(七)靜寂固定の境に歸す　(八)白樂天のいふ如く放逸なるものは極端に奔りて氣ちがひじみる　(九)晁補之のいふ如く凝りかたまるものは心が枯れしぼむ　(十)身體精神をうまくあやつるもの　(十一)物を動かす把手が手にありて收むるも放つも自由

(一)雪夜月天に當つては(二)心境便ち爾く澄徹す。(三)春風和氣に遇へば(四)意界も亦自ら沖融す。(五)造化人身混合間なし。

(一)雪の夜月天に輝く　(二)人の心おのづから澄みわたる　(三)春風の長閑なる氣にあたる　(四)心の世界も自然ゆつたりと融ける　(五)自然も人間も一致融合してすきまなし

(一)文は拙を以て進み、(二)道は拙を以て成る。一の拙の字無限の意味あり。(三)桃源の犬吠桑間の鷄鳴の如きは何等の(四)淳龐ぞ。(五)寒潭の月、(六)古木の鴉に至つては、(七)工巧中に便ち衰颯の氣象あるを覺ゆ。

(一)文章は巧を弄せず飾りを設けず拙を守りゆけば進歩す　(二)道德も拙を守りて技巧を弄せざれば成就す　(三)武陵桃源の犬の鳴聲、桑畑の鷄の鳴聲　(四)スナホの景色　(五)寂びなる淵にうつる月　(六)枯木のからす　(七)技巧の中に却つて寂しきおもむきあり

捲レ雨。三杯後一眞自得。唯知二素琴横一レ月。短笛吟レ風。

萬籟寂寥中。忽聞二一鳥弄聲一。便喚二起許多幽趣一。萬卉摧剝後。忽見二一枝擢秀一。便觸二動無限生機一。可レ見性天未二常枯槁一。機神最宜二觸發一。

白氏云。不レ如放二身心一。冥然任二天造一。晁氏云。不レ如レ收二身心一。凝然歸二寂定一。放者流爲二

㈠小室の中にても萬般の念慮をすべてすつ ㈡如何んぞ丹青を粧けるりつぱなる棟に雲飛び珠玉を飾れる簾を雨に捲く豪奢を說かんや ㈢三杯の酒を傾けし後に一の眞實を自得す ㈣飾りなき琴 ㈤短き笛を風に對して吹く趣味を知る

㈠萬籟寂寥の中、忽ち一鳥の弄聲㈡を聞けば、便ち許多㈢の幽趣を喚起す。萬卉㈣摧剝の後、忽ち一枝の擢秀㈤を見れば、便ち無限の生機㈥を觸動す。見るべし、性天㈦未だ常に枯槁せず、機神㈧最も宜しく觸發すべきを。

㈠萬づの物音ひつそりと靜かなる中 ㈡一つの鳥の囀音をきく ㈢あまたの奥深き趣味をよびおこす ㈣萬づの草が枯れくだけたる後 ㈤一本の枝がぬき出でゝ咲く ㈥限りなき生き〳〵としたるハタラキを觸れうごかす ㈦自然の天性は未だ常に枯れはてゝ居らず ㈧心のハタラキ最もよく物に觸れて發動す

㈠白氏云く、如かず㈡身心を放ち、冥然として天造に任すにはと。㈢晁氏云く、如かず㈣身心を收め凝然㈤として寂定㈥に歸するにはと。㈦放者は流れて猖狂となり、㈧收者は枯寂に入る。唯善く㈨身心を操る的は、欛柄㈩手に在り、收放自如たり。

㈠白樂天の詩にいふ ㈡身體と精神とを自由にし、はるかに自然の作用にまかすにしかず ㈢宋の晁補之の

神酣布被窩中。得二天地冲和之氣一。味足藜羮飯後。識二人生澹泊之眞一。

纒脱只在二自心一。心了則居肆糟廛居然淨土。不レ然縱一琴一鶴。一花一卉。嗜好雖レ清魔障終在。語云。能休塵境爲二眞境一。未レ了僧家是俗家。信夫。

斗室中萬慮都捐。説二甚畫棟飛レ雲。珠簾

神酣(一)なれば布被窩中(二)に、天地冲和(三)の氣を得、味(四)足れば藜羮飯後(五)に、人生澹泊(六)の眞を識る。

(一)精神充實す　(二)粗末な夜具の中　(三)天地間の調和の氣を感得す　(四)食事足る　(五)アカザの葉のアツモノの如き粗食した後　(六)人生の淡泊なる眞味を識る

纒脱(一)は只自心に在り。心了(二)すれば則ち居肆糟廛(三)も居然(四)たる淨土。然ざれば縱ひ一琴一鶴一花一卉(五)、嗜好(六)淸しと雖も魔障終に在り。語に云ふ、能く(七)休すれば塵境も眞境と爲り、未だ(八)了せざれば僧家も是れ俗家なりと。信なるかな。

(一)束縛せらるゝも解脱するもそは自分の心から　(二)心に悟る　(三)肉を賣る店と糟を賣る店　(四)レツキとしたる極樂淨土　(五)一張の琴、一羽の鶴、一枝の花、一本の草　(六)好みは潔白なれど邪魔障碍いつまでもあり　(七)悟り得れば俗塵の境涯も眞實の境涯となる　(八)未だ悟らざるときは僧侶の住する寺觀も俗人の住む家となる

斗室(一)中萬慮都て捐れば、甚(二)の畫棟雲を飛ばし、珠簾雨を捲くを說かん。三杯後(三)一眞自得すれば、唯素琴(四)月に横へ、短笛(五)風に吟ずるを知る。

煙不ㇾ著而自清芬。須ニ念淨境空慮忘形釋一。纔得三以游二衍其中一。

金自ㇾ鑛出。玉從ㇾ石生。非ㇾ幻無ニ以求ㇾ眞。道得ニ酒中一。仙遇ニ花裡一。雖ㇾ雅不ㇾ能ㇾ離ㇾ俗。

天地中萬物。人倫中萬情。世界中萬事。以ニ俗眼一觀。紛紛各異。以ニ道眼一觀。種種是常。何煩ニ分別一。何用ニ取捨一。

纔に以て其中を游衍することを得ん。(六)

㊀人の心には一の眞實の境涯あり ㊁絲竹管絃の音樂にあらずして自然と愉快に感ず ㊂煙草や茶にあらずして自然と清香あり ㊃心を清くし境涯に引かされず ㊄念慮を忘れ形體とけはなる ㊅心の内に遊樂することを得るならん

金は(一)鑛より出で、玉は石より生ず。(二)幻に非ざれば以て眞を求むることなし。(三)道は酒中に得、(四)仙は花裡に遇ふ。(五)雅なりと雖も俗を離るゝこと能はず。

㊀貴重なる黄金は粗末なる鑛石より出づ ㊁幻化の世法以外に眞如實相を求めがたし ㊂晉の七賢の如く眞理を飲酒の興に得 ㊃桃源の故事の如く仙人と花咲ける中に出遭ふ ㊄風雅といへども全然俗を離れがたし

天地中の萬物、(一)人倫中の萬情。世界中の萬事、(二)俗眼を以て觀れば、(三)紛紛各〻異なり。(四)道眼を以て觀れば(五)種種是れ常なり。何ぞ(六)分別を煩さん、何ぞ(七)取捨を用ひん。

㊀人間社會の萬態の情 ㊁俗惡なる眼にて觀察す ㊂千差萬別にして各〻異なる ㊃道人の達眼 ㊄種種の世相これ常住の實相 ㊅何れを好み何れを惡む分別の心をわづらはさず ㊆何れを取り何れを捨つることをなさず

意所二偶會一便成二佳境一物出二天然一纔見二眞機一若加二一分調停布置一趣味便減矣白氏云意隨二無事一適風逐二自然一淸有レ味哉其言レ之也

性天澄徹即饑喰渴飲無レ非レ康二濟身心一心地沈迷縱談レ禪演レ偈總是播二弄精魂一

人心有二個眞境一非レ絲非レ竹而自恬愉不レ

(一)意の偶會する所、便ち佳境を成す。(二)物は天然に出でて、纔に眞機を見る。若し(三)一分の調停布置を加へば、趣味便ち減ず。(四)白氏云ふ、(五)意は無事に隨つて適し、(六)風は自然を逐うて淸しと。味あるかな其の之を言ふや。

(一)自分の意にかなひしところがい、境涯　(二)物は自然に出でゝ始めてまことのハタラキを見る　(三)少しの調節按配を施す　(四)唐の詩人白樂天　(五)人の意は何事もなきによつて安し　(六)風は自然に吹き來るが淸し

(一)性天澄徹すれば、即ち饑ゑて喰ひ渴して飲むも、(二)身心を康濟するに非ざるはなし。(三)心地沈迷せば縱ひ(四)禪を談じ偈を演ぶるも、總て是れ(五)精魂を播弄す。

(一)天眞の本性すみわたる　(二)身體精神を安らかに過す　(三)心が沈み迷ふ　(四)禪學を談じ偈語を述ぶ　(五)精神をもてあそぶ

(一)人心個の眞境あり。(二)絲に非ず、竹に非ずして自ら恬愉す。(三)煙ならず茗ならずして自ら淸芬なり。須く(四)念淨く境空しく、(五)慮忘れ、形釋くべし。

家國。乞人號ニ饔飧ー。位分霄壤也。而焦レ思何異レ焦レ聲。

(一)義に勇む人は戰車千乘を出す大國をも讓る　(二)慾深き人　(三)人品の高下は天地の差別あり　(四)天子は國家をはかり治む　(五)乞食は朝夕の食物をさけび乞ふ　(六)地位身分は天地の差別あり　(七)思慮をこがすは聲をこがすと同じ

飽諳ニ世味ー。一ニ任覆雨翻雲ー。總慵レ開レ眼。會ニ盡人情ー。隨ニ教呼レ牛喚レ馬。只是點頭。

飽くまで世味(一)を諳ずれば、覆雨翻雲(二)に一任して、總て眼(三)を開くに慵し。人情(四)を會し盡くせば、(五)牛と呼び馬と喚ぶに隨教して只是れ點頭す。

(一)世間の辛酸を知る　(二)杜甫の詩句に、手を覆せば雨となり手を翻せば雲となるといふあり、世の人情の反覆常なきにまかす　(三)眼を開きて世情を注視するは大儀　(四)人情をさとりつくす　(五)他人が自分を牛とよび馬とよぶにしたがひてうなづく

今人專求レ無念。而終不レ可レ無。只是前念不レ滯。後念不レ迎。但將ニ現在的隨緣ー打發得去。自然漸漸入レ無。

今人專ら念なきを求めて終に無かるべからず。(一)只是れ前念滯らず、(二)後念迎へず。但現在的の隨緣を將つて打發し得去れば、(三)自然漸漸に無に入る。(四)

(一)今世の人專ら無念無想にならんことを求むれども終に無くするを得ず　(二)前に起りし觀念がいつまでも滯らず後より起る觀念を迎へ起さず　(三)現在の緣にしたがひて自由に働き得　(四)自然とだん／＼に雜念なき境地に入る

樹木至レ歸レ根而後。知ニ華蕚枝葉之徒榮一。人事至レ蓋レ棺而後知ニ子女玉帛之無一レ益。

眞空不レ空。執相非レ眞。破相亦非レ眞。問世尊如何發付。在世出世。徇レ欲是苦。絶レ欲亦是苦。聽ニ吾儕善自修持一。

烈士讓ニ千乘一。貪夫爭ニ一文一。人品星淵也。而好レ名不レ殊レ好レ利。天子營ニ

（一）樹木根に歸するに至つて後に、（二）華蕚枝葉の徒榮なることを知る。（三）人事棺を蓋ふに至つて後に、（四）子女玉帛の益無きを知る。

（一）樹木が枯れて根ばかりとなる　（二）花や枝葉のむだに榮える　（三）死去して後　（四）子供たちや財寶

（一）眞空は空ならず、（二）執相は眞に非ず、（三）破相も亦眞に非ず。問ふ、（四）世尊如何か發付する。（五）在世出世、欲に徇ふは是れ苦。（六）欲絶つも亦苦なり。（七）吾が儕の善く自ら修持するを聽け。

（一）眞實の空は色卽是空にして空虛にあらず　（二）現象に執着するは眞實にあらず　（三）現象を無視するも眞實にあらず　（四）釋迦牟尼は如何に意見を述べしぞ　（五）俗世間に在るも俗世間を遁るゝも　（六）欲望を斷滅するも苦　（七）われらの善く自ら修養する所を見よ

（一）烈士は千乘を讓り、（二）貪夫は一文を爭ふ。（三）人品は星淵なり。而も名を好むは利を好むに殊ならず。（四）天子は家國を營み、（五）乞人は饔飧を號ぶ。（六）位分は霄壤なり。而も（七）思を焦すは、何ぞ聲を焦すに異ならん。

時見下月在二青天一影在レ波。

詩思在二灞陵橋上一。微吟就林岫便已浩然。野興在二鏡湖曲邊一。獨往時山川自相映發。

伏久者飛必高。開先者謝獨早。知レ此可三以免二蹭蹬之憂一。可三以消二躁急之念一。

いつも月青天に輝き、其の影波上に映ずる境涯にあり

(一)詩思は灞陵橋上に在り、(二)微吟就るとき(三)林岫便ち已に浩然たり。(四)野興は(五)鏡湖曲邊に在り、(六)獨往の時、山川自ら相映發す。

(一) 唐の鄭綮詩を善くす、相國たりし時、人あり新詩なきやと尋ねしに、吾が詩思は灞陵橋上に在り、好詩を得る境に非ずと云ひしこと全唐對話に出づ。灞陵橋は灞水にかゝる橋、長安八水の一景 (二) 詩を小聲に口ずさむ (三) 林も山もひろびろとして詩を喜ぶ如し (四) 自然の清興 (五) 唐の賀知章夢に仙宮に遊び感ずるところあり、遂に官を辭し、道士となり、放生池を作りて自ら樂しむ、詔ありて鏡湖剡川の一曲を賜はりしこと唐書隱逸傳に出づ (六) 獨り遊ぶとき山川の景色自然と輝きあふ如し

(一)伏することと久しき者は、飛ぶこと必ず高し。(二)開くこと先つ者は、(三)謝すること獨り早し。此れを知らば以て(四)蹭蹬の憂を免かるべく、以て(五)躁急の念を消す可し。

(一) 鳥などの伏しかくること久しきもの (二) 花などの開くこと他の花に先だつもの (三) 散ることひとり早し (四) 踏みはづすこと、身を誤る意 (五) 物にせきこむ心をなくす

聚ㇾ羶。如二蠅競一ㇾ血、是非蜂起、得失蝟興。以二冷情一當ㇾ之。如二冶化一ㇾ金。如二湯消一ㇾ雪。

を化するが如く、湯の雪を消すが如し。

(一) 粗野家は蠅の躍り上る如く勢力を爭ふ (二) 英雄は虎の戰ふ如く爭鬪す (三) 冷なる眼光を以て視る (四) 蠅がなまぐさきものにつくが如し (五) 蠅が生物の血に競ひ集る如し (六) 是とし非とする議論、蜂の群る如く起る (七) 得とし失とする議論、針鼠の如くおこる (八) 冷靜なる情を以て之に對す (九) イカタにて金をとかす如し

繫二鎖於物欲一。覺二吾生之可一ㇾ哀、爽二猶於性眞一、覺二吾生之可一ㇾ樂、知二其可一ㇾ哀、則塵情立破、知二其可一ㇾ樂。則聖境自臻。

物欲に繫鎖すれば、吾が生の哀しむ可きを覺ゆ。性眞に爽猶すれば、吾が生の樂しむ可きを覺ゆ。其の哀しむ可きを知れば、則ち塵情立ろに破れ、其の樂しむ可きを知れば則ち聖境自ら臻る。

(一) 物質的欲望に束縛せらる (二) 本然の眞性に周遊す (三) 俗情直に破れ失す (四) 聖人の境涯自然に至る

胸中既無二半點物欲一、已如下雪消二爐焰一冰消中日上。眼前自有二一段空明一。

胸中既に半點の物欲無ければ、已に雪の爐焰に消え、氷の日に消ゆるが如し。眼前自ら一段の空明あれば、時に月青天に在り、影波に在るを見る。

(一) 僅かの物質的欲望 (二) 雪が爐の火に消ゆ (三) 眼の前に些少のクモリなくどこまでも澄きとほりゐる (四)

意。漫隨二天外雲卷雲舒一。晴空朗月。何天不レ可二翱翔一。而飛蛾獨投二夜燭一。清泉綠卉何物不レ可二飲啄一。而鴟鴞偏嗜二腐鼠一。噫世之不レ爲二飛蛾鴟鴞一者。幾何人哉。

(六)飛蛾は獨り夜燭に投ず。(七)清泉綠卉、(八)何れの物か飲啄すべからざらん。而るに(九)鴟(一〇)鴞は偏に腐鼠を嗜む。(一一)噫世の飛蛾鴟鴞と爲らざるものは幾何人ぞや。

(一)榮枯盛衰に驚かず (二)靜に庭前の花開きて散るを見る如く心を動かさず (三)去ろうと留ろうと心にかけず (四)天上の雲がちゞまつたりひろがつたりする如くそゞろに自然のまゝにまかす (五)どこの天にしても飛びまはれぬところなし (六)ヒトリ虫は獨り燈火に飛びこんで死す (七)淸らかなる泉や綠の草 (八)何ものも飲み啄ばまれざるものなし (九)フクロの類 (一〇)腐つた鼠ばかり食ふ (一一)廣き世界を狹くわたるもの

纔就レ筏便思レ舍レ筏。方是無事道人。若騎レ驢又復覓レ驢。終爲二不了禪師一。

(一)纔に筏に就いて(二)便ち筏を舍つるを思ふ。方に(三)是れ無事の道人なり。若し(四)驢に騎つて又復驢を覓めば、(五)終に不了の禪師と爲る。

(一)始めて筏に乘る (二)早く彼岸に到達して筏を捨てんとおもふ (三)大事を悟りし人 (四)係緣に、心卽ち佛なるを解せざれば、これ驢に騎して驢をもとむるなりとあり (五)悟りきれぬ禪僧

權貴龍驤。英雄虎戰。以二冷眼一視レ之。如二蟻

(一)權貴龍驤し、(二)英雄虎戰す。(三)冷眼を以て之を視れば(四)蟻の羶に聚るが如く、(五)蠅の血に競ふが如し。(六)是非蜂起し、(七)得失蝟興す。(八)冷情を以て之れに當れば、(九)冶の金

魚得水逝。而相忘乎水。鳥乗風飛。而不知有風。識此可以超物累。可以樂天機。

(一)魚は水を得て逝き、而して水に相忘る。鳥は風に乗じて飛び、而して風あるを知らず。(二)此れを識らば以て物累(三)を超ゆ可く、以て天機(四)を樂しむ可し。

(一)魚は水を得て游ぎゆきながら水あることを忘る　(二)此の道理をさとる　(三)外物のわづらひを超越す　(四)天の至妙なるハタラキを樂しみ得

狐眠敗砌。兎走荒臺。盡是當年歌舞之地。露冷黄花。煙迷衰草。悉屬舊時爭戰之場。盛衰何常。强弱安在。念此令人心灰。

狐(一)敗砌に眠り、兎(二)荒臺に走る。(三)盡く是れ當年歌舞の地なり。(四)露黄花に冷かに、(五)煙衰草に迷ふ。悉く舊時爭戰(六)の場に屬す。盛衰何ぞ常ならん、(七)强弱安にかある。此を念へば(八)人心をして灰ならしむ。

(一)狐はこはれたるキザハシに眠る　(二)荒れはてたる物見臺の上を走る　(三)皆これ昔歌ひ舞ひて榮華を極めし故跡　(四)露は菊花に冷々とした、る　(五)煙は枯草の上にたなびく　(六)戰場　(七)强者も弱者も今何處にありや共に亡びてなし　(八)人の心を死灰の如く淡泊にす

寵辱不驚。閑看庭前花開花落。去留無

(一)寵辱驚かず、閑に庭前の花開き、花落つるを看る。(二)去留意無し、漫に天外(三)の雲卷き雲舒ぶるに隨ふ。(四)晴雲朗月、何れの天か翺翔すべからざらん。而るに

心地上無二風濤一。隨在皆青山綠樹。性天中有二化育一。觸處見二魚躍鳶飛一。

峩冠大帶之士。一旦睹二輕簑小笠飄飄然逸一也。未二必不一レ動二其吝嗟一。長筵廣席之豪。一旦遇二疎簾淨几悠悠焉靜一也。未二必不一レ增二其綣戀一。人奈何驅以二火牛一。誘以二風馬一。而不レ思三自二適其性一哉。

（一）心地上に風濤無ければ、（二）隨在皆青山綠樹、（三）性天中に化育あれば、（四）觸處魚躍り鳶飛ぶを見る。

（一）心の中に波風立たず　（二）到るところ皆好風景　（三）天性の中に天地の化育を藏す　（四）到るところ魚躍り鳶飛んで生々化育の妙用を現す

（一）峩冠大帶の士、一旦（二）輕簑小笠（三）飄飄然として逸するを睹るや、未だ必ずしも（四）其吝嗟を動かさずんばあらず。（五）長筵廣席の豪、一旦（六）疎簾淨几悠悠焉として（七）靜なるに遇へば、未だ必ずしも（八）其綣戀を增さずんばあらず。人奈何ぞ（九）驅るに火牛を以てし、（一〇）誘ふに風馬を以てして、（一一）其性に自適することを思はざるや。

（一）高き冠や大帶をつくる大官　（二）輕き簑や小さき笠をつけたる農夫漁人など　（三）束縛なくてノンキにしてゐる　（四）嘆息して羨まざることなし　（五）長く廣き敷物に坐する富貴の人　（六）マバラな簾や小ざつぱりとした机　（七）ゆつたりと物靜かなる隱者など　（八）なつかしく思ふ心を增さゞることなし　（九）齊の將田單が燕軍を破りし時に用ひしといふ尻尾に火をつけたる牛の如く追ひ立つ　（一〇）サカリのつきたる馬の如く誘惑す、上句と共に物欲に驅り誘はれて翩翩たるをいふ　（一一）自分の本性に安んじ歸することを思はざるや

心何等自在。

林間松韻。石上泉聲。靜裡聽來。識二天地自然鳴佩一。草際煙光。水心雲影。閒中觀去。見二乾坤最上文章一。

眼看二西晉之荊榛一。猶矜二白刃一。身屬二北邙之狐兎一。尙惜二黃金一。語云。猛獸易レ伏。人心難レ降。谿壑易レ滿。人心難レ滿。信哉。

意味を心にわすれず　(七)物事に應接す　(八)自由自在

(一)林間の松韻、石上の泉聲、(二)靜裡に聽き來たれば、天地自然の(三)鳴佩を識る。(四)草際の煙光、(五)水心の雲影、(六)閒中に觀去れば、(七)乾坤最上の文章を見る。

(一)林間の松風の音　(二)靜かなる時に聽く　(三)佩玉の鳴る音　(四)草の上の霞　(五)水面の雲の影　(六)ゆつたりとおちつく時に觀る　(七)天地間最上の文章

(一)眼は西晉の(二)荊榛を看、猶ほ(三)白刃に矜る。身は(四)北邙の狐兎に屬して、尙ほ黃金を惜む。語に云ふ、(五)猛獸は伏し易く、人心は降し難し。(六)谿壑は滿て易く、人心は滿て難しと。信なるかな。

(一)眼に西晉の都が荒れはてゝ、オドロの下になれるを看る　(二)索靖西晉の亂れんとするを見、洛陽宮門の銅駝をさし、必ず荊棘中にあるを見るべしといふ　(三)武力を恃みほこる　(四)洛陽城北の墓地なる北邙に埋められて狐兎の餌食となる　(五)猛獸は威伏せしめやすけれど人の心は從はせがたし　(六)深き谷は物を滿たせやすけれど人の心は滿足せしめがたし

樹扶疎。任二乳燕鳴鳩送二迎時序一。知二物我之兩忘一。

知二成之必敗一。則求レ成之心不二必太堅一。知二生之必死一。則保レ生之道。不二必過勞一。

古德云。竹影掃レ堦塵不レ動。月輪穿レ沼水無レ痕。吾儒云。水流任レ急境常靜。花落雖レ頻。意自閒。人常持二此意一。以應レ事接レ物。身

(一) 籬や格子窓を高く開く (二) 山や河の上に雲が動くを見る (三) 天地の自由なるを論る (四) 竹や樹木の枝が相交はる (五) 春になれば燕來りて仔を乳し、秋になれば鳩來り鳴く (六) 竹樹は燕や鳩が四季の順序を送り迎へるにまかす (七) 物と我と双方を忘る

(一)成の必ず敗るゝを知れば、則ち(二)成を求むるの心、必ずしも太だ堅らず。生の必ず死するを知れば、則ち(三)生を保つの道、必ずしも(四)過勞ならず。

(一) 成就せしものは、いつか必ず敗るゝを知る (二) 成就を欲する心さほど強くなし (三) 生命を保存する方法 (四) 過度に心勞せず

(一)古德云ふ、(二)竹影堦を掃ひて塵動かず、(三)月輪沼を穿ちて水に痕無しと。吾が儒云ふ、(四)水流るゝこと急なるに任せて境常に靜に、(五)花落つること頻なりと雖も、意自ら閒なりと。人常に(六)此の意を持して、以て(七)事に應じ物に接せば、身心何等の(八)自在ぞ。

(一) 古の德高き禪僧 (二) 竹の影が階段の上を掃へども階の如く塵たゝず (三) 月影が沼の水を貫通するも水に其の痕迹なし (四) 水流急なるに任せども一境常に物靜か (五) 花しきりに落つれども心は自らゆつたり (六) 此の

熱鬧中著二一冷眼一。便省二許多苦心思一。冷落處存二一熱心一。便得二許多眞趣味一。

有二一樂境界一。就有二一不樂的相對待一。有二一好光景一。就有二一不好的相乘除一。只是尋常家飯。素位風光。纔是個安樂的窩巢。

簾櫳高敞。看三青山綠水呑二吐雲煙一。識二乾坤之自在一。竹

(一)熱鬧の中一冷眼を著くれば、便ち(二)許多の苦心思を省く。(三)冷落の處一熱心を存すれば、便ち許多の(四)眞趣味を得。

㊀ 煩雜多忙なる中に立ち冷靜なる眼を以て見る　㊁ 多くの苦しみを少くす　㊂ 零落せし場合一の熱烈なる心を存す　㊃ 眞實の趣味

一の(一)樂境界有れば、就ち一の(二)不樂的の相對待するあり。一の(三)好光景あれば、就ち一の(四)不好的の相乘除するあり。只是れ(五)尋常の家飯、(六)素位の風光、纔に是れ個の(七)安樂的の窩巢なり。

㊀ 安樂なる境遇　㊁ 安樂ならぬ境遇が相對立す　㊂ 好風景　㊃ 好からぬものありて差引勘定す　㊄ 平日の三度三度の食事　㊅ 官に仕へざる處士の境遇　㊆ 安樂なるよりどころ

(一)簾櫳高く敞いて、(二)青山綠水の雲煙を呑吐するを看、(三)乾坤の自在なるを識る。(四)竹樹(五)扶疎、(六)乳燕鳴鳩の時序を送迎するに任せて、(七)物我の兩ながら忘るゝを知る。

煩惱更何侵。眞破的之言也。

自老視少。可三以消二奔馳角逐之心一。自瘁視榮。可三以絕二紛華靡麗之念一。

人情世態。倏忽萬端。不宜二認得太眞一。堯夫云。昔日所云我而今却是伊。不知今日我又屬二後來誰一。人常作二是觀一。便可解二却胸中罥一矣。

ちず ㈣ 如何にして外物の貴重なることを知らん ㈤ わが身體はわがものに非ず ㈥ 眞相をうがちたる言

老より(一)少を視れば、以て奔馳角逐(二)の心を消す可し。瘁(三)より榮を視れば、以て紛(四)華靡麗の念を絕つべし。

㈠ 老人より少年を觀察す ㈡ 客氣に驅られて東奔西走する心無くなる ㈢ 病衰の境遇より榮華の境遇を觀察す ㈣ 世間體を飾る派出なるうるはしい考をなくす

人情世態(一)、倏忽萬端(二)、宜しく認め得て太だ眞なるべからず(三)。堯夫(四)云ふ、昔(五)日我と云ふ所、而今却つて是れ伊れ。知らず、今日の我又後來の誰にか屬せん(六)と。人常に此(七)の觀を作さば、便ち胸中の罥を解却すべし(八)。

㈠ 世間の人情と世の中の狀態 ㈡ 忽ちにして色々と變化す ㈢ 眞相を認め得べからず ㈣ 邵堯夫、名は雍、康節先生と稱せらる。宋代の學者 ㈤ 前に我と云ひし所のもの却つて今日は彼なり ㈥ 今日我と云ふ所のもの、又他日の誰に屬するならん ㈦ このやうな見方をなす ㈧ 胸の中の繫累を解きすて得べし

砂研松間之露。談經午案。寶磬宜竹下之風。

花居盆內終乏生機。鳥入籠中便減天趣。不若山間花鳥錯集成文。翺翔自若。自是悠然會心。

世人只緣認得我字太眞。故多種種嗜好種種煩惱。前人云。不復知有我。安知物爲貴。又云。知身不是我。

の風に宣ぶ。

㊀易經　㊁明の窓　㊂朱の顏料を松間の露にて磨り易經を注す　㊃經文を正午の机上に談ず　㊄磬石、くの字形に彫りたる一種の樂器　㊅竹の下風に磬石の音を鳴らす

花盆内(一)に居れば終に生機(二)に乏し。鳥籠中に入れば、便ち天趣(三)を減ず。若かず山(四)間の花鳥錯り集つて文を成し、翺翔(五)自若、自ら是れ悠然(六)たる會心には。

㊀盆栽となりゐる　㊁生き〳〵したる氣なし　㊂天然の風情を減ず　㊃山間の花々鳥が入り交つて美しきアヤをなす　㊄飛びかけること自由自在　㊅ゆつたりとせる滿足の趣に及ばず

世人只我(一)の字を認め得ること、太だ眞なるに緣つて、故に種種の嗜好、種種の煩惱(二)多し。前人云ふ、復た我れ有る(三)ことを知らず、安(四)んぞ物の貴きたることを知らんと。又云ふ、身(五)は是れ我ならざることを知らば、煩惱更に何ぞ侵さんと。眞に破的(六)の言なり。

㊀我といふ字を甚だ強く認めてゐる故に　㊁わづらひ　㊂無我の悟りを開きてわが身のありといふ事實を知

意一也。髪落齒疎。任二幻形之彫謝一。鳥吟花咲。識二自性之眞如一。欲二其中一者。波沸二寒潭一。山林不レ見二其寂一。虚二其中一者。涼生二酷暑一。朝市不レ知二其喧一。

多藏者厚亡。故知二富不レ如二貧之無一レ慮。高歩者疾顚。故知二貴不レ如二賤之常安一。

讀二易曉窓一。丹

髪落ち齒疎にして、(一)幻形の彫謝に任せ、(二)鳥吟じ花咲ひ、自性の眞如を識る。

㊀人間の身は變化して止まず恰も幻の如し、卽ち幻の如き身の凋落すると變化するとにまかす ㊁鳥鳴き花咲きて自分の本性の眞實相を知る

(一)其中を欲にする者は、(二)波寒潭に沸き、(三)山林も其寂を見ず。(四)其中を虚にする者は、(五)涼酷暑に生じ、(六)朝市も其喧を知らず。

㊀心中に欲あるもの ㊁さみしき淵が波立つ ㊂山林も閑靜ならず ㊃心中を虚にして雜念なきもの ㊄涼味が酷暑の日に生ず ㊅市中にゐても其の騷しさを知らず

(一)多く藏る者は厚く亡ぶ。故に富は貧の(二)慮無きに如かざるを知る。高く歩むものは疾く顚る。故に貴は(三)賤の常に安きに如かざるを知る。

㊀多く貨財を蓄藏するものはドツサリと失ふ ㊁氣苦勞なきに及ばず ㊂身分賤しきもの丶常に安樂なるに及ばず

(一)易を(二)曉窓に讀んで、(三)丹砂を松間の露に研き、(四)經を午案に談じて、(五)寶磬を(六)竹下

蛙聲可㆑當㆓鼓吹㆒。觸處倶見㆓眞機㆒。

身如㆓不繫之舟㆒。一任㆓流行坎止㆒。心似㆓既灰之木㆒。何妨㆓刀割香塗㆒。

人情聽㆓鶯啼㆒則喜。聞㆓蛙鳴㆒則厭。見㆑花則思㆑培㆑之。遇㆑草則欲㆑去㆑之。但是以㆓形氣㆒用㆑事。若以㆓性天㆒視㆑之。何者非㆔自鳴㆓其天機㆒。非㆔自暢㆓其生

てゐる虎となす。楚の雄張子の故事　(四) かゝる場合はすべて人を害するハタラキ　(五) 心の靜なる場合　(六) 石の虎も海のカモメの如く愛らしく見ゆ、晉の佛圖澄の故事　(七) 蛙の鳴聲も音樂の如く樂しくきかる　(八) 耳目に觸る丶ところのもの皆天眞の妙機

(一)身は不繫の舟の如く、一に(二)流行坎止に任す。心は(三)既灰の木に似る、何ぞ(四)刀割香塗を妨けん。

(一) 人間の一身はつながざる舟の如し　(二) 波のまにまに流れゆかうと止ろうと自然のナリユキにまかす　(三) もはや灰となれる木　(四) 刃物でたち割ろうと香料を塗ろうとナリユキにまかす

(一)人情鶯啼を聽けば則ち喜び、蛙鳴を聞けば則ち厭ふ。花を見れば則ち之を培せ(二)んことを思ひ、草に遇へば則ち之を去らん(三)ことを欲す。但ゞ是れ(四)形氣を以て事を用ふ。若し(五)性天を以て之を視ば、何者か自ら其(六)天機を鳴すに非ざらん。自ら其の(七)生意を暢ぶるに非ざらん。

(一) 人間の情として鶯の啼く音をきけば喜ぶ　(二) 自家の庭に培養せんとおもふ　(三) 拔きとらんと思ふ　(四) 外部に現れたる形式をもつて判斷す　(五) 自然の本性　(六) 天然のハタラキ　(七) 生々の意を伸張す

華。令二人心神駘蕩一不レ若三秋日雲白風消。蘭芳桂馥。水天一色。上下空明。使二人神骨俱淸一也。

一字不レ識。而有二詩意一者。得二詩家眞趣一。一偈不レ參。而有二禪味一者。悟二禪教玄機一。

機動的弓影疑爲二蛇蝎一。寢石視爲二伏虎一。此中渾是殺氣。念息的石虎可レ作二海鷗一。

芳しく桂馥しく、(五)水天一色、上下空明、人をして(六)神骨俱に淸からしむるに若かず。

(一)春の日は氣象はなやか (二)心がゆつたりとする (三)雲の色白く風落ちる (四)芷蘭の花や桂の花が香しくにはふ (五)水と空とが同じ色にて上も下も明かに澄む (六)心も身も共に淸らかになるに及ばず

(一)一字識らずして詩意有る者は、(二)詩家の眞趣を得。(三)一偈參せずして(四)禪味ある者は(五)禪教の玄機を悟る。

(一)眼に一字をも知らずして詩的思想あるもの (二)詩人の眞の趣味を感得す (三)禪の妙趣を述べたる頌語をきはめず (四)禪の趣味 (五)玄妙なるハタラキを悟る

(一)機動く的は(二)弓影も疑つて蛇蝎と爲し、(三)寢石も視て伏虎と爲す。(四)此の中渾て是れ殺機なり。(五)念息む的は石虎も(六)海鷗と作す可く、(七)蛙聲も鼓吹に當つべし。(八)觸るゝ處倶に眞機を見るなり。

(一)心のハタラキが動く (二)弓の影も疑つて蛇蝎かとおもふ。昔の樂廣の故事 (三)横に長き石も之を視て、いね

芸窓中雅聽ニ蟬吟鴉噪一、方知ニ靜裡乾坤一。我不レ希レ榮。何憂ニ乎利祿之香餌一。我不レ競レ進。何畏ニ乎仕官之危機一。

徜ニ徉於山林泉石之間一、而塵心漸息。夷ニ猶於詩書圖畫之內一、而俗氣潛消。故君子雖レ不ニ玩レ物喪一レ志、亦常借レ境調レ心。

春日氣象繁

(一) 竹垣の下　(二) ウツトリとして雲の中の世界にある如し　(三) 芸は香草、書窓なり　(四) 蟬の鳴音と鳥の鳴聲　(五) 靜寂中の天地を知る

我れ榮を希はずんば、何ぞ利祿の香餌を憂へん。我れ進を競はずんば、何ぞ仕官の危機を畏れん。

(一) 榮達を希望せず　(二) 物質的の好餌に迷ふ心配なし　(三) 人と官途に進むことを競爭せず　(四) 官に仕ふる危險をおそるゝことなし

山林泉石の間に徜徉して塵心漸く息む。詩書圖畫の內に夷猶して俗氣潛に消す。故に君子物を玩びて志を喪はずと雖も、亦常に境を借つて心を調ふ。

(一) 自然の好景中に散歩す　(二) 俗心しだいに無くなる　(三) 優遊し樂しむ　(四) 物を玩びて一生を空費す。程明道が謝顯道を戒めたる語　(五) 境遇を利用して心を修む

春日は氣象繁華なり。人をして心神駘蕩ならしむ。秋日の雲白く風淸し、蘭

知濃不レ勝レ談。俗不レ如レ雅也。

出世之道。即在レ渉レ世中。不二必絶レ人以逃一レ世。了心之功。即在レ盡レ心内。不二必絶レ欲以灰一レ心。

此身常放二在閒處。榮辱得失。誰能差二遣我。此心常安二在靜中。是非利害。誰能瞞二昧我。

竹籬下。忽聞二犬吠鷄鳴。恍似二雲中世界。

路 (九) 高位の大官 (十) なんとなくイクラカの俗氣を加ふ (七) 濃厚は淡泊にまさらず

(一)出世の道は即ち世を渉る中に在り、必ずしも(二)人を絶ち以て世を逃れず。(三)了心の功は即ち心を盡す内に在り。(四)必ずしも(五)欲を絶ち以て心を灰にせず。

(一) 世間を出離する方法 (二) 人と離れ世を捨てずともよろし (三) 自分の本心を悟る工夫 (四) 心のおもむくままに其の作用をつくす (五) 欲望を滅して心を死灰の如く枯淡にせず

此の身常に(一)閒處に放在すれば、(二)榮辱得失誰か能く我を差遣せん。此の心常に(三)靜中に安在すれば、(四)是非利害誰か能く我を(五)瞞昧せん。

(一) 閑靜なる場所に氣まゝに住む (二) 盛衰利害何ものかよく自分を使役し命令せんや (三) 靜寂なる場所に安んじゐる (四) 善惡得失 (五) 瞞着す

(一)竹籬の下、忽ち犬吠鷄鳴を聞けば、(二)恍として雲中の世界に似たり。(三)芸窓の中、雅に(四)蟬吟鴉噪を聽けば、方に(五)靜裡の乾坤を知る。

去。境在二清寧一。則夙昔所二遺忘一者。又恍留現.前、可レ見。靜躁稍分。昏明頓異也。

蘆花被下。臥レ雪眠レ雲。保二全得一窩夜氣一。竹葉杯中吟レ風弄レ月。躲二離了萬丈紅塵一。

袞冕行中。著二一藜杖的山人一。便增二一段高風一。漁樵路上。著二一袞衣的朝士一。轉添二許多俗氣一。固

ば、昏明頓に異なることを。(七)

(一)やかましく騒々しき時に際す　(二)ボンヤリとして忘れてしまふ　(三)清らかに靜かなる場所にある　(四)以前にわすれはてたるもの　(五)ほのかに眼前にあらはる　(六)靜閑と喧躁との分ちが少しある　(七)騒がしき時には思慮くらく靜かなる時には思慮明かに樣子異なる

蘆花被下(一)、雪に臥し雲に眠り、一窩の夜氣(二)に保全し得。竹葉杯中(三)風に吟じ、月を弄し(四)、萬丈の紅塵を躲離(五)し了る。

(一)蘆花を綿とせる粗末なる夜具の下　(二)一つの夜氣を凌ぎてわが身を保全し得　(三)酒を釀すに竹の葉を入るれば香佳なりといふ、一種の酒盃、隱人の用ふるもの　(四)風月を玩び賞す　(五)市中の高く立のぼる塵埃を離れ得

袞冕行中(一)に、一の藜杖的(二)の山人を著くれば、便ち一段の高風を増す(三)。漁樵路(四)上に一の袞衣的の朝士を著くれば、轉(五)、許多の俗氣を添ふ。固に知る、濃(六)は淡に勝たず、俗は雅に如かざることを。

(一)高位高官の一行　(二)アカザの杖をつきたる仙人を交ふ　(三)一段の氣高さを增す　(四)漁人樵夫の往來せる

者自近也。

水流而境無聲。得處喧見寂之趣。山高而雲不礙。悟出有入無之機。

山林是勝地。一營戀便成市朝。書畫是雅事。一貪癡便成商賈。蓋心無染著。欲界是仙都。心有係戀。樂境成苦海矣。

時當喧雜。則平日所記憶者。皆漫然忘

て自然に作りしものは自然と眞相に近し

(一)水流れて境に聲なし。(二)喧に處して寂を見るの趣を得。(三)山高くして雲礙へず。(四)有を出で無に入るの機を悟る。

(一)水は流るれども其の流るゝ處には聲なし (二)騒がしき境地にありて寂寞を見る趣を知る (三)山高けれども雲はじやませず (四)有から出でて無に入る妙用を悟る

(一)山林は是れ勝地なり。(二)一たび營戀すれば便ち市朝と成る。(三)書畫は是れ雅事なり。(四)一たび貪癡すれば便ち商賈と成る。(五)蓋し心に染著無ければ、(六)欲界も是れ仙都、(七)心に係戀有れば樂境も苦海と成る。

(一)山林は景勝の地 (二)一度其の地に戀着するときは市中と同じ (三)書畫を玩ぶは風雅のこと (四)貪ぼると商人となる (五)執着 (六)俗慾の世界も仙境となる (七)心に戀着あれば安樂の境も苦勞の海となる

(一)時喧雜に當れば則ち平日記憶する所の者、(二)皆漫然として忘れ去る。(三)境清寧に在れば則ち(四)夙昔遺忘する所の者、又(五)恍爾として現前す。見るべし、(六)靜躁稍分れ

操兩不二相干一。

悠長之趣。不レ得二於醲釅一。得二於啜レ菽飲一レ水。惆悵之懷。不レ生二於枯寂一。而生二於品レ竹調一レ絲。固知。濃處味常短。淡中趣獨眞也。

禪宗曰。饑來喫レ飯。倦來眠。詩旨曰。眼前景致口頭語。蓋極高寓二於極平一。至難出二於至易一。有意者反遠。無心者

（一）はなれ雲が山を出づ（二）去るも留るも拘束せらるゝところなし（三）明月大空にかゝる（四）下界の静かなるも騒がしきも何れにも干係せず

（一）悠長の趣は（二）醲釅に得ずして、（三）菽を啜り水を飲むに得。（四）惆悵の懷は枯寂に生ぜずして、（五）竹を品し絲を調ぶるに生ず。固に知る、（六）濃處の味は常に短く、（七）淡中の趣は獨り眞なることを。

（一）ゆつたりとした趣（二）酒の濃厚にして甘きもの（三）豆汁をすゝり水を飲む閑素の境地に得（四）悲しみうらむ念は寂しき境地に生ぜず（五）笛を品評し絃を調ぶる歌舞宴遊の境地に生ず（六）コツテリとした味は常に永續せず（七）淡泊なる中の趣だけが眞實不變

（一）禪宗に曰く、（二）饑來つて飯を喫し、倦來つて眠ると。（三）詩旨に曰く、（四）眼前の景致口頭の語と。蓋し（五）極高は極平に寓し、至難は至易に出づ。（六）有意の者は反つて遠く、（七）無心の者は自ら近し。

（一）梁の武帝の時天竺の達磨來りて禪宗を傳ふ、禪とは靜慮の意にて靜慮を以て悟道の要術とす（二）腹がへつて來て飯を食ひ倦怠が生じて眠る（三）詩の主旨を論ずる書（四）眼前の景色を述べ口さきの語を綴りしが詩（五）非常に高尚なる意味は非常に平易なるものより出づ（六）心ありて故意に作りしものは眞相に遠し（七）心なくし

王公。
矜レ名不レ若ニ逃レ名趣。練レ事何如ニ省レ事閒。

嗜レ寂者。觀ニ白雲幽石ニ而通レ玄。趨レ榮者。見ニ清歌妙舞ニ而忘レ倦。唯自得之士。無ニ喧寂。無ニ榮枯。無ニ往非ニ自適之天。

孤雲出レ岫。去留一無レ所レ係。朗鏡懸レ空。靜

ヲ肉や良米の飯よりうまし ㊄ 布の上着も狐や貉の皮衣より暖か ㊅ 無位無官の平民も王公貴人に劣らず

名に矜るは名を逃るゝの趣あるに若かず。事を練るは何ぞ事を省くの閒なるに如かん。

㊀ 名を逃れ避くる趣味深きに及ばず ㊁ 事を色々と工夫し企つ ㊂ 事を簡略することの心安きに及ばず

寂を嗜む者は白雲幽石を觀て玄に通ず。榮に趨る者は清歌妙舞を見て倦を忘る。唯自得の士は喧寂なく、榮枯なく、往くとして自適の天に非ざるは無し。

㊀ 寂莫を好むもの ㊁ 白き雲や趣ある石を見て奥深き道理をさとる ㊂ 榮達におもむき走るもの ㊃ 聲好き歌や美妙なる舞踊を見て倦怠を忘る ㊄ 道を自得せる人物 ㊅ 騒がしいも寂しいもなく榮達も衰窮もなし ㊆ 如何なるところも自分の意にかなふ樂天地ならざるはなし

孤雲岫を出づる、去留一も係る所なし。朗鏡空に懸る、靜躁兩ながら相干さず。

上。窮不可遣。而遣此窮愁。心常居安樂窩中。

進歩處便思退歩。庶免觸藩之禍。著手時先圖放手。纔脫騎虎之危。

貪得者。分金恨不得玉。封公怨不受侯。權豪自甘乞丐。知足者。藜羹旨於膏粱。布袍煖於狐貉。編民不讓王侯。

(一)氣候上の暑熱は除かずともよし　(二)煩悶　(三)涼しき風の上にあるべし　(一)一身の困窮は遣ひやるべからず、(四)困窮を憂ふる念を追ひ拂ふ　(五)安樂の中にあるべし

歩を進むる處、便ち歩を退くることを思はば、庶くは藩に觸るゝの禍を免れん。手を著くる時先づ手を放つことを圖らば、纔に虎に騎るの危きを脫れん。

(一)一歩進む場合に一歩退く覺悟あり　(二)或はばかな羊の如く垣根に突きあたる禍を逃れん　(一)手を著くる時に手を放すことを考へる　(三)虎に騎りて止むに止まれぬやうな危難を免れん

得ることを貪る者は、金を分つて玉を得ざるを恨み、公に封ぜられて侯を受けざるを怨む。權豪自ら乞丐に甘んず。足ることを知る者は、藜羹も膏粱より旨く、布袍も狐貉より煖かに、編民も王侯に讓らず。

(一)玉よりも好き金を分ち得たるなれば滿足なるべきに尚玉を得ざるを恨む　(二)侯よりも好き公に封ぜられて侯を受けざるを恨む　(一)權威勢力ある身分にてありながら滿足して乞食となる　(一)アカザの羹のアツモノもアブ

争先的徑路窄。退後一步。自寛平一步。濃艶的滋味短。清淡一分。自悠長一分。

忙處不亂性。須閒處心神養得清。死時不動心。須生時事物看得破。

隱逸林中無榮辱。道義路上無炎涼。

熱不必除。而除此熱惱。身常在清涼臺

(一)先を争ふ的の徑路は窄し。一歩を退後すれば、自ら一歩を寛平にす。(三)濃艶的の滋味は短し。一分を清淡にすれば、自ら一分を悠長にす。

(一)耳に先を争ふ路はせまし (二)一歩讓りて後に下れば一歩寛くなる (三)コツテリとしたる味は短し (四)一分を淡泊にすれば從つて一分ゆつたりとす

(一)忙處に性を亂さざらんとせば、須く閒處に心神養ひ得て清かるべし。死時に心を動かさざらんとせば、須く生時に事物看得て破るべし。

(一)多忙なる場合に本性をとり亂さゞらんとす (二)暇の時に精神を清く養へ (三)生存時代に事物の眞相を看破し置け

(一)隱逸林中には榮辱無し。(二)道義路上には炎涼無し。

(一)世を避けかくるゝ林中には榮辱も恥辱もなし (二)道義の路の上には人情のフケサメなし

(一)熱は必ずしも除かず、而も此熱惱を除けば、身常に清涼臺上に在らん。(四)窮は遣る可からず、而も此窮愁を遣れば、心常に安樂窩中に居らん。

禍。甚慘亦甚速。棲恬守逸之味。最淡亦最長。

松澗邊携杖獨行。立處雲生破衲竹窓下枕書高臥。覺時月侵寒氈。

色慾火熾而一念及病時。便興似寒灰。名利飴甘而一想到死地。便味如嚼蠟。故人常憂死慮病。亦可消幻業而長道心。

の味は、最も淡にして亦最も長し。

㊀ 權勢威力のあるところにおもむき従ふ輩 ㊁ 甚だミジメ ㊂ 淡泊寡欲にして自由放逸にふるまふ趣味

(一)松澗の邊、杖を携へて獨行す。立つ處雲(二)破衲に生ず。竹窓の下書を枕にして高臥す。覺むる時、(三)月寒氈を侵す。

㊀ 松林の中の谷川のほとり ㊁ 雲が破れ衣より生ず ㊂ 月影貧しき敷物を照す

色欲火の如く熾なるも(一)一念病時に及べば、便ち(二)興寒灰に似たり。(三)名利飴の如く甘きも、(四)一想死地に到れば、便ち(五)味嚼蠟の如し。故に人常に死を憂へ、病を慮らば、亦(六)幻業を消して道心を長ずべし。

㊀ 病にかゝりし時を心に思ひ及ぶ ㊁ 興味は冷き灰の如く索然 ㊂ 功名利欲 ㊃ 死せし時を想像す ㊄ 名利の味は蠟燭をかむ如く無味 ㊅ 迷ひの心を無くして覺りの心を長ずべし

者。一日遙於千古。意廣者。斗室寛若兩間。

損之又損。栽花種竹。儘交還烏有先生。忘無可忘。焚香煮茗。總不問白衣童子。

都來眼前事。知足者仙境。不知足者凡境。總出世上因。善用者生機。不善用者殺機。

趨炎附勢之

㊃ 一日の間も千年より長し ㊄ 心ばせの廣きものは斗桝ほどの小室もひろきこと天地間の如し

(一)之を損して又損す。花を栽ゑ竹を種ゑ、(二)儘烏有先生に交還す。(三)忘るべきなきを忘れ、香を焚き茗を煮て、(四)總て白衣童子に問はず。(五)

㊀ 老子の語、物欲の念を無くした上にも無くす ㊁ すつかり烏有先生に物欲の念をお渡しする、烏有先生は漢の司馬相如の賦中に出づる寓言的の人物、無の意味なり ㊂ 忘るべき事無き所までも忘る ㊃ 茶を煮る ㊄ 晉の陶淵明嘗て九月九日に酒無く東籬の菊花を摘んで獨坐す、時に白衣の人酒を携へ來るものあり即ち王弘なり、よつて共に酒を酌んで醉ふ、此處の意味酒を要とせずといへり

(一)都て眼前に來る事は、(二)足ることを知る者は仙境、足ることを知らざるものは(三)凡境。總て世上に出づる因は、(四)善く用ふる者は生機、(五)善く用ひざる者は殺機。(六)

㊀ すべて眼前に現れ來る世相 ㊁ これで十分といふ所を知るが極樂 ㊂ つまらぬ境地 ㊃ 世上に現れ出る因緣 ㊄ 人を益し物を利する作用 ㊅ 人を損し物を害ふ作用

(一)炎に趨り勢に附くの禍は、(二)甚だ慘にして亦甚だ速かなり。(三)恬に棲み逸を守る

味最長。有浮雲富貴之風。而不必岩棲穴處。無膏肓泉石之癖。而常自醉酒耽詩。競逐聽人。而不嫌盡醉。恬淡適己。而不誇獨醒。此釋氏所謂不為法纏。不為空纏。身心兩自在者。延促由於一念。寬窄係之寸心。故機閒

富貴を浮雲にするの風あつて、而も必ずしも岩棲穴處せず。泉石に膏肓するの癖なくして、而も常に自ら酒に醉ひ詩に耽る。

(一) 富貴の身分を空に浮べる雲の如く輕視する氣風あり (二) さつと山林にかくれ住むとにもあらず (三) 自然の景色に耽る、偏癖なし (四) 肩上薄膜あるを肓として心下に脂肪あるを膏とす、病此處に入れば不治の難症

競逐人に聽して盡醉を嫌はず。恬淡己に適して獨醒に誇らず。此れ釋氏の所謂法の爲に纏せられず、空の爲に纏せられず、身心兩ながら自在なる者なり。

(一) 名利を逐ひて走せまはることは人のなすに任す (二) 世人盡く酒に醉ふが如く名利に醉ふをきらはず (三) 名利に淡泊なることと自分の意にかなひて己一人醒むるに誇らず (四) 佛氏 (五) 佛法のために執はれず (六) 空虚論のために執はれず

延促は一念に由り、寬窄は之を寸心に係く。故に機閒なる者は一日も千古より遥なり。意廣き者は斗室も寬きこと兩間の若し。

如㆓槁木㆒。心似㆓死灰㆒。不㆑免㆑墮㆓落頑空㆒。

人肯當下休。便當下了。若要㆑尋㆓個歇處㆒。則婚嫁雖㆑完。事亦不㆑少。僧道雖㆑好。心亦不㆑了。前人云。如今休去。便休去。若覓㆓了時㆒。無㆓了時㆒。見㆑之卓矣。

從㆑冷觀㆑熱。然後知㆓熱處之奔馳無㆒㆑益。從㆑冗入㆑閒。然後覺㆓閒中之滋

(一) さみしき燈火には焰燃上らず破れたる皮ゴロモには温みなし (二) 物の樣子を殺風景にす (三) 身體は枯木の如く心は火のなき灰に似る (四) かたよれる寂滅觀に陷れるもの

人肯へて當下に休せば便ち當下に了せん。(一)若し個の歇む處を尋ねんと要せば、(二)則ち婚嫁完しと雖も事も亦少なからず。(三)僧道好しと雖も心も亦了せず。(四)前人云ふ、如今休し去らば便ち休し去れ。(五)若し了時を覓めば了時なからんと。(六)之を見ること卓なり。(七)

(一) 世上の俗事は其の時に中止せば其の時に事ずみになるべし (二) 其の事ずみになるを待たんとす (三) 女子の嫁入事ずみになれども其の後の事件起ること多し (四) 佛道によく歸依すといへども心必ずしも悟りきれず (五) 只今中止するならば直ぐ中止せよ (六) 事ずみの時を求むれば事ずみの日なし (七) 觀察すぐれたり

冷從り熱を視、(一)然る後に熱處の奔馳益なきを知る。(二)冗從り閒に入り、(三)然る後に閒中の滋味最も長きを覺ゆ。(四)

(一) 冷靜の態度をもつて熱中せるを見る (二) 熱中してジタバタすることの無益なるを知る (三) 煩はしき境地より閑靜なる境地に入る (四) 閑靜の趣味最も悠久にしてつきせざるを知る

古之英雄盡歸二掌握一。山河大地已屬二微塵一。而況塵中之塵。血肉身軀且歸二泡影一。而況影外之影。非二上上智一無二了了心一。

石火光中爭二長競一レ短。幾何光陰。蝸牛角上較レ雌論レ雄。許大世界。

寒燈無レ焰。敝裘無レ溫。總是播二弄光景一。身

註 (三) 鳳毀 (四) わが胸中にをさまる (五) 眼前の現象を看破す (六) 古來の英雄盡くわが手の内にをさまる

(一)山河大地已に微塵に屬す、而るを況んや(二)塵中の塵をや。(三)血肉身軀且泡影に歸す、而るを況んや(四)影外の影をや。(五)上上の智に非ざれば了了の心なし。

(一) 山河大地も微塵に屬せり (二) 天地間に存在する萬物は塵の中の塵 (三) 人間の血や肉やからだすら水泡幻影の如く消失す (四) 人間に附屬する官貴名譽は影の外の影 (五) 非常にぐすれたる智慧をもつてせざれば此の理をさとりがたし

(一)石火光中に(二)長を爭ひ短を競ふ、幾何の光陰ぞ。(三)蝸牛角上に雌を較べ雄を論ず、(四)許く大さの世界ぞ。

(一) 石を打つて發する火花の如き短き人生 (二) 人と人と互ひに長短を爭ふ (三) 蝸牛の角の如き狹き土地の上に雌雄を爭論す、蝸牛角上に蠻觸二國あつて常に相爭ふこと莊子に見ゆ (四) どれほどの大きさの世界なるか

(一)寒燈焰なく、敝裘溫なきは、總て是れ(二)光景を播弄す。(三)身槁木の如く心死灰に似たるは、(四)頑空に墮落するを免れず。

之趣。

心無物欲即是秋空霽海。坐有琴書便成石室丹丘。

賓朋雲集。劇飲淋漓樂矣。俄而漏盡燭殘香銷茗冷。不覺反成嘔咽。令人索然無味。天下事率類此。人奈何不早回頭也。

會得個中趣。五湖之煙月盡入寸裡。破得眼前機。千

(一)心 物欲なければ即ち是れ秋空霽海、(二)坐に琴書あれば便ち石室丹丘を成す。(三)

㊀ 心中に物質的欲望なし ㊁ 秋の空霽れたる海の如くはればれとす ㊂ 仙人の棲める場所

(一)賓朋雲の如く集り、(二)劇飲淋漓として樂しめり。(三)俄にして漏盡き燭殘り、(四)香銷え、茗冷かにして、覺えず反つて(五)嗚咽を成し、人をして(六)索然として味無からしむ。天下の事率ね此に類す。人奈何ぞ(七)早く頭を回らさざるや。

㊀ 賓客朋友多く集る ㊁ 引きうけ引きうけ十二分に飲む ㊂ 漏刻の水盡き燈火の油減じて消えのこる ㊃ 薫物の香も消え茶も冷えわたる ㊄ むかづきむせぶ ㊅ 興さめて味なし ㊆ これまでにならぬ内反省す

(一)個中の趣を會得すれば、(二)五湖の煙月、(三)盡く寸裡に入る。(四)(五)眼前の機を破得すれば、(六)千古の英雄盡く掌握に歸す。

㊀ 其のものに對する趣味を會得す ㊁ 支那の五大湖、饒州の鄱陽湖、岳州の青草湖、潭州の洞庭湖、蘇州の大

聲。喚二醒夢中之夢一。觀二澄潭之月影一。窺二見身外之身一。

鳥語蟲聲總是傳心之訣。花英草色無レ非二見道之文一。學者要三天機淸徹胸次玲瓏觸レ物皆有二會心處一。

人解レ讀二有字書一。不レ解レ讀二無字書一。知レ彈二有絃琴一。不レ知レ彈二無絃琴一。以レ迹用、不二以レ神用一。何以得二琴書

見る。

㊀物靜かなる夜の鐘の聲　㊁人生はこれ夢中に夢見る如しといふ語をあこす　㊂澄み渡るふちにうつる月影　㊃肉體以外の自己を觀ず

鳥語蟲聲總て是れ(一)傳心の訣なり。(二)花英草色も見道の文に非ざるは無し。學者(三)天機淸徹、(四)胸次玲瓏にして物に觸れて皆(五)會心の處あらんことを要す。

㊀以心傳心の秘訣　㊁花の美草の色も眞理を知る文章　㊂天然の心機淸くすみわたる　㊃胸中はからかにすきとはる　㊄天地の萬象にふれて皆眞理妙道を會得せざるべからず

人(一)有字の書を讀むことを解して、(二)無字の書を讀むことを解せず。(三)有絃の琴を彈ずるを知つて、(四)無絃の琴を彈ずることを知らず。(五)迹を以て用ひ、神を以て用ひず、(六)何を以てか琴書の趣を得ん。

㊀文字にて得ける書　㊁自然はこれ無字の書　㊂絃をはれる琴　㊃自然の聲　㊄形を飾りにし精神を飾りにせず　㊅如何にして琴と書との妙味を解し得んや

濃谷豔。纔是乾坤之幻境。水木落而石瘦崖枯。纔見二天地之眞吾一。

歳月本長而忙者自促。天地本寛而鄙者自隘。風花雪月本閒而勞攘者自冗。

得レ趣不レ在レ多。盆池拳石間煙霞具足。會レ景不レ在レ遠。蓬窓竹屋下風月自賒。

聽二靜夜之鐘

せ崖枯る。(六)纔に天地の眞吾を見る。

㊀鶯啼きて花咲きみつ ㊁山や谷の眺め濃豔 ㊂天地のまぼろしの姿にて眞相ならず ㊃流れの水減り木の葉落つ、冬の景 ㊄巖石もむきだしになり瘦せ崖岸も骨をあらはす、朱子の詩に、木落ち水盡きて千崖枯れ、迥然として亦眞吾を見るといふ句あり ㊅かくて始めて天地の眞實體が見える

(一)歳月本長けれども(二)忙しき者自ら促る。天地本寛けれども(三)鄙しき者自ら隘し。(四)風花雪月本閒なれども(五)勞攘の者自ら冗なり。

㊀歳月はもと永久なるもの ㊁せか〳〵多忙なる者は自分から長き時間を縮む ㊂心ざま卑しきものは廣き天地を自ら狹くす ㊃四季の景物たる風花雪月はもと悠々たるもの ㊄あくせくするものは自分から忙しくす

(一)趣を得るは多きに在らず、(二)盆地拳石の間に(三)烟霞具足す。(四)景を會するは遠きに在らず、(五)蓬窓竹屋の下に、(六)風月自ら賒なり。

㊀趣味を感得するにはたくさんのものは不要 ㊁盆はどの池、拳はどの石 ㊂自然の趣はちやんとそなはる ㊃景色を賞翫するには遠方ならずともよし ㊄草葺の窓や竹の柱の家 ㊅自然の景色は豐かにして盡きず

(一)靜夜の鐘聲を聽いて(二)夢中の夢を喚び醒す。(三)澄潭の月影を觀て(四)身外の身を窺ひ

談二山林之樂一者。未三必眞得二山林之趣。厭二名利之談一者。未三必盡忘二名利之情。
釣レ水逸事也。尙持二生殺之柄一。奕棋淸戲也。且動二戰爭之心。可レ見喜レ事不レ如二省レ事之爲レ適。多能不レ若二無能之全一レ眞。
鶯花茂而山

後集

（一）山林の樂を談ずるものは、未だ必ずしも眞に（二）山林の趣を得ず。（三）名利の談を厭ふ者は、未だ必ずしも（四）盡く名利の情を忘れず。

（一）俗世間をのがれて山林に閑居する快樂を口にするもの　（二）山林閑居の趣味を會得せず　（三）功名利達のはなしをいやがるもの　（四）すつかりと功名利達の念を忘れず

（一）水に釣るは逸事なり。（二）尙ほ生殺の柄を持す。（三）奕棋は淸戲なり。（四）且戰爭の心を動かす。見るべし、（五）事を喜むは（六）事を省くの（七）適たるに如かず。多能は無能の（八）眞を全うするに若かざることを。

（一）隱遁のこと　（二）生きものを取る念慮あり　（三）圍碁は高尙なる遊戯　（四）それすら勝負の心を動かす　（五）事を喜み爲す　（六）何事をも爲さぬ　（七）己が性に適す　（八）天眞の自然を傷けざるにしかず

（一）鶯花茂くして（二）山濃に谷艶なる、總て是れ（三）乾坤の幻境なり。（四）水木落ちて（五）石瘦

見二人生之眞境一。味淡聲希處。識二心體之本然一。

識る。

㈠温和平靜の姿が人生の眞相 ㈡食ふ所の味淡泊に聞く聲稀なる所 ㈢心の本然の姿

世立レ朝。稔難レ成ニ個令器一。

君子處ニ患難一而不レ憂。當ニ宴遊一而惕慮。遇ニ權豪一而不レ懼。對ニ惸獨一而驚レ心。

桃李雖レ艶。何如ニ松蒼柏翠之堅貞一。梨杏雖レ甘。何如ニ橙黄橘綠之馨冽一。信乎。濃夭不レ及ニ淡久一。早秀不レ如ニ晩成一也。

風恬浪靜中。

火力陶冶何れも教育指導の方法をさす　(四) 社會に出て官につく　(五) 有用の材となりがたし

君子は(一)患難に處して憂へず。(二)宴遊に當つて惕慮す。權豪に遇ひて懼れず。(三)惸獨に對して心を驚かす。

(一) 患難にあひてクヨクヨせず　(二) 酒もりの場合に溺れ惑へる　(三) 親少き孤獨者に對してこれはと驚く

桃李は艶なりと雖も、何ぞ(一)松蒼柏翠の堅貞なるに如かん。梨杏は甘しと雖も、何ぞ(二)橙黄橘綠の馨冽なるに如かん。(三)信なるかな、(四)濃夭は淡久に及ばず、(五)早秀は晩成に如かざるは。

(一) 松のあを／＼とし柏のみどりを變ぜぬ堅固の操　(二) 橙の黄にして橘の綠なる香氣つよき味　(三) まつたくのことと　(四) 色よくして早く失するものは色うすくして永久なるものに及ばず　(五) 早く發育するものは遲く成熟するものに及ばず

(一)風恬に浪靜なる中、人生の眞境を見る。(二)味淡く聲希なる處、(三)心體の本然を

疑。事事雖與下手。口乃心之門。守口不密洩盡眞機。意乃心之足。防意不嚴走盡邪蹊。

責人者。原無過於有過之中則情平。責己者。求有過於無過之內則德進。

子弟者大人之胚胎。秀才者士夫之胚胎。此時若火力不到。陶鑄不純。他日涉

人　(五)一段の分別や知識多し　(六)當て推量や疑ひそねみ　(七)其の人と共に着手しがたし

口は乃ち心の門なり。口を守ること密ならざれば、眞機を洩し盡くす。意は乃ち心の足なり。意を防ぐこと嚴ならざれば邪蹊を走り盡くす。

(一)多辯を十分につゝしむ　(二)心の奥底を外にもらしつくす　(三)動機は心の動かんとするキツカケなるゆゑに心の足なり　(四)よこしまなる小みちに入る

人を責むる者は、無過を有過の中に原せば、則ち情平かなり。己を責むる者は、有過を無過の內に求むれば則ち德進む。

(一)過失ある中にも過失なき點なきかとたづぬ　(二)心激せずして平靜　(三)過失なき中にも過失有る點なきかとたづぬ

子弟は大人の胚胎なり。秀才は士夫の胚胎なり。此時若し火力到らず、陶鑄純ならざれば、他日世を涉り朝に立つに、終に個の令器を成し難し。

(一)青年子弟は大人君子の卵　(二)優秀の才子は士大夫の卵　(三)火の力十分ならず　(四)陶法鑄法純一ならず、

融神洽時。方不レ泥ニ迹象ー。

天賢ニ一人ー以誨ニ衆人之愚ー。而世反逞レ所レ長以形ニ人之短ー。天富ニ一人ー以濟ニ衆人之困ー。而世反挾レ所レ有。以凌ニ人之貧ー。眞天之戮民哉。

至人何思何慮。愚人不識不知。可ニ與論レ學。亦可ニ與建レ功。唯中才的人多ニ一番思慮知識ー。便多ニ一番億度猜

㊀うれしくたへられぬ妙處　㊁魚を釣る浮木と兎を捕る罠にて手段方便をいひ字句を穿鑿すること　㊂心と對象と融合合一するところまで觀るべし　㊃表面にあらはれたる形象

天一人を賢にして以て衆人の愚を誨ふ。而して世反つて長ずる所を逞しうして以て人の短を形す。天一人を富ましめ、以て衆人の困を濟ふ。而して世反つて有する所を挾んで、以て人の貧を凌ぐ。眞に天の戮民なるかな。

㊀世に賢者を出して　㊁世間にはそれとアベコベに自分の長所をふりまはして他人の短所をあばくものあり　㊂所有するところの財産を頼んで他人の貧乏を侮る　㊃天より罰せらるゝ人間

至人は何思何慮なり。愚人は不識不知なり。與に學を論ず可く。亦與に功を建つ可し。唯中才的の人は一番の思慮知識多ければ、便ち一番の億度猜疑多し。事與に手を下し難し。

㊀智徳圓滿の人　㊁何事も思はず考へず心平靜なり　㊂何事をも知らず心中空虛なり　㊃中等程の才ある

名一。事稍拂逆。便思ニ不レ如レ我的人一。則怨尤自消。心稍怠荒。便思ニ勝レ似レ我的人一。則精神自奮。

不レ可ニ乗レ喜而輕レ諾。不レ可ニ因レ醉而生レ嗔。不レ可ニ乗レ快而多レ事。不レ可ニ因レ倦而鮮レ終。

善讀レ書者要レ讀ニ到手舞足蹈處一。方不レ落ニ筌蹄一。善觀レ物者要レ觀ニ到心

事稍拂逆せば(一)便ち我に如かざる的の人を思へば、則ち怨尤(二)自ら消ゆ。心稍怠荒せば(四)便ち我れ似り勝る的の人を思へば、則ち精神(三)自ら奮ふ。

(一)自分の意の如くならず (二)自分より技倆おとれる人 (三)心中の怨み自然と無くなる (四)なまけすさぶ (五)精神自然と奮ひ立つ

(一)喜に乗じて諾を輕〻しくす可からず、(二)醉に因りて嗔を生ず可からず。(三)快に乗じて事を多くすべからず。(四)倦に因りて終を鮮うすべからず。

(一)うれしまぎれに輕卒に物をうけひくべからず (二)醉つたまぎれに腹立つべからず (三)氣もちよきにまかせて事を多くなすべからず (四)退屈したために終結になつてい丶かげんにすべからず

善く書を讀む者は、(一)手舞ひ足蹈むの處に讀み到らんことを要す。方に(二)筌蹄に落ちず。善く物を觀る者は(三)心融け神洽ぐの時に觀到らんことを要す。方に(四)迹象に泥まず。

節義之人濟以和衷。纔不啓忿爭之路。功名之士承以謙德。方不開嫉妬之門。

士大夫居官不可竿牘無節。要使人難見以杜倖端。居鄉不可崖岸太高。要使人易見以敦舊好。

大人不可不畏。畏大人則無放逸之心。小民亦不可不畏。畏小民則無豪橫之名。

節義の人は濟ふに和衷を以てせば、纔に忿爭の路を啓かず。功名の士は承くるに謙德を以てせば、方に嫉妬の門を開かず。

(一)節義を以て任ずる人は嚴格すぎるものなれば溫和なる心を以て對す　(二)いかり爭ふことなし　(三)功あり名ある人は傲りやすきものなれば謙遜の德を以て對す　(四)其の人より嫉妬せらるゝことなし

士大夫官に居ては竿牘節無かるべからず。人をして見難からしめ、以て倖端を杜がんことを要す。鄕に居ては崖岸太だ高かるべからず。人をして見易からしめ、以て舊好を敦くせんことを要す。

(一)在官の時　(二)手紙にきまりあつてやたらに書かず　(三)人に本心を見すかされず　(四)僥倖を希ふ端緒を無くすべし　(五)官をやめて鄕里にあり　(六)威儀を正してスマナスべからず　(七)ふるきヨシミを一層あつくすべし

大人は畏れざるべからず。大人を畏るれば則ち放逸の心無し。小民も亦畏れざるべからず。小民を畏るれば則ち豪橫の名なし。

(一)威德高き人　(二)ダラシなき心起らず　(三)世間の凡人　(四)おごり高ぶるといふ評判なし

性燥心粗者一事無レ成。心和氣平者百福自集。

用レ人不レ宜レ刻。刻則思レ效者去。交レ友不レ宜レ濫。濫則貢レ諛者來。

風斜雨急處。要下立二得脚一定上。花濃柳艷處。要下著二得眼一高上。路危徑險處。要下回二得頭一早上。

(一)性燥心粗なる者は一事も成ること無し。(二)心和し氣平かなる者は百福自ら集る。

(一)性質のソソカシきものは一事といへども成就せず　(二)心の和平なるものは多くの幸福自然と集る

人を用ふるには宜しく(一)刻なるべからず。刻なれば則ち(二)效を思ふ者去る。友に交はるには宜しく(三)濫なるべからず。濫なれば則ち(四)諛を貢する者來る。

(一)冷酷　(二)功を立てんと思ふもの去る　(三)人物の見さかひもなくみだりにすべからず　(四)オベツカをいふものが來る

(一)風斜に雨急なる處は、(二)脚を立ち得て定めんことを要す。(三)花濃に柳艷なる處は、(四)眼を著け得て高からんことを要す。(五)路危く徑險なる處は、(六)頭を回らし得て早からんことを要す。

(一)世渡りの上にて困難なる境遇をさす　(二)脚をしつかりと立てゝ倒れざるやうにすべし　(三)遊里の如き聲色の美しき場所　(四)着眼點を高くす　(五)危急なる境遇をなす　(六)早く頭をふりかへりて別途を取り危險を避くべし

折未レ折。切忌三再加二一搦一。
冷眼觀レ人。冷耳聽レ語。冷情當レ感。冷心思レ理。
仁人心地寛舒。便福厚而慶長。事事成二個寛舒氣象一。鄙夫念頭迫促。便祿薄而澤短。事事得二個迫促規模一。
聞レ惡不レ可二就惡一。恐爲二讒夫洩一レ怒。聞レ善不レ可二急親一。恐引二奸人進一レ身。

處置するもの ㊂ も一たわみを與ふるときは木折るゝ如く失敗するゆゑによく持ちこたへることを要す

(一)冷眼にて人を觀、冷耳にて語を聽き、(二)冷情にて感に當り、(三)冷心にて理を思ふ。

㊀ 冷靜なる眼にて人を觀察す ㊁ 情を冷靜にして感じたることに對す ㊂ 心を冷靜にして物を道理を考ふ

(一)仁人は心地寛舒なり。(二)便ち福厚くして慶長く、(三)事事個の寛舒の氣象を成す。(四)鄙夫は念頭迫促なり。(五)便ち祿薄くして澤短く、(六)事事個の迫促の規模を得。

㊀ 仁愛なる人は心質大にしてのびやか ㊁ 幸福多くして永久なり ㊂ 何事の上にも寛舒の趣あり ㊃ 卑しき人は心せまくコセコセす ㊄ 受くる所の幸福薄く短し ㊅ せゝこましき姿をなす

(一)惡を聞いては就ち惡むべからず。(二)恐らくは讒夫の怒を洩すことを爲さん。善を聞いては急に親しむべからず。(三)恐らくは奸人の身を進むることを引かん。

㊀ 他人の惡事を聞く ㊁ 人の上を惡しざまにいふ、讒人の私憤を洩す手傳ひとなることあらん ㊂ 心のねぢけたる奸人の身を進めんとする手傳ひとなることあらん

飲宴之樂多不二是個好人家一。聲華之習勝不二是個好士子一。名位之念重不二是個好臣士一。

飲宴の樂み多きは是れ個の好人家ならず。(一)(二) 聲華の習ひ勝つは、是れ個の好士子ならず。(三)(四) 名位の念重きは、是れ個の好臣士ならず。(五)(六)

(一)飲食宴遊の快樂 (二)りつぱな家庭 (三)名聞ぐるしく觸出すき (四)りつぱな人物 (五)名聞地位を欲する念 (六)りつぱな臣下

世人以二心肯處一爲レ樂。却被二樂心引一在二苦處一。達士以二心拂處一爲レ樂。終爲二苦心一換二得樂一來。

世人は心の肯ふ處を以て樂と爲す。(一) 却つて樂心に引かれて苦處に在り。(二) 達士は心の拂る處を以て樂と爲す。(三)(四) 終に苦心の爲に樂を換へ得來る。(五)

(一)自分のおもふまゝになるものを樂とす (二)快樂を欲する心に誘引せられて苦しき目にあふ (三)達識の人物 (四)自分の心にかなはぬもの (五)苦に甘んずる結果快樂を得

居二盈滿一者如二水之將レ溢未一レ溢、切忌三再加二一滴一。處二危急一者如二木之將レ

盈滿に居る者は水の將に溢れんとして未だ溢れざるが如し。(一) 切に再び一滴を加ふるを忌む。(二) 危急に處する者は木の將に折れんとして未だ折れざるが如し。(三) 切に再び一搦を加ふるを忌む。(四)

(一)十二分の地位にゐる者 (二)一滴の水を加ふれば溢るゝ如くこの上欲念を起すときは失敗す (三)急の場合に

行似病、正是他攫人噬人手段處、故君子要聰明不露才華不逞纔有肩鴻任鉅的力量。

儉美德也。過則爲慳吝、爲鄙嗇、反傷雅道。讓懿行也。過則爲足恭爲曲謹。多出機心。

毋憂拂意。毋喜快心。毋恃久安。毋憚初難。

噬ふ手段の處なり。故に君子は聰明露さず、才華逞しうせざることを要す。纔に肩鴻任鉅的の力量あり。

（一）鷹の立つは眠れるが如く力なし　（二）虎のあるくは病める如くよろよろす　（三）鷹や虎が人をつかみ人にかみつく手段　（四）聰智を外部にあらはさず　（五）才能を存分に發揮すべからず　（六）かくてはじめて大任を肩にになふだけの力量あり

儉は美德なり。過ぐれば則ち慳吝となり、鄙嗇と爲り、反つて雅道を傷る。讓は懿行なり、過ぐれば則ち足恭と爲り、曲謹と爲る。多くは機心より出づ。

（一）よくばり　（二）意地きたなきけちん坊　（三）風雅の道をきずつく　（四）謙遜は美しき行　（五）過度の恭しきに過ぐ　（六）心の謹みに過ぐ　（七）自然性を失へる故意より生ず

拂意を憂ふること毋れ。快心を喜ぶこと毋れ。久安を恃むこと毋れ。初難を憚ること毋れ。

（一）自分の意にかなはぬことを心配するな　（二）長く安樂なる境遇を恃みとする勿れ　（三）最初の困難に氣をおとす勿れ

必執拗之人。

處レ世不レ宜二與レ俗同一。亦不レ宜二與レ俗異一。作レ事不レ宜レ令二人厭一。亦不レ宜レ令二人喜一。

日既暮而猶烟霞絢爛。歳將レ晩而更橙橘芳馨。故末路晩年君子更宜二精神百倍一。

鷹立如レ睡。虎

（一）功業を立つるもの　（二）心中空虚にして圓轉自在の人　（三）事を失敗し時機をにがすもの　（四）カタクナにて融通のきかぬ人

世に處しては宜しく（一）俗と同じうすべからず、亦宜しく（二）俗と異なるべからず。事を作すには（三）宜しく人をして厭はしむべからず、（四）亦宜しく人をして喜ばしむべからず。

（一）俗人と同化すべからず　（二）俗人とちがつた態度をとる時は世間狹し　（三）人をして其の事を厭はしむる時は事成就せず　（四）人をして喜ばしむる時は惰氣を生じて事をやぶる

（一）日既に暮れて猶ほ烟霞絢爛たり。歳將に晩れんとして更に（二）橙橘芳馨たり。故に（三）末路晩年は君子更に宜しく（四）精神百倍なるべし。

（一）日もはや暮れはつるに夕榮は美しく輝く　（二）橙や橘の花は芳しく薫る　（三）人生の終りの時期　（四）日頃の精神を百倍もはげます

（一）鷹立つこと睡るが如く、（二）虎行くこと病むに似たり。正に是れ（三）他の人を攫み人を

讒夫毀士如ニ寸雲蔽レ日。不レ久自明。媚子阿人似ニ隙風侵レ肌。不レ覺ニ其損一。

山之高峻處無木。而谿谷廻環則草木叢生。水之湍急處無魚。而淵潭停蓄則魚鼈聚集。此高絕之行褊急之衷。君子重有レ戒焉。

建レ功立レ業者。多虛圓之士。僨レ事失レ機者。

(一)讒夫毀士は(二)寸雲の日を蔽ふが如し。久しからずして自ら明かなり。(三)媚子阿人は(四)隙風の肌を侵すに似たり。(五)其損を覺えず。

(一)人を讒誘讒毀するもの　(二)小さき雲が太陽をおほひかくす　(三)人に媚びおもねるもの　(四)すきま風　(五)風に身體を損ぜらる丶をさとらず

山の(一)高峻なる處には木無し。而して(二)谿谷廻環すれば則ち草木叢生す。水の(三)湍急なる處には魚無し。而して(四)淵潭停蓄すれば則ち(五)魚鼈聚集す。此の(六)高絕の行(七)褊急の衷は君子重く(八)戒むるあり。

(一)高くけはしきところ　(二)谷川がめぐり流る　(三)瀬の早きところ　(四)淵の水が湛みたゝへる　(五)魚やすつぽんが集り生ず　(六)高尙過ぎる行　(七)偏屈にして背戾なる考へ　(八)君子たるものは十分に用心すべし

(一)功を建て業を立つる者は、多くは(二)虛圓の士なり。(三)事を僨り機を失ふ者は必ず(四)執拗の人なり。

忌毀。毋レ爲ニ小人所ニ媚悦一。寧爲ニ君子所ニ責脩一。毋レ爲ニ君子所ニ包容一。

好レ利者逸ニ出於道義之外一。其害顯而淺。好レ名者竄ニ入於道義之中一。其害隱而深。

受ニ人之恩一雖レ深不レ報。怨則淺亦報レ之。聞ニ人之惡一雖レ隱不レ疑。善則顯亦疑レ之。此刻之極薄之尤也。宜ニ切戒一之。

らるゝも、(四)君子に包容せらるゝこと毋れ。

㊀ 忌みそしらる ㊁ 小人に媚びられ悦ばるゝやうならば自分も小人 ㊂ きびしく責めらる ㊃ 君子に包みいれらるゝやうならば見込なきもの

(一)利を好む者は道義の外に逸出す。其害(二)顯れて淺し。(三)名を好む者は道義の中に竄入す。其害隱れて深し。

㊀ 利を好むものは其の失明白にして道徳より外に離れいず ㊁ 其の弊害外部にあらはれて少し ㊂ 名聞を好むものは道徳の中にくひいる

人の恩を受けては深し(一)と雖も報ぜず、怨は則ち淺きも亦之を報ず。人の惡を聞いては隱れ(二)たりと雖も疑はず、善は則ち顯(三)はるゝも亦之を疑ふ。此れ刻(四)の極、薄(五)の尤たり。宜しく切に之を戒むべし。

㊀ 恩深くとも報いず ㊁ 裏面にかくれたる些々たる惡事にても疑はずして信ず ㊂ 明かに表面にあらはれる ㊃ 冷酷の極點 ㊄ 薄情のすぐれたるもの

讎。小人自有ニ對頭一。休下向ニ君子一諂媚上。君子原無ニ私惠一。

縱欲之病可レ醫。而執理之病難レ醫。事物之障可レ除。而義理之障難レ除。

磨礪當レ如ニ百煉之金一。急就者非ニ邃養一。施爲宜レ似ニ千鈞之弩一。輕發者無ニ宏功一。

寧爲ニ小人所ニ

めよ、(四)君子原と私惠なし。

(一)小人とムキになつて怒るなかれ　(二)小人には小人の對手あり　(三)へつらひ媚ぶ　(四)君子には元來私意によつて恩惠を施すことなし

(一)縱欲の病は醫す可し、而して(二)執理の病は醫し難し。(三)事物の障は除くべし、而して(四)義理の障は除き難し。

(一)情慾をほしいまゝにする病は治療し得べし　(二)自分の偏見を固執して人の説を容れぬ病　(三)事物の障害は取除かる　(四)道德上の障害は取除きがたし

(一)磨礪は當に(二)百煉の金の如くなるべし、(三)急就の者は(四)邃養に非ず。(五)施爲は宜しく千鈞の弩に似るべし、(六)輕發の者は宏功無し。

(一)精神をとぎみがく　(二)百度もねりきたへし金　(三)早速に成就せしもの　(四)深き修養　(五)事の施設實行は千斤の石弓を放つ如く念入りにせよ　(六)輕々しく發するものは大功なし

寧ろ小人に(一)忌毀せらるゝも、(二)小人に媚悅せらるゝこと毋れ。寧ろ君子に(三)責脩せ

戚。居レ家有ニ二語一。曰惟恕則情平。惟儉則用足。

處ニ富貴之地一。要レ知ニ貧賤的痛癢一。當ニ少壯之時一須レ念ニ衰老的辛酸一。

持レ身不レ可ニ太皎潔一。一切汚辱垢穢要ニ茹納得一。與レ人不レ可ニ太分明一。一切善惡賢愚要ニ包容得一。

休下與ニ小人一仇

なれば則ち用足る。

㊀官に仕ふる場合にためになる二語あり ㊁公平なるときは明智を生ず ㊂廉潔なるときは威嚴を生ず ㊃仕へをなさで家居す ㊄おもひやりあるときは情が平靜 ㊅儉約なるときは日常の財用足る

(一)富貴の地に處しては、(二)貧賤的の痛癢を知らんことを要す。少壯の時に當つては須く(三)衰老的の辛酸を念ふべし。

㊀富貴の地位にある ㊁貧賤なる場合の苦痛を知るべし ㊂老衰せる場合の困苦を思念すべし

身を持するは(一)太だ皎潔なるべからず。(二)一切の汚辱垢穢は、(三)茹納し得んことを要す。(四)人に與するは太だ分明なるべからず。一切の善惡賢愚は(五)包容し得んことを要す。

㊀自分の身を持するには過度に潔白にすべからず ㊁すべての醜陋汚穢なる不徳不義 ㊂大度量を以て受け入る ㊃人と交際するには過度に區別立てすべからず ㊄自分の胸に包みいる

(一)小人と仇讐するを休めよ、(二)小人自ら對頭あり。君子に向つて(三)諂媚するを休

須下先向二閒時一討中個攔柄上、鬧中要レ取レ靜。須下先從二靜處一立中個主宰上。不レ然未レ有下不二因レ境而遷隨レ事而靡一者上。

に靜を取らんと要せば、須らく先づ靜處從り(五)個の主宰に立つべし。(六)然らざれば未だ境に因つて遷り、(七)事に隨つて靡かざる者あらず。(八)

(一)多忙なるうちに閑暇を得んとす　(二)暇ある時に於て忙に處する用意をなし置くべし　(三)つかまへ所　(四)騒がしき中にて心を靜にす　(五)靜かなる場所に於て外物に支配せられず自己の精神の上に立つ如くなすべし　(六)萬物を支配するもの即ち自分の精神　(七)境遇によつて心うつる　(八)事につれてなびき從ふ

不レ昧二己心一。不レ盡二人情一。不レ竭二物力一。三者可下以爲二天地一立レ心。爲二生民一立レ命。爲二子孫一造上レ福。

己の心を昧まさず、(一)人の情を盡くさず、(二)物の力を竭さず。(三)三つの者は以て天地の爲めに心を立て、(四)生民の爲めに命を立て、(五)子孫の爲めに福を造すべし。(六)

(一)外物のために自分の心をくらまされず　(二)他人の感情を蹂躙せず　(三)自分の慾望のために物を浪費せず　(四)天地のためには天地の精神を確立す　(五)人類のためには人類の生命を安固にす　(六)わが子孫のためには幸福をなす

居レ官有二二語一。曰惟公則生レ明。惟廉則生レ

官に居るに二語あり。(一)曰く、惟公なれば則ち明を生じ、(二)惟廉なれば則ち威を生ず。(三)家に居るに二語あり。(四)曰く、惟恕なれば則ち情平かに、(五)惟儉(六)

語云。登レ山耐ニ側路一。踏レ雪耐ニ危橋一。一耐字極有ニ意味一。如ニ傾險之人情坎坷之世道一。若不下得ニ一耐字一撐持過去上。幾何不レ墮ニ入榛莽坑塹一哉。

誇ニ逞功業一。炫ニ燿文章一。皆是靠ニ外物一做レ人。不レ知。心體瑩然。本來不レ失。即無ニ寸功隻字一。亦自有ニ堂堂正正做レ人處一。

忙裡要レ偸レ閒。

語に云く、(一)山に登るに側路に耐へ、(二)雪を踏むに危橋に耐ふと。一の耐の字極めて意味あり。(三)傾險の人情、(四)坎坷の世道の如き、若し一の耐の字を得て(五)撐持し過ぎ去らずんば、幾何ぞ(六)榛莽坑塹に墮入せざらんや。

(一)山に登るには險阻なる路をもこらへてゆく　(二)雪中を行くにはあぶなげなる橋をもこらへて渡る　(三)邪惡の人情　(四)困難なる世渡の道　(五)手に持ちて通過す　(六)藪の中やおとし穴に陷りて不幸に沈淪すべし

(一)功業を誇逞し、(二)文章を炫燿するは、皆是れ(三)外物に靠つて人と做るなり。知らず、(四)心體瑩然、(五)本來失はずんば、即ち(六)寸功隻字無きも、亦自ら(七)堂堂正正人と做る處あるを。

(一)功を誇る　(二)文章を見せびらかす　(三)外物のおかげにて人となる　(四)心の本體が光りかゞやく　(五)本來具足する眞性を失はず　(六)僅かの功業文字　(七)盛にしてりつぱなる人となる

(一)忙裡に閒を偸まんと要せば、須く先づ(二)閒時に向つて個の(三)欛柄を討ぬべし。(四)閙中

人一。以二和氣一薰蒸之一。遇二傾邪私曲的人一以二名義氣節一激二礪之一。天下無レ不レ入二我陶冶中一矣。

一念慈祥。可三以醞二釀兩間和氣一。寸心潔白。可三以昭二垂百代清芬一。

陰謀怪習。異行奇能。俱是涉レ世的禍胎。只一個庸德庸行。便可下以完二混沌一而召中和平上。

が陶冶(八)の中に入らざる無し。

(一) 詐欺を事とする人物 (二) 偏屈無法の人物 (三) 温和の氣をもつて其の人を感化す (四) 香の薫により又は蒸して穢臭を除く如く段々に感化す (五) 高慢にして私利を營む人物 (六) 名分節義を以てふるひはげます (七) 天下に於て我に教化せられざるものなし (八) 土をねりて器を作り金を鍛へて器を作る如く人物を教化す

(一)一念の慈祥、以て兩間の和氣を醞釀すべし。(二)寸心の潔白、以て(三)百代の清芬を昭垂すべし。

(一) 慈愛の一念だにあらば天地間の温和なる氣を作り出し得らる (二) 潔白の一心 (三) 芳名を百代の後世に垂るることを得

(一)陰謀怪習、(二)異行奇能は俱に是れ(三)世を渉る的の禍胎なり。只一個の(四)庸德庸行、便ち以て(五)混沌を完うして(六)和平を召くべし。

(一) 人知れずめぐらす謀計と怪しき習慣 (二) 變な行ひと常ならぬ藝能 (三) 世渡りに於て禍の宿る本 (四) 尋常普通の德と行ひ (五) 渾然たる本具の眞性を完全にす (六) 平和圓滿の身となるべし

門要路。操履要二嚴明一。心氣要二和易一。毋三少隨而近二腥羶之黨一。亦毋三過激而犯二蜂蠆之毒一。

標二節義一者。必以二節義一受レ謗。榜二道學一者。常因二道學一招レ尤。故君子不レ近二惡事一。亦不レ立二善名一。只渾然和氣。纔是居レ身之珍。

遇二欺詐的人一。以二誠心一感二動之一。遇二暴戾的

しも隨うて腥羶の黨に近く毋れ、亦過激にして(五)蜂蠆の毒を犯す毋れ。(六)

(一) 權勢を有し樞要の位にをる (二) 主義行動は嚴正明白 (三) 氣だては溫和平易にしておだやか (四) 少しも惡人の黨に隨ひ近づくなかれ、腥は魚類のクサミ、羶は獸肉のクサミにて醜汚の人をいふ (五) 惡人を攻擊すること過激 (六) 惡人の害毒にかゝるなかれ、蜂蠆は毒をもつ蜂

(一)節義を標する者は、必ず節義を以て謗を受け、道學を榜する者は、常に道學(二)に因つて尤を招く。故に君子は惡事に近かず、亦善名を立てず、(三)只渾然たる和(四)氣、(五)纔に是れ身を居くの珍なり。

(一) 節義を標榜するもの (二) 宋儒性理の學 (三) りつぱなるはで〳〵しき名目を立てず (四) 圓滿なる溫和の氣 (五) 以て身の安泰を得べし

(一)欺詐的の人に遇はば、誠心を以て之を感動し、(二)暴戾的の人に遇はば、(三)和氣を以て之を薰蒸し、(四)傾邪私曲的の人に遇はば、(五)名義氣節を以て之を激礪す。(六)(七)天下我

一念之嚴。烈日秋霜。何者少得。只要二隨起隨滅廓然無一ㇾ碍、便與二太虛一同ㇾ體。

無ㇾ事時。心易二昏冥一。宜三寂寂而照以二惺惺一。有ㇾ事時。心易二奔逸一。宜三惺惺而主以二寂寂一。

議ㇾ事者。身在二事外一。宜ㇾ悉二利害之情一。任ㇾ事者。身居二事中一。當ㇾ忘二利害之慮一。

士君子處二權

（一）人の心は天體の自然現象と同一　（二）めでたき瑞相の星々雲　（三）かみなりや大雨　（四）怒愛の念はおだやかなる氣象と甘露　（五）夏の太陽と秋の霜　（六）心體の喜怒哀樂は皆無きこと能はざるもの　（七）これらの念慮が起るにしたがつて滅してゆく　（八）ひろ〳〵として障碍なし　（九）心體も大空と同一體とならん

事無き時は（一）心昏冥なり易し。宜しく（二）寂寂にして照らすに惺惺を以てすべし。事ある時は（三）心奔逸し易し。宜しく（四）惺惺にして主とするに寂寂を以てすべし。

（一）心が暗くにぶくなりやすし　（二）心を落ちつけて之を不昧の光もて照す、惺々は靜中の動趣　（三）狂ひ出す　（四）不昧を以て心を照らしながら心を落ちつかす

（一）事を議する者は、（二）身事の外に在つて、（三）宜しく利害の情を悉すべし。（四）事に任ずる者は、身事の中に居て、（五）當に利害の慮を忘るべし。

（一）事の利害を判斷するもの　（二）其の身問題の外に在り　（三）利害の事情を窮めつくすがよろし　（四）事を引受けて處分するもの　（五）自分一己の利害の考へを忘るべし

（一）士君子權門要路に處れば、（二）操履は嚴明なるを要し、（三）心氣は和易なるを要す。（四）少

而人侮レ之。侮二此布衣草履一也。然則原非レ奉レ我。我胡爲レ喜。原非レ侮レ我。我胡爲レ怒。

爲レ鼠常留レ飯。憐レ蛾不レ點レ燈。古人此等念頭是吾人一點生生之機。無レ此便所レ謂土木形骸而已。

心體便是天體。一念之喜。景星慶雲。一念之怒。震雷暴雨。一念之慈。和風甘露。

胡ぞ喜びを爲さん。原我れを侮るに非ず、我れ胡ぞ怒を爲さん。

(一) 他人が自分を敬ふ (二) 高き冠と大なる帶にて高位高官のこと (三) 布の衣服とワラグツにて身分賤しきこと (四) 元來自分其のものを敬ふにあらずして衣冠を敬ふ

(一)鼠の爲めに常に飯を留め、(二)蛾を憐んで燈を點せず。(三)古人此等の念頭是れ(四)吾人一點生生の機なり。(五)此れ無くば便ち所謂土木の形骸のみ。

(一) 鼠のためにいつも餘りものを殘し置く (二) 夏虫をあはれんで燈火をともさず (三) 古人の此のやうな考へ (四) 吾人が一點の生命を有する作用 (五) 此の同情心なくば即ち世にいふ土くれ木のはしの形ばかりにて精神なし

(一)心體は便ち是れ天體なり。一念の喜は(二)景星慶雲、一念の怒は(三)震雷暴雨、(四)一念の慈は和風甘露、一念の嚴は(五)烈日秋霜、(六)何者か少き得ん。(七)只隨つて起り隨つて滅し、(八)廓然として碍り無きを要せば、(九)便ち太虚と體を同じうせん。

濃。先濃後淡者。人忘其惠。威宜自嚴而寬。先寬後嚴者。人怨其酷。

る。(一)威は宜しく嚴よりして寬なるべし。寬を先にして嚴を後にする者は人其酷を怨む。

(一)恩惠を施すには始めはうすうすしく段々に厚くするがよろし　(二)恩惠をうくるものは其の恩を忘る　(三)威光を示すには始めは嚴格にし段々にゆるやかにするがよろし

心虛則性現。不息心而求見性。如撥波覓月。意淨則心清。不了意而求明心。如索鏡增塵。

(一)心虛なれば則ち性現す。(二)心を息めずして性を見んことを求めば、(三)波を撥いて月を覓むるが如し。(四)意淨ければ則ち心淸し。(五)意を了せずして心を明にせんことを求むるは、(六)鏡を索めて塵を增すが如し。

(一)心の中が空虛にて雜念なきときは人間本具の眞性現る　(二)心の動搖をやめずして眞性を見んと欲す　(三)波をおしひらきて月を見んとする如し　(四)心の動く動機が淸ければ心の本體も淸し　(五)意念を明かにす　(六)鏡を得て塵を增すごとく反つて曇る

我貴而人奉之。奉此峩冠大帶也。我賤

我れ貴くして人之を奉ずるは、(一)此峩冠大帶を奉ずるなり。我れ賤しくて人之を侮るは、(二)此布衣草履を侮るなり。然らば則ち(三)原我を奉ずるに非ず、我れ

則有迷。終非
常明之燈。

(一)おもひつきによつて事をなす者　(二)なすそばから厭になりて止める　(三)後戻りせぬ車、やまざる努力ないふ　(四)深き考へなく感情の作用によつて迷を解き道を悟る　(五)心がいつも明かなる燈火の如くなる能はず

人之過誤宜
恕。而在己則
不可恕。己之
困辱當忍。而
在人則不可
忍。

(一)人の過誤は宜しく恕すべし、而して己に在つて則ち恕すべからず。(二)己の困辱は當に忍ぶべし、而して(三)人に在つては則ち忍ぶべからず。

(一)他人の過失はゆるしてやるがよろし　(二)自分の困窮恥辱は忍耐すべし　(三)他人の困窮恥辱は默過すべからず

能脫俗便是
奇。作意尚奇
者。不爲奇而
爲異。不合汚
便是淸。絕俗
求淸者。不爲
淸而爲激。

(一)能く俗を脫すれば、便ち是れ奇(二)なり。(三)作意に奇を尙ぶ者は、奇と爲さずして(四)異と爲す。(五)汚に合せざれば便ち是れ淸なり。(六)俗を絕つて淸を求むる者は、淸と爲さずして激(七)と爲す。

(一)俗塵を脫す　(二)人なみかはつた人　(三)ことさらに奇を尙び衒ふもの　(四)變人　(五)汚れたるなかまに入る　(六)俗塵を脫して潔白をもとむ　(七)矯激にして偏屈なるもの

恩宜自淡而

(一)恩は宜しく淡よりして濃なるべし。濃を先にし淡を後にする者は(二)人其恵を忘

意氣要二愈新一。處二隱微之事一。心迹宜二愈顯一。待二衰朽之人一。恩禮當二愈隆一。

勤者敏二於德義一。而世人借レ勤以濟二其貧一。儉者淡二於貨利一。而世人假レ儉以飾二其吝一。君子持レ身之符。反爲二小人營レ私之具一矣。惜哉。

憑二意興一作爲者。隨作則隨止。豈是不退之輪。從二情識一解悟者。有レ悟

く愈〻顯なるべし。(五)衰朽の人に待するには(六)恩禮常に愈〻隆なるべし。

(一)ふるき知人にあふ　(二)心もちいよ〳〵新にして陳々しくせず　(三)人知れざる内密のことを處分す　(四)いいかげんにゴマカサず心の作用をいよ〳〵はつきりとなす　(五)老いくちて役にたゝぬ人　(六)恩惠禮儀はいよいよ十分にすべきもの

(一)勤は德義に敏きなり。而るに世人は勤を借つて(二)以て其貧を濟ふ。(三)儉は貨利に淡きなり。而るに世人は儉を假つて(四)以て其吝を飾る。君子身を持するの(五)符、反つて小人私を營むの(六)具と爲る、惜いかな。

(一)勤勉とは德義に對して敏活なること　(二)世人は道德的なるべき勤勉を借り來つて功利的に使用し其の貧困をすくふ　(三)儉約とは財貨の利慾に淡泊なること　(四)儉約を借り來つて其の吝嗇をかざる　(五)身を守る守り札　(六)私利をはかる道具

(一)意興に憑つて作爲する者は、(二)隨つて作せば則ち隨つて止む。豈に是れ(三)不退の輪ならんや。(四)情識に從つて解悟する者は悟ることあれば迷ふことあり。終に(五)常明の燈に非ず。

必盡誠。己則獨誠矣。疑レ人者。人未二必皆詐一。己則先詐矣。

念頭寛厚的。如二春風煦育一。萬物遭レ之而生。念頭忌刻的如二朔雪陰凝一。萬物遭レ之而死。

爲レ善不レ見二其益一。如二草裡東瓜一。自應二暗長一。爲レ惡不レ見二其損一。如二庭前春雪一。當二必潛消一。

遇二故舊之交一。

疑ふ者は、人未だ必ずしも皆詐らず、(三)己則ち先づ詐る。

㊀ 誠實なりと信ぜし人實は必ずしも皆誠實ならず ㊁ 信ずる自分は獨り誠實なり ㊂ 疑ふ自分は先づ詐り居るなり

(一)念頭寛厚的は春風の煦育の如し、萬物之に遭うて生ず。(二)念頭忌刻的は朔雪の陰凝の如し、萬物之に遭うて死す。

㊀ 心のゆつたりとして情厚きものは恰も春風が草木を暖め育つる如し ㊁ 心の猜忌刻薄なるものは恰も冬の雪が空をくもらし物を凍らす如し

(一)善を爲せども其益を見ざるは、(二)草裡の東瓜の如し。(三)自ら應に暗に長ずべし。惡を爲せども其損を見ざるは、(四)庭前の春雪の如し。(五)當に必ず潛に消すべし。

㊀ 善行をなせどもそれだけの利益を見ず ㊁ 草むらの中の東瓜 ㊂ 自然と人知れず成長して相當の善報あらん ㊃ 損害を受けず ㊄ きつとひそか消滅して相當の惡報あらむ

(一)故舊の交に遇はば、(二)意氣愈〻新なるを要す。(三)隱微の事に處しては(四)心迹宜し

前人云。抛二却自家無盡藏一。沿レ門持レ鉢效二貧兒一。又云。暴富貧兒休レ說レ夢。誰家竈裡火無レ烟。一箴三自昧二所有一。一箴三自誇二所有一。可レ爲二學問切戒一。

道是一重公衆物事。當二隨レ人而接引一。學是一個尋常家飯。當二隨レ事而警惕一。

信レ人者。人未二

(一)前人云ふ、自家の無盡藏を抛却して、(二)門に沿ひ鉢を持して貧兒に效ふと。又云ふ、(四)暴富の貧兒夢を説くことを休めよ。(五)誰が家の竈裡の火か烟無からんと。一は(六)自ら所有に昧きことを箴め、一は自ら所有に誇ることを箴む。學問の(七)切戒と爲す可し。

(一)前代の人、此の句王陽明の詠學詩に出づ　(二)自分の無盡藏といふべきりつぱな精神を放任し置く　(三)他家の門に立ち鉢をもつて乞食のまねをなす　(四)成金になつた貧乏人よむやみに夢の如きたあいもなきことを説くなかれ　(五)いづくの家のカマドの火とて烟の立たざるあらんや　(六)自分で自分の有するものを知らざるをさとす　(七)剴切なる訓戒

道は是れ一重の(一)公衆の物事なり、當に人に隨つて(二)接引すべし。學は是れ一個の(三)尋常家飯なり、當に事に隨つて(四)警惕すべし。

(一)一種の公共物　(二)何人なりとも道の方に引寄すべし　(三)日に三度の普通の食事　(四)何事なりとも學問に照していましむ

(一)人を信ずる者は、(二)人未だ必ずしも盡く誠ならず、(三)己則ち獨り誠なり。人を

恩務施二於不レ報之人一。

交二市人一不レ如レ友二山翁一。謁二朱門一不レ如レ親二白屋一。聽二街談巷語一。不レ如レ聞二樵歌牧詠一。談二今人失德過擧一。不レ如レ述二古人嘉言懿行一。

德者事業之基。未レ有二基不レ固而棟宇堅久者一。

心者後裔之根。未レ有二根不レ植而枝葉榮茂者一。

に施せ。

(一)至つて微小なることに對し爾め　(二)なるべく報いをせざる人に施せ

(一)市人に交るは山翁を友とするに如かず。(二)朱門に謁するは(三)白屋に親しむに如かず。(四)街談巷語を聽くは樵歌牧詠を聞くに如かず。(五)今人の失德過擧を談ずるは、(六)古人の嘉言懿德を述ぶるに如かず。

(一)都會人に交るは田舍老爺を友とするにしかず　(二)權勢ある人の家　(三)貧窮なる家にて貧家をいふ　(四)町中の偽り飾つた談話をきくは樵夫牧童の歌をきくにしかず　(五)今世の人の不德やあやまれる行爲を談ず　(六)よき言美なる德

(一)德は事業の基なり。未だ基固からずして、(二)棟宇の堅久なるものあらず。

(一)德は人の事業の基礎　(二)ムナギの堅く久し

(一)心は後裔の根なり。(二)未だ根植ゑずして、枝葉の榮茂なる者あらず。

(一)己が心は子孫の根本にして子孫の榮榮を圖はば心を正さゞるべからず　(二)其の根を確實に植ゑずして枝葉のさかゆるものあらず

白明。毋三躁急以速二其忿一。人有下操レ之不レ従者上。縦レ之或自化。毋三操切以益二其頑一。

節義傲二青雲一。文章高二白雪一。若不下以二徳性一陶中鎔之上。終爲二血氣之私技能之末一。

謝レ事當レ謝二於正盛之時一。居レ身宜レ居二於獨後之地一。

謹レ徳須レ謹二於至微之事一。施レ

(一)躁急にして以て其忿を速く毋れ。(四)人之を操つて従はざる者あり。(五)之を縦うせば、或は自ら化せん。(六)操ること切にして以て其頑を益すこと毋れ。

(一)物事には急速にして明白にしがたきものあり　(二)ゆつくりとせば或は自然と明白ならん　(三)性急にして人の腹立をまねくなかれ　(四)人に使役命令しても従はざるものあり　(五)気まゝにさせて置けば或は従順に化することあり　(六)使役命令することはげしくして益々頑固にならしむるなかれ

(一)節義青雲に傲り、(二)文章白雪よりも高きも、若し徳性を以て之を(三)陶鎔せざれば、終に(四)血氣の私技能の末と爲る。

(一)節義高きこと有位高官のもの以上にすぐる　(二)文章の高雅なること白雪の曲よりすぐる、白雪は詩詞の高雅なるもの、文選宋玉の對楚王問にあり　(三)鍛錬して作出す　(四)一時の血氣より出でたる私行と技藝の末技

(一)事を謝するは當に正盛の時に謝すべし、(二)身を居くは宜しく獨後の地に居くべし。

(一)世事を辭して隠居するには全盛時代に辭するがよろし　(二)わが身をおくには競爭者無き地におくがよろし

徳を謹しむは須らく(一)至微の事に謹むべし。恩を施すには(二)務めて報ぜざるの人

便是個木人。處處有ㇾ礙。

水不ㇾ波則自定。鑑不ㇾ翳則自明。故心無ㇾ可ㇾ清。去二其混ㇾ之者一而清自現。樂不二必尋一。去二其苦ㇾ之者一而樂自存。

有下一念而犯二鬼神之禁一。一言而傷二天地之和一。一事而釀二子孫之禍一者上。最宜二切戒一。

事有二急ㇾ之不ㇾ白者一。寛ㇾ之或

と同じ　(三) 調和を缺きて到るところに障害あり

(一)水波たゝざれば則ち自ら定まる。(二)鑑は翳らさざれば則ち自ら明かなり。故に(三)心は清す可きなし。(四)其の之を混らす者を去らば、清自ら現れん。(五)樂は必ずしも尋ねず。(六)其の之を苦しむる者を去らば、樂自ら存せん。

(一) 水面に波立たざる時は自然と水定まる　(二) 鏡はくもらすものなければ自然と明かなり　(三) 心はすますべき方法なし　(四) 心を濁すべきものを取去れば自然とすみわたる　(五) 快樂は何も追求せずともよし　(六) 苦痛を與ふるものを去れば快樂自然と存す

(一)一念にして鬼神の禁を犯し、(二)一言にして天地の和を傷り、一事にして子孫の(三)禍を釀す者有り。最も宜しく切に戒むべし。

(一) 僅かの出來心にて鬼神のいましめを犯す　(二) 天地の平和を破る　(三) 災難を惹起す

(一)事之を急にして白かならざるものあり。(二)之を寛にせば或は自ら明かならん。

神萬古如新。功名富貴逐世轉移。而氣節千載一日。君子信不當以彼易此也。

魚網之設。鴻則羅其中。螳螂之貪。雀又乘其後。機裡藏機。變外生變。智巧何足恃哉。

作人無點眞懇念頭。便成個花子。事事皆虛。涉世無段圓活機趣。

貴は世を逐うて轉移す。而して氣節は千載一日なり。君子信に當に彼を以て此に易ふべからず。

㊀ 一生の事業や文章はわが身の亡ぶると共に消滅す ㊁ 精神は萬古にわたりて變ぜず常に新なる如し ㊂ 功名富貴は世と共にうつりゆく ㊃ 志氣節義は千年もなほ一日の如く不變 ㊄ 事業文章功名富貴を以て精神氣節に易ふることなかれ

魚網の設け、鴻は則ち其中に罹る。螳螂の貪り、雀又其後に乘ず。機裡に機を藏し、變外に變を生ず。智巧何ぞ恃むに足らんや。

㊀ 詩經にあり、魚網を設けて魚をねらふ鴻の鳥が之にかゝるは意外の獲物 ㊁ 螳螂が蟲を捕らんとして心を奪はるれば雀は其の背後にうかゞふ、呉越春秋及び說苑に出づ ㊂ キツカケのなかにまたキツカケあり ㊃ 變化以外にまた他の變化を生ず ㊄ 奇智妙巧もたのみがたし

人と作るに點の眞懇念頭なければ、便ち個の花子と成り、事事皆虛なり。世を渉るに段の圓活の機趣なければ、便ち是れ個の木人なり。處處に礙り有り。

㊀ 一點の眞面目の心 ㊁ 一個の乞食となり事々凡て虛なり ㊂ 一片の圓轉活脫なる心のはたらき ㊃ 木偶

醒。羣動未レ起。此吾人初出ニ混沌一處也。乘レ此而一念廻レ光。炯然返照。始知ニ耳目口鼻皆桎梏而情欲嗜好悉機械一矣。

反レ己者觸レ事皆成ニ藥石一。尤レ人者動レ念卽是戈矛。一以闢ニ衆善之路一。一以濬ニ諸惡之源一。相去霄壤矣。

事業文章隨レ身銷毀。而精

念光を廻らし、(六)炯然として返照せば、始めて耳目口鼻は皆桎梏(七)にして、情欲嗜好は悉く機械(八)なることを知る。

(一)燈火はのかにして凡べての物音無し (二)安息休息に入る時 (三)夜あけの夢初めてさめ凡ての活動未だ起らず (四)太古天地未だわかれざる際、夜間睡眠中の無意識状態をいふ (五)此の場合に當つて心中に反省作用を起す (六)明かに照りかへす、卽ち明白に自己を反省す (七)手枷足枷の如く眞性を束縛するもの (八)人を墮落せしむる道具

(一)己に反する者は、(二)事に觸れて皆藥石と成る。(三)人を尤むる者は、(四)念を動せば卽ち是れ戈矛。一は以て(五)衆善の路を闢き、一は以て(六)諸惡の源を濬くす。(七)相去ること霄壤なり。

(一)自分の意に反省するもの (二)事にあたつて皆自分の身のためとなる (三)人の過失を尤むるもの (四)心を動かすときは其の心悉く兵器にして身を傷く (五)多くの善事の生ずべき路をひらく (六)衆惡の本源を深くす (七)天地の區別あり

(一)事業文章は身に隨つて銷毀す。而して(二)精神は萬古新なるが如し。(三)功名富

颺。燠則趨。寒則棄。人情通患也。

君子宜淨拭冷眼。愼勿輕動剛腸。

德隨量進。量由識長。故欲厚其德。不可不弘其量。欲弘其量。不可不大其識。

一燈螢然萬籟無聲。此吾人初入宴寂時也。曉夢初

つ。(五)人情の通患なり。

(一) 貧に饑うる時は人に頼びつく (二) 食に飽けば飛びはねる (三) 富貴ならば其富へはしりおもむく (四) 貧困ならば打棄てゝ顧みず (五) 人情の共通弊害

君子は宜しく冷眼(一)を淨拭すべし。愼んで輕〻しく(二)剛腸を動かすこと勿れ。

(一) 冷靜にして公平無私なる眼をよく拭ひきよむ (二) 人に負けじ魂を輕々しく起すなかれ

(一)德は量に隨つて進み、(二)量は識に由つて長ず。故に其德を厚くせんと欲せば、其量を弘くせざるべからず。其量を弘くせんと欲せば、其識を大にせざるべからず。

(一) 德は度量の大小に連れて進む (二) 度量は見識によつて長ず

(一)一燈螢然として萬籟聲無し。此れ吾人初めて(二)宴寂に入るの時なり。(三)曉夢初めて醒め羣動未だ起らず。此れ吾人初めて(四)混沌を出づるの處なり。(五)此れに乘じて一

盡。則一切好物俱咬破矣。當二與レ人同一レ過。不レ當二與レ人同一レ功。功同則相忌。可三與レ人共二患難一。不レ可三與レ人共二安樂一。安樂則相仇。

士君子貧不レ能レ濟レ物者。遇二人癡迷處一。出二一言一提二醒之一。遇二人急難處一。出二一言一解二救之一。亦是無量功德。

饑則附。飽則

ころを無くす　(四) あらゆる逃路を皆塞ぎつくす　(五) あらゆる必要品を皆喫みやぶらる

(一)當に人と過を同うすべし、(二)當に人と功を同うすべからず。功を同うすれば則ち相忌む。(三)人と患難を共にすべし。人と安樂を共にすべからず。(四)安樂なれば則ち相仇す。

(一) 過失は他人と共に分擔すべし　(二) 功は他人と共に享有すべからず　(三) 他人とは難儀をば共々にすべし　(四) 安樂を共々になし居れば妬みて仇す

(一)士君子貧にして物を濟ふこと能はざる者は、(二)人の癡迷の處に遇へば、(三)一言を出して之を提醒す。人の急難の處に遇へば、一言を出して之を(四)解救す。亦是れ(五)無量の功德。

(一) 貧窮にして物を恵み救ふあたはざるもの　(二) 人が愚にして迷へる場合に遇ふ　(三) 一言出して之を覺醒せさす　(四) 辨解して救ふ　(五) 此の上もなき功德

(一)饑うれば則ち附き、(二)飽けば則ち颺る。(三)煖かなれば則ち趨り、(四)寒ければ則ち棄

惡忌レ陰。善忌レ陽。故惡之顯者。禍淺而隱者。禍深。善之顯者。功小而隱者功大。

德者才之主。才者德之奴。有レ才無レ德。如二家無レ主而奴用レ事矣。幾何不二魍魎而猖狂一。

鋤レ奸杜レ倖。要レ放二他一條去路一。若使二之一無レ所レ容。譬如下塞二鼠穴一者上。一切去路都塞

惡(一)は陰るゝを忌み、善(二)は陽はるゝを忌む。故に惡の顯はるゝ者は禍(三)淺くして隱るゝ者は禍深し。善の顯はるゝ者は功(四)小にして隱るゝ者は功大なり。

(一) 惡は裏面にかくれて表れざるを忌む　(二) 善は表面にあらはるゝを忌む　(三) 惡より生ずる禍小なり　(四) 効果小

德(一)は才の主、才は德の奴。才あつて德なきは、家(二)に主なくして奴事を用ふるが如し。幾(三)何か魍(四)魎して猖(五)狂せざらん。

(一) 身の德は才能を支配すべきもの　(二) 一家に主人なくして奴僕が家事を處理する如し　(三) 如何ぞ惡人の横行して私利私慾を行はざらむ　(四) 怪物、心の不明なるをいふ　(五) 狂人、たけり狂ふ意

奸(一)を鋤き倖を杜ぐは、他の一(二)條の去路を放たんことを要す。若し之をして一(三)も容るゝ所無からしめば、譬へば鼠穴を塞ぐ者の如し。一(四)切の去路都て塞ぎ盡せば、則ち一(五)切の好物倶に咬み破らる。

(一) 奸惡人を除き、君寵を恃みて惡事をなす人を抑制す　(二) 一筋の逃路をあけ置くべし　(三) 少しも入るべきと

骨肉尤狠ニ於
外人ー。此處若
不下當以ニ冷腸一
御以中平氣上。鮮レ
不三日坐ニ煩惱
障中一矣。

せざること鮮からん。

(一)フケサメありて心の變り易きさま (二)嫉妬心 (三)親身のなかゞ他よりも酷し (四)此の間に處するに靜冷の心を以てす (五)制御するに虚心平氣を以てす (六)日々なやみもだえざること少なし、障は障碍の意

功過不レ容ニ少
混一。混則人懷ニ
惰墮之心一。恩
仇不レ可ニ大明一。
明則人起ニ携
貳之志一。

(一)功過は少しも混ず容からず。混ずれば則ち人惰墮(二)の心を懷く。(三)恩仇は大に明かにすべからず。明かにすれば則ち人携貳(四)の志を起す。

(一)功勞と過失 (二)怠惰心を生ず (三)恩と仇とはあまりに明白にすべからず (四)二心を抱きて其の人を捨て去る

爵位不レ宜ニ太
盛一。太盛則危。
能事不レ宜ニ盡
畢一。盡畢則衰。
行誼不レ宜ニ過
高一。過高則謗
興而毀來。

(一)爵位は宜しく太だ盛なるべからず、太だ盛なれば則ち危し。(二)能事は宜しく盡く畢るべからず。盡く畢れば則ち(三)衰ふ。(四)行誼は宜しく過ぎて高かるべからず。過ぎて高ければ則ち(五)謗興りて毀來る。

(一)爵位は度をこえて盛なるはよろしからず (二)己れの得意のことは全部なしをはすべからず (三)能力減殺す (四)平素の行動は高潔に過ぐべからず (五)批謗非難を生ず

到極處。俱是合當如此。著不得一毫感激的念頭。如施者任德。受者懷恩。便是路人。便成市道矣。

有妍必有醜爲之對。我不誇妍誰能醜我。有潔必有汚爲之仇。我不好潔誰能汚我。

炎涼之態。富貴更甚於貧賤。妬忌之心。

に此の如くなるべし。(三)一毫感激的の念頭を著け得ず。(四)如し施す者は德に任じ、(五)受くる者は恩を懷はば、(六)便ち是れ路人、便ち(七)市道と成らん。

(一)兄は弟に對し慈愛をもつ　(二)出來る丈けの所に到達すとも父子兄弟は皆かくの如く慈孝友恭を忘るべからず　(三)これ當然のことと故恩惠に感ずるは心は少しにても有つことならぬ　(四)恩惠を施し與ふる者は德に任じて自慢す　(五)恩惠を受くるものは之をありがたくおもふ　(六)骨肉の親しみなくして路上の人の如し　(七)利害によつて離れ叛く商賈人的態度

(一)妍有れば必ず醜有つて之れが對を爲す。潔有れば必ず汚有つて之が(二)仇を爲す。(三)我れ妍に誇らずんば誰か能く我を醜とせん。(四)我れ潔を好まずんば誰か能く我を汚さん。

(一)美あれば醜ありて相對をなす　(三)自分が己れを美しとして誇らずば何人も自分を醜しとそしらず　(二)相對するものとなる　(四)絶對の立場に立ちて自分が潔白を好み立てせずば何人も吾を汚辱せず

(一)炎涼の態、富貴は更に貧賤より甚し。(二)妬忌の心は(三)骨肉尤も外人より狠し。(四)此處若し當るに冷腸を以てし、(五)御するに平氣以てせざれば、(六)日に煩惱障の中に坐

私情。

善人未能急親。不宜預揚。恐來讒譖之奸。惡人未能輕去。不宜先發。恐招媒孽之禍。

青天白日的節義。自暗室屋漏中培來。旋乾轉坤的經綸。自臨深履薄處操出。

父慈子孝。兄友弟恭。縱做

するなかれ ㈢ 些少の恩惠を施すことにひかされて大體の正義を傷つくるなかれ ㈣ 公論正議を借り來つて自分勝手の欲望を滿足せしむるなかれ

善人未だ急に親むこと能はざれば、宜しく預め揚ぐべからず。恐らくは讒譖の奸を來さん。惡人未だ輕〻しく去る能はざれば、宜しく先づ發すべからず。恐らくは媒孽の禍を招かん。

㈠ 急に仲よく交際すること能はず ㈡ 前以て賞揚すべからず ㈢ 人を讒言する惡事を生ぜん

青天白日的の節義は、暗室屋漏の中より培ひ來る。旋乾轉坤的の經綸は、臨深履薄の處より操り出す。

㈠ 青天白日の如き公明なる節義は人の見ざるところの行を愼むより修養す ㈡ 暗き室と家の西南隅、詩經の君子は尙屋漏に愧ぢずよりとる ㈢ 天地を旋轉せしむるほどの大經綸は平生戰々兢々としておそれ愼むところより出で來る ㈣ 詩經小雅小旻に、戰々兢々として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如しとあるよりとる

父は慈、子は孝、兄は友、弟は恭、縱ひ極處に做し到るも、倶に是れ合に當

使㆘民無㆓怨咨㆒物無㆗氛疹㆖。亦是敦睦的氣象。

害㆑人之心不㆑可㆑有。防㆑人之心不㆑可㆑無。此戒㆑疎㆓於慮㆒也。寧受㆓人之欺㆒毋㆑逆㆓人之詐㆒。此警㆑傷㆓於察㆒也。二語並存。精明而渾厚矣。

毋㆘因㆓羣疑㆒而阻㆗獨見㆖。毋㆘任㆓己意㆒而廢㆗人言㆖。毋㆘私㆓小惠㆒而傷㆗大體㆖。毋㆘借㆓公論㆒以快㆗

陽を整へをさむる修養、即ち天地を經理する方法　(五) 怨みなげく　(六) 萬物をして傷み惡ふることなからしむ　(七) 敦厚和睦の氣象、即ち父母に仕ふる場合の氣象

人を害するの心は有るべからず。(一)人を防ぐの心は無かるべからず。此れ(二)慮に疎きを戒むるなり。寧ろ人の欺きを受くるも、(三)人の詐を逆ふる毋れ。此れ(四)察に傷るゝを警むるなり。(五)二語並び存せば、(六)精明にして渾厚ならん。

(一) 人の己れを犯すを防ぐ用意はあるべし　(二) 思慮うときを警戒す　(三) 人の詐り謀ふを前以て見破る　(四) 推察臆測に過ぐ　(五) 上の二語とも心に存す　(六) 理に明かにして人格てあつし

(一)羣疑に因て獨見を阻むること毋れ。(二)己の意に任せて人言を廢すること毋れ。(三)小惠を私して大體を傷ること毋れ。(四)公論を借りて以て私情を快くすること毋れ。

(一) 多數の人が疑ひ反對するために自分の信ずる見解をくじくなかれ　(二) 自分の我意にまかせて人の言論を否定

覺二人之詐一不レ形二於言一。受二人之侮一不レ動二於色一。此中有二無窮意味一。亦有二無窮受用一。

横逆困窮是煆二煉豪傑一的一副鑪錘。能受二其煆煉一。則身心交益。不レ受二其煆煉一。則身心交損。

吾身一小天地也。使二喜怒不レ愆。好惡有レ則。便是燮理的功夫。天地一大父母也。

人の詐を覺つて言に形さず(一)。人の侮を受けて色に動かさず(二)。此中に無窮の意味あり(三)。亦無窮の受用あり(四)。

(一)心に知るも言葉に出さず　(二)無念の感じを顔色にあらはさず　(三)千萬無量の味あり　(四)無限のはたらきあり

横逆困窮(一)は是れ豪傑を煆煉(二)する的の一副の鑪錘(三)なり。能く其煆煉を受くれば則ち身心交〻益す(四)、其煆煉を受けざれば則ち身心交〻損す。

(一)逆境と困窮　(二)錬りきたへる　(三)一個の金屬を溶かし鍛へる器具　(四)身體精神どちらも益す

吾が身は一小天地(一)なり。喜怒をして愆らず(二)、好惡をして則有らしめば(三)、則ち是れ燮理的(四)の功夫なり。天地は一大父母なり。民をして怨咨無く(五)、物をして氛疹な(六)からしめば、亦是れ敦睦的(七)の氣象なり。

(一)吾が身一の小なる天地　(二)喜ぶべきに喜び怒るべきに怒る　(三)好きときらひに一定のきまりあり　(四)陰

霽日青天。倏變爲迅雷震電。疾風怒雨。倏轉爲朗月晴空。氣機何常。一毫凝滯。太虛何常。一毫障塞人心之體亦當如是。

勝私制欲之功有曰識不早力不易者。有曰識得破忍不過者。蓋識是一顆照魔的明珠。力是一把斬魔的慧劍。兩不可少也。

(一)霽日青天も倏ち變じて迅雷震電と爲り、(二)疾風怒雨も倏ち轉じて朗月晴空と爲る。(三)氣機何ぞ常あらん。(四)一毫の凝滯、(五)太虛何ぞ常あらん。(六)一毫の障塞、(七)人心の體も亦當に是の如くなるべし。

(一) 青天白日も忽ち變じて雷鳴はげしく電光閃く　(二) 暴風猛雨も忽ち變じて月はほがらかに空晴る　(三) 天地の作用は一定せず　(四) 僅かの障碍にて天變を生ず　(五) 大空は一定せず　(六) 僅かの障碍にて心に變化を生ず　(七) 人間の心の本體も此の通りに一定することなし

(一)私に勝ち欲を制するの功は、(二)識ること早からざれば力易からずと曰ふ者あり。(三)識り得て破るも忍過ぎずと曰ふ者有り、蓋し(四)識は是れ一顆照魔的の明珠。力は是れ(五)一把斬魔的の慧劍、兩ながら少くべからず。

(一) 私慾に打ちかち欲望を抑制するしごと　(二) 情欲を認むること早からねば克制の力骨折る　(三) 認めて看破るも忍耐力足らず　(四) 理性は是れ一個の惡魔の正體を照し出す所の明珠　(五) 一個の惡魔を斬殺す所のすぐれて切味よき劍

以短攻短。人有頑的要善爲化誨。如然而疾之。是以頑濟頑。

遇沈沈不語之士且莫輸心。見悻悻自好之人應須防口。

念頭昏散處。要知提醒。念頭喫緊時要知放下。不然恐去昏昏之病。又來憧憧之擾矣。

ば、是れ(五)頑を以て頑を濟さしむものなり。

(一)人の短所はまんべんに取りつくらふを要す (二)人の短所をあばき立てゝ指摘す (三)人の短所を折くと云ふは自分の短所を以て人の短所を責むるなり (四)人に頑迷なることあらばよく教化訓誨なすべし (五)己れの頑迷をもつて他の頑迷を助長す

(一)沈沈不語の士は遇はば、(二)且く心を輸す莫かれ。(三)悻悻自ら好するの人を見ば、應に(四)須く口を防ぐべし。

(一)沈默して語らざる人 (二)さしあたり心中を打ちあくるな (三)頑迷直情して自ら喜ぶ人 (四)無駄口たたくを要心すべし

(一)念頭昏散の處は提醒を知らんことを要す。(二)念頭喫緊の時は放下を知らんことを要す。然らずんば恐くは(三)昏昏の病を去つて、又(四)憧憧の擾を來さん。

(一)精神ふさぎ沈みて散漫なる時には如何にして覺醒すべきかを知らんことを要す (二)精神引きしまりたる時には如何にして弛め放つべきかを知らんことを要す (三)ふさぎ込む病 (四)心散漫する亂れ

當怒火慾水正騰沸處。明明知得。又明明犯著。知的是誰。犯的又是誰。此處能猛然轉念。邪魔便爲眞君矣。

(一)怒火慾水正に騰沸の處に當り、(二)明明に知得し、又(三)明明に犯著す。(四)知る的は是れ誰ぞ、犯す的は又是れ誰ぞ。(五)此處猛然として念を轉ぜば、(六)邪魔便ち眞君と爲らん。

(一) 瞋怒の火が燃えあがり情慾の水が沸き立つ場合　(二) 明白に其の恐るべきを知る　(三) 明白に其れを抑制す　(四) 知るものは何者ぞ　(五) 此の場合勇をふるつて心機一轉する　(六) 情慾瞋怒の如き障碍變じて心の本體となる

毋偏信而爲奸所欺。毋自任而爲氣所使。毋以己之長而形人之短。毋因己之拙而忌人之能。

(一)偏信して奸に欺むかるゝこと毋かれ。(二)自任して氣に使はるゝこと毋かれ。(三)己の長を以て、人の短を形すこと毋かれ。(四)己の拙に因て、人の能を忌むこと毋かれ。

(一) かたより信じて奸智の輩に欺かるゝな　(二) 自負自任してハヤリ氣に左右せらるゝな　(三) 自分の長所をあげ他人の短所をあらはすな　(四) 自分の無能によつて人の有能を忌みきらふな

人之短處。要曲爲彌縫。如暴而揚之。是

人の短處は(一)曲に彌縫を爲すを要す。如し(二)暴いて之を揚ぐれば、是れ(三)短を以て短を攻むるなり。(四)人頑有る的は善く化誨を爲すを要す。如し忿りて之を疾ま

之濁一。以レ屈爲レ伸。眞涉レ世之一壺。藏レ身之三窟也。

衰颯的景象。就在二盛滿中一。發生的機緘。卽在二零落內一。故君子居レ安。宜下操二一心一以慮上患。處レ變當下堅二百忍一以圖上成。

驚レ奇喜レ異者。無二遠大之識一。苦節獨行者。非二恆久之操一。

涉るの一壺、身を藏すの三窟なり。(六)

(一)無能をよそほうて能をかくす　(二)暗愚を裝ふを以て賢明となす　(三)潔白を汚穢の中に寄す　(四)失意に屈するを以て得意に伸ぶるとす　(五)まつたく世渡りの頼り、鶡冠子の、中流舟を失へば一壺も千金と云ふ句より取る　(六)身をかくす避難所、戰國策に、狡兎に三窟あり、僅に其の死を免るとあり

(一)衰颯的の景象は、就ち盛滿の中に在り、(二)發生的の機緘は卽ち零落の內に在り、故に君子安きに居ては(三)宜しく(四)一心を操つて以て患を慮るべし。(五)變に處しては當に(六)百忍を堅うして以て成るを圖るべし。

(一)衰弱のきざしは全盛の中に在り　(二)發達進歩のキツカケは困難窮迫の內にあり　(三)安樂の境遇にある　(四)一心を堅く守つて萬一の患を用心すべし　(五)變事に際す　(六)張公藝九世同居し一家和睦す、唐の高宗其の故を問ひしに、百忍字を書して奉る

(一)奇に驚き異を喜ぶ者は(二)遠大の識なく、(三)苦節獨行の者は(四)恆久の操にあらず。

(一)奇妙のことに驚嘆し普通ならぬものを喜ぶ　(二)遠くして大なる見識なし　(三)節を守り超然して獨り行ふもの　(四)永久に行つて眞なる操行ならず

處二父兄骨肉之變一。宜二從容一。不レ宜二激烈一。遇二朋友交遊之失一。宜二剴切一。不レ宜二優游一。

小處不二滲漏一。暗中不二欺隱一。末路不二怠荒一。纔是個眞正英雄。

千金難レ結二一時之歡一。一飯竟致二終身之感一。蓋愛重反爲レ仇。薄極翻成レ喜也。

藏二巧於拙一。用レ晦而明。寓二淸

(一)父兄骨肉の變に處しては宜しく(二)從容なるべし、宜しく(三)激烈なるべからず。(四)朋友交遊の失に遇ひては、宜しく(五)剴切なるべし、宜しく(六)優游なるべからず。

㊀親兄弟の變事　㊁落ちついてゐるがよろし　㊂烈しかるべからず　㊃知己朋友の過失　㊄之を忠告するに痛切なるべし　㊅ぐずぐずしてゐてはならぬ

(一)小處滲漏せず、(二)暗中欺隱せず、(三)末路怠荒せず。纔に是れ個の眞正の英雄なり。

㊀小事件も投げやりにせず　㊁人知らぬところにてもゴマカシかくさず　㊂失敗しても自棄して荒み放らず

(一)千金も一時の歡を結び難く、一飯竟に終身の感を致す。(二)蓋し愛重ければ反つて仇と爲り。(三)薄極れば翻て喜を成す。

㊀千金の多きも僅か一時のよしみを結びがたし　㊁一度の飯もつひには一生涯人をして恩を感ぜしむ　㊂愛情もシツコク重なると反つて仇となる　㊃恩惠も極めて薄き時反つて人に喜ばる

(一)巧を拙に藏し、(二)晦を用て明とし、(三)淸を濁に寓せ、(四)屈を以て伸と爲す。(五)眞に世を

市二私恩一不レ如レ扶二公議一。結二新知一不レ如レ敦二舊好一。立二榮名一不レ如レ種二隱德一。尙二奇節一不レ如レ謹二庸行一。

私恩（一）を市るは公議（二）を扶くるに如かず、新知（三）を結ぶは舊好（四）を敦くするに如かず、榮名を立つるは隱德（五）を種るに如かず、奇節（六）を尙ぶは庸行（七）を謹むに如かず。

（一）個人としての恩をかける　（二）社會の利益を增す　（三）新なる知人を作る　（四）古き友人とのよしみを厚くす　（五）人知らぬ德を施す　（六）突飛なる節義をたつとぶ　（七）普通の行爲をつゝしむ

公平正論不レ可レ犯レ手。一犯則貽二羞萬世一。權門私竇不レ可レ著レ脚。一著則點二汚終身一。

公平正論（一）は手を犯すべからず、一たび犯せば則ち羞を萬世に貽す。權門私竇（二）は脚を著く（三）可からず、一たび著くれば則ち終身（四）を點汚す。

（一）公平なる正論には私情をはさんで手をつけ犯すべからず　（二）權勢ある家、私利を營む徒の家　（三）足ぶみすべからず　（四）一生涯のけがれとなる

曲レ意而使二人喜一。不レ若三直レ躬而使二人忌一。無レ善而致二人譽一。不レ若三無レ惡而致二人毀一。

意を曲げて（一）人をして喜ばしむるは、躬を直くして（二）人をして忌ましむるに若かず。善無くして（三）人の譽を致すは、惡無くして（四）人の毀を致すに若かず。

（一）己が本意を曲げて人を喜ばす　（二）己が身を眞直にして人に忌み嫌はるゝ方がよろし　（三）善事なくして人に譽めらる　（四）惡事なくして人にそしらるゝがよろし

此日最易過。幸生其間者。不可不知有生之樂。亦不可不懷虛生之憂。

生の憂を懷はざるべからず。

(一)天地には萬古の歳月あれども此の身は二度と得られず　(二)今日といふ日は最も過ぎやすし　(三)此の世に生れし樂　(四)空しく生くる憂へ

怨因德彰。故使人德我。不若德怨之兩忘。仇因恩立。故使人知恩。不若恩仇之俱泯。

(一)怨は德に因つて彰る。故に人をして我を德とせしむるは、(二)德怨兩つながら忘るゝに若かず。(三)仇は恩に因つて立つ。故に人をして恩を知らしむるは、(四)恩仇の俱に泯ぶるに若かず。

(一)怨みは德と對立して彰はるゝものにて、一方がありがたいといへば一方は怨む　(二)恩德も怨恨も双方とも忘れてしまふにしかず　(三)仇讐の念は恩惠あるがために成立するもの　(四)恩も仇も一緒に無くなるにしかず

老來疾病都是壯時招的。衰後罪孽都是盛時作的。故持盈履滿。君子尤兢兢焉。

(一)老來の疾病は、都て是れ壯時に招く的なり。(二)衰後の罪孽は、都て是れ盛時に作す的なり。故に(三)盈を持し滿を履むは、君子尤も(四)兢兢たり。

(一)老年になつてからの病氣は壯年時代に招きしものなり　(二)衰微零落せし後の罪惡は是れ得意時代になせしもの　(三)十分に思ふ存分ふるまふ　(四)畏れつゝしむ

之媒。五分便無レ悔。

不レ責二人小過一。不レ發二人陰私一。不レ念二人舊惡一。三者可二以養一レ德。亦可二以遠一レ害。

士君子持レ身不レ可レ輕。輕則物能撓レ我。而無二悠閒鎭定之趣一。用レ意不レ可レ重。重則我爲レ物泥。而無二瀟洒活潑機一。

天地有二萬古一。此身不二再得一。人生只百年。

(五) 身をやぶり德を失ふ媒介

人の小過を責めず、人の(一)陰私を發かず、人の(二)舊惡を念はず。三つの者以て德を養ふべく、亦以て(三)害に遠かるべし。

(一) かくし事をあばき立てず (二) 古き惡事を根にもたず (三) 禍害を免れ得べし

(一)士君子身を持するには輕くすべからず、輕ければ則ち(二)物能く我を撓まして(三)悠閒鎭定の趣無し。(四)意を用ふるには重くす可からず、重ければ則ち我れ(五)物の爲に泥められて、瀟洒活潑の機無し。

(一) 一身を處するには輕々しくすべからず (二) 外物のために我支配せらる (三) 精神のゆつくりとして物靜かなる様になし (四) むづかひは重くるしくすべからず (五) 外物のために拘はれてサラリと生き〱したるはたらきなし

(一)天地に萬古あるも此身は再び得られず。人生は只百年なるも、(二)此日最も過ぎ易し。幸に其間に生るゝ者は、(三)有生の樂あるを知らざるべからず。亦(四)虛

品做ニ到極處ー。無ㇾ有ニ他異ー。只是本然。

以ニ幻迹ー言。無ㇾ論ニ功名富貴ー。卽肢體亦屬ニ委形ー。以ニ眞境ー言。無ㇾ論ニ父母兄弟ー卽萬物皆吾一體。人能看得破認得眞、纔可ㇾ任ニ天下之負擔ー。亦可ㇾ脫ニ世間之韁鎖ー。

爽口之味皆爛腸腐骨之藥。五分便無ㇾ殃。快心之事悉敗身喪德

㈠ 至極の妙處に到達すれば別にかはつたことなし　㈡ 只々安當の一點のみ　㈢ 人間の品格　㈣ 本來自然のまゝ

幻迹を以て言へば功名富貴を論ずるなく、卽ち肢體も亦委形に屬す。眞境を以て言へば父母兄弟を論ずる無く、卽ち萬物皆吾が一體なり。人能く看得て破り、認得して眞ならば、纔に天下の負擔に任ふ可く、亦世間の韁鎖を脫す可し。

㈠ 一切萬物を假現と見る現象界の形　㈡ 功名富貴は無論のこと　㈢ わが五體までも假に預りたる形體　㈣ 實在界に於ける絕對的の本體　㈤ 人此の道理を觀破し得眞に認識會得したならば　㈥ 始めて天下の大任務を引受け得　㈦ 世間の束縛から脫するを得

爽口の味は皆爛腸腐骨の藥なり。五分ならば便ち殃無し。快心の事は悉く敗身喪德の媒なり。五分ならば便ち悔無し。

㈠ 口にうまき食物　㈡ 腸をたゞらし骨を腐らす藥　㈢ 五分通りになし置かば害なし　㈣ 心に愉快なる事

猛火。權勢似二烈焰一。若不レ帶二些淸冷氣味一。其火焰不レ至レ焚レ人。必將二自爍一矣。

人心一眞。便霜可レ飛。城可レ隕。金石可レ貫。若二僞妄之人一。形骸徒具。眞宰已亡。對レ人則面目可レ憎。獨居則形影自媿。

文章做二到極處一。無レ有二他奇一。只是恰好。人

淸冷の氣味を帶びざれば、其火焰(五)人を焚くに至らざれば、必ず自ら爍かれんとす。

(一)富貴の境遇に生長するもの (二)欲望は猛火の如し (三)烈しくもえ上る火炎に似る (四)幾分かの淸冷淡泊なる氣象 (五)嗜欲權勢他人を害するほどにならざれば必ず自身を害せん

(一)人心の一眞、便ち霜(二)飛ばすべく、城(三)隕すべく、金石貫くべし。(四)僞妄(五)の人の若きは、(六)形骸徒らに具はるも、眞宰(七)已に亡ぶ。(八)人に對すれば則ち面目憎むべく、獨居(九)すれば則ち形影自ら媿づ。

(一)人間の心の眞實性 (二)鄒衍燕王に事へて忠を盡す、冤を以て獄に繫がれ、天を仰いで哭すれば五月天霜を下す (三)杞梁の妻の故事、杞植戰死し其の妻長哭すれば杞の都城之に感じて頽る、梁は植の字 (四)金石の堅きも貫き通す (五)虛僞の人 (六)身體は徒にそろひ居る (七)精神もはやなし (八)人に對面すれば其の姿厭はし (九)一人居れば身體自ら精神を失ひて醜怪なるに愧づ

文章極處(一)に做し到つて、他奇あることなし、只是れ(二)恰好。人品(三)極處に做し到つて、他異有ることなし、只是れ本然(四)。

人情。

澹泊之士必爲濃艷者所疑、檢飾之人多爲放肆者所忌。君子處此固不可少變其操履。亦不可太露其鋒芒。

(一)澹泊の士は必ず濃艷(二)の者に疑はれ、(三)檢飾の人は多く放肆(四)の者に忌まる。君子(五)此に處して固より少しも其操履(六)を變ずべからず。亦太だ其鋒芒(七)を露すべからず。

(一)淡泊にしてアツサリした人　(二)多慾にしてシツコキ人　(三)つゝしみ深き人　(四)とりしまりの無き人　(五)此の間に處す　(六)操るところ履むところの主義　(七)心のカドを外部に出すなかれ

居逆境中。周身皆鍼砭藥石。砥節礪行、而不覺。處順境内。萬前盡兵刃戈矛。銷膏靡骨而不知。

(一)逆境の中に居れば、(二)周身皆鍼砭藥石(三)、節(四)を砥ぎ行を礪いて覺えず。(五)順境の内に處れば、萬前(六)盡く兵刃戈矛、(七)膏を銷し骨を靡(八)して知らず。

(一)失意の境遇　(二)身のまはり　(三)金針、石針、藥劑、砭石の如く身のためになるもの　(四)節義行爲を砥ぎみがきながら自分は知らず　(五)得意の境遇　(六)眼前に在るもの　(七)太刀や矛の如く危險なるもの　(八)骨をけづられて知らず

生長富貴叢中的嗜欲如

(一)富貴叢中に生長する的(二)の嗜欲は猛火の如く、權勢は(三)烈焰に似たり。若し(四)些の

肆レ惡。君子而改レ節、不レ及二小人之自新一。

改むるは、小人の自ら新にするに及ばず。

㈠僞善　㈡憚らず惡事をはたらく　㈢節義を變改す　㈣われと吾が心を改む

家人有レ過。不レ宜二暴怒一。不レ宜二輕棄一。此事難レ言。借二他事一隱諷レ之。今日不レ悟。俟二來日一再警レ之。如二春風解レ凍。如二和氣消レ氷。纔是家庭的型範。

家人過有らば宜しく暴怒すべからず、宜しく輕棄すべからず。此事言ひ難くば、他の事を借つて隱に之を諷せよ。今日悟らずんば、來日を俟つて再び之を警めよ。春風の凍を解くが如く、和氣の氷を消すが如し。纔に是れ家庭的の型範なり。

㈠荒々しく怒りたつ　㈡輕々しく放任す　㈢それとなく遠廻しに忠告す　㈣忠告のしかたは春風が地の凍れるをとかす如くす　㈤温暖の氣の氷をとかす如くす　㈥家庭の模範

此心常看得圓滿。天下自無二缺陷之世界一。此心常放得寬平。天下自無二險側之

此心常に看得て圓滿ならば、天下自ら缺陷の世界なし。此心常に放ち得て寬平ならば、天下自ら險側の人情無し。

㈠此の心だに反省して見て圓滿ならば天下隨つて不滿足の世界なし　㈡動かすこと寬大和平　㈢陰險なる人情なし

只看二後半截一。眞名言也。

人白髮の老人になりて操を破る　㈢半生の清き苦節皆無効　㈣後の半生を觀察せよ

平民肯種レ德施レ惠、便是無位的公相。士夫徒貪レ權市レ寵、竟成二有爵的乞人一。

平民肯て德を種ゑ惠を施さば、便ち是れ無位的の公相。士夫徒らに權を貪り寵を市らば、竟に有爵的の乞人と成る。

㈠無位無官の平民　㈡恩德を施し人を惠む　㈢位無き公卿宰相　㈣庶人の上に立つ有位者　㈤權勢を貪り恩寵を人に賣りつける　㈥有位の乞食

問二祖宗之德澤一、吾身所レ享者是。當レ念二其積累之難一。問二子孫之福祉一、吾身所レ貽者是。要レ思二其傾覆之易一。

祖宗の德澤を問はば、吾が身享くる所の者是なり。當に其積累の難きを念ふべし。子孫の福祉を問はば、吾が身貽す所の者是なり。其傾覆の易きを思ふことを要す。

㈠先祖の恩德惠澤は如何と問ふ　㈡吾が身の現在享け居る幸福が是なり　㈢祖宗が難くして恩澤を積みかさねしことの困難　㈣子孫の幸福　㈤吾が身後にのこす所のもの　㈥滅びやすきことの容易なるを思ふべし

君子而詐レ善、無レ異二小人之

君子にして善を詐るは、小人の惡を肆にするに異なる無し。君子にして節を

阨レ我以レ遇。吾亨二吾道一以通レ之。天且奈レ我何哉。

貞士無二心徼一レ福。天即就二無心處一闢二其衷一。儉人著二意避一レ禍。天即就二著意中一奪二其魄一。可レ見天之機權最神。人之智巧何益。

聲妓晩景從レ良。一世之胭花無レ碍。貞婦白頭失レ守。半生之清苦倶非。語云看レ人

㊀天が自分の福禄をうすくす ㊁吾が德を益々積みて天命に對す ㊂天自分の身體を勞苦せしむ ㊃吾が心を樂しませて身體の勞苦を補ふ ㊄吾を窮阨するに境遇を以てす ㊅吾が行ふ道を徹底せしめて天命を解決す

(一)貞士は心に福を徼むること無し。天は即ち(二)無心の處に就いて其衷を闢く。(三)儉人は(四)意を禍を避くるに著く。天は即ち(五)著意の中に就いて其魄を奪ふ。見るべし(六)天の機權は最も神にして人の智巧は何ぞ益あらん。

㊀忠貞なる人は心中幸福をしひて求めず ㊁求むる心無きところに來つて其の人の中心を開き滿足を與ふ ㊂奸邪陰險の人 ㊃禍を避くることのみに注意す ㊄注意してゐるところに來つて其の魂を奪ひ不安を與ふ ㊅天の機轉權謀は最も不可思議

(一)聲妓晩景に良に從へば、一世の(二)胭花碍りなし。(三)貞婦白頭に守を失へば、(四)半生の清苦倶に非なり。語に云く、人を看るには只(五)後半截を看よと。眞に名言なり。

㊀遊女晩年になりて結婚し良人に從ふ ㊁一生の淫靡なる生活もさはりとならず、胭花は白粉 ㊂貞節の婦

來。纔是性天之眞境。樂處樂非二眞樂一。苦中樂得來。纔見二心體之眞機一。

舍レ己毋レ處二其疑一。處二其疑一即所レ舍之志多愧矣。施レ人毋レ責二其報一。責二其報一。併二所レ舍之心一俱非矣。

天薄レ我以レ福。吾厚二吾德一以迓レ之。天勞レ我以レ形。吾逸二吾心一以補レ之。天

(四)樂處の樂は眞の樂にあらず。(五)苦中に樂を得來つて纔に(六)心體の眞機を見る。

㊀精神の靜かなる場合の靜　㊁活動の場合に靜を得　㊂始めて是れ本具天性の眞用、心を一個の宇宙とすれば性は天に當る　㊃安樂なる場合の安樂　㊄困苦の場合に安樂を得　㊅精神の眞作用

(一)己を舍ては其(二)疑を處すること毋れ。其疑を處すれば即ち(三)舍つる所の志多く愧づ。人に施しては(四)其報を責ること毋れ。其報を責むれば(五)舍つる所の心を併せて俱に非なり。

㊀自己を捨て、獻身的につくす　㊁自己の利益なるや否やの疑問を解決する勿れ　㊂多く名を得んためにして獻身的の精神も心に愧づべきこと多し　㊃施しの報いを求むるなかれ　㊄最初與へし自讃と共に何れも不可なり

(一)天我を薄くするに福を以てせば、(二)吾れ吾が德を厚くして以て之を迓へ、天我を(三)勞するに形を以てせば、(四)吾れ吾が心を逸して以て之を補ひ、(五)天我を阨するに遇を以てせば、(六)吾れ吾が道を亨らしめて以て之を通ぜば、天も且我を奈何せんや。

覺向欲路上去。便挽從理路上來。一起便覺。一覺便轉。此是轉禍爲福。起死回生的關頭。切莫輕易放過。

せ。(四)一たび起つて便ち覺り、一たび覺つて(五)便ち轉ず。此れは是れ禍を轉じて福となし、(六)死を起して生を回す的の關頭なり。(七)切に輕易に放過すること莫かれ。

(一)心中に起る考へ　(二)私欲の方へ向つて動く　(三)引戻して道理の方へ向くべし　(四)私欲一度起りてすぐ悟る　(五)直ぐ道理の方に向ける　(六)死者を起たし蘇生しむる分岐點　(七)必ず輕々しく放任することなかれ

靜中念慮澄徹。見心之眞體。閒中氣象從容。識心之眞機。淡中意趣冲夷。得心之眞味。觀心證道。無如此三者。

(一)靜中の念慮澄徹なれば、心の眞體を見る。(二)閒中の氣象從容なれば、(三)心の眞機を識る。(四)淡中の意趣冲夷なれば、心の眞味を得。(五)心を觀、道を證るは此の三者に如くはなし。

(一)靜かなる時の精神澄みわたる　(二)閒暇無事の氣象がおちつく　(三)心の眞作用　(四)淡然無欲の時の心の赴くところアツサリと平か　(五)精神を直視觀察し道を自得す

靜中靜非眞靜。動處靜得

(一)靜中の靜は眞の靜にあらず、(二)動處に靜を得來つて(三)纔に是れ性天の眞境なり。

矯。是謂二蜜餞不レ甜。海味不レ鹹、纔是懿德。

貧家淨拂レ地。貧女淨梳レ頭。景色雖レ不二艷麗一、氣度自是風雅。士君子一當二窮愁寥落一、奈何輙自廢弛哉。

閑中不二放過一。忙處有二受用一。靜中不二落空一。動處有二受用一。暗中不二欺隱一。明處有二受用一。

念頭起處、纔

㊀清廉なれど固陋ならずして包容し得るあり　㊁仁慈あれど優柔に流れずしてよく決斷し得ることあり　㊂明敏なれど邪推とならず　㊃正直はイツコクに過ぎず　㊄蜜にて味つけし食物必ずしも甘過ぎず　㊅海産物必ずしも鹽辛くなし　㊆過不及なき美德

貧家も淨く地を拂ひ、貧女も淨く頭を梳れば、景色艷麗ならずと雖も、氣度自ら是れ風雅なり。士君子一たび窮愁寥落に當つて、奈何ぞ輙ち自ら廢弛せんや。

㊀きれいに地上を掃く　㊁貧乏人の女　㊂髪うるはし　㊃氣色何となく風雅にて見るにたふ　㊄困窮しておちぶれる　㊅たやすく自暴自棄すべからず

閑中に放過せざれば、忙處に受用あり。靜中に落空せざれば、動處に受用あり。暗中に欺隱せざれば、明處に受用あり。

㊀閑暇の際　㊁ぼんやりしてゐる　㊂多忙の時　㊃他に應ずるはたらき　㊄靜かなる時　㊅空寂虚心にてウハノソラ　㊆活動する時　㊇暗い處にてゴマカシ隱す

念頭起る處纔に欲路上に向つて去るを覺らば、便ち挽いて理路上より來た

氣象要高曠。而不可疎狂。心思要縝密。而不可瑣屑。趣味要冲淡。而不可偏枯。操守要嚴明。而不可激烈。

氣象は(一)高曠を要す、而も(二)疎狂なる可からず。(三)心思は縝密なるを要す、而も(四)瑣屑なるべからず。趣味は(五)冲淡なるを要す、而も(六)偏枯なる可からず。(七)操守は嚴明なるを要す、而も激烈なる可からず。

(一)高尚にて事物に拘泥せず (二)粗大豪放にてやりつぱなし (三)考へは綿密なるべし (四)周密に過ぎてこせこせす (五)淡泊 (六)偏屈冷淡 (七)主義は嚴格明瞭なるべし

風來疎竹。風過而竹不留聲。雁度寒潭。雁去而潭不留影。故君子事來而心始現。事去而心隨空。

(一)風疎竹に來る、(二)風過ぎて竹聲を留めず。(三)雁寒潭を度る、雁去りて潭影を留めず。故に君子は(四)事來りて心始めて現れ、(五)事去りて心隨つて空し。

(一)まばらに生へたる竹 (二)風吹過ぐれば竹の鳴る音やむ (三)寒き川淵 (四)事起つて心の働き現る (五)事終れば心もそれにつれて空虚となる

清能有容。仁能善斷。明不傷察。直不過

(一)清能く容るゝことあり、(二)仁能く斷を善くす。(三)明は察を傷らず、(四)直は矯に過ぎず。是を(五)蜜餞甜からず、(六)海味鹹ならずと謂ふ。纔に是れ(七)懿徳なり。

變レ恩爲レ慘。染レ潔爲レ汚。壞二了一生人品一。故古人以レ不レ貪爲レ寶。所三以度二越一世一。

耳目見聞爲二外賊一。情欲意識爲二内賊一。只是主人翁惺惺不昧。獨二坐中堂一。賊便化爲二家人一矣。

圖二未レ就之功一。不レ如レ保二已成之業一。悔二既往之失一。不レ如レ防二將來之非一。

ざるを以て寶となす、(七)一世に度越する所以なり。

㈠心が貪欲　㈡剛毅の心なくなりて柔弱になる　㈢智識が塞がつて暗愚となる　㈣情愛が變じて慘酷となる　㈤高潔がよごれて汚らはしくなる　㈥自分一生の人格をこはす　㈦これ古人が一世にすぐれてえらき理由

(一)耳目見聞は外賊たり。(二)情欲意識は内賊たり。只是れ(三)主人翁(四)惺々不昧にして、(五)中堂に獨坐せば、(六)賊便ち化して家人とならん。

㈠目に見耳に聞く感覺は外部の盗賊の如く人の本性をみだすもの　㈡愛欲追求する觀念は内部の賊　㈢天然本具の眞性　㈣明瞭にして暗からず　㈤中座敷に坐す、卽ち本具の眞性が精神作用の中樞に位するをいふ　㈥内外兩面の賊も化して家人となり本性を助くるならん

(一)未だ就らざるの功を圖るは、(二)已に成るの業を保つに如かず。既往の失を悔ゆるは(三)將來の非を防に如かず。

㈠まだ成りたゝざる事業を計畫す　㈡もはや成就せる事業を保ち續けるがまし　㈢以後の過失を豫防するがまし

者常無レ魚。故
君子當レ存二含レ
垢納レ汚之量一。
不レ可レ持二好レ潔
獨行之操一。

泛駕之馬可レ
就二驅馳一。躍冶
之金。終歸二型
範一。只一優游
不レ振。便終身
無二個進步一。白
沙云。爲レ人多
病未レ足レ羞。一
生無レ病是吾
憂。眞確論也。

人只一念貪
私便銷レ剛爲レ
柔。塞レ智爲レ昏。

(二)垢を含み、(三)汚を納るゝの量を存すべし、潔を好み、(四)獨り行くの操を持す可からず。

(一) 土地のよごれきたなき處には多く物が生へる (二) 恥辱を忍ぶ (三) 汚れたるものを受け入るゝ度量を有すべし (四) 孤立獨行の主義をもつべからず

(一)泛駕の馬は驅馳に就く可く、(二)躍冶の金は終に(三)型範に歸す。只一(四)優游して振はざれば、便ち(五)終身個の進步なし。(六)白沙云く、人と爲つて多病なるは、未だ羞づるに足らず、(七)一生病なきは是れ吾が憂なりと。眞に確論なり。

(一) 車を覆す如き悍馬も人のために驅馳の任につく (二) 鑄物師の鑄鍋より飛出る如き金 (三) 鑄型にはいる (四) ぶら〳〵遊ぶだけで振發せず (五) 一生涯何等の進步もなし (六) 明時代の學者陳獻章、字は公甫、石齋と號す、廣東新會の人、白沙に隱れて性命の學を講ず (七) 安樂に生活して病むこともなきは却つて心配

人只(一)一念貪私なれば、便ち剛を(二)銷して柔となし、智を(三)塞いで昏となし、(四)恩を(五)變じて慘となし、潔を染めて汚と爲し、(六)一生の人品を壞了す。故に古人は貪ら

上甚窄、幾寄迷、眼前俱是荊棘泥塗。

一苦一樂相磨練、練極而成福者、其福始久。一疑一信相參勘、勘極而成知者、其知始眞。

心不可不虛。虛則義理來居。心不可不實。實則物欲不入。

地之穢者多生物。水之清

人の情欲に關する道筋は非常にせまくるし ㊁ ちつと立入つて見る ㊂ 目の前はベラの茂り居る道かさなくば泥のぬかるみ

(一)一苦一樂相磨練し、(二)練極りて福を成すものは其福始めて久し。(三)一疑一信相參勘し、(四)勘極つて知を成すものは其知始めて眞なり。

㊀ 一つの艱苦と一つの快樂とが生活の上に互に練磨鍛錬す ㊁ 練磨のあげく幸福となりたるものは其の幸福は始めて永久的なり ㊂ 一つの疑惑と一つの確信と互に參照す ㊃ 參考のあげく知識となりたるものは其の知識始めて眞實なり

(一)心虛ならざるべからず、(二)虛なれば則ち義理來り居る。(三)心實にせざるべからず、(四)實なれば則ち物欲入らず。

㊀ 人の心は雜念を以て充たされず空虛ならざるべからず ㊁ 空虛なる時は道義が來つて心中に居る ㊂ 人の心は道義を以て充たし充實せしめざるべからず

(一)地の穢れたる者は多く物を生ず。水の清める者は常に魚無し。故に君子は當に

不レ中則愆尤駢集。十謀九成未ニ必歸ヒ巧。一謀不レ成則訾議叢興。君子所ニ以寧默毋レ躁。寧拙毋レ巧。

十謀九成るも未だ必ずしも巧を歸せず、一謀成らざれば則ち訾議(三)叢り興る。君子寧ろ默(四)して躁なること毋く、寧ろ拙(五)にして巧なること毋き所以なり。

(一) 十言つた中九つまでは中りても世人は之を感心せず (二) 過失を咎むる攻撃集中す (三) 非難があちらにもこちらにも蜂起す (四) 言葉を寡くして輕躁ならず (五) 無能にして巧者ぶらず

天地之氣暖則生。寒則殺。故性氣清冷者。受享亦涼薄。唯和氣熱心之人。其福亦厚。其澤亦長。

天地の氣暖なれば則ち生(一)じ、寒ければ則ち殺(二)す。故に性(三)氣清冷なる者は受享亦涼薄なり。唯和(四)氣熱心の人は其福(五)も亦厚く、其澤(六)亦長し。

(一) 萬物生育す (二) 萬物枯死す (三) 性質冷淡なるものは天より受くる所幸福も從つてさびしく薄し (四) 心暖くして熱のある人 (五) 幸福も從つて豐富 (六) 天の惠澤に浴すること長し

天理路上甚寬。稍游レ心。胸中便覺廣大宏朗。人欲路

天理路上(一)は甚だ寬し。稍ゝ(二)心を遊ばせば、胸中便ち覺ゆ、廣(三)大宏朗なることを。人欲路上(四)は甚だ窄し。纔(五)に迹を寄せば、眼(六)前倶に是れ荊棘泥塗なり。

(一) 天地自然の大道は非常に廣し (二) 少しく心を此の上に遊ばせ見る (三) 廣大にしてカラッとしてゐる (四)

天亦無レ所レ用二其伎倆一矣。

燥性者火熾。遇レ物則焚。寡恩者氷清。逢レ物必殺。凝滞固執者。如二死水腐木一。生機已絶。俱難下建二功業一而延中福祉上。

福不レ可レ徼。養二喜神一以爲二召レ福之本一而已。禍不レ可レ避。去二殺機一以爲二遠レ禍之方一而已。

十語九中未二必稱一レ奇。一語

てして逢はず　㊀平和の時に際して危急の場合を考ふ　㊁天も其の人を翻弄する技倆を施す所なし

一　(一)燥性の者は火熾、物に遇へば則ち焚く。(二)寡恩の者は(三)氷清、物に遇へば必ず殺す。(四)凝滞固執の者は、(五)死水腐木の如し。(六)生機已に絶ゆ。(七)俱に功業を建て、福祉を延べ難し。

㊀性質燥急の人は火のもゆるが如く物に遇へば其の物を焼きつくす　㊁情愛なき人　㊂氷の如く冷し　㊃外物に拘泥し執へられし人　㊄腐れ水腐れ木　㊅生氣もはや絶えはつ　㊆かゝる人と一所に事業を成し幸福を増進しがたし

一　(一)福は徼む可らず。(二)喜神を養つて以て福を召くの本と爲さんのみ。禍は避くべからず。(三)殺機を去つて以て禍に遠ざかるの方と爲さんのみ。

㊀幸福は強ひて迎へ求むべからず　㊁吉祥の精神を養つて幸福を招く基となす　㊂他を害する心

一　(一)十語九中るも未だ必ずしも奇と稱せず、一語中らざれば則ち(二)愆尤駢び集る。

人知名位爲樂。不知無名無位之樂爲最眞。人知饑寒爲憂。不知不饑不寒之憂爲更甚。

爲惡而畏人知。惡中猶有善路。爲善而急人知。善處卽是惡根。

天之機緘不測。抑而伸。伸而抑。皆是播弄英雄。顚倒豪傑處。君子只是逆來順受。居安思危。

人名位(一)の樂たるを知つて、名無く位無きの樂(二)の最も眞たることを知らず。人饑寒の憂たるを知つて、(三)饑ゑず寒えざるの憂、更に甚しきことたるを知らず。

(一)名譽地位 (二)快樂の最も根本的のもの (三)饑ゑず寒えず安樂に暮せば人多く墮落し易く憂ふべきものあり

惡を爲し人の知るを畏るゝは惡中(一)猶ほ善路あり。善を爲して人の知るを急にするは、(二)善處卽ち是れ惡根なり。

(一)惡い中にも善いところあり (二)行爲は善なれど卽ち惡心を有するもの

(一)天の機緘は測られず、(二)抑へて伸べ、伸べて抑ふ。皆是れ英雄を(三)播弄し、(四)豪傑を顚倒する處。君子は只是れ逆に(五)來るところを順に受け、(六)安きに居て危きを思ふ。(七)天も亦其伎倆を用ふる所なし。

(一)天の機密は測り知りがたし、運命の測られざるをさす (二)人間を抑へて失敗させ、それから伸ばせて成功させる (三)おもちやにする (四)豪傑を自由に籠絡するもの (五)運命の來ること吾に逆なるも之を受くるに順を以

者乃所以爲拙。

欹器以滿覆。撲滿以空全。故君子寧居無不居有。寧處缺不處完。

名根未拔者。縱輕千乘甘一瓢。總墮塵情。客氣未融者。雖澤四海利萬世。終爲剩技。

心體光明。暗室中有青天。念頭暗昧。白日下生厲鬼。

みなる所以なし

(一)欹器は滿を以て覆り、(二)撲滿は空を以て全し。故に君子は寧ろ(三)無に居て有に居らず、寧ろ(四)缺に處して完に處せず。

(一)水を容る、器、少し傾ける故に水滿つる時は覆る　(二)錢を蓄ふる器、上に小さき口あり中空なるを以て覆らず　(三)心中を虛無にして雜念を抱かず　(四)八分目どころにして十分なるを求めず

(一)名根未だ拔けざる者は、縱ひ(二)千乘を輕んじ(三)一瓢を甘んずるも、總て(四)塵情に墮つ。(五)客氣未だ融せざる者は(六)四海に澤し、萬世を利すと雖も終に(七)剩技と爲る。

(一)名譽を欲する精神なくならぬ者　(二)兵車千乘を出すほどの大國　(三)一つの瓢に容れたる飲料に滿足す　(四)俗情をまぬかれず　(五)ハヤリギがとれ去らぬ者　(六)天下に恩澤を施す　(七)餘計のわざ

(一)心體光明なれば暗室の中に青天あり。(二)念頭暗昧なれば白日の下に厲鬼を生ず。

(一)心に曇りなく光明あれば暗室にありても青天空の下にある如し　(二)心曇りありて暗ければ白晝間に惡魔現出す

色。鳥且囀二幾句好音一。士君子幸列二頭角一。復遇二溫飽一。不レ思下立二好言一行中好事上。雖二是在レ世百年。恰似レ未レ生二一日一。

學者有二段兢業的心思一。又要レ有二段瀟洒的趣味一。若一味斂束清苦。是有二秋殺一無二春生一。何以發二育萬物一。

眞廉無二廉名一。立レ名者正所二以爲レ貪。大巧無二巧術一。用レ術

幸(四)に頭角を列ね、復た溫飽(五)に遇ひ、好言(六)を立て、好事を行ふことを思はざれば、是れ世に在ること百年なりと雖も、恰も未だ一日を生きざるに似たり。(七)

㊀花すら一しはの美しき色をあらはす　㊁幾聲の好き音を出して囀る　㊂在官の士人だち　㊃幸にも頭をならべて相當の地位にあり　㊄溫く衣飽くまて食ふ　㊅世のためになるりつぱなる言を吐く　㊆丁度一日の短時間も此の世に生息せざる如し

○學者段の兢業的(一)の心思有り。又段の瀟洒的趣味(二)有ることを要す。若し一味斂束(三)清苦ならば、是れ秋殺(四)あつて春生(五)なし。何を以て萬物を發育せん。

㊀一つの戰々兢々として恐れ愼む心がけあり　㊁淡然として物を苦にせぬ心だてあり　㊂一本調子に嚴格にて潔白過ぎる　㊃秋草木の枯るゝ如き氣象　㊄春草木の生ずる如き氣象

眞廉(一)は廉名無し。名を立つる者(二)は正に貪たる所以なり。大巧(三)は巧術なし。術を用ふる者は乃ち拙たる所以なり。

㊀眞の廉潔は廉潔なりといふべき名目なし　㊁名目を好み立つるものは名を貪るもの　㊂大なる策略には巧

覓中本來ノ機ニ、有ニ個眞受用一。

苦心中常得ニ悅心之趣一。得意時便生ニ失意之悲一。

富貴名譽自ニ道德一來者、如ニ山林中花一。自是舒徐繁衍。自ニ功業一來者。如ニ盆檻中花一。便有ニ遷徙廢興一。若以ニ權力一得者。如ニ瓶鉢中花一。其根不ニ植。其萎可ニ立而待一矣。

春至時和。花尙鋪ニ一段好

其の妙趣を會得すべし

○苦心の中常に悅心の趣を得、得意の時便ち失意の悲みを生ず。

(一)艱難困苦の中に常に心を愉快にする趣を會得す

○富貴名譽にして、(一)道德より來る者は山林中の花の如し。自ら是れ(二)舒徐繁衍す。(三)功業より來る者は(四)盆檻中の花の如し。便ち(五)遷徙廢興有り。若し權力を以て得る(六)者は(七)瓶鉢中の花の如し。其根植ゑざれば、其萎むこと立ちどころにして待つ可し。

(一)正當なる道德によつて得たる者　(二)次第に生へ茂る　(三)事業の成功によつて得たる者　(四)盆栽の花　(五)彼方此方に遷され又は盛衰あり　(六)富貴名譽を得る者　(七)花瓶に挿したる花

○春至り時和げば(一)花尙は一段の好色を鋪き、(二)鳥且つ幾句の好音を囀ず。(三)士君子

何如㆓拙者逸而全㆒㆑眞。

讀㆑書不㆑見㆓聖賢㆒。爲㆓鉛槧傭㆒。居㆑官不㆑愛㆓子民㆒。爲㆓衣冠盜㆒。講㆑學不㆑尙㆓躬行㆒。爲㆓口頭禪㆒。立㆑業不㆑思㆓種德㆒。爲㆓眼前花㆒。

人心有㆓一部眞文章㆒。都被㆓殘編斷簡封錮了㆒。有㆓一部眞鼓吹㆒。都被㆓妖歌艷舞湮沒了㆒。學者須㆘掃㆓除外物㆒直

のは色々骨折りて却つて人の怨みを受く (十) 無能なるものゝ暢氣にして眞實の本性を傷けざるに及ばず

書(一)を讀んで聖賢を見ざれば鉛槧(二)の傭と爲る。官(三)に居て子民(四)を愛せざれば、衣(五)冠の盜と爲る。學(六)を講じて躬行を尙ばざれば口頭(七)の禪と爲る。業(八)を立てて種德を思はざれば眼前(九)の花と爲る。

(一) 書物を讀んで聖人賢人の眞意を知る (二) 胡粉と版木、活版屋の雇人となる (三) 行政官となる (四) 人民 (五) 官衣官服の盜人、祿盜人と同じ (六) 學問を研究して實践躬行を第一とせず (七) 口さきばかりの禪學、こゝは廣く學問の意にいふ (八) 事業を企てゝ德を修めんことを思はず (九) 目の前の花、はかなきもの、譬へ

人心に一部(一)の眞文章あれども、都て殘編斷簡(二)に封錮し了る。一部の眞鼓吹(三)有れども、都て妖歌艷舞(四)に湮沒し了る。學者須く外(五)物を掃除して直に本來を覔むべし。纔に個の眞受用(六)有らん。

(一) 本書の性にたとふ (二) きれ〴〵になれる書物の一端、古人の書のために封じこめちる (三) 眞正の音樂 (四) たはけたる歌舞のために打消さる (五) 外部の障碍を掃きすてゝ直接に本來の眞相を求めよ (六) かくして始めて

乎。己之情理。有順有不順。而能使人皆順乎。以此相觀對治。亦是一方便法門。

心地乾淨。方可讀書學古。不然見一善行竊以濟私。聞一善言假以覆短。是又藉寇兵而齎盜糧矣。

奢者富而不足。何如儉者貧而有餘。能者勞而府怨。

順ならしめんか。此れを以て相觀對治せば、亦是れ一の方便法門なり。

(一)境遇 (二)順境あり、逆境あり (三)自分だけひとり順境に立つことかたし (四)自分の感情と理性が順當に調和することあり、調和せざることあり (五)他人に對して皆情理を順にせしめがたし (六)自他の二つを相對せしめて觀察す (七)手段としての便利法

心地乾淨にして、方に書を讀み、古を學ぶ可し。然らずんば一の善行を見ては、竊みて以て私を濟し、一の善言を聞いては、假りて以て短を覆ふ。是れ又寇に兵を藉して、盜に糧を齎すなり。

(一)心が淸く澄みわたる場合 (二)古人の先蹤を學ぶ (三)書物によりて一の善行を見ては之をぬすみ取つて勝手勝手をなす (四)借用して自分の短所をかくす (五)敵に兵士をかす (六)盜人に食物を與へる、善を求めんとして不善を增し、善を求めんとして不義を增す

奢る者は富めども足らず。何ぞ儉者の貧にして餘あるに如かん。能者は勞して怨を府む。何ぞ拙者の逸して眞を全うするに如かん。

(一)奢侈に長ずるものは如何に富みてくも不足 (二)節儉なる人の貧乏なれども餘裕あるに及ばず (三)才能あるも

我有レ功二於人一。不レ可レ念。而過則不レ可レ不レ念。人有レ恩二於我一。不レ可レ忘。而怨則不レ可レ不レ忘。

施レ恩者。内不レ見レ己。外不レ見レ人則斗粟可レ當二萬鍾之惠一。利レ物者。計二己之施一。責二人之報一。雖二百鎰一難レ成二一文之功一。

人之際遇有レ齊。有レ不レ齊。而能使二己獨齊一

(一)我れ人に功あらば念ふ可からず。而して(二)過は則ち念はざる可からず。人我れに恩あらば忘る可からず。而して怨は則ち忘れざる可からず。

(一) 自分が他人に對して功勞ありとも恩にきすべからず　(二) 他人に對して過失をおかせし時は氣の毒におもはざるべからず

恩を施す者、(一)内己を見ず、(二)外人を見ざれば則ち(三)斗粟も(四)萬鍾の惠に當る可し。(五)物を利する者、(六)己の施を計り、人の報を責めば、(七)百鎰と雖も一文の功を成し難し。

(一) 心中にて返報を望まず　(二) 外部に於て人より譽めらるゝことを望まず　(三) 一斗の米、少々の施しをいふ　(四) 粟六斛四斗を鍾といふ、多大の惠み　(五) 世の人の利益をはかる人　(六) 自分の施せし量を計つてそれに對するだけの報を人に要求す　(七) 金二十兩を鎰といふ

人の(一)際遇は(二)齊しきあり、齊しからざるあり。而して能く(三)己をして獨り齊しからしめんか。(四)己の情理順なる有り、順ならざる有り。而して能く(五)人をして皆

故君子欲レ無レ得二罪於昭昭一。先無レ得二罪於冥冥一。

福莫レ福二於少一レ事。禍莫レ禍二於多一レ心。唯苦レ事者。方知二少レ事之爲一レ福。唯平レ心者。始知二多レ心之爲一レ禍。

處二治世一宜レ方。處二亂世一宜レ圓。處二叔季之世一當二方圓並用一。待二善人一宜レ寛。待二惡人一宜レ嚴。待二庸衆之人一當二寛嚴並存一。

㊀肝臓　㊁腎臓　㊂病氣は人より見えぬ内部に受く　㊃外部に發す　㊄明かなる現露の世の中に罪を得ざらんことを欲す　㊅冥冥の鬼神に罪を得るなかれ

福は事(一)少きより福なるは莫く、禍は心(二)多きより禍なるは莫し。唯事(三)に苦しむ者、方に事少なきの福爲るを知り、唯心(四)を平にする者、始めて心多きの禍爲るを知る。

㊀生活上の事故　㊁心多方面にわかる　㊂事故の多きに苦しむ人　㊃心を平靜にもつ人

治世(一)に處するには宜しく方(二)なるべく、亂世に處するには宜しく圓(三)なるべし。叔季(四)の世に處するには當に方圓並び用ふべし。善人を待するには宜しく寛なるべく、惡人を待するには宜しく嚴なるべし。庸衆(五)の人を待するには當に寛嚴並に存すべし。

㊀平和の世　㊁道を正して嚴格にすべし　㊂道をかくし、つとめて圓滑に世渡りす　㊃治亂何れにもあらぬ世　㊄一般普通の人

頭。若一有二欣羨一便趨二欲境一。濟レ世經レ邦。要二段雲水的趣味一。若一有二貪著一便墮二危機一。

吉人無レ論二作用安詳一。卽夢寐神魂。無レ非二和氣一。凶人無レ論二行事狼戾一。卽聲音咲語。渾是殺機。

肝受レ病則目不レ能レ視。腎受レ病。則耳不レ能レ聽。病受二於人所一レ不レ見。必發二於人所二共見一。

欲境に趨る。世を濟ひ邦を經するには、(三)一段の雲水的趣味を要す。(四)若し一たび貪著あらば便ち危機に墮つ。(五)(六)

(一)木片石塊の如き無欲の心をもつべし　(二)一度他を羨む念生ずるときは欲心にとらへらる　(三)世人を救濟し邦國に經綸す　(四)一つの行脚僧の如き恬淡なる心がけが必要　(五)貪欲の心　(六)危險な目にあふ

(一)吉人は(二)作用の(三)安詳を論ずるなく、卽ち夢寐神魂も(四)和氣に非ざるは無し。(五)凶人(六)は行事の狼戾を論ずるなく、(七)卽ち聲音咲語も渾て是れ殺機。(八)(九)

(一)善人　(二)行動　(三)平安にして穏當なるは勿論のこと　(四)睡眠中の魂　(五)平和の氣　(六)惡人　(七)所作の邪惡なるは勿論のこと　(八)話聲や笑聲　(九)とげとげしき陰險なる氣

(一)肝病を受くれば則ち目視ること能はず、(二)腎病を受くれば則ち耳聽くこと能はず。(三)病は人の見ざる所に受け、必ず人の共に見る所に發す。(四)故に君子罪を昭昭に得るなきを欲せば、(五)先づ罪を冥冥に得ること無かれ。(六)

學者要下收二拾精神一併中歸一路上。如修レ德而留二意於事功名譽一。必無二實詣一。讀レ書而寄二興於吟咏風雅一。定不二深心一。

人人有二個大慈悲一。維摩屠劊無二二心一也。處處有二種眞趣味一。金屋茅簷非二兩地一也。只是欲蔽情封。當面錯過。使二咫尺千里一矣。

進レ德修レ道。要二個木石的念

學者は精神(一)を收拾して一路に併歸するを要す。如し德を修めて意を事功名譽(二)に留めば、必ず實詣(三)なからん。書を讀みて興(四)を吟咏風雅に寄せば、定めて深心(五)ならざらん。

(一)精神を綜合して一筋に統一せざるべからず　(二)功績や名譽に心を動かされる　(三)如實に到達しがたし　(四)詩歌文章の風雅に興味を感ず　(五)心深からずして浮薄淺薄なり

人人個の大慈悲(一)有り、維摩(二)・屠劊(三)二心(四)無し。處處種の眞趣味(五)有り。金屋茅簷(六)は兩地に非ず。只是れ欲(七)に蔽はれ情に封ぜられ、當面(八)に錯過せば、咫尺(九)をして千里ならしむ。

(一)各人皆此の大慈悲あり　(二)釋迦在世時代の大德ある居士　(三)牛馬の屠殺者　(四)心に二つはなし　(五)到る處眞の風情あり　(六)金殿玉樓も茅屋も同樣にて異なれる境に非ず　(七)情欲に本心を蔽ひふさがる　(八)眼前の現在に於て誤り過ごす　(九)八寸一尺の僅の誤りが千里の大差を生ず

德を進め道を修むるには、個の木石的念頭(一)を要す。若し一たび欣羨(二)有らば便ち

(一)考へのこまかなる人 (二)自分に對して丁寧 (三)何事にもシツコイ (四)考への大まかな人 (五)自分に對して無頓着 (六)平生の好み (七)こつてり (八)乾燥無味

故君子居常晴好不レ可二太濃艷一、亦不レ宜二太枯寂一。

彼富我仁。彼爵我義。君子固不レ爲二君相所一レ牢籠。人定勝レ天。志一動レ氣。君子亦不レ受二造物之陶鑄一。

(一)彼は富、我は仁、彼は爵(二)、我は義、君子は固より君相(三)の牢籠する所(四)とならず。(五)人定りて天に勝ち、志(六)一なれば氣を動かす。君子も亦造物(七)の陶鑄を受けず。

(一)彼富を以て我に臨めば我仁を以て彼に對す (二)爵位 (三)高位高官の人 (四)富貴を以て籠絡せられず (五)人力の微と雖も之をつくせば天にかつ (六)志專一なるときは終に氣質を動かす (七)造物者のいひなり次第にならず外界の壓迫に影響せられずして自由なる生活を營むをいふ

立レ身不下高二一步一立上。如下塵裡振レ衣。泥中濯上レ足。如何超達。處レ世不下退二一步一處上。如下飛蛾投レ燭。羝羊觸上レ藩。如何安樂。

(一)身を立つるに一歩を高くして(二)立たずんば、塵裡(三)に衣を振ひ、泥中に足を濯ふが如し、如何ぞ超達(四)せん。世に處するに一歩を退けて(五)處らずんば、飛蛾(六)の燭に投じ、羝羊(七)の藩に觸るゝが如し、如何ぞ安樂(八)ならん。

(一)自分の本領を確立す (二)世間一般のレベルより一歩高き位置に立つ (三)塵の中に衣を振ふ (四)超越し到達することかたし (五)人より一歩退いて控へ目になす (六)蛾が燭の火に飛びこむ (七)群羊が垣にぶつかり角をかくすが如し (八)災害に遭遇して安樂ならず

若一接二近匪人一。是清淨田中下二一不淨種子一。便終身難レ植二嘉禾一矣。

欲路上事。毋下樂二其便一而姑爲上染レ指。一染レ指便入二萬仞一。理路上事。毋下憚二其難一而稍爲上退レ歩。一退レ歩。便遠隔二千山一。

念頭濃者自待厚。待レ人亦厚。處處皆濃。念頭淡者自待薄。待レ人亦薄。事事皆淡。

(四)終身嘉禾を植ゑ難し。

(一) 閨房に養はるゝ女子、箱入娘　(二) 惡人　(三) 清らかなる田の中に汚れたる種子を蒔く如し　(四) 一生程良い穀物を植ゑがたし

(一)欲路上の事は(二)其便を樂みて、(三)姑く指を染むるを爲す毋れ。一たび指を染むれば便ち(四)萬仞に入らん。(五)理路上の事は、(六)其難きを憚りて稍〻歩を退くるを爲す毋れ、一たび歩を退くれば便ち(七)遠く千山を隔てん。

(一) 私欲のこと　(二) 私欲の好都合なるを樂しむ　(三) ちよいと手を着けて見る　(四) 一萬ヒロもある深みにはまるならん　(五) 道理のこと　(六) 困難なるをおそる　(七) 多くの山を遠く隔つるならん

(一)念頭濃なる者は(二)自ら待つこと厚く、人を待つも亦厚く、(三)處處皆濃なり。(四)念頭淡き者は(五)自ら待つこと薄く、人を待つことも亦薄く、事事皆淡し。故に君子は(六)居常嗜好太だ(七)濃艶なるべからず、亦宜しく太だ(八)枯寂なるべからず。

不㆑難㆓於恭㆒。而難㆓於有㆑禮。

寧守㆓渾噩㆒而黜㆓聰明㆒。留㆓些正氣㆒還㆓天地㆒。寧謝㆓紛華㆒而甘㆓澹泊㆒。遺㆓個清名㆒在㆓乾坤㆒。

降㆑魔者。先降㆓自心㆒。心伏則羣魔退聽。馭㆑横者。先馭㆓此氣㆒。氣平則外横不㆑侵。

教㆓弟子㆒如㆑養㆓閨女㆒。最要㆘嚴㆓出入㆒謹㆗交友㆖。

㈠ 不德の人に對するには愼重に其の過失を責むるは易けれど其の過失を隱まずして敎へ導くことはむづかし　㈡ 丁寧にするは易けれど禮に叶ふはむづかし

寧ろ渾噩(一)を守りて聰明(二)を黜け、些(三)の正氣を留めて天地に還せ。寧ろ紛華(四)を謝して澹泊に甘んじ、個(五)の清名を遺して乾坤に在れ。

㈠ 質朴にして飾り無し　㈡ 賢明ぶりを控へる　㈢ 幾分の忠正の精神を留め置き、死ぬ時は之を天地にかへせ　㈣ 華美を捨てゝ淡泊なる生活に滿足す　㈤ この清らかなる名を死後に殘し置きて天地に留めよ

(一)魔を降す者は先づ自心を降せ。心伏すれば則ち羣魔退き聽く。(二)横を馭する者は先づ此の氣を馭せよ。(三)氣平かなれば則ち外横侵さず。

㈠ 自分を誘惑する惡魔を退治するものは先づ自分の心を退治せよ　㈡ 暴力を制馭するものは先づ自分の氣を制馭せよ　㈢ 自分の氣平靜なるときは外部の暴力自分を犯さず

弟子を教ふるは閨女(一)を養ふが如し。最も出入を嚴にし交友を謹むを要す。若し一たび匪人(二)に接近せば、是れ清淨田中(三)に一不淨の種子を下すなり。便ち

可レ脫レ凡。放ニ得道德仁義之心ニ下。纔可レ入レ聖。

て纔に聖に入るべし。(二)

(一) 功名富貴を望む心を放棄することを得て後凡俗の境地より脫出し得　(二) はじめて聖人の境地に入ることを得

利慾未ニ盡害レ心。意見乃害レ心之蟊賊。聲色未ニ必障レ道。聰明乃障レ道之藩屏。

利慾未だ盡くは心を害せず。意見(一)乃ち心を害する蟊賊(二)なり。聲色(三)未だ必ずしも道を障へず。聰明(四)乃ち道を障ふるの藩屏なり。

(一) 生齧しき分別立て　(二) 根切り虫　(三) 聲聲色即ち歌妓美女　(四) なまなかの利口が却つて道をじやまする垣根

人情反覆。世路崎嶇。行不レ去處。須レ知下退ニ一步ニ之法上。行得去處。務加下讓ニ三分ニ之功上。

人情反覆し、(一)世路崎嶇たり。(二)行き去らざる處、(三)須く一步を退くるの法を知るべし。行き得去る處、務めて三分を讓るの功を加へよ。(四)

(一) 世の人情は手のひらをかへす如くかはる　(二) 世渡の道は嶮しくて行きがたし　(三) 思ふ所に到着せざるに當つて餘地を存して一步を退くる處生活を知るべし　(四) 三分の一は他人に讓るだけの事業を餘分になしおけ

待ニ小人ニ不レ難ニ於嚴ニ。而難ニ於不レ惡。待ニ君子ニ

(一)小人を待つは嚴に難からずして惡まざるに難く、君子を待つは恭(二)に難からずして禮あるに難し。

富貴之家宜ニ寬厚一。而反忌刻。是富貴而貧ニ賤其行一矣。如何能享。聰明人宜ニ斂藏一。而反炫耀。是聰明而愚ニ懵其病一矣。如何不レ敗。

富貴の家は宜しく寬厚(一)なるべくして反つて忌刻(二)なり。是れ富貴(三)にして其行を貧賤にす。如何ぞ能く享けん(四)。聰明の人は宜しく斂藏(五)すべくして反つて炫耀(六)す。是れ聰明にして其病を愚懵(七)にす。如何ぞ敗れざらん(八)。

(一)寬大温厚　(二)猜忌刻薄にして同情心なし　(三)其の身は富貴でありながら貧賤なる行ひをなす　(四)如何にして永く福祿を享け得んや　(五)才智を收めかくす　(六)他人にひけらかす　(七)無智曖昧なる過失をなす　(八)失敗すべし

居レ卑而後知ニ登レ高之爲レ危。處レ晦而後知ニ向レ明之太露一。守レ靜而後知ニ好レ動之過レ勞。養レ默而後知ニ多言之爲レ躁。

卑きに居り、(一)而して後高きに登るの危しと爲すを知り、晦(二)に處し、而して後明に向ふの太だ露るゝことを知る。靜を守り、而して後に動を好むの勞(三)に過ぐるを知り、默(四)を養ひ、而して後多言の躁たるを知る。

(一)低き所にゐて見て後初めて高所に登ることの危險なるを知る　(二)暗き所にゐる　(三)骨折が多過ぎる　(四)平常無口にして後に初めてお喋りの騒がしいことがわかる

放ニ得功名富貴之心一下。便

(一)功名富貴の心を放ち得下して便ち凡を脱す可く、道德仁義の心を放ち得下し

處レ世不三必邀二功一。無レ過便是功。與レ人不レ求レ感レ德一。無レ怨便是德。

憂勤是美德。太苦則無三以適レ性怡二レ情。澹泊是高風。太枯則無三以濟レ人利レ物。

事窮勢蹙之人。當レ原二其初心一。功成行滿之士。要レ觀二其末路一。

(一)世に處しては必ずしも功を邀めざれ、(二)過無きは便ち是れ功。(三)人に與へては德に感ずることを求めざれ、怨無きは便ち是れ德。

(一)世渡の道には功をなさんことを求めずともよろし　(二)過失なきが即ち功　(三)人に物を與へては自分の德に人が感ずることを欲するなかれ

(一)憂勤は是れ美德、(二)太だ苦めば則ち以て性に適ひ情を怡ばしむる無し。(三)澹泊は是れ高風、(四)太だ枯なれば則ち以て人を濟ひ物を利する無し。

(一)氣を張つ骨折ることは人間の美德　(二)餘りくよ〳〵すると本性にかなひ情を喜ばすことかたし　(三)物事にかゝはらず、あつさりしてゐることは高尚なる態度　(四)餘りあつさり過ぎて乾からびてゐては人のためになり物を利することかたし

(一)事窮まり勢蹙まるの人は、(二)當に其初心を原ぬべし。(三)功成り行滿つるの士は、(四)其末路を觀るを要す。

(一)窮してゐる事が行きつまり形勢さしせまつてゐる人　(二)かく成りゆきし最初の動機に立ちかへり考よる時は危難を脫し得　(三)事業成就し、行爲完きを得し人　(四)何時までもかくあるべきか、其のゆく末を觀察せねばならぬ

欲意識。盡屬ニ妄心ー。消ニ殺得妄心ー盡。而後眞心現。

飽後思レ味。則濃淡之境都消。色後思レ婬。則男女之見盡絶。故人常以ニ事後之悔悟ー。破ニ臨事之癡迷ー。則性定而動無レ不レ正。

居ニ軒冕之中ー。不レ可レ無ニ山林的氣味ー。處ニ林泉之下ー。須レ要レ懷ニ廊廟的經綸ー。

㊀ はこり高ぶり傲慢なるは皆ハヤリギのせいなり ㊁ ハヤリギをおさへつけて後眞正の精神發展す ㊂ 愛憎好惡の感情、是非得失を分別する知識 ㊃ 妄念 ㊄ 消滅してしまつて後眞正の心現れ出づ

（一）飽後味を思へば、則ち濃淡の境都べて消え、（二）色後婬を思へば、則ち男女の見盡く絶ゆ。故に人常に事後の悔悟を以て、（三）臨事の癡迷を破らば、則ち（四）性定りて動くとして正しからざるは無し。

㊀ 食ひ飽きて後其の味を考ふれば濃厚淡泊の區別すべて消失す ㊁ 情慾を滿足せしめて後女色のことを思へば男性女性の見解皆なくなる ㊂ 事ずみになりし後の悔いを以て事に臨みし場合の迷ひを打破る ㊃ 本性確固として如何なる行動も不正のことなし

（一）軒冕の中に居ては、（二）山林的の氣味なかるべからず。（三）林泉の下に處しては、須く（四）廊廟的の經綸を懷くことを要すべし。

㊀ 大夫の乘る車と大夫以上の用ふる冠、高位高官をいふ ㊁ 山林に閑居する隱者の氣象あるを要す ㊂ 山林と同じ、仕へずして道を樂しむ隱者の生活 ㊃ 廟堂に立つて天下國家を治むる如き考を有せざるべからず

攻二人之惡一毋二太嚴一。要レ思二其堪一レ受。教レ人以レ善毋レ過レ高。當レ使二其可一レ從。

人の惡を攻むるは太だ嚴なること毋れ。(一)其の受くるに堪ふるを思ふことを要す。人を教ふるに善を以てするは、(二)高きに過ぐること毋れ。(三)當に其をして從ふべからしむべし。

(一) 嚴しき忠言を受くるだけの餘裕ありや否やを思考する必要あり　(二) 標準高きに過ぐるなかれ　(三) 其の教ふる所の善が實際從ふを得る程度のものたるべし

糞蟲至穢。變爲レ蟬。而飮二露於秋風一。腐草無レ光。化爲レ螢。而耀二采於夏月一。固知潔常自レ汚出。明毎從レ晦生也。

(一)糞蟲は至穢なるも、變じて蟬と爲つて(二)露を秋風に飲む。(三)腐草は光無く、化して螢と爲つて(四)采を夏月に輝かす。固に知る、(五)潔は常に汚より出で、(六)明は毎に晦より生ずることを。

(一) 糞土の中に生ずる蛆虫は至つてきたなし　(二) 秋風吹くに當つて露を啜む　(三) 腐りたる草はもと光なし　(四) 美しき色を夏の月に輝かす　(五) きれいなるものは常にきたならしきものより生ず　(六) 光明は常に暗黒より生ず

矜高倨傲。無レ非二客氣一。降二伏得客氣一下。而後正氣伸。情欲意識。盡屬二妄心一。消二殺得妄心一盡。而後眞心現。

(一)矜高倨傲は客氣に非ざるなし。(二)客氣を降伏し得下して而して後正氣伸ぶ。(三)情欲意識は盡く(四)妄心に屬す。(五)妄心を消殺し得盡して而して後眞心現る。

外要。

家庭有二個眞佛一。日用有二種眞道一。人能誠心和氣。愉色婉言。使二父母兄弟間形骸兩釋意氣交流一。勝二於調息觀心一萬倍矣。

好レ動者雲電風燈。嗜レ寂者死灰槁木。須三定雲止水中有二鳶飛魚躍氣象一。纔是有道的心體。

㈣ 事業は必ず滿足ならんことを要求す ㈤ 功業は必ず十分ならんことを要求す ㈥ 不滿足の念より生ずる精神上の憂事 ㈦ 外部よりの心配事

(一)家庭には個の眞佛あり。(二)日用には種の眞道あり。人能く(三)誠心和氣、(四)愉色婉言、父母兄弟の間をして(五)形骸兩ながら釋け意氣交々流れしめば、(六)調息觀心に勝ること萬倍ならん。

㈠ 殊更に佛を求めずとも一家の内には眞實の佛あり ㈡ 日常の生活に眞の道あり ㈢ 心を誠實にし氣を和ぐ ㈣ 顏色を愉快にし言語をおだやかにす ㈤ 双方の身體がとけて一つになり、互ひの心が通じあふ。兩者互に精神的に同化するをいふ ㈥ 坐禪の行、調息は呼吸を調へて靜坐すること、觀心はわが心を客觀的に反省する修行

(一)動を好む者は雲電風燈、(二)寂を嗜む者は死灰槁木。須く(三)定雲止水の中に鳶飛び魚躍るの氣象有るべし。(四)纔に是れ有道的の心體。

㈠ 活動の趣を好むものは其の心態雲間の電光、風前の燈火の如く恒常性なし ㈡ 靜寂の趣を好むものは其の心態火の消えたる灰、枯れた木の如く生氣なし ㈢ 動かざる雲、流れざる水の如き靜寂の中に鳶飛び、魚躍る如き活潑々地の氣象あるべきなり ㈣ かくてはじめて眞に道を行ふ人の精神狀態

完名美節。不レ宜二獨任一。分レ些與レ人。可三以遠レ害全二身。辱行汚名。不レ宜二全推一。引レ些歸レ己。可三以韜レ光養二德。

事事留二個有餘不盡的意思一。便造物不レ能レ忌レ我。鬼神不レ能レ損レ我。若業必求レ滿。功必求レ盈者。不レ生二內變一必召二

値を失ふ ㈡ 罪き天に滿ちわたるほどの罪惡も一つのクユルといふ字にかなひがたし、一度後悔して改むるときは罪惡も償はる

㈠完名美節は、宜しく獨り任ずべからず。㈡些を分ちて人に與へ、以て害を遠け身を全うすべし。㈢辱行汚名は、㈣宜しく全く推すべからず。㈤些を引いて己に歸し以て㈥光を韜み德を養ふべし。

㈠ りつぱなる評判美しき節義は自分ひとりのものにせざるがよろし ㈡ 幾分かを分ちて他人にも與ふ ㈢ 恥辱となるべき行爲汚はしき評判 ㈣ 全部を他人に推しつけて知らぬかほすべからず ㈤ 幾分かを取つて自分の責任とす ㈥ 身の光を包みかくして靜に德を養ふ

事事個の㈠有餘不盡的の意思を留むれば、便ち㈡造物も我を忌むこと能はず、㈢鬼神も我を損すること能はず。若し㈣業は必ず滿を求め、㈤功は必ず盈を求むる者は、㈥內變を生ぜざれば必ず㈦外憂を召く。

㈠ 爲し得る能力あれども全部を用ひつくさず餘裕を存する考へを謂ふ ㈡ 萬物を創造したる造物主はよく人間の行動を妨ぐるものなれど餘力を存し置く時はわれを忌みすつることかたし ㈢ 死靈もわれを害することかたし

寵利毋レ居二人前一。德業毋レ落二人後一。受享毋レ踰二分外一。修爲毋レ減二分中一。

(一)寵利は人前に居ること毋れ、(二)德業は人後に落つること毋れ、(三)受享は分外に踰ゆること毋れ、(四)修爲は分中を減ずること毋れ。

(一)恩寵利得即ち一身の利益をはかるには人より先んずべからず (二)德行事業即ち社會の利益をはかるには人に後るべからず (三)物を取り入れることは分限程度をこえて多く取るべからず (四)學問修業は爲すべき限度より少くすべからず

處レ世讓二一步一爲レ高。退レ步卽進レ步的張本也。待レ人寬二一分一是福。利レ人實利レ己的根基。

(一)世に處するには一步を讓るを高しと爲す。(二)步を退くるは即ち步を進むる的の張本なり。(三)人を待つには一分を寬くする、是れ福、(四)人を利するは實は己を利する的の根基。

(一)世渡りの道は他人に一步讓るを優れたりとなす (二)退步はやがて進步する下地 (三)他人に對しては少々寬大にするが自分のために幸福 (四)他人の利益を計るはまつたくの所自分を利するもと

蓋レ世功勞。當二不レ得二一個矜字一。彌レ天罪過。當二不レ得二一個悔字一。

(一)世を蓋ふの功勞も一個矜の字に當り得ず、(二)天に彌るの罪過も一個の悔の字に當り得ず。

(一)一世を蓋ふほどの大功勞も一つのホコルと云ふ字にはかなひがたし、傲慢の心一度生ずるときは功勞も其の價

之思。
徑路窄處。留二
一步一與二人行一。
滋味濃的。減二
三分一讓二人嗜一。
此是涉レ世一
極安樂法。
作レ人無二甚高
遠事業一。擺二脫
得俗情一。便入二
名流一。爲レ學無二
甚增益工夫一。
減二除得物累一。
便超二聖境一。
交レ友須レ帶二三
分俠氣一。作レ人
要レ存二一點素
心一。

をして乏しからざる趣を懷かしむ

(一)徑路窄き處は一步を留めて人の行くに與へ、(二)滋味濃なる的は、(三)(四)三分を減じて(五)人の嗜むに讓る。此は是れ世を渉る一の(六)極安樂法なり。

(一)小路 (二)通行する人に讓る (三)食物の味よききもの (四)三分の一 (五)好きな人に與ふ (六)世渡りの一ばん安樂な一方法

(一)人と作るに甚だ高遠の事業なし。(二)俗情を擺脫し得ば、便ち名流に入らん。學を爲すには甚だ(三)增益の工夫なし。(四)物累を減除し得ば、(五)即ち聖境を超えん。

(一)人格修養するには甚だ高大深遠なる事業なくとも可 (二)名利の俗情を排し逃るゝことを得ば有名なる人たちのなかまに入る (三)學識を非常に增す計畫なくとも可 (四)外物のわづらひを少くす (五)聖人たる境地に飛上る

友に交るには須く(一)三分の俠氣を帶ぶべく、人と作るには一點の(二)素心を存するを要す。

(一)三分の一のチトコギをもつべし (二)外物の爲に汚されざる清淨心を存しゐること必要

恩裡由來生レ害。故快意時。須二早回一レ首。敗後或反成レ功。故拂心處。莫二便放一レ手。

藜口莧腸者。多二氷清玉潔一。袞衣玉食者。甘二婢膝奴顏一。蓋志以二澹泊一明。而節從二肥甘一喪也。

面前的田地。要二放得寛一。使三人無二不平之歎一。身後的惠澤。要二流得長一。使三人有二不匱

恩裡由來害を生ず。故に快意の時に須く早く首を回らすべし。敗後或は反つて功を成す。故に拂心の處、便ち手を放つこと莫れ。

(一)人より恩惠を蒙ることは元來弊害を生じ易し　(二)恩寵の衰へざるうちに早く思案すべきもの　(三)失敗の後に反つて成功す　(四)失敗して不愉快なる場合　(五)すぐ見限りてはならぬ

藜口莧腸の者は、氷清玉潔多く、袞衣玉食の者は、婢膝奴顏を甘んず。蓋し志は澹泊を以て明に、而して節は肥甘に從りて喪はる。

(一)アカザや稗の實を口腹に給する貧乏人　(二)精神の氷の如く清く玉の如く潔き人多し　(三)貴き衣服をまとひ美味に飽くもの、袞は天子の衣なれど此處は廣く解す　(四)滿足して下婢の如く膝を屈し奴僕の如く諂ひ笑ふ　(五)人の志は淡泊にして寒素なる生活によつて明白となる　(六)節義は肥肉甘味の贅澤なる生活によつてなくなる

面前的の田地は放ち得て寛きを要す。人をして不平の歎なからしむ。身後的の惠澤は流し得て長きを要す。人をして不匱の思ひあらしむ。

(一)眼の前の田圃即ち此の世に生存してゐる間の世渡りの道　(二)ひろ〳〵と寛濶なるがよろし　(三)他人をして不平の愚痴出づることなからしむ　(四)一身の後に殘るべき恩惠德澤はいつまでも長く傳はるがよろし　(五)後人

人只是常。

天地寂然不動。而氣機無息少停。日月晝夜奔馳。而貞明萬古不易。故君子閒時要有喫緊的心思。忙處要有悠閒的趣味。

夜深人靜。獨坐觀心。始覺妄窮而眞獨露。每於此中得大機趣。既覺眞現而妄難逃。又於此中得大慚忸。

世俗にすぐれたる人　(五)至極の人物　(六)平常普通

天地は寂然(一)として動かざれども、氣機(二)は息むことなく停ること少し。日月(三)は晝夜奔馳すれども、貞明(四)は萬古易らず。故に君子は閒時(五)に喫緊的心思(六)有るを要し、忙處(七)に悠閒的趣味(八)有るを要す。

(一)ぢつとして動かず　(二)陰陽二氣の作用は、やむことなく停ることなく活動す　(三)日と月とは晝夜運行す　(四)恒常の光明は萬古不變　(五)閑暇の時　(六)ひきしまつた精神がなくてはならぬ　(七)多忙の時　(八)ゆつたりとしたおもむき

夜深く人靜なるとき、獨り坐して心(一)を觀ずれば、始めて妄窮(二)まつて眞獨(三)り露るゝを覺え、每に此中(四)に於いて大機趣(五)を得。既に眞現(六)じて而して妄の逃れ難きを覺ゆれば、又此の中に於て大慚忸(七)を得。

(一)自己の心中を內省す　(二)迷妄の雜念が內省によつてなくしつまる　(三)眞實の本性のみ明白にあらはる　(四)かくの如き場合　(五)大悟徹底を得　(六)眞性現れ出て妄念其の醜態を暴露して逃るゝ所なし　(七)既往の非を悟り、非常にはづかしくあいそがつきる

常有二拂レ心之事一。纔是進徳修行的砥石。若言言悦レ耳。事事快レ心。便把二此生一埋二在鴆毒中一矣。

疾風怒雨。禽鳥戚戚。霽日光風。草木欣欣。可レ見。天地不レ可三一日無二和氣一。人心不レ可三一日無二喜神一。

醲肥辛甘非二眞味一。眞味只是淡。神奇卓異非二至人一。至

修行的の砥石なり。若し言言耳を悦ばし、事事心を快くせば、(五)便ち此の生を把つて鴆毒の中に埋在せん。

(一) 耳の中にはいつも氣に入らぬ言葉をきく (二) 心の中にはいつも意のまゝならぬことあり (三) 此の如くにしてはじめて (四) 徳に進み行を修むるためになるべき砥石、砥石は刃を磨くものなれば他人の苦言によつてわが徳行を磨くをいふ (五) 即ち此の身を毒藥の中に埋め置く如く危險此の上なし

(一)疾風怒雨には、禽鳥も戚戚たり。霽日光風には、(三)草木も欣欣たり。見る可し、天地一日も(四)和氣無かるべからず、(五)人心一日も喜神無かるべからざるを。

(一) 暴風猛雨の時には鳥類も憂へ悲しむ (二) 天日うらゝかに霽れてそよ風吹く (三) 草木までも喜ばしげに (四) おだやかなる氣 (五) 人の心中には一日たりとも喜ばしき精神が無くてはならず

(一)醲肥辛甘は眞味に非ず、(二)眞味は只是れ淡、(三)神奇卓異は至人に非ず、(四)(五)至人は只是れ常。(六)

(一) 濃き酒、肥たる肉、から味、あま味 (二) 眞實の味でなし (三) 淡泊無味のもの (四) あやしく不思議なる人

與二其曲謹一不レ若二疎狂一。

君子之心事。天青日白。不レ可レ使二人不一レ知。君子之才華。玉韞珠藏。不レ可レ使二人易一レ知。

勢利紛華。不レ近者爲レ潔。近之而不レ染者爲二尤潔一。智械機巧。不レ知者爲レ高。知之而不レ用者爲二尤高一。

耳中常聞二逆耳之言一。心中

㈠世渡りの経験浅ければ　㈡世上の悪習に染むことも浅し　㈢世上の物事に係る経験深ければ　㈣悪るごすき世間的知識　㈤有徳の人　㈥物なれて老練熟達なるよりも質朴愚直なるがよろし　㈦禮節に拘泥して馬鹿丁寧なるよりも淡泊豪放にやりつぱなしなるがよろし

君子の心事㈠は、天青く日白く㈡、人をして知らざらしむべからず㈢。君子の才華㈣は、玉と韞まれ㈤珠と藏れ、人をして知り易からしむべからず㈥。

㈠心の中　㈡青天白日の如く潔白　㈢かくす所なく人にさらけ出して見せるがよろし　㈣美しき才能　㈤珠玉を物に包みかくせし如く光芒を蔽ひかくす　㈥自己の才能が直ぐ人の眼につくやうではわろし

勢利紛華は、近かざる者を潔㈠しと爲す。之に近いて染まざる者を尤も潔しと爲す㈡。智械機巧は、知らざる者を高しと爲す㈢。之を知りて用ひざる者を尤も高しと爲す㈣。

㈠権勢名利や豪奢には接近せざるが潔白　㈡勢利紛華に接近しても其の習俗に染まぬがまだも潔白　㈢権謀術数は初めから心得ぬが高潔　㈣権謀術数を心得ても利用せざるがまだも高潔

耳中常に耳に逆ふの言を聞き㈠、心中常に心に拂るの事あらば㈡、纔に是れ進德㈢

棲二守道德一者。寂二寞一時。依二阿權勢一者。凄二涼萬古。達人觀二物外之物一。思二身後之身一。寧受二一時之寂寞一。毋レ取二萬古之凄涼一。

涉レ世淺。點染亦淺。歷レ事深。機械亦深。故君子與二其練達一。不レ若二朴魯一。

菜根譚 前集

道德を棲守する者は一時に寂寞たり。權勢に依阿する者は萬古に凄涼たり。達人は物外の物を觀、身後の身を思ふ。寧ろ一時の寂寞を受くとも、萬古の凄涼を取る毋かれ。

(一) 道德を堅く守つてゐる者 (二) 現世に於て榮達せざるを以て一時は物さびし (三) 權威勢力におもねり附く者 (四) 死滅と共に其の名も滅ぶるを以て萬年の永久に亘つて物あはれなり (五) 見識すぐれたる人 (六) 物質以外の物卽ち道德に目をつける (七) 死後の精神的存在を考へる (八) 道德を守つて一時物さびしき感あるも (九) 權勢におもねりて萬年に亘る物あはれなる境遇を取るなかれ

世を涉ること淺ければ點染も亦淺く、事を歷ること深ければ機械も亦深し。故に君子は其練達ならんよりは朴魯なるに若かず、其曲謹ならんよりは疎狂なるに若かず。

人知菜根中有眞味也。

三峰主人于孔兼題

菜根譚題詞

逐客孤蹤。屏居蓬舍。樂與方以內人遊。不樂與方以外人遊也。妄與千古聖賢。置辯於五經同異之間。不妄與二三小子。浪跡于雲山變幻之麓也。日與漁夫田夫。朗吟唱和於五湖之濱。綠野之坳。不日與競刀錐。榮升斗者。交臂抒情於冷熱之場。腥羶之窟也。間有習濂洛之說者牧之。習竺乾之業者闢之。爲譚天雕龍之辯者遠之。此足以畢予山中伎倆矣。適有友人洪自誠者。持菜根譚示予。且丐予序。予始訑訑然睨之耳。既而徹几上陳編。屏胸中襍慮。手讀之。則覺其譚性命直入玄微。道人情曲盡岩險。俯仰天地。見胸次之夷猶。塵芥功名。知識趣之高遠。筆底陶鑄。無非綠樹青山。口吻化工。盡是鳶飛魚躍。此其自得何如。固未能深信。而據所擒詞。悉砭世醒人之吃緊。非入耳出口之浮華也。譚以菜根名。固自淸苦歷練中來。亦自栽培灌溉裡得。其顚頓風波。備嘗險阻。可想矣。洪子曰。天勞我以形。吾逸吾心以補之。天阨我以遇。吾高吾道以通之。其所自警自力者。又可思矣。由是以數語弁之。俾公諸人

烟霞五色足レ養レ糧。乾坤内狂客逸人。花鳥四時供二嘯詠一。○養花瓶亦得二精良一。譬如下玉環飛燕不レ可レ置二之茅茨一。嵇阮賀李。不レ可レ請二酒食店中一。○纔有レ力以勝レ蝶。本無心而引レ鶯。半葉舒而嵓暗。一花散而峰明。○玉檻連レ彩。粉壁迷レ明。動二鮑昭之詩興一。銷二王粲之憂情一。

のものたるをいふ (四) 世を遁れ隱居する人の心胸に關したる大切のものなり (五) 此の瓶中盆中に花を插し石を置きたるやうすなり (六) 舌のさきには骨なけれども言語をすべて維持する力を有するをいふ (七) 眼の中に神經ありて此の中に諸物を視る遊戲の奧妙の能力を具ふるをいふ (八) 多くの人と共に居る時は口を閉ぢて沈默すること (九) 獨り坐する時は種々の雜念の起り來るを防ぐこと (一〇) 一家の家宅を有せずして諸處に移轉して住むこと (一一) 湖海上にたなびける五色の煙霞を以て食糧を資くること、此は常に煙霞の景を樂むこと (一二) 天地間に在る佯狂して世を避くる客、世を遁れて隱せる人 (一三) 四時の花鳥の景を詩歌に吟詠すること (一四) 玉環は唐の玄宗の妃楊貴妃の小字なり、飛燕は漢の成帝の宮人なり、皆古の美人なり (一五) 嵇康阮籍は晉代の人皆放達にして禮法に拘はらず、賀知章李白は唐代の詩人にして放達酒を好めり (一六) 花木纔に力あれば蝶に勝つべし (一七) 花木はもと鶯を引くの心なくして自然に鶯を引きつくることを得るなり (一八) 木の葉半分舒ぶるも之が爲めに巖石蔽はれて暗くなるなり (一九) 一花散りても之が爲めに峰は明るくなるを感ず (二〇) 玉を以て作れる欄檻のあたり美しき花の連れるをいふ (二一) 白粉を塗れる壁ちら／＼として鮮明なること (二二) 鮑昭は南北朝時代の人、詩を善くし宋に仕へて臨海王の參軍となれる (二三) 王粲は三國の時の魏人、博物多識なり、建安七子の一人

醉古堂劍掃　終

因レ花索レ句。勝ニ他牘奏ニ三千一。爲レ鶴謀レ糧。贏ニ我田耕ニ二頃一。○至奇無レ驚。○至美無レ艷。○瓶中插レ花。盆中養レ石。雖ニ是尋常供具一。實關ニ幽人性情一。若非レ得レ趣。個中布置。何能生レ致。○舌頭無レ骨。得ニ言句之總持一。眼裡有レ筋。具ニ遊戲之三昧一。○羣居閉レ口。獨坐防レ心。○湖海上浮家泛宅。

花に因りて句を索むるは、他の牘三千を奏するに勝る。鶴の爲めに糧を謀るは、我が田二頃を耕すに贏る。(重出)○至奇(一)は驚なく、至美(二)は艷なし。○瓶中花を挿み、盆中石を養ふは、是れ尋常(三)の供具と雖も、實に幽人(四)の性情に關す。若し趣を得るに非ずんば、個中(五)の布置、何ぞ能く致を生ぜん。○舌頭(六)骨無くして、言句の總持を得、眼裡(七)筋ありて、遊戲の三昧を具ふ。○羣居(八)して口を閉ぢ、獨坐(九)して心を防ぐ。○湖海上の浮家泛宅(一〇)は、烟霞(一一)の五色、糧に資するに足る。乾坤(一二)內の狂客逸人(一三)は、花鳥の四時、嘯詠するに供す。○養花の瓶は亦須らく精良なるべし。譬へば玉環飛燕(一四)、之を茅茨に置くべからず、嵇阮賀李(一五)、酒食店の中に請すべからざるが如し。○纔(一六)に力ありて以て蝶に勝つ。○本(一七)と無心にして鸎を引けばなり。○半葉(一八)舒びて嵒暗く、一花(一九)散じて峰明なり。○玉檻(二〇)彩を連ね、粉壁(二一)明に迷へり、鮑照(二二)の詩興を動かし、王粲(二三)の憂情を銷す。

(一) 奇の至れるものは驚くべき所なきをいふ　(二) 美の至れるものは美しき色つやなきをいふ　(三) 常並みの供給

犯以二霜雪一。〇東郭先生之履。一貧從二萬古之清一。山陰道士之經。片字收二千秋之重一。〇說來事事應レ難レ說。何如二濂レ溪。聽到聲聲不レ忍レ聽。唯有レ枕レ流。〇管輅請レ飲後言。名曰二酒膽一。休文以レ吟致レ瘦。要是詩魔。

て作り金を以て飾りたる椅なり　(七)　一榻の上にて酒に醉ひたるをいふ　(八)　律は十二律の律、玉を以て作りたる律籥なり、王子猷桓子郎に笛を奏せんことを請ふ、桓時已に貴顯なれども素より王の名を聞く卽車を回らし下り胡床に踞して爲に三たび調す、弄し畢り車に上りて去る　(九)　王と桓とは始めより相識らざる人なり、故に三調す、相識の間柄なれば再び弄するの要なしとなり　(一〇)　元亮は陶潛の字、淵字は淵明、一の字は元亮といふ、陶潛客を逐ひしことありしならん　(一一)　子猷は王徽之の字、晉代の人なり、子猷桓子郎の笛を善くするを聞き、請うて奏せしむ、桓三たび調して去る主客共に一言を交へず、是れ子猷の高情賞すべき處なり　(一二)　高雅なる士も必ず修染する所あるをいふ　(一三)　宋の周濂溪は蓮を以て花の君子となせり　(一四)　周濂溪自ら世俗に汚されざる蓮のどろの中より拔け出でたるが故に蓮を君子とせるなり　(一五)　男子は節操を保持するや否やを論ずべし、節操なければ男子にあらず　(一六)　松は霜雪を犯し巖然として立てるを以て正人といふなり　(一七)　松を犯すに霜雪を以てするも松は之が爲めに凋むことなければ妨げざるが如く、正人は艱苦の爲めに屈することなきをいふ　(一八)　東方朔東郭先生と號す、久しく詔を公車に待つ、貧寒にして衣履完からず雪中に行くに履上ありて下無し道中の人之を笑ふ　(一九)　山陰道士は王羲之のこと、王羲之は山陰の人故にいふ　(二〇)　世の事は說き來れば事々皆說きがたきをいふ　(二一)　世を逃れて退隱するに如かざるをいふ　(二二)　世の事は聽き來ればすべて人の言ふ事は聽くに忍びざるなり　(二三)　此れ亦世を遁れて退隱するをいふ、晉の孫楚が隱居せんとして石に枕し流に漱がんといふべきを誤りて漱レ石枕レ流といひしより出づ　(二四)　管輅は三國の時の魏の人なり、周易に明にして卜筮を善くす　(二五)　酒を飲む膽あるをいふ　(二六)　休文は沈約の字、南北朝時代の人、詩文を善くし四聲韻譜を著す　(二七)　詩魔は詩に耽溺するをいふ

同ニ鷄犬一爲レ仙。世法相拘。何異ニ鶴鵝爲一レ陣。○清恐ニ人知一。奇足ニ自賞一。○與レ客倒ニ金尊一。醉來一榻。豈獨客去爲レ佳。有レ人知ニ玉律一。廻レ車三調。何必相識乃再。笑ニ元亮之逐客何迂一。羨ニ子猷之高情可一レ賞。○高士豈盡無レ染。蓮爲ニ君子一。亦自出レ予ニ淤泥一。丈夫但論ニ持操一。松作ニ正人一。何妨三

陣を爲すに異ならん。(五)○清は人の知らんことを恐れ、奇は自ら賞するに足る。(六)○客と金尊を倒し、(七)醉ひ來る一榻、豈獨り客去るを佳と爲さん。人あり(八)玉律を知り、車を廻して三たび調す、何ぞ必ずしも(九)相識乃ち再びせん。(一〇)元亮の逐客何ぞ迂なるを笑ひ、(一一)子猷の高情賞すべきを羨む。(一二)○高士豈盡く染むこと無からんや。(一三)蓮を君子と爲すは、亦自ら(一四)淤泥より出づればなり。(一五)丈夫但ゝ持操を論ず、(一六)松を正人と作す、(一七)何ぞ犯すに霜雪を以てするを妨げんや。(一八)○東郭先生の履、一貧にして萬古の清に從ひ、(一九)山陰道士の經、片字にして千秋の重を收む。(二〇)○說き來れば事事應に說き難かるべし。(二一)齒を漱ぐに何如ぞや。(二二)聽き到れば聲聲聽くに忍びず、(二三)唯ゝ流に枕するあるのみ。(二四)○管輅飲まんことを請ひ後言ふ、名づけて(二五)酒膽と曰ふと。(二六)休文吟を以て瘦を致す、要するに是れ(二七)詩魔なり。

(一) 世俗のけがれたる情を一たび除き去ること (二) 桃源に在る鷄犬は亦仙味を帶ぶるが如きをいふ (三) 世間の禮法を以て拘束して自由にせざること (四) 鶴列鵝陣皆軍陣の名、鶴鵝の法に拘束せらるゝに同じきをいふ (五) 潔白の人は自ら潔白に滿足して人に知らるゝを欲まざるをいふ (六) 金尊に滿つる酒を飲み盡すこと、金尊は木を以

徹一。日。仙露明珠。詎能方二其朗潤一。○逸字是山林關目。用レ于二情趣一。則清遠多レ致。用レ于二事務一。則散漫無レ功。○宇宙雖レ寛。世途渺レ于二鳥道一。徵逐日甚。人情浮比二魚鱟一。○柳下蛾レ舟。花間走レ馬。觀者之趣。倍レ于二個中一。○問人情何似。曰。野水多レ于レ地。春山半是雲。問世事何似。曰。馬上懸二壺漿一。刀頭分二頓肉一。

世事何似と。曰く、馬上壺漿を懸け、刀頭肫肉を分つと。（二一）

（一）墨池は硯の中の墨汁を湛ふる窪みたる所、墨池の水寒くして氷を結ばんとすること （二）氷は筆上に結びて花の如くなれること （三）香爐の中に焚ける香の烟の浮ぶこと （四）風吹き來りて霧の如くかゝれる香烟を散ずること （五）五城十二樓も之に比すれば勝地といふべからず、故に之をえらびて取るべきなり （六）松風水月の景には未だその淸くして美しきを比ぶべきものなし （七）美しき露の光りかゞやく美しき珠 （八）その明朗にして水氣あるに比ぶべきのなきをいふ （九）逸は世俗を逸脱して俗氣なきこと （一〇）山林に關係したる大切なる名目なり （一一）風雅なる趣味のことに用ふるをいふ （一二）淸くして遠く世俗に離れておもしろき樣子の多きこと （一三）事務を打棄てゝ引きしまりもなきこと （一四）世を涉る途は鳥の通ふ道よりも尚ほ狹くして遠きこと （一五）徵逐は往來して人の歡心を失はざるに務むること （一六）魚鱟は蓋し魚の名、能く水上に浮ぶ、此は人情の輕薄なることは魚鱟に比すべきをいふ （一七）見物する人の趣味 （一八）舟を艤し馬を走らするものに倍して趣味あること （一九）人情は何如なるものなるかを問ふなり （二〇）原野を流るゝ水は地に漫りて多く又春山の半ば雲に蔽はれたるが如し、即ち人情の漠然として眞相を視るべからざるをいふ （二一）馬上に壺に盛りたる漿を懸け、刀の先きにて乾肉を切るが如きなり、原文頓は肫の誤、乾肉の全きものを肫肉といふ

塵情一破。便

（一）塵情一たび破れば、便ち（二）鷄犬仙と爲るに同じ。（三）世法相拘れば、何ぞ（四）鶴鵝の

有二規則一。茅亭草舍。棘垣竹籬。構列無レ方。淡宕如レ畫。花間二紅白一。樹無二行款一。徜徉灑落。何異二仙居一。

るとこと　〔四〕樹は行列をなして羽列なることなく亂雜にあるをいふ　〔五〕徜徉はゆつたりとして満足すること、洒落はさつぱりとして清きこと

墨池寒欲レ結。冰分二筆上之花一。爐篆氣初浮。不散二簾前之霧一。〇青山在レ門。白雲當レ戶。明月到レ牕。涼風拂レ座。勝地皆仙。五城十二樓。轉覺二揀擇一。〇何爲二聲色俱清一。曰。松風水月。未レ足レ比二其清華一。何爲二神情俱

(一)墨池寒くして結ばんと欲し、(二)冰は筆上の花を分つ。(三)爐篆の氣初めて浮び、(四)簾前の霧を散ず。〇青山門に在り、白雲戶に當り、明月牕に到り、涼風座を拂ふ、勝地皆仙なり。(五)五城十二樓、轉た揀擇を覺ゆ。〇何をか聲色俱に淸しと爲す。曰く、松風水月、未だ其淸華を比するに足らず。(六)何をか神情俱に徹すと爲す。曰く、(七)仙露明珠、詎ぞ能く其朗潤を方べん。(八)〇逸の字は是れ山林の關目、(九)情趣に用ふれば、則ち淸遠にして致多く、事務に用ふれば、則ち散漫にして功無し。〇宇宙寬しと雖も、世途は鳥道より渺なり。徵逐日に甚しく、人情の浮なることと魚鱉に比す。〇柳下に舟を艤し、花間に馬を走らすは、觀者の趣、個の中に倍す。〇問ふ人情何似と。曰く、野水池に多く、春山半ば是れ雲なりと。問ふ

○花間雨過。蜂黏二幾片薔薇一。柳下童歸。香散二數莖蒼蔔一。○幽人到處烟霞冷。仙子來時雲雨香。○落紅點レ苔。可レ當二錦褥一。草香花媚。可レ當二嬌姫一。草逆則山鹿溪鷗。鼓吹則水聲鳥囀。毛褐爲二紈綺一。山雲作二主賓一。○和レ根野菜。不レ讓二侯鯖一。帶レ葉柴門。奚輸二甲第一。○野築郊居。綽

あり。茅亭草舍(二九)、棘垣竹籬(三〇)、構列するに方無く(三一)、淡宕(三二)なること畫の如く、花は紅白を間へ、樹は行欸無し(三三)、徜徉洒落(三四)たるは、何ぞ仙居に異ならん。

(一) 秋色清くして之が爲めに病客の病を治療するを得べし (二) 春鳥の聲樂しくして愁人を喚びて樂ましむるをいふ (三) 我が心に會得してよくその理を悟ること (四) 強いてその語の意味を了解せんとせずして自然に之を了解すること (五) 證據のなきづさんなる語 (六) 故らに之を聽かんとはせずして聞ゆるまゝに聽くこと (七) 水鏡は水の淸くしてよく映ずるものをうつすこと鏡の如きをいふ、此はけがれたる容貌を淸き水鏡にて洗ひ去ること (八) 山の淡き眉黛を塗れるが如き美しき景色を拭ひて一層美ならしむると (九) 花の芳香を尋ね求むる者 (一〇) 奥深き山の小路に在る蘭の花を追ひ求む (一一) 風雅なるおもむきを識る者 (一二) 竹は最も風雅のおもむきあるが故に深山に生ずる竹を窮め求むるなり (一三) 薔薇の花にくつつきて離れざること (一四) 薝蔔は花の名、その香氣最強し (一五) 烟霞の淸く靜かなると (一六) 雲も雨も共に香氣あると (一七) 落ちたる紅色の苔の上に點々として散在すること (一八) 錦を以て作れるしとねに似たるをいふ (一九) 媚び來る愛嬌のある女子 (二〇) 我心に逆はずして順ふ親しき友 (二一) 山中に棲める鹿、溪川に浮べる鷗 (二二) 皷を擊ち笛を吹きて氣勢を皷舞するもの (二三) 毛を以て織りたる布の衣服にて賤者の服するもの之を以て、あや絹の衣服の如くに思ふ (二四) 山中の雲の往來するを以て主人と賓客とを代ふること (二五) 侯鯖は肉をよせあつめて煮たる美味なり (二六) 第一の第宅に劣らざること (二七) 田野に築きたる屋舍、市はづれの住居 (二八) 綽は餘裕あること (二九) 草ぶきのつまらぬ亭舍 (三〇) 棘(イバラ)の垣、竹を繞らしたる籬 (三一) 之を構ふるには一定の規則なきをいふ (三二) あつさりとしてあらめに大な

佯一。○花影零亂。香魂夜發。囅然而喜。燭已燼。不レ能レ寐也。○花陰流レ影。散爲二半坪舞衣一。水响飛レ音。聽來一溪歌板。

舞ふが如きをいふ　(一七) 水沫は音を飛ばして響きわたること　(一八) 溪水の流る丶音は板を打ち調子を取りて歌を唱ふるが如きをいふ

一片秋色。能療二病客一。半聲春鳥。偏喚二愁人一。○會心之語。當下以二不解一解上レ之。無稽之言。是在二不聽一聽耳。○雲落二寒潭一。滌二塵容於水鏡一。月流二深谷一。拭二淡黛於山粧一。○尋レ芳者。追二深逕之蘭一。識レ韵者。窮二深山之竹一。

一片の秋色(一)能く病客を療し、半聲の春鳥(二)偏に愁人を喚ぶ。○會心(三)の語は、當に不解(四)を以て之を解すべし。無稽(五)の言は、是れ不聽(六)に作りて聽くのみ。○雲は寒潭に落ちて、塵容(七)を水鏡に滌ふ。月は深谷に流れて、淡黛(八)を山粧に拭ふ。○芳(九)を尋ぬる者は、深逕(一〇)の蘭を追ひ、韵(一一)を識る者は、深山(一二)の竹を窮む。○花間雨過ぎて、蜂は幾片の薔薇(一三)に黏し、柳下童歸りて、香は數莖の菡萏(一四)より散ず。○幽人到る處烟霞(一五)冷かにして、仙子來る時雲雨(一六)香し。○落紅(一七)苔に點ずるは、錦褥(一八)に當つべし。草香しく花嫺ぶるは、嬌姫(一九)に當つべし。莫逆(二〇)は則ち山塵(二一)溪鷗、鼓吹(二二)は則ち水聲鳥囀(二三)、毛褐を紈綺(二四)と爲し、山雲を主賓と作す。○根を和する野菜は、侯(二五)鯖に讓らず。葉を帶ぶる柴門(二六)は、奚ぞ甲第に輸らん。○野築(二七)郊居(二八)、綽として規則

幾在二山月吐
時一。眼界放開
來。只好向二水
雲一流處一。○劉
伯倫携レ壺荷レ
鍤。死則埋レ我。
眞酒人哉。王
武仲閉レ關護レ
花。不レ許二踏破一。
眞花奴耳。○
一犂秋雨。一
聲秋雁。消二不レ
得三一室清燈一。
一月春花。一
鋪春草。繞二亂
却一生春夢一。
○天桃紅杏。
一時分二付東
風一。翠竹黃花。
從レ此永爲二閒

し得ず。一月の春花(一七)、一舗の春草(一八)、一生の春夢を繞亂却す(一九)。○天桃紅杏、一時東風に分付す(二〇)。翠竹黃花、此より永く閒作と作る(二一)。○花影零亂し(二二)、香魂夜發すれば(二三)、囅然として喜び(二四)、燭已に燼して寐ぬること能はざるなり(二五)。○花陰影を流し、散じて半院の舞衣と爲り(二六)、水响音を飛ばし、聽き來れば一溪の歌板なり(二七)(二八)。

一 すぐれて清きこと 二 羅浮は今の廣東省の增城縣に在り、梅花を以て名あり 三 妖魂は美しき魂魄、梅の異名なり 四 物寂しくしてまばらなること 五 湘妃は舜の妃娥皇女英なり、相傳ふ舜蒼梧に崩ず、二妃追ひ至り、帝を哭すること極めて悲しく涙竹に染まる、故に湖水の上に在る竹は斑々として涙痕の如しといふ 六 貧窮にして愁ひ苦む才子の生活なり 七 物の整備したる日も饑饉年の如く滿足せざるをいふ 八 山上に隱居して山の事を熟知したる人 九 一筋のよく熟知せる路なり 一〇 志を得て喜び樂まんとして未だ得ざること 一一 山より月の出づる景を見れば喜び樂みて眉を揚ぐべしとなり 一二 眼にて見ゆる場所のひろくなること 一三 水上にかかれる雲の水の流れゆくが如く動き行くこと 一四 劉伯倫は西晉の人酒を好み酒德頌を作れり 一五 花の奴隸の意 一六 一聲の秋雨の降る聲と、一聲の秋の雁の啼きわたる聲とは、之が聽かんが爲めに一室の清き燈火を消し得ずして之を點ずるをいふ 一七 一ケの月の照らす春の花の景 一八 一區域の中に生ずる春草 一九 一生の春の夢の中にめぐり纏ひて離れざるをいふ 二〇 わか〱しく盛美なる桃花と紅色の杏花とは一時春風に分ち與へて春風にまかすこと 二一 閒散なる友人となすこと 二二 花の影の落ち亂るゝこと 二三 花の香しき氣が發すること 二四 囅然は大に笑ふ貌 二五 燭は已にもえ盡してもえくずのみ殘ること 二六 花の散りて舞ふこと舞衣を着て

清之韵。儘可レ節ニ清歌一清中俗耳。○高ニ臥酒樓ー。紅日不レ催ニ詩夢醒ー。漫ニ書花榭ー。白雲恒帶ニ鬱痕香ー。○相ニ美人一如レ相レ花。貴三清艶而有ニ若レ遠若レ近之思ー。看ニ高人一如レ看レ竹。貴三瀟洒而有ニ不レ疎不レ密之致ー。

(一八) 立派なる衣服を着けたり飾を附くること (一九) 方外は世を棄てたる道士 (二〇) 東鄰は器物を備ふること (二一) 名利を餌にして貴權に求めんとするをいふ (二二) 山寺に在る磬、磬は石を以て作る樂器なり (二三) 綠色の玉を以て作れるにあらざること (二四) その聲の打沈みて靜に又はつきりとして且聲の輕く清きこと (二五) 大に清らかなる歌の調子を取るをいふ (二六) 紅日の升るも詩の醒けるを催すものなし、此は常に詩に作りて樂むをいふ (二七) 花の開ける中に在る物見臺に書架すること (二八) 花榭に往來する白雲は常に墨の香氣をもつこと (二九) 清く美しき色あること (三〇) さつぱりとして清きこと

梅稱ニ清絶ー。多ニ却羅浮一段妖魂ー。竹本蕭疎。不レ耐ニ湘妃數點涙痕ー。○窮愁才生活。整日荒年。老山人出遊。一派熟路。○眉端揚未レ得。庶

梅は清絶(一)と稱するも、羅浮(二)一段の妖魂(三)を多却す。竹は本と蕭疎(四)にして、湘妃(五)數點の涙痕に耐へず。○窮愁才(六)の生活は、整日(七)も荒年なり。老山人(八)の出遊(九)は、(九)一派の熟路なり。○眉端(一〇)揚げんとして未だ得ず。庶幾くば山月(一一)の吐く時に在り。○眼界放開(一二)し來り、只ゝ好し水雲(一三)の流るゝ處に向ふ。○劉伯倫(一四)壺を携へ鍤を荷ひ、死せば則ち我を埋めよといふ、眞に酒人なる哉。王武仲關を閉ぢ花を護り、踏破するを許さず、眞に花奴(一五)のみ。○一聲(一六)の秋雨、一聲の秋雁、一室の清燈を消

雪満㆓峯山㆒。夜登㆓庾亮之樓㆒。月明㆓千里㆒。○帝子之望㆓巫陽㆒。遠山過㆑雨。王孫之別㆓南浦㆒。芳草連㆑天。）名妓翻㆑經。老僧釀㆑酒。書生借㆑箸談㆑兵。介冑登㆑高作㆑賦。羨㆓他雅致偏増㆒。屠門食㆑素。駔儈論㆑文。斷養盛服領縁。方外束脩懷㆑刺。令㆓我風流頓減㆒。○山房之磬。雖㆑非㆓緑玉㆒。沈明輕

屠門(一五)素を食ひ、駔儈(一六)文を論し、斷養(一七)盛服(一八)領縁し、方外(一九)束脩(二〇)刺を懷にするや(二一)、我風流をして頓に減ぜしむ。○山房(二二)の磬、緑玉に非ずと雖も、沈明輕清(二四)の韻、盡〻(二五)清歌を節し俗耳を清くすべし。○酒樓(二三)に高臥し、紅日(二六)詩夢の醒むるを催さず。花榭(二七)に漫書し、白雲(二八)恒に墨痕の香を帶ぶ。○美人を相するは花を相するが如し。清艶(二九)にして遠きが若く近きが若きの思あるを貴ぶ。高人を看るは、竹を看るが如し。瀟洒(三〇)にして疎ならず密ならざるの致あるを貴ぶ。

(一) 小舟に空しく我が身を載せて水をわたること (二) 源は盡し渉の誤、渡し場を渡り行けども我が身の愁は之を解き去りがたきをいふ (三) 獨り杖をつきて深く進み入ること (四) 山中の烟雲を手に取るが如くに近く之を賞しまゝ山水烟雲の景我が夢の中に入るをいふ (五) 幽堂は閒靜たる室 (六) 清き風が忽ち好き友を來らしむること、此は清風の來る卽ち好伴の來るなり (七) 明月の窗に入り來るは故人の來るに劣ることなしとの意 (八) 漢の時梁の孝王好んで宮室苑囿を作りて之を樂めり (九) 庾亮は東晉の人、風格峻整江州に鎭たる時樓を建て揚子江に臨めり、今の江西省九江縣に在りしといふ (一〇) 南浦は今の湖北省武昌縣に在り (一一) 美しき妓女が佛經を誦して讀むこと (一二) 張良の故事、書生が帝王の前に在る箸を借りて以て指畫して以て兵事を談ずること (一三) 介冑を着けたる軍人が高丘に登りて詩を賦すること (一四) 雅致は風雅なるおもむき (一五) 肉を屠りて賣る者が肉なき食を食ふこと (一六) 駔儈は慾がしこき仲買人なり (一七) 養は賤しき下部のもの、斷は薪炭を執るもの養は飲食の事を執るもの

之杖。苔磯垂レ釣。紅翎問二白鷺之簑一。○晩村人語。遠歸二白社之烟一。曉市花聲。驚二破紅樓之夢一。○案頭峰石。四壁冷浸二烟雲一。何與二胸中丘壑一。枕邊溪澗。半床寒生二瀑布一。爭如二舌底鳴泉一。

扁舟空載。瀛二却關津一。不レ稅レ愁。孤杖深穿。攪二得烟雲一間入レ夢。○幽堂晝密。清風忽來。好伴一虛牕夜朗。明月不レ減二故人一。○曉入二梁王之苑一。

（一七）烏藤は杖の名、綠色の玉を烏藤の杖に嵌むること（一八）苔の生ずる水邊に釣絲を垂れて魚を釣ること（一九）紅色の羽の鳥が白き鷺の簑を着きたるが如き間にまじはれること（二〇）社は土神を祀れる神社にして白色なるを以て白社をいふ、此は夕方村中にて語れる人の言語は遠く白社の烟の中にきえ行くをいふ（二一）朝方市中の花賣る聲は女子どもの居る紅樓の夢を驚かして目を覺まさしむること（二二）机のほとり（二三）四方の壁は冷かに山にかかれる烟雲の爲めに浸さるゝなり（二四）我が胸中に在る山水の思想をいふ（二五）床の中に寒く瀑布の生じたるが如く溪川の流るゝこと（二六）舌底の鳴泉は蓋し辯論水の流るゝが如きをいふ

扁舟空しく載せ、關津を瀛却し、愁を稅かず。孤杖深く穿ち、烟雲を攪り得て、間〻夢に入る。○幽堂晝密にして、清風忽ち好伴を來たらし、虛牕夜朗にして、明月故人に減ぜず。○曉に梁王の苑に入れば、雪草山に滿ち、夜庾亮の樓に登れば、月千里に明なり。○帝子の巫陽を望むや、遠山雨過ぎ、王孫の南浦に別るゝや、芳草天に連る。（重出）○名妓經を飜へし、老僧酒を釀し、書生箸を借りて兵を談じ、介冑高に登りて賦を作り、他の雅致偏に增すを羨み、

棹方停。忽聞二新漲之波一。一葉仍飄二烟水一。○旨愈濃而情愈淡者。霜林之紅葉。臭愈近。而神愈遠者。秋水之白蘋。○龍女濯二冰綃一。一帶水痕寒不レ耐。姮娥携二寶藥一。半甕月魄影猶香。○山館秋深。野鶴唳殘清夜月。江園春暮。杜鵑題斷落花風。○石洞尋レ眞。綠玉嵌二烏藤

へず、姮娥(一三)寶藥を携ふ、半甕(一四)の月魄影猶ほ香し。○山館秋深く、野鶴唳き殘る(一五)清夜の月、江園の春暮れて、杜鵑啼き斷ゆ(一六)落花の風。○石洞に眞を尋ぬれば綠(一七)玉烏藤の杖に嵌め、苔磯(一八)釣を垂るれば、紅鮹白鷺(一九)の簑に間はる。○晩村の人語、遠く白社(二〇)の烟に歸し、曉市(二一)の花聲、紅樓の夢を驚破す。○案頭(二二)の峰石、四壁(二三)冷かに烟雲に浸さる。何ぞ胸中の丘壑(二四)に與らん。枕邊の溪澗、半床(二五)寒く瀑布を生ず。爭でか舌底(二六)の鳴泉に如かん。

(一) 人の笑ひを得るは眞情にあらずして人の愁ふる是れ眞情なるをいふ　(二) 生命をすてゝその人の爲めにはたらくこと　(三) 功ある人は死力を盡さずして過あるの人は之を償はんとして死力を効すなり　(四) 草鞋を甫きて足にかけて出發せんとすること　(五) 山の八合目の處の景色の佳きを想像する　(六) 雨足は雨の至らんとすること、雨の降る模樣が山にかゝれる雲を纏ること　(七) 木蘭を以て作れる舟楫、舟漕ぐことを停むると　(八) 一枚の木の葉の如き小舟は霞たなびく水の上に飄り泛ぶこと　(九) 趣味の愈々濃厚にして風情の愈々淡泊なること　(一〇) 臭氣の愈々近くわたりてその心は愈々深きこと　(一一) 白き花の咲ける水草なり　(一二) 龍女法華經に出づ、氷綃はその色の清く鮮なること氷の如き薄絹、此は龍女が氷綃を濯へるが如き極めて清き水をいふ　(一三) 姮娥は人の名、羿不死の藥を西王母に得たり姮娥之を竊みて月宮に奔れり　(一四) 半甕は寶藥の字より來る、甕の如き月もその影香しきなり　(一五) 唳殘は鶴の唳き聲の盡きざること　(一六) 杜鵑の啼きやみたる時風の吹き來りて花を散らすをいふ

來楡莢。〇午夜無人知處。明月催詩。三春有客來時。香風散酒。〇如何清世界。一泓碧水含空。那可斷遊踪。半砌青苔帶雨。〇村花路柳。遊子衣上之塵。山霧江雲。行李擔頭之色。

度すること（九）欸乃は舟父の歌ふ舟歌なり（一〇）壘に起りて止め得られざるをいふ（一一）纏頭は歌舞の人を賞するもの、俗にいふ「ハナ」なり（一二）松葉の「カンザシ」に似たるもの、釵は股になれる「カンザシ」なり（一三）楡の木の莢（サヤ）は其形圓圓にして垂れ串を成し錢に似たり故に楡錢といふ、楡錢を拾ひ來りて之を以て酒價を償ふなり（一四）午夜は夜半の頃（一五）明月を見て詩を作る情を催し來りて詩を作る（一六）三春は春三ケ月の間なり（一七）花の香る風の吹き來りて酒氣を散らすこと（一八）一つの池の清き水の中に天空の景色がうつること（一九）かかる佳景あれば遊びに行く足跡を絶つを得べからず（二〇）石だゝみの半ばは青苔生じて雨のかゝれるさま得も言はれぬ風情あり（二一）村落に咲ける花と、路ばたに在る柳の景（二二）旅人の衣服の上にかゝれる塵（二三）山にかゝれる霧と江上にたなびく雲の景（二四）行李は旅人の荷物、擔頭は行李を擔へるあたりの風情

何處得眞情。買笑不如買愁。誰人効死力。使功不如使過。〇芒鞋甫挂。忽想翠微之色。兩足復繞山雲。

何の處にか眞情を得る、（一）笑を買ふは愁を買ふに如かず。誰人か死（二）力を効す、（三）功を使ふは過を使ふに如かず。〇（四）芒鞋甫めて挂けて、忽ち（五）翠微の色を想ひ、（六）雨足復た山雲を繞る。（七）蘭棹方に停まりて、忽ち新漲の波を聞き、（八）一葉仍ほ烟水に飄る。〇（九）旨愈ゝ濃にして情愈ゝ淡き者は、霜林の紅葉にして、（一〇）臭愈ゝ近くして神愈ゝ遠き者は、秋水の（一一）白蘋なり。〇（一二）龍女氷綃を濯ふ、一帶の水痕寒きに副

蓬牕夜啓。月白於霜。漁火沙汀。寒星如聚。忘却客子作楚。但欣烟水留人。○無欲者其言淸。無累者其言達。口耳巽入。靈竅忽啓。故曰。不爲俗情所染。方能說法度人。○臨流曉坐。欸乃忽聞。山川之情。勃然不禁。○舞罷纒頭何所贈。折得松釵。飲餘酒債莫能償。拾

(一)蓬牕夜啓けば、月は霜より白く、(二)漁火沙汀、寒星聚るが如し。(三)客子の楚作るを忘却し、(四)但烟水人を留むるを欣ぶ。○欲無き者は其言淸く、(五)累無き者は其言達し、(六)口耳巽入すれば、(七)靈竅忽ち啓く。故に曰く、俗情の爲めに染められずして、方に能く(八)法を說きて人を度すと。○流に臨みて曉に坐すれば、(九)欸乃忽ち聞え、山川の情、(一〇)勃然として禁へず。○舞ひ罷みて(一一)纒頭何の贈る所ぞ。(一二)松釵を折り得たり。飲餘の酒債能く償ふ莫く、(一三)楡莢を拾ひ來る。○(一四)午夜人の知る無き處、(一五)明月に詩を催し、(一六)三春客あり來る時、(一七)香風酒を散らす。○如何なる淸世界ぞ、(一八)一泓の碧水空を含む。(一九)那ぞ遊踪を斷つべけんや。(二〇)半砌の青苔雨を帶ぶ。○(二一)村花路柳、(二二)遊子衣上の塵、(二三)山霧江雲、(二四)行李擔頭の色。

㈠ 篷を以て蔽へる舟の牕を夜に至りて開くこと ㈡ 漁父の火の照らす沙河原の水ぎはの處 ㈢ 客子は旅人なり、旅人の楚國の人たるを忘れてその地にもとより住めるが如く思ふこと ㈣ 霞のかゝれる水邊の景色極めて佳きがため人の留まるは烟水の人を引き留めたるが如し ㈤ 心に係累のなきものはその言ふ所理に通達するなり ㈥ 口に言ふ所耳より順ひ入りて逆はざること ㈦ 靈竅は心のこと、心に悟るをいふ ㈧ 佛法を說きて人を濟

閉ㇾ閤計。一閤手掌大。草木蒙茸。禽魚來往。矮屋臨ㇾ水。展ㇾ書匡坐。幾乎下避ㇾ秦與二人世一隔上。○山上須ㇾ泉。徑中須ㇾ竹。讀ㇾ史不ㇾ可ㇾ無ㇾ酒。談ㇾ禪不ㇾ可ㇾ無二美人一。○幽居雖ㇾ非ㇾ絶ㇾ世。而一切使令供具。交游晤對之事。似ㇾ出二世外一。花爲二婢僕一。鳥爲二笑談一。溪漱澗流。代二酒餚烹享一。書史作二師保一。竹石資二友朋一。雨聲雲影。松風蘿月。爲二一時豪興之歌舞一。情境固濃。然亦清華。

づるに似たり。花を婢僕と爲し、鳥を笑談と爲し、溪漱澗流(二〇)は、酒餚烹享(二一)に代へ、書史は師保と作し(二二)、竹石は友朋に資し、雨聲雲影、松風蘿月(二三)は、一時豪興(二四)の歌舞と爲す、情境固より濃なれども(二五)、然れども亦淸華(二六)なり。

(一) 沈水は沈香のこと、木を水に浸して後刻むを以て沈水といふ (二) 沈香の火の見えざるやうにすること (三) 寥全幽香の妙奥 (四) 苔石の上に蘚やかづらの相纏ふこと (五) 土牆のあたりにつたかづらの相離ふこと (六) 奥ゆかしきおもむき (七) 世間富貴利害等の外の趣味なり (八) 極めて靜かにして意に適すること (九) 世俗を超越して俗に交らざること (一〇) 閤は門なり、門を閉づること (一一) 手掌の大いさにて極めて小なるをいふ (一二) 草木の生ひ茂れること (一三) 矮屋は低くして小なる家屋 (一四) 匡坐は正しく坐すること (一五) 武陵の桃源中に住める人が先世秦の亂を避けて山中に入り遂に人世と隔たりて別世界を爲すに至ると同一なり (一六) 山上には泉あるを必要とすること (一七) 世を遁れて隱居するは世と交通するを謝絶するにあらず (一八) 使令は召使のもの、供具は供へ用ふる器具 (一九) 交際すること、人に面會すること (二〇) 溪川にて口すゝぎ洗ふこと (二一) 酒餚は酒及酒のさかな、烹享は烹たきして享應すること (二二) 書物を以て我が教師傅役とすること (二三) 松吹く風とかづらにかゝれる月 (二四) 豪興はおごりたる興趣なり (二五) その趣味と境遇とは淡泊にあらざること (二六) 清華は淸らかにして華美なること

蘿月宜二隱逸一。
桂月宜二俊英一。
山月宜二老衲一。
湖月宜二良朋一。
風月宜二楊柳一。
雪月宜二梅花一。
片月宜二花梢一。宜二樓頭一。宜二淺水一。宜二杖藜一。宜二幽人一。宜二孤鴻一。滿月宜二江邊一。宜二苑內一。宜二綺筵一。宜二華登一。
宜二醉客一。宜二妙妓一。

る寢室のこと （一三）紗厨は我が邦の蚊帳なり、紗を以て作り蚊蟲を避くべくその形厨に似たり （一四）曲りたる欄檻にうつれる月 （一五）絃索は琴瑟琵琶の類、絃絲によりて聲を發するもの （一六）關所ある所の山を照す月 （一七）蒙古の沙漠を照す月 （一八）刁斗は軍中にて用ふるもの、晝は飲食を炊き、夜は之を擊ちて衆を警むる器なり （一九）かつらに映ずる月 （二〇）桂の樹にうつれる月 （二一）藜を以て作れる杖をつきて散歩するときに宜しきこと （二二）世を遁れて隱れたる世棄て人なり （二三）美麗なる牀上のこと

佛經云。細燒二沈水一。毋レ令レ見レ火。此燒香三昧語。○石上藤蘿。墻頭薜荔。小窓幽致。絕勝二深山一。加以二明月清風一。物外之情。儘堪二閒適一。○出世之法。無レ如二

佛經に云ふ、細く（一）沈水を燒きて、（二）火を見しむること毋れと。此れ燒香三昧（三）の語なり。○石上（四）の藤蘿、墻頭（五）の薜荔、小窓（六）の幽致、絕だ深山に勝る。加ふるに明月清風を以てせば、物外（七）の情、儘閒適（八）に堪ふ。○出世（九）の法は、關を閉づるの計（一〇）に如くは無し。一園（一一）手掌の大、草木蒙茸（一二）し、禽魚來往し、矮屋（一三）水に臨む。書を展べて匡坐（一四）すれば、秦（一五）を避けて人世と隔つるに幾し。○山上（一六）は泉を須ち、徑中は竹を須つ。史を讀みては酒無かるべからず。禪を談じては美人無かるべからず。○幽居（一七）は世を絕つに非ずと雖も、而も一切の使令供具（一八）、交游晤對（一九）の事、世外に出

沙一。宜二濯釣一。宜二苔階一。宜二花砌一。宜二小酌一。宜二清談一。宜二長嘯一。宜二獨往一。宜レ搔レ首。宜レ促レ膝。春月宜二尊彜一。夏月宜二枕簟一。秋月宜二砧杵一。冬月宜二圖書一。樓月宜レ簫。江月宜レ笛。寺院月宜レ笙。書齋月宜レ琴。閨閣月宜二紗廚一。勾欄月宜二紘索一。關山月宜二帆檣一。沙場月宜二刁斗一。花月宜二佳人一。松月宜二道者一。

長嘯に宜しく、獨往に宜しく、首を搔くに宜しく、膝を促す(九)に宜し。春月は尊彜(一〇)に宜しく、夏月は枕簟に宜しく、秋月は砧杵(一一)に宜しく、冬月は圖書に宜しく、樓月は簫に宜しく、江月は笛に宜しく、寺院の月は笙に宜しく、書齋の月は琴に宜しく、閨閣(一二)の月は紗廚(一三)に宜しく、勾欄(一四)の月は紘索(一五)に宜しく、關(一六)山の月は帆檣に宜しく、沙場(一七)の月は刁斗(一八)に宜しく、花月は佳人に宜しく、松月は道者に宜しく、蘿月(一九)は隱逸に宜しく、桂月は俊英に宜しく、山月は老衲に宜しく、湖月は良服に宜しく、風月(二〇)は楊柳に宜しく、雪月は梅花に宜しく、片月は花梢に宜しく、樓頭に宜しく、淺水に宜しく、杖藜(二一)に宜しく、幽(二二)人に宜しく、孤鴻に宜しく、滿月は江邊に宜しく、苑内は宜しく、綺筵(二三)に宜しく、華燈に宜しく、醉客に宜しく、妙妓に宜し。

(一) 清らかなる深き水の淵　(二) 壁を立てたるが如き險しき崖　(三) 高き樓閣　(四) 坦平たる物見臺　(五) 窓にかけたる紗　(六) 欄をかくる曲り金　(七) 苔の生じたる階段　(八) 花を栽えたる砌　(九) 膝を進めて談話すること　(一〇) 尊彜は酒を容るゝ器、彜は雲雷の模樣を刻みたるもの　(一一) 杵を以てきぬたを打つこと　(一二) 奥の室中に在

晩眺。○醫二俗病一莫レ如レ書。贈二酒狂一莫レ如レ月。○明牕淨几。好香苦茗。有レ時與二高衲一談レ禪。荳棚菜圃。暖日和風。無レ事聽二閒人說一鬼。○花事乍開乍落。月色乍陰乍晴。興未レ闌。躊躇搔レ首。詩篇半拙半工。酒態半醒半醉。身方健。潦倒放懷。○松聲竹韻。不レ濃不レ淡。傾レ耳聽レ之。頓長二格價一。

放懐(一三)す。○松聲竹韻(一四)、濃ならず淡ならず、耳を傾けて之を聴けば、頓に格價(一五)を長ず。

㊀ 木にて作りたる枕は剛硬なるをいふ ㊁ 漆を其上に塗るをいふ ㊂ 莊子は蒙人なり、故に蒙莊といふ、此は莊子が胡蝶を夢みたる庵の如きをいふ ㊃ 華陽は、蓋し陶弘景の事、南北朝時代の人 ㊄ 小さき窗の上に月影のうつれるあたりをいふ ㊅ 牛渚は山の名、今の安徽省當塗縣に在り、掩映は月影の全體にうつること ㊆ 俗氣ありて風雅ならざること、書を讀めば俗氣の病を治療するを得べし ㊇ 酒狂は酒に沈湎する人、月色を觀て心を風雅にすれば酒狂の病を治療するを得べし ㊈ 明かなる牕淨き几に倚りかかり、好き香を焚き苦き茶を啜ること ㊉ 荳の棚、野菜の畑の中、日暖にして風和かなる時 (一一) 興味が未だ十分なるに至らざること (一二) 潦倒は事志の如くならず世と合はざるをいふ (一三) 放懐は我が心のまゝにすること (一四) 松にあたる風の聲と竹の聲とをいふ (一五) 格價は價値に同じく、その値うちを增すこと

月宜二寒潭一。宜二絶壁一。宜二高閣一。宜二平臺一。宜二牕

月は寒潭(一)に宜しく、絶壁(二)に宜しく、高閣(三)に宜しく、平臺(四)に宜しく、牕紗(五)に宜しく、簾鈎(六)に宜しく、苔階(七)に宜しく、花砌(八)に宜しく、小酌に宜しく、清談に宜しく、

詩草吟成二錦字一。燒レ竹煎レ茶。○良友相聚。或解レ衣盤礴。或分レ韵角レ險。頃レ之。寫二出青山一。吟二成麗句一。從レ傍品二題之一。大是開心事。

詩の文字が錦の如く奇麗に並べて作られたること (一七) 盤礴はあぐらを組みて坐すること (一八) 韻字を分ちて、詩を作るに險韻をくらぶること、險は險韻にて作りにくき韻字なり (一九) 詩中に青山の景を寫し出すこと (二〇) 奇麗なる詩を吟じ成すこと (二一) 品題は批評すること

木枕傲。石枕冷。瓦枕粗。竹枕鳴。以レ藤爲レ骨。以レ漆爲レ膚。其背圓而滑。其額方而通。此蒙莊之蝶庵。華陽之睡几。○小橋月上。仰吟二星光一。浮雲往來。掩三映于二牛渚之間一。別是一種

(一)木枕は傲り、石枕は冷かに、瓦枕は粗に、竹枕は鳴る。藤を以て骨と爲し、(二)漆を以て膚と爲し、其背圓くして滑に、其額方にして通ずれば、此れ(三)蒙莊の蝶庵、(四)華陽の睡几なり。○(五)小橋月上、仰いで星光を吟ずれば、浮雲往來して、(六)牛渚の間に掩映し、別に是れ一種の晩眺なり。○(七)俗病を醫するは書に如くは莫し。(八)酒狂に贈るには月に如くは莫し。○(九)明窓淨几、好香苦茗、時ありて高衲と禪を談じ、(一〇)荳棚菜圃、暖日和風、事なくして人の鬼を說くを聽聞す。○花事乍ち開き乍ち落ち、月色乍ち陰り乍ち晴る。(一一)興未だ闌ならず、躊躇して首を搔き、詩篇は半ば拙く半ば工に、酒態は半ば醒め半ば醉へば、身方に健にして、(一二)潦倒

差。黃鶴樓可ニ以不レ登。張懷民可ニ以不レ訪。滿庭芳可ニ以不レ歌。○茅屋竹牕。一榻清風邀レ客。茶爐藥竈。半簾明月窺レ人。○娟娟花露。曉濕ニ芒鞋一。瑟瑟松風。涼生ニ枕簟一。○綠若斜拔。桃葉渡頭。一片弄ニ殘秋月一。青帘高掛。杏花村裏。幾回典ニ却春衣一。○楊花飛入ニ珠簾一。帨巾洗レ硯。

べし。○茅屋竹牕(四)、一榻(五)の清風客を邀へ、茶爐藥竈、半簾(六)の明月人を窺ふ。○娟娟(七)たる花露、曉に芒鞋を濕し、瑟瑟(八)たる松風、涼(九)枕簟に生ず。○綠若(一〇)斜に拔く、桃葉渡頭(一一)、一片秋月を弄殘し(一二)、青帘高く掛る(一三)、杏花村裏、幾回か春衣を典却す(一四)。○楊花飛んで珠簾に入り、帨巾(一五)もて硯を洗ひ、詩草吟じて錦字(一六)を成し、竹を燒きて茶を煎る。○良友相聚り、或は衣を解きて盤礴(一七)し、或は韵を分(一八)ちて險を角べ、之を頃くして(一九)青山を貌出し(二〇)、麗句を吟成し、傍より之を品題(二一)す、大に是れ開心の事なり。

(一) 松の木影の大小揃はざること (二) 黃鶴樓は今の湖北省武昌縣に在り (三) 張懷民は蘇東坡の友人なり、此記事は蘇東坡の事を記せしなり (四) 茅を以て葺へる家屋、竹を打ちつけたる牕 (五) 一の椅子に清風の吹き來る時客を招待して盤礴すること (六) 半簾にうつれる明月は照し來りて人を窺ふが如し (七) 娟々は美好の貌、美しき花にかゝれる露 (八) 瑟々は風吹く聲 (九) 涼氣が枕や布物のあたりに生ずること (一〇) 若又翳に作る、竹の類、綠色の竹が斜に拔き靡くこと (一一) 桃の木の葉のある渡場のあたりに綠若の斜に拔くこと (一二) 一片の秋月の景を弄び觀て翫らんとすること (一三) 杏の花の咲ける村の中に酒家の靑き旗が高く掛かれること (一四) 春着る衣服を質に入れ金錢を借りて酒を買ひて飲むこと (一五) 帨は佩巾、今の手巾の類なり佩巾を以て硯を洗ひて拭ふこと (一六)

江干宜㆓帆影㆒。麓宜㆓烟嵐㆒。院落宜㆓楊柳㆒。寺觀宜㆓松篁㆒。溪邊宜㆓漁樵㆒。宜㆓鷺鷥㆒。花前宜㆓娉婷㆒。宜㆓鸚鵡㆒。宜㆓翠霧霏微㆒。宜㆓銀河清淺㆒。宜㆓萬里無㆑雲。長空如㆑洗。宜㆓千秋過雨。疊如㆑新。宜㆔高插㆓江天㆒。宜㆔斜連㆓城郭㆒。宜㆔開㆑窗眺㆓海日㆒。宜㆔露㆑頂臥㆓天風㆒。宜㆑嘯宜㆑詠。宜㆓終日敲㆒㆑棊。宜㆑酒宜㆑詩。宜㆓清宵對㆒㆑榻。

如きに宜しく、高く江天(一四)に挿むに宜しく、斜(一五)に城郭に連るに宜しく、牕を開いて海日を眺むるに宜しく、頂を露はして天風(一六)に臥するに宜しく、嘯くに宜しく、詠ずるに宜しく、終日碁を敲くに宜しく、酒に宜しく、詩に宜しく、清宵榻(一七)を對するに宜し。

（一）棲閣の上に住居すること（二）岩嶢は山のけはしく高き貌、軒敞ははれやかにして明るきこと（三）八方まで玉の如くすき通りて清きこと（四）萬物の外まで觀ずること（五）もや霞の外に在るすぐれたる貌（六）岸幘は額をあらはすやうに作りたる頭巾にて隱者の冠する冠なり（七）拂子を揮ひて老莊の談話をなすこと（八）江干は江水の近邊のこと（九）院落は垣墻を遶らしたる家屋（一〇）佛教の殿宇を寺と云ひ道教の殿室を觀といふ（一一）娉婷は美女なり（一二）翠の樹にかゝれる霧うすくたなびくこと（一三）雨霽りたる翠色の新なるが如く清きこと（一四）山の高く江水の天の上に抜き出て聳ゆること（一五）斜に城郭の相連續するが如きこと（一六）頭巾を被らず頭の頂を露はして天吹く風の來る處に臥すること（一七）清き夜寢臺に在りて相對すること

良夜風清。石床獨坐。花香暗度。松影參

良夜風清く、石床に獨坐すれば、花香暗に度り、松(二〇)影參差たり、黄(二一)鶴樓には以て登らざるべく、張(二二)懐民なくば以て訪はざるべく、滿庭の芳は以て歌はざる

夏飲宜ㇾ洞。秋飲宜ㇾ舟。冬飲宜ㇾ室。夜飲宜ㇾ月。○醸酒以待二病客一。辣酒以待二飲客一。苦酒以待二家客一。淡酒以待二清客一。濁酒以待二俗客一。

氣の時酒を飲むこと（一七）愁飲は心に愁あるとき酒を飲むこと（一八）町はづれの野原にて酒を飲むに宜しきこと（一九）醸酒は家にて醸したる酒なり（二〇）辣酒はからく強き酒なり（二一）苦酒は苦味を持ちたる酒なり（二二）淡酒は淡泊にして酒力の弱き酒なり

仙人好二樓居一。須下岧嶢軒敞。八面玲瓏。舒ㇾ日披ㇾ襟。有中物外之觀。霞表之勝上。宜ㇾ對ㇾ山。宜ㇾ臨ㇾ水。宜ㇾ待ㇾ月。宜ㇾ觀ㇾ霞。宜二夕陽一。宜二雪月一。宜二岸幘觀一ㇾ書。宜二倚ㇾ欄吹一ㇾ笛。宜二焚ㇾ香靜坐一。宜二揮ㇾ麈清談一。

仙人は樓居を好む、須らく岧嶢軒敞（一）、八面玲瓏（二）、日を舒べ襟を披き（三）、物外の觀（四）、霞表の勝あるべし。山に對するに宜しく、水に臨むに宜しく、月を待つに宜しく、霞を觀るに宜しく（五）、夕陽に宜しく、雪月に宜しく、岸幘して（六）書を觀るに宜しく、欄に倚りて笛を吹くに宜しく、香を焚きて靜坐するに宜しく、麈を揮ひて（七）清談するに宜しく、江干にては（八）帆影に宜しく、麓にては烟嵐に宜しく、院落にて（九）は楊柳に宜しく、寺觀にては松篁に宜しく（一〇）、溪邊にては漁樵に宜しく、鷺鷥に宜しく、花前にては娉婷に宜しく（一一）、翠霧の霏微に宜しく（一二）、銀河の清淺に宜しく、萬里雲無く長空洗ふが如きに宜しく、千秋の過雨疊翠新なるが（一三）

也。醉文人。宜謳□奏。畏其侮也。醉俊人。宜益觥盂如旗幟。助其烈也。醉樓宜暑。資其清也。醉水宜秋。泛其爽也。此皆審其宜。攷其景侯。○插花著瓶中。令俯仰高下。斜正疎密。皆有意態。得畫家寫生之趣。方佳。○法飲宜舒。放飲宜雅。病飲宜少。愁飲宜醉。春飲宜郊。

り。水に醉ふには秋に宜し。(九)其爽を泛ぶればなり。此れ皆其宜しきを審にし、其の景を攷ふるなり。○花を挿みて瓶中に著け、(一〇)俯仰高下、(一一)斜正疎密、皆(一二)意態あらしめ、(一三)畫家寫生の趣を得れば方に佳なり。○(一四)法飲は舒に宜しく、(一五)放飲は雅に宜しく、(一六)病飲は少きに宜しく、(一七)愁飲は醉ふに宜しく、(一八)春飲は郊に宜しく、夏飲は洞に宜しく、秋飲は舟に宜しく、冬飲は室に宜しく、夜飲は月に宜し。○(一九)醸酒以て病客を待ち、(二〇)辣酒以て飲客を待ち、(二一)苦酒以て豪客を待ち、(二二)淡酒以て清客を待ち、濁酒以て俗客を待つ。

(一) 日の光を窺りて一層光輝を放つをいふ (二) その和暢の氣を宣べはらすを (三) 詩歌は音樂の別名 (四) 詠を謳つはその精神を勇壯にするなり (五) その歌をうたひ音樂の調子を程よくとゝのふること (六) 其の才の千萬人にすぐれたる人 (七) 觥は角を以て作りたる杯、盂は食物を盛る器 (八) 旌旗旗幟の如く列ねば其壯烈なる元氣を助くるなり (九) 其のさつぱりとして心持よき氣分を水に泛ぶるが如きこと (一〇) 花の或は俯し或は仰ぎ或は高く或は低くくすること (一一) 或は斜に或は正しく、或はまばらに或は密接に插すること (一二) 面白き心ぐみ状態あらしむること (一三) 畫家が生物をそのまゝに寫し取りて我が意匠を加へざること (一四) 法飲は禮法を以て酒を飲むこと、舒は心ののんびりとしたること (一五) 放飲は勝手氣儘に酒を飲むこと、雅は風雅なること (一六) 病飲は病

淒然。紙牕竹屋。灯火靑熒。時于ニ此間一得ニ小趣一。○山鳥每夜五更。喧起五次。謂ニ之報更一。蓋山間眞率漏聲也。○分ν韵題ν詩。花前酒後。閉ν門放ν鶴。主去客來。

が盛んに開くをいふ　(七)　豪友は豪爽なる友人　(八)　心の澹泊にして欲寡き友人なり　(九)　世を逸脱し俗氣をはなれたる友人なり　(一〇)　心のわなしくさつぱりとしたる卽ち虛心の友人なり　(一一)　心の淸く靜かなる友人なり　(一二)　心のたをやかにして麗しき友人なり　(一三)　風流を好む友人なり　(一四)　藥方は藥の處方を書きたる書類なり　(一五)　閒暇の時吾が多病なるが爲めにあらずして閑を消するが爲めの意　(一六)　野史は民間の史家の作りたる歷史　(一七)　閒暇の時を偸みて讀むをいふ　(一八)　歲行は太歲のめぐり行くこと、此は一歲も最早盡きて終らんとすること　(一九)　風吹き雨降りて物寂しきこと　(二〇)　紙障子の牕、竹柱の家屋　(二一)　燈の火が靑くきら〳〵かゞやくこと　(二二)　五更は今の午前四時頃　(二三)　喧しく聲を揚げて起くること五度なり　(二四)　報更は時刻を報告すること　(二五)　眞率は作り飾のなきうぶなること、漏聲は時計の聲なり　(二六)　花の咲ける前にて酒を飲みたる後、韻を分ちて詩を作るをいふ

凡醉各有ν所ν宜。醉ν花宜ν晝。襲ニ其光一也。醉ν雪宜ν夜。淸ニ其思一也。醉ニ得意一。宜ν唱。宣ニ其和一也。醉ニ將離一宜ν擊ν鉢。壯ニ其神一

凡そ醉ふには各〻宜しき所あり、花に醉ふは晝に宜し、其光(一)を襲へばなり。雪に醉ふは夜に宜し、其思を淸むればなり。得意に醉ふは唱ふに宜し、其和(二)を宣ればなり。將離(三)に醉ふは鉢(四)を擊つに宜し、其神を壯にすればなり。文人に醉ふは節奏(五)を謹むに宜し、其侮を畏ればなり。俊人(六)に醉ふは、觥盂(七)を益し旗幟の如くするには宜し、其烈(八)を助くればなり。樓に醉ふは暑に宜し、其淸は資くればな

韻言一展卷間。恍坐冰壺而觀龍藏。○春來新筍抽。可供茶。雨後奇花肥。堪待客。○賞花須結豪友。觀妓須結澹友。登山須結逸友。汎水須結曠友。對月須結冷友。捉雪須結艷友。捉酒須結韵友。○問客寫藥方。非關多病。閉門聽野史。祇爲偸閑。○歲行盡矣。風雨

韻言(一)一展卷(二)の間、恍として(三)冰壺に坐して、龍の藏るゝを觀る。○春來新筍(四)抽きて、茶を供すべし。雨後奇花(五)肥えて、客を待つに堪へたり。○花を賞するには須らく豪友(六)と結ぶべし。妓を觀るには須らく澹友(七)と結ぶべし。山に登るには須らく逸友(八)と結ぶべし。水に汎ぶには須らく曠友(九)と結ぶべし。月に對するには須らく冷友(一〇)と結ぶべし。雪を捉るには須らく艶友(一一)と結ぶべし。酒を捉るには須らく韵友(一二)と結ぶべし。○客に問ひて藥方(一三)を寫すは、多病に關するに非ず。門を閉ぢて野史(一四)を聽くは、祇に閑を偸むと爲す。○歲行盡きぬ、風雨淒然(一五)たり。紙窓竹屋(一六)、灯火靑熒(一七)たり。時に此間に于て小趣を得たり。○山鳥每夜五更(一八)、喧起すること五次、之を報更(一九)と謂ふ。蓋し山間眞率(二〇)の漏聲なり。○韵を分ち詩を題す、花前酒後(二一)にす。門を閉ぢ鶴を放てば、主去り客來る。

(一) 詩歌など有韻の文章　(二) 一たび書物を展開して之を覽ること　(三) 恍はぼんやりとすること、冰壺は冰を壺の中に盛ること極めて淸きに喩ふ、此はぼんやりとして冰を盛りたる壺の中に坐するが如く極めて淸きをいふ　(四) 龍の藏れ消ゆるが如く此の中神變の妙の存するを觀ること　(五) 新しき筍の抽きんで生ずること　(六) めづらしき花

榻祛醒。○留連野水之烟。淡蕩寒山之月。○春夏之交。散行麥野。秋冬之際微醉稻場。欣麥浪之撲人。積翠直侵衣帶。快稻香之覆地。新醅欲溢尊罍。每來得趣于庄村。寧去置身於草野。○羈客在雲村。蕉雨點點。如奏笙竽。聲極可愛。山人讀易禮斗後。騎鶴以至。不滅聞韶也。○陰茂樹。濯寒泉。遡冷風。寧不爽然灑然。

し。聲極めて愛すべし。山人易を讀み斗(一七)に禮して後、鶴に騎りて以て至るは、韶(一八)を聞くに減ぜざるなり。○茂樹(一九)に陰し、寒泉(二〇)に濯ひ、冷風(二一)に遡れば、寧んぞ爽(二二)然灑然たらざらんや。

(一) 禪榻は坐禪する椅子なり (二) 一の禪榻の上にて自己の思ふまゝにして暮らすこと (三) 陳蕃は後漢の人榻を懸けて徐孺子(名は穉)の訪問するを待つて供せり (四) 孔休源は南北朝時代の人、晋安王の長史と爲る、王深く相倚仗す、嘗て齋中に於て別に一榻を施して云ふ、此は是れ孔長史の坐なりと、長史は孔休源を指す (五) 詩を好みて癖を成すを詩魔といふ、甚しく酒を嗜むを酒顚といふ (六) 此の禪榻によりて詩魔酒顚を覺醒すること (七) 田野の間を流るゝ水のあたりにかゝれる霞の留まりて動かざること (八) 寒山にかゝれる月の色のうつすらとして茫然たること (九) 散行は散歩に同じ (一〇) 麥畑の麥が浪打つ如く風に吹かれて動けること (一一) 麥の翠色が相重なりあふて我が衣服を侵し來ること (一二) 稻の香氣が地を覆うてわたること (一三) 新に釀したる酒が酒樽に溢れんとすること、罍は酒樽にて刻畫して雲雷の形を作るもの (一四) 農夫の住む村落なり (一五) 羈客は旅客なり、他國より來りたる旅客が雲のたなびける村に在るをいふ (一六) 芭蕉に雨がぽつ〳〵と降りかゝること (一七) 北斗星に對して禮すること (一八) 韶は舜帝の時の音樂なり、鶴の啼く聲の極めて淸くして美なるをいふ、減ぜざるは劣らざるなり (一九) 生ひ茂れる樹木の木蔭に坐すること (二〇) 寒冷なる泉の水にて身心を濯ひ淸むること (二一) 淸らかなる風に吹かれつゝ遡り行くこと (二二) 爽然は心の爽快なること、灑然のさつぱりとして淸きこと

橫レ江。情景淒絕。秋雁驚飛。秋色遠近。泊レ舟臥聽二沽レ酒呼レ盧。一切塵事。都是秋水蘆花。○萬綠陰中。小亭避レ暑。八闥洞開。几簟皆綠。雨過二蟬聲一。風來二花氣一。令二人自醉一。

泉の水が石を繞ぐりて波紋を作し一美しきをいふ　(一〇)目に見わたす限り蘆葦の生ずること　(一一)白き蘆江水の上に茫々としてわたること　(一二)その景色にすぐれて物さみしきをいふ　(一三)秋の氣色が遠近にわたり過ぎこと　(一四)賭博を爲すを呼盧といふ　(一五)世間すべての俗事は、秋水と蘆花に付して了はれたるをいふ　(一六)多くの木の青々として木蔭をなせる中　(一七)八方までつき通して明くること　(一八)几に倚り、依りかゝるもの、或は布き物　(一九)蟬の鳴く聲の中に雨の過ぎ行くこと　(二〇)風は花の香氣を吹き送り來ること

設二禪榻二一。一自適。一適二知朋一。朋若不レ至。則懸レ之。敢曰。陳蕃之榻。懸待二孺子一。長史之榻。專設二休源一。亦惟禪榻之側。不レ容レ著二俗人膝一耳。詩癡酒顚。賴二此

(一)禪榻二を設け、一は自ら適し、一は知朋に適す。朋若し至らずんば則ち之を懸け、敢て曰く、(二)陳蕃の榻、懸けて孺子を待つ、(三)長史の榻、專ら休源に設く、(四)亦惟禪榻の側、俗人の膝を著くべからざるのみ。(五)詩癡酒顚、此榻に賴りて(六)結醒すと。○留連す野水の烟、(七)淡薄たり寒山の月。○春夏の交、麥野に散行し、(八)秋冬の際、(九)稻場に微醉し、(一〇)滄浪の人を撲つを欣び、(一一)積翠直に衣帶を侵す、(一二)稻香の地を覆ふを快とし、(一三)新醅尊罍に溢れんと欲す。毎に來りて趣を庄村に得、寧ろ去りて身を草野に置かん。(一四)鶴客雲村に在り、(一五)蕉雨點點として笙竽を奏するが如

無レ事當レ看ニ韵書一。有レ酒當レ邀ニ韻友一。○紅蓼灘頭。青林古岸。西風撲レ面。風雪打レ頭。披レ蓑頂レ笠。執ニ竿烟水一。儼在ニ米芾寒江獨釣圖中一。○馮惟一以ニ盃酒一自娯。酒酣即彈ニ琵琶一。彈罷賦レ詩。詩成起舞。時人愛ニ其俊逸一。○風下レ松而合レ曲。泉縈レ石而生レ文。○秋風解レ纜。極目葦蘆。白露

事無ければ當に韵書(一)を看るべし。酒有れば當に韻友(二)を邀ふべし。○紅蓼の灘頭(三)、青林の古岸(四)、西風面を撲ち、風雪頭を打つ、蓑を披笠を頂き、竿を烟水(五)に執るは、儼として米芾(六)の寒江獨釣の圖中に在り。○馮惟一に盃酒を以て自ら娯み、酒酣にして即ち琵琶を彈じ、彈じ罷みて詩を賦し、詩成りて起つて舞ふ。時人其俊逸(七)を愛す。○風松を下りて(八)曲に合ひ、泉石(九)を縈りて文を生ず。○秋風に纜を解けば、極目(一〇)葦蘆、白露(一一)江に横たはり、情景悽絶(一二)、孤雁驚き飛び、秋色遠(一三)近、舟を泊めて臥して酒を沽り盧を呼ぶ(一四)を聽けば、一切の塵事(一五)、都て是れ秋水蘆花なり。○萬綠陰中(一六)、小亭暑を避けば、八闥洞開(一七)し、几簟(一八)皆綠なり。雨は蟬聲(一九)に過ぎ(二〇)、風は花氣を來し、人をして自ら醉はしむ。

(一) 韵書は詩韵の書なり　(二) 韻友は風流なる友人　(三) 蓼は水邊に生じ紅花を開く、紅蓼灘頭は紅き花の咲ける蓼の生ずる灘のあたり　(四) 青々と生ひ茂れる林のある古き岸のあたりをいふ　(五) 烟の如き霞のかゝれる水の邊に在りて釣竿を垂るゝこと　(六) 米芾は宋代の人、書畫を善くす、米芾の書きたる寒き江邊にて獨り魚を釣る圖の中に居るが如きをいふ　(七) すぐれて世俗を逸脱せること　(八) 風が松を吹き下したる聲は音曲の調子に合ふ　(九)

之以客。梅花索笑客。桃花銷恨客。杏花倚雲客。水僊凌波客。牡丹酣酒客。芍藥占春客。萱草忘憂客。蓮花淨社客。葵花丹心客。海棠昌州客。桂花招隱客。菊花東籬客。蘭花幽谷客。酴醾清叙客。臘梅遠寄客。須是身閒。方可稱爲主人。○馬蹄入樹鳥夢墮。月色滿橋人影來。

人と爲すべし。○馬蹄樹に入りて鳥夢墮ち、(二五)月色橋に滿ちて人影來る。(二六)

(一)雲や霞のかゝれる氣色が爭ひて種々に變化すること (二)風雨が天にわたッて風吹き雨降ること (三)淸き樣子がさつぱりとして淸きと (四)馬上に在りて山水佳趣の風致に臨むこと (五)歌聲笛を弄して吹くと (六)我心中に思ふ事 (七)我眼中に見ゆる景色 (八)我が意中に思ふ人 (九)程よき時を見計らひて閑放して人に見しむること (一〇)杜甫の詩に巡檐索共梅花笑とあッ、梅花の開けるを索め捜すより名づくるなり (一一)銷恨は唐の玄宗桃花の下に寢し、獨り萱草憂を忘るゝのみならず此花亦能く恨を銷すといへり、此によりて銷恨客と名づく (一二)高蟾の詩に日邊紅杏倚雲栽とあり、因りて名づくるなり (一三)水仙花を以て水中の仙人と爲すが故に波を凌ぐるの客となしたるか (一四)牡丹の花の豐滿にして美なることと人の酒に醉へるが如きを以て名づくるか (一五)芍藥は春色の全部を占領する程花中第一なるを以て占春と名づくるか (一六)萱草は詩經に萱草可以忘憂とあるより名づく (一七)蓮花は淸淨にて俗氣なし、故に淨社の客と稱す (一八)葵花の日に向ひて傾くより誠心向往の義を以て丹心の客と名づく (一九)海棠の花は昌州に在るもの香あり故に名づく (二〇)桂花は奇香隱者を招くべきを以て名づけたるか (二一)菊花は陶淵明が東籬に賞したるより名づく (二二)蘭は幽谷の中に生ず、故に名づく (二三)酴醾は薔薇の灌木白き花を開く、その花の白くして淸きより名づけたるか (二四)臘梅は初め遠國より寄送したるより名づけたるか (二五)鳥が夢を醒すこと (二六)月色により人影の橋上に映ずること

宜二輕寒一。宜二華堂一。暑花宜二雨後一。宜二快風一。宜二佳木陰一。宜二竹下一。宜二水閣一。涼花宜二爽月一。宜二夕陽一。宜二空階一。宜二若溪一。宜二枯藤巉石邊一。若不レ論二風月一。不レ擇二佳地一。神氣散緩。了不二相屬一。比レ于二妓舍酒館中花一。何異哉。

如きをいふ　(八)花の惱み苦しむこと　(九)客を招待して花を賞すること　(一〇)唐突は不意に事の起りしこと、突然に同じ　(一一)寒き冬に開く花　(一二)煖かなる部屋　(一三)温かなる春に開く花　(一四)暑き夏の頃開く花　(一五)水上に在る高閣　(一六)涼しき秋の頃開く花　(一七)爽快なる月色　(一八)枯れたる藤險しく峙てる石　(一九)精神元氣が散亂してゆるむをいふ　(二〇)花と精氣とが相接屬せざること

雲霞爭變。風雨橫レ天。終日靜坐。清風洒然。○妙笛至二山水佳處一。馬上臨レ風。快作二數弄一。○心中事。眼中景。意中人。○園花按レ時開放。因即二其佳稱一。待レ

(一)雲霞爭ひて變じ、(二)風雨天に橫たはる、終日靜坐すれば、(三)清風洒然たり。○妙笛は山水の佳處に至り、(四)馬上風に臨み、快く(五)數弄を作す。○(六)心中の事、(七)眼中の景、(八)意中の人。○園花(九)時を按じて開放す。因りて其佳稱に卽いて、之を待つに客を以てす。梅花は(一〇)索咲の客、桃花は(一一)銷恨の客、杏花は(一二)倚雲の客、水僊は(一三)淩波の客、(一四)牡丹は酣酒の客、(一五)芍藥は占春の客、(一六)萱草は忘憂の客、(一七)蓮花は禪社の客、(一八)葵花は丹心の客、(一九)海棠は昌州の客、(二〇)桂花は招隱の客、(二一)菊花は東籬の客、(二二)蘭花は幽谷の客、(二三)酴醿は清叙の客、(二四)臘梅は遠寄の客、須らく是身閒にして、方に稱して主

焚茶宜旋煮。山宜秋登。

中郎賞花云。茗賞上也。談賞次也。酒賞下也。若夫內酒越茶。及一切庸穢凡俗之語。此花神之深惡痛斥者。寧閉口枯坐。勿遭花惱可也。○賞花有地有時。不得其時而漫然命客。皆爲唐突。寒花宜初雪。宜雪霽。新月宜煖房。溫花宜晴日。

(一)中郎花を賞して云ふ、(二)茗賞は上なり、(三)談賞は次なり、(四)酒賞は下なり。若し夫れ(五)內酒越茶、及び一切の(六)庸穢凡俗の語、此れ花神の深く惡み痛く斥くる者、寧ろ(七)口を閉ぢて枯坐し、(八)花惱に遭ふ勿くんば可なり。○花を賞するに地あり時あり、其時を得ずして、(九)漫然として客を命ずれば、皆(一〇)唐突と爲す。(一一)寒花は初雪に宜しく、霽に宜しく、新月に宜しく、(一二)煖房に宜し。(一三)溫花は晴日に宜しく、輕寒に宜しく、華堂に宜し。(一四)暑花は雨後に宜しく、快風に宜しく、佳木の陰に宜しく、竹下に宜しく、(一五)水閣に宜し。(一六)涼花は(一七)爽月に宜しく、夕陽に宜しく、空階に宜しく、苔溪に宜しく、(一八)枯藤巉石の邊に宜し。若し風月を論せず、佳地を擇ばすんば、(一九)神氣散緩し、(二〇)了に相屬せず。妓舍酒館中の花に比して何ぞ異ならんや。

㊀ 中郎は蓋し袁中郎ならん、中郎は袁宏道の字、宏道は明代の人詩文に長ず ㊁ 茗を煮て花を賞すること ㊂ 談賞は談話を爲しつゝ花を賞すること ㊃ 酒賞は酒を飲みて花を賞すること ㊄ 內酒は內府にて作れる酒ならん、越茶は越に産する茶 ㊅ 通常の穢れたる語、平凡なる世俗の語 ㊆ 口を閉ぢて默然して坐すること枯木の

月。酒盞詩筒。何以謝人間之覆雨飜雲。閉門高枕。○高客留連。花木添清疎之致。幽人剝啄。○莓苔生澹冶之容。○雨中連榻。花下飛觴。進艇長波。散髮弄月。紫簫玉笛。颯起中流。白雲可餐。天河在袖。○午夜箕踞松下。依依皓月時來親人。亦復快然自適。○香宜遠

月時に來りて人に親む。亦復た快然として自ら適す。○香は遠く焚くに宜しく、(二六)茶は旋りて煮るに宜しく、山は秋登るに宜し。(二七)

(一) いやしく吝嗇なる念慮の消え失すること (二) 渣滓はけがれたる念慮をいふ、盡化は盡く變化し去りて清き心となるをいふ (三) 美しき花と生ひ茂れる樹木 (四) 之を賞め愛する心を起すをいふ (五) 流水と青山とは我が性情にかなひ愉快に感ずるをいふ (六) 杜甫の詩に水流心不競、雲在意俱遲の句あり (七) 子美は唐の詩人杜甫の字、子美が千歳に拔きんでたる高尚なるおもむきを想像するなり (八) 邵雍清夜の吟に云ふ、月到天心處、風來水面時、一般清意料得少人知と (九) 堯夫は宋の邵雍の字、堯夫が當時の風雅なるおもむきを想像するなり (一〇) 如何なる方法を以て天上の清風と明月とに對して我が悶を消散するかとの意 (一一) 清風明月に對して酒を飲み詩を作りて此の景を賞するをいふ (一二) 翻手作雲覆手雨(杜甫の詩)の詩の如く人情の反覆常なきを謝絶すること (一三) 門を閉ぢて人と交らず枕を高くして獨り自ら高尚にするをいふ (一四) 高雅なる客が花を賞して長く滯留すること (一五) 花木の清くしてさつぱりとすること (一六) 莓苔は(コケ)のこと、澹冶はあつさりと景を飾ると (一七) 椅子を連ねて數人之に腰かくるなり (一八) 髮を結はずして月の照す景を弄び賞すること (一九) 紫簫は蓋し紫竹を以て作れる簫、玉笛は玉を以て作れる笛 (二〇) 簫笛の聲の颯然として風の吹くが如く中江に起ると (二一) 白雲の香が身邊にたなびきわたるをいふ (二二) 天の河が水中に映じて我が袖中に在るが如く見ゆること (二三) 午夜は夜半の時なり (二四) 兩足を展べてあぐらを組むこと箕の形の如くすること (二五) 依々は依りそうて離れざる貌 (二六) 香を遠く隔てゝ焚くときはその香の清きを感ず (二七) 山は秋景尤も佳なり

多閑帖。繍佛長齋。禪心釋誦。而念多閑想。語多閑辭。閑中滋味。洵可樂也。
鄙吝一消。白雲亦可贈客。渣滓盡化。明月自來照人。
○名花茂樹。可發賞心。流水青山。何妨適性。○水流雲在。想子美千載高標。月到風來。憶堯夫一時雅致。
○何以消天上之清風明

(二六)門の戸を叩きて言づるゝものには毎に困難なる事多きこと　(二七)帖は唐宋時代の試驗の題目をいふ、試驗に必要なる題目を拔萃して記するを帖括といふ、經書の中より數語を帖出して包括するは人に因りて自ら爲さゞるをいふ　(二八)繍佛は剃髮したる佛徒、長齋は多年素食すること、此は繍佛の前にて多年素食するをいふ　禪誦は禪敎の讀誦なり

鄙吝(一)一たび消すれば、白雲亦客に贈るべし。渣滓(二)盡く化すれば、明月自から來りて人を照す。○名花茂樹(三)は、賞心(四)を發すべし、流水青山(五)は、何ぞ性に適するを妨げん。○水流れ(六)雲在り、子美(七)千載の高標を想ふ。(八)月到り風來る。堯夫(九)一時の雅致を憶ふ。○何を以てか天上(一〇)の清風明月を消ふる。(一一)酒盞詩筒のみ。何を以てか人間(一二)の覆雨翻雲を謝する。(一三)門を閉ぢ枕を高くするのみ。○高客(一四)留連すれば、花木清疎(一五)の致を添へ、幽人剝啄すれば、(一六)莓苔澹冶の容を生ず。○雨中欄(一七)を連ね、花下觴を飛ばし、艇を長波に進め、(一八)散髮月を弄し、(一九)紫簫玉笛、(二〇)颯として中流に起れば、白雲(二一)追ふべく、天河(二二)袖に在り。○午夜(二三)松下に箕踞(二四)すれば、依依(二五)たる皓

○帳中蘇合。全消二雀尾之爐一。檻外遊絲。半織二龍鬚之席一。○痩竹如二幽人一。幽花如二處女一。○長起推レ聰。紅雨亂飛。閒花咲也。綠樹有レ聲。閒鳥啼也。烟嵐滅沒。閒雲度也。藻荇可レ數。閒池靜也。風細簾清。林空月印。閒庭嚩也。山扉晝扃。而剝啄每多二閒侶一。帖括因レ人。而几案每

帖括(二七)人に因り、而して几案每に閒編多く、繡佛長齋、(二八)禪心釋諦、(二九)而して念に閒想多く、語に閒辭多し。閒中の滋味、洵に樂むべきなり。

(一) 我が心の恨は之を山鳥に移し與へて多くの花草の春の頃紅に開ける間に在りて啼かしむること、此は山鳥の春花の間に啼くは我が恨の意を得たるが如しとの意なり (二) 我心の愁は隴山にかゝれる雲に寄す故に雲は四方の空の夕方の碧き色を鎖ざして碧色の見えざるやうにすること、此は隴雲の四方を蔽ふは我が愁を雲に寄たるが如きをいふ (三) 溪川の流るゝ口に泉の湧き出づること (四) 杵は衣を擣く木の槌なり、二すぢの茶を煮る烟なり (五) 陸は唐の茶人陸羽なり、灶は竈の俗字、茶を煮る竈に烟の滿つると (六) 松林の半ばを照す月なり (七) 揚子は漢の儒者揚雄なり、月が揚子の讀める書をのぞき居るが如しとなり (八) 雪の降りたる後に梅花を尋ね雪梅の景を賞すること (九) 騷客は風流の詩人 (一〇) 霜のふる前に菊花を尋ねて之を賞すること (一一) 世を隱れたる隱者の趣にかなふをいふ (一二) 蘇合は香の名 (一三) 雀尾の鑪一に鵲尾鑪に作る、鑪の名、形雀尾に似たるを以て名づく (一四) 欄檻の外に浮ぶ絲、遊絲は蜘蛛或は青虫吐く所の絲の空中に飛揚する者をいふ (一五) 龍鬚は草の名、一名石龍芻といふ龍鬚草を以て席を織るが如きさまなるをいふ (一六) 痩竹は高尚にて俗氣を離れたる所あるをいふ (一七) 幽花は奥ゆかしき花、此は靜にして深遠の趣あるをいふ (一八) 紅花雨の如く落ちて亂れ飛ぶをいふ (一九) 閒はしづかなるをいふ、以下皆同じ (二〇) 烟の如きもや霞が滅えて失すること (二一) 藻荇は水中の草、水清くして水草の數を數ふべきをいふ (二二) 風が少しく吹きて簾のあたりの涼しく清きこと (二三) 林の木葉落ちて月影の林中に痕をうつすこと (二四) 閒靜なる庭の景色のすぐれてよきこと (二五) 山中に在る家の門扉を晝の間も閉づること

孤榻對二雨中之山一。○茶熟香清、有レ客到レ門可レ喜、鳥啼花落。無レ人亦自悠然。

なし、人訪ひ來らざること（二七）一の椅子を置き之に腰かけて雨中の山に對するなり（二八）茶がよく煮えて茶の香が清きこと（二九）悠然は心ゆつたりとして樂むこと

恨留二山鳥一啼二百卉之春紅一。愁寄二隴雲一鎖二四天之暮碧一。○澗口有レ泉。常飲二鶴頂一。山頭無レ地。不レ栽レ花。○雙杵茶烟。具載二陸君之灶一。半林松月。且窺二揚子之書一。○尋二雪後之梅一。幾忙二騷客一。訪二霜前之菊一。頗煩二幽人一。

恨は山鳥を留めて、百卉の春紅に啼かしめ、愁は隴雲に寄せて、四天の暮碧を鎖さしむ。○澗口に泉あり、常に鶴に飲ましめ、山頭地として花を栽ゑざる無し。○雙杵の茶烟、具に陸君の灶に載ち、半林の松月、且く揚子の書を窺ふ。○雪後の梅を尋ね、幾たびか騷客を忙ならしめ、霜前の菊を訪ひて、頗る幽人に悵ふ。○帳中の蘇合、全く雀尾の爐を消ひ、檻外の遊絲、半ば龍鬚の席を織る。○瘦竹は幽人の如く、幽花は處女の如し。○晨に起きて窓を推せば、紅雨亂れて飛ぶは、閒花咲けるなり。綠樹、聲あるは、閒鳥啼けるなり。烟嵐滅殁するは、閒雲度れるなり。藻荇數ふべきは、閒池靜なるなり。風細く、簾清く、林空しく月印するは、閒庭悄なるなり。山扉晝扃し、而して剝啄每に閒侶多く、

腹。還用二一榻清風一。○披レ帙橫二風榻一。邀レ棋坐二雨牕一。○花關曲折雲來不レ認二澗頭一。草徑幽深。葉落但敲二門扇一。○洛陽毎レ遇二梨花時一。人多携二酒樹下一日。爲二梨花一洗レ粧。○綠染二林皐一。紅鎖二溪水一。幾聲好鳥斜陽外。一簇春風小院中。○有三客到二柴關一。淸尊開二江上之月一。無三人剪二蒿徑一。

間に到る有り、(二五)酒尊江上の月に開く。人の(二六)蒿徑を剪る無く、(二七)孤榻雨中の山に對す。○(二八)茶熟して香淸し。客あり門に到るは喜ぶべし。鳥啼き花落ち、人無きも亦自ら(二九)悠然たり。

(一)梅の風韻が古さびたる樣子なきをいふ (二)竹籔の中に小路あり松が蓮の如く列りて立てる貌 (三)盤は槃と同じ、極めて目を樂ましむるを得べきこと (四)一層淸くして閑靜なる境遇なるをいふ (五)園中に在る亭と、池上に在る榭なり、榭は亭の屋あるもの (六)僅に吾が身を容るゝことを得る小さき亭榭をいふ (七)その理を會得して之を應用すること (八)南に在る谷川の邊に在りて冠をつけず、逍遙すること (九)簾の半ばにうつる明月の來りて照らすに任かすこと (一〇)北向きの牕のあたりに腹ばひになりて臥すること (一一)寢臺に淸き風の吹き來るを受け用ひ涼むこと (一二)風の當る寢臺のこと (一三)雨の降る時牕のあたりに坐すること (一四)花の植ゑある花壇が曲り折れて眞直ならざること (一五)雲來りて澗のあたりを蔽ふを以て、澗頭の何れにあるかを認め得ずとなり (一六)草の生ぜし小路の奧深きこと (一七)落つ葉が門のとびらをたゝくこと (一八)洛陽は今の河南省洛陽縣 (一九)酒を以て花の美しく開く粧飾を洗ひ去るの意 (二〇)綠色は林のある岡を靑く染むること (二一)紅色は溪川の水を蔽うて水の見えざること (二二)斜陽は夕日の斜に傾くこと、斜陽のあなたにて好鳥が幾聲鳴くこと (二三)一簇は一陣に同じ、一かたまりの春風吹き來りて小さき院中にわたること (二四)柴關は柴折戸の門なり (二五)江上の月照す處にありて酒樽を開き客と共に飲むこと (二六)蒿(ヨモギ)の生ひ茂れる小路を切り開くもの

士高誼ニ不レ在ニ題レ詩揮一レ扇。○詩用ニ方言一。豈是采風之字。談隣ニ俳語一。恐貽ニ拂レ麈之羞一。

肥壌植レ梅。花茂而其韵不レ古。沃土種レ竹。枝盛而其質不レ堅。○竹徑松籬。儘堪レ娯レ目。何非ニ一段清閒一。園亭池樹。僅可レ容レ身。便是半生受用。○南磵科頭。可レ任ニ半簾明月一。北窓坦

心を高尚にして風雅を樂むに在るをいふ（二四）方言は一地方のみに用ふる言語なり（二五）風は國風の風にて、その國にて歌へる詩なり、朝廷にて采用する國風の文字にあらざること、古は天下を遡りて國風の詩を采りてその國の風俗を觀察せしことあり（二六）談ずる所俳諧（オドケゴト）の語に近きをいふ（二七）麈は拂子なり、拂子を拂ふは世俗を離れて清談することにて清談の羞を貽すをいふ

肥壌に梅を植ゑれば、花茂りて其韵古ならず。(一)沃土に竹を種ゑれば、枝盛にして其質堅からず。○(二)竹徑松籬、(三)儘ゝ目を娯ましむるに堪ふ。何ぞ一段の清閒(四)に非らざらん。(五)園亭池樹、(六)僅に身を容る可きは、便ち是れ半生の受用(七)なり。○(八)南磵の科頭、(九)半簾の明月に任すべし。(一〇)北窓の坦腹、還た(一一)一榻の清風を用ふ。○帙を披いて(一二)風榻に横たはり、棋を邀へて(一三)雨窓に坐す。○(一四)花關曲折、(一五)雲來りて灣頭を認めず、(一六)草徑幽深にして、葉落ちて但ゝ(一七)門扇を敲く。○洛陽にて梨花の時に遇ふ毎に、人多く酒を樹下に携へて曰く、(一九)梨花の爲に粧を洗ふと。(一八)○(二〇)綠は林皐を染め、(二一)紅は溪水を鎖す、(二二)幾聲の好鳥斜陽の外、(二三)一簇の春風小院の中。○客の柴(二四)

語、生香不レ斷
樹交レ花。是無レ
彼無レ此眞機。
野色更無二山
隔斷一天光常
與レ水相連。此
徹上徹下眞
境。○美女不レ
尚二鉛華一。似三疎
雲之映二淡月一。
禪師不レ落二空
寂一。若三碧沼之
吐二青蓮一。○書
者喜レ談レ畫。定
能以二畫法一作レ
書。酒人好レ論レ
茶。定能以二茶
法一飲レ酒。○幽
人淸課。詎但
啜レ茗焚レ香。雅

めて能く畫法を以て書を作る。酒人茶を論ずるを好めば、定めて能く茶法を以て酒を飲む。○幽人の淸課、詎ぞ但茗を啜り香を焚くのみならん。雅士の高誼、詩を題し扇を揮ふに在らず。○詩に方言を用ひば、豈是れ采風の字ならんや。談俳語に隣ければ、恐くは塵を拂ふの羞を貽さん。

㊀ 翠微は山の八合目の所なり ㊁ 僧の着たる衣服が松にかゝりたる雲の色に染まりて靑きをいふ ㊂ 斗室は小さき家室なり ㊃ 半ばは芭蕉にかゝる雨の聲に打沈みたること ㊄ 黃鳥は「カナリヤ」に似て其羽色黃なり好聲を發して鳴く、黃鳥には風流の情多きをいふ ㊅ 醉客の夢を見て眠れるに向ひて好聲を發して鳴いて之を呼び醒すなり ㊆ 白雲はその心意の力乏しくして無意識なるをいふ ㊇ 只一すぢに片よりたる邊部にたなびき來りて隱者に媚びるに似たるをいふ、隱者は白雲のかゝれる景を喜ぶよりいふ ㊈ 樂しき心意の相關聯して鳥と鳥とが相向ひて鳴き合ふこと相語るに似たり （一〇） 生香は生々したる香氣なり、生々したる香氣が斷えず香ひ來りて樹の花と花とが相交はるをいふ （一一） 彼にも是にも偏せざる眞の天機なり （一二） 田野の景色一面にわたりて山が之を隔て斷たざること （一三） 上より下まで一貫したる眞の境地なり （一四） 白粉などにて裝飾し華美にすること （一五） まばらに棚引く雲の光淡き月と相うつりあふこと （一六） 空寂は一切の色法皆無にして實有にあらざること、禪俗にして常人の趣味あるをいふ佛語なり （一七） 靑々としたる沼の中に靑き蓮の葉の描き出でゝ居ること （一八） 畫法を應用して書を書くをいふ （一九） 茶を飲むの法を應用して酒を飲むをいふ （二〇） 世々隱れたる人の淸き日課なり （二一） 心を高尙にして、俗氣を絕つに在るをいふ （二二） 風雅の士の高尙なる行爲なり （二三） 世外に超越して

深不ㇾ滅三年字。病淺難ㇾ銷寸步香。○趙飛燕歌舞自有。仙風留ㇾ于二縐裙一。韓昭侯頻笑不ㇾ輕。儉德昭ㇾ于二敝袴一。皆以二一物一著ㇾ名。局面相去甚遠。

春き連の下を吹き拂ふこと　(一〇) 此一對の句連につきて自己の心情を叙するに似たれども明確ならず後考を俟つ　(一一) 趙飛燕は漢の成帝の宮人、初め歌舞を學ぶとき體輕きを以て自ら飛燕と云へり、後皇后となる　(一二) 世俗を離れたる風貌が縐裙の衣服の裾に存すること、縐は我國の縮緬の類なり　(一三) 韓の昭侯は戰國時代の人、一笑一顰を愛みて妄りにせざりしといふ　(一四) 敝れたる袴を侍臣に與へずして之を藏めしめ、有功の人を待ちて賞せんと云へり、節儉の德が敝れたる袴の上に顯はるゝこと　(一五) 飛燕の事と昭侯の事とは、その局面が大に相異なるをいふ

翠微僧至。衲衣全染二松雲一。斗室殘經。石磬半沉二蕉雨一。○黃鳥情多。常向二夢中一呼二醉客一。白雲意懶。偏來二僻處一。媚二幽人一。○樂意相關禽對

翠微(一)に僧至れば、衲衣(二)全く松雲に染み、斗室(三)の殘經、石磬(四)半ば蕉雨に沉む。○黃(五)鳥情多く、常に夢中に向ひて醉客(六)を呼ぶ。白雲(七)意懶くして、偏に僻處(八)に來り幽人に媚ぶ。○樂意(九)相關して禽對語し、生香(一〇)斷えず樹花を交ふ。是れ彼なく此なきの眞機、(一一)野色更に山の隔斷するなく、天光常に水と相連る、此れ徹上徹下(一二)の眞境なり。○美女鉛華(一三)を御へざるは、疎雲(一四)の淡月に映ずるに似たり。禪師(一五)空寂(一六)に落ちざるは、碧沼(一七)の青蓮を吐くが若し。○書者諧を談ずるを喜べば、定

爻象之表者。
不可獨契此
語。○紙窻竹
屋。夏葛冬裘。
飯後黑甜。日
中白醉足矣。
○收碣石之
宿霧。斂蒼梧
之夕雲。八月
靈槎。泛寒光
而靜去。三山
神闕。湛清影
以遙連。○空
三楚之暮天。
樓中歷歷。滿
六朝之故地。
草際悠悠。○
秋水岸移新
釣舫。藕花洲
拂舊荷裳。心

ば、（一三）三山の神闕、清影を湛へて以て遙に連る。○（一四）三楚の暮天を空しくして、樓中（一五）歷歷たり。（一六）六朝の故地に滿ちて、（一七）草際悠悠たり。○（一八）秋水岸移る新釣の舫、（一九）藕花の洲は拂ふ舊荷裳、（二〇）心深くして滅せず三年の字、病淺くして銷え難し寸歩の香。○（二一）趙飛燕歌舞自ら賞し、（二二）仙風縐裙に留む。韓昭侯の（二三）嚬笑輕からず、（二四）儉德敝袴に昭はる。皆一物を以て名を著はす、（二五）局面相去ること甚だ遠し。

（一）河漢は天の河なり、此は天の河に雲のたなびき渡るをいふ　（二）心塵のけがれを洗ひ去りて潔くすること　（三）物の形狀以外に會得して悟ること、爻象は易の言、物の形狀變動に效ひて作れるもの　（四）此の語に契合すること、契は相合うて一致するをいふ　（五）紙を張りたる窓のある竹を以て作れる家屋　（六）夏は葛を以つて織りたる帷子を衣、冬は皮衣を着ること　（七）飯を食したる後に熟睡すること　（八）白醉は酒を飲まずして醉ふことにて睡眠するをいふ　（九）碣石は山の名、碣石山にかゝれる前よりの霧の收まること　（一〇）蒼梧は山の名、今の湖南省に在り、蒼梧山にかゝれる夕の雲の斂まりて晴るゝこと　（一一）靈槎は不可思議の桴に乘ること　（一二）秋の月光に泛んで靜に去ること　（一三）三山は蓬萊、方丈、瀛州の三山にて神仙の住する所なりといふ　（一四）三楚は南楚東楚西楚なり、三楚あたりの夕暮の天空の晴れて雲なきこと　（一五）歷々は分明なること　（一六）六朝は吳、東晉、宋、齊、梁、陳、皆江南建康に都せり　（一七）草の生ずるあたり廣く大なるをいふ　（一八）秋水に新なる釣船を浮ぶれば船は水に從ひて流れて岸も移るかと思はる、舫は相並びたる兩舟のこと　（一九）蓮の花の咲きたる池の中の小島より吹き來る風は

掃石彈琴。捲簾看鶴。白雲深處人家。○沙村竹色。明月如霜。携幽人杖藜散步。石屋松陰。白雲似雪。對孤鶴掃榻高眠。○富貴功名。榮枯得喪。人間驚見白頭。風花雪月。詩酒琴書。世外喜逢青眼。

るとのみが必ずしも貴富以上の境遇にあらずとなり　（七）綠の竹と青き梧桐の下にて高僧相對して棋を打つをいふ　（八）青き苔の上に紅葉したる木ありて、童子その下にて茶を煮る　（九）軒端を照らす明月　（一〇）花のうつれる影の大小相はざるを　（一一）鳥の鳴く聲のきれ〲なるを　（一二）青々としたる樹のかげの中に路の通ずる路あり　（一三）白き雲の深く立ちこめたる廬に人の住める家あり、此は皆山中の佳景をいへるなり　（一四）海岸の沙川原に在る村の竹籔の景色　（一五）藜はアカザを以て作れる杖をつくこと　（一六）石を以て瓦として葺ひたる家のあたりに在る松の木かげ　（一七）世を離れて獨り睡眠すること　（一八）富貴功名にあくせくし、榮枯得喪に心を奪はるゝ間に年老いて白頭を見るに至ること　（一九）風花雪月を賞し詩酒琴棋を樂めば、世俗の外にてそれ等のものに好意を以て迎へらるゝを喜ぶ

焚香看書。人事都盡。隔簾花落。松梢月上。鐘聲忽度。推窓仰視。河漢流雲。大勝昔時。非有洗心滌慮得意

香を焚き書を看れば、人事都て盡く、簾を隔てて花落ち、松梢に月上り、鐘聲忽ち度る。窓を推して仰ぎ視れば、（一）河漢雲を流し、大に昔時に勝る。心を洗ひ（二）慮を滌ひ、（三）意を交象の表に得ること有る者に非ずんば、（四）獨り此語に契すべからず。○紙窓の竹屋、（五）夏は葛し冬は裘し、（六）飯後黑甜、（七）日中白醉すれば足れり。（八）○（九）碣石の宿霧を收め、（一〇）蒼梧の夕雲を斂め、八月（一一）靈槎もて、（一二）寒光に泛んで靜に去れ

發二山水之清音一。而又何可二多得一。集二倩第十二。

會心處。自有二濠濮間想一。無二可レ親レ人魚鳥一。偃臥時。便是羲皇上。何必夏月涼風。○翠竹碧梧。高僧對レ奕。蒼苔紅葉。童子煎レ茶。○一軒明月。花影參差。席レ地偏宜二小酌一。十里青山。鳥聲斷續。尋レ春幾度長吟。○入レ山採レ藥。臨レ水捕レ魚。綠樹陰中鳥道。

會心(一)の處は、自ら濠濮(二)間の想あり。人を親むべき魚鳥(三)無からんや。偃臥(四)の時は、便ち是れ羲(五)皇上の人、何ぞ必ずしも夏月(六)涼風ならんや。○翠竹碧梧(七)、高僧奕に對し、蒼苔紅葉、童子茶を煎る。○一軒(九)の明月。花影參差たり(一〇)。地に席して偏に宜しく小酌(八)すべし。十里の青山、鳥聲斷續(一一)、春を尋ねて幾度か長吟す。○山に入りて藥を採り、水に臨みて魚を捕る。綠樹陰中鳥道(一二)あり、石を掃ひ琴を彈じ簾を捲き鶴を看る、白雲深き處(一三)人家あり、○沙村(一四)の竹色、明月霜の如し。幽人を携へ、藜を杖つきて散歩す。石屋の松陰(一六)、白雲雪に似たり。孤鶴に對し、榻を掃ひて高眠(一七)す。○富貴功名(一八)、榮枯得喪、人間白頭を見るに驚き、風花雪月(一九)、詩酒琴書、世外青眼に逢ふを喜ぶ。

(一) 吾が心に會得して悟る所あること (二) 世俗を離れて仙境に在るが如き想あること、濠濮は二水の名、莊子惠子と濠梁の水上に游び、又莊子釣して濮水に在ること莊子に見ゆ (三) 魚鳥も亦自然にその人に親しみて狎れ近づきて恐れざるをいふ (四) 俯して臥するを (五) 伏羲氏以上の太古の趣あるをいふ (六) 夏時涼風の來る處に臥す

倩不レ可二多得一。美人有二其韻一。名花有二其致一。青山綠水。有二其丰標一。外則山臞韻士。當二情景相會之時一。偶出二一語一。亦莫レ不下盡二其韻一。極二其致一。領中略其丰標上。可三以啓二名花之笑一。可三以佐二美人之歌一。可三以

卷十二

倩

倩は多く得べからず。美人は其韻あり、名花は其致あり、青山綠水は其丰標あり。外は則ち山臞韻士、情景相會するの時に當り、偶〻一語を出せば、亦其韻を盡し、其致を極め、其丰標を、領略せざる莫し。以て名花の笑を啓くべく、以て美人の歌を佐くべく、以て山水の淸音を發すべし。而して又何ぞ多く得べけんや。倩第十二を集む。

(一) 倩は巧笑倩兮の倩にて口輔の美はしきこと、此は階段的の美をいふ (二) 韻は美の風雅あること (三) 名花は美しき花なり、名花には美の風致（おもむき）あるをいふ (四) 美しき容態の目じるしあること (五) 山澤に居る痩せ衰へたる儒者と風流なる士 (六) 美しき情と美しき景と相會すること (七) 領略は會得し悟ること (八) その言ふ所よくその笑を開くを得べし (九) その言ふ所よくその韻を盡すを以て美人の歌を佐くるを得べし (一〇) その言ふ所よくその丰標を領略す故に山水の淸きおもむきを發揮するを得べし

其用一。如二祿山之亂一。河北二十四郡。皆望レ風奔潰。而抗節不レ撓者。止一顏眞卿。明皇初不レ識二其人一。則所レ謂名節者。亦未下嘗不中自二恬退中一得來上也。故奬二恬退一者。乃所三以勵二名節一。○志不レ可二一日墜一。心不レ可二一日放一。○辯不レ如レ訥。語不レ如レ默。動不レ如レ靜。忙不レ如レ閑。○以二無果之神一。合二有道之器一。宮商暫離不レ可レ得已。

らざれば、則ち所謂名節なる者、亦未だ嘗て恬退中より得來らずんばあらず。故に(六)恬退を奬むる者は、乃ち名節を勵ます所以なり。○(七)志は一日も墜すべからず。心は(八)一日も放つべからず。○(九)辯は訥に如かず、語は默に如かず、動は靜に如かず、忙は閑に如かず。○(一〇)無累の神を以て、(一一)有道の器に合せば、(一二)宮商暫く離れんとするも得べからざるのみ。

(一)名節は名分節義 (三)恬淡にして謙遜なること (二)唐の安祿山は本胡人にして玄宗皇帝の爲めに寵せられ遂に亂を起して叛せり (四)名節を抗げて屈撓せざること (五)明皇は玄宗皇帝のこと (六)顏眞卿恬退して平原の太守たるに甘んぜしをいふ (七)志は目的の觀念なり (八)一日たりとも放慢して修養せざること (九)此は退守の主義よりいへり、故に辯舌巧みなるよりも言語寡きに如かず云々といへるなり (一〇)私利私欲の念の爲めに累らはせられざる精神 (一一)道德を有する器と精神と相合して道を行ふこと (一二)宮商共に五音の一なり、宮と商とは音聲相和し離るへからず、此は宮商の二音の相調和して離すべからざるが如く合一して離れざるをいふ

淸福已具。如無レ福者。定生ニ他想一。更有レ福者、輙以ニ讀書一。○國家用レ人。猶ニ農家積レ粟。粟積ニ于豐年一。乃可レ濟レ飢。才儲ニ于平時一。乃可レ濟レ用。○考ニ人品一。要下在ニ五倫上一看上。此處得。則小過不レ足レ疵。此處失。則衆長不レ足レ錄。

も平時に儲ふれば、乃ち用を濟ふべし。○人品を考ふるには、五倫(一二)上に在りて看るを要す。(一三)此處得れば、則ち小過疵とするに足らず。(一四)此處失へば、則ち衆長(一五)も錄するに足らず。

(一) 近は目前の近き處なり　(二) 自己を檢束にしてほしいまゝにせざること　(三) 遐は遐き將來の處なり　(四) 幸福を惜みて生命を延ばし長く生くることを圖ること　(五) 幸福薄く少き人　(六) 天性道德心の薄く少き人　(七) 淸らかなる幸福の己に十分に具足すること　(八) 他の事を思ひ考ふる念の起ること　(九) 此の淸福を補くるに讀書を以てするなり　(一〇) 穀物を豐年の時より積み蓄ふれば一時飢饉ありても之を救ふを得べし　(一一) 才能すぐれたる人を平時事なき時より用ふれば國家の用を爲すべし　(一二) 五倫は君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信なり　(一三) 五倫上に於て能くその道を盡すこと　(一四) 少しの過失はその缺點とするに足らざるをいふ　(一五) 衆多の長處も之を取り上げていふに足らざること

國家尊ニ名節一。獎ニ恬退一。雖ニ一時未レ見ニ其效一。然當ニ患難倉卒之際一。終賴ニ

(一)國家名節を尊び、恬退を獎むれば、一時未だ其效を見ずと雖も、然れども患難倉卒の際に當りて、終に其用に賴る。(二)(三)祿山の亂の如き、河北二十四郡、皆風を望んで奔潰す。而るに抗節撓まざる者は、(四)止々一の顏眞卿のみ。(五)明皇初め其人を識

可ㇾ規。氣悶ㇾ人。不ㇾ吐不ㇾ茹。一時難ㇾ對。○重ㇾ友者。交時極難。看得難。以ㇾ故轉重。輕ㇾ友者。交時極易。看得易。以ㇾ故轉輕。○能于ニ熱地一思ㇾ冷。則一世不ㇾ受ニ凄涼一。能于ニ淡處一求ㇾ濃。則終身不ㇾ落ニ枯槁一。

(七) 眞空は佛家の語、一切の色相意識の界を超越したるをいふ、眼前の境界は是れ眞空なることの理を悟れるなり (八) 行爲のけがれて醜きも之を改めざるをいふ (九) 道德心の缺けて居るも之を修養せざるをいふ (一〇) 天地混沌として開けざること猶は酒に醉ひて醒めざるが如し (一一) 混沌開けざることは、心の昏くして打沈み酒に醉ひたるが如く夢を見たるが如く茫然たるをいふ (一二) 洪濛は天地自然の元氣なり、洪濛は是れ天より見れば客なり、而して天は是れ主なり (一三) 寥廓は廣大なる天をいふ (一四) 事に熟練したる人 (一五) その爲す所皆人の法則となすべき所あること (一六) その半歩の歩行も人の規則とすべし、半歩は少しの行爲の意 (一七) その心の悶え苦しめる人 (一八) 柔ならず剛ならず進取の氣象なきをいふ (一九) 交際することが極めてむづかしく、又友人の善惡邪正を看ることを極めて難しとすること (二〇) 故に交を定むるの後は一層友人を重んずるとなり

近以靜ㇾ事而約ㇾ己。遠以惜ㇾ福而延ㇾ生。○吾本薄福人。宜ㇾ行ニ厚德事一。吾本薄德人。宜ㇾ行ニ惜ㇾ德事一。○掩ㇾ戶焚ㇾ香。

(一)近は以て事を靜にして己(二)を約し、遠(三)は以て福を惜みて生を延ぶ。○吾本と(四)薄福(五)の人なれば、宜しく厚德の事を行ふべし。吾本と薄德(六)の人なれば、宜しく德を惜むの事を行ふべし。○戶を掩ひ香を焚けば、淸福(七)已に具はる。如し福無き者は、定めて他想(八)を生せん。更に福ある者は、輒くる(九)に讀書を以てす。○國家の人を用ふるや、猶ほ農家の粟を積むがごとし。粟は(一〇)豐年に積めば、乃ち飢を濟ふべし。(一一)才

宜一人。已是曾吃虧過者。○書是同人。每讀二一篇一。自覺二寢色有一ㇾ味。佛爲二老友一。但窺二半偈一。轉思二前境眞空一。○衣垢不ㇾ湔。器缺不ㇾ補。對ㇾ人猶有二慚色一。行垢不ㇾ湔。德缺不ㇾ補。對ㇾ天豈無二愧心一。○天地俱不ㇾ醒。落二得忤沈醉夢一。洪濛率是客。枉尋二寥廓主人一。○老成人。必典必則。半步

書は是れ同人なり。一篇を讀む每に、自ら寢色味あるを覺ゆ。佛は老友たり。但半偈を窺ひて、轉た前境の眞空を思ふ。○衣垢つきて湔はず、器缺けて補はず、人に對して猶ほ慚色あり。行垢つきて湔はず、德缺けて補はずんば、天に對して豈愧心なからんや。○天地俱に醒めず、昏沈醉夢に落ち得たり。洪濛率ね是れ客なり、枉げて寥廓の主人を尋ぬ。○老成の人は、必ず典必ず則あり、半步も規す可し。氣悶ゆるの人は、吐かず茹はず、一時も對し難し。○友を重んずる者は、交時極めて難く、看得ること難し。故を以て轉た重んず。友を輕んずる者は交時極めて易く、看得ること易し。故を以て轉た輕んず。○能く熱地に于て冷を思へば、則ち一世淒涼を受けず、能く淡處に于て濃を求むれば、則ち終身枯槁に落ちず(重出)。

(一) 便宜のことを討ね求むることを悟り知れる人　(二) 吃は放縱せざること、吃虧は大に便宜を虧きたることを經驗せしをいふ　(三) 書と志を同じくする友人なり　(四) 寢色の二字差し誤あらん、書中の面白き氣色に趣味のあるをいふ　(五) 老友は能く熟知せる友人なり　(六) 偈は佛の詩なり、偈の半分にて全部にあらず、故に半偈といふ

事。○老成人受レ病。在二作意歩趨一。少年人受レ病。在二假意超脱一。○僞レ善有二表裏始終之異一。不レ過二假好人一。僞レ惡無二表裏始終之異一。倒是硬漢子。○入心處。咫尺玄門。得意時。千古快事。○水滸傳何所レ不レ有。却無二破老一事一。非レ關二缺陷一。恰是酒肉漢本色如レ此。以レ此益知二作者之妙一。

漢の本色此の如し。此を以て益々作者の妙を知る。

(一)自己一箇の恩惠を人にきせること　(二)公共の正議を扶翼すること　(三)新しき知りあひの交　(四)舊くよりの仲よき交　(五)人の知らざる處に於て恩德を施すこと　(六)常に異なりたる節義　(七)平常人の行ふべき行爲にて孝弟の如き行を指す　(八)鬼神の禁ずる所は不誠實の念なり　(九)天地和合の氣をやぶり害ふこと　(一〇)實心は充實の心なり　(一一)虛心は心を虛しくして私心成見を畜へざること　(一二)吾が心の事に私念我見あるときは見るもの聞くもの心に入らずなる事を知らず　(一三)作意はわざと意志を起すことにて故意に同じ、歩趨は人に相隨ふの意わざと人の後につき相隨ふをいふ　(一四)假意は一時の出來心、超脱は世俗よりぬけ離れて俗氣なきこと、表面世俗より超脱したる心になりたること　(一五)表面と裏面と異なり、始と終と異なること　(一六)表面のみの好き人にて眞の好人にあらざること　(一七)剛强なる惡しき男子の意　(一八)入心は心に悟り得る處あること　(一九)咫は八寸咫尺は至近をいふ　(二〇)玄門は深遠たる理に入るの門なり　(二一)我が心に滿足することは、千古より以來無き愉快の事なり　(二二)水滸傳は小說の書名、施耐庵の作る所なりといふ、此の小說の中には種々樣々の事を書かれて一事も無きことなきなり　(二三)未だ詳ならず　(二四)破老の事なきも本書の缺點となることにあらず　(二五)酒を飲み肉を食ふが如き肉體的欲望を滿さんとする男子の眞狀

世間會レ討二便

世間に便宜(一)を討ぬるを會するの人は、已に是れ嘗て吃虧(二)し過ぐる者なり。○

滓未化而理趣反轉爲欲根。○待小人、不難于嚴、而難于不惡。待君子、不難于恭、而難于有禮。

市私恩、不如扶公議。結新知、不如敦舊好。立榮名、不如種隱德。尚奇節、不如謹庸行。○有一念而犯鬼神之禁、一言而傷天地之和、一事而釀子孫之禍者、最宜切戒。○不實心、不成事。不虛心、不知

ならざること　〔二〇〕道理正しき趣味はうつり變りて却つて欲心の根本となること　〔二一〕嚴格を以て之を待遇することの難からざるをいふ　〔二二〕恭しく敬うて之を待遇することの難からざるをいふ

私恩を市るは、公議を扶くるに如かず。新知を結ぶは、舊好を敦くするに如かず。榮名を立つるは、隱德を種うるに如かず。奇節を尚ぶは、庸行を謹むに如かず。○一念にして鬼神の禁を犯し、一言にして天地の和を傷り、一事にして子孫の禍を釀す者あり、最も切に戒むべし。○實心ならざれば事を成さず。虛心ならざれば、事を知らず。○老成人の病を受くるは、作意の步趨に在り。少年の人の病を受くるは、假意の超脱に在り。○善を爲すに表裏始終の異あるは、假好人たるに過ぎず。惡を爲すに表裏始終の異なきは、倒りて是れ硬漢子なり。○入心の處は、咫尺も玄門なり。得意の時は、千古の快事なり。○水滸傳何ぞ有らざる所あらん。却つて仕老の一事なし。缺陷に關するに非ず。恰も是れ酒肉

塵氣未ㇾ掃。而
心境之芥蔕
未ㇾ忘。此處拔
除不ㇾ淨。恐石
去而草復生
矣。○紛擾固
溺ㇾ志之場。而
枯寂亦稿ㇾ心
之地。故學者
當下捿二心玄默一
以寧中吾眞體上。
亦當下適二志恬
愉一以養中吾圓
機上。○昨日之
非。不ㇾ可ㇾ留。留ㇾ
之則根燼復
萌。而塵情終
累ㇾ乎二理趣一。今
日之是。不ㇾ可ㇾ
執。執ㇾ之則渣

らすの地なり。故に學者當に心を玄默(一〇)に捿ましめて、以て吾が眞體(一一)を寧んずべし。亦當に志(一二)を恬愉に適せしめて、以て吾が圓機(一三)を養ふべし。○昨日の非は留む(一四)べからず。之を留むれば則ち根燼(一五)復た萌し、而して塵情(一六)終に理趣(一七)を累はさん。今日の是(一八)は執るべからず。之を執れば則ち渣滓(一九)未だ化せず、而して理趣反轉(二〇)して欲の根と爲る。○小人を待つには嚴(二一)に難からずして、惡まざるに難し。君子を待つには恭(二二)に難からずして、禮あるに難し。

(一) 富貴を輕んずる心は即ち有意より出でたるものなれば高尚の心にあらず故に之を輕んぜざるべからず (二) 名義は名譽と義理なり (三) 名義を重んずるの念は又故らに有意より出でゝ重んずるものなれば高尚の心にあらず故に之を輕んぜざるべからず (四) その事の境遇に就て汚れたる俗氣あること (五) 心中の境遇のさはりとなりて心を害するもの (六) 塵氣と芥蔕とを拔き去りて淸くすること (七) 妨害となる石を取り去ればそのあとに草復た生じて妨害するが如きをいふ (八) 紛擾は事のごた〳〵として亂れたるをいふ (九) 枯寂は無心無欲にして心の靜かなること (一〇) 玄默は幽深にして寡言なること、玄默の處に我が心を置くこと (一一) 吾心の本體を安寧ならしむること (一二) 恬愉は心の安樂に愉快なること (一三) 圓機は圓滿なる機能なり (一四) 吾が心の中に留めて忘れざること (一五) 木の根火の燼えくずより萌芽を生ずるが如く惡心の復び生ずること (一六) 塵情は汚れたる心情 (一七) 理趣は道理正しき趣味 (一八) 善を固く執り守りて更に進まざること (一九) 心のけがれが未だ融合して全く善心と

○高明性多二疎脫一。須レ學二精嚴一。狷行常苦レ拘レ時。當レ思二圓轉一。○欲レ做二精金美玉的人品一。定從二烈火中一煆來。思レ立二掀天揭地的事功一。須下向二薄冰上一履過上。○性不レ可レ縱。怒不レ可レ留。語不レ可レ激。飲不レ可レ過。

(一) 人の過失ありたる時に於いてその人の過失なき善行を求めて過失を咎めざるをいふ (二) 人の過失をあばき求めて咎むること (三) 人が我が心の區域の中に在りて我之を自由にするを得るをいふ、範圍は一定のかぎられたる區域なり (四) その德に報ずるも報ぜざるも我が範圍内に在ること (五) 自ら自己の人格を尊重すること (六) 自ら自己の人格を輕蔑して尊重せざること (七) 不韻は不風流なる人をいふ (八) おどけ言をいふこと (九) 高明は高尚にして明快なる性質 (一〇) 疎脫は事を疎略にして脫落すること (一一) 狷行はかた苦しき行をなすこと (一二) 時に拘はり泥みて變通のなきこと (一三) 圓轉は自由に融通のきくこと (一四) すぐれてよき金、美しき玉の如き人にすぐれたる立派なる人格 (一五) 苦しき艱難辛苦の中よりその心膽を鍛錬するをいふ (一六) 天地を動かす程の偉大なる事業 (一七) 薄氷を履むが如く深く恐懼戒謹するをいふ (一八) 性は情欲を指す、情欲をはしいまゝにすべからざるなり (一九) 怒の念は永く留め置かずして直に去るべし (二〇) 言語ははげしくなり飲酒は過ぐべからず

能輕二富貴一。不レ能レ輕下一輕二富貴一之心上。能重二名義一。又復重下一重二名義一之念上。是事境之

能く富貴を輕んじて、一の富貴(一)を輕んずるの心を輕んずる能はず、能く名義(二)を重んじて、又復た一の名義(三)を重んずるの念を重んずるは、是れ事境(四)の塵氣未だ掃はず、而して心境(五)の芥蔕未だ忘れざるなり。此處拔除淨(六)からずんば、恐くは石(七)去りて草復た生ぜん。○紛擾(八)は固より志を溺らすの場にして、枯寂(九)も亦心を槁

不レ惟喪レ德。亦足レ喪レ身。○人之恩可レ念。不レ可レ忘。人之仇可レ忘。不レ可レ念。○不レ能レ受レ言者。不レ可レ多ニ與一言一。此是善交法。

君子于レ人。當下于ニ有過中一求中無過上。不レ當下于ニ無過中一求中者過上。○我能容レ人。人在ニ我範圍一。報レ之在レ我。不レ報在レ我。人若容レ我。我在ニ人範圍一。不レ報不レ知。報レ之不レ知。○自重者。然後人重。人輕者。由ニ我自輕一。○過ニ不韵一。當ニ簡默一。恐以ニ恢諧一生レ怨也。

君子の人に于けるや、當に有過の中に于いて無過を求むべし。當に無過の中に于いて有過を求むべからず。○我能く人を容れば、人我が範圍に在り。之に報ずるも我に在り、報ぜざるも我に在り。人若し我を容れば、我人の範圍に在り、報ぜざるも知らず、之に報ずるも知らず。○自ら重んずる者にして然る後人重んず。人の輕んずる者は、我自ら輕んずるに由る。○不韵に過うては當に簡默すべし。恐くは詼諧を以てすれば怨を生ぜん。○高明の性は疎脫多し。須らく精嚴を學ぶべし。狷行は常に時に拘はるに苦む。當に圓轉ならんことを思ふべし。○精金美玉的の人品と做らんと欲せば、定めて烈火中より煅へ來り、掲地天掀的の事功を立てんと思へば、須らく薄氷上より履み過ぐべし。○性は縱にすべからず。怒は留むべからず。語は激すべからず。飲は過すべからず。

一卷則有一卷之益。觀書一日。則有一日之益。○坦易其心胸。眞率其笑語。疎野其禮數。簡少其交遊。○好醜不可太明。議論不可務盡。情勢不可殫竭。好惡不可驟施。○不風之波。開眼之夢。皆能增進道心。○積書當積有益之書。○開口譏誚人。是輕薄第一件。

野にし、其交遊を簡少(六)にす。○好醜(七)は太だ明かなるべからず。議論は務めて盡すべからず。情勢(八)は殫く竭すべからず。好惡(九)は驟に施すべからず。○風せ(一〇)ざるの波、眼(一一)を開くの夢は、皆能く道心(一二)を增進す。○書を積むには、當に有益の書を積むべし。○口を開けば人を譏誚(一三)するは、是れ輕薄(一四)の第一件、惟々德を喪ふのみならず、亦身を喪ふに足る。○人の恩(一五)は念ふべし。忘るべからず。人の(一六)仇は忘るべし。念ふべからず。○言(一七)を受くること能はざるものは、一言をも多く與ふべからず。此は是れ善交の法なり。

(一) 儉約をなして謙直を助くべきこと、即ち儉約すれば不足なきを以て謙直をなすを得べし (二) 恕は己の心を以て人を忖ること、思ひやりなり、恕は德の基礎なり、故に恕を以て德を成すべしといふ (三) その心もちを平坦安易にすること、即ち虚心平氣をいふ (四) 眞率はまじめに率直にして飾らざること (五) 疎野はあらめに簡行にすること (六) 簡少は簡略に少くすること (七) すききらひする情をいふ (八) 事の情狀及び趨勢(なりゆき)をいふ (九) 善を好み惡を惡むの情をいふ (一〇) 風の起らざる時より波立つことを豫想することにて、靜中の動を觀ずるをいふ (一一) 眼を開きながら夢の境を觀想すること、是は動中の靜を觀ずるをいふ (一二) 道心は道を觀ずるの心情をいふ (一三) 人をそしり惡口すること (一四) 是れは輕率なることの第一の事なり (一五) 人より受けたる恩惠は常に之を念ひ忘れざること (一六) 人に對する仇讐の念 (一七) 人の忠言を受け納れて用ふること能はざるものをいふ

身棄。余以爲棄ㇾ身不ㇾ如ㇾ棄ㇾ酒。○青天白日。和風慶雲。不三特人多二喜色一。即鳥鵲且有二好音一。若暴風怒雨。疾雷閃電。鳥亦投ㇾ林。人亦閉ㇾ戸。故君子以二太和元氣一爲ㇾ主。○胸中落二意氣兩字一。則交游定不ㇾ得ㇾ力。落二騷雅二字一。則讀書定不ㇾ深ㇾ心。○交友之先宜ㇾ察。交友之後宜ㇾ信。

(一) 一字たりとも輕率に人に賜り與ふべからず　(二) 人に承諾すべからざること　(三) 正義を以て人に對すること　(四) 廉は角め正しくして欲寡きこと、之を以て己の行爲を正すこと　(五) 恭敬を以て長上の人に事ふること　(六) 寛大を以て目下のものを待遇すること　(七) 謹愼を以て事を處置すること　(八) 戰々は恐懼すること、兢々は戒め愼むこと　(九) 小心はよく事に注意すること　(一〇) 酒を飲めば妄りに言語を發するをいふ　(一一) 妄に言語を出せば、その間に過ちたることを言ふことあり　(一二) 天氣の晴れたるをいふ　(一三) そよ〳〵と風吹きて日出度雲のたなびくこと、此亦晴天の時のことをいふ　(一四) 晴天のときは鳥類すらも樂しみて好音を發するなり　(一五) 暴らき風、はげしき雨なり　(一六) 烈しき雷、きらめく電光　(一七) 極めて溫和なる元氣なり　(一八) 意氣は氣慨なり、我が胸中氣慨のみを以て主とすること　(一九) 交游する友人より輔助を得ざるをいふ　(二〇) 騷雅は離騷大雅にて卽ち風流のみに心を用ふること　(二一) 書を讀みても心に深く會得する所なきをいふ　(二二) 友と交を結ぶより前の時、卽ち未だ交友せざる時なり　(二三) その交友すべきや否やを注意すべきをいふ

惟儉可二以助一ㇾ廉。惟恕可二以成一ㇾ徳。○惟書不ㇾ問二貴賤貧富老少一。觀ㇾ書

惟ゝ儉(一)以て廉を助くべし。惟ゝ恕(二)以て徳を成すべし。○惟ゝ書は貴賤貧富老少を問はず、書を觀ること一卷なれば、則ち一卷の益あり。書を觀ること一日なれば、則ち一日の益あり。○其(三)心胸を坦易にし、其笑語を眞率(一四)にし、其禮數を疎(一五)

多失レ體。○泛交則多レ費。多レ費則多レ營。多レ營則多レ求。多レ求則多レ辱。○莫レ作二心上過不レ去之事一。莫レ萌二事上行不レ去之心一。

一字不レ可二輕與一レ人。一言不レ可二輕諾一レ人。一笑不レ可二輕假一レ人。○正以處レ人。廉以律レ己。忠以事レ君。恭以事レ長。信以接レ物。寛以待レ下。敬以處レ事。此居レ官之七要也。○聖人成二大事業一者。從二戰戰兢兢之小心一來。○酒入舌出。舌出言失。言失

(一)一字も輕々しく人に與ふべからず。一言も輕々しく人に(二)諾すべからず。一笑も輕々しく人に假すべからず。○(三)正以て人に處し、(四)廉以て己を律し、忠以て君に事へ、(五)恭以て長に事へ、信以て物に接し、(六)寛以て下を待ち、(七)敬以て事を處す、此れ官に居るの七要なり。○聖人大事業を成す者、(八)戰戰兢兢の(九)小心より來る。○(一〇)酒入れば舌出で、(一一)舌出づれば言失し、言失すれば身棄てらる。余以爲らく身を棄つるよりは、酒を棄つるに如かずと。○(一二)靑天白日、(一三)和風慶雲は、特ゞ人喜色多きのみならず。(一四)即ち烏鵲する且つ好音あり。若し(一五)暴風怒雨、(一六)疾雷閃電は、鳥も亦林に投じ、人も亦戸を閉づ。故に君子は(一七)太和の元氣を以て主と爲す。○(一八)胸中意氣の兩字に落つれば、則ち(一九)交游定めて力を得ず。(二〇)騷雅の二字に落つれば、則ち(二一)讀書定めて心に深からず。○(二二)交友の先は宜しく(二三)察すべし。交友の後は宜しく信ずべし。

得矣。○勢不レ可二倚盡一。言不レ可二道盡一。福不レ可二享盡一。凡事不盡處。意味偏長。○靜坐然後知二平日之氣浮一。守レ默然後知二平日之言躁一。省レ事然後知二平日之費一レ閒。閉レ戸然後知二平日之交濫一。寡レ欲然後知二平日之病多一。近レ情然後知二平日之念刻一。○喜時之言多失レ信。怒時之言

靜坐して然る後平日の氣の浮なるを知り、(五)默を守りて然る後平日の言の躁なるを知り、(六)事を省きて然る後平日の閒を費すを知り、(七)戸を閉ぢて然る後平日の交の濫なるを知り、(八)欲を寡くして然る後平日の病多きを知り、(九)情に近づきて然る後平日の念の刻なるを知る。(一〇)○喜時の言は多く信を失ひ、(一一)怒時の言は多く體を失ふ。(一二)○泛く交れば則ち費多く、(一三)費多ければ則ち營多く、(一四)營多ければ則ち求多く、(一五)求多ければ則ち辱多し。(一六)○心上過ぎ去らざるの事を作すこと莫かれ。(一七)事上行ひ去らざるの心を萌すこと莫かれ。

(一) 節義正しき行爲 (二) 軒は丈夫の乘る車、冕は禮冠なり、軒冕は高位高官をいふ (三) 十分爲し盡さずして餘裕を存すること (四) 不盡の意味は大に深く遠きをいふ (五) 氣分の浮き立ちて落ちつかざること (六) 言のさわがしく多きこと (七) 閒日を費して繁忙なること (八) 交際のみだりにして選擇せざること (九) 心の缺點多きをいふ (一〇) 念の慘刻にして嚴に過ぐること (一一) 喜びに乘じて言ひ過ぐるを以て信を失ふなり (一二) 體は事體なり、怒に乘じて言ひ過ぐるより事體を失ふなり (一三) 泛く多くの人に交際すること (一四) 費す所の金錢の多きをいふ (一五) 營は經營にて事をはかり營むこと (一六) 人に求むること (一七) 人より恥辱を與へらるゝこと

有二失意事一。便當レ生二憐憫心一。皆自己眞實受用處。忌レ成業敗。何預二人事一。徒自擾二心術一耳。〇恩重難レ酬。名高難レ稱。〇待レ客之禮。當レ存二古意一。止一雞一黍。酒數行。食レ飯而罷。以レ此爲レ法。〇處レ心不レ可レ著。著則偏。作レ事不レ可レ盡。盡則窮。

〇心を處するには著すべからず（一七）、著すれば則ち偏す。事を作すには盡すべからず（一八）、盡せば則ち窮す。

（一）面交は外面だけの交際にて胸衷の交ならざること（二）諍友は誠心より交る友（三）新に恩を施し與へんよりは舊き負債を償還すべきをいふ（四）その名聲を聞くこと多きこと（五）その人に接することを少きを以て面を識ること少きなり（六）王公を訪問せざるを怪しみ疑はしむること（七）士人の去らずして長く留まるを厭ふこと（八）得意は心に滿足すること（九）失意は意の如くならずして沮喪すること（一〇）自己に眞實有得して應用すること（一一）人の成功を忌み、失敗を樂むこと（一二）人の事には何等の關係せずして、却つて只自己の心術を破壞するをいふ（一三）重き恩を受けては之に報酬すること易からざること（一四）評判の高きものは實際の行爲を名譽につりあふやうにすること易からざること（一五）古人が客を待つの意を存すること（一六）粗末にして手軽き食膳をいふ（一七）一の事に固著して離れざること（一八）十分に作し盡さずして餘裕を存すること

士人所レ貴。節行爲レ大。軒冕失レ之。有レ時而復來。節行失レ之。終身不レ可レ

士人の貴ぶ所は、節行（一）を大なりと爲す。軒冕（二）は之を失ふも、時ありて復た來る。節行は之を失へば、終身得べからず。〇勢（三）は倚り盡すべからず、言は道ひ盡すべからず、福は享け盡すべからず。凡そ事は不盡の處（四）、意味偏に長し。〇

卜二諸夢寐一。兩者無レ愧。始可レ言レ學。○士大夫三日不レ讀レ書。則禮義不レ交二胸中一。便覺二面目可レ憎。語言無一レ味。

（一五）夢の中に自己の惡しきことを見たるや否やによりて觀察すること（一六）妻子と夢寐との兩つのものに對して一點の愧づる所なきをいふ（一七）禮義、黃山谷の原文には義理に作る、是なり、義理の觀念が胸中に起らざるをいふ（一八）鏡に對しては其の顏の樣子に憎らしき所あること（一九）その語る言語にも妙味なきをいふ

與三其密二面交一。不レ若レ親二諒友一。與三其施二新恩一。不レ若レ還二舊債一。○士人當レ使二王公聞レ名多。而識レ面少一。寧使三王公訝二其不二レ來。毋レ使三王公厭二其不二レ去。○見三人有二得意事一。便當レ生二忻喜心一。見三人

其(一)の面交に密ならんよりは、諒(二)友を親むに若かず、其(三)の新恩を施さんよりは、舊債を還すに若かず。○士人は當に王公をして名を聞くこと多くして(四)、面(五)を識ること少からしむべし。寧ろ(六)王公をして其の來らざるを訝らしむるも、王公をして其の去(七)らざるを厭はしむる毋かれ。○人の得意(八)の事あるを見ては、便ち當に忻喜の心を生ずべし。人の失意の事あるを見ては、便ち當に憐憫の心を生ずべし。皆自(一〇)己眞實受用の處(九)なり。成(一一)を忌み敗を樂むは、何ぞ人事(一二)に預らん。徒に自ら心術を壞るのみ。○恩(一三)の重きは酬い難く、名の高き(一四)は稱へ難し。○客を待つの禮、當に古意(一五)を存すべし。止〻(一六)一雞一黍酒數行、飯を食ひて罷む、此を以て法と爲す。

大レ于レ言ニ人之惡一。○求レ見レ知於ニ人世一易。求三眞知于ニ自己一難。求三粉飾于ニ耳目一易。求レ無レ愧于ニ隱微一難。○聖人之言。須ニ常將來眼頭過。口頭轉。心頭運。○與ニ其巧持一于レ末。不レ若ニ拙戒一于レ初。○君子有ニ三惜一。此生不レ學。一可レ惜。此日閒過。二可レ惜。此身一敗。三可レ惜。○晝觀ニ諸妻子一。夜

難し。粉飾(三)を耳目に求むるは易く、隱微(四)に愧づる無きを求むるは難し。○聖人の言は、須らく常に將ち來りて眼頭(七)に過ぎ、口頭(八)に轉じ、心頭(九)に運らすべし。○其巧を末に持せんよりは、拙を初に戒むるに若かず。(一〇)○君子に三惜あり。此生(一一)學ばざるは、一の惜むべきなり。此日(一二)閒過するは、二の惜むべきなり。此身一敗(一三)するは、三の惜むべきなり。○晝は諸を妻子に觀(一四)、夜は諸を夢寐に卜し(一五)、兩つの者(一六)愧づること無くんば、始めて學と言ふべし。○士大夫三日書を讀まずんば、則ち禮義(一七)胸中に交らず、便ち面目憎むべく(一八)、語言味無きを覺ゆ(一九)。

(一) 此は宋の宰相趙普嘗て論語半部を以て太祖を助け半部を以て太宗を助けたりといへるより出づるなり (二) 世と離れて俗に交はらざる生活 (三) 南華は莊子なり、莊子を南華經と稱せり、唐の天寶中莊子を號して南華眞人と稱す (四) 眞に自己の人格を知れる人を求むるも容易に得べからざるをいふ (五) 表面を飾りて善く見せかくること、白粉を傅け裝飾を施すが如きをいふ (六) 人の知らざる隱れたる處に於ても愧ぢざる善行爲なり (七) 眼のさきに之を看ること (八) 口のさきにて語ること (九) 心のさきにて思ひ考ふること (一〇) 事の末に巧みなることを持すること (一一) その拙なることを初に於て戒めて、拙ならざらんとするなり (一二) 何事もなさずむだに過ごすこと (一三) 一たび敗れて復た回復すべからざること (一四) 妻子が自己に滿足するや否やによりて觀察すること

譽名。空響ニ墓中之骸骨一。窮途潦倒。誰憐ニ宮外之娥眉一。○貴人之交ニ貧士一也。驕色易レ露。貧士之交ニ貴人一也。傲骨當レ存。○君子處レ身。寧人負レ己。己無レ負レ人。小人處レ事。寧己負レ人。無ニ人負一レ己。○硯神曰ニ淬妃一。墨神曰ニ回氏一。紙神曰ニ尚卿一。筆神曰ニ昌化一。又曰ニ佩阿一。

ひ、紙神を尚卿と曰ひ、筆神を昌化と曰ひ、又佩阿と曰ふ。

(一) 男子は立派なる徳あれば其れが、ちその人の才なり、徳あるを貴ぶ意 (二) 女子には才なきを貴ぶ、故に才なければ即ちその人に徳あるなりとの意 (三) 病中の苦しき味は之を知らざるべからざること (四) 貧窮して苦む境遇の有さまも辯論せざるべからざるをいふ (五) 才智すぐれたる人、一國に並ぶものなきすぐれたる士 (六) 多くの人々より抜きんでたる才智を有するをいふ (七) 禮法を以て約束すべからざる非常の行を爲すこと (八) その才稍々衆人を壓伏する程なれば人は之を忌みきらふ心を生ずるなり (九) その人を横目にて視て正しく視ざること、之を睨るゝ也 (一〇) 墓中に埋めたる骸骨を譽むるのみで死後の譽名の恃むべからざること (一一) 困窮して行く所相合はざるをいふ (一二) 娥眉は蛾の眉の如く長くして曲れる眉なり、美人をいふ、宮外にさまよふ美人を憐むものなきが如く志を得ざるの人を憐まざるをいふ (一三) 驕り高ぶる顏色の外に露はれ易きこと (一四) 貴人に對するも屈下せざる傲慢の氣風を保存するをいふ (一五) 寧ろ人が己の恩に負くことあるとも己は人の恩に負くなきをいふ (一六) 此は硯墨紙筆の別名を擧げたるのみ

要レ治レ世。半部論語。要レ出レ世。一卷南華。○禍莫レ大レ于レ縱ニ己之欲一。惡莫レ

世を治むるを要するには、半部の論語(一)、世を出づるを要するには、一卷の南華(二)あり。○禍は己の欲を縱まゝにするより大なるは莫く、惡は人の惡を言ふより大なるはなし。○人世に知られんことを求むるは易く、眞知(四)を自己に求むるは

○從レ師、延二名士一。鮮二垂レ敎之實益一。爲レ從レ學二高第一。少二受レ誨之眞心一。

男子有レ德便是才。女子無レ才便是德。○病中之趣味。不レ可レ不レ嘗。窮途之景界。不レ可レ不レ歷。○才人國士。既負二不羣之才一。必負二不羈之行一。是以才稍壓レ衆。則忌心生。行稍違レ時。則側目至。死后

く周旋すること　(一八)此の時の世の風潮に隨ひて事を爲すをいふ　(一九)時勢の爲めに我が主義を轉移するの念を起すべからざること　(二〇)貧窮なる親戚がその家に往來して交通すること　(二一)貧窮なるものをいたはり携ふ誠意と親切とあるなり、忠は中心の誠なり、厚は懇切の意なり　(二二)名士を我が家に招待すること　(二三)師の弟子となり、試驗を受けて高き等級に及第せんとすること　(二四)高第を得んが爲めに弟子となりたるものなれば本來敎誨を受くる眞心なきをいふ

(一)男子德あるは便ち是れ才、女子才無きは便ち是れ德なり。○病中の趣味は、嘗めざるべからず。窮途の景界は、歷ざるべからず。○才人國士、既に不羣の才を負へば、必ず不羈の行を負ふ。是を以て才稍々衆を壓すれば、則ち忌心生じ、行稍々時に違へば、則ち側目至り、死后の聲名、空しく墓中の骸骨を譽む。窮途潦倒するも、誰か宮外の蛾眉を憐まんや。貴人の貧士に交るや、驕色露れ易く、貧士の貴人に交るや、傲骨當に存すべし。○君子の身を處するや、寧ろ人己に負くとも、己人に負くこと無し。小人の事を處するや、寧ろ己人に負くとも、人の己に負くこと無からしむ。○硯神を淬妃と曰ひ、墨神を回氏と曰

恩禮要₂愈隆₁。○用ㇾ人不ㇾ宜ㇾ刻。刻則思ㇾ效者去。交友不ㇾ宜ㇾ濫。濫則貢ㇾ諛者來。○憂勤是美德。太苦則無₂以適ㇾ性怡ㇾ情。淡泊是高風。太枯則無₂以濟ㇾ人利ㇾ物。○作ㇾ人要ㇾ脫ㇾ素。不ㇾ可ㇾ存₂一矯ㇾ俗之心₁。應ㇾ世要ㇾ隨ㇾ時。不ㇾ可ㇾ起₂一趨ㇾ時之念₁。○富貴之家。常有₂窮親戚往來₁。便是忠厚。

(七)濫なるべからず。濫なれば則ち(八)諛を貢する者來る。○(九)憂勤は是れ美德なり。(一〇)太だ苦なれば則ち以て(一一)性を適し情を怡ばすなし。(一二)淡泊は是れ高風なり。(一三)太だ枯なれば則ち以て人を濟ひ物を利するなし。○(一四)人を作すには(一五)素を脫するを要す。一も(一六)俗を矯むるの心を存すべからず。(一七)世に應ずるには(一八)時に隨ふを要す。一も(一九)時に趨くの念を起すべからず。○富貴の家、常に(二〇)窮親戚の往來すること有るは、(二一)便ち是れ忠厚なり。○(二二)師に從ひて名士を延くは、教を垂るゝの實益鮮く、(二三)徒と爲りて高第に攀づるは、(二四)誨を受くるの眞心少し。

(一) 舊くより交れる朋友を待遇すること　(二) 心持ちの愈新なるを要するなり　(三) 隱微は人に隱す秘密の事なり　(四) 恩義と禮法とが愈々隆んなるを要すること　(五) 刻は嚴刻にして嚴しきに過ぎて慘刻にすること　(六) 効果を立てんことを思ふものはその人に從はずし去る　(七) 善惡の區別なくみだりに人に交はること　(八) 諛びへつらふ言を獻ずる者の來ること　(九) 憂は人を憂ひ國を憂ふること、勤は勤勉にして社會國家の爲にはたらくこと　(一〇) 太だしく憂勤に過ぎて心を苦しむること　(一一) 我が性情を愉快にし怡び樂ましむること　(一二) 淡泊は心さつぱりとして慾寡きこと　(一三) 淡泊に過ぎて太しく生氣のなきこと　(一四) 人才を培植して立つること　(一五) 脫ㇾ素は素よりの習氣を脫し易ふること　(一六) 世俗の習氣を矯正するの心あるべからざること　(一七) 當時の社會に應じて能

抑且益レ人。凡事表暴。不二獨損一レ人。抑且損レ己。○覺二人之詐一。不レ形レ于レ言。受二人之侮一。不レ動レ于レ色。此中有二無窮意味一。亦有二無窮受用一。○爵位不レ宜二太盛一。太盛則危。能事不レ宜二盡畢一。盡畢則衰。

過二故舊之交一。意氣要二愈新一。處二隱微之事一。心跡宜二愈顯一。待二衰朽之人一。

(一) 少しばかりの嫌疑を以て至りて親しき親戚を疎遠にすべからざるをいふ (二) その人に新しき怨恨を懐くともそれを以てその人より受けたる舊き恩惠を忘るべからざるをいふ (三) その人の心を我が身に引き寄せて、思ひやること (四) 禮法と、正義と、廉直と、恥を知るの四德は自己の身を正すべきものなるをいふ (五) 此の四つを以て人の身の行を正すべからず、卽ち人の禮儀廉恥を行はざるを責め正して行はしむるの不可なるをいふ (六) 己の德己の功をくらましかくして人に顯はさぬこと (七) 己の德己の功を人にあらはし見せつくること (八) 世人は韜晦するものを掲げ驕慢なるものを貶するものなれば、その結果、韜晦すれば己を益し、求顯すれば己を損するに至るなり (九) 人の詐りたる事を覺れるを言語にあらはずして知らざるが如くすること (一〇) その忿怒の心を顔色にあらはさゞること (一一) 此の不言不動の中に深遠なる意味あり (一二) 又此の不言不動の中に深遠なるはたらきあり、受用は享受に同じくよく身に役立つこと (一三) 能事は吾が力を以て能く爲し得る事件なり (一四) 我が有らん限りの力を竭して之を盡さず幾分の餘裕を存するなり (一五) 我が氣力の衰へて復た進んで之を完成するを得べからず

(一)故舊の交を過するには、(二)意氣愈々新なるを要す。(三)隱微の事に處しては、心跡宜しく愈々顯かなるべし。衰朽の人を待つには、(四)恩禮愈々隆なるを要す。○人を用ふるには宜しく(五)刻なるべからず。刻なれば則ち(六)效を思ふ者去る。交友は宜しく

〇事係ニ幽隱一。要レ思レ同ニ護他一。著ニ不レ得三一點攻訐的念頭一。人驕ニ寒微一。要レ思レ矜ニ禮他一。著ニ不レ得三一毫傲睨的氣象一。

毋下以ニ小嫌一而疎中至戚上。毋下以ニ新怨一而忘中舊恩上。〇待ニ富貴人一。不レ難レ有レ禮。而難レ有レ體。待ニ貧賤人一。不レ難レ有レ恩而又難レ有レ禮。〇禮義廉恥。可ニ以律レ己。不レ可ニ以繩レ人。律レ己則寡レ過。繩レ人則寡レ合。〇凡事韜晦。不ニ獨益レ己。

微賤なること（一九）その人を敬しみて禮遇せんこと思はざるべからず（二〇）その人に傲り高ぶりて睨み視る氣象あるべからずとなり

小嫌(一)を以て至戚を疎ずる毋かれ。新怨(二)を以て舊恩を忘るゝ毋かれ。〇富貴の人を待つには、恩あるに難からずして、禮(三)あるに難し。貧賤の人を待つには、禮あるに難からずして、又禮あるに難し。〇禮義(四)廉恥は、以て己を律すべく、以て(五)人を繩すべからず。己を律すれば過寡く、人を繩せば合ふこと寡し。〇凡そ事は韜晦(六)すれば、獨り己を益するのみならず、抑ゝ且つ人を益す。凡そ事は表(七)暴すれば、獨り人を損するのみならず、抑ゝ(八)且つ己を損す。〇人の詐を覺り(九)て言に形はさず、人の侮を受けて色を動かさず。(一〇)此中無窮の意味あり、亦無窮(一一)の受用あり。〇爵位は宜しく太だ盛なるべからず。(一二)太だ盛なれば則ち危し。能事(一三)は宜しく盡く畢すべからず。(一四)盡く畢せば則ち衰ふ。(一五)

事時隄防。纔可三以彌二意外之變一。有レ事常如二無レ事時一鎮定、可三以消二局中之危一。○是非邪正之交。少遷就。則失二從違之正一。利害得失之會。太分明。則起二趨避之私一。○待レ人而留二有餘不盡之恩一。則可三以維二繫無レ厭之人心一。御レ事而留二有餘不盡之智一。則可三以隄二防不測之事變一。

得失の會、太だ分明なれば、則ち趨避の私(一一)を起す。○人を待ちて有餘不盡の恩(一二)を留むれば、則ち以て厭く無きの人心を維繫すべし。(一三)事を御して有餘不盡の智を留むれば、則ち以て不測の事變を隄防すべし。(一四)○事幽隱に係れば、(一五)他を回護するを思ふを要す。(一六)一點の攻訐的念頭を著け得ず。(一七)人寒微に屬せば、(一八)他を矜禮するを思ふを要す。(一九)一毫の傲睨的氣象を著け得ず。(二〇)

(一) 危險なる崖に臨める馬を引き廻して使ふこと (二) 之を一鞭を加ふれば馬躍りて崖に落つることあるが如く既敗を救ひ却つて危險ならしむるをいふ (三) 舟棹にて漕ぐことを停めば舟は後に退くべきが如く少しく注意を懈るときは功成らずして失敗すべきをいふ (四) 隄防を築きて水を防止するが如く事變を防止すること (五) 意想の外に變事の起りたるを彌縫して間に合はすをいふ (六) 心を鎮めおちつけて亂れざること (七) 事局に起れる危險を打消すを得べきをいふ (八) 遷就は彼に遷り此に就きぐづ〳〵して決せざること (九) 是にして正しきに從ひ、非にして邪を去ること (一〇) 利害得失の集る所、太だ明白にして知り易きをいふ (一一) 利得に趨き害失を避くる私心を起すこと (一二) 人を待遇するに、その恩惠を充分盡さずして幾分か餘裕を存すること (一三) 厭足を知ることなき欲深き人の心をつなぎ留めて我より去らしめざること (一四) 意外の事變の起るを防ぎ止むることを得べきをいふ (一五) その人の祕密にして人に　すことを得ざる事柄 (一六) その人を護りかばはんことを思ふ必要あること (一七) その人の陰私のことをあばき出して攻撃するが如き念頭を持つべからざるをいふ (一八) その人が貧弱にして

言語一以養レ氣。○立レ身高一步。方超脫。處レ世退一步。方安樂。○士君子貧不レ能レ濟レ物者。遇二人癡迷處一。出二一言一提二醒之一。遇二人急難處一。出二一言一解二救之一。亦是無量功德。○救二既敗之事一者。如レ馭二臨レ崖之馬一。休三輕策二一鞭一。圖二垂レ成之功一者。如レ挽二上レ灘之舟一。莫三少停二一棹一。○無レ事常如レ有

るを以て能く切磋するを得るなり　(五)　意氣は情を遏して行ふの行爲をいふ、後生の少年の胸中は情的の行爲に落つるをいふ　(六)　趣は情的の興趣なり、味は情的の興味なり　(七)　子瞻は蘇東坡の字なり、東坡黄州に在りし時雪時を以て堂を作りその壁に雪景を畫かしめ雪室と名づく　(八)　原憲は孔子の弟子、貧窮の人なり、その甕の中に米の粉を和して食へり、糁は米の粉なり　(九)　芳香ある花の開ける樹木は到る所に見るを得べきをいふ　(一〇)　韶光は春景なり、春の光景は貧しきものにても之を支持するを得べきをいふ　(一一)　物事を慮り考ふることを深くして精神を保養すること　(一二)　男女の欲を離り去りて以て精を保ち養ふこと　(一三)　世間を超越し世俗を脱出して高尚の域に進むをいふ　(一四)　一步後に退きて人に讓りて爭はざるをいふ　(一五)　物は人物の物にして人を濟ふ能はざるをいふ　(一六)　癡迷は愚にして物に迷ひ爲す所を知らざること　(一七)　その人の迷を呼び醒して覺醒せしむること　(一八)　その人の急難を解きて之を救濟すること

既に敗るゝの事を救ふ者は、(一)崖に臨むの馬を馭するが如し。輕々しく(二)一鞭を策つを休めよ。成るに垂々とするの功を圖る者は、灘に上るの舟を挽くが如し。少くも(三)一棹を停むる莫かれ。○事無くして常に事ある時の如く(四)隄防せば、纔に以て(五)意外の變を彌すべし。事ありて常に事無き時の如く(六)鎭定せば、以て(七)局中の危を消すべし。○是非邪正の交少しく(八)遷就すれば、則ち(九)從違の正を失ふ。(一〇)利害

白沙在泥與之俱黑。漸染之習久矣。他山之石可以攻玉。切磋之力大焉。○後生輩胸中。落意氣兩字。有以趣勝者。有以味勝者。然寧饒于味。而無寧饒于趣。○片片繪子瞻之壁。默默修原憲之貧。○芳樹不用買。韶光貧可支。○寡思慮以養神。剪情慾以養精。靖

白沙泥に在れば之と倶に黒し。漸染の習久しければなり。他山の石以て玉を攻むべし。切磋の力大なればなり。○後生輩の胸中、意氣の兩字に落つ。趣を以て勝る者あり。味を以て勝る者あり。然れども寧ろ味に饒きも、寧ろ趣に饒きこと無からん。○片片として子瞻の壁に繪し、默默として原憲の貧に修す。○芳樹は買ふを用ひず。韶光は貧しきも支ふべし。○思慮を寡くして以て神を養ひ、情慾を剪りて以て精を養ひ、言語を靖くして以て氣を養ふ。○身を立つること高き一歩なれば方に超脱す。世に處するに退く一歩なれば方に安樂なり。○士君子貧にして物を濟ふ能はざる者も、人の癡迷の處に遇ひて、一言を出して之を提醒し、人の急難の處に遇ひて、一言を出して之を解救するは、亦是れ無量の功德なり。

(一) 白き沙が黒土の中に在れば黒土と同じく黒くなること (二) 漸次感染する習慣久しきにわたるが故なりとなり (三) 他山は山の名、或はいふ他は我に對する語にて他の山の義なりと、他山の石を以て玉を攻め磋くが如く他人の言を以て自己の精神を磋くこと (四) 玉をみがく力大なるが故に石以て玉を攻むべきが如く、我が精神を磋く力大な

惟有レ飾レ非。何以上達。無レ如レ改レ過。〇一點不レ忍的念頭。是生レ民生レ物之根芽。一段不レ爲的氣象。是撑レ天撑レ地之柱石。〇君子對二青天一而懼。聞二雷霆一而不レ驚。履二平地一而恐。步二風波一而不レ駭。〇不レ可二乘レ喜輕諾一。不レ可二因レ醉而生一レ嗔。不レ可二乘レ快而多事一。不レ可二因レ倦而鮮一レ終。〇意防レ慮如レ發。口防レ言如レ過。身防レ染如レ奪。行防レ過如レ割。

生ずべからず。快に乘じて多事なるべからず。倦に因りて終を鮮くすべからず。(一五)〇意は慮を防ぐこと發するが如く、(一六)口は言を防ぐこと過むるが如く、(一七)身は染を防ぐこと奪ふが如く、(一八)行は過を防ぐこと割くが如くす。(一九)

(一) その輕躁なる念を檢束して恣まゝにせざると (二) 氣槩節操の心のはげしき者 (三) 德性は道德的の性質なり、德性によりてその一方へ片よりたる氣質を融合して和らぐべきをいふ (四) 下達は下方へ向ひ進むことにて墮落することなり (五) 自己の惡しきことを飾りて善きやうに示すこと (六) 上達は上の方へ向ひ進むとにて卽ち向上するをいふ (七) 少しばかりの人に忍びざる仁愛の心なり (八) 此の仁愛の心はやがて人民を生かし萬物を生かして生々として發展せしむる根本萠芽となるなり (九) 少しばかりの不義を爲さゞる正義の氣象なり (一〇) 天地をも支持する柱石の如きものなり (一一) 君子は明白なる道理に對しては慴るゝ所あるも一時の事變に遇ふも驚かざるをいふ (一二) 此句も亦上句と同じく平正なる義理に對して恐るゝ所あるも世の事變に遇ふも駭かざるをいふ (一三) 心の喜びたる時に乘じて輕々しく事を承諾すべからざること (一四) 酒の醉に乘じて忿怒の心を生ずべからざるをいふ (一五) 倦怠の爲めに事を中止して終りまで之を爲さざるが如きことあるべからずとなり (一六) 意思は念慮の起るを防ぎ止むること、事の發するを防ぐが如き强き勢あるをいふ (一七) 口は言語を防ぎ止むること、事を過むるが如くすること (一八) 身は惡の感染を防ぐこと物を奪ふを防ぐが如くすること (一九) 行は過たざるやう防止すること物を割くを防止するが如くすること

天白日處節義。自暗室屋漏中培來。旋乾轉坤的經綸。自臨深履薄處操出。

き家室なり、屋漏は家の西北の隅にて人なき陰微の處なり、此は人の知らざる隱微の處に在りても自ら愧ぢざる精神を修養するに基く（七）天地を運轉する程の偉大なる天下經綸の大事業、經綸は天下を治むること（八）深淵に臨み薄氷を履むが如く戰々兢々として深く謹み戒むる處より操り出すをいふ

以積貨財之心。積學問。以求功名之念。求道德。以愛妻子之心。愛父母。以保爵位之策。保國家。○才智英敏者。宜以學問攝其躁。氣節激昂者。當以德性融其偏。何以下達。

貨財を積むの心を以て學問を積み、功名を求むるの念を以て道德を求め、妻子を愛するの心を以て父母を愛し、爵位を保つの策を以て國家を保つ。○才智英敏の者は、宜しく學問を以て（一）其躁を攝すべし。（二）氣節激昂の者は、當に（三）德性を以て其偏を融すべし。何を以てか（四）下達する。惟ゝ（五）非を飾るあり。何を以てか（六）上達する。過を改むるに如くは無し。○（七）一點の忍びざるの念頭は、（八）是れ民を生じ物を生ずるの根芽なり。（九）一段爲さざるの氣象は、（一〇）是れ天を撑へ地を撑ふるの柱石なり。○（一一）君子は青天に對して懼るれども、雷霆を聞いて驚かず。（一二）平地を履みて恐るれども、風波を歩みて駭かず。○（一三）喜に乘じて輕諾すべからず。（一四）醉に因りて嗔を

心不可以交一友。○少年人要心忙。忙則攝浮氣。老年人要心閒。閒則樂餘年。○晉人清談。宋人理學。以晉人遺俗。以宋人遡躬。合之雙美。分之兩傷也。○莫行心上過不去事。莫存事上行不去心。○忙處事爲。常向閒中先檢點。動時念想。預從靜裏密操持。○青

則ち餘年を樂む。○晉人は(六)清談し、(七)宋人は理學す。晉人を以て(八)俗を遺り、宋人を以て(九)躬を斂んず。之を合せば雙つながら美しく、之を分てば(一〇)兩つながら傷る。○(一一)心上過ぎ去らざるの事を行ふ莫かれ。(一二)事上行ひ去らざるの心を存する莫かれ。○(一三)忙處の事爲は、常に閒中に向ひて先づ檢點し、(一四)動時の念想は、預め靜裏より密に操持す。○(一五)靑天白日の處の節義は、(一六)暗室屋漏中より培ひ來り、(一七)旋乾轉坤的の經綸は、(一八)臨深履薄の處より操り出す。

(一) 我が目に觀る所の見識が愈々大きくなれば我の心の内に用心する所益々小なり (二) 我の地位が愈々高くなれば、我の動作が愈々卑くなる (三) 一の誠心を以て萬人の朋友に交るを得るをいふ (四) 二心は僞心なり、僞心を以ては一人の朋友とも交るべからず (五) 浮氣は浮き立ちて落ちつかざる氣なり、攝は之を檢束するなり (六) 淸談は老莊を祖述し世務を放棄し專ら空理を談ずること (七) 宋人は性理の學を修むるをいふ (八) 世俗の汚濁の氣分を拂ひ去ること (九) 我が躬を反省してその精神を修養すること (一〇) 晉人の淸談、宋人の理學兩つながらやぶれて身の爲めにあらず (一一) 我が心の上に滿足せざる事を行ふべからざること (一二) 或る事物の上に行ひ得べからざる心を持つべからざること (一三) 紛劇の處に在りて爲す行爲は常に心閒靜なる中に於て先づ爲すべきや否やを取り正ししらぶるをいふ (一四) 事を爲す時に起る我が念慮思想は、先づ前以て閑靜にして事を爲さゞる時より、固く操り守りて失はざるを要するなり (一五) 明白にして人の知れる節義の行をいふ (一六) 暗室は人の知らざる暗

有世緣有世情。緣非情則易斷。情非法則易流。○世多理所難必之事。莫執宋人道學。世多情所難通之事。莫說晉人風流。○與其以衣冠誤國。不若以布衣關世。與其林下而矜冠裳。不若廊廟而標泉石。

度して道器を得しむる眼力なり、此は理法の半を得たる法眼を以て之を輔くるをいふ ㊂ 完全になし盡さずして幾分の餘裕を殘し置くこと ㊃ 事の儘の圓滿なること ㊄ そのはたらきに餘裕あること ㊅ その歷程の深邃にして測られざるをいふ ㊆ その趣味の多きをいふ ㊇ 精神が充實するをいふ ㊈ 世法は世俗の法則、世緣は世俗の因緣、世情は世俗の人情なり ㊉ 世間の因緣は人情にあらざれば長く繫ぐことを得ざるをいふ ⑪ 世俗の人情は法に因らざれば放縱に流れて檢束なきに至り易きをいふ ⑫ 世の中には只道理のみを以て期待することの難きものあり ⑬ 宋の程子朱子等の說く學を道學といふ、道統の正を得たるを以て名づく、道學者は理に拘りて變通の妙なし、故に之を固執すべからずとなり ⑭ 晉代の人は老莊の道に泥み風流を好みて放縱に流る故に晉人の風流のみに依らずして道理を顧みざるべからずとなり ⑮ 衣冠は朝廷の官位にあること朝廷の官位に在りて一國の政治を誤りて國を危くするをいふ ⑯ 布衣は賤士の服する所、民間に在りて當世の政治に關與すること ⑰ 世を隱れて林下に在りて朝廷の官吏に矜ること ⑱ 廊廟は朝廷のこと朝廷に在りて泉水巖石の自然を樂む趣を持すること

眼界愈大。心腸愈小。地位愈高。舉止愈卑。○一心可以交萬友。二

(一)眼界愈々大なれば、心腸愈々小し。(二)地位愈々高ければ、舉止愈々卑し。○(三)一心以て萬友に交るべし。(四)二心以て一友に交るべからず。○少年の人は心の忙しきを要す。忙しければ則ち(五)浮氣を攝す。老年の人は心閒なるを要す、閒なれば

必方袍幅巾。作二此迂態一耶。集二法第十一。

世無二乏レ才之世一。以二通レ天達レ地之精神一。而輔レ之。以二拔レ十得レ五之法眼一。○凡事留二不盡之意一。則機圓。凡物留二不盡之意一。則用裕。凡情留二不盡之意一。則味深。凡言留二不盡之意一。則致遠。凡興留二不盡之意一。則趣多。凡才留二不盡之意一。則神滿。○有二世法一。

世に才に乏しきの世無し。(一)天に通じ地に達するの精神を以て、之を輔くるに(二)十を拔きて五を得るの法眼を以てす。○凡そ事は(三)不盡の意を留むれば則ち(四)機圓なり。凡そ物は不盡の意を留むれば則ち(五)用裕なり。凡そ情は不盡の意を留むれば則ち味深し。凡そ言は不盡の意を留むれば則ち(六)致遠し。凡そ興は不盡の意を留むれば則ち(七)趣多し。凡そ才は不盡の意を留むれば則ち(八)神滿つ。○(九)世法あり、世緣あり、世情あり、(一〇)緣は情に非ざれば則ち斷ち易く、(一一)情は法に非ざれば則ち流れ易し。○世には理の必し難き所の事多し。(一三)宋人の道學を執ると莫かれ。世には情の通じ(一二)難き所の事多し。(一四)晉人の風流を說くと莫かれ。○其の(一五)衣冠を以て國を誤らんよりは、(一六)布衣を以て世に關するに若かず。其(一七)林下にして冠裳に矜らんよりは、(一八)廊廟にして泉石を標するに若かず。

(一) 天地の理法に通達するの精神をいふ (二) 拔レ十得レ五はその半ばを得たるをいふ、法眼は佛法の語、能く衆生を

自三方袍幅巾之態、偏二滿天下一。而超脱潁絕之士。遂以二同汚合流一矯レ之。而世道已不レ古矣。夫迂腐者。既泥レ于レ法。而超脱者又放二越于法一。然則士君子。亦不レ偏不レ倚。期レ無レ所二放越一則已矣。人何

巻十一

法

(一)方袍幅巾の態、天下に偏滿せしよりして、(二)超脱穎絕の士、遂に(三)同汚合流を以て之を矯め、而して(四)世道已に古ならず。夫れ(五)迂腐の者は、既に法に泥み、而して(六)超脱の者は、又法に放越す。然らば士君子亦(七)偏せず倚せず、放越する所無きを期せんのみ。人何ぞ必ずしも方袍幅巾、此迂態を作さんや。法第十一を集む。

(一) 方袍は僧侶の服する衣、幅巾は隱者の服する頭巾、僧侶隱者の容態にて世を離れたる生活をなすをいふ (二) 超脱は一世を超越逸脱すること潁絕はその才の衆にすぐれたること (三) 世間の汚穢のものと同じく又世俗のものとその趣を合すことにて世俗と調子を合すをいふ (四) 社會の道が古の道と同じからずして卑下になれるをいふ (五) 迂遠にて世事にうとき者は、法則に拘泥して變通を知らず (六) 世俗を超越逸脱せし者は、法則の外にのり越えて之を守らず、放縱なる振舞をなすこと (七) 迂腐超脱何れにも片よらず又一方に傾かずしてその中庸を得るをいふ

俠骨香仍古。腰不下爲二督郵一折上五斗彭澤。從レ古高風清到レ今。○劍擊二秋風一四壁如レ聞二鬼嘯一琴彈二夜月一空山引二動猿號一○壯志憤懣難レ消。高人情深二一往一○先達咲二彈冠一休下向二侯門一輕曳上裾相知猶按レ劍。莫下從二世路一暗投上珠。

に彈ずれば、空山猿號を引動す。(一一)○壯志の憤懣は消し難く、(一二)高人の情は一往に深し。(一三)○先達彈冠を咲ふ。(一四)侯門に向ひて輕く裾を曳くを休めよ。(一五)相知猶ほ劍を按ず、(一六)世路に從ひ暗に珠を投ずる莫かれ。(一七)

(一) 今世に於て諸侯に封ぜらるゝ倔強の氣力を有するもの少きを遺憾とすること (二) 高き處に上りて四方を望み酒に對して飲むこと (三) 此日には烈士の歌を吟ずることを休めて風流を樂むべきをいふ (四) 我が身は我が人物を能く知れる人の爲に一死以て報ずるを許すをいふ (五) 侯嬴は戰國時代の人にて夷門の監者なりしが己を知れる信陵君の爲めに劍に伏して自刎せり、史記信陵君の傳に見ゆ (六) 侯嬴の任俠の氣骨のかをりは今日に至るまで相傳はりて滅びざるをいふ (七) 督郵は官名、陶淵明彭澤の縣令となる八十餘日にして郡の督郵縣に至る、淵明我五斗米の爲めに腰を郷里の小兒に屈せんやとて即日官を辭して郷里に歸れり (八) 五斗米の祿を得る彭澤の縣令なり (九) 陶淵明の高尚なるやうすは清白にして今に到るまで滅亡せざるをいふ (一〇) 秋風に向ひて劍を擊てばその聲四方の壁のあたり鬼の嘯く聲を聞くが如きをいふ (一一) 夜月に乘じて琴を彈ずれば空山に於て猿の鳴く聲を引き起すをいふ (一二) 雄壯の志遂げ難きを憤りもだゆるの情消え失せざるをいふ (一三) 高尚なる人の情は直に深く進み至るをいふ一往は直に進みて顧みざるの意 (一四) 先達は先輩に同じ、彈冠は冠の塵を拂ひ去りて仕官するをいふ (一五) 諸侯の門に向ひて輕く衣服の裾を引きて仕途に就くことをやむべしとなり (一六) 相互に心を知り合へる間に在りても因なくして前に至れば劍に手をかけて用意すること (一七) 暗夜に乘じて明珠を投じて人に贈ること、道を以てせずして人に仕ふることを求むべからざるをいふ

眞婦人事哉。○辦二大事一者。匪下猶以二意氣一勝上。蓋亦其知略絕也。故負ㇾ氣雄ㇾ行。力足三以折二公侯一。出ㇾ奇制ㇾ算。事足三以駭二耳目一。如二此人一者。俱千口矣。嗟嗟。今世徒虛語耳。

說ㇾ劍。談ㇾ兵。今生恨ㇾ少二封侯骨一。登ㇾ高對ㇾ酒。此日休ㇾ吟二烈士歌一。○身許下爲二知己一死上。一劍夷門。到ㇾ今

(一) 馬上に在りて槊を横たへて詩を賦し、馬を下りて壯烈に議論するは是れ英雄の眞の狀態なり (二) 屈原の作れる離騷經を吟誦して獨り酒を大に飲みて世外に超越するは是れ名士の風流なる生活なり (三) 詩に取り好む人は眼中古今を認めざるをいふ (四) 酒に取り好む人は眼中天地を認めざるをいふ (五) 熱地は權要の地なり、冷は閑靜の意、權要の地に在りて權要を喜ばずして閑靜を思ふこと (六) 處世は世の中に在りて生活すること、出世は世の中を脫出して世事に關せざる生活をなすこと (七) 腹の中に危險にして人を害する念を有すること、腹中に劍あるが如し (八) 口に言ふ所は蜜の如く甘くして誠實の念なきこと (九) 此は婦人の爲すべきことにして男子の爲すべきことにあらざるをいふ (一〇) 大事を處置すること (一一) その意氣の人に誇る所あるのみにあらずしてその知識謀略の人にすぐるゝ所ありて能く大事を處置するなり (一二) 氣力あるを負恃し行にすぐれてその力は以て公侯の貴人をも折きて恐るゝ所なきをいふ (一三) 奇計を出し妙算をきりもりしてその爲す事は人の耳目を驚かしむるをいふ (一四) 此の如き人は千古に儔ふべき英雄の士なりとの意 (一五) 今世の人はたゞ空しく議論するのみで大事を辨ずるの手腕なきをいふ

劍を說き兵を談じ、(一)今生封侯の骨少きを恨み、(二)高きに登り酒に對し、此日(三)烈士の歌を吟ずるを休めよ。○(四)身は知己の爲めに死するを許す、(五)一劍の夷門、(六)今に到るまで俠骨の香仍ほ古し。(七)腰は督郵の爲めに折らず。(八)五斗の彭澤、古より(九)高風清くして今に到る。○(一〇)劍、秋風に擊てば、四壁鬼嘯を聞くが如く、琴、(一一)夜月

涼凡此生不ㇾ虛。〇兒女情英雄氣。竝行不ㇾ悖。或柔腸。或俠骨。摠是吾徒。

の柔和なる心情と英雄の剛勇なる氣象とは並び行はれて相衝突するものにあらず （一九）或は柔和なる心腸を以てし、或は任俠の剛骨を以てして、兩つながら相用ふるは是れ吾が徒なり

上ㇾ馬橫ㇾ槊。下ㇾ馬談論。自是英雄本色。熟二讀離騷一。痛二飲濁酒一。果然名士風流。〇詩狂空二古今一。酒狂空二天地一。〇處ㇾ世當下于二熱地一思上ㇾ冷。出ㇾ世當下於二冷地一求上ㇾ熱。〇我輩腹中之劍。亦何可ㇾ少。要不二必用一耳。若二蜜口一。

（一）馬に上りて槊を横たへ、馬を下りて談論するは、自ら是れ英雄の本色なり。（二）離騷を熟讀し、濁酒を痛飲するは、果然名士の風流なり。〇（三）詩狂は古今を空しうし、（四）酒狂は天地を空しうす。〇世に處するには當に（五）熱地に于て冷を思ふべく、（六）世を出づるには當に冷地に於て熱を求むべし。〇（七）我輩腹中の劍、亦何ぞ少くべんや。要するに必ずしも用ひざるのみ。（八）蜜口の若きは眞に（九）婦人の事なる哉。（一〇）大事を辦ずる者は、獨り（一一）意氣を以て勝るのみに匪ず。蓋し亦其知略ゝ絕るゝなり。故に（一二）氣を負み行に雄にして、力は以て公侯を折くに足り、（一三）奇を出し算を制して、事は以て耳目を駭かすに足る。（一四）此人の如き者は俱に千口なり。（一五）嗟嗟今世は徒ゝ虛語のみ。

肩行李。收拾秋水春雲。深宮一世梳粧。惱亂晚花新柳。○得意不必人知。興來書自聖。縱口何關世議。醉後語尚顚。○英雄尚不肯以一身受天公之顚倒。吾輩奈何以一身受世人之提掇。是堪指髮。未可低眉。○能爲世必不可少之人。能爲人必不可及之事。則

可からざるの人と爲り、能く人の必ず及ぶ可からざるの事を爲さば、則ち庶幾くは、此生虛しからず(一七)。○兒女の情(一八)、英雄の氣、並び行はれて悖らず。或は柔腸(一九)、或は俠骨、摠て是れ吾が徒なり。

(一) 父兄の束縛することを得ざる不羈の豪傑あるをいふ (二) 教師朋友の力に感化することを得ざる程の馬鹿ものなきをいふ (三) 天倫は父子兄弟等天然の倫理なり、朋友は天然の倫理の外にありて能く和諧して道を輔くるものなり (四) 米元章は宋代の人、名は芾、書畫を善くす、平生石を好み石を呼んで兄と云へり (五) 世俗の中に奔走して之につかるゝこと、富貴利害の俗事に諂服して心を勞すること (六) 莊生は莊周なり、莊周は俗世界の紛擾を馬に喩へていへり、莊子に馬蹄篇あり (七) 詩人が肩に荷へる行李の中には秋の水の清く流るゝ、春の雲の棚引けるを收め拾ひて之を入るゝをいふ (八) 奥深く宮殿に在る宮女一生の美しく髮を梳り化粧したるさまは春曉咲ける花新しく芽を出して靑々たる柳をなやます程に美しきをいふ、曉花は粧にかゝり、新柳は髮にかゝる (九) 我が得意滿足せる境は必ずしも人の知るを期待せざるをいふ (一〇) 興味盛に起り來りて書を作れば書は自ら立派に書かるゝをいふ (一一) 口に任かせて自由に談論するも世議に關せす (一二) 酒に醉ひたる後語れはその言ふ所猶人の多く正しからず (一三) 世の英雄は肯へて我が一身を以て天公の爲めに自由に操縱せらるゝを受けずして自ら爲さんと欲する所を爲すなり (一四) 吾が輩も亦一身を以て世人より自由に操縱せらるゝを受くべからず、自ら自由に事を爲さざるべからずとなり (一五) 世人より提掇せらるゝが如きは是れ怒りて拒絶すべき事 (一六) 眉毛を低れて世人に媚び甘んじて受くべからざるをいふ (一七) 此の一生は虛しく世に生きずして社會を裨益する所あるをいふ (一八) 男女

于レ世何補。此生何用。○李太白云。天生ニ我才一必有レ用。黄金散盡能復來。又云。一生性僻耽ニ佳句一。語不レ驚レ人死不レ休。豪傑不レ可レ不レ解ニ此語一。

（一四）恵を與ふるものは亦必ず人より怨まるゝことあるなり　（一五）生殺なく恩怨なきをいふ　（一六）世間の風潮につれて波の靡くが如く世につれあひて意見を立てざること　（一七）肉菩薩は世を超絶せずして世俗と共にする菩薩の意なり　（一八）かゝる俗世界の汚濁を棄れる人は世間に於て裨益する所なきをいふ　（一九）此の如き人は世に生存するの用なきをいふ　（二〇）天が我が才を生ずるは必ず社會に用あるものなり　（二一）黄金は之を費し盡すとも再び來るものなれば惜むに足らず　（二二）我が一生の性質の片よりたる所は佳き詩句を作らんとして之に耽るに在り

天下固有ニ父兄不レ能レ囿レ之豪杰一。必無ニ師友不レ可レ化之愚蒙一。○諧ニ友于於ニ天倫之外一。元章呼レ石爲レ兄。労ニ奔走于ニ世途之中一。荘生喩レ塵以レ馬。○詞人牛

天下には固より父兄囿する能はざるの豪杰あり。必ず師友(一)化すべからざるの愚蒙なし。○友を天倫(二)の外に諧へば、元章(四)は石を呼んで兄と爲す。奔走(五)に世途の中に労すれば、荘生(三)は塵を喩ふるに馬を以てす。○詞人(七)牛肩の行李は、秋水春雲を收拾し、深宮(八)一世の梳粧は、晩花新柳を惱亂す。○得意(九)は人の知るを必せず。興(一〇)来りて書すれば自ら聖なり。縦(一一)口何ぞ世議に關せん。酔後(一二)語れば尚ほ顚す。○英雄(一三)倘ほ肯て一身を以て天公の顚倒を受けず。吾輩(一四)奈何ぞ一身を以て世人の提掇を受けん。是れ(一五)髪を指すに堪ふ。未だ(一六)眉を低るべからず。○能く世に必ず少く

之無二光澤一耳。○擲二金于一レ市者。見レ金而不レ見レ人。剖レ身藏レ珠者。愛レ珠而忘二自愛一。與夫決二性命一以饕二富貴一。縱二嗜欲一以戕レ生者。何以異。○說レ不レ盡三山水好景一。但付二沈吟一。當レ不レ起二世態涼炎一。惟有二哭泣一。○殺二得人一者。方能生レ人。有レ恩者必然有レ怨。若使二不レ陰不一レ陽。隨レ世波靡。肉菩薩出レ世。

に付す。世態の涼炎に當り起さず、(一一)惟〻哭泣あり。○人を殺し得る者は、方に能く人を生かす。(一二)恩ある者は必然怨あり。(一三)若し陰ならず陽ならず、(一四)世に隨ひて波靡せしめば、(一五)肉菩薩世に出でん。(一六)世に于て何ぞ補はん、(一七)此生何ぞ用ひん。(一八)○李太白云ふ、(一九)天我が才を生ず必ず用あり、黃金散じ盡すも能く復た來ると。(二〇)又云ふ、一生の性僻佳句に耽る、語人を驚かさずんば死すとも休まずと。豪傑此語を解せざるべからず。(二一)

(一) 三春は春三ケ月のこと、三春の花鳥の景は美しくして賞すべきをいふ (二) 千古に傳はるべき文章は世人は之を知らざれども只自らその千古に傳ふべき所あるを知るなり (三) 文章は自ら千古の後世に傳ふべき價値あり (四) 花鳥の三春の美景は只一時の美にして千古に傳ふべからざるをいふ (五) 大文章を書くべき大思想なくんば能く筆を運らして大文章を作るを得ずとの義 (六) 蓄墨は前より蓄へ積みたる墨汁、陳墨も早くよりある古き墨なり (七) 舊き墨の腐り古へたるものに　之を書くときは光澤なきを以て新しき墨を用ひざるべからず、卽ち舊き思想にては文章に光澤なければ新しき思想ならざるべからざるをいふ (八) 吾が身を剖きて其中に美珠を藏め蓄へて人の盜むを防ぐなり (九) 吾が生命をすてゝ以て富貴を欲深く貪り求むること (一〇) 飲食性欲をほしいまゝにして以て吾が生命を害すること (一一) 山水の好き景色は言語を以て說き盡すを得ず、故に但々心靜かに思考するにまかせること (一二) 世間の狀態の盛衰の移り行くに當るを得ず、故に惟々盛衰の變移を見て泣き悲しむなり (一三) 人に對して恩

鴻影來二窓際一。開レ戸從レ之。明月入レ懷。花枝零亂。朗二吟楓落呉江之句一。令二人悽絶一。○雲破月窺花好處。夜深花睡月明中。

三春花鳥猶堪レ賞。千古文章只自知。文章自是堪二千古一。花鳥三春只幾時。○士大夫胸中無二三斗墨一。何以運二管城一。然恐蘊釀宿陳。出レ

は千軍を掃ふ偉大の力あるをいふ (一二)翮は羽茎なり、飛鳥は羽茎を傷ふも猶は羽毛を大切にして愛するなり (一三)志ある士は生を捐てて死するに至るも溝壑に伏するも千里を忘れざるが如く初めの志を忘れざるなり (一四)敢て世上に對して活眼を開きて之を觀察すること (一五)肯て世間に向つて世事を愛へて眉を皺めるをいふ (一六)縹渺として、遠くかすかに見ゆる雲を離れたる一羽の鴻の影が窓ぎはの所に映り來ること (一七)明月が我が懐の中まで明かに照すこと (一八)花が散り亂れて落つること (一九)此句は唐の崔信明の句なり、此詩全篇は傳らず、只此一句のみ人口に膾炙せり (二〇)人をして極めてものあはれを感ぜしむるをいふ (二一)雲が離れ破れて月光が漏れて月が花の好き處を窺ふが如く見ゆるをいふ (二二)夜はふけ行きて花は月明かなる中に睡れるが如く見ゆるをいふ

(二三)三春の花鳥猶ほ賞するに堪へたり。千古の(二四)文章只ゝ自ら知る。文章は自ら是れ千古に堪へ、(二五)花鳥の三春只ゝ幾時ぞ。○士大夫の胸中三斗の(二六)墨無くんば、何を以て管城を運らさん。然れども恐くは蘊釀宿陳は、(二七)之を出すに光澤なきのみ。○金を市に攫む者は、金を見て人を見ず、(二八)身を剖きて珠を藏する者は、珠を愛して自ら愛するを忘る、夫の(二九)性命を決して以て富貴を饕り、嗜欲を(三〇)縦にして以て生を戕ふ者と何ぞ異ならん。○(三一)山水の好景を説き盡さず、但ゝ沈吟

香。與月薰魄。○忍到熟處。則憂患消淡。到眞時。則天地贅。○醺醺熟讀離騷。孝伯外敢曰並皆名士。碌碌常承色笑。阿奴輩果然盡是佳兒。○劍雄萬敵。筆掃千軍。○飛禽鍛翮。猶愛惜乎羽毛。志士捐生。終不忘乎老驥。○敢于世上開眼。肯向人間皺眉。○縹緲孤

○醺醺として離騷を熟讀すれば、孝伯の外敢て並に皆名士なりと曰ふ。碌碌として常に色を承けて笑へば、阿奴の輩果然盡く是れ佳兒なり。○劍は萬敵に雄にして、筆は千軍を掃ふ。○飛禽翮を鍛ふも、猶ほ羽毛を愛惜す。志士は生を捐つるも、終に老驥を忘れず。○敢て世上に于て眼を開き、肯て人間に向つて眉を皺めん。○縹緲たる孤鴻、影牕際に來る。戸を開いて之に從へば、明月懷に入り、花枝零亂し、楓落呉江の句を朗吟すれば、人をして凄絶せしむ。○雲破れ月窺ふ花好き處、夜深く花睡る月明の中。

(一) 十千は一萬錢なり、價の貴き美酒なり、美酒を飲みて花の爲めに粧飾を美しくする意　(二) 一片の名香を焚きて月と共にその魂魄までもくゆらして清くする意　(三) 忍耐することが充分の處に到達すればすべての憂患は皆消え失せて存せざるなり　(四) 淡泊無欲なることが眞實の處に到達すれば天地も亦無用のものと感ず　(五) 醺々は酒に醉ひて愉快に思ふこと、離騷は楚の屈原の作る所　(六) 王孝伯は晉代の人、その言に曰く名士は必ずしも奇才を須たず、但常に無事にして酒を痛飲し離騷を熟讀するを得しめば、便ち名士と稱すべしと　(七) 碌々は隨從して爲す所なきをいふ、先方の顏を承け順ひて笑ふこと　(八) 阿奴は晉の時の語、弟を稱して阿奴といふ、或は周顗の幼少の時の字なりといふ世説に出づ、周顗は東晉の人　(九) 劍は萬人の敵に當るべき雄夫の如きをいふ　(一〇) 文章

人也。○天下無二不レ虚之山一。惟虚。故高而易レ傾。天下無二不レ實之水一。惟實。故流而不レ腐。○篇詩斗酒。何殊二太白之丹丘一。扣レ舷吹レ簫。好繼二東坡之赤壁一。○因レ花索レ句。勝三他牘奏二三千一。○爲レ鶴謀レ糧。贏三我田畊二二頃一。○放二不レ出三憎レ人面孔一。落在二酒杯一。丟二不レ下三憐レ世心腸一。寄二之詩句一。

(一)空中に浮べる雲の山の穴より出て去るをいふ　(二)壁を立てたるが如き險しき崖の天に懸るが如く高きこと　(三)少しの雲の空中にちら〳〵棚引けること　(四)嶄々は高く擧ること、雲の飛びて高く擧りて霞の擧がるが如く見ゆること　(五)詩歌を詠じ或は諧謔して戯るゝこと　(六)太空をけがすこと　(七)君の腕中に鬼才ありとてこびへつらふこと、腕中有レ鬼は鬼才ありて文章を能くするをいふ　(八)無端は因なしと云ふに同じ、ふと腕中に入り來ること　(九)君の眼中には人を輕侮して、眼中に置かずとて之を責むるなり　(一〇)人が自ら吾が眼中に入り來りて吾に認識せらるゝを心よしとせざること　(一一)天下の山何れも皆虚也　(一二)山高くして崩壊し易きをいふ　(一三)水は充實して空虚なきをいふ　(一四)常に流れて已まず腐敗することなきをいふ　(一五)太白一斗詩百篇は杜甫が李白を詠ぜし詩なり　(一六)丹丘は神仙の居る地なり、此は吾も亦一斗の酒を飲み百篇の詩を作れば李白の丹丘と殊ならざるをいふなり　(一七)東坡赤壁に遊び舷(フナバタ)を扣きて詩を歌ひ客洞簫を吹く、吾亦之に倣ひて舷を扣き簫を吹くなり　(一八)花を見て之に因りて詩を考へて作ること　(一九)書牘三千通を發すること、三千は多きをいふのみ　(二〇)鶴を畜ひて之に食物を與ふること　(二一)贏は勝なり、我が田地二畝を耕作するに勝れると　(二二)人を憎む面貌を取り去らす、之を酒杯に寄せ託するをいふ　(二三)世の人を愛憐する心を取り去らずしてその心情を詩句の中に寄せ託するをいふ

春到十千美酒。爲レ花洗レ粧。夜來一片名

春到りて十千の美酒(一)、花の爲めに粧を洗ひ、夜來りて一片の名香(二)、月と魄を薰らす。○(三)忍は熟處に到れば則ち憂患消え、(四)淡は眞時に到れば則ち天地贅なり。

門ニ歸レハ見ニ江山逶迤草木皆爾一。人常言レ佳。我覺ニ是別離人腸中。一段酸楚氣一耳。

浮雲出レ岫。絶壁天懸。日月清朗。不レ無ニ微雲點綴一。看ニ雲飛軒軒霞擧一。據ニ胡床一與ニ友人一詠謔。不ニ復滓ニ穢太虛一。○人每譏ニ余腕中有一レ鬼。余謂鬼自無レ端入ニ吾腕中一。吾腕中未ニ嘗有一レ鬼也。人每責ニ余目中無一レ人。余謂。人自不レ屑レ入ニ吾目中一。吾目中未ニ嘗無一レ

浮雲岫を出で、(一)絶壁天に懸り、(二)日月清朗なるも、(三)微雲の點綴無くんばあらず。雲飛びて軒軒として(四)霞擧するを看、胡床に據り友人と詠謔し、(五)復た太虛を滓穢せず。(六)○人毎に余が腕中鬼ありと譏れども、余は謂ふ、鬼自ら端なく吾が腕中に入る。(七)吾が腕中未だ嘗て鬼有らざるなりと。(八)人毎に余が目中人無しと責むれども、余は謂ふ、人自ら吾が目中に入るを屑しとせず、(九)吾が目中未だ嘗て人無くんばあらざるなりと。(一〇)○天下に實ならざるの山無し。(一一)惟虛なるが故に高くして傾き易し。(一二)天下に虛ならざるの水無し。惟實なるが故に流れて腐せず。(一三)○篇詩(一四)斗酒何ぞ太白の丹丘に殊ならん。(一五)舷を扣き簫を吹き、(一六)好し東坡の赤壁に繼ぐ。(一七)○花に因りて句を索むるは、(一八)他の牘の三千を奏するに勝る。(一九)鶴の爲めに糧を謀るは、(二〇)我が田二頃を耕すに贏る。(二一)○人を憎む面孔を放ち出さず、(二二)落ちて酒杯に在り、(二三)世を憐むの心腹を丟り下さず、之を詩句に寄す。

逸一世一。○明月在レ天。秋聲在レ樹。珠箔捲。嘯倚二高樓一。蒼苔在レ地。春酒在レ壺。玉山頹。○醉眠二芳草一。○胸中自是奇。乘レ風破レ浪。平二呑萬頃蒼茫一。脚底由來濶。歷レ險窮レ幽。飛二度千尋香靄一。○松風澗雨九霄外。數聲環珮淸二我吟魂一。海市蜃樓萬水中。一幅畫圖。供二吾醉眼一。○每從二白

呑す。脚底由來濶ければ、(一一)險を歷、幽を窮め、(一二)千尋の香靄たるを飛度す。(一三)○松風澗雨九霄の外、(一四)數聲の環佩、(一五)我が吟魂を淸くす。(一六)海市蜃樓萬水の中、一幅の畫圖、(一七)吾が醉眼に供す。○每に(一八)白門より歸りて、(一九)江山透迤として草木の蒼鬱を見る、人常に佳と言へども、(二〇)我は是れ別離の人の腸中、(二一)一段の酸楚の氣を覺ゆるのみ。

(一) 秋の空に鶴の唳く聲を聞くこと (二) 偈々は軒擧の貌、世を超逸したる心情のぬけ出てすぐれたること (三) 龍騰は海水の高く立ち騰る龍卷の類なり (四) 勇壯の心の盛に起ること、勃々は盛に起る貌 (五) 皂蓋は黑布を以て作る蓋、白牓は白き木の札 (六) 黃色の帽を冠し、素鞋を履きて山水を探くる、黃帽靑鞋は山野の人の服する所なり、靑鞋は質素の鞋なり (七) 一世を我が思ふまゝ愉快に渉ること (八) 珠を以て飾りたる簾を捲き上ぐること (九) 酒に醉ひて頽れ倒れかゝる所玉山の頽るゝが如きこと、嵇叔夜の故事 (一〇) 萬頃は廣大をいふ、一萬頃の廣大なる海の蒼々として、茫然たる處も之を一呑にする程の廣大なる氣分となること (一一) 脚もとが本來濶くして大いなるをいふ (一二) 千尋は深遠なる所也、深遠なる所の遙に遠くかすめる所をも飛び渡る程の氣分の起ること (一三) 松にあたる風、澗間に降り來る雨の聲の九霄の外に聞ゆること、九霄は太空の極めて高き處 (一四) 腰に佩べる環の音が數聲聞え來ること (一五) 我が風流心を淸くならしむるをいふ (一六) 海市は海中に起る幻影、蜃樓は海市の起る時空中に樓閣を映出するもの (一七) 海市の一幅の畫の如き美しき景色を以て吾が醉眼に供して之を覽るをいふ (一八) 白門は金陵のこと (一九) 楊子江及金陵の山岳のうねうねとして連りわたること (二〇) 友人故舊と相別るゝ人の心中 (二一) 一層の悲慘の氣分あること、酸楚は悲しく苦しきことなり

其母製十二幅被。以招賢士共臥。庶得聞君子之言。○張烟霧于海際。耀光景于河渚。乘天梁而皓蕩。叫帝閽而延佇。○聲響可盡。江天不可盡。丹青可窮。山色不可窮。

(一) 豪傑の放語のみにて眞の文章にあらざるをいふ (二) 山中に在る洞穴なり (三) 盥は手を洗ふ器、盆は水を盛る器なり、此の二器破壞して用ふべからざるをいふ (四) 瓢は樂器なり、瓢を以て水を注ぎ洗ふ道具とするをいふ (五) 蓋は身を蓋ふ我が夜着の類なり (六) 孟宗は三國時代の人、呉に仕へ官司空に至る二十四孝の一人なり (七) 十二幅（ハヾ）ある大なる夜着を作ること (八) 烟の如き雲霧の海邊に棚引きわたること (九) 美しき景色の河邊に輝くが如く美觀なること (一〇) 天梁は天に登り行き橋梁なり、皓蕩は心の廣く大きくなること (一一) 帝閽は天門なり、天帝の居る門に向つて呼びて大聲を發すること、延佇は暫く立ち止まること (一二) 江天相映する佳き風光は萬世盡きざるをいふ (一三) 丹青は畫のこと、畫は丹色青色を以て彩色するを丹青といふ (一四) 山嶽の景色は窮め盡すべからざるをいふ

聞秋空鶴唳。令人逸骨僊僊。看海上龍騰。覺我壯心勃勃。○皂囊白簡。被人描盡半生。黄帽青鞋。任我逍遙

秋空の鶴唳を聞けば、人をして逸骨僊僊たらしめ、海上の龍騰を看ては、我が壯心の勃勃たるを覺ゆ。○皂囊白簡は、人に半生を描き盡され、黄帽青鞋は我が一世を逍遙するに任かす。○明月天に在り、秋聲樹に在れば、珠箔捲かれ、嘯きて高樓に倚る。蒼苔地に在り、春酒甕に在れば、匡山頹れ、醉うて芳草に眠る。○胸中自ら是れ奇なれば、風に乘じて浪を破り萬頃の蒼茫たるを平

爽之幽宮。(二二)

胸中無二三萬卷書一。眼中無二天下奇山川一。未二必能一レ文。縱能爾豪杰語耳。○山厨失レ斧。斷レ之以レ劍。客至無レ枕。解レ琴自供。盥盆潰散。磬爲二注洗一。盖不レ煖レ足。覆レ之以レ簑。○孟宗少遊學。

(一六) 喑嗚は怒聲なり、一たび怒聲を發すれば山岳も崩るゝ程に氣魄なり (一七) 叱咤も亦怒聲なり、一たび叱咤すれば疾風迅雷もその氣色を變ずるの趣あり、二句共に勇將の意氣をいへるなり (一八) 筆海は文字の世界の義、その廣大なるより海といへるなり (一九) 流を航する舟となること、此は文章の世界を濟るときは海を濟る舟となりて之を輔くること (二〇) 文園も亦文章世界の義なり羽翼は之を輔くること (二一) 木の上に栖める鵰（クマタカ）の木の杪に巣かくる所まで攀ぢ上ること (二二) 馮夷は水中の神、水中の神の居る深き所を俯して視ること

胸中に三萬卷の書無く、眼中に天下の奇山川無くんば、未だ必ずしも文を能くせず。縱ひ能くすとも亦(一)豪杰の語のみ。○(二)山厨にて斧を失へば、之を斷つに劍を以てし、客至りて枕無くんば、琴を解きて自ら供し、(三)盥盆潰散すれば、(四)磬を注洗と爲し、(五)蓋足を煖めずんば、之を覆ふに蓑を以てす。○(六)孟宗少うして遊學す。其母(七)十二幅の被を制し、以て賢士を招きて共に臥せしむ。庶くは君子の言を聞くを得んと。○(八)烟霧を海際に張り、(九)光景を阿渚に耀し、(一〇)天梁に乘りて皓蕩し、(一一)帝閽に叫びて延佇す。○聲譽は盡くべきも、(一二)江天は盡くべからず、(一三)丹青は窮むべくして、(一四)山色は窮むべからず。

懸レ榻待二賢士一。豈曰二交情已一乎。投レ轄留二好賓一。不レ過二酒興一而已。○才以レ氣雄。品由レ心定。○爲レ文而欲二一世之人好一。吾悲二其爲一レ文。○爲レ人而欲二一世之人好一。吾悲二其爲一レ人。○喑嗚則山岳崩頽。叱咤則風雷變レ色。○濟二笮海一則爲二舟航一。騁二文囿一則爲二羽翼一。○攀二栖鶻之危巣一。俯二馮

人の好まんことを欲す。吾其の人と爲りを悲む。○喑嗚(一六)すれば則ち山岳崩頽し、叱咤(一七)すれば則ち風雷色を變ず。○笮海(一八)を濟れば則ち舟航(一九)と爲り、文囿(二〇)に騁すれば則ち羽翼と爲る。○栖鶻(二一)の危巣を攀ぢ、馮夷(二二)の幽宮に俯す。

(一) 管城子は筆の別稱、此は黄庭堅の語、文章家に厚祿を得る官吏と爲るの相貌なきをいふ (二) 食人の淺薄なる見識は何の用をも爲さゞるをいふ (三) 孔方兄は錢のこと、錢はその孔穴が四角なるを以て孔方といひ、之を親みて兄といふ、此句も黄庭堅の語なり、錢は吾に對しては其の交を絶ちて金錢を所有するを拒むをいふ (四) 今日錢に對して堅く盟を結びて交際することも終には絶交されて舊交存せざるに至るべきをいふ、此は金錢を得んとするも金錢は交を絶ちて吾に交らされば之を得ざるをいふなり (五) 心の持ち方は疎放にして清朗なるを貴ぶこと (六) 豪邁にして華やかなることを己の意の如く爲すべからず (七) 文章は雄大にして奇拔なるを要すること (八) 寂寞は文章の淡泊にあつさりとしてはれやかなる樣子のなきこと (九) 栖は今の椅子の如きもの、後漢の陳蕃太守たる時徐穉子の爲に特に一榻を設け去れば之を懸く (一〇) 此は只交際の情の厚きのみならず、賢士を敬するの念厚きなり (一一) 轄は車のくさび、漢の陳遵大に賓客を會し門を閉ぢて車轄を取り井中に投じ去るを得ざらしむ (一二) 此は一時の酒を飲む興趣に過ぎずして賢士を優待するの意に非らず (一三) 人の才はその人の氣によりてすぐれ、その人の人品は心に由りて定まるものなりとの意 (一四) その文の達意を求めずして只人の好まんことを欲するは文を作るの趣意に反す、此の如き文は長く後世に傳らずして滅亡すべし故に之を悲む (一五) 自己の人格の高尚なるを求めずして只人の好むことを欲するは修養の理に反す、此の如き人はその人格滅亡して不朽に傳らず故に之を悲むなり

成二嘯虎之風一。豪舉破二湧山之浪一。○立レ言者。未三必即成二千古之業一。吾取三其有二千古之心一。好レ客者。未三必即盡二四海之交一。吾取三其有二四海之願一。

(一五) 工は工人なり、百官をいふ、瞽は瞽者なり、芻蕘は草を刈り薪を采る人、皆言は天之を賤しき身分の人に託す、即ち賤人能く之を言ふなり (一六) 高尚なる行爲なり、高尚なる行爲は英雄に存せざるをいふ (一七) 漁父樵夫、耕作する農夫及び牧者が却つて高尚なる行爲を爲すをいふ (一八) 高尚なる言は虎の嘯きて、風を成すが如く世に謳はるるをいふ (一九) 豪俊なる擧動は山の如く高く湧き起る浪を破りて進むが如く一世を震蕩するをいふ (二〇) 千古の業を成さんとする心ある所を取る (二一) 天下全般の人と交りてその歡を盡すこと (二二) 四海の人と遍く交はらんことを希望する心ある所を取る

管城子無二食肉相一。世人皮相何爲。孔方兄有二絕交書一。今日盟交安在。○襟懷貴二疎朗一。不レ宜三太逞二豪華一。文字要二雄奇一。不レ宜三故求二寂寞一。○

(一)管城子に食肉の相無し。(二)世人の皮相何をか爲さん。(三)孔方兄に絕交の書あり、(四)今日の盟交安にか在る。○(五)襟懷は疎朗を貴ぶ、宜しく太だ(六)豪華を逞しくすべからず。(七)文字は雄奇を要す。宜しく故らに(八)寂寞を求むべからず。○(九)榻を懸けて賢士を待つは、豈(一〇)交情と曰ふのみならんや。(一一)轄を投じて好賓を留むるは、(一二)酒興に過ぎざるのみ。○(一三)才は氣を以て雄にして、品は心に由りて定まる。○(一四)文を爲りて一世の人の好まんことを欲す。吾其の文を爲るを悲む。○(一五)人と爲りて一世の

下第一品人一。毋ㇾ爲二天下第一品官一。○大丈夫當二雄飛一。安能雌伏。○登二華山落雁峰一。呼吸之氣可ㇾ通二帝坐一。恨不下攜二謝朓驚ㇾ人句一。搔ㇾ首問中靑天上。○志欲ㇾ梟二逆虜一。枕ㇾ戈待ㇾ旦。常恐二祖生先ㇾ我著ㇾ鞭。○旨言不ㇾ顯二經濟一。多託二之工瞽芻蕘一。高蹤不ㇾ落二英雄一。常混二之漁樵畊牧一。○高言

攜へて首を搔きて靑天に問はざるを。○志は逆虜(九)を梟せんと欲し、戈を枕(一〇)にして旦を待つ、常に祖生(一一)が我に先だちて鞭を著けん(一二)ことを恐る。○旨言(一三)は經濟(一四)に顯はれず、多くは之を工瞽芻蕘(一五)に託す。高蹤(一六)は英雄に落ちず、常に之を漁樵畊牧(一七)に混ず。○高言(一八)は嘯虎の風を成し、豪擧(一九)は湧山の浪を破る。○言を立つる者、未だ必ずしも卽ち千古の業を成さず、吾は其の千古の心(二〇)あるを取る。客を好む者未だ必ずしも卽ち四海の交(二一)を盡さず。吾は其の四海の願(二二)あるを取る。

(一) 山川風月の景色の佳き所は吾能く到ることを得れば、山川風月は皆々吾に屬するものにて吾の所有物なり (二) 人格の最も高尙なる人と爲るべきをいふ (三) 人の官位中第一等の高官なる官は卽ち宰相なり (四) 大丈夫たるものは雄鳥の飛び翔るが如く世に大事業を立つべきをいふ (五) 雄鳥の地に伏するが如く大業を爲す能はずして屈伏するをいふ (六) 華山の中に落雁峰といへる峰ありて尤も高嶺なり、此は李白の語なり (七) 我が呼吸する息が天帝の居る處まで通ずべしとなり、高きこと天を摩するをいふ (八) 謝朓は南北朝時代の齊の人、詩を能くす嘗て宣城の太守たりしを以て世に謝宣城と稱す、謝朓が人を驚かせる如き妙句を持ち來りて頭を搔き乍ら靑天に問はざるを遺憾とするの意 (九) 朝廷に反抗する賊人の首をさらし首にするをいふ (一〇) 戈を枕にして、寢ねて夜の明くるを待ち戰ふをいふ (一一) 祖生は晉の元帝の時の人祖逖を指す (一二) 我に先だちて鞭を擧げて進むこと、我に先だちて功業を立つるをいふ (一三) 旨言は滋味ある善き言なり (一四) 經世濟民卽ち天下經營の事業の上に顯はれざること

術。不ㇾ惜ㇾ爲ㇾ公授。梁曰。吾名在天地間。只恐盛著不了。安用長生。○王仲祖有好形儀。毎覽鏡自照曰。王文開。那生如馨兒。○吳正子窮居一室。門環流水。跨ㇾ木而度。度畢即抽ㇾ之。人問ㇾ故。笑曰。土舟淺小。恐不ㇾ勝富貴人來踏耳。

吾有ㇾ目有ㇾ足。山川風月。吾所能到。便即屬ㇾ吾。我便是山川風月主人。○寧爲天

能く貯へ置くことを得べからずとて世に我身を容るべき地なきをいふ　(三) 按は行なり、波を踏むと同意にて波打つ中へ飛び入るをいふ　(四) 屬對は文章を作ること、屬は文章をつゞること、對は對句をなすことなり　(五) 斗大は至小なり、一斗ます程の大さなり、薄薬の至小の事業を薄んじ賤むをいふ　(六) 鄧通は金錢をいふ、鄧通は漢代の人、文帝に幸せられ、蜀の銅山を賜はり自ら錢を鑄、その錢天下に布く、依りて金錢のことを鄧通といふ、麼々は些少の意金錢の如き些少のものを事とせんやの意　(七) 李于鱗は明代の人、詩文を善くす　(八) 長く生存する方術なり　(九) 名の世に盛になり了らざるを恐るゝとの意　(一〇) 王祇は王濛、晉時代の人、風流の士なり　好形儀は容貌の立派なるをいふ　(一一) 王文開は王仲祖の父王訥なり　(一二) 如馨は寧馨と同じく晉代の俗語、此の如しと同意なり、如何して此の如き好き見を生みたるぞと自ら誇れるをいふ　(一三) 度りし木を抽き取ること　(一四) 跨りて度りし木の淺小なること土を以て作れる舟の淺小なるが如し　(一五) 富貴の人の來りて訪問するを恐れて、之を抽きたるをかく云ひしなり

吾れ目あり足あり、山川風月、(一) 吾が能く到る所は便ち即て吾に屬すれば、我は便ち是れ山川風月の主人なり。○寧ろ天下第一品の人と爲らんも、天下第一品(二)(三)の官と爲ること毋れ。○大丈夫當に雄飛すべし。安んぞ能く雌伏せん。(四)(五)○華山(六)の落雁峰に登れば、呼吸の氣帝坐に通ずべし。恨むらくは謝朓人を驚かすの句を(七)(八)

宋海翁才高嗜酒。側睨當世。忽乘醉泛舟海上。仰笑曰。吾七尺軀。豈世間凡土所能貯。合以大海葬之耳。遂按波而入。○毛澄七歲善屬對。諸喜之者。贈以金錢。歸擲之曰。吾猶薄蘇秦斗大。安事此鄧通麼麼。○梁公實薦一士于李于鱗。士欲以謝梁也。吾有長生

宋海翁才高くして酒を嗜み、(一)當世を側睨し、忽ち醉に乘じて舟を海上に泛べ、仰ぎ笑つて曰く、吾が七尺の軀、(二)豈世間の凡土に能く貯ふる所ならんや。合に大海を以て之を葬るべきのみと。遂に波を按じて入る。(三)○毛澄七歲にして(四)屬對を善くす。諸の之を喜ぶ者、贈るに金錢を以てす。歸りて之を擲ちて曰く、吾猶ほ蘇秦の斗大を薄しとす。(五)安んぞ此鄧通の麼麼を事とせんやと。(六)○梁公實に一士を李于鱗に薦む。(七)士以て梁に謝せんと欲して曰く、(八)吾長生の術あり。公の爲めに授くるを惜まずと。梁曰く、吾が名天地の間に在り、(九)只盛著し了らざるを恐る。安んぞ長生を用ひんと。(一〇)○王仲祖好形儀あり。每に鏡を覽て自ら照して曰く、(一一)王文開那ぞ如馨兒を生むと。(一二)○吳正子一室に窮居す。門に流水を環らし、木に跨りて度り、度り畢れば卽ち之を抽く。(一三)人故を問ふ。笑つて曰く、(一四)土舟淺小、恐らくは富貴の人の來り踏むに勝へざるのみと。(一五)

(一) 當時の社會を橫目にて睨むこと、當世に滿足せずして不平ある狀貌なり　(二) 我が身は世間の有らゆる土地に

孤寂。携二琴奕一以遲二良友一。淩レ晨杖レ策。薄暮言旋。此亦樂境。○鬚眉之士在レ世。寧使下鄉里小兒怒罵上。不レ當レ使二鄉里小兒見一レ憐。○胡宗憲讚二漢書一。至二終軍請レ纓事一。起叫。曰。男兒雙脚。當下從二此處一插入上。其他皆狼藉耳。○丈夫富貴。何必故鄉。以二妻子一經レ懷。豈不レ沮二入雄思一。

で曰く、男兒雙脚、(一四)當に此處より插入すべし。其他は皆狼藉の(一五)み。○丈夫の富貴、(一六)何ぞ必ずしも故鄉ならん。妻子を以て懷を經ば、(一七)豈人の雄思を沮まざらん(一八)やと。

(一) 數畝の地を開拓すること、畝は百歩の地なり (二) 楹は柱なり、五六本の柱ある小さき家屋を築くこと (三) 花の開く木を插して生き垣を作るをいふ (四) 茅を編みて屋根となして亭を作ること (五) 四方の壁は淸らかにして曠しく物なきをいふ (六) 家の中には一爲も物を置かずして空虛にすること (七) 胡床は今の椅子の類、胡床を並べ置きて亭の下に安置すること (八) 琴と棋盤と携へて良き朋友の訪ひ來るを待つこと (九) 日の暮れ方に逼りてぶら〳〵と旋り歩くこと、旋は周旋あり、言はコ、と訓ず語の辭 (一〇) 鬚や眉の立派なる男子、男子の美は鬚眉に在り、因りて男子を稱して鬚眉といふ (一一) 鄉里の小兒輩をして怒りてその男子を罵詈せしむること、剛强にして屈せざる所あるなり (一二) 憐は愛憐なり、鄉里の小兒輩に愛憐やらるゝが如き、柔弱溫和なる男子たるべからざるをいふ (一三) 終軍は漢代の人、武帝の時博士と爲り陳諫大夫に擢きんでらる、自ら闕に詣りて長纓を受け南越王を繫がんことを請ふ、纓は糸なり (一四) 男兒の二本の脚は此の如き處より插し入れて步まざるべからず、大膽にして功業を立つるをいふ (一五) その他の所は皆亂雜にして脚を插し入るべき所にあらず (一六) 男子の富貴たるは故鄉のみに限らず、何處に在りても富貴たらざるべからず (一七) 妻子の事を以て我が心の中に纏綿して忘れざること (一八) 妻子などの事を心に思へば人の雄大なる思慮を沮喪せしめ遠大なる事を爲し得ざるをいふ

發レ于二夢想一。此間但有二荒山大江修竹古木一。每食二村酒一。醉後曳レ杖放レ脚。不レ知二遠近一。亦曠然天眞。

闢レ地數畝。築レ屋數楹。插レ花作レ籬。編レ茅爲レ亭。以二一畝一蔭二竹樹一。一畝栽二花果一。二畝種二瓜菜一。四壁淸曠。空二諸所有一。畜二山童一。灌レ園薙レ草。置二二三胡床一著二亭下一。挾二書硯一以伴二

(一七) 酒を飲む人の醉ひたる狀態を看て興を感ずるなり (一八) 古人の跡を吊ひ幽寂なる境を訪れること (一九) 我が胸中に有する山谷の風流を樂む心を推し廣むること (二〇) 物質以外の文章は自然の風致なり、自然の風致の佳なる處に遊ぶこと (二一) 雪の降りたる時の景色の淸らかなる曉け方の景 (二二) 夢の中に想像したるが如き景なるをいふ (二三) 荒涼の處に在る山と浩大なる江水と長き竹と老いたる古木 (二四) 脚の向ふ所へ思ひのまゝ歩行すること (二五) 廣くして渾然たる自然の眞面目あること

(一)地を闢くこと數畝、(二)屋を築くこと數楹、(三)花を插みて籬を作り、(四)茅を編みて亭と爲し、一畝を以て竹樹を蔭し、一畝は花果を栽ゑ、二畝は瓜菜を種ゑ、(五)四壁淸曠、(六)諸の所有を空しくし、山童を畜へ園に灌ぎ草を薙らしめ、二三の(七)胡床を置きて亭下に著し、書硯を挾みて以て孤寂を作ひ、(八)琴奕を携へて以て良友を遲ち、晨を淩ぎて策を杖つき、(九)薄暮言に旋す、此れ亦樂境なり。○(一〇)讀書の士の世に在るや、寧ろ鄕里の小兒をして怒罵せしむとも、(一一)當に鄕里の小兒に憐まれしむべからず。○(一二)胡宗憲漢書を讀み、(一三)終軍纓を請ふの事に至り、起ちて叫ん

鐵。不レ憂ニ當レ道豺狼一。○要レ做ニ男子一須レ負ニ剛腸一。欲レ學ニ古人一。當レ堅ニ苦心一。○雲長香火。千載遍レ于ニ華夷一。坡老姓名。至レ今口レ于ニ婦孺一。意氣精神。不レ可ニ磨滅一。○據レ床嗒爾。聽ニ豪士之談鋒一。把レ盞惺然。看ニ酒人之醉態一。○登レ高眺レ遠。弔レ古尋レ幽。廣ニ胸中之丘壑一。遊ニ物外之文章一。○雪齋淸曉。

堅くすべし。○雲長(九)の香火(一〇)、千載華夷に遍く、坡老(一一)の姓名、今に至るまで婦孺(一二)に口せられ、意氣精神(一三)磨滅すべからず。○床に據り嗒爾(一四)として、豪士(一五)の談鋒を聽き、盞を把りて惺然(一六)として、酒人(一七)の醉態を看る。○高きに登り遠きを眺め、(一八)古を弔し幽を尋ね、胸中(一九)の丘壑を廣くし、物外(二〇)の文章に遊ぶ。○雪齋(二一)の淸曉(二二)、夢想に發し、此間但荒山大江(二三)修竹古木あり、每に村酒を飲み、醉後杖を曳き(二四)脚を放にし、遠近を知らず、亦(二五)曠然たる天眞なり。

(一) 遠大なる計畫 (二) 眼孔如レ輪は、眼光の極めて大なるをいふ (三) 堂に居るの燕雀の小なるを怪むをいふ (四) 豪傑の士は壯大なる志氣あるをいふ (五) 風稜は稜々たる風骨の鐵の如く剛強なるをいふ (六) 豺狼は害を爲す惡人に喩ふ、國家の要路に當る惡人あるを憂へず、之を除去するをいふ (七) 剛強なる心腸を負持すること (八) 艱苦を忍ぶの心を堅く持すべきをいふ (九) 雲長は關羽の字、關羽は三國時代蜀の人劉備の臣なり、その人となり剛勇にして兵に長ず、死後關帝廟天下に遍し、香火は關帝廟に參拜して焚く香の火なり (一〇) 千歲の後まで支那の中國及び夷狄にまで遍く祀らるゝをいふ (一一) 坡老は宋の蘇東坡のこと (一二) 婦人や孺子までの口に稱讚せらるゝをいふ (一三) 關羽及び蘇東坡の意氣と精神とは後世に至るまですり消えて亡ぶることなきをいふ (一四) 嗒爾は我を忘れてぼんやりとしたる貌 (一五) 豪傑の士の舌鋒鋭き談論を聽くをいふ (一六) 惺然はその心の覺醒して明かなる貌

恨ニ我不ヽ見ニ古
時人一。惟恨ニ古
時人不ヽ見ヽ我。
○榮枯得喪。
天意安排。浮
雲過ニ太虛一也。
用舍行藏。吾
心鎭定。砥柱
在ニ中流一乎。○
靑曾積ヽ石爲ヽ
倉。以藏ヽ書。名ニ
靑氏石倉一。

丈夫須ヽ有ニ遠
圖一。眼孔如ヽ輪。
可ヽ怪ニ處ヽ堂燕
雀一。豪杰寧無ニ
壯志一。風稜似ヽ

黛色の眉墨の青黒き色と同じく青々としたるをいふ　(八)　柳の枝がしづかに輕き風に吹き揚はれて搖く狀なり　(九)　その妻に問ひて醸したる酒を提ぐるを求むるなり　(一〇)　新に作りたる酒のこと　(一一)　門に好客の臨み來るありて共に茶を啜るなり　(一二)　此時の風情氣味は言ふに言はれぬおもむきあるをいふ　(一三)　腹中に文章思想の滿つること　(一四)　鬼は傾聽なりその人を以て、狡黠傾聽の人なりといひて罵るを得ざるをいふ　(一五)　我身を措くべき地なく漂泊する身を以て却て天の事を變ふるをいふ　(一六)　諸侯に封ぜられて一國の主となるをいふ　(一七)　國家に功を立て廟を作り神として祀らるゝをいふ　(一八)　民間に隱居して國家の事に與せずして以てその志氣を養ふべきをいふ　(一九)　詩書以て自ら樂しむに足るべきをいふ　(二〇)　我今日に在りて古代の人を見ざるを以て遺憾とせず　(二一)　古代の人が我の爲す所を見ざるを恨むの意にて、豪爽爲するあるを見るべし　(二二)　榮枯は盛衰に同じ、人生の盛榮と衰枯と、富貴を得ると富貴を失ふとをいふ　(二三)　天がその意を以て都合よく排置して榮枯得喪せしむるをいふ　(二四)　空中に浮べる雲の太空を過ぐるが如く、一時的のものにて根據なきをいふ　(二五)　世我を用ふればその道を行ひ世我を捨つればその道を隱して行はざるをいふ　(二六)　我が心を鎭め定むる根柢となること、恰も砥柱の中流に在りて、水の爲めに動かざるが如きをいふ、砥柱は山の名、黄河の中に在り　(二七)　靑曾は三國時代の人

丈夫須らく遠圖(一)あるべし。眼孔(二)輪の如くなれば、堂に處るの燕雀を怪むべし、豪杰(四)寧ぞ壯志無からん、風稜鐵(五)に似ば、道に當る(六)の豺狼を憂へず。○男子と做るを要せば、須らく鋼腸(七)を負ふべし。古人を學ばんと欲せば、當に(八)苦心を

不レ盡之餘韵。托二花谷一爲二深山一。○紅潤二口脂一。花蘂乍過二微雨一。翠匂二眉黛一。柳條徐拂二輕風一。○問レ婦索レ釀。甕有二新芻一。呼レ童煑レ茶。門臨二好客一。此時情興何如。○滿腹有レ文。難レ罵レ鬼。措レ身無レ地。反憂レ天。○大丈夫居レ世。生當レ封レ侯。死當二廟食一。不レ然閑居可二以養一レ志。詩書足二以自娯一。○不レ

の眉黛(七)に匂とするは、柳條(八)徐に輕風に拂はるゝなり。○婦(九)に問ひて釀を索めば、甕に新芻(一〇)あり。童を呼びて茶を煑れば、門好客(一一)に臨む。此時(一二)の情興何如ぞや。○滿腹(一三)文あり、鬼(一四)と罵り難し、身を措く(一五)に地無く、反りて天を憂ふ。○大丈夫世に居る、生きては當に侯(一六)に封ぜらるべく、死しては當に廟食(一七)すべし。然らずんば閑居(一八)して以て志を養ふべし。詩書(一九)以て自ら娯しむに足る。○我れ古時(二〇)の人を見ざるを恨みず、惟だ古時の人の我(二一)を見ざるを恨む。○榮枯得喪(二二)は、天意(二三)の安排にして、浮雲(二四)の太虛を過ぐるなり。用舍行藏(二五)は、吾が心の鎭定にして、砥柱の中流に在るか。○曹曾(二六)石を積みて倉と爲し以て書を藏す、曹氏(二七)の石倉と名づく。

(一) 英雄が未だ實地に運轉せざる雄大なる計畫をいふ (二) 糟丘は酒の糟を積みて丘の如く高くすることにて酒に荒むこと、此は豪奢を動作をなして天下に顯たるの事業を爲したるものと思ふこと (三) 風流なる遊びを爲して餘韵の盡きざること (四) 花の盛に開きたる山谷を以て深山に入りて遊べる思を爲すこと (五) 花の紅色のつやありて美しきこと、口につくる脂の潤へるが如きをいふ (六) 此は花蘂の乍ち少しの雨に相遇ひて潤へる景なり (七)

寧ニ他一片熱
腸ヲ戀戀自古
今ヲ懸ニ此兩隻
冷眼ヲ。○龍津
一劍。尙作レ合
于ニ風雷ヲ。胸中
數萬甲兵。寧
終老レ于ニ膈下ニ。
○此中空洞
原無レ物。何止
容ニ鄉數百人ヲ。

英雄未レ轉之
雄圖。假ニ糟丘ニ
爲ニ霸業ヲ風流

宮城の門に運るとは朝廷に仕へて高官に上らんことを夢想するをいふ 〔一一〕 郢は楚の都なり、楚の都郢 飛聲は音調揚はず、聲の揚るを飛といふ 〔一二〕 楚囚は楚國の捕虜なり、左傳に晉侯觀ニ于軍府一見ニ鍾儀一問レ之曰、南冠而縶者誰也、有司對曰、鄭人所レ獻楚囚也、とあり、この楚囚もと俗人なりしかば琴を鼓せしめしに南音を操れり 〔一三〕 金門は金馬門のこと、漢の武帝學士をして金馬門に待詔せしめ顧問に備ふ、天下を經綸するの策を金馬門に獻じたれども採用せられざるをいふ 〔一四〕 家に歸りたき心は日夜已まざること、水の東に流れて已まざるが如きをいふ 〔一五〕 扁舟は小舟なり、扁舟に乘りて故鄉に歸るに策の採用せられざる愁を有するを以て、此舟に千斛の愁を載せたるが如きなり、千斛は愁の多きをいふ 〔一六〕 君王は國家の事に就て愁心を去らず心配せらるゝに吾が策用ひられずして國事に盡すを得ざるは愧むべしとなり 〔一七〕 書物を開きて千古の事を讀めば、吾が精神は千古の上に遊ぶの趣あるをいふ 〔一八〕 世俗の汚れたる氣は之を却け去りて世外に立つべきをいふ 〔一九〕 心世外に立ては門を閉ぢて人に交らず、故に吾が心は萬重の山中に在るが如く閑寂なるをいへ 〔二〇〕 負心は本心に負きて恩義を棄つること 〔二一〕 一片の熱烈なる心腸を缺くこと 〔二二〕 戀態は戀愛の狀態の古今異なる所なきをいふ 〔二三〕 兩つの冷靜なる眼を懸けて寂寞の境を以てその動作を觀るをいふ 〔二四〕 龍津は龍淵のことならん、龍淵は劍の名蓋し此劍を持し縱平津を經歷忽ち談間より脫し去りしといふ 〔二五〕 胸中に數萬の甲冑をつけたる兵士を指揮する謀略を有すれば國の下にて空しく病死するを得ずとの意 〔二六〕 舊註の說に從ひて別意とす、此中は此の精神なり、我が精神の中は空洞虛無にして一の物の横たはりなきをいふ 〔二七〕 鄉人數百人

（二）英雄未だ轉ぜざるの雄圖は、（二）糟丘を假りて霸業と爲し、（三）風流盡きざるの餘韻は（四）花谷に托して深山と爲す。○（五）紅の口脂を潤すは、（六）花蕋乍ち微雨に遇ふなり。（七）翠

靈文奇字。○
血冷有レ時化レ
碧。雄風無二日
成一レ灰。○王門
之籟吹非レ竽。
夢連二魏闕一。郢
路之飛聲無レ
調。羞レ向二楚囚一。
○獻二策金門一
苦未レ收。歸心
日夜水東流。
扁舟載得愁
千斛。聞レ說君
王不レ稅レ愁。○
世事不レ堪レ評。
披レ卷神遊二千
古上一。塵氣應レ
可レ卻。閉レ門心
在二萬山中一。○
負心滿二天地一

○策を金門に獻じ(一三)苦んで未だ收められず。歸心日夜水東に流る、(一四)扁舟載せ得たり(一五)愁千斛、說くならく君王(一六)愁を稅がずと。○世事評するに堪へず、(一七)卷を披けば神千古の上に遊ぶ。(一八)塵氣應に卻くべし。(一九)門を閉ぢて心萬山の中に在り。○(二〇)負心天地に滿つるは、(二一)他の一片の熱腸に葬く、(二二)戀態自ら古今なるは、(二三)此兩隻の冷眼を懸く、(二四)○龍津の一劍、尚ほ風雷に合ふを作す。胸中數萬の甲兵、(二五)寧ぞ終に牖下に老いん。(二六)○此中の空洞原と物無し。何ぞ止ゞ(二七)鄉數百人を容るゝのみならんや。

(一)道德を堅く守ること、烏の巢に棲みて離れざるが如きをいふ (二)その當時に於ては之に贊成するもの歸依するもの少くして物寂しけれども萬世に朽ちざるをいふ (三)萬世の後に於ては人の之を稱するものなく物寂しくしてあはれなるをいふ (四)一世を經營するの才能謀略を有する人を老いしむること (五)切斷ちたるが如き險しき谷やがけのこと (六)靈妙なる文章奇巽なる文字、共に立派なる名文のこと (七)碧は碧玉なり、萇弘蜀に死すその血を藏すること三年化して碧となる (八)雄々しき氣風は火の消えて灰となるが如く消滅することなきをいふ (九)齊の宣王人をして竽を吹かしむるに三百人を用ふ・南郭處士請うて王の爲めに竽を吹く宣王之を悅ぶ湣王立ち一一之を吹かしめて聽く處士逃る、籟吹は多數の人の入り交りて笛を吹くこと (一〇)魏闕は御所の門なり、夢みる所は

箏起舞。迦葉其開士之素心乎。○友二天下士一。讀二世間書一。○讀レ書倦時。須レ看レ劍。英發之氣不レ磨。作レ文苦際。可レ調レ詩。鬱結之懷隨暢。○交レ友須レ帶二三分俠氣一。作レ人要レ存二一點素心一。捿二守道德一者。寂二寞一時一。依二阿權勢一者。淒二涼萬古一。○深山窮谷。能老二經濟才猷一。絕壑斷崖。難レ隱二

松江の廣大なる水に、秋の清き氣の橫たはれるが如きをいふ 〔一〇〕 妙年は少年に同じ、年少くして縱橫の才あること 〔一一〕 崑崙山中の一峰の高く秀て聳ゆるが如きをいふ 〔一二〕 此はなさけ深き仁愛の情のあること、春風の穩かなるが如きをいふ 〔一三〕 孤獨にして患難せるものを憐み惠むことを得べきをいふ 〔一四〕 劉琨は東晉の人、夜半荒雞の聲を聞き是れ惡聲にあらずとて起ちて舞ひたり、蓋し亂あれば功名を成すを得るを以て喜びて舞ひたるなり 〔一五〕 迦葉は釋迦の弟子にて釋迦の滅後佛教の長老となれり、蓋し箏の聲を聞きて起ちて舞ひしことあるなり 〔一六〕 開士は菩薩のこと、素心は本心に同じ、本來の心をいふ 〔一七〕 天下に秀てすぐれたる士を友として交ること 〔一八〕 英で發する元氣が消滅せずして存すること 〔一九〕 ふさがりて結ぼれたる心情の伸び〳〵して快きこと 〔二〇〕 友の爲めには一身を捨てゝ之を救ふ男だての氣象を帶ぶべきをいふ 〔二一〕 自己の人格を修養するには 〔二二〕 心地の潔白素朴なるをいふ、即ち外物に汚されざる清淨無垢の心

(一)道德を捿守する者は、(二)一時に寂寞たり。權勢に依阿する者は、(三)萬古に淒涼たり。○深山窮谷は、能く(四)經濟の才猷を老いしめ、(五)絕壑斷崖は、(六)靈文奇字を隱し難し。○血冷かにして時ありて(七)碧と化し、(八)雄風日として灰と成ること無し。○(九)王門の襍吹は竽に非ず、(一〇)夢魏闕に連る。(一一)郢路の飛聲は調無く、(一二)楚囚に向ふを羞づ。

下。露二出醜形一。深山窮谷之中剩二些眞影一。○虹二虹蜺之氣一者。貴レ挾二風霜之色一。依二日月之光一者。毋レ懷二雨露之私一。○清襟凝遠。卷二松江萬頃之秋一。妙年縱横。挽二崑崙一峰之秀一。○肝膽煦若二春風一。雖三囊乏二一文一。還憐二煢獨一。氣骨清加二秋水一。○聞レ鷄起舞。劉琨其壯士之雄心乎。聞レ

を吐く者は、風霜(五)の色を挾むを貴び、日月(六)の光に依る者は、雨露(七)の私を懷ふ毋れ。○清襟凝遠(八)にして、松江萬頃(九)の秋を卷き、妙年縱橫(一〇)にして、崑崙(一一)一峰の秀を挽く。○肝膽(一三)の煦なること春風の若くなれば、囊に一文乏しと雖も、還た煢獨(一二)を憐む。○氣骨の清きこと秋水の如くなれば（原文以下二對語脫落）○雞を聞きて起ちて舞ふ、劉琨(一四)は其れ壯士の雄心乎、箏を聞きて起ちて舞ふ、迦葉(一五)は其れ開士(一六)の素心乎。○天下(一七)の士を友とし、世間の書を讀む。○書を讀みて、倦む時、須く劍を看るべし、英發(一八)の氣磨せず。文を作りて苦むの際、詩を詠ふべし、鬱結(一九)の懷隨ひて暢ぶ。○友に交るには須らく三分(二〇)の俠氣を帶ぶべし。人と作る(二一)には一點の素心(二二)を存するを要す。

(一) 車の通行せし時起る塵埃、馬の過ぎ行きし足跡のあたり (二) 高貴の人の車塵馬足を拜して之を羨望する醜態をあらはし出すをいふ (三) 少しばかりの眞の高尚なる人格をあらはすこと (四) 大なる元氣をあらはすこと (五) 嚴然として侮るべからざる樣子あること秋風嚴霜の如きこと (六) 君上の御蔭を蒙ること (七) 雨露の沾へるが如き君上の恩惠を蒙るを望む私心なり (八) 潔白なる心持ちの堅固にして遠大なること (九) 松江は今の吳松江なり

作ニ無米之炊一。此等作用。當ニ大計一而揚レ眉。○深居違レ俗。尙愁ニ移レ山有レ文。縱飮達レ生。但笑ニ醉鄉無レ記。○風會日靡。試具ニ宋廣平之石腸一。世道莫レ容。請救ニ姜伯約之大膽一。○藜床半穿。管寧眞吾師乎。軒冕必顧。華歆洵非レ友也。車塵馬足之

いふ (三)詩を作り酒を飲むの興味の時に盡きんとするをいふ (四)樓上に明月の美しき景が後に殘り居りて名殘り惜しきをいふ (五)樓閣に登りて風景を見るの風情の淸きをいふ (六)江水の上に見ゆる靑山の半ば以上の景を平分して看るをいふ (七)李賀字は長吉、七歲より詩を能くす、出づる每に弱馬に騎り小奚奴を從へ、古錦の囊を背にし句を得れば其の中に投ず、 (八)謝朓は南朝時代の人字は玄暉少くして學を好み、美名あり文章淸麗五言の詩に長ず、驚人句は人を驚かす程の名句なり (九)劍を鳴らして氣を作すを得ざるに只外貌のみ威張りて氣勢を示すをいふ (一〇)眞の英雄に遇へば大に恐れ縮みて膽をつぶすをいふ (一一)困窮せる窶儉なり (一二)米なくして飯を炊くこと、此は貧窮にして食物を食し得ざるをいふ (一三)天下の大計を成す時に當りて意氣揚々として眉を揚げて得意になること、揚眉は志を得るをいふ (一四)南北朝の時周顒鍾山に隱る、後詔に應じ出でて海鹽令となる後周顒此山を經しに孔稚珪北山移文を作りて之を拒めり、之は深山に退隱して世に益なきも孔稚珪が北山移文を作りしが如く復移文を作り非難する人あるを憂ふるをいふ (一五)隋の王績酒を好み、醉鄉記を作る、世はしいまゝに酒を飲みて生命の理を悟れども、王績の如く醉鄉記を作らずとの意 (一六)風會は風雲際會にて己の才を展ぶべき世の風潮に相遇ふをいふ (一七)宋廣平は唐の宋璟なり廣平郡公に封ぜらる、皮日休云ふ宋廣平の相たる貞姿勁質、剛態毅狀、疑ニ其鐵腸與ニ石心一と、宋璟は剛堅なる心を具へしをいふ (一八)姜維字は伯約、三國時代の人維死せし時に之を解剖せしに膽の大なること斗の如しといふ (一九)藜は「アカザ」といふ草、藜床は藜を編みて床となせるなり (二〇)管寧は後漢の末の人、其の居る所の坐牀穿てるも之を換へず常にその上に坐せり (二一)軒は大夫の乘る車、冕は禮冠、華歆管寧と共に書を讀む、時に冕服をつけ軒に乘りて門前を過ぐるものあり管寧は書を讀みて止まず華歆は出でて之見る、寧曰く君は吾が友に非らずと席を分てり

(一)車塵馬足の下、(二)醜形を露出し、深山窮谷の中、(三)些の眞影を剩す。○(四)虹蜺の氣

好レ對二著假豪杰一。綠酒但傾。何妨レ易レ醉。黃金既散。休レ論二復來一。○詩酒興將レ殘。剩二卻樓頭幾明月一。登臨情不レ惡。平二分江上半靑山一。○閒行消二白日一。懸二李賀嘔レ字之囊一。搔レ首問二靑天一。携二謝朓驚レ人之句一。○假英雄。專吹二不鳴之劍一。若二爾鋒鋩一。遇二眞人一而落レ胆。窮豪杰。慣レ

恐るゝなり 〔二〕世を經すは一世を經營して治むること 〔三〕假豪傑は眞の豪傑にあらずして豪傑を裝ふもの

綠酒但傾けば、何ぞ醉ひ易きを妨げん。〔一〕黃金既に散ずれば、復た來るを論ずるを休めよ。〔二〕○詩酒の興將に殘らんとすれば、樓頭の幾明月を剩却す。〔三〕登臨の情惡しからずんば、〔四〕江上の半靑山を平分す。〔五〕○閒行して白日を消し、〔六〕李賀字を嘔くの囊を懸く、首を搔きて靑天に問ひ、〔七〕謝朓人を驚かすの句を携ふ。〔八〕○假の英雄は專ら不鳴の劍を吹らす、〔九〕爾鋒鋩の若きは、眞人に遇ひて胆を落す。〔一〇〕窮豪杰は無米の炊を作すに慣る。〔一一〕此等の作用は、大計に當りて眉を揭ぐ。〔一二〕○深居して俗に遠ざかるも、尙ほ山を移すに文あるを愁ふ。〔一三〕縱飮して生に達するも、但醉鄕に記なきを笑ふ。〔一四〕〔一五〕○風會の日試むる醉く、宋廣平の石腸を具ふ。〔一六〕世道諂を容るゝ莫く、姜伯約の大膽を收む。〔一七〕〔一八〕○藜床半ば穿つ、管寧は眞に吾が師か。〔一九〕〔二〇〕軒冕必ず顧る、華歆は洵に友に非ざるなり。〔二一〕

〔一〕綠酒は醇酒に同じ、雜り氣なき濃厚なる酒を傾けて飮むをいふ 〔二〕一たび黃金を散ずれば再び歸り來らざるを

富ニ懲胸中丘壑一。松陰花影。爭ニ殘局上山河一。〇驥雖ㇾ伏ㇾ櫪。足能千里。鵠卽垂ㇾ翅志在ニ九霄一。〇個個題ㇾ詩。寫ニ不ㇾ盡三千秋花月一。人人作ㇾ畫。描ニ不ㇾ完三大地江山一。〇慷慨之氣。龍泉知ㇾ我。憂煎之思。毛穎解ㇾ人。〇不ㇾ能ㇾ用ㇾ世而故爲ㇾ玩ㇾ世。只恐ㇾ遇ニ著眞英雄一。不ㇾ能ㇾ經ㇾ世。而故爲ㇾ欺ㇾ世。只

只眞の英雄に遇著するを恐る(二一)。世を經する能はずして(二二)、故らに世を欺くを爲さば、只假の豪杰に對著するに好し(二三)。

(一) 桃花の開ける處を馬に乘りて遊覽する少年の春衣裳を着たるをいふ (二) 强きを輔けて弱きを挫く男氣のあること (三) 貝葉は榕樹の葉にて佛の經文を之に書せり、依りて佛經を貝葉といふ、此は經文のある齋中に居る老僧のこと (四) 年老いたる僧侶の禪味あるをいふ (五) 居然は依然と同じ、相變らず矢張り俗氣を帶びたるなり (六) 狂語は大言壯語すること、たとひ口に大言壯語するも人は終にその人の心情を疑ふをいふ (七) 鉛刀は鉛にて作りたる刀鉛、刀にても千金の價ありとの義、鉛刀は鈍才のものに喩ふ、此は顏色のみを見ては鈍才のものも英才の如く見ゆるをいふ (八) 干鏌は干將鏌鋣にて、古の二名刀の名、俗世界に在りては干將鏌鋣の刀の如き名劍にても志を失ふをいふ (九) 山岳の景色、江水の流るゝ聲 (一〇) 胸中に在る丘壑の如き高壯なる心をます〳〵富ましむるをいふ 壑は殺に同じ語辭なり (一一) 局は碁局の局にて、人の器宇度量なり、人の心の高低と山河の高低とがその高低を爭ふをいふ (一二) 驥は千里の名馬なり、櫪は馬の食物を入るゝ桶なり、此は千里の名馬が櫪に伏するも、足は能く千里を走るをいふ (一三) 鵠は鵠の一種、翅を垂れて元氣なく衰ふるも、その志は九霄の高きに上るに在るをいふ (一四) 人々一人每に詩を作るをいふ (一五) 千秋は千古に同じ、千古の間の花月を盡く詩に作り得ざるをいふ (一六) 大地の上に在る江水山岳の景を盡く描き得ざるをいふ (一七) 龍泉は劍の名、雷煥といふ者、天に紫氣あるを見て寶劍の地中に在るを知り、之を掘りて兩劍を得たり、一は龍泉一は太阿といふ、此は慷慨の氣は劍を見て之を激すること (一八) 憂煎は憂ふること物を煎じ煮るが如きをいふ (一九) 毛穎は筆のこと、文章の上に憂愁の思を漏すをいふ (二〇) 世を玩ぶは一世を愚弄すること (二一) 眞の英雄に遇はゞ世を用ふる能はざるを看破せらる、故に之に遇ふを

豪既不レ可レ得。而後世倜儻之士、或以二一言一字一。寫二其不平一者。又安得下與二沈沈故紙一同爲中銷沒上乎。集二豪第十一。

同じく思想の束縛を受くるをいふ ㊃ 阱はおとし穴なり此もおとし穴に入れて束縛せられたるが如く思想の自由ならざるをいふ ㊄ 宇宙の間にその人少くして物寂しきをいふ ㊅ 家の中には一物なく只四方に壁のあるのみ、是は貧窮の甚しきをいふ ㊆ 一度に千金を擲ちて之を棄つること ㊇ 筆に墨をふくませて千言の文章を作ること ㊈ 才氣の衆人にすぐれたる士なり (一〇) 打捨てゝ用を爲さざる反故紙と同じく消えて滅ぶること

桃花馬上春衫。少年俠氣。貝葉齋中夜衲。老去禪心。○世情到レ口居然俗。狂語何人了不レ猜。○顏色則鉛刀千金。塵埃則千鎰失レ志。○嶽色江聲。

桃花馬上の春衫(一)は、少年の俠氣(二)、貝葉齋(三)中の夜衲は、老去(四)の禪心なり。○世情口に到れば居然(五)たる俗なり。狂語(六)何人か了に猜はざらん。○顏色は則ち鉛刀(七)も千金。塵埃は則ち千鎰(八)も志を失ふ。○嶽色(九)江聲(一〇)は、胸中の丘壑を富憖す、松陰花影は、局上(一一)の山河を爭殘す。○驥(一二)は櫪に伏すと雖も、足能く千里、鵠(一三)は卽ち翅を垂るゝも、志九霄に在り。○個個(一四)詩を題するも、千秋(一五)の花月を寫し盡さず。人人畫を作るも、大地(一六)の江山を描き完うせず。○慷慨の氣は、龍泉(一七)我を知り、憂煎(一八)の思は、毛穎(一九)人を解す。○世を用ふる能はずして、故に(二〇)世を玩ぶを爲さば、

今世短視尺
步之輩。與二夫
守株待レ兎之
徒一是不二鉗鎖一
而囚。不二束縛一
而陛者也。宇
宙寥寥。求二一
豪者一安可レ得
哉。家徒四壁。
一擲千金。豪
之膽。興酣落レ
筆。潑墨千言。
豪之才。我才
必用。黄金復
來。豪之識。夫

巻十

豪

今世短視尺步の輩と、夫の守株兎を待つの徒とは、是れ鉗鎖せずして囚へられ、束縛せずして陛する者なり。宇宙寥寥として、一の豪者を求むるも、安んぞ得べけんや。家徒だ四壁、一擲千金なるは、豪の膽なり。興酣にして筆を落し、潑墨千言なるは、豪の才なり。我が才必ず用ひられ、黄金復た來るは、豪の識なり。夫れ豪の既に得べからず、而して後世倜儻の士、或は一言一字を以て、其不平を寫す者、又安んぞ沈沈たる故紙と同じく銷沒を爲すを得んや。豪第十を集む。

(一) 短視は淺薄なる見識尺步は卑賤の行爲をいふ (二) 或る一つのものに拘泥して臨機應變を知らざること 宋人の有する田に兎の走り來りて株に觸りて死せしことあり、其人常に株を守りて復た兎の來るを待ちしといふことより出づ (三) 鉗鎖は首かせを嵌めてその人を束縛すること、此は首かせを嵌めて束縛せざれども囚人となりたると

亂。〇紛黃庭靃靡。隱重廊之窈窕。青陸玉而鶯啼。朱陽升而花咲。紫帶紅猗。玉蕤蒼枝。〇視蓮潭之變彩。見松院之生涼。引鶯蟬于寶瑟。宿蘭燕于瑤篭。〇響松風于蟹眼。浮雪花于兎毫。〇蒲團布衲難于少時。存老去之禪心。玉劍角弓。責于老時。任少年之俠氣。

きものあり、上の二句を指していへるなり (四) 肝膽は誠懇の義、その胸中をあらはして隱す所なきこと (五) 世の清流の人の持つ所の議論も之を非議することなかるべしとの意 (六) 言議を以て罪業を造ることなきをいふ (七) 花が咲きて露が漸く落ちてかわくこと (八) 露がかゝりて花は更に生き〳〵として生ずること (九) 風吹き來りて花の香氣四方に散ずること (一〇) 風が吹き返りて暑氣も減ずること (一一) 美しく飾るに玉琇を以てすること琇は石の玉に似たるもの (一二) 金蕤は黃色の花などいふ (一三) 綠色の芰を懸けて挿むこと (一四) 紅色の蓮の側に生ずること (一五) 靑々としたる海原、氣渾はその氣雄大となること (一六) 黃庭は草の黃ばみたる秋の庭、靃靡は草の弱き貌風は黃庭にある弱き草を吹きみだすをいふ (一七) 相重なりたる廊下の奥ふかき處にもたれかゝること (一八) 靑陸は春の神、春の氣節至りて鶯の鳴くこと (一九) 朱陽は太陽のこと赤き太陽昇りて花開くこと (二〇) その開ける花に中には紫色の花のへた紅色の花しべ、玉の如き白き花しべ及び靑々としたる枝のあるをいふ (二一) 蓮池の中に在る蓮の花の色の變ずるを視ること (二二) 松の樹のある院のあたり涼氣の生ずるを見ること (二三) 謙しく鳴く蟬の聲を瑟の聲に合せて發すること (二四) 蘭燕は蓋し虫の名、蘭燕を篭の中に入れ置くこと (二五) 蟹眼は湯の沸騰するとき蟹の眼の如き湯玉の沸き騰るをいふ、茶の湯の沸騰して松風の如き聲を響かすをいふ (二六) 湯玉の飛ぶことと雪花の如く又兎毫を浮べたるが如きをいふならん (二七) 蒲團の上に坐し布の僧衣を着て坐禪することは少壯の時には困難なるをいふ (二八) 故に少壯の時は老年に至りたる時に得べき禪心を存すべしとの意か (二九) 玉を以て飾れる劍を帶び角を以て飾りたる弓を持つて勇俠を爲すことは老時に責めてなさしむるをいふか (三〇) 少年の時勇俠の振舞をなせしに任かせて勇俠をなさしむべしとの意ならん

理二茶具一。○毎到二日中一重掠ㇾ鬢、犧衣騎ㇾ馬試二宮廊一。

立ちふるまふこと ㈨ 茶の道具の手入れをすること ㈩ 此章は意し脱誤あらん、意稍詳ならず

絶世風流當場豪擧。世路既如ㇾ此。但有二肝膽一向ㇾ人。清議可二奈何一。曾無二口舌造ㇾ業。○花抽珠漸落、珠懸花更生。風來香轉散、風度焰還輕。○瑩以二玉琇一、飾以二金英一。綠芰懸插、紅渠倒生。○浮二蒼海一兮氣渾。映二青色一兮色

(一)絶世の風流、(二)當場の豪擧。(三)世路既に此の如し。但(四)肝膽ありて人に向へば、(五)清議奈何すべき。曾て(六)口舌の業を造る無し。○(七)花抽きんでて珠漸く落ち、(八)珠懸りて花更に生じ、(九)風來りて香轉ゝ散じ、(一〇)風度りて焰還た輕し。○(一一)瑩するに玉琇を以てし、飾るに(一二)金英を以てす、(一三)綠芰懸挿し、(一四)紅渠倒生す。○(一五)蒼海に浮びて氣渾し、靑色に映じて色亂る。○(一六)黃庭の翠霏を紛し、(一七)重廊の窈窕に隱れ、(一八)靑陸至りて鶯啼き、(一九)朱陽升りて花咲き、(二〇)紫蔕紅蕤、玉蕤蒼枝。○(二一)漣潭の彩を變ずるを觀、(二二)松院の涼を生ずるを見、(二三)鷲蟬を寶瑟に引き、(二四)蘭燕を瑤筐に宿す。○(二五)松風を蟹眼に響かし、(二六)雪花を兎毫に浮ぶ。○(二七)蒲團布衲は、少時に難く、(二八)老去の禪心を存し、(二九)玉劍角弓は、老時に責め、(三〇)少年の俠氣に任す。

㈠ 一世にすぐれたる風流をなすこと ㈡ その時に當り豪華なる動作をなすこと ㈢ 世間をわたる路は此の如

織婦之鳴レ機。月滿二蟾蜍一。見二天河之弄レ杼。○聰前俊石冷然。可レ代二高人把レ臂一。檻外名花綽若。無レ煩二美女分レ香一。○高僧筒裡送レ詩。突レ地天花墜落。韵妓扇頭寄レ畫。隔レ江山雨飛來。○酒有二難レ戀之色一。茶有二獨蘊之香一。以レ此想二紅顏媚骨一。便可レ得二之格外一。○客齋使令。翔二七寶粧一。

するを見る。○聰前の俊石冷然たるは、（五）高人の臂を把るに代ふべし。（六）檻外の名（七）花綽若たるは、美女の香を分つを煩はす無し。（重出）○高僧筒裡に詩を送れ（九）ば、地を突いて天花墜落し、（一〇）韵妓扇頭に畫を寄すれば、（一一）江を隔てて山雨飛び來る。（一二）○酒に戀ひ難きの色あり、（一三）茶に獨蘊の香あり、（一四）此を以て紅顏媚骨を想へば、（一五）便ち之を格外に得べし。（一六）○客齋の使令、（一七）七寶の粧を翔らしめて茶具を理む。（一八）（一九）○毎に（二〇）日中に到り、重ねて鬓を掠め、襪衣馬に騎り宮廊に試む。

（一）秋風吹き來りて蟋蟀（コホロギ）を驚かすこと　（二）「ハタオリ」虫が機（ハタ）を鳴らすが如く鳴くこと　（三）蟾蜍は姮娥月に入りて後の名、よりて月を蟾蜍といふ　（四）天河に於て織女が機の杼を弄ぶこと　（五）すぐれて大なる石の淸く靜かに立てること　（六）高尚なる人が互に臂を把りて立てるに似たるをいふ　（七）欄檻の前に美しき花がやさしく咲けること、綽若は柔弱の貌　（八）美人が香氣を分ちて香はしむるを煩はさずして香氣の足るをいふ　（九）竹筒に詩を盛りて送り來ること　（一〇）地に向ひて空より花の落ち來りたるが如き趣あること　（一一）韵妓は風流なる妓女なり扇子に畫をかきて之を送り寄すること　（一二）江水を隔てゝ山より雨の飛び來るが如き趣あること　（一三）酒には戀々として嗜好し難きの色あり　（一四）茶に獨り蓄へて持てる香氣あり　（一五）紅顏は美人なり、美人の媚び來る樣子を想ふこと　（一六）紅顏に戀々たるべからざるの事を常格の外に悟り得べきをいふ　（一七）客の居る部屋に使令する女中をいふ　（一八）七寶は金、銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、琥珀、珊瑚の七種の寶を以て裝飾したる衣服を着て

有二酒意一、美人貫レ有二詩意一。〇紅顔未レ老、早隨二桃李一嫁二春風一。黄卷將レ殘。莫三向二殘燈一憐二暮景一。〇買レ笑易、買レ心難。〇銷魂之音、絲竹不レ如レ著レ肉。然而風月山水間、別有二清魂銷レ于二法音一。即子晉之笙、湘靈之瑟、董雙成之雲璈。猶屬二下乘一、嬌歌艶曲、不レ益レ混二亂耳根一。

風驚二蟋蟀一聞二

㊄ 抹香くさき僧侶の様子なきこと ㊅ 一種の世界を換へて作り出すこと ㊆ 人間本の風雅にして、美はしき文章 ㊇ 西廂記は元曲の名、元の王實甫の著す所、唐の元稹の會眞記に因り演じて傳奇と爲すといふ ㊈ 玉合、紫釵記、牡丹亭還魂記は明の湯若士の著す所なり 一〇 文章思想の枯れ涸りたる生氣を挽回すること 一一 心情の散亂してまとまらざるを收めまとめること 一二 すぐれて面白き言辭に富みたるが如き様子あること 一三 鄙俗の卑俗を脫したるが如く俗氣なきこと 一四 韻士は風雅の士 一五 詩意は風雅高尚の様子あること 一六 美人の紅なる顔色の未だ老いざる中に早く桃李の春に逢ひて花咲くが如く、年少き時に良緣を求めて嫁すべしとなり 一七 黃卷は書物のこと、書物には黃色の紙を用ふ、故に黃卷といふ、書物を殆ど讀み盡すこと 一八 桑楡は日の西に傾きて入らんとする日暮のことと人の老年に喩ふ、此は日の入る處に向ひて暮景を嘆ずる如く老年に至りて志の遂げざりしを憐むことをいふ 一九 人の心の滿足を得ることの難きをいふ 二〇 人の心情を深く感動せしむること 二一 絲竹は琴笛のことを琴を彈じ笛を吹くは人の口より歌ふ歌に如かざるをいふ 二二 人の清き心情が山水の清き音響に深く感ずること 二三 子晉は周の靈王の太子晉なり、好んで笙を吹き鳳鳴を作す、後白鶴に乘り天に上りしといふ 二四 湘靈は湘水の神なり、楚辭に使湘靈鼓瑟兮とあり 二五 董雙成は女仙の名、西王母の侍女となり自ら玉笙を吹き鶴に習して昇仙すといふ、雲璈は樂器の名 二六 下乘は下等の意、此句は猶は下等のものなりとの意 二七 なまめかしき歌となまめかしき音曲 二八 耳根は聽覺なり、聽覺をかき亂すのみならず心をも混亂せしむ

(一)風蟋蟀を驚かし、(二)織婦の機を鳴らすを聞く、(三)月蟾蜍に滿ちて、(四)天河の杼を弄

武士無刀兵氣。書生無寒酸氣。女郎無脂粉氣。山人無煙霞氣。僧家無香火氣。換出一番世界。便爲世上不可少之人。○情詞之嫺美。西廂以後。無如玉合紫釵杜丹亭三傳。置之案頭。可以挽文思之枯澁。收神情之爛散。○俊石貴有畫意。老樹貴有禪意。韵士貴

(一)武士に刀兵の氣なく、(二)書生に寒酸の氣なく、女郎に(三)脂粉の氣なく、山人に(四)煙霞の氣なく、僧家に(五)香火の氣なくんば、(六)一番の世界を換出し、便ち世上少くべからざるの人と爲らん。○(七)情詞の嫺美は、(八)西廂以後、玉合、(九)紫釵、牡丹亭の三傳に如くはなし。之を案頭に置けば、以て(一〇)文思の枯澁を挽き、(一一)神情の爛散を收むべし。○(一二)俊石は畫意あるを貴び、老樹は(一三)禪意あるを貴び、(一四)韵士は酒意あるを貴ひ、美人は(一五)詩意あるを貴ぶ。○(一六)紅顏未だ老いず、早く桃李に(一四)隨ひて春風に嫁し、(一七)黃卷將に殘らんとす、(一八)桑楡に向ひて暮景を憐む莫れ。○笑を買ふは易く、(一九)心を買ふは難し。○(二〇)銷魂の音は、(二一)絲竹は肉を著くるに如かず。然り而して風月山水の間、別に(二二)淸魂の法響に銷するあり。卽ち(二三)子晉の笙、(二四)湘靈の瑟、(二五)董雙成の雲璈、猶ほ(二六)下乘に屬す。(二七)嬌歌艷曲は、益〻(二八)耳根を混亂するのみならず。

㈠ 武士にして武士らしき剛強なる樣子のなきこと ㈡ 書生に貧乏にしてあはれなる樣子のなきこと ㈢ 脂は臙脂なり、女子にべにや、おしろいを着けたる女らしき樣子なきこと ㈣ 煙霞を弄ぶ隱者らしき樣子なきこと

禽聲。幽蛩聲。芭蕉雨聲。落花聲。落葉聲。皆天地之清籟。詩腸之鼓吹也。然銷魂之聽。當下以賣花聲爲第一。○石上酒花幾片。濕雲凝夜色。松間人語數聲。宿鳥動朝喧。○媚字極韵。但出以清致。則窈窕俱見風神。附以妖嬈。則做作畢露醜態。如芙蓉媚秋水。綠篠媚清漣。方不著迹。○花關曲折雲來不認灣頭。草徑幽深葉落但敲門扇。

は、方に迹を著けず。（二一）○花關曲折して、（二二）雲來りて灣頭を認めず。（二三）草徑幽深にして、（二四）葉落ちて但門扇を敲く。（二五）

（一）その意氣を同じうするもの相求めて交るをいふ（二）平原は平原君なり、平原君信陵君等と同氣相交る、剌は剌繡なり、平原君を錦繡に刺繡したるが如く今日は同氣を富貴の上にのみ求むゝなり（三）子期は鍾子期なり、子期と伯牙と同聲相應ぜり、然るに今日は子期を黃金に鑄るが如く、同聲の應を富貴の上にのみ求むと也（四）山禽を倩ひ來りて吾が胸中不平の氣を說かしむること、山禽の鳴く聲は我が胸中不平の氣を吐くが如きをいふ（五）檐にかゝれる劍の錚然たるは世上測りがたき機密の事を洩するが如きをいふ、机は機也（六）女郎は女子にて男子の才ある者なり、女郎劍の事を談じて以て長夜の睡魔を去ること（七）學士が蟬吟のことを談じて以てその熱血を銷し去ること（八）風雅にしておもむきある聲（九）天地の間に在る清き聲（一〇）詩を作る思想をすゝめ勵ますものなり（一一）銷魂は深く情に感ずること（一二）酒花は花の名、石上に在る酒花の幾片が夜露の濕氣を帶ぶること（一三）松に宿れる鳥は朝人の聲の喧しきに驚きたつをいふ（一四）風雅のおもむきあること（一五）窈窕はおくゆかしく靜かなること（一六）風神は人の樣子、風采に同じ（一七）妖嬈はなまめかしきさま（一八）そのなす所の動作は悉くみにくきさまをあらはす（一九）芙蓉は蓮なり、蓮花が秋の水に媚ぶるが如く美しく氣高く咲けること（二〇）綠色の小竹が清きさゞなみに媚ぶるが如く清く美しきさま（二一）媚ぶるが如き迹かなくして媚ぶるなり（二二）花を栽えたる花壇が曲り折れたること（二三）雲來りて灣のあたりを蔽ひて灣頭を認めがたきこと（二四）草の生ずる小路奧深きこと（二五）木の葉落ちて門の戸びらを打つこと

薄倖。非レ關二紅袖翻レ撩レ人。同氣之求。惟刺二平原于錦繡一。同聲之應。徒鑄二子期一以二黃金一。○胸中不平之氣。說倩二山禽一。世上叵レ測之机。藏二之煙柳一。○袪二長夜之惡魔一。女郎說レ劍。銷二千秋之熱血一。學士談レ禪。○論二聲之韵者一。曰溪聲。澗聲。竹聲。松聲。山

福の薄きこと（一六）紅袖は美人のこと、撩は拂ひ過ぐるなり、此は美人の紅袖が我をかすりて過ぐることなきが爲めに薄倖なるにはあらずとて美人の關係なきが故に薄倖なるにあらずとの意

同氣(一)の求、惟平原(二)を錦繡に刺し、同聲の應、徒子期(三)を鑄るに黃金を以てす。○胸中不平の氣は、說くに山禽(四)を倩ひ、世上測り叵きの机は、之を煙柳(五)に藏す。○長夜の惡魔を袪るに、女郎劍(六)を說き、千秋の熱血を銷すに、學士禪(七)を談ず。○聲の韵ある者を論ずれば、曰く溪聲、澗聲、竹聲、松聲、山禽の聲、幽壑の聲、芭蕉(八)の雨聲、落花の聲、落葉の聲、皆(九)天地の清籟(一〇)、詩腸の鼓吹なり。然れども銷(一一)魂の聽は、當に賣花の聲を以て第一と爲すべし。○石上(一二)の酒花幾片、濕雲夜色を凝らし、松間の人語數聲(一三)、宿鳥朝暄に動く。○媚の字極めて韻(一四)なり。但出すに清致を以てすれば、則ち窈窕(一五)として倶に風神(一六)を見る。附するに妖嬈(一七)を以てすれば、則ち做作(一八)畢く醜態を露はす。芙蓉(一九)秋水に媚び、綠篠淸漣(二〇)に媚ぶるが如き

馨之漸消。○微風醒ㇾ酒。好雨催ㇾ詩。生ㇾ韻生ㇾ情。懷顧不ㇾ惡。○苧蘿村裏。對二嬌歌豔舞之山一。若耶溪邊。拂二濃抹淡粧之水一。○春歸二何處一。街頭愁二殺賣花一。客落二他鄕一。河邊生ㇾ情折ㇾ柳。○良緣易ㇾ合。紅葉亦可ㇾ爲ㇾ媒。知己難ㇾ投。白璧未ㇾ能ㇾ獲ㇾ主。○論到二高華一。但說二黃金能結ㇾ客。看來

きに關（くわん）するに非ず。

(一) 剛は正に同じ「マサニ」と讀ず (二) 雁の來るは春の末なれば春の光景もはや其の過ぎ行くを惜むをいふ (三) 雁臣は燕子に對していふ只雁のことをいふ、匈奴が子を中國に送るに秋來り春去る因りて雁臣といふより來る語なり、雁の來るは秋の頃なれば雁を見て物を思ひ慕ひて悲ましむと也 (四) [illegible]嬙は漢代の人 (五) 原文金蟬は金蟬の誤、漢の制、侍中中常侍の冠飾、金蟬を用ふ、金はその剛に取り蟬は高潔に取る (六) 飢ゑ凍えたる貧賤の人は金蟬を冠する高位高官に昇らんとして奔りまはるをいふ (七) 潘岳は晉代の人、姿儀美なり、嘗て洛陽を過ぐる時、婦人主に逢ふ者手を連ねて繞り之に投ずるに果を以てす (八) 美少年等も潘岳の事よりして己も果を投ぜらるべしとて大に顏面に喜びをあらはすなり (九) 夜長くして樂しむべきことなきをいふ (一〇) 芭蕉に雨のふりかゝるあたりの窗の邊をぶら〱行くこと (一一) 桐の木の陰にある院の中に打ち臥すをいふ (一二) 好き雨は詩を作る情を起さしむること (一三) 風雅なるおもむき、おもしろき風情 (一四) その心持甚だよきをいふ (一五) 苧蘿は村の名、今の浙江省諸暨縣に在り (一六) 鳥の好聲にて鳴き花の美しく咲ける山、即ち苧蘿山を指す (一七) 若耶溪は浙江省紹興縣に在り、即ち西施の紗を浣ひし處なり (一八) 或は濃く或は淡く化粧せるが如き美しき水を拂ふこと (一九) 春の時節が何れの處へか歸り行きて春去ること (二〇) 市街の中を花賣り行くは春の名殘なれば之を思へば愁に堪へずとなり (二一) 旅客が他の鄕村に落ち行くこと (二二) 生情は思ひに違ふの意、旅人客を送りて長安の灞橋に至れば柳を折りて別を贈る、よりて送別の意と爲す、思ひに違ひ折戀しく河の邊にて柳を折りて客を送るの意 (二三) 高華は高くして清華なる地位 (二四) 黃金を用ふれば能く客と交を結びて高華の地位に到るべきを說くなり (二五) 隣浮は卑

猿啼。鵲地嬌來。一月泥香新燕語。燕子剛來。春光惹恨。雁臣甫聚。秋思慘人。○韓嫣金彈。悞了飢寒人多少奔馳。潘岳果車。增了少年人多少顏色。○夜長無賴。徘徊蕉雨半牕。日永多閒。打疊桐陰一院。○鳥語聽其澁時。憐嬌情之未轉。蟬聲聞已斷處。愁孤

忽然なり、俄にたはやかなる鳥の來ること　(二〇)　一月頃燕が泥を含み來りて巣を作り喃々として鳴きさへづるをいふ

燕子剛に來りて、(一)春光恨を惹き、(二)雁臣甫めて聚り、(三)秋思人を慘たらしむ。○韓嫣(四)の金彈、(六)飢寒の人の多少の奔馳するを悞り了り、潘岳(七)の果車、(八)少年の人の多少の顏色を增し了る。○夜長くして賴無く、蕉雨(一〇)の半牕に徘徊す、日永くして閒多く、桐陰(一一)の一院に打疊(九)す。○鳥語其澁を聽く時、嬌情の未だ轉ぜざるを憐み、蟬聲の聞已に斷ゆる處、孤響の漸く消ゆるを愁ふ。(重出)○微風酒を醒し、(一二)好雨詩を催し、(一三)韻を生じ情を生じ、懷(一四)頗る惡しからず。○苧蘿村裏、(一五)嬌(一六)歌鱸舞の山に對し、若耶溪邊、(一七)濃抹淡粧の水を排ふ。(一八)○春何れの處にか歸る。(一九)街頭賣花を愁殺せしむ。(二〇)客他鄉に落ち、(二一)河邊に生楷柳を折る。(二二)○良緣合ひ易く、紅葉亦媒を爲すべし。知己投じ難く、白璧未だ主を獲る能はず。(重出)○論じて高(二三)華に到れば、但黃金能く客を結ぶを說く、(二四)看來れば薄倖は、(二五)紅袖人を掠むるに嬾(二六)

惟昌州有レ香耳。○竹粉映二琅玕之碧一、勝二新粧流媚一、曾無レ掩二面于花宮一。荷珠凝二翡翠之盤一、雖二什襲非一レ珍、可レ免探三頡于芳叢一。○因レ花整レ帽、借レ柳維レ船。○遶レ夢落花消二雨色一、一簾芳草送二晴曛一。○爭レ春開レ宴罷來花有二歡聲一。水國讀レ經聽去魚多二樂意一。○無レ端泪下。三更山月老

水國（二五）經を誦ずれば、聽き去りて（二六）魚に樂意多し。○端（二七）無くして泪下り、三更（二八）の山月に老猿啼く。（二九）薄地に嬌來りて、（三〇）一月泥香しく新燕語る。

（一）竹簷は蓋し竹を以て作れる簷　（二）花船は花を以て飾れる船　（三）到來は現在の意、現在の時に到り來るよりいふ、此は現在はすべて夢境に在りて相の流るゝをいふ　（四）過去の事は茫然として跡を留めざるをいふ　（五）鴻雁の飛び來るによりて秋の氣色の至りしを知ること　（六）揚子江の流るゝ岸は白き蘋の花咲く頃に物寂しく聞ゆるなり　（七）鬪草は五月五日端午を以て草をくらべて奇草多きものを勝となす一種の遊戯なり　（八）書帶は草の名、長さ尺餘柔軟叢生す、鮮翠愛すべし、才子は書帶草の翠色を賦ずるを愛ふるをいふ　（九）鏡花は鏡の中に映ずる花にて幻影なり　（一〇）昌州に産する海棠のみ香あるをいふ　（一一）竹粉は竹につける白き粉　（一二）琅玕は玉に似たる石にてその色碧し、靑き竹に喩ふ　（一三）竹には美人が花の如き宮殿にて面を掩うて媚ぶるが如き態なきこと　（一四）新に化粧して媚びへつらふ態を呈すること　（一五）荷珠は蓮の葉に宿る水玉　（一六）靑色の盤なり、蓮の葉の靑きに喩ふ　（一七）什襲は幾重にも包みて大切に藏むること　（一八）此の荷珠あれば龍の頷に在る珠を探り取るの必要なかるべし　（一九）花を看るに因りてその帽子を整へて被ること　（二〇）水邊の柳の樹を借りて船をつなぐ　（二一）夢に見たるが如き落花の茫然たる景は雨の氣色を消して面白き趣あること　（二二）一簾は疑らくは一叢の誤ならん、叢りて生ずる美しき花草の庭より晴れたる夕日の光を送りて日暮れんとするをいふ　（二三）春の時を爭うて酒宴を開く　（二四）酒宴を罷めて後に花にも歡喜の聲あるが如く感ずるなり　（二五）水國は江湖のある國、水國にて經典のことを誦ずること　（二六）水中に居る魚まで之を聽きて樂しく思へるが如し　（二七）何のわけもなく泪下ること、無端は由なしといふに同じ　（二八）三更は夜の十二時頃、夜半の山月照す頃老いたる猿が啼きてその聲悲しきが故に泪下りしなり　（二九）薄地は

來一片野心。已被白雲留住。○香吹梅渚千峰雪。清映冰壺百尺簾。

避客偶然抛竹屐。邀僧時一上花船。○到來都是淚。過去郎成塵。○秋色生鴻雁。江聲冷白蘋。○鬪草春風。才子愁銷書帶翠。采菱秋水。佳人疑動鏡花香。○天下海棠無香。

に住める犬の吠えて人を驚かすこと（一〇）九重は奥深き宮中、奥深き宮中に在ます天子より下されたる詔、後趙の石季龍戯馬觀を置き觀上詔書を安し五色の紙を用ひて木鳳の口に銜ましめて之を頒ちて事を用ひしをいふ（一一）已に白雲の爲めに我身を留められて山中に居り世事に着なければ詔あるも之に應せざるをいふ（一二）梅渚は梅花の在る水邊、水邊に在る梅花は千峰の雪の如く白くして花の香氣を吹き送ること（一三）氷壺は氷を盛りたる壺の如く極めて清潔なること、此は清き色は氷壺の如き清き百尺の簾に映ずること

客を避けて偶然竹屐（一）を抛ち、僧を邀へて時に一たび花船（二）に上る。○到來（三）都て是れ涙、過去（四）郎ち塵を成す。秋色（五）鴻雁に生じ、江聲（六）白蘋に冷かなり。○草（七）を春風に鬪はせば、才子書帶（八）の翠を銷すを愁へ、菱を秋水に采れば、佳人鏡花（九）の香を動かすかと疑ふ。○天下の海棠は香無し。惟昌州（一〇）香あるのみ。○竹粉（一一）琅玕（一二）の碧に映ずるは、新粧（一三）の流媚に勝る。曾て面（一四）を花宮に掩ふ無し。荷珠（一五）翡翠（一六）の盤に凝るは、什襲（一七）して珍とするに非ずと雖も、頷を龍藏（一八）に探るを免るべし。○花（一九）に因りて帽を整へ、柳（二〇）を借りて船を維ぐ。○夢（二一）を遶る落花は雨色を消し、一（二二）尊の芳草は晴曛を送る。○春（二三）を爭ひて宴を開けば、罷（二四）め來りて花に歡聲あり、

花飛。繞ニ提歌樓一。颺ニ撲僧舍一。點點共ニ酒旆一悠揚。陣陣追ニ燕姿一飛舞。沾レ泥逐レ水。豈特可レ入ニ詩料一。要レ知ニ色身幻影即是風裏楊花浮生燕壘一。○籬邊杖履送レ僧。花鬚沾ニ于巾角一。石上壺觴坐レ客。松子落ニ我衣裾一。○水綠霞紅處。仙犬忽驚レ人。吠入ニ桃花一去。○九重仙詔。休レ教ニ彩鳳

壘なるを知るを要す。(一五)○籬邊の杖履僧を送れば、(一六)花鬚巾角を沾す。石上の壺觴(一七)客を坐せしむれば、松子我が衣裾に落つ。(重出)(一八)○水綠に霞紅なる處、(一九)仙犬忽ち人を驚かし、吠えて桃花に入りて去る。(二〇)○九重の仙詔、彩鳳をして啣み來らしむるを休めよ。一片の野心、已に白雲に留住せらる。(二一)○香は吹く梅渚千峰の雪。(二二)清は映ず冰壺百尺の簾。(二三)

（一）俗事にわづらはされ引かゝる、心 （二）高尚なるおもむきなくば亦しりぞけらるゝこと （三）故事あるに似たれども未だ詳ならず後攷を俟つ （四）刀を床の側に置きて深く防禦する意か （五）自己の心中を禁誡するなり （六）雪がかたまりて飛ぶことと花の飛ぶが如きことと （七）料理亭の欄のあたりをめぐりまとふことと （八）雪が點々として飛びて酒屋の旗のひるがへると共にひるがへりてゆる〳〵揚がること （九）陣々は相列なること、雪が相列りて飛び落ち燕を追ひかけて飛び舞ふこと （一〇）泥の中に落ちて水に從うて流る （一一）此の如き雪景は詩を作る材料とならず （一二）原本前につゞけて一章とす標註の説に從ひ改めて別章とす、色身は肉體の身なり、我肉體は實體にあらず生滅すること、恰も幻(マボロシ)影の如きをいふ （一三）風の吹き來る處にある楊(ヤナギ)の花の飛ぶが如きこと （一四）はかなき人生は燕が土を築きて巣を作るが如きを云ふ （一五）籬がきのあたりにて杖をつき履を穿ちて僧を送ること （一六）花鬚は花のつゝなり、花の蕊が頭巾をうるほすこと （一七）石上にて壺に盛りたる酒と角にて作りたる杯を置きて客を坐せしめて酒を勸すること （一八）水綠にして霞の紅くたなびく所 （一九）仙人の居る社會

啼猿。秦樹千層。比翼不レ如レ子二飛鳥一。○清文滿レ篋。非二惟芍藥之花一。新製連篇。寧止二葡萄之樹一。○梅花舒二兩歳之裝一。柏葉泛二三光之酒一。飄飄餘雪。入二簫管一以成レ歌。皎潔輕冰。對二蟾光一而寫レ鏡。

の赤きまぶたに啼きたる痕あるを認むべきこと　(一五)　容儀の美なる人　(一六)　光澤のあること　(一七)　春の月に照されたる柳の光澤あるが如きこと　(一八)　襄は襄陵今の山西省に在り、襄陵の雪の降ること萬條なり、條は條絲を爲して降ること　(一九)　腸を斷ち切るの悲みは猿の啼く聲を聞きたるより出づるをいふ　(二〇)　秦の國の樹の幾重も相重なり合ふこと　(二一)　比翼は南方に鳥あり、雌雄比せずんば飛ばず、因りて名づく　(二二)　清き文が篋に一杯あること　(二三)　清き文は芍藥の花の美麗より以上に美麗なるをいふ　(二四)　新に作りたる連續せる數多の文章　(二五)　葡萄の樹にその實の累々として連れる以上に連續せること　(二六)　梅花は前年に蕾をもち、翌年に至りて花を開く、故に兩歳かゝりて裝飾を舒ぶといふなり　(二七)　三光酒は蓋し酒の名、元日柏葉を酒に浸して飲めば邪を辟くといふ　(二八)　飄飄はひら／＼飄へること　(二九)　白くしき清潔なき輕き氷　(三〇)　蟾光は月の光なり月のことを蟾蜍といふ

鶴有二巣心一猶被レ斥。梅無二高韻一也遭レ刪。○分二巣車中一。畢竟借二他人面孔一。捉二刀床側一。終須レ露二自己心胸一。○雪滾

鶴に巣心(一)有れば猶ほ斥けられ、梅に高韻(二)無くんば也た刪に遭ふ。○巣を車中(三)に分つは、畢竟他人の面孔を借る、(四)刀を床側に捉れば、終に須らく自己(五)の心胸を露はすべし。○雪滾(六)し花飛びて、歌樓(七)に繚繞し、飄りて僧舍を撲ち、點點(八)として酒旆と共に悠揚し、(九)陣陣燕鶯を追ひて飛舞し、(一〇)泥に沾ひ水を逐ふ、豈持して詩料(一一)に入るべけんや。○色身(一二)は幻影にして、卽ち是れ風裏(一三)の楊花(一四)、浮生の燕

花顏縹緲。欺二樹裏之春風一。銀焰瑩煌。却二城頭之曉色一。○烏紗帽挾二紅袖一登レ山。前人自多二風致一。○筆陣生レ雲。詞鋒捲レ霧。○楚江巫峽半雲雨。清簟疎簾看二奕棋一。○月慘風悲。到二玉顏之死處一。花愁露泣。認二朱臉之啼痕一。○美儀人。濯濯如二春月柳一。○褻雪萬條。斷腸新出レ于二

致多し。○筆陣雲を生じ、詞鋒霧を捲く。○楚江巫峽半ば雲雨、淸簟疎簾奕棋を看る。○月慘く風悲み、玉顏の死處に到り、花愁へ露泣き、朱臉の啼痕を認む。○美儀の人は、濯濯として春月の柳の如し。○褻雪萬條、斷腸新に啼猿に出で、秦樹千層、比翼は飛鳥に如かず。○淸文滿筐、惟芍藥の花のみに非ず、新製の連篇、寧ぞ葡萄の樹に止まらん。○梅花は兩歳の裝を舒べ、栢葉は三光の酒に泛べ、飄颻たる餘雪は、簫管に入りて以て歌を成し、皎潔なる輕冰は、蟾光に對して鏡に寫す。

(一) 地に附着して飛ばんとするをいふ (二) 飄颻を持ち繰り絹の裾をつけたる女子 (三) 花の如き美しき顏色は、ぽつとして遙に見ゆること (四) 銀の如き白き光の火焰の光りかゞやけること (五) 城の邊に見ゆる明け方の空の色よりもまされるをいふ (六) 烏紗帽は隱士の冠なり、紅袖は紅色の袖をひるがへせる美人 (七) 古代の人には風流なる遊を爲すもの多きをいふ (八) 文章の陣を張りたるが如く音響を競ひて書くその氣勢の盛なることと雲の起るが如し (九) 詩文の鋒の鋭くして盛に作ること霧の盛に起るが如し (一〇) 楚江及び巫峽のあたり半ばは雲起り雨降ること (一一) 淸き敷物をしき疎らなる簾をかけて棋を打つを見る (一二) 玉の如き美しき顏色の美女の死したる處に到りたるが如く物あはれを感ずること (一三) 花の萎みて露のかゝれる處は花の愁ひ露の泣くが如し (一四) 美人

貝葉。絶勝ニ北闕除書。水滴ニ蓮花。何似ニ華清宮漏ー。○畫屋曲房。擁レ爐列坐。鞭レ車行レ酒。分レ隊徵レ歌。一咲千金。樗蒲百萬。名妓持レ箋。玉兒捧レ硯。淋漓揮灑。水月流レ虹。我醉欲レ眠鼠奔烏竄。羅襦輕解。鼻息如レ雷。此一境界。亦足レ貫レ心ー。

綠色の李の葉を鮮き光にて照らして蒼ましむること、李或は芋に作るべきか（一二）秋雁の來ることは昔づるゝが如り（一三）秋英は秋時開く花なり（一四）蓐收は初秋の神なり、秋の神の席を避くるは卽ち秋の去らんとするをいふきな（一五）青女は霜の神なり、青女が裝飾を爲すは、秋霜の降り來るをいふ（一六）溪毛は溪川の中に生ずる草なり、碧瘦は青色を爲し瘦せ衰ふること（一七）木の葉散り落ちて山は骨をあらはして寒くなること（一八）一たび雪降りて十二月とならんとすること、臘は十二月のこと（一九）貝葉は榕樹の葉、印度の經文は貝葉に書せりといふ（二〇）北闕より與へらるゝ除官の辭令書に勝るをいふ（二一）華淸は唐の宮殿の名、玄宗皇帝の作りし所なり、宮漏は宮中に在る水時計のこと水の蓮花に滴るは華淸宮中に在る水時計の水の滴るに似たるをいふ（二二）畫屋は繪畫を施したる家屋曲房は曲りたる部屋（二三）列坐の人に酒を酌みて飲ましむること車を驅りて酒を送るが如きこと（二四）一笑は千金の値あり、樗蒲の戲を爲すものは百萬金を賭すること（二五）美しきこと玉の如き女兒（二六）墨のぽつ〳〵と滴るやうにて紙にそゝぎ筆を揮ひて書畫を書くこと（二七）水中に月の映じて月影の水と共に流るゝこと虹の如きをいふ（二八）鼠の奔走し烏の逃げかくるゝが如く坐より退くこと（二九）薄絹の羅袢を輕く脫ぐこと

柳花燕子。貼レ地欲レ飛。畫扇練裙。避レ人欲レ進。此春遊第一風光也。○

柳花燕子(一)、地に貼して飛ばんと欲し、畫扇練裙(二)、人を避けて進まんと欲す、此れ春遊第一の風光なり。○花顏縹緲(三)として、樹裏の春風を欺き、銀焰熒煌(四)として、城頭の曉色(五)を却く。○烏紗帽(六)もて紅袖を挾みて山に登る、前人(七)自ら風

雨。海棠嫩紫。芍藥嬌紅。宜二其春一也。碧荷鑄レ錢。綠柳繅レ絲。龍孫脫レ殼。鳩婦喚レ晴。雨釀二黃レ梅。日蒸二綠李一。宜二其夏一也。槐陰未レ斷。鴈信初來。秋英無レ言。曉露欲レ結。蓐收避レ席。青女辦レ裝。宜二其秋一也。桂子風高。蘆花月老。溪毛碧瘦。山骨蒼寒。千巖見レ梅。一雪欲レ臘。宜二其冬一也。○風翻二

(八)龍孫殼を脫し、(九)鳩婦晴を喚び、(一〇)雨は梅を黄に醸し、日は(一一)緑李を蒸すは、其夏に宜しきなり。槐陰は未だ斷えず、(一二)雁信は初めて來り、(一三)秋英は言なく、曉露は結ばんと欲し、(一四)蓐收席を避け、(一五)青女は裝を辦ずるは、其秋に宜しきなり。桂子風高く、蘆花月老い、(一六)溪毛碧瘦し、(一七)山骨蒼寒に、千巖に梅を見、(一八)一雪に臘せんと欲するは、其冬に宜しきなり。○風は(一九)貝葉を翻し、絶だ(二〇)北闕の除書に勝り、水は蓮花に滴る、何ぞ(二一)華清の宮漏に似たる。○(二二)畫屋曲房、爐を擁して列坐し、(二三)車に鞭ち酒を行り、隊を分ちて歌を徵し、(二四)一咲千金、樗蒲百萬、名妓箋を持ち、(二五)玉兒硯を捧げ、(二六)淋漓として揮洒し、(二七)水月虹を流し、我醉ひて眠らんと欲し、(二八)鼠奔鳥竄、(二九)雜襦輕く解け、鼻息雷の如し。此一境界、亦賞心するに足る。

(一) 梅眼は梅の芽の圓くして眼の如きものをいふ (二) 桃臉は桃の花のこと (三) 青鳥は鶺鴒なり、立春を以て鳴き立夏に止む (四) 嫩紫は薄き紫色なり (五) 嬌紅は麗き紅色なり (六) 碧き蓮の葉の錢の大きさになること (七) 絲の如き細き枝の柳は絲をくるが如きをいふ (八) 龍孫は筍のこと筍が成長して皮を脫するをいふ (九) 鳩婦は鳩は陰れば其婦を放逐し晴れば之を呼ぶ (一〇) 梅雨の降りて梅の黄色になりて熟すること、酒を醸すが如きなり (一一)

迎二王子之舟一。豪飲竟日。賦詩而散。○佳人半醉。美女新粧。月下彈瑟。石邊侍酒。烹レ雪之茶。果然贈有二寒香一。爭レ春之館。自是堪レ來二花歎一。○翠微僧至。衲衣全染二松雪一。斗室經殘。石磬半沈二蕉雨一。○黄鳥讓二其歌聲一。青山學二其眉黛一。○浅翠嬌青。籠レ烟惹レ濕。清漱レ齒。山可レ流レ觴。

梅額は梅花の白く咲けることならん、柳眉梅額語のあり、梅花の如き白き額を梅額といへども此には當らず 一四 爵にて酒を飲むに堪ふるをいふ、爵は雀の形の杯なり 一五 袁生は東漢の袁安のこと、安未だ達せざる時洛陽大に雪ふり人多く出て食を乞ふ安獨り強臥して起きず 一六 六花餅は雪のこと 一七 王子は晉の王子猷のこと、王子猷山陰に在る時夜大に雪ふる忽ち戴安道を憶ひ夜小船に乘りて至り門に入らずして還る 一八 大に酒を飲むこと終日にして各詩を作りて然る後解散するをいふ 一九 石のある邊にて佳人が酒宴に侍するをいふ 二〇 清き香の餘る程多くあるをいふ 二一 春色を爭ひて賞するをいふ 二二 花も之を嘆美するに至るをいふ 二三 翠微は山の八合目の所にて其翠色の縹緲たるを以ていふ 二四 僧侶の着たる衣服が全く松にかゝれる雪の色に染みて白く見ゆるをいふ 二五 小さき室に佛の經文の讀み殘りて終らざること 二六 石にて作りたる磬は佛經を讀む時に打つ、その磬は半は芭蕉にかゝる雨にしめり勝ちなるをいふ 二七 黄鳥は其人の歌聲よりも劣るをいふ 二八 青山は其人の眉黛の綠色を眞似ること、共に歌聲及眉黛はほめたるなり 二九 薄き翠色と、美しき濃き青色と、此は山水の青々としたる貌 三〇 もやが立ち籠めしめり氣を帶ぶるやうなること 三一 その水の清きは吾が齒をすゝぐを得べし 三二 水の曲れる處は觴を流して所謂曲水の宴をなすを得べし

風開二柳眼一。露浥二桃腮一。黄鸝呼レ春。青鳥送レ

風は柳眼(一)を開き、露は桃腮(二)を浥し、黄鸝は春を呼び、青鳥(三)は雨を送り、海棠は嫩紫(四)に、芍藥は蔫紅(五)なるは、其春に宜しきなり。(六)碧荷錢を鑄、綠柳絲(七)を繰し、

卷舒以養紙。○芭蕉近日則易焦、近風則易破。小院背陰。半掩竹窗、一分外青翠。○落花慵掃。留襯蒼苔村。釀新酒、取燒紅葉。○歐公香餅、吾其熟火無烟、顏氏隱囊、我則闘花以布。○梅額生香、已堪飲爵。草堂飛雪、更可題詩。七種之羹、呼起袁生之臥、六花之餅敢

吾其れ熟火烟無し。顔氏の隠嚢、我は則ち花を錫はすに布を以てす。○梅額香を生ず、已に爵を飲むに堪ふ。草堂雪を飛ばす、更に詩を題すべし。七種の羹、袁生の臥を呼び起し、六花の餅、敢て王子の舟を迎へ、豪飲竟日、詩を賦して散ず。○佳人半醉し、美女新に粧ひ、月下琴を弾じ、石邊酒に侍し、雪を烹たるの茶、果然勝さへ寒香あり。春を爭ふの館、自ら是れ花数を來すに堪ふ。○翠微に僧至れば、衲衣全く松雪に染み、斗室に經殘りて、石磬半ば蕉雨に沈む。○黄鳥は其歌聲に讓り、青山は其眉黛を學ぶ。○淺翠嬌青、烟を籠め濕を惹き、清は齒を漱ぐべく、曲は觴を流すべし。

(一) 蓋し酒の種類ならん (二) 文采ある美しき硯の蓋 (三) 豹の皮を以て作りたる嚢の中に入れて養ふこと (四) 紙を巻きたり舒べたりすること (五) 火に焦げたるが如き色に易はること (六) 芭蕉が半ば竹窓を掩ひかくすをいふ (七) 分外は非常といふが如し、非常に青く翠にしてその色の清きをいふ (八) 歐公は宋の歐陽修のこと (九) 香餅は香餅炭なり、用ひて以て香を焚く一餅の火、終日滅えず、我が炭際の類ならん (一〇) 火は充分に在れども香なきを以て烟立たざるをいふ (一一) 顔氏は南北時代の顔之推なり、此事顔氏家訓に出づ (一二) 隠嚢は布を以て嚢を作り貯つるに軽綿を以てし之を坐側に置き倦めば身を側て肱を曲げて之に倚る、隠は依なり、よりかゝる嚢なり (一三)

秋砧。古寺聞レ鐘。山僧曉梵。○佳人病怯不レ耐二春寒一。豪客多情尤憐二夜飲一。李太白之寶花宜レ障。光孟祖之狗竇堪レ呼。

るべき端物を石の上にて打つをいふ（二一）夜明け方に佛の經文を讀むをいふ（二二）佳人は美人なり、美人は臆病にて春の寒さを耐へ得ざるをいふ（二三）富豪の人は多情にして尤も夜酒を飲むを愛すること（二四）寶花は未詳、前句に應じて寶花を屏障として春寒を防ぐに宜しとの意をいへるにや（二五）狗竇は壁に穴を明けて狗をして出入せしむること、光孟祖は晉代の人、名は逸、字は孟祖、胡母輔之謝鯤阮放と室を閉ぢて酣飲す、逸戸を排して入らんとす、守者聽さず、逸便ち戸外に於て冠を脱して頭を露はし狗竇中より之を窺ひ大に叫ぶ輔之驚いて曰く他人決して爾る能はず必ず我が孟祖ならんと

古人養レ筆。以二硫黃酒一。養レ紙以二芙蓉粉一。養レ硯以二文綾蓋一。養レ墨以二豹皮囊一。小齋何暇及レ此。惟有レ時書以養レ筆。時磨以養レ墨。時洗以養レ硯。時

古人筆を養ふに硫黃酒（一）を以てし、紙を養ふに芙蓉粉を以てし、硯を養ふに文綾蓋（二）を以てし、墨を養ふに豹皮囊（三）を以てす。小齋何ぞ此に及ぶに暇あらん。惟時ありて書して以て筆を養ひ、時に磨して以て墨を養ひ、時に洗ひて以て硯を養ひ、時に卷舒（四）して以て紙を養ふ。○芭蕉は日に近ければ則ち焦げ易く（五）、風に近ければ則ち破れ易し。小院の背陰（六）、半ば竹窻を掩へば、分外（七）に青翠なり。○落花掃ふに慵く、留めて蒼苔に襯し、村釀新芻、取りて紅葉を燒く。（重出）○歐公（八）の香餠（九）、

人捧硯蠶毫。絕世風流、當場豪舉。○野花艷目、不必牡丹。村酒醉人、何須綠蟻。○石鼓池邊小草、無名可鬭。板橋柳外飛花、有陣堪題。○桃紅李白、疏籬細雨初來、燕紫鶯黃、老樹斜風乍透。○窓外梅開、怕有騷人弄笛。石邊積雪、還須小妓煮茶。○高樓對月鄰女

て題するに堪へたり。○(一四)桃紅李白、(一五)疏籬の細雨初めて來り、(一六)燕紫鶯黄、(一七)老樹の斜風乍ち透る。○窓外梅開いて、恐らくは(一八)騷人笛を弄するあらん。石邊の積雪、還た(一九)小妓の茶を煮るを須つ。○高樓月に對すれば、(二〇)鄰女秋砧す、古寺鐘を聞けば、(二一)山僧曉に梵す。○(二二)佳人病怯して春寒に耐へず、(二三)豪客多情にして尤も夜飮を憐む、(二四)李太白の寶花は障に宜しく、(二五)光孟祖の狗竇は呼ぶに堪へたり。

(一) 窓外に在るすぐれて大きく高き石の冷然として立てるをいふ、冷然は淸くして氣高きさま (二) 閑庭の外に在る美しき花の柔弱なるをいふ (三) 花の香餘りあれば美女が香を分ちて香はしむるの必要なしとの意 (四) 新たなる樂律を裁定するをいふ調は樂律なり (五) 板は音樂を奏する時拍子を取る板木なり (六) 題を取りて詩の題を定むること (七) 此の二事は世にすぐれたる風流の事なり (八) 當時の席に於ける豪奢なる擧動をいふ (九) 野生の花も月に美しく見ゆ、美は必ずしも牡丹の花のみにあらず (一〇) 綠蟻は醇酒の異名、必ずしも醇酒を用ふるの要なしとなり (一一) 石鼓池は池の名、その池のあたりに生ずる小草 (一二) 草を鬭すは草を以て相比すること、五月五日百草を鬭すの戲なり、奇花多きものを上となすといふ (一三) 飛花題を成して詩に作るを得べきをいふ (一四) 桃の花は紅にして李の花は白し (一五) まばらなる籬垣のあたりに雨の初めてふり來ること (一六) 燕は紫色を爲し、鶯は黃色を爲して飛べるをいふ (一七) 老樹のあたり風斜に吹き來りて透徹すること (一八) 騷人は風流人、風流人が尋ね來りて笛を吹くをいふ (一九) 小妓が雪の水を用ひて茶を煮るをいふ (二〇) 鄰家の女子が秋季に當りて衣に作

杯獨坐二其下一。遙令三青奴吹二笛。止留二一小奚一侍レ酒。纔少斟酌。便退立二迎春架後一。○花看二半開一。酒欲二微醉一。○夜來月下臥醒。花影零亂。滿二人襟袖一。疑如レ濯三魄于二氷壺一。○看レ花步。男子當レ作二女人一。尋レ花步。女人當レ作二男子一。

在る孔雀は、多くは印度群島及び暹羅より輸入す、故に南客といふ（八）鸚鵡は熱帶地方に産す、その支那に入るは秦隴地方よりせしを以て隴客と名づけしなり（九）その聲鳳凰の鳴くが如きを以て鳳笙といふ龍笛はその聲龍の鳴くが如きを以て名づく（一〇）蜀は錦を産し、齊は紈を産す、皆彼土有名のものなり（一一）丁香は蔓生の植物、春暮花開く小して色白し（一二）青奴は蒸し青衣を着たる奴なり（一三）一人の小さき下部の者（一四）少しく酒を酌みて飲むをいふ（一五）迎春は小灌木、春花中最も早く開く故に迎春と名づく、迎春の木のたなの後に立つこと（一六）花は半は開きたる頃が皆見頃なり（一七）酒は酩酊に至らずして少しく醉ひたるを好しとするなり（一八）花の影の落ち亂るゝをいふ（一九）人の魂魄を氷を盛りたる壺の中にて濯ひたるが如く淸きなり（二〇）男子も女子の如く緩やかに歩すべしとの意（二一）女子も男子の如く速に歩すべきをいふ

聰前俊石冷然。可レ代二高人把一レ臂。檻外名花綽約。無レ煩二美女分一レ香。○新調初裁。歌兒持レ板待的。鬮題方啓。佳

（一）聰前の俊石冷然たるは、高人の臂を把るに代ふべし。（二）檻外の名花綽約たるは、（三）美女の香を分つを煩はす無し。○（四）新調初めて裁すれば、（五）歌兒板を持して待ち、（六）鬮題方に啓けば、佳人硯を捧げ毫を濡す。（七）絶世の風流、（八）當場の豪擧なり。○（九）野花日に艷なり、牡丹を必ずとせず。村酒人を醉はしむ、何ぞ（一〇）綠蟻を須ゐん。○（一一）石鼓池邊の小草は、名無きも（一二）擷はすべし。板橋柳外の飛花は、（一三）陣あり

昔人有二花中十友一。桂爲二仙友一。蓮爲二淨友一。梅爲二清友一。菊爲二逸友一。海棠名友。荼蘼韵友。瑞香殊友。芝蘭芳友。臘梅奇友。梔子禪友。昔人有二禽中五客一。鷗爲二閒客一。鶴爲二仙客一。鷺爲二雪客一。孔雀南客。鸚鵡隴客。會二花鳥之情一。眞是天趣活潑。○鳳笙龍笛。蜀錦齊紈。○木香盛開。把

昔人に花中の十友あり。桂を仙友(一)と爲し、蓮を淨友(二)と爲し、梅を清友(三)と爲し、菊を逸友(四)と爲し、海棠は名友、荼蘼は韵友、瑞香(五)は殊友、芝蘭は芳友、臘梅は奇友、梔子(六)は禪友。昔人禽中の五客あり、鷗を閒客と爲し、鶴を仙客と爲し、鷺を雪客と爲し、孔雀(七)は南客、鸚鵡(八)は隴客、花鳥の情を會すれば、眞に是れ天趣活潑なり。○鳳笙(九)龍笛、(一〇)蜀錦齊紈。○木香(一一)盛に開く、杯を把りて其下に獨坐し、遙に青奴(一二)をして笛を吹かしめ、止ゝ一小奚(一三)を留めて酒に侍せしめ、纔に少しく斟酌(一四)し、便ち退いて迎春(一五)の架後に立つ。○花は半開(一六)を看、酒は微醉(一七)を欲す。○夜來月下に臥し醒むれば、花影零亂(一八)して、人の襟袖に滿つ。疑らくは魄を氷壺(一九)に濯ふが如し。○花を看て歩するには、男子(二〇)當に女人と作るべし。花を尋ねて歩するには、女人(二一)當に男子と作るべし。

(一) その香の仙界の香の如きを以て仙友といふ (二) 蓮の花は清淨なるを以て淨友といふ (三) 梅は清香あり、故に清友といふ (四) 菊は隱逸の趣あり、故に逸友といふ (五) 瑞香は小灌木香氣清遠にして、殊なれる香あり故に殊友といふ (六) 梔子はクチナシなり、花は白く實は黄なり、その禪味を帶びたるを以て禪友といふ (七) 支那に

外一。○養レ紙芙蓉粉。薰レ衣荳蔻香。○流蘇帳底。披レ之而夜月窺レ人。王鏡臺前。諷レ之而朝烟縈レ樹。○風流誇二壁髻一。時世鬪二啼眉一。○新壘桃花紅粉薄。隔レ樓芳草雪衣涼。○李後主官人秋水。喜簪二異花一。芳香拂二髻鬟一。嘗有二粉蝶一。聚二其間一。撲レ之不レ去。○濯二足清流一。芹香飛レ澗。浣二花新水一。蝶粉迷レ波。

を誇り、時世啼眉を鬪はす。(一四)○新壘の桃花紅粉薄く、樓を隔てて芳草雪衣涼し。(一五)○李後主の官人秋水、(一六)喜みて異花を簪し、芳香髻鬟を拂ふ。嘗て粉蝶ありて其間に聚り、之を撲てども去らず。○足を清流に濯へば、芹香澗に飛び、(一七)花を新水に浣へば、蝶粉波に迷ふ。(一八)

(一) 衲子は僧侶のこと (二) 顚亂は酒に醉ひて亂るゝこと (三) 酒樽の間に在りて世俗の汚れよりぬけ出てゝ佛理を悟るをいふ (四) 釵行は女子輩のこと (五) 筆を揮ひて書を作り筆墨の汁の滴らんとするが如きをいふ (六) 書のやうす心ばえの趣あること、筆墨以外の處に在り、書の巧拙に關せざるをいふ (七) 芙蓉の花の粉は紙を養ひ虫の入らざるやうにするを得べきか (八) 荳蔻の香衣服をくゆらすを得べきか (九) 流蘇はフサにて美しき毛を結びて帳の飾となす、此はフサを以て飾としたる帷帳の中なり (一〇) 月が帷帳の中に入り來るは人を窺ふに似たり (一一) 王鏡臺は疑らくは玉鏡臺の誤ならん玉を以て飾りたる鏡臺のこと (一二) 朝のもやが樹のあたりを繞るをいふ (一三) 隋髻は墮馬髻なり、後漢の梁冀の妻善く妖態を爲し墮馬髻を作りたりといふ (一四) 愁しみ啼くに因りて眉をしはめること、競うて啼眉を爲すをいふ (一五) 雪の如く白き花の咲けるをいふ (一六) 李後主は南唐の後主のこと、姓李氏なり故に李後主といふ (一七) 芹は水草の名、セリの香が谷川に飛びて傳はるをいふ (一八) 蝶の粉が波の上に浮びてさまよひ流るゝをいふ

雨絲牽二惹衣路一。○一泓溪水柳分開。盡道清虛攪破。三月林光花帶去。莫レ言香粉消殘。○斷雨斷雲驚レ魄。三春蝶夢。花開花落悲歟。一夜鵑啼。○一片秋山。能療二病客一。半聲春鳥。偏喚二愁人一。衲子飛レ觴歷亂。解三脫于二樽罍之間一。釵行揮レ翰淋漓。風神在二筆蓋之

せらるゝをいふ (一〇) 歌を歌ひ笛を吹くときに、南郭子が竽を吹く人の中に入りて濫りに竽を吹きたるが如く濫りに吹くをいふ、竽は樂器なり (一一) 竽を吹きたる人の汗俗が游べる人の中までさし入るをいふ (一二) 鳥の語が相かならずして譲ぶりたるをいふ (一三) たをやかなる情のある露の未だ散らざるをいふ (一四) 鳥が孤とり節を立てゝ後まで殘り居るのが漸く音絶ゆるを惜ふなり (一五) 多恨にして花に關する詩を作ること (一六) 風に飄へる花蕊が詩文の中に亂入して花のことが詩に作らるゝなり (一七) 多情にして柳の景色を尋ね見ること (一八) 雨の降ること絲の如くにして衣服裾を引きて之を止むるが如く思はるゝこと (一九) 一つの溪き谷川の水が柳の木によりて二つに分るゝこと (二〇) 水の清くして靜なるを柳の木によりてかき亂さるゝをいふ (二一) 林の景色は花が持ち去りたるをいふ (二二) 花の香花の粉が消え失せたるをいふ (二三) され〳〵に降る雨、され〳〵の雲 (二四) 三春は春三ケ月なり、雨ふりて三春の蝶の夢を驚かすをいふ (二五) 一夜杜鵑は花の落ちたるを悲みて啼くをいふ (二六) 秋山の景清く靜なるを以て病人の病を治療するをいふ (二七) 春鳥の聲愁ひ悲しむが如きを以て愁の人の心を喚び起して愁へしむるなり

(一)衲子觴を飛ばして(二)歷亂し、(三)樽罍の間に解脫す。(四)釵行翰を揮ひて淋漓たり、(五)(六)風神筆蓋の外に在り。(七)○紙を養ふ芙蓉の粉、(八)衣を薫らす荳蔻の香。(九)○流蘇帳底、(一〇)之を披けば夜月人を窺ひ、(一一)玉鏡臺前、之を諷すれば(一二)朝烟樹を縈る。(一三)○風流嘶騎

恨二清明雨一。○明月當レ樓。高眠如レ避二情哉。夜光暗投。芳樹交レ聰。把玩無レ主。嗟矣紅顔薄命。○詩箋當二紅葉一。詞人之遇、詭レ于二宮人一。歌管爲二濫竽一。吹客之汗。插二入游客一。○鳥語聽二其澁一時。憐二嬌情之未一レ囀。蟬聲聞已斷處。愁二孤節之漸消一。○多恨賦レ花。風瓣亂二枝筆墨一。含レ情問レ柳。

し、嗟々紅顔薄命なり。(七)○詩箋紅葉に當れば、(八)詞人の遇宮人より詭なり、(九)歌管濫竽を爲せば、(一〇)吹客の汗、游客に插入す。(一一)○鳥語其澁を聽く時、(一二)嬌情の未だ囀ぜざるを憐む。(一三)蟬聲の聞已に斷ゆる處、(一四)孤節の漸く消ゆるを愁ふ。(一五)○多恨にして花を賦せば、風瓣筆墨に亂侵す。(一六)情を含み柳を問へば、(一七)雨絲衣裾を牽惹す。(一八)○一泓の溪水柳分開す。(一九)盡く道ふ清曉攪破すと。(二〇)三月林光花帶び去る。(二一)言ふこと莫れ香粉消殘すと。(二二)○斷雨斷雲魄を驚かす、(二三)三春の蝶夢む、(二四)花開き花落ちて悲歌し、一夜鵑啼く。(二五)○一片の秋山能く病客を療し、(二六)半聲の春鳥偏に愁人を喚ぶ。(二七)

(一) 立派な簾を捲き上げて眺望せずして奥深き室中に在るをいふ (二) 花に雨のかゝりたるは花が啼きて泣を流したる痕あるが如しとなり (三) 清明は今の四月五六日の頃なり、此頃は多くは雨降るなり、此は清明の頃の雨の降るを恨めるが如きをいふ (四) 世を避けて心を高くして眠り居るは明月を避けて見ざるに似たるをいふ (五) 夜光の玉を暗中に投ずるが如く明月の光の空しく室中に入るをいふ (六) 芳樹の花を把りて玩び看るべき主人なきをいふ (七) 紅顔の美人の運命薄くして夭死するが如く花の美を賞するものなくして花の落つるをいふ (八) 詩箋は詩を書する紙なり、紅葉の時詩箋を出して詩を書せしむること (九) 詩文を作る人の待遇は宮人の待遇よりもあやしく優待

鴛鴦ヲ。幾結ニ同心ヲ。日麗ニ屏間孔雀ヲ。○堂上鳴レ琴。操久弾レ手ニ孤鳳ヲ。邑中製レ錦紋重繍レ了ニ雙鸞ヲ。○鏡想ニ分鸞ヲ。琴悲ニ別鶴ヲ。○佇透水波明寒殿花木痩極レ目烟中百尺樓。人在ニ樓中一否。欲レ減ニ羅衣一寒未レ去不レ捲ニ珠簾ヲ人在ニ深深處ニ紅杏枝頭花ニ幾許啼痕。

ば鄰里の人も相知るものなし 七 宋玉は戦国の時の楚の人、宋玉高唐賦を作り巫山の女の事をいへり 八 翠々は雲の黒くしてくらきこと 九 神女は巫山に居る神女なり 一〇 娟々は美しきこと 一一 嬋娟は神仙にて綽若りて月の中に入れりといふ、是は雲と月に託して吾が意中を訴ふるの意なり 一二 装飾を爲す處の意なり、此は女子の室が男子の書齋に相對し牕を隔てゝその影の牕に映ずるをいふ 一三 繡戸は刺繡したるが如く美しき家なり、綺戸も亦同意なり、此れ亦男子の室と女子の室との相通ずるをいふ 一四 男子が女子を望む眼の多情なるをいふ 一五 相並びたる花のへた、蓮花の相並びて開けるをいふ 一六 鴛鴦は雌雄常に相並びて水上に泛ぶ、故に蓮花の並べるへたの開きたるは鴛鴦が偶むに似たりといふなり 一七 錦の相結びて解けざる同心の男女が相結びて解けざるが如し 一八 屏間に居る孔雀の雌雄相つきて離れざるが如きをいふ 一九 操は操曲なり、操曲を奏することと久しくして孤鳳の曲を弾ずるなり 二〇 錦の模様相重なりて二羽の鸞鳥を織り成すこと 二一 鏡に對しては鸞鳥、相分るゝを想ふ、罽賓王に一鸞が鏡に對して影を見て鳴きしよりいへるなり 二二 別鶴は樂府琴曲の名、琴を弾じ別鶴の曲に對して悲しむこと 二三 烟靄の中に在る百尺の高き樓 二四 吾が思ふ人は樓中に存在するや否や、是れ男女相思の情を寫すなり

羅衣を減ぜんと欲するも寒未だ去らず。珠簾(一)を捲かずして、人は深深の處に在り。紅杏枝頭の花、(二)幾許の啼痕、(三)清明の雨を恨む。○明月樓に當る、(四)高眠して避くるが如し。惜い哉(五)夜光暗に投ずること。芳樹牕に交り、(六)把玩するに主な

高二臥酒樓一。紅日不レ催二詩夢醒一。謾二書花樹一。白雲恆帶二墨痕香一。○天台花好。阮郎却無二計再來一。巫峽雲深。宋玉只有二情空賦一。○瞻二碧雲之黯黯一。覓二神女一其何蹤。覩二明月之娟娟一。問二嫦娥一而不レ應。○粧臺正對二書樓一。隔レ池有レ影。繡戸相二通綺戸一。望眼多情。○蓮開二竝帶一。影憐二池上

酒樓(一)に高臥すれば、紅日(二)詩夢の醒むるを催さず。花樹(三)に謾書すれば、白雲(四)恆に墨痕の香を帶ぶ。○天台(五)花好くして、阮郎(六)却つて計の再び來る無し。巫峽雲深くして、宋玉(七)只情の空しく賦するあり。○碧雲(八)の黯黯を瞻て、神女(九)を覓むるも其れ何ぞ蹤あらん。明月の娟娟(一〇)を覩て、嫦娥(一一)に問へども應ぜず。○粧臺(一二)は正に書樓に對し、池を隔てゝ影あり。繡戸(一三)は綺戸に相通じ、望眼(一四)多情なり。○蓮は竝蔕(一五)を開いて、影池上の鴛鴦(一六)を憐む。縷(一七)は同心を結びて、日に屏間(一八)の孔雀に麗く。○堂上琴を鳴らし、操久(一九)しうして孤鳳を彈ず。邑中錦を製し、紋重なり雙鸞(二〇)を織る。○鏡(二一)に分鸞を想ひ、琴に別鶴(二二)を悲む。○春透りて水波明かに、寒峭くして花木瘦す。目を極む烟中(二三)百尺の樓、人は樓中(二四)に在りや否や。

(一) 世を避け心を高うして酒樓に臥するをいふ (二) 太陽既に高く昇りても詩人の夢醒めずして晏くまで寢ぬるをいふ (三) 花樹は花の有る處に建てられたるあづま屋なり、漫書は漫然として樂書きするをいふ (四) 花樹にたなびく白雲も恆に墨の香をもてるが如きなり (五) 天台は山の名、今の浙江省天台縣の北に在り (六) 阮郎は阮肇のこと、天台山に入り藥を採る、溪邊に一女子あり忻然として舊相識の如し、此に止宿すること暫くにして、辭し歸れ

朱樓綠幕。笑語勾ニ別座之香一。越舞呉歌。慧舌吐ニ蓮花之艶一。此身如レ在ニ怨臉愁房。紅粧翠袖之間一。若レ遠若レ近。爲レ之黯然。嗟呼。又何怪乎。身當ニ其際一者。擁ニ玉床之翠一而心迷。聽ニ伶人之奏一而涕潸乎。集ニ綺第九一。

卷九

綺

(一)朱樓綠幕、笑語は別座の香を勾し、(二)越舞呉歌、(三)慧舌は蓮花の艶を吐き、此身は(四)怨臉愁房、(五)紅粧翠袖の間に在るが如し。(六)遠きが若く近きが若く、之が爲めに(七)黯然たり。嗟呼又何ぞ怪まんや。身其際に當る者、(八)玉床の翠を擁して心迷ひ、(九)伶人の奏を聽いて涕潸ちんや。綺第九を集む。

(一) 朱樓は赤き色の樓閣、綠幕は綠色の幕を張ること (二) 他の座の香を取ること、勾は曲り金なり、曲り金にて引かけて取るが如く取ること (三) 越人の舞、呉人の歌の如く舞歌をなすこと (四) さとくして賢き辯舌は蓮花の美しくつやある如く、辯論の美しく巧なること (五) 怨めしき顏面と愁ひ悲める部屋 (六) 紅色に美しく粧飾をなし翠色の衣服をつくること、女子のことをいふ (七) 愁ひ悲しみて意氣の揚らざること (八) 玉床は美しき床、玉の如き美しき床に在る翠袖の美女を擁すること (九) 伶人は音樂を奏する人、伶人の音樂を奏するを聞くこと

轉環。驟雨橫飛。挾星精而搖動。○長橋臥波。未雲何龍。複道行空。不霽何虹。○天台嶸起。繞之以赤霞。削成孤峙。覆之以蓮花。○金河別雁。銅柱辭鳶。關山天骨。霜木凋年。○飜光倒景。擢菡萏于湖中。舒豔騰輝。攢蝃蝀于天畔。○照萬象于晴初。散寥天于日餘。

覆ふに蓮花を以てす。(一三)○金河雁に別れ、(一四)銅柱鳶を辭す、(一五)關山の天骨、(一六)霜木年に凋む。(一七)○光を飜し景を倒にし、(一八)菡萏を湖中に擢きんで、(一九)豔を舒べ輝を騰げ、(二〇)蝃蝀を天畔に攢む。(二一)○萬象を晴初に照らし、(二二)寥天を日餘に散ず。(二三)

(一) 水に在りては罔魄を驚き懾れしめ、陸に在りては虎魂を振ひ恐れしむるをいふ (二) 清漢は清らかなる天の河なり (三) 華池は今の陝西省の韓城縣に在り、華池の中に景色が倒まに映ずるをいふ (四) 雲晴れて月の影が見はれて彎曲の形を爲すをいふ (五) 驟にふり來る夕立が横より飛ぶこと (六) 星精は星の精氣、雨は星の精氣と共にゆら〳〵動くこと (七) 長橋が波の上に架けられたるは臥するが如きをいふ (八) 龍と見違ふるをいふ、未だ雲の出でざるに龍のあるべきことなければ是は長橋の架せるなり (九) 天子の御成り道は高くして空中を行くが如きをいふ (一〇) 此は虹と見違ふるをいふ、雨の晴れざれば虹のあるべき理なし、此れ複道の高くあるなり (一一) 天台山が高く聳え起てるをいふ (一二) その險阻なること、削りて作成したるが如く羣山を離れて獨り高く峙つをいふ (一三) 山頂の形蓮花に似たる所あるなり (一四) 金河は今の山西省歸化城の南に在り、金河にて雁に別れて遠行すること (一五) 銅柱は今の安南の邊に在り、漢の馬援兩銅柱を建てしといふ、銅柱のあたりに鳶に別るゝこと (一六) 邊境に在る關所あたりに在る山の天然に巖石のかど立ちたるは骨の張れるが如きをいふ (一七) 霜のかゝれる木の歲寒に凋み衰ふることにて凌々たる意氣の衰ふるに喩ふ (一八) 光を飜してかゞやき、景を倒にして水中に映ずること (一九) 菡萏は蓮のこと (二〇) 美しき色つやをのべ光輝をあらはすこと (二一) 蝃蝀は虹の別名、此は虹が天のはしに見ゆるをいふ (二二) 天地間の有ゆる形象を日の晴るゝ初めに照らすこと (二三) 廣くして空しき天の光を夕日に散ずること

吾儕嚴師孰尊。對二一枝紅燭一自尊。〇點二破無稽不根之論一。只須二冷語半言一。看二透陰陽顚倒之行一。惟此冷眼一隻。〇古之釣也。以二聖賢一爲レ竿。道德爲レ綸。仁義爲レ鉤。祿利爲レ餌。四海爲レ池。萬民爲レ魚。釣道微矣。非二聖人一其孰能レ之。

水逞二龍魄一。陸振二虎魂一。〇既稍三雲于二清渓一。亦倒三景于二華池一。〇浮雲廻度、開二月彩一而

ふ　(三)三寸舌は辯論を逞ふをいふ　(四)此の容貌を修飾せずして自然のまゝにすることと土木の如きをいふ　(五)鵬は鳥類中のすぐれたるものなるをいふ、鵾は大鳥にして其大なること數千里ありといふ、莊子に見ゆ　(六)鯤は北海に在る魚にして、又其大いさ幾千里なるを知らず、故に介魚中の豪傑と稱せらる　(七)その鳥の背には相距れる大空を負ふをいふ、皆莊子に見ゆ　(八)傑は豪傑なり　(九)傲は傲慢にして高ぶること　(一〇)才がその人の傲慢をたすくること　(一一)講章は講習する章句なり　(一二)一境は一隅の如し、一境の蒲團の上に坐して禪に參すること　(一三)おごそかにして敬ふべき教師なり　(一四)一盞の紅の燭火に對して酒を飲むをいふ　(一五)無稽は古を稽へざる根據なきこと、不根も亦根據なきこと、古を稽へざる根據なき言論を點檢すること　(一六)善と惡とを顚倒したる行を徹底的に看通すこと　(一七)冷語は冷靜なる言語、冷眼は冷靜なる眼なり　(一八)釣は人を用ふること、恰も魚を釣るが如きをいふ　(一九)綸は魚を釣る絲なり　(二〇)鉤は魚を釣る曲り針なり　(二一)廣く萬民の中より賢人を採用するに喩ふ　(二二)人を釣る道は微妙にして淺からざるをいふ

(一)水に龍魄を逞し、陸に虎魂を振ふ。〇既に雲を清渓に稍め、(二)亦景を華池に倒にす。〇(三)浮雲廻り度り、(四)月彩を開いて彎環し、(五)驟雨横に飛び、(六)星精を挾みて搖動す。〇(七)長橋波に臥す、未だ(八)雲あらざれば何ぞ龍あらん。(九)複道空を行く、(一〇)霽れざれば何ぞ虹あらん。〇(一一)天台嵊起す、之を繞らすに赤霞を以てし、(一二)削成孤峙す、之を

儒有二一畝之宮一。自不レ妨二草茅下賤一。士無二三寸之舌一。何用二此土木形骸一。〇鵬爲二羽傑一。鯤稱二介豪一。翼遮二半天一。背負二重霄一。〇憐之一字。吾不レ樂レ受。蓋有レ才。而徒受二人憐一。無用可レ知。傲之一字。吾不二敢矜一。蓋有レ才。而徒以資レ傲。無用可レ知。〇問。近日講章孰佳。坐二一塊蒲團一自佳。問。

儒に一畝(一)の宮あれば、自ら草茅(二)の下賤たるを妨げず、士に三寸(三)の舌無くんば、何ぞ此の形骸を土木(四)にするを用ひん。〇鵬(五)を羽の傑と爲し、鯤(六)を介の豪と稱す。翼は半天を遮り、背は重霄(七)を負ふ。〇憐(八)の一字は、吾受くるを樂まず。蓋し才有りて徒らに人の憐を受く、無用知るべし。傲(九)の一字は、吾敢て矜らず、蓋し才有りて徒らに以て傲(一〇)を資く、無用知るべし。〇問ふ近日の講章(一一)孰か佳なる、一塊(一三)の蒲團に坐すること自ら佳なり。問ふ吾儕の嚴師(一二)孰れか尊き、一枝の紅燭(一四)に對すること自ら尊し。〇無稽(一五)不根の論を點破するに、只冷語半言を須ふ。陰陽顚倒(一六)の行を看透するに、惟此れ冷眼(一七)一隻のみ。〇古(一八)の釣るや、聖賢を以て竿と爲し、道德を綸(一九)と爲し、仁義を鉤(二〇)と爲し、祿利を餌と爲し、四海を池と爲し(二一)、萬民を魚と爲す、釣道(二二)微なり、聖人に非らずんば其れ孰か之を能くせん。

(一) 一畝は二百四十方歩の大きさなり、少さき宮室のこと (二) 草深き民間の下賤のものたるに於て妨げなきをい

氣開地震。聲動天發。○議ニ論先聲一。畢竟沒ニ學問一之人。奬ニ借後生一。定然關ニ世道之寄一。○貧富之交。可ニ以ㇾ情諒一。鮑子所ニ以讓ㇾ金。貴賤之間。易ニ以ㇾ勢移一。管寧所ニ以割ㇾ席。○論ニ名節一則緩急之事小。較ニ生死一則名節之論微。但知下爲ニ餓夫一以採中南山之薇上。不下必爲ニ枯魚一以需中西江之水上。

但餓夫と爲りて以て南山の薇を採るを知れば、（一七）必ずしも枯魚と爲りて以て西江の水を需めず。（一八）

(一) 芙蓉赤精は蓋し名劍の名 (二) 寸管は筆のこと、士人の用ふる所は惟々筆あるのみで即ち筆を以て文章を書くこと (三) 映ㇾ日干ㇾ雲は日光と相映じ雲を干して天に昇ること、即ち光彩ある立派なる文章を書く器なり (四) 佳き筆に多くの價を出して相求めざるを得ざるをいふ (五) 形は身體なり、我が身體の爲すまゝにまかせて私欲を縱まゝにして志を寄する所なきこと (六) 鹿や豕の群を爲すが如く、その生活の無意味なるをいふ (七) 雄壯なる志を以て思ふ所あるをいふ (八) 雲氣の太陽に照されて霞のたなびき靡ること (九) 河に水を呑み月の水に映ずる處にて口を嗽ぐこと (一〇) 後進の士を奬勵すること (一一) 必然社會の道德を維持する任務を委託するに關係すること (一二) 心情に於て相互に諒解すること (一三) 鮑子は鮑叔牙にして管仲と交り管仲の貧しきを見て金を讓れり (一四) 管寧は後漢の末の人、華歆と常に同席して書を讀む、軒に乘り冕を着け門を過ぐるものあり歆書を廢して出て看る、寧席を割き座を分ちて曰く子は吾友にあらずと (一五) 急卒に起りたる大事件も大事件と思はずして之を小事と思ふをいふ (一六) 生死を以て名節に比較すれば、人は死を厭ふが故に名節の論も小事となるをいふ (一七) 此は伯夷叔齊の事をいふ、伯夷叔齊は名節を重んじ周の粟を食ふを恥ぢ、西山の薇を採りて之を食ふ南山は當に西山に作るべし (一八) 此事莊子に出づ、轍中の鮒魚が莊周にいへる事なり、死して枯れたる魚となるも西江の水を求めて活きんとせず、貧窮にして人の救濟を求めざるをいふ

詩。○則何益矣。若戰有ㇾ如ニ酒兵一。試妄ニ言之一。談ㇾ空不ㇾ若ㇾ說ㇾ鬼。○鏡月水花。若ㇾ使ニ慧眼看透一。劒光筆彩。肯教ニ壯志銷磨一。

意なるべし (一二) 佛教の空理を談ずるよりは鬼神のことを說くに如かざるをいふ (一三) 鏡中の月、水中の花、幻景をいふ (一四) 慧眼は佛家の語、五眼の一なり、慧眼は聲聞の眼なり、聲聞の人の眼に徹底するまで看しむることをいふ (一五) 劒の光華と文章の光彩と (一六) 意氣雄壯の人の志を消滅せしめざるをいふ

烈士須ニ一劒一。則芙蓉赤精。不ㇾ惜ニ千金ニ購ㇾ之。士人惟此寸管。映ㇾ日干ㇾ雲之器。那得ㇾ不ニ重値相索一。○委ㇾ形無ㇾ寄。但教ニ鹿豕爲ㇾ羣。壯志有ㇾ懷。莫ㇾ遣ニ草木同朽一。○映ㇾ日吐ㇾ霞。吞ㇾ河漱ㇾ月。

烈士一劒を須ふれば、則ち(一)芙蓉赤精、千金を惜まずして之を購ふ。士人は惟此の(二)寸管、(三)日に映じ雲を干すの器なり。那ぞ(四)重値相索めざるを得んや。○(五)形に委ねて寄する無ければ、但(六)鹿豕をして羣を爲さしむ。(七)壯志懷あれば、草木と同じく朽ちしむる莫れ。○日に映りて(八)霞を吐き、(九)河に呑みて月に漱ぎ、氣開きて地震ひ、聲動きて天發す。○先輩を議論するは、畢竟學問沒きの人、後生を(一〇)獎借するは、(一一)定然世道の寄に關す。○貧富の交は、(一二)情を以て諒すべし。(一三)鮑子金を讓る所以なり。貴賤の間は、勢を以て移り易し。(一四)管寧席を割く所以なり。○名節を論ずれば、則ち(一五)緩急の事小なり。生死を較ぶれば、則ち(一六)名節の論微なり。

風微散海旭乍來。見沿庭春草霏霏、明媚如織。遠岫朗潤出沐、長江浩瀚無涯。嵐光晴氣、卷舒不一。大是奇絶。○心無機事、案有好書。飽食晏眠。時清體健、此是上界眞人。○讀春秋、在人事上見天理。讀周易、在天理上見人事。○先讀經。後可讀史。非作文未可作

て天理を見、（一八）周易を讀みては天理上に在りて人事を見る。○先づ經を讀みて後（一九）史を讀むべし。文を作るに非ずんば、未だ詩を作るべからず。（二〇）○則ち何ぞ益あらん、（二一）茗戰は酒兵の如きあり。試に之を妄言せんに、空を談ずるは鬼を說くに若かず。（二二）○鏡月水花は、（二三）慧眼をして看透せしむるに若かんや。（二四）劍光筆彩は、（二五）肯て壯志をして銷磨せしめんや。（二六）

（一）岑樓は山の如く高き樓　（二）眉黛の如き翠色が階段に臨むこと　（三）原文「吹流水決」は「流水吹決」に作るべきなり　（四）鳥の聲のかまびすしきこと　（五）美しき器が几上にうつること　（六）海の邊より昇り來る旭日　（七）春草の生ひ茂れること　（八）はつきりとして媚ぶるが如き美しき景色の遠近に見はれ來ること織るが如きこと　（九）遠方に在る山の穴は朗らかにしてしめり氣あること人の髮を洗ひたるが如きをいふ　（一〇）浩瀚は廣大なる池の如きこと　（一一）山より水蒸氣の昇る光景と晴れたる氣色と　（一二）卷は隱るゝこと、舒は見はるゝこと、景色の或は隱れ或は見はるゝこと一ならざるをいふ　（一三）機事は機變の巧みなる事　（一四）案は机のこと　（一五）氣候は清く身體は健全なること　（一六）天上界に住める仙人　（一七）人事は人生社會に存する種々の出來事　（一八）天理は天地自然に存する道理のこと、春秋は主として人事を記し、周易は主として天理を述ぶ　（一九）先づ經書（周易尚書毛詩春秋論語の類）を讀みて然る後歷史の書を讀むべし　（二〇）文章を作りて然る後詩を作るべし、詩を先にすべからず　（二一）此句誤脫あるに似たり、強いて解すれば、茶を飲みて品評を爲すは酒を飲む競爭を爲すが如く益なきことなりとの

可レ無ニ此傳奇一。有ニ此傳奇一。乃可レ維ニ此世界一。則傳奇所レ關非レ小。正可下藉ニ口西廂一卷一。以爲中風流談資上。○非ニ窮愁一不レ能レ著レ書。當ニ孤憤一不レ宜レ說レ劍。

と　一六 池のはとり在る堤塘にて硯を洗ふこと、池上にて書を寫したるをいふ　一七 かゝる事を爲したりとも山や池の税金を出すの要なしとの意　一八 傳奇は脚本なり、小說的の傳記をいふ　一九 西廂記は元曲の名、王實甫の撰なり、藉口は西廂記に口をかりて之を口實とすること　二〇 風流なる談話の材料とすること　二一 孤直にして世に用ひられざるを憤り怨みて書ヶ著はすをいふ、韓非子用ひられざるを憤り孤憤篇を著す　二二 莊子の書に說劍一篇あり、莊子の如く劍の事を說くべからずとなり

湖山之佳。無レ如ニ清曉一。春時常乘レ月至レ館。景生ニ殘夜一。水映ニ岑樓一。而翠黛臨レ階。吹流水袂。鶯聲鳥韻。催レ起閑然。披レ衣步ニ林中一。則曙光薄レ戶。明霞射レ几。輕

湖山の佳は、清曉に如くは無し。春時常に月に乘じて館に至れば、景殘夜に生じ、水岑樓に映じ、而して翠黛階に臨み、流水袂を吹き、鶯語鳥韻、起くるを催して閑然たり。衣を披て林中を步すれば、則ち曙光戶に薄り、明霞几を射、輕風微に散じ、海旭乍ち來り、沿庭の春草霏霏として、明媚織るが如く、遠岫朗潤沐を出で、長江浩潢として涯なく、嵐光晴氣、卷舒一ならざるを見る。大に是れ奇絕なり。○心に機事なく、案に好書あり、飽食晏眠、時淸く體健かなるは、此れは是れ上界の眞人なり。○春秋を讀みては、人事上に在り

榻爐烟。○作夢則天地亦不醒。何論文章。爲客則洪濛無主人。何有章句。○艷出浦之輕蓮。麗穿波之半月。○雲氣恍堆隱裡岫。絶勝看山。泉聲疑瀉竹間樹。賢于對泗。○杖底唯雲。囊中唯月。不勞闤市之譏。石笥藏書。池塘洗墨。豈供山澤之稅。○有此世界。必不

(一二)杖底唯雲のみ。(一三)囊中唯月のみ。(一四)闤市の譏を勞せず、(一五)石笥に書を藏し、(一六)池塘に墨を洗ふ。(一七)豈山澤の稅に供せん。○此世界あれば、必ず此の(一八)傳奇無かるべからず。此傳奇あれば、乃ち此世界を維ぐべし。則ち傳奇の闕する所小に非らず。正に口を(一九)西廂一卷に藉きて以て(二〇)風流の談資と爲すべし。○窮愁に非らずんば書を著す能はず、當に(二一)孤憤すべし。宜しく(二二)劍を說くべからず。

(一) 佛經に世界を說くに小千中千大千の別あり、四大洲日月諸天を合せて一世界と爲す、一千世界を小千世界と名づけ、小千の千倍を中千世界と名づけ、中千の千倍を大千世界と名づく (二) 天宮は非想天を以て極上と爲すも、その非想天の上更に無限にして畢竟窮極する所なかるべしとなり、この句佛說に據る (三) 非想の上更に窮まる所なく、深遠の上に尚深遠なるをいふ (四) 千載に一たび相逢ふ不思議の遭遇 (五) 茗椀香烟の間に坐して茶を喫るを以て清福となすをいふ (六) 天地を以て夢と作さば、天地は醒むることとなし、卽ちその理茫然として明かならざるをいふ (七) 洪濛は天地のこと、天地に主人なければ、解釋のあるべき理なきをいふ (八) 浦より出づる輕小なる蓮花の咲けるを美しくつやあるものとすること (九) 波の中に映ずる月を以て美麗とするをいふ (一〇) 雲氣おぼつとして窓の裡の岫の如くなれる處うづだかく積もり重なるの景 (一一) 泉の水の聲は竹間に在る樹にそゝぐにあらずやと疑はるゝこと (一二) 杖のあたりには唯雲のみ往來すること (一三) 囊中には唯々月のみうつりて何物もなきこと (一四) 關所又は市朝にて旅人又は市人の貯物を取調ぶるの勞を煩はさゞるをいふ (一五) 石筺に書籍を藏め蓄ふること

嘗攫我。只是心蜂攢入塵勞窟中耳。○于琴得道机。于棋得兵機。于卦得神机。于藥得仙機。○相禪遐思唐虞。戰爭大笑楚漢。夢中蕉鹿猶眞。覺後蓴鱸一幻。

て作りたる佛なり、之を作ることを誡すべしとの意 (一二) 擾々は亂るゝこと、入れ亂れたる世の中の苦勞が我の精神を擾すことと能はざるをいふ (一三) 心蜂は蜜蜂の蜜を求むるが如く世に求むる所あるの心をいふ、我が心が世の中の苦勞の根據の處にあつまり入るをいふ (一四) 道機は道德の妙機なり、機は機能にてはたらきの意 (一五) 鬼神の妙機なり (一六) 神仙の妙機なり (一七) 堯は位を舜に禪り、舜は位を禹に禪れり (一八) 楚の項羽と漢の高祖と七年間戰爭せり (一九) 鄭人鹿を殺して隍中に匿し、之を覆ふに蕉を以てしその喜に勝へず、俄にしてその藏する所を忘れて以て夢となせり (二〇) 張翰が任地に在りて秋風に蓴羹と鱸魚の膾とを思ふの事も一のまぼろしの如く思はるゝ意

世界極于大千。不知大千之外。更有何物。天宮極于非想。不知非想之上。畢竟何窮。○千載奇逢。無如好書良友。一生清福。只在茗

世界は大千を極む。(一)知らず大千の外更に何物有るを。天宮は非想を極む。(二)知らず非想の上、畢竟何ぞ窮まらん。(三)○千載の奇逢、(四)好書良友に如くは無し。一生の清福、只茗椀爐烟に在り。(五)○夢と作さば則ち天地も亦醒めず、(六)何ぞ文章を論ぜん。客と爲さば則ち洪濛に主人なし。(七)何ぞ章句有らん。○浦を出づるの輕(八)、蓮を艶とし、波を穿つの半月を麗とす。(九)○雲氣恍として、(一〇)牕裡の岫に堆きは、絕だ山を看るに勝る。泉聲(一一)疑らくは竹澗の樽に瀉ぐは、酒に對するに賢る。○

詞賦無益故篇章不雅不風。〇爭之雖平也。天折地絶。亦無自屈之期。報之不已也。鬼哭神愁。奚有相安之日。〇俗氣入骨。即呑刀刮腸。飮灰洗胃。覺俗態之益呈。正氣效靈。即刀鋸在前。鼎鑊具後。見英風之益露。〇吾輩當作減塑佛。不當作增塑佛。摎摎塵勞。何

絶つも、亦自ら屈するの期なし。(四)報の已まざるや、鬼哭し(五)神愁ふるも、奚ぞ相安んずるの日あらんや。〇俗氣骨に入れば、即ち刀を呑みて(六)腸を刮り、灰を飮みて胃を洗ふも、俗態の益々(七)呈するを覺ゆ。(八)正氣靈を效せば、即ち(九)刀鋸前に在り、(一〇)鼎鑊後に具はるも、英風の益々露はるゝを見る。〇吾輩當に塑佛を作り減ず(一一)べし。當に塑佛を作り增すべからず。摎摎たる塵勞、(一二)何ぞ嘗て我を摎さん。只是れ(一三)心蜂の塵勞窟中に攢入するのみ。〇琴に于て道機を得、棋に于て兵機を得、(一四)卦に于て(一五)神機を得、藥に于て仙機を得。(一六)〇相讓るは遐く唐虞を思ひ、(一七)戰爭は大に楚(一八)漢を笑ふ。夢中の蕉鹿(一九)猶ほ眞に、覺後の蓴鱸(二〇)一幻なり。

(一) 貧にして金穀を積み蓄へんとしてなげくも積み蓄ふるの能なきをいふ (二) 作りたる詩文の風雅ならざるをいふ (三) 天柱折れ地維絶つこと、天地に變動あるをいふ (四) 報は報復にて、怨を報じ仇を報ずることの已まざるをいふ (五) 報復して已まざるが爲めに鬼神之を愁へて哭するなり (六) 刀を呑みて汚れたる腸をけづり取り清酒を飮み胃の中を洗ひて清くすることにてその俗氣を改むるをいふ (七) 鄙俗の態度がますます〳〵あらはれ見ゆるをいふ (八) 正大の元氣が靈妙なる效果をあらはすをいふ (九) 刀を以て人を斬り鋸を以て人をひき斬ること、刀鋸は刑罪の具にて之を以て人を斬るをいふ (一〇) 鼎鑊共に刑具、鼎鑊の中に人を入れて煮殺すをいふ (一一) 塑佛は土を以

落。天地覺多。窮況。○筍含禪味。喜坡仙玉版之參。石結清盟。受米顚袍笏之辱。○文如臨畫。曾致諧于昔人。詩類書鈔。竟沿流于今日。○緗縹遞滿。而改頭換面。茲律既湮。縹帙動盈。而活剝生吞。斯風亦墜。

貧嗟積著。無能。故兒女或悲或怨。老工

て開くこと、此は外部に深く用心して警戒する事を掃ひ去るに喩ふ（七）胸中に有する多くの塵埃を洗ひ去ること心中の汚れを去るに喩ふ（八）春時の憂愁なり（九）閨怨は女子の志を得ずして怨恨すること（一〇）天のどんよりとして雲蔽ひしづかなること（一一）雨ふりて天昏く、花のしぼみちゞまること（一二）法界は衆生の本性を指していふ、本性皆靜なること佛と異なるなし、有ゆる現法此に依りて生ず、故に法界といふ、此は法の世界にも愁ひの少からざるをいふ（一三）くるしみ困難する狀況（一四）坡仙は蘇東坡のこと、東坡は物外に超然たること仙人の如し、故に坡仙といふ、東坡劉器之を迎へ玉版和尚に參せしめ、廉泉寺に至り筍を燒きて之を食ふ、器之筍の味殊に佳なるを覺え其名を問ふ、東坡曰く玉版なり、此老師善く說法し君をして禪悅の味を知らしむと（一五）米顚は米芾なり、米芾は宋代の人、奇石を好み州廨に入り立石の頗る奇なるを見喜びて曰く、此れ以て吾拜に當つるに足ると遂に命じて袍笏を取りて之を拜す、袍笏は朝服なり、米芾朝服を着て石を拜するの厚を受くるをいふ、米芾酒を好み狂人の如し故に世人米顚といへり（一六）古人文章に對して之をそしるをいふ（一七）人の著書をうつし書くこと（一八）今日世に行はるゝ詩風にしたがふをいふ（一九）緗は帛の淺黃色なり、緗はもみぎぬ、蓋し書帙をいふ淺黃色のもみぎぬを以て之を作る故にいふ（二〇）表面のみを作り替へて自己の文とすること（二一）自己の思想を發表して文と爲すの法則既に湮り滅ぶること（二二）縹帙は青色の書籍の帙なり（二三）人の詩文を剝ぎ取りて自己の詩文とすること（二四）斯の美風のすたれ滅ぶるをいふ

（一）貧にして積著を嗟くも能無し、故に兒女或は悲み或は怨む。老いて詞賦に工なるも益なし。故に（二）篇章雅ならず風ならず。○爭の平ぎ難きや、（三）天折れ地

水。便具二四海水味一。世法不二必盡嘗一。千江月。總是一輪月光。心珠宜當二獨朗一。○面上掃二開十層甲一。眉目纔無レ可レ憎胸中滌二去數斗塵一。語言方覺レ有レ味。○愁非二一種一。春愁則天愁地愁。怨有二千般一。閑怨則人怨鬼怨。○天嬾雲沈。雨昏花蹙。法界豈少二愁雲一。石頽山瘦。水枯木

(五)心珠宜しく當に獨り朗かなるべし。○(六)面上十層の甲を掃開すれば、眉目纔に憎むべき無し。(七)胸中數斗の塵を滌去すれば、語言方に味有るを覺ゆ。○愁は一種に非らず、(八)春愁は則ち天愁へ地愁ふ。怨は千般あり。(九)閑怨は則ち人怨み鬼怨む。○(一〇)天嬾く雲沈み、(一一)雨昏く花蹙る。(一二)法界豈愁雲少からん。石頽れ山瘦せ、水枯れ木落つ。天地も(一三)窘況多きを覺ゆ。○筍は禪味を含み、(一四)坡仙玉版の參を喜ぶ。石は淸盟を結び、(一五)米顚袍笏の辱を受く。○文は畫に臨むが如く、(一六)曾て詣を昔人に致す。詩は(一七)書鈔に類し、竟に(一八)流に今日に沿ふ。○(一九)緗縹邐に滿ちて、(二〇)頭を改め面を換へ、(二一)弦律既に湮る。(二二)標帙動もすれば盈ちて、(二三)活剝生吞し、(二四)斯風亦墜つ。

(一) 父兄の愛玩せしものは一石一樹の微と雖も人に與ふべからざるをいふ　(二) 一勺の水は少けれども四海の水と同一の水の味を具ふるものなり　(三) 世上の生活の法は必ずしも盡く嘗めずとも少しく嘗むれば餘は推して知るべし、卽ち皆同一の法を具ふればなり　(四) 多くの江水に映ずる月はもとは一輪の月の光の處々にうつるのみ、同一のものなりとの意　(五) 心の淸朗にして光明なること珠の如きをいふ　(六) 面上に着けたる十重の甲冑を掃ひ去り

傀。還ニ我爲レ之。大地衆生。從ニ渠咲罵一。〇三從成レ名。咲ニ范蠡一。碌碌浮生。縱ニ扁舟一。忘ニ却五湖風月一。〇一朝解レ綬。羨ニ淵明一。飄飄遺レ世。命ニ巾車一。歸來滿架琴書。〇人生不レ得レ行ニ胸懷一。雖ニ壽百歲一猶レ夭也。〇棋能避レ世。睡能忘レ世。棋類ニ耦耕之沮溺一。去レ一不可。睡同ニ禦レ風之列子一。獨往獨來。

烈なる心腸に換へて野趣を得ること　(四)　言語をすべくゝりて維持すること　(五)　三昧は奥妙の處なり、此は眼が種々の物を自由に見る奥妙のはたらきを具ふること　(六)　戸を閉ぢて人に交らず避くること　(七)　惡心の起るを防ぎて精神の修養を爲すこと　(八)　その場所に在るからくりの人形は、我が爲すまゝに使はるゝをいふ　(九)　渠は彼に同じ、人の咲ふにまかせ人の罵るにまかせて之に干與せざること　(一〇)　范蠡は楚の人、楚より越に從ひ、越より齊に從り、陶に從り、その名を成せり　(一一)　碌々は小石のごろ〳〵横たはるが如く、主用を爲さず、かりの生活を爲しその身は小舟の往くまゝに任かせ江湖をわたるが如くなり　(一二)　五湖は胥湖、如湖、桃湖、隔湖、太湖なり、五湖の風月の美景を忘れて浮生にあくせくするをいふ　(一三)　陶淵明彭澤の縣令となること八十餘日、一旦印綬を解き官を辭して鄕に歸れり　(一四)　巾車は車をよそほひ車の仕度を命ずること　(一五)　書架に滿つる程多くの書籍と琴とあるをいふ　(一六)　我が心に抱持する意見　(一七)　年少くして死すること　(一八)　二人相並びて一耕作せし、長沮と桀溺となり、論語に見ゆ、皆世を避けし隱者なり　(一九)　二人ならざれば用を成さず、故に一人を去れば棋を爲すべからず　(二〇)　列子は風に乘りて天を飛行せること莊子に出づ　(二一)　獨り往き獨り來るが如く睡ることは一人にて自由を得るなり

以ニ一石一樹一與レ人者。非ニ佳子弟一。〇一句

一石一樹を以て(一)人に與ふる者は、佳子弟に非らず。〇(二)一句の水は、便ち四海の水味を具ふ、(三)世法必ずしも盡く皆めず。(四)千江の月は、總て是れ一輪の月光、

石怪常疑虎。雲間卻類僧。○大豪傑舍己爲人。小丈夫因人利己。○一段世情。全憑冷眼觀破。幾番野趣。半從熱腸換來。○識盡世間好人。讀盡世間好書。看盡世間好山水。○舌頭無骨。得言句之總持。眼裡有筋。具遊戲之三昧。○羣居閉戶。獨坐防心。○當場傀儡

石怪常に虎かと疑はれ、雲間却て僧に類す。○大豪傑は己を舍てて人の爲にし、小丈夫は人に因りて己を利す。○一段の世情は、全く冷眼に憑りて覷破(一)し、幾番の野趣(二)は、半ば熱腸より換へ來る。○世間の好人を識り盡し、世間の好書を讀み盡し、世間の好山水を看盡す。○舌頭骨なくして、言句の總持を得、眼裡筋ありて、遊戲の三昧(五)を具ふ。○羣居には戶(六)を閉ぢ、獨坐には心(七)を防ぐ。○當場(八)の傀儡は、我が之を爲すに邏せ、大地の衆生(九)は、梁の喉囀に從ふ。○三たび徙り(一〇)て名を成し范蠡を哾ふ。碌碌たる浮生扁舟に縱せ、五湖の風月を忘却す。○一朝(一一)綬を解き淵明を羨み、飄飄(一二)として世を遣れて巾車(一四)を命じ、歸り來れば滿架(一五)の琴書(一三)あり。○人生胸懷(一六)を行ふを得ずんば、壽百歲と雖も猶ほ夭(一七)するがごとし。○棋能く世を避け、睡能く世を忘る。棋は耦耕の沮溺(一八)に類し、一を去るも(一九)不可なり。睡は風に御する(二〇)の列子に同じく、獨り往き獨り來る(二一)。

㊀ 冷靜なる眼力によりて、世情をうかゞひ過すをいふ、覷破は奥底まで見透すこと　㊁ 田舍びたる趣味　㊂ 親

如二潮奔一。○詩書乃聖賢之供案。妻妾乃屋漏之史官。○強項者未三必爲二窮之路一。屈レ膝者未三必爲二通之媒一。故銅頭鐵面君子。落得做二個君子一。奴顏婢膝小人。枉了做二個小人一。○有二仙骨一者。肉亦能飛。無二眞氣一者。形終如レ槁。○一世窮根。種在二一捻傲骨一。千古笑端。伏二于幾個殘牙一。

古の笑端は、(二二)幾個の殘牙に(二三)伏す。

(一) 我の眼識の明なること日月の如きをいふ (二) 霹靂は鳴り轟くことの烈しき雷、その車輪の盛なること雷の如きをいふ (三) その水の飛散する水玉は珠の如きをいふ (四) その水の瀉ぎ下ること練絹を引きたるが如きをいふ (五) 瀑布の響く音は琴の如く清き聲なり (六) 神仙が我を誘ひて神仙となすべきをいふ (七) 瞞心は瞞着心なり、瞞着する心を以て自己の精神を昧ますをいふ (八) 我の心の中より鬼の如き怪しきばけもの、出で來るをいふ (九) 佳人は美人なり、此は姮娥が月中に奔りて入りたるをいふ (一〇) 騷客は風雅なる人なり (一一) 詩經及び書經は古の聖賢より供せられたる公案の如きものなりとの意 (一二) 屋漏は室の西北の隅なり、此處は神を祀る所にて人の常に居らざる暗室なり、妻妾が隱密の處に在りてその事を知ること、記錄官の事を記するが如し (一三) 項はうなじなり、項の骨の強くして頭を下げざる剛直の者 (一四) 剛直必ずしも困窮するの路とならざること (一五) 膝を屈して人に媚ぶるもの必ずしも立身出世の仲介とならざるをいふ (一六) 頭の固きこと銅の如く、面の皮の固きこと鐵の如きこと、剛直にして強硬なるに喩ふ (一七) 奴の顏の如くこびへつらふ顏色をなし、婢の膝の如く人に屈するをいふ (一八) 仙人は能く空中を飛行す故に肉も亦飛ぶかと思はる (一九) 眞成の元氣なきもの (二〇) 困窮する根源 (二一) その種子は一ひねり程の少しの傲慢なる骨にあるをいふ (二二) 千歲の下まで笑ひの根本となるものをいふ (二三) 殘りたる齒牙、此は少しばかりの言語がその基を爲すをいふ

有包天包地包千古包來今之識。必有驚天驚地。驚千古驚來今之才。必有破天破地。破千古破來今之膽。

骨なるものとして人を疑はざるをいふ　(一九)萬世まで朽ちざる名文を作ること　(二〇)此の識と才と膽とあれば能く言を立つるを得べきをいふ

聖賢爲骨。英雄爲膽。日月爲目。霹靂爲舌。○瀑布天落。其噴也珠。其瀉也練。其響也琴。○平易近人。會見神仙濟度。瞞心昧己。便有鬼怪出來。○佳人飛去還奔月。騷客狂來欲上天。○涯如沙聚。響

聖賢を骨と爲し、英雄を膽と爲し、(一)日月を目と爲し、(二)霹靂を舌と爲す。○瀑布の天より落つるや、(三)其噴くや珠、(四)其瀉ぐや練、(五)其響や琴なり。○平易にして人に近づけば、會ず(六)神仙の濟度を見ん。(七)瞞心己を昧せば、便ち(八)鬼怪の出で來るあり。○(九)佳人は飛び去りて還た月に奔り、(一〇)騷客は狂ひ來りて天に上らんと欲す。○涯は沙の聚るが如く、響は潮の呑むが如し。○(一一)詩書は乃ち聖賢の供案、妻妾は乃ち(一二)屋漏の史官なり。○(一三)強項の者未だ必ずしも(一四)窮の路と爲らず。膝を屈(一五)する者未だ必ずしも通の媒と爲らず。故に(一六)銅頭鐵面の君子は、落得て個君子と做り、(一七)奴顏婢膝の小人は、枉げ了りて個小人と做る。○(一八)仙骨ある者は、肉亦能く飛び、(一九)眞氣なき者は、形終に燬るゝが如し。○一世の(二〇)窮根は、(二一)種一捻の傲骨に在り。千

浪。饒二他南面
百城一。花間明
月。松下涼風。
輸二我北牕一
枕一。〇人生不レ
好レ古。象鼎羲
尊。變爲二瓦缶一。
世道不レ憐レ才。
鳳毛麟角。化
作二灰塵一。〇何
以消二上天之
清風朗月一。酒
盞詩筒。何以
謝二人世之覆
雨番・雲一。閉レ門
高レ枕。〇君子
不下傲レ人以上不レ
如。不三疑レ人以二
不肖一。〇立レ言
亦何容易。必

月を消する、酒盞詩筒(一四)のみ。何を以てか人世の覆雨翻雲(一五)を謝する、門(一六)を閉ぢ枕を高くするのみ。〇君子は人(一七)に傲るに如かざるを以てせず。人を疑ふに不肖(一八)を以てせず。〇言(一九)を立つる亦何ぞ容易ならん。必ず天を包み地を包み、千古を包み來今を包むの識(二〇)あり、必ず天を驚かし地を驚かし、千古を驚かし來今を驚かすの才あり、必ず天を破り地を破り、千古を破り來今を破るの膽あらんのみ。

(一) 世の中を渡る趣味 (二) 濃厚にして色つやのあること (三) 淡泊にして名利を求めずして生活すべきをいふ (四) 一たび偉人と奇物とを見てはそれに感動して魂魄動き心驚くをいふ (五) 道上に紅色の塵埃の盛に起る繁盛の地に在ること (六) 江中に白浪の打揚ぐる水の景 (七) 南面は王侯の位に在ること、百城は百城の領地を有すること、王侯の位に在りて百城の領地を有するにまさるをいふ (八) 北牕の下に在りて枕を高くして臥する境遇よりも劣ること、是れは全く世を避けて隱遁するをいふ (九) 象鼎は象の形を刻みたる鼎、羲尊は牛の形に作りたる杯、何れも皆古器なり (一〇) 瓦及び土器の缶(ホトギ)に同じく重寶とせざるをいふ (一一) 才ある人を愛するをいふ (一二) 鳳凰の羽毛、麒麟の角、人にすぐれたる才を有するに喩ふ (一三) 上天の清き風と明朗なる月とを用ふるをいふ (一四) 酒を飲み詩を作りて風流なる遊を爲すこと (一五) 手を翻せば雲となり、手を覆せば雨となる人情の反覆常ならざるに喩ふ、謝は人情反覆常ならざる人を避けて交らざること (一六) 門を閉ぢて人と往來せず枕を高くして世を避けて臥すれば之を謝するを得べし (一七) 人を以て我に如かざるものとして人に傲り高ぶらざること (一八) 人を以て不

室。以二學術一殺二後世一。有レ如二按レ劍伏一レ兵。○讀二諸葛武侯出師表一。而不レ墮レ淚者。其人必不忠。讀二李令伯陳情表一。而不レ墮レ淚者。其人必不孝。讀下韓退之祭二十二郎一文上。而不レ墮レ淚者。其人必不友。

らふこと　(八)罪を懺悔して之を消滅すること　(九)利害は人を罪する權力を失ふをいふ　(一〇)上帝は人の命を主どる、然るに倫を尋ねて年を延ばすを得べければ上帝は人の命を主どる權利を失ふなり　(一一)理に通達する人は兵に在りて爲すべきの務を盡し結果の利害を考へざること　(一二)至誠の眞心は人爲にて作り飾らずして自然に心の底より出づるを貴ぶをいふ　(一三)必ずしも戈を操りてその室に入りて子孫を害せずとも子孫を害することは此と異ならざるなり　(一四)劍に手をかけ、兵を伏して之を殺すと異ならざるをいふ　(一五)諸葛武侯は諸葛孔明のこと、孔明名は亮、字は孔明、忠武と諡す　(一六)李密字は令伯、晉代の人、晉武帝の時地方官之を薦めて朝に仕へしむ、令伯陳情表を上りて之を辭す　(一七)韓退之名は愈、唐代の人、文章を善くす、十二郎は退之の兄の子韓老成なり、十二郎はその人の素行に因る、故にいふ　(一八)友愛の道を盡さざる人の意

世味非レ不二濃艶一。可下以二淡然一處上レ之。獨天下之偉人。與二奇物一。幸一見レ之。自不レ覺二魄動心驚一。○道上紅塵。江中白

世味(一)は濃艶(二)ならざるに非らず、淡然(三)を以て之に處すべし。獨り天下の偉人と奇物とは、幸に一たび(四)之を見て、自ら魄動き心驚くを覺えず。○道上(五)の紅塵、江中(六)の白浪は、他の南面(七)の百城に饒り、花間の明月、松下の涼風は、我が北(八)牕の一枕に輸る。○人生古を好まずんば、象鼎犧尊(九)、變じて瓦缶(一〇)と爲り、世道才(一一)を憐まずんば、鳳毛麟角(一二)、化して灰塵と作る。○何を以てか上天(一三)の清風朗

呂聖公之不レ問二朝士名一。張師高之不レ發二竊レ器奴一。韓稚圭之不レ易二持レ燭兵一。不二獨雅量過一レ人。正是用レ世高手。○花看二水影一。竹看二月影一。美人看二簾影一。○佞レ佛若可レ懺レ罪。則刑官無レ權。○尋レ仙可二以延一レ年。則上帝無レ主。○達人盡二其在一レ我。至誠貴レ于二自然一。○以二貨財一害二子孫一。不二必操一レ戈入レ

呂聖公（一）の朝士の名を問はず、張師高の器を竊む奴を發かず、韓稚圭（二）の燭を持する兵を易ざるは、獨り雅量（三）の人に過ぐるのみならず、正に是れ世を用ふる高手なり。○花には水影（四）を看、竹には月影（五）を看、美人には簾影（六）を看る。○佛に佞し（七）若し罪を懺す可ければ、則ち刑官（八）權なし。○仙を尋ねて以て年を延す可ければ、（九）則ち上帝主なし。（一〇）○達人は其の我に在るを盡し、（一一）至誠は自然を貴ぶ。（一二）○貨財を以て子孫を害すれば、（一三）必ずしも戈を操りて室に入らず。○學術を以て後世を殺さば、（一四）劍を按じ兵を伏するが如きあり。○諸葛武侯の出師表（一五）を讀みて、涙を墮さざる者は、其人必ず不忠なり。李令伯の陳情表（一六）を讀みて、涙を墮さざる者は、其人必ず不孝なり。韓退之の十二郎（一七）を祭る文を讀みて、涙を墮さざる者は、其人必ず不友なり。（一八）

（一）呂聖は名は蒙正、宋の河南の人、朝士あり、蒙正を毀謗す、蒙正知らざるまねしてその名を問はず、以下皆雅量人を容せる例　（二）韓稚圭名は琦、宋の代の人、宰相と爲る、人と爲り寛仁、朝廷の爲に倚頼せらる　（三）正しくして度量の大いなること　（四）花を看るには花の水にうつれる影を看るをいふ　（五）竹を看るには竹の月光によりて地にうつれる影を看るなり　（六）美人を見るには美人の影の簾にうつれる處を看るべしとなり　（七）佛にこびへつ

我輩寂ニ處牕下。視ニ一切人世。俱若ニ蠛蠓嬰鬼。不レ堪レ寓レ目。而有ニ一奇文怪說。目數行下。便狂呼叫絕。令ニ人喜。令ニ人怒。更令ニ人悲。低回數過。床頭短劍。亦嗚嗚作ニ龍虎吟。便覺人世一切不平。俱付ニ煙水。集ニ奇第八。

卷八

奇

我輩牕下に寂處し(一)、一切の人世を視るに、俱に蠛蠓嬰鬼の若し(二)。目を寓するに堪へず、而して一の奇文怪說有れば、目數行下り(三)、便ち狂呼叫絕し(四)、人をして喜ばしめ、人をして怒らしめ、更に人をして悲ましむ。低回すること(五)數過、床頭の短劍、亦嗚嗚(六)として龍虎の吟を作す(七)。便ち覺ゆ人世一切の不平、俱に煙水に付するを(八)。奇第八を集む。

(一) 物寂しく坐すること (二) 蠛蠓は小蟲の名、雨降らんとするとき群飛して路を遮ぐ蚋の種類なり、嬰鬼は朝に生れて夕に死す、蜉蝣の類なり (三) 數行を一時に見通すこと (四) 大聲にて呼ばり叫ぶこと (五) 低回はためらひて進む能はざること (六) 叫び呼ぶ聲なり (七) 龍や虎の叫び聲を發するが如き聲を出すこと (八) もや靄と水とに付するは不平の念の跡かたなく消え失すること

聰或剪葉。或栽草作字。夜臥識罪。令一日風流瀟散之過。不致墮落。○快欲之事。無如饑飡。適情之時。莫過甘寢。求多于清欲。即侈汰亦茫然也。○客來花外茗烟低。共銷白晝。酒到梁間歌雪繞。不負清尊。○雲隨羽客。在瓊臺雙闕之間。鶴唳芝田。正桐陰靈虛之上。

て罪(二)を識ひ、一日風流瀟散(三)の過をして、墮落を致さざらしむ。○快欲の事は、饑(四)飡に如くは無く、適情(五)の時は、甘寢(六)に過ぐるは莫し。清欲(七)に多きを求むれば、即ち侈汰(八)亦茫然たり。○客來りて花外(九)茗烟低く、共に白晝(一〇)を銷し、酒到りて梁(一一)間歌雪繞り(一二)、清尊に負かず。○雲は羽客(一三)に隨ひて、瓊臺雙闕(一四)の間に在り、鶴は芝田(一五)に唳いて、正に桐陰靈虛(一六)の上にあり。

(一) 花の手入れを爲すこと (二) 一日の中に爲したる罪を識悔すること (三) 風流にしてさらりとして閑散に日を送ること (四) 饑ゑたる時に食物を食ふこと (五) 我の心情に愉快に感ずること (六) 充分に滿足するまで寢ぬること (七) 饑飡甘寢は清き欲なり (八) 奢侈なるおごりを爲すことの過ぐること、此は餘り多きに過ぐればぼんやりとするをいふ (九) 花の咲けるあたりに茶を煮る烟のちら〳〵たなびくこと (一〇) 茶を喫りて共に白晝の時間を暮すこと (一一) 屋梁のあたりに歌を唱ふる聲のめぐり響くをいふ (一二) 歌を唱へて樂むこと、清き酒樽に對して愧づる所なきをいふ (一三) 羽客は羽翼ありて空中を飛ぶ人、即ち神仙のこと (一四) 玉を以て飾りたる臺、兩つの相並べる門闕 (一五) 芝田は崑崙山の第九層に在りて靈芝の生ずる田、仙界なり (一六) 梧桐の陰の神靈なる所

自挾。無二導魚鳥親一レ人。○清齋幽閒。時時暮雨。掩二梨花一。冷句忽來。字字秋風吹二木葉一。○海内懇懃。但讀二停雲之賦一。目中寥落。徒歌二明月之詩一。○生平願レ無レ恙者四。一曰青山。一曰故人。一曰藏書。一曰名卉。○聞二暖語一。如レ挾レ纊。聞二冷語一。如レ飲レ冰。聞二重語一。如レ負レ山。聞二危語一。如レ壓レ卵。聞二溫語一。如レ佩レ玉。聞二益語一。如レ贈レ金。

が如く、重語(一七)を聞けば山を負ふが如く、危語(一八)を聞けば卵を壓するが如く、溫語(一九)を聞けば玉を佩ぶるが如く、益語(二〇)を聞けば金を贈らるゝが如し。

(一) 自由に遊び歩く仙人 (二) 靜かに寂しき雲の幾片を旅行の仕度の中に收むること、即ち浮雲のたなびく景を見るを旅行の樂となすをいふ (三) 半床を照らす明月を以て枕と敷物とのある寢床に供すること、寢ながら明月の景を賞するをいふ (四) 落々は小石の相合はざるが如く相合はざる貌 (五) 寒冷の風及び寒き霜の如く凜然として犯すべからざる嚴格の態度を持つこと (六) 魚や鳥までが人に親しみ來る程に親み易き所あるべからずとなり (七) 清き書齋を閉ぢて齋中閑靜なること (八) 時々暮方の雨が梨の花にふりかゝるをいふ (九) 物寂しき趣ある詩句の忽ち浮び來ること (一〇) 詩の字々皆秋風が木の葉を吹くが如きすさまじき趣あるをいふ (一一) 懇懃はねんごろに丁寧にすること (一二) 陶淵明に停雲の詩四首あり、停雲は親友を思ひ慕ふこと (一三) 目に見ゆる限り物寂しきこと (一四) 赤壁の賦にも誦二明月之詩一とあり、蓋し詩經陳風月出の詩か (一五) 深切にして慈愛ある言葉にて綿を挾むが如く暖みを感ずるをいふ (一六) 暖語の反對にて不深切にして慈愛なき言 (一七) 重々しくして輕からざる言語 (一八) 危語は高峻なる言語 (一九) 溫語は溫和なる言語 (二〇) 我が身を益する言語

旦起理レ花。午

旦に起きて花を理め、午憩或は葉を剪り、或は草を植り字を作り、夜に臥し

簾捲二八牕一。面面雲峰送レ碧。塘開二半畝一。瀟湘煙水澗レ清。○雲衲高僧。泛レ水登レ山。或可二借以點綴一。如必蓮座說レ法。則詩酒之間。自有二禪趣一。不下敢學二苦行頭陀一以作中死灰上。

の木葉の清き徨の頃　（一七）もやのかゝりたるつたに月の掛りて映ずるをいふ　（一八）瀑布の落つること虹の飛べるが如きをいふ　（一九）八方に在る牕にかゝれる簾を捲き上ぐること　（二〇）方々に在る雲の邊に聳ゆる山々は碧色を送り來ること　（二一）池塘半畝を開きて水を通ずること　（二二）瀟湘の茫然として霞のかゝれる水に清き景色のうつるをいふ　（二三）雲衲は雲水の僧、高僧は高德の僧　（二四）蓮華の座に上りて佛法を說くをいふ　（二五）艱難辛苦して修行する僧侶のこと　（二六）欲心の起らざること冷くなりたる灰の如きをいふ

遨遊仙子。寒雲幾片。束二行裝一。高臥幽人。明月半床。供二枕簟一。○落落者難レ合。一合便不レ可レ分。欣欣者易レ親。乍親忽然成レ怨。故君子之處レ世也。寧風霜

（一）遨遊の仙子、（二）寒雲幾片行裝を束し、高臥の幽人、明月半床枕簟に供す。○（四）落落たる者は合ひ難し、一たび合へば便ち分つべからず。（三）欣欣たる者は親み易し。乍ち親めは忽然怨を成す。故に君子の世に處するや、寧ろ（五）風霜自ら挾むも、寧ろ（六）魚鳥の人に親む無かれ。○（七）淸齋幽に閉づ、（八）時時暮雨梨花を掩ふ。（九）冷句忽ち來り、（一〇）字字秋風木葉を吹く。○（一一）海內慇懃、（一二）但停雲の賦を讀む。（一三）日中寥落し、（一四）徒明月の詩を歌ふ。○生平恙無きを願ふ者四、一に曰く青山、一に曰く故人、一に曰く藏書、一に曰く名草。○（一五）暖語を聞けば纊を挾むが如く、（一六）冷語を聞けば水を飲む

或白雲可ㇾ庭。于㆓斯時㆒也。把ㇾ臂促ㇾ膝、相知幾人。諧語雄談、快心千古。○疎簾清簟。銷㆓白晝㆒惟有㆓棋聲㆒。幽逕柴門、印㆓蒼苔㆒只容㆓屐齒㆒。○落花慵ㇾ掃、留襯㆓蒼苔㆒。村醸新蒭、取燒㆓紅葉㆒。○幽徑蒼苔。杜ㇾ門謝ㇾ客。綠陰清晝、脫ㇾ帽觀ㇾ詩。○煙蘿掛ㇾ月、靜聽㆓猿啼㆒。瀑布飛ㇾ虹。開觀㆓鶴浴㆒。○

り、(一〇)幽徑柴門、(一一)蒼苔に印し只屐齒を容る。(一二)○落花掃ふに慵く、(一三)留めて蒼苔に襯し、(一四)村醸新蒭、取りて紅葉を燒く。(一五)○幽徑蒼苔、門を杜ぎて客を謝し、(一六)綠陰清晝、帽を脫して詩を觀る。(一七)○煙蘿月を掛け、靜に猿の啼くを聽き、(一八)瀑布虹を飛ばして、閑に鶴の浴するを觀る。(一九)○簾八牕を捲けば、(二〇)面面の雲峰碧を送り、(二一)疇畝を開けば、瀟湘の煙水清を添す。(二二)○雲衲高僧、(二三)水に泛び山に登れば、或は借りて以て點綴すべし。如し必ず(二四)蓮座法を說けば、則ち詩酒の間、自ら禪趣あり、敢て(二五)苦行の頭陀を學びて以て(二六)死灰と作らず。

(一) 夕陽の照らすきざきのあたり (二) 明月の入り來る簾をかけたる格子窓 (三) 竹林の下にて杯を相傳へて酒宴を開くこと (四) 友人と手を取りかはし膝をにぢりて進み出づること (五) 相互に心を知れる親密の友數人 (六) 諧語は戲れ言をいふこと、雄談は雄壯なる談論を爲すこと (七) 千古以來になき愉快なることなり (八) 疎簾はまばらなる簾、清簟は清き敷物 (九) 白晝の時間をつぶすに圍碁を以てするをいふ (一〇) 幽徑は奧深き小路、柴門は柴折戶の門 (一一) 蒼々とした苔の上に下駄の齒の跡をつくること (一二) 落ちたる花を掃ひ去るに面倒がること (一三) 靑々したる苔と落花とを相對着せしむること、襯は裏のある衣服なり、故に表と裏と相對着するの意なり (一四) 村里にて釀したる新酒を飮むおりに紅葉を燒くこと (一五) ふくぶかき小路にある靑き苔のむしたる路 (一六) 綠葉

自當ㇾ效三蛇行于二郊外一。蓋炎涼世態。本是常情。故人所二浩嘆一。惟宜ㇾ付二之冷咲一耳。○渓畔輕風。沙汀印月。獨往開行。背喜ㇾ見二漁家咲傲一。松花釀ㇾ酒。春水煎ㇾ茶。甘ㇾ心藏ㇾ拙。不三復問二人世興衰一。○手撫二長松一。仰視二白雲一。庭空鳥語。悠然自欣。

或夕陽籬落。或明月簾櫳。或雨夜聯ㇾ榻。或竹下傳ㇾ觴。或青山當ㇾ戶。

をかまびすしくし爲にすること (四) 心の淸きこと鏡の如く明かなる瀟湘の月の如きをいふ、鑑底の眩は俗語、的に同じ (五) 精神の靜かに淸きこと、禪を爲すに當りては太華の秋の如きをいふ、太華は太華山にて、太華山のあたりの秋の景をいふ (六) 鳥の鳴くも名花の開くも皆四時の詩歌を吟詠するに供す (七) 淸き泉の流れ白き石の峙つ景は深く之を好みて一生の病を成せるをいふ、膏肓は不治の病なり (八) 嘲々はもと鳥の鳴く聲、此は舌の元にて茶の味を旨く感ずるをいふ (九) 翰は筆なり、筆を以て詩を書くをいふ (一〇) 月の前の處々に詩題と爲すべきものあり (一一) 漢の翟公廷尉と爲る、賓客門に滿つ、廢せらるゝに及んで門外雀羅を設くべしと、人の出入なき故に門前に雀を捕る羅を設けて雀を捕るを得べし (一二) 蘇秦六國の相と爲るに及んで、嫂蛇行匍伏し自ら跪いて謝す、蛇行は蛇の行くが如く地を掩うてゆる〳〵行くこと (一三) 炎は權勢の盛んなること、涼は權勢の衰へて屛息すること (一四) 權勢を失ひて大に歎息するをいふ (一五) 沙原の水際に月の水にうつる景なり (一六) 獨り行きしづかにゆる〳〵散歩すること (一七) 漁父の家が相笑ひ相傲れるさま (一八) 心に滿足して自己の術の拙きを識めかしてあらはさゞること

或は夕陽の籬落、或は明月の簾櫳、或は雨夜榻を聯ね、或は(三)竹下觴を傳へ、或は(一)青山戶に當り、或は(二)白雲庭に可し。斯時に于いてや、臂を把り(四)膝を促し、(五)相知幾人、(六)謔語雄談すれば、(七)快心千古なり。○(八)疎簾淸簟、白晝を銷すに(九)惟棋聲あ

夏日蟬聲太煩。則弄簫隨其韻轉。秋冬夜聲寥颯。則操琴一曲咏之。○心淸鑑底瀟湘月。骨冷禪中太華秋。○語鳥名花。供四時之嘯咏。淸泉白石。成一世之膏肓。○掃石煮泉。舌底嘲嘲茶味。開牕染翰。眠前處處詩題。○權輕勢去。何妨張雀羅于門前。位高金多。

夏日蟬聲太だ煩はしければ、則ち簫を弄して其韻轉（一）に隨ふ。秋冬夜聲寥颯（二）なれば、則ち琴一曲を操りて之を咏（三）しくす。○心は淸し鑑底（四）瀟湘の月、骨（五）は冷かなり禪中太華の秋。○（六）語鳥名花、四時の嘯咏に供し、淸泉白石、一世の膏肓（七）を成す。○石を掃ひて泉を煮れば、舌底嘲嘲（八）たる茶味なり。牕を開いて翰（九）を染むれば、眠前（一〇）處處詩題なり。○權輕く勢去れば、何ぞ雀羅（一一）を門前に張るを妨げん。位高く金多ければ、自ら當に蛇行（一二）を郊外に效ふべし。蓋し炎涼（一三）の世態は、本と是れ常情、故に人の浩嘆する所、惟宜しく之を冷咲に附すべし。○溪畔の輕風、沙汀（一五）の印月、獨往閒行（一六）して、嘗て漁家の咲傲（一七）を見るを喜ぶ。松花酒を醸し、春水茶を煎、心に甘んじて拙を藏し、復た人世の興衰を問はず。○手に長松を撫し、仰いで白雲を視る、庭空（一八）しくして鳥語り、悠然として自ら欣ぶ。

（一）蟬の聲の風韻ある聲に隨ひてその調子を合せること　（二）夜に因りてその聲の物寂しきこと　（三）咏はその聲

其塵汚。雅致如ニ蘊レ玉含レ珠。日月轉嫌ニ其洩露一。○焚レ香啜レ茗。自是吳中習氣。雨聰却不レ可レ少。○茶取ニ色臭倶作一。行家偏嫌ニ味苦一。香須ニ冲淡一爲レ雅。幽人最忌ニ烟濃一。○朱明之候。綠陰滿レ林。披頭散髮。箕踞白眼。坐ニ長松下一。蕭騷流レ觴。正是宜ニ人疎散一之場。○讀レ書夜坐。鐘聲遠聞。梵响相和。從ニ林端一來。洒ニ洒聰儿上一。化作ニ天籟虛無一矣。

疎散(一八)に宜しきの場なり。○書を讀みて夜坐す、鐘聲遠く聞え、梵响(一九)相和し、林端より來り、聰儿の上に洒洒たり、(二〇)化して天籟虛無(二一)と作る。

(一) 世に名聞ゆる無くして魚を釣る隱者となること (二) 草の枯れ衰ふること (三) 張志和は唐の高士、金華の人、江湖に居り、自ら烟波釣徒と稱す、陸天隨は唐の陸龜蒙なり、龜蒙、江湖散人とも天隨子とも號せり、隱居して仕へず (四) 髩絲は鬢の毛の並れて絲の如くなるをいふ (五) 坐禪する時に用ふる椅子なり (六) 白香山は唐の白樂天なり、白樂天、名は居易、字は樂天、香山と號す、唐の有名なる詩人にて廬山に隱る (七) 雲の上に臥し、雪を喰ひて生活するが如く極めて高尚にして清白なるをいふ (八) 風雅なるおもむきは、珠玉をつゝみ含みたるが如く外にあらはさずして內につゝむこと (九) その光明をもらしあらはすこと (一〇) 吳は今の江蘇省なり、吳中の風俗に香を焚き茶を飲むの習あるなり (一一) 雨の降る時には香を焚き茶を啜ることの闕くべからざるをいふ (一二) 茶道に精通したる人をいふ (一三) 香のあつさりとして濃厚ならざること (一四) 幽人は世をかくれて閒靜にくらす人、烟の濃厚にして淡泊ならざる景を忌むなり (一五) 朱明は夏の候なり (一六) 脚を展して箕の如くして坐し、白き眼を以て俗人を視ること (一七) 蕭騷は蕭條に同じ、物寂しきとき觴を水に流して之を飲みて樂むこと (一八) 疎散は疎放にして閑散なり (一九) 經文を讀む聲と鐘の聲と相和するをいふ (二〇) 洒々はさつぱりとして心持の爽快なること (二一) 天籟は風の聲となること、虛無は後にはその聲の全く消えて無きこと

書當ㇾ作二是觀一。○古之君子。無ㇾ友則友二松竹一。居無ㇾ友則友二雲山一。余無ㇾ友則友下古之友二松竹一。友二雲山一者上。

虛空なるが故に物を受けて高峻を爲す、水は充實するが故に流るゝを得、充實せざれば流れず （一四）書を讀む時に虛心なれば理を受け納るべく、思想充實すれば活用を爲すべし （一五）松竹を相手にして之を觀て以て樂と爲すこと （一六）雲霞山岳の長を觀て樂と爲すをいふ （一七）是は古の君子を以て我が友とするをいふ

買ㇾ舟載ㇾ書。作二無名釣徒一。毎當二草衰月冷。鐵笛聲清一。覺下張志和陸天隨去ㇾ人未ㇾ遠。○今日鬢絲禪榻畔。茶烟輕颺落花風。此趣唯白香山得ㇾ之。○清姿如二臥ㇾ雲喰ㇾ雪。天地盡愧二

舟を買ひて書を載せ、無名の釣徒と作り、毎に草衰へ月冷かに、鐵笛聲清きに當りて、張志和陸天隨人を去る未だ遠からざるを覺ゆ。○今日鬢絲禪榻の畔、茶烟輕く颺る落花の風、此趣唯白香山之を得たり。○淸姿、雲に臥し雪を喰ふが如くば、天地盡く其塵汚を愧ぢん。○雅致、玉を蘊み珠を含むが如くば、日月轉た其洩露を嫌はん。○香を焚き茗を啜るは、自ら是れ吳中の習氣、雨窓却つて少くべからず。○茶は色臭倶に佳なるを取る、行家偏に味の苦を嫌ふ。香は冲淡を須つて雅と爲す、幽人最も烟の濃なるを忌む。○朱明の候、綠陰林に滿つ、披頭散髮、箕踞白眼、長松の下に坐し、蕭騷觴を流す、正に是れ人の

法以消㆗艷思㆖。夏夜宜㆓閑談㆒。宜㆓臨㆑水枯坐㆒。宜㆘聽㆓松風冷韻㆒。以滌㆗煩襟㆖。秋夜宜㆓豪遊㆒。宜㆑訪㆓快士㆒。宜㆘談㆑兵說㆑劍。以除㆗蕭瑟㆖。冬夜宜㆓茗戰㆒。宜㆑酌。須㆑說㆓三國水滸金瓶梅諸集㆒。宜㆘著㆓竹肉㆒。以破㆗孤岑㆖。○玉之在㆑璞。追琢則珪璋。水之發㆑源。疏濬則川沼。○山以㆑虛而受。水以㆑實而流。讀㆑

聴きて以て煩襟(五)を滌ふに宜し。秋夜は豪遊に宜しく、快士を訪ふに宜しく、兵を談じ劍を說きて以て蕭瑟(六)を除くに宜し。冬夜は茗戰に宜しく、酌むに宜しく、須らく三國(七)、水滸、金瓶梅諸集を說くべく、竹肉(八)を著けて以て孤岑を破るに宜し。○玉の璞(九)に在るや、追琢(一〇)すれば則ち珪璋(一一)となる、水の源を發するや、疏濬(一二)すれば則ち川沼となる。○山は虛(一三)を以て受け、水は實を以て流る。書を讀む當に是觀(一四)を作すべし。○古の君子は、友無ければ則ち松竹(一五)を友とし、居るに友無ければ則ち雲山(一六)を友とす。余は友無ければ則ち古の松竹を友とし雲山を友とする者(一七)を友とす。

(一) 苦心して詩を作ること (二) なまめかしき情欲の念を消し亡ぼすをいふ (三) 枯坐は兀坐と同じく、動かずして坐することと枯木の如きをいふ (四) 松風の吹く物寂しきおもむき (五) 煩悶したる心持を洗ひ去ること (六) 物寂しきこと (七) 三國志は元の羅貫中の作にて陳壽の三國志に原づき小說的に書きたるもの、水滸傳は元の施耐庵の撰、金瓶梅は明代の小說 (八) 竹は笛にて肉は人の歌を唱ふをいふ、その聲高くして孤り聳ゆる岑をも破るべきをいふ (九) 未だ磨かざる玉 (一〇) 追琢は彫琢に同じ、玉をうちみがくこと (一一) 珪は玉を以て作りたるしるしの物、璋は半圭の玉なり、珪と同じく瑞佳の物となす (一二) 水の通ずる路を疎通して之を深くすること (一三) 山は

澂都忘妄念。

盡絕。○蔡中郎傳情思逶迤。比西廂記。興致流麗。學他描神寫景。必先細味沈吟。如日寄趣本頭。空博風流種子。○夜長無賴。徘徊蕉雨半牕日永多閒。打疊桐陰一院。○雨穿寒砌。夜來滴破愁心。雪洒虛牕。曉雲散開淸影。

（一）澄みわたる水波の景と古木の蒼翠たる景と（二）人は閒散にして景は奥ゆかしく靜かなるをいふ（三）徒々筆硯を設くるは、田舍的なる裝飾なるを感ずるをいふ（四）琴や瑟が側に居る侍御に在りて安靜にして和好ならざるなし、此は詩經の鄭に在る句なり（五）側に琴瑟を陳列すれば之を彈ぜざるも自らその天然の趣味を得るなり（六）王羽産は王徽の少字なり、人は王羽産の立派なる人なるかを想像す、此は長松の下には淸風あるべきを想像すると同じく王羽産は名家なればその佳なるを想像するのみ（七）古桐を以て作りたる琴（八）蔡中郎は蔡邕、漢代の人、中郎將となる（九）その心情意思の自ら滿足してゆつたりとしたるをいふ（一〇）西廂記は、元曲の名、王實甫の纖麗なり（一一）その興味おもむきの流暢にして美麗なること（一二）他は蔡中郎傳を指す、蔡中郎傳記の精神をえがき景致を寫したるを學ばんとするは必ず先づこまかに之を味ひ、ゐちつきて之を考へざるべからずとなり（一三）おもしろき趣を託するの根本をいふ（一四）閑暇にして退屈すること（一五）芭蕉に雨の滴る窓の邊にぶらりとすること（一六）打疊は安排に同じ、桐の陰に在る一院に安息するをいふ（一七）寒砌は寒冷なる石疊みしたる所（一八）物思ふ心にしたたりて心をしめらすをいふ（一九）人の居らざる窓の牕をいふ（二〇）曉け方の雲は淸き影を分散開展するをいふ

春夜宜苦吟。宜焚香讀書。宜與老僧說

春夜は苦吟に宜しく、香を焚き書を讀むに宜しく、老僧と法を說きを以て塵思（二一）を消すに宜し。夏夜は閒談に宜しく、水に臨みて枯坐（二二）するに宜しく、松風（二三）冷韻を

功名一。或治二生產一。儘自正經。爭奈天地間好風月。好山水。好書籍。了不二相涉一。豈非レ枉二却一生一。○李岩老好レ睡。衆人食罷下レ棋。岩老輒就レ枕。閲二數局一。乃一展轉云。我始一局。君幾局矣。

晚登二秀江亭一。澄波古木。使三人得二意于塵垢之外一。蓋人閑景幽。雨奇絕耳。○筆硯精良。人生一樂。徒設祇覺二村粧一。琴瑟在レ御。莫レ不二靜好一。纔陳便得二天趣一。○人想二王荊產佳一。此想下長松下當レ有二清風一耳。○月夜焚レ香。古桐三弄。便覺二萬

晩に秀江亭に登れば、澄波古木、(一)人をして意を塵垢の外に得しむ。蓋し人閑に(二)景幽にして、雨ながら奇絶せるのみ。○筆硯精良なるは、人生の一樂、(三)徒に設くるは祇に村粧なるを覺ゆ、琴瑟御に在り、靜好ならざるは莫し、纔に(五)陳ずれば便ち天趣を得。○人は王荊產(四)の佳を想ふ、此れ長松の下には當に清風あるべきを想ふのみ。(六)○月夜香を焚き、古桐三たび弄すれば、(七)便ち萬慮都て忘れ、妄念盡く絶ゆるを覺ゆ。○蔡中郎傳は、(八)情思透逦、(九)西廂記に比すれば、(一〇)興致流麗、(一一)他の神を描き景を寫すを學ぶには、必ず先づ細味沈吟せよ、如し奇趣の本頭(一二)を曰はば、空しく風流の種子を博す。○夜長くして無頼なり、(一三)蕉雨半牕に徘徊す。(一四)(一五)日永くして閒多し、桐陰一院に打疊す。(一六)○雨は寒砌を穿ちて、(一七)夜來愁心を滴破す。(一八)雪は虚牕に洒ぎて、(一九)曉雲清影を散開す。(二〇)

聲。煎茶聲。皆聲之至清。而讀書聲爲最。○曉起入山。新流沒岸。棋聲未盡。石骨依然。○松聲竹韵。不濃不淡。○何必絲與竹。山水有清音。○霜降木落時。入疎林深處。坐樹根上。飄飄黃葉點衣袖。而野鳥樹梢。飛來窺人。荒涼之地。殊有清曠之致。○世路中人。或圖

り。○松聲竹韵(三)、濃ならず、淡ならず(四)。○何ぞ必ずしも絲と竹と(五)ならん。山水清音あり。○霜降り木落つる時、疎林深き處に入り、樹根の上に坐せば、飄飄(六)たる黄葉衣袖に點じ、而して野鳥樹梢に飛び來りて人を窺ふ。荒涼(七)の地、殊に清曠(八)の致あり。○世路中の人、或は功名を圖り、或は生産を治む、盡(九)自ら正經、爭奈せん天地間の好風月、好山水、好書籍、了(一〇)に相涉らず、豈一生(一一)を枉するに非らずや。○李岩老睡を好む、衆人食罷みて棋を下す、岩老輒ち枕に就き、數局を閲みし、乃ち一たび展轉(一二)して云ふ、我始めて一局(一三)す、若幾局ぞと。

一 棋聲は棋を打つ聲 二 骨石の突出して險しきこと、石を以て骨とするが如きをいふ、依然は舊の如くにして變ぜざること 三 松の吼ゆる聲と、竹の鳴る聲となり 四 その音聲の濃濁ならず淡泊ならざる所に妙あるをいふ 五 絲は琴にて、竹は笛なり、清音は琴と笛とのみにあらずして山水にも自然の清音あるをいふ 六 木の葉のひらひらとひるがへり飛ぶこと 七 荒れはてゝ物寂しき地 八 清くしてさつぱりとしたる風致あること 九 盡は極めて盡す意、此は極めて正しき生活の道をいふなり 一〇 終に此の功名を圖り生産を治むる事に關係せざること 一一 功名を圖り生涯を治むるは一生涯を枉げて無用なる事に費すをいふ 一二 展轉は幾反りすること 一三 一たび展轉したるを以て棋局に比して一局といへるなり

而多二酒意一。一石不レ曉而多中畫意上。淡宕故也。○名利場中羽客。人人輸二蔡澤一籌。烟花隊裡仙流。個個讓二渙之獨歩一。○深山高居。爐香不レ可レ缺。取二老松柏之根枝實葉一。共擣二治之一。研二風昉一。靡二和之一。每レ焚二一丸一。亦足レ助二清苦一。○白日羲皇世。青山綺皓心。

松聲。澗聲。山禽聲。夜蟲聲。鶴聲。琴聲。棋子落聲。雨滴レ階聲。雪洒レ窓

その人の見識と趣味の高下によりて山水を觀るに高下あるをいふ 一〇 一字も文字を識らざれども詩的趣味の多き人あるをいふ 一一 淡宕は淡泊宕跌にて即ちあつさりとして欲心なく、心の寬大自由なるをいふ 一二 羽客は道士のこと、道士は老子敎の僧なり、道士にても名利を欲する俗悄あるものをいふ 一三 蔡澤は戰國時代の辯士、秦に入りて應侯に說きて之に代り宰相となる、もと名利を欲する人なれども後宰相を辭して去る、一籌はかず取り一個のこと、是は蔡澤より劣ること一等なるをいふ 一四 繁華の俗社會に在る仙人のこと 一五 王渙之は晉時代の人、晉書に、江東獨步王文度とあり文度は渙之の字なり、獨步は一時相並ぶものなくすぐれたるをいふ 一六 古き松の根と枝と實と葉との四種を取ること 一七 擣治はつき合せて香を作ること 一八 風昉は蓋し藥ならん、風昉をつき碎きて之にまぜて調合すること、靡は爆雜錯亂なり 一九 羲皇は太皇伏羲氏なり、白日の趣は伏羲氏の世の無爲にして治まれる趣あるをいふ 二〇 綺皓は四皓の一人綺里季なり、青山の趣は漢の綺里季といふ老人の世を避けて隱遁せし心の趣あるをいふ

松聲、澗聲、山禽の聲、夜蟲の聲、鶴聲、琴聲、棋子の落つる聲、雨の階に滴る聲、雪の窓に洒ぐ聲、茶を煎る聲は、皆聲の至清なり、而して讀書の聲を最と爲す。○曉に起きて山に入れば、新流岸を沒し、(二一)棋聲未だ盡きず、(二二)石骨依然た

我心。了不可取。此一境界。名最第一。○花枝送客蛙催鼓。竹籟喧林鳥報更。謂山史實錄。

遇月夜。露坐中庭。必爇香一炷。可號伴月香。○襟韻洒落。如晴雪秋月。塵埃不可犯。○峰巒窈窕。一拳便是名山。花竹扶疎。半畝何如金谷。○觀山水亦如讀書。隨其見趣高下。○人有一字不識而多詩意。一偈不參而多禪意。一句不濡

月夜に遇ひて中庭に露坐し、必ず香を爇くこと一炷(一)、伴月香(二)と號すべし。○襟韻洒落(三)たるは、晴雪秋月の如く、塵埃(四)犯すべからず。○峰巒窈窕(五)たれば、一拳(六)便ち是れ名山、花竹扶疎(七)たれば、半畝も金谷(八)に何如ぞや。○山水を觀るは亦書を讀むが如し。其見趣(九)の高下に隨ふ。○人には一字識らずして詩意多く、一偈(一〇)參せずして禪意多く、一句濡さずして酒意多く、一石曉らずして畫意多きあり、淡宕(一一)なるが故なり。○名利場中の羽客(一二)は、人人蔡澤(一三)に輸すること一籌(一四)、烟花隊裡の仙流(一五)は、個個渙之(一六)の獨步に讓る。○深山の高居には、爐香缺くべからず、老松柏の根枝實葉を取りて、共に之を搗治し(一七)、風昉を研して之に羼和(一八)せば、一丸を焚く毎に、亦清苦を助くるに足る。○白日羲皇(一九)の世、青山綺皓(二〇)の心。

(一) 一たび火を點じて香を焚くこと (二) 月光を伴ふ香の意 (三) 心持のさらりとして清きこと (四) 少しの汚れたる念慮の犯すべからざること (五) 山々の奥深きこと (六) 一の拳の如き小さき石 (七) 花樹竹林の生ひ茂りて分布すること (八) 金谷は晉の石崇の庭園にて佳美を極む、半畝の小なる處も金谷に比して劣らざるをいふ (九)

沈心未レ燼。風雨如レ晦。竹響入レ牀。此時興復不レ淺。○山非二高僧一不レ佳。不レ遠二城市一不レ佳。不レ近二林木一不レ佳。無二流泉一不レ佳。無二寺觀一不レ佳。無二雲霧一不レ佳。無二樵牧一不レ佳。○一室十圭。寒蛩聲喑。折脚鐺邊。敲レ石無レ火。水月在レ軒。燈魂未レ滅。攬衣獨坐。如レ游二皇古一。意思虛閒。世界清淨。我身

月軒に在り、燈魂未だ滅せず、攬衣（一五）獨坐するは、皇古（一六）に游ぶが如し。意思虛閒（一七）、世界清淨、我が身我が心、了に取るべからず。此の一境界、最第一と名づく。○花枝客（一八）を送り蛙鼓（一九）を催し、竹籟（二〇）林に喧しく鳥更（二一）を報ず、山史の實錄と謂ふ。

一 風起り波湧くが如き擾亂煩雜なる世の濁り汚れたるならはし 二 雲行き水流る、自然の淡泊なる情趣 三 三春は春三ケ月のこと、紙帳を張り梅花を看て風景を樂めば三春の清き夢を破ることなしの意 四 筆床にて書を書き茶竈にて茶を點ずれば我が半日の生涯を暮すを得ること、浮生は人の一生は水の上に浮べるが如く定まりなきをいふ 五 清くしてさえたる月を賞して酒を飲むこと 六 物寂しき花を慰めて詩を作ること 七 沈み衰へたる心未だ火の燼きざるが如く消滅せざること 八 風吹き雨降りて暗黑なる日光の見えざるが如きをいふ 九 高僧は高峻に作るべし 一〇 佛堂を寺といひ、道教の寺を觀といふ 一一 一室の大さ十圭あること、圭は長さ一尺二寸、十圭は一丈二尺なり 一二 寒蛩は寒き頃のこほろぎの聲なくしてをしの如きをいふ 一三 脚の折れたる茶を煮る釜のこと 一四 水に映ずる月は軒端に來り照すをいふ 一五 攬衣は衣服を收め取りて衣紋を整ふること 一六 皇古は太古に同じ、太古の時代に在るが如きをいふ 一七 心に思ふこと、空虛にして間靜なること、虛は私利私欲の念なきこと、間は雜念なきこと 一八 春は花咲ける枝客を送る 一九 夏は蛙の鳴く聲、鼓吹を催すが如きをいふ 二〇 秋は竹林に風吹く聲は林に喧しく響きわたること 二一 更は時刻を報ずること

書爲二益友一。奇畫爲二觀友一。法帖爲二範友一。良硯爲二礪友一。寶鏡爲二明友一。淨几爲二方友一。古磁爲二虛友一。舊爐爲二薰友一。紙帳爲二素友一。拂塵爲二靜友一。○掃レ逕迎二淸風一。登レ臺邀二明月一。琴觴之餘間。以歌詠。止許二鳥語花香。來二中吾几榻上一耳。

風波塵俗。不レ到二意中一。雲水淡情。常來二想外一。○紙帳梅花。休レ驚二他三春淸夢一。筆床茶竈。可レ了二我半日浮生一。○酒澆二淸苦月一。詩慰二寂寥花一。○好夢乍回。

(一五) 農夫の着る簑、漁父の用ふる網を以て農漁の爲す所を爲す　(一六) 眞實の友　(一七) 相和合する友　(一八) 我が軌範とする友　(一九) 我を磨礪する友　(二〇) 方正なる友　(二一) 相薫化する友　(二二) 紙を以て作りたるとばり、素友は、質素なる友　(二三) 琴を鼓し酒を飲みたる餘暇をいふ　(二四) 鳥の聲と花の香とが吾が椅子のあたりに來るを許すのみ、俗客の來るを許さず

(一)風波の塵俗、意中に到らず、(二)雲水の淡情、常に想外より來る。○紙帳梅花、他の(三)三春の清夢を驚かすを休め、(四)筆床茶竈、我が半日の浮生を了すべし。○酒は(五)清苦の月に澆ぎ、詩は(六)寂寥の花を慰む。○好夢乍ち回り、(七)沈心未だ燼せず、(八)風雨晦の如く、竹響林に入る。此時興復た淺からず。○山は(九)高俊に非ざれば佳ならず、城市に遠からざれば佳ならず、林木に近からざれば佳ならず、流泉無くんば佳ならず、(一〇)寺觀無くんば佳ならず、雲霧無くんば佳ならず、樵牧無くんば佳ならず。○(一一)一室十圭、(一二)寒蛩の聲暗たり。(一三)折脚の鐺邊、石を敲いて火無く、(一四)水

竈疎煙。梅月半彎。掩二映書牕殘雪一。○客到茶煙起二竹下一。何嫌三屐破二蒼苔一。詩成筆影弄二花間一。且奪謌飛二白雪一。○月有レ意而入レ牕。雲無心而出レ岫。○屛二絕外慕一。偃二息長林一。置二理亂一不レ聞。託二淸閒一自佚。松軒竹塢。酒甕茶壚。山月溪雲。農蓑漁罟。○怪石爲二實友一。名琴爲二和友一。好

無心にして岫を出づ。○外慕を屛絕し、長林に偃息し、理亂を置いて聞かず、淸閒に託して自ら佚す。松軒竹塢、酒甕茶壚、山月溪雲、農蓑漁罟。○怪石を實友と爲し、名琴を和友と爲し、好書を益友と爲し、奇畫を觀友と爲し、法帖を範友と爲し、良硯を礪友と爲し、寶鏡を明友と爲し、淨几を方友と爲し、古磁を虛友と爲し、舊爐を薰友と爲し、紙帳を素友と爲し、拂麈を靜友と爲す。○逕を掃ひて淸風を迎へ、臺に登りて明月を邀ふ。琴觴の餘閒、以て歌詠し、止ゞ鳥語花香、吾が几榻に來るを許すのみ。

(一) 閒散にして散歩すること (二) 原野に居る鳥も時に巧詐を忘れて我が伴友となりて遊ぶこと (三) 兀坐は動かずして正しく坐すること (四) 竹藪の中を吹きわたる一陣の風、一陣は一しきり通りて吹く風 (五) 梅花を照す月はその形弓を半ば引きしぼりたるが如きこと (六) 客の木履が庭園に生ずる靑き苔を踏み破るを厭はずとの意 (七) 花の間に在りて筆を弄して成りたる詩を書するをいふ (八) 詩を吟ずる聲は白雪を飛ばすが如きをいふ (九) 月が窓の中に射し入るは月意ありて吾を照らすかと思はるゝをいふ (一〇) 雲は無我無心にして山の穴より出で去るをいふ (一一) 功名富貴を慕ふの念を屛け去ること (一二) 長く連れる林の中に世を避けて休息すること (一三) 淸くして閒靜なる處に我が身を託して自ら逸樂すること (一四) 松の立てるあたりにある家屋、竹の生ずるあたりにある土堤

鳥聲。喚起半窻紅日。○天然文錦。浪吹花港之魚。自在笙簧。風激園林之好。○高客留連。花木添清疎之致。幽人剝啄。莓苔生黯淡之光。○松澗邊攜杖獨行。立處雲生破衲。竹窻下枕書高臥。覺時月浸寒氈。

染の色をわるくするをいふ 〔一一〕 澁滾は精要ならざる貌、粗末にして精要ならざること 〔一二〕 その人の人品と茶味と相適合すること 〔一三〕 高尚にして世俗をのがれ離れたる士 〔一四〕 もや霧及び泉水巖石の風景を樂しむこと 〔一五〕 磊落にしてさらりとしたる心持を有する人 〔一六〕 枕上に鳴きわたる鳥聲の聞ゆる頃に窓に紅日のさし込むをいふ 〔一七〕 天然の文錦は天然にあや錦の如く美しき景を爲すこと 〔一八〕 花の咲けるあたりの港に浪の魚を吹き然る景は是れ天然の文錦なり 〔一九〕 自然に笙簧の如き好き音を發すること、卽ち風の松を吹く聲の如き是なり 〔二〇〕 高雅なる客が永く留まりて風景を賞すること 〔二一〕 幽靜なる人が門を叩きて音づるゝをいふ 〔二二〕 莓苔は地上に生ずるこけのこと、黯淡はうすくらき貌 〔二三〕 松の木の立てる谷川のあたり 〔二四〕 雲が破れたる僧衣のあたりより起り生ずるをいふ 〔二五〕 世俗に遠ざかりて靜かに橫臥すること 〔二六〕 目の覺めたる時月色光は寒冷なる毛氈を照すをいふ

散履閑行。野鳥忘機時作伴。披襟兀坐。白雲無語漫相留。○竹風一陣。飄颺茶

(一)散履閑行すれば、(二)野鳥機を忘れて時に伴と爲る。襟を披いて兀坐すれば、(三)白雲語なく謾に相留まる。(四)○竹風一陣、茶竈の疎煙を飄颺し、(五)梅月半彎、書窻の殘雪に掩映す。○客到れば茶煙竹下に起る、(六)何ぞ屐の蒼苔を破るを嫌はん。詩成りて(七)筆影花間に弄す。且つ喜び謌ひて(八)白雪を飛ばす。(九)○月は意ありて窻に入り、雲は

丘。扣レ舷吹レ簫。好繼二東坡之赤壁一。○獲二佳文一易。獲二文友一難。獲二文友一易。獲二文僮一難。○茶中著レ料。盌中著レ果。譬如下玉貌加レ脂。蛾眉著レ黛。翻累中本色上。○煎茶非二漫浪一。要須二人品與レ茶相得一。故其法往往。傳レ于下高流隱逸有二烟霞泉石。磊塊胸次一者上。○樓前桐葉。散爲二一院清陰一。枕上

繼ぐ。○佳文を獲るは易く、文友(四)を獲るは難し。文友を獲るは易く、文僮(五)を獲るは難し。○茶中料(六)を著け、盌中果(七)を著くるは、譬へば玉貌(八)脂を加へ、蛾眉(九)黛を著け、翻りて本色(一〇)を累はすが如し。○煎茶は漫浪(一一)に非ず、要するに須らく人品(一二)と茶と相得べし。故に其法往往にして、高流(一三)の隱逸、烟霞(一四)泉石、磊塊(一五)たる胸次有る者に傳はる。○樓前の桐葉散じて一院の清陰と爲り、枕上の鳥聲、半牕(一六)の紅日を喚起す。○天然(一七)の文錦、浪、花港(一八)の魚を吹き、自在(一九)の笙簧、風、園林の松を激す。○高客(二〇)留連すれば、花木清疎の致を添へ、幽人(二一)剝啄すれば、蘚苔(二二)黯淡の光を生ず。○松澗(二三)の邊、杖を携へて獨行すれば、立つ處雲破衲(二四)に生ず、竹牕の下書を枕にして高臥(二五)すれば、覺(二六)むる時月寒氈を浸す。

(一) 李白一斗詩百篇は杜甫飲中八仙の詩の句なり　(二) 李太白が仙人の境遇と殊ならざるをいふ、丹丘は海外神仙の居る地なり　(三) 蘇東坡赤壁に遊び舷を扣きて歌ひ客簫を吹く　(四) 文友は文學の友　(五) 文僮は文學のことを知る家僮なり　(六) 茶の中に他の品料を加ふること　(七) 盌は小皿なり、小皿の中に果物を載すること　(八) 玉の如く美しき容貌にべにを加へて装飾すること　(九) 蛾の眉の如く美しき眉に眉墨を塗り加ふること　(一〇) 却りて本

來。〇浣花溪內。洗二十年遊子衣塵一。脩竹林中定二四海良朋交籍一。〇人語亦語。詆二其昧一于鉗口。人默亦默。訾二其短一于雌黃一。〇豔陽天氣。是花皆堪釀酒。綠陰深處。凡葉盡可題詩。〇曲沼荇香侵月。未許二魚窺一。〇幽關松冷巢雲。不勞二鶴伴一。

篇詩斗酒。何殊二太白之丹

の松冷かにして雲を巢ましめ、鶴の伴ふを勞せず。(一九)

㊀ 心の恍惚として定かならざると、花に醉へるが如きをいふ ㊁ 落魄は往く所合はざるをいふ ㊂ 痴狂は痴花の亂れ飛ぶこと ㊃ 春の風光の盛んなること酒に醉へるが如きをいふ ㊄ 月來りて照し塵俗の汚れを洗ひ去りて清らかならしむること ㊅ 怎生は俗語、如何に同じ、如何にして此無聊を慰めはらさんかと和ふること ㊆ 我がことは梅花に分ち與へて自ら主宰して風雅を樂しむをいふ ㊇ 甚は俗語、如何に同じ、牢騷は抑鬱不平の意、如何なる抑鬱不平のことあらん、抑鬱不平なしとの意なり ㊈ 座のあたりの好き風景は月の出づるに隨つて共に到ること ㊉ 頭巾を脫して頭の頂をあらはすこと 一一 浣花溪は四川省成都縣の西五里に在り、浣花溪は風景の佳き處なり、故に十年他に流浪する人の心を洗ふを得るなり 一二 修竹林は昔の阮籍等七人竹林の遊を爲すによりていふ 一三 竹林に遊びて四海の良き朋友等と交際することを定むるをいふ、交遊の人の名を籍に記す、故に交籍といふ 一四 その口を塞ぎて言を發せざるにくらくして、能く默るをいふ 一五 人の批評を爲すに拙なるをそしるをいふ 一六 艷陽は陽春の時季なり 一七 曲りくねりたる池沼に生ずる荇(アサザ)の花は香ばしく池沼の水清くして月之に映ずるをいふ 一八 靜かなる門のあたりに在る松は冷靜にして雲をやどらしむること 一九 鶴の之に伴ふを勞せずしてその風景足れるをいふ

(二〇)篇詩斗酒、何ぞ太白の丹丘に殊ならん。(二一)舷を扣き簫を吹く、好し東坡の赤壁に

無ニ歸處一。斷浦沈ㇾ雲。行到ニ紛紜不ㇾ繫時一。空山挂ㇾ雨。心如ニ花醉一。潦倒何妨。絶勝ニ柳狂一。風流自賞。○春光濃似ㇾ酒。花故醉ㇾ人。夜色澄如ㇾ水。月來洗ㇾ俗。○雨打ニ梨花一。深閉ㇾ門。怎生消遣。分ニ付梅花一。自主張。著ニ甚牢騷一。○對ㇾ酒當ㇾ歌。四座好風隨ㇾ月到。脫ㇾ巾露ㇾ頂。一樓新雨帶ㇾ雲

溼き海邊のあたりをいふならん　(一四)紛紜は紛亂のこと、此句意亦未だ明確ならず　(一五)溼き所の山に雨のふりかゝれるをいふ

(一)心は花に醉ふが如し、(二)潦倒何ぞ妨げん。絶だ(三)柳狂に勝り、風流自ら賞す。○(四)春光濃なること酒に似たり。花故に人を醉はしむ。夜色澄みて水の如し、(五)月來りて俗を洗ふ。○雨は梨花を打ちて深く門を閉ぢ、(六)怎生消遣せん。梅花に(七)分付して自ら主張す、(八)甚なる牢騷を著けん。○酒に對しては當に歌ふべし、(九)四座の好風月に隨ひて到る。巾を脫し(一〇)頂を露はせば、一樓の新雨雲を帶びて來る。○(一一)浣花溪內、十年遊子の衣塵を洗ひ、(一二)脩竹林中、(一三)四海良朋の交籍を定む。○人語れば亦語り、(一四)其の口を鉗するに昧きを誚る。人默すれば亦默し、其の(一五)雌黃に短なるを呰る。○(一六)豔陽の天氣、是花皆酒を釀すに堪へ、綠陰深き處、凡そ葉盡く詩を題すべし。○(一七)曲沼の荇香しく月を浸し、未だ魚の窺ふを許さず。(一八)幽關

有二不レ疎不レ密之致一。○詩瘦到レ門隣二病鶴一。淸影頗嘉。書貧經レ座如二寒蟬一。雌風頓挫。○梅花入レ夜影蕭疎、頓令二月瘦柳絮當レ空晴恍惚、偏惹二風狂一。○花陰流レ影。散爲二半院舞衣一、水響飛レ音。聽來一溪歌板。○萍花香裡風淸、幾度漁歌。楊柳影中月冷、數聲牛笛。○謝將縹緲

し、散じて半院（一六）の舞衣と爲り、水響音を飛ばし、聽き來りて一溪の歌板（一七）たり。○萍花香裡風淸し、（一八）幾度の漁歌、（一九）楊柳影中月冷かなり、（二〇）數聲の牛笛。（二一）○謝將縹（二二）緲として歸する處なく、斷浦（二三）雲を沈む。行いて紛紜（二四）繫がざる時に到り、空山（二五）雨を挂く。

（一）野語は上品なるよき言葉　（二）世俗の野鄙なる因緣を取り得るをいふ　（三）風月の場所は淸風明月の風流なる場所をいふ　（四）田舍の野鄙なる人をその風流場中に挿み入るゝこと　（五）淸らかにして美しき色あること　（六）瀟洒はさつぱりとして淸らかなること　（七）詩瘦は詩の思想の乏しきことと瘦せたるが如しとの意か　（八）病みたる鶴の瘦せ衰へたるに近きをいふ、隣は近なり　（九）書貧は書籍に乏しくして書を讀まざるとならん　（一〇）蟬は天寒き頃に至れば鳴かず、此は口を閉ぢて言はざること寒蟬の如しとにや　（一一）梅花の影の物寂しくまばらなること　（一二）月の小さく見ゆるをいふ　（一三）柳の花の絮の如きものゝ空に靄りて飛ぶこと　（一四）晴天の時にもうつとりとして明らかならざるをいふ　（一五）風をして吹きくるはしむとの意にや　（一六）院は周圍に墻をめぐらしその中に在る家屋なり、花の影の半院にわたりてその美なることと舞衣裳の如きをいふ　（一七）歌板は樂器にて卽ち柏板なり、歌ふ者以て節奏を爲す、水の響は歌板をうちて柏子を取るが如き聲を發するをいふ　（一八）萍花は浮草の花なり、浮草の香する所を吹きわたる風の淸らかなるをいふ　（一九）風淸き時又幾度か漁父の歌を聽くこと　（二〇）楊柳の影を照らす月はものすごく光の靑く見ゆるをいふ　（二一）月冷なる時數聲の牛牧ふ男の笛の聲を聽くこと　（二二）謝將は未詳、縹緲は遥に茫然たること、全句の意明確ならず　（二三）斷浦のあたりは雲も沈みて邊り定かならず、斷浦は

遇二害馬一。吟レ席遇二傖夫一。若レ斯不レ遇。甚レ于二泥塗一。偶集逢二好花一。動歌逢二明月一。席レ地逢二歡草一。攀レ磴逢二疎藤一。展レ巻逢二静雲一。戰レ茗逢二新雨一。如レ此相逢。逢レ于二知己一。○草色遍二溪橋一。醉二得蜻蜓春翅軟一。花風通二驛路一。迷二來蝴蝶曉魂香一。

こと （三）酒を飲む情に因りて事物を點檢料理するをいふ （四）山中に在る毒氣をいふ （五）すさまじく狂ひ荒る風 （六）竹を拭ひ拂ひて蜘蛛の絲に逢ふをいふ、膠絆はねばる蜘蛛の絲のことなるべし （七）酒に醉ひて醒めざるが如き濃厚なる趣のこと （八）野鄙なる田舍人をいふ （九）泥土の中に居るよりも甚しく不過なること （一〇）偶然期せずして相集ること （一一）茶を品評すること （一二）、新雨は新に雨の降るに逢ふをいふ （一三）草色が空を飛べる蜻蜓を醉はしめ、蜻蜓の春のつばさ軟かなること （一四）花の上を吹きわたる風は驛路にも吹きわたること （一五）翔け方の胡蝶の魂まで花の香のうつりて香しきをいふ

田舍兒強作二馨語一。博二得俗因一。風月場插二入傖父一。便成二惡趣一。○相二美人一如レ相レ花。貴三清艶而有二若レ遠若レ近之思一。看二高人一如レ看レ竹。貴三瀟湘而

田舍兒強ひて馨語を作せば、(一)俗因を博得し、(二)風月場(三)傖父を插入すれば、(四)便ち惡趣を成す。○美人を相するは花を相するが如し。(五)清艶にして遠きが若く近きが若きの思あるを貴ぶ。高人を看るは竹を看るが如し。(六)瀟洒にして疎ならず密ならざるの致あるを貴ぶ。○詩瘦門に到り病鶴に隣く、(七)清影頗る嘉し。(八)書貧座を經て寒蟬に並び、(九)雄風頓に挫く。(一〇)○梅花は夜に入りて影蕭疎にして、(一一)頓に月をして瘦せしむ。(一二)柳絮空に當り晴恍惚として、(一三)偏に風狂を惹く。(一四)○花陰影を流

○流水有レ方能出レ世。名山如レ藥可レ輕レ身。

與レ梅同瘦。與レ竹同清。與レ柳同眠。與二桃李一同笑。居然花裡神僊。與レ鶯同聲。與レ燕同語。與レ鶴同唳。與二鸚鵡一同言。如此話中知己。○栽レ花種レ樹。全憑二詩格一取裁。聽レ鳥觀レ魚。要在二酒情一打點。○登レ山遇二厲瘴一。放レ艇遇二腥風一。抹レ竹遇二膠絲一。修レ花遇二酲霧一。歡場

梅と同じく痩せ、竹と同じく清く、柳と同じく眠り、桃李と同じく笑へば、居(一)然たる花裡の神僊なり。鶯と同じく聲し、燕と同じく語り、鶴と同じく唳き、鸚鵡と同じく言ふ、此の如きは話中の知己なり。○花を栽ゑ樹を種うるは、全く詩格(二)に憑りて取裁し、鳥を聽き魚を觀るは、要するに酒情に任りて打點(三)す。○山に登りて厲瘴(四)に遇ひ、艇を放ちて腥風(五)に遇ひ、竹(六)を抹して膠絲に遇ひ、花を修めて酲霧(七)に遇ひ、歡場に害馬に遇ひ、吟席に傖夫(八)に遇ふ、斯の如き不遇は、泥塗(九)より甚し。偶集(一〇)に好花に逢ひ、動歌に明月に逢ひ、地に席して軟草に逢ひ、磴を繋ぢて疎藤に逢ひ、卷を展べて靜雲に逢ひ、茗(一一)を戰はして新雨(一二)に逢ふ、此の如く相逢ふは知己に逾ゆ。○草色溪橋に遍く、蜻蜓(一三)を醉はしめ得て春翅軟かなり。花風(一四)驛路に通じ、蝴蝶(一五)を迷はし來りて曉魂香し。

(一) 居然は依然に同じ、花の中に在る神仙と異ならざるをいふ　(二) 詩の格風によりて宜しきをはかりて整頓する

澤之臘。○萬綠陰中。小亭避暑。八園洞開。几簟皆綠。雨過蟬聲來。花氣令人自醉。○剸犀截雁之舌鋒。逐日追風之脚力。○痩影疎而漏月。香陰聚而墮風。○修竹到門雲裏寺。流泉入袖水中人。○詩題半作逃禪偈。酒價都爲買藥錢。○掃石月盈帚。濾泉花滿篩。

聚りて風を墮す(一二)。○修竹門に到る(一三)雲裏の寺、流泉袖に入る(一四)水中の人。○詩題半(一五)ばは逃禪の偈を作し、酒價は都て買藥の錢と爲る。○石を掃へば(一六)月帚に盈ち、泉を濾せば(一七)花篩に滿つ。○流水方あり(一八)能く世を出づ、名山藥(一九)の如く身を輕くすべし。

(一) 數尺の近き窓を蔽ひたる薄絹の處に在ること (二) 蛩はコホロギにて蛩は秋に當りて鳴く聲を送り來ること (三) 悄然として憂へて言を發せざるが如く靜かなる廚子に點せる燈火のみかゞやくをいふ、龕は佛を納るゝ廚子なり (四) 窔は窈と通ず幽深なり、安く穩かなる林中泉下の奥深き室の如きをいふ (五) 草澤の中を逍遙するやせ蹇へたる儒者の如きをいふ (六) 八方に在る戸びらが開け通ずること、八方遮るものなく開通するをいふ (七) 犀の角を剸り斷ち、雁を截り斷つ程の鋭き辯舌をいふ (八) 太陽の行く後を追ひ風の吹き行く後を追ふ程の捷き迷力をいふ (九) 梅の枝の瘦せたる影のまばらに横たはるをいふ (一〇) 枝の間より月光の漏れ來ること (一一) 蘭などの香草の陰聚りて茂れること (一二) 風の吹き來ること (一三) 長き竹の茂れる所に門あり、門に到れば雲のたなびける中に寺ありとの意 (一四) 流るゝ泉が側に在りて我袖に入るかと思はるゝこと、水中に在る人の如しとの意 (一五) 詩に詠ずる所多くは世を逃れて禪に入りたる禪僧の偈と同じきをいふ (一六) 石上の花を掃へば花帚に附着し、月之に映ずるをいふ (一七) 泉の水を濾せば泉中に落ちたる花は篩にかゝりて之に滿つるをいふ (一八) 流るゝ水を見て方術ありて能く世俗を脱出するの道を悟るをいふ (一九) 名山を看れば、仙藥を服してその身を輕くするが如く、我が心の世塵を輕く離るゝ法を悟るをいふ

○看レ書築二得村樓一空山曲抱。趺坐掃二來花徑一亂水斜穿。○倦時呼レ鶴舞。醉後倩レ僧扶。○筆床茶竈不二巾櫛一。閉レ戸潛夫。寶軸牙籤少二鬚眉一。下レ帷董子。

鳥銜二幽夢一。遠只在二數尺窓紗一。蛩遞二秋聲一。悄無レ言一龕燈火。○藉レ草班レ荊。安穩林泉之窔。披レ裘拾レ穗。逍遙草

坐次とすること 〔一三〕 竹徑の中に在りてしづかに談論すること 〔一四〕 清らかに吟誦する時に用ふる匾をかくる椅子を移すこと 〔一五〕 竹及び木によりて幽靜なる趣を成すこと 〔一六〕 立派におごそかに装飾したる蓮の形に擬して作りたる座席を取り去ること 〔一七〕 心の奥ゆかしく靜かなる人 〔一八〕 風流のおもむきある人 〔一九〕 年少き時は風流の情に耽り易きこと 〔二〇〕 面白き境の多きに因りて酒を飲むを得るをいふ 〔二一〕 空山が曲り折れて村樓を抱擁すること、空山は質樸なる山 〔二二〕 あぐらをかきて坐すること 〔二三〕 亂れ流るゝ水は斜に花徑を貫きて流るゝをいふ 〔二四〕 巾櫛は拭ひ操ひて清潔にすること 〔二五〕 潛夫論を著はしたる漢の王符を指す 〔二六〕 寶軸は卷物にしたる珍書、牙籤は象牙の札をつけて檢閲に便すること、牙籤をつけたる藏書をいふ 〔二七〕 貼り札の少きをいふ 〔二八〕 帷はトバリにて漢の董仲舒は帷を下して讀書す

鳥は幽夢を銜みて、遠く只數尺(一)の窓紗に在り。蛩(二)は秋聲を遞りて、悄として言なき(三)一龕の燈火あり。○草を藉き荊を班するは、安穩たる林泉の窔(四)、裘を披、穗を拾ふは、逍遙する草澤(五)の臞なり。○萬綠陰中、小亭に暑を避け、(六)八闥洞開し、几簟皆綠なり。雨過ぎて蟬聲來り、花氣人をして自ら醉はしむ。○(七)牀を剗り雁を截るの舌鋒(八)、口を逐ひ風を追ふの脚力。○(九)瘦影疎にして(一〇)月を漏らし、(一一)香陰

滿貪海一。攻二不レ破疑城一。○機息便有二月道風來一。不二必苦海人世一。心遠自無二車塵馬迹一。何須二痼疾丘山一。○郊中野坐。固可レ班レ荊。徑裏閑談。最宜レ拂レ石。侵二雲烟一而獨冷。移二開清嘯胡牀一。藉二竹木一以成レ幽。撤二去莊嚴蓮座一。○幽心人似二梅花一。韵心人同二楊柳一。○情因二年少一。酒因二境多一。

(八)心遠ざかれば自ら車塵馬迹(九)なし。何ぞ痼疾(一〇)の丘山を須ゐん。○郊中(一一)に野坐するには、固より荊(一二)を班すべし。徑裏に閑談(一三)するには、最も宜しく石を拂ふべし。雲烟を侵して獨り冷かなれば、淸嘯(一四)の胡牀(一五)を移開し、竹木に藉りて以て幽を成し、莊嚴(一六)の蓮座を撤去す。○幽心(一七)の人は梅花に似、韵心(一八)の人は楊柳に同じ。○情は年の少きに因り、(二〇)酒は境の多きに因る。○書を看るに村樓(二一)を築き得て、空山曲(一九)りて抱き、趺坐(二二)するに花徑を掃ひ來りて、亂水(二三)斜に穿つ。○倦む時は鶴を呼んで舞はしめ、醉後には僧を倩ひて扶けしむ。○筆床茶竈巾櫛(二四)せざるは、戸を閉づる潛夫(二五)なり。寶軸牙籤(二六)鬚眉(二七)少きは、帷(二八)を下すの董子なり。

㊀ 妓女の稱、妓も其義ならん　㊁ 靑樓は妓館即ち料理店のこと　㊂ 貪欲の深きこと海の如く得ること多きも滿足せざるをいふ　㊃ 疑ふことの堅きこと城の如くにして疑晴れざるをいふ　㊄ 名利を得んとする心のはたらき息みて、名利に超脱すること　㊅ 明月天に由り淸風吹き來るが如く心の光明淸白なるをいふ　㊆ 人世は種々の辛苦あること海の廣大なるが如し　㊇ 心世俗より遠ざかりて世俗の上に逸脱すること　㊈ 車塵馬迹は世俗の人の尋ね來ることなきをいふ　㊉ 痼疾は凝り固まりて治療すべからざる疾、丘山の風景を愛することが一の病氣となりて醫すべからざるをいふ　⑪ 市外の野原の中に坐すること　⑫ 荊はイバラの木なり、荊を敷きてその

駐レ彩。退而與ニ諸俊髦ー西湖靚婿。賴ニ此英華ー一ニ洗粉澤ー。○雲林性嗜レ茶。在ニ惠山中ー。用ニ核桃松子肉ー和ニ白糖ー成ニ小塊ー如ニ石子ー。置ニ茶中ー出以啖レ客。名曰ニ清泉白石ー。○有レ花皆刺レ眼。無レ月便憤レ眉。當レ場得レ無レ妬レ我。花歸ニ三寸管ー。月代ニ五更燈ー。此事何可レ語レ人。

(一) 畸人は奇異にして世俗と合はざるの人 (二) 行藏は出でてその道を行ひ、退きてその道を藏して行はざること (三) 眉が雷電の聲に驚き駭ふが如く感ずること (四) 常人に異なりたる士の世に稀なる奇らしき議論 (五) 耳に空吹く風の吼ゆるが如く大きく聞ゆること (六) 雞の談話するを見ても學問に益すべきをいふ (七) 鶴の相列なりて飛ぶを見て以て兵陣の法を悟りて兵を善くすべしとなり、陣法に鶴列陣あり (八) 壁に面して修養する僧、達磨面壁の如き是なり (九) 酒に醉へる道士、道士は老子教の僧なり (一〇) 黄色の葛衣を着たる田舍人 (一一) 碧桃は桃花の重瓣のもの千葉桃ともいふ、此は仙境に居る漁父の意なり (一二) 竹叢の中に通ずる小路を通行し來りて門の扉を叩きて音づるゝこと (一三) 棕櫚の陰に席を敷きて坐すること (一四) 明月は光輝を停めて永く照すをいふ (一五) 俊髦は才智人に秀てすぐれたる士をいふ (一六) 美しく裝飾して媚ぶるが如き美景をいふ (一七) 白粉をつけ光澤をつけ美しく裝飾したるが如き風景を洗ひ去ること (一八) 雲林は倪雲林のこと、倪瓚元代の人、雲林と號す、善く山水を畫く (一九) 胡桃の肉を去り核を取りて其仁を食ふを核桃といふ (二〇) 石子は石塊の如き堅き脆きものを作ること (二一) 眼を刺すは眼を刺擊するとか (二二) 眉をしはめて憂ふると (二三) 三寸の管は筆をいふ、花の景は詩文の中に詠ぜらるゝをいふ (二四) 五更は午前四時頃、殘月燈火に代りて人を照すをいふ (二五) 此の景は人に語るべからざる趣味あるをいふ

求ニ校書于ニ女史ー。論ニ慷慨于ニ青樓ー。○塡ニ不レ

(一)校書を女史に求め(二)慷慨を青樓に論ず。○滿たざるの(三)貪海を塡め、破れざるの(四)疑城を攻む。○(五)機息めば便ち(六)月道り風來る有り。必ずしも(七)苦海の人世ならず。

牙。沁入肺腑。興到與衲子輩。啜茗哦詩。或談小品公案。兩耳瑣瑣。如扣哀玉。倦則拂枕。舟中怡然就夢。醒來都不復記。

看畸人古怪之行藏。眉霹雷電。聽異士稀奇之議論。耳吼天風。○鷄談可以益學。鸛陣可以善兵。○繙經如壁觀僧。飲酒如醉道士。横琴如黃葛野人。蕭客如碧桃漁父。○竹徑款扉。柳陰班席。每當雄才之處。明月停輝。浮雲

畸人古怪の行藏を看れば、眉雷電に轟く。異士稀奇の議論を聽けば、耳に天風吼ゆ。○雞談以て學を益すべし、鸛陣以て兵を善くすべし。○經を繙すこと壁觀の僧の如く、酒を飮むこと醉道士の如く、琴を横たふること黃葛野人の如く、客を肅むこと碧桃の漁父の如し。○竹徑扉を款き、柳陰に席を班ち、每に雄才の處に當る、明月輝を停め、浮雲影を駐む。退いて諸の俊髦と與にす。西湖の靚媚、此英雄に賴りて粉澤を一洗す。○雲林性茶を嗜み、惠山の中に在り、核桃松子の肉を用ひて白糖に和し、小塊を成すこと石子の如く茶中に置き、出して以て客に啖はしむ。名づけて清泉白石と曰ふ。○花有れば皆眼を刺し、月無くんば便ち眉を攢む、場に當りて我を妬む無きを得んや。花は三寸の管に歸し、月は五更の燈に代る、此事何ぞ人に語るべけん。

黃鸝穿二絲柳一中。嚶嚶成レ韻。堪レ作二詩腸鼓吹一。○月夜獨飲二香花下一。月色如レ銀。聞三山寺鐘聲。聲飄二雲外一。甚偁二幽暢一。○湖上新荷競發。香氣噴レ人。每當二炎爵時一。駕二一窗檻玲瓏之舟一。攜二茶具一。邀二僧侶一。挾二青衣二三人一。相與避二樵纖一。共入二烟深處一。採二青蓮一咲レ之、覺下種種鮮香。流二溢齒

湖上の新荷(一〇)競ひて發き、香氣人に噴く、每に炎爵(一一)の時に當り、一窓檻玲瓏(一二)の舟に駕し、茶具を携へ、僧侶を邀へ、青衣(一三)二三人を挾みて、相與に樵纖(一四)に避け、共に烟深き處に入り、青蓮(一五)を採りて之を咲へば、種種の鮮香、齒牙に流溢(一六)し、肺腑(一七)に沁入するを覺ゆ。興到りて衲子(一八)輩と、茗を啜り詩を哦し、或は小品(一九)の公案を談ずれば、兩耳琅琅(二〇)として哀玉(二一)を扣くが如し。倦めば則ち枕を拂ひ、舟中怡然(二二)として夢に就き、醒め來りて都て復た記せず。

(一) 顫や、かづらがゆら〳〵動きて相連ること (二) 日光が藤蘿の掩く所にうつれるが故にその影の動くこと露を動かすが如し (三) 流れる水の中の魚 (四) 少時間の中に往來すること (五) 柳の木の中を通り抜けて或は波を蹴るが如く往來すること (六) 嚶々は鳥の鳴く聲 (七) 詩を作る思想をすゝめはげますをいふ (八) 月色の白き花に映ずるが故に銀に似たるなり (九) その氣分の奥ゆかしくのび〳〵すること (一〇) 新しき蓮の花のこと (一一) 暑氣の甚しくむしあつきこと (一二) 窓檻は舟の窓と舟の欄檻とのこと、玲瓏はすき透りて清らかなること (一三) 青衣は隸者の服、是は下婢のことをいふ (一四) 暑月戴く所の涼笠、青紗を以て其檐に綴りて日を蔽ふもの、涼笠を被りて日光を避くるをいふ (一五) 蓮の實の青きものを採りて食ふこと (一六) 口の中より溢れ出づること (一七) 肺腑の中までもしみ入ること (一八) 衲子は僧侶のこと (一九) 佛教に在りて詳なるものを大品となし、略なるものを小品とす、簡單なる公案 (二〇) 琅々は玉の鳴る聲 (二一) 悲哀の聲を發する玉 (二二) 喜び樂むこと

聲。雪宜茶聲。春宜笛聲。夜宜砧聲。○花飛噴酒液。葉脫寫詩情。○片心自憐。形影相爲管鮑。孤懷獨朗。齒牙不用金張。○曲水同潔廻。後石竝洞達。○水綠山青。忽聽欸乃數聲。和驚鴻嘹𪄗。漁笛欷歔。令人有瀟湘巫峽之想。

して瀟湘巫峽の想あらしむ。(一八)

(一) 虛禮は形式だけの禮儀、誠意なき禮儀をいふ　(二) その人を丁寧にもてなして引き留むること　(三) 外形の禮儀作法を廢ずして笑ひながら談話すること　(四) 同一の臭味を有する人の交際　(五) 竹に雨の降りかゝる聲　(六) 箏は樂器の名、つくし琴　(七) 砧は衣を打つ聲　(八) 花の飛び散ること、酒液を噴き出すが如きをいふ　(九) 木の葉の脫落する趣は詩の情趣を寫すに宜しきをいふ　(一〇) 一片の心、自ら自己を愛憐すること　(一一) 吾が身體とその影とが相憐みて相離れざること管仲と鮑叔との交の如し　(一二) 我が孤獨の思想の獨り淸く朗なること　(一三) 金張は金日磾と張安世、漢の宣帝の時の權貴の人なり、我が口に權貴を言はざること　(一四) 潔廻は水のめぐり流ること　(一五) 欸乃は舟人の歌ふ聲　(一六) 驚きて飛びゆく鴻の淸らかなる聲　(一七) 漁人の吹く笛のすゝり泣きするが如き聲　(一八) 瀟湘のあたり及び巫峽の邊は水綠に山靑く以上の如き趣ある所なればかくは想像するなり

竹樹環翠。藤蘿搖綴。日光篩影。渾中之魚。往來倏忽。似與遊人偕樂。正欲覓句。

竹樹翠を環らし、(一)藤蘿搖綴し、(二)日光影を篩ひ、(三)渾中の魚、(四)往來倏忽にして、遊人と偕に樂むに似たり。正に句を覓めんと欲すれば、黃鸝(五)柳中を穿織し、嚶嚶(六)として韻を成し、(七)詩腸の鼓吹を作すに堪へたり。○月夜獨り杏花の下に飲めば、(八)月色銀の如し、山寺の簫管、聲雲外に飄るを聞けば、甚だ幽暢(九)と爲す。○

山水令二人奇一。書史令二人博一。金石鼎彝令二人古一。

吾齋之中。不レ尙二虛禮一。凡入二此齋一。均爲二知己一。隨レ分欵留。忘レ形笑語。不レ言二是非一。不レ侈二榮利一。閒談二古今一。靜玩二山水一。清茶好香。以適二幽趣一。臭味之交如レ斯而已。○窓宜二竹雨聲一。亭宜二松風聲一。几宜二洗レ硯聲一。榻宜二翻レ書聲一。月宜二琴

（二）鼎は供物を盛る器、彝は宗廟に常に備へ置く器、祭禮の供物を盛る　（三）人をして古くさびたる人柄とならしむること

吾が齋の中は、虛禮を尙ばず、凡そ此齋に入れば、均しく知己と爲し、分に隨ひて欵留し、形を忘れて笑語し、是非を言はず、榮利に侈らず、閒に古今を談じ、靜に山水を玩び、清茶好香、以て幽趣に適す、臭味の交斯の如きのみ。

○窓は竹雨の聲に宜しく、亭は松風の聲に宜しく、几は硯を洗ふ聲に宜しく、榻は書を翻へす聲に宜しく、月は琴の聲に宜しく、雪は茶の聲に宜しく、春は箏の聲に宜しく、秋は笛の聲に宜しく、夜は砧の聲に宜し。○花飛んで酒液を噴き、葉脫して詩情を寫す。○片心自ら憐めば、形影管鮑を相爲し、孤懷獨り朗なれば、齒牙金張を用ひず。○曲水同じく瀠廻し、俊石竝に洞達す。○水綠に山靑く、忽ち靄乃數聲を聽き、驚鴻の嘹嚦、漁笛の欷歔に和し、人を

似。○文房供具。借以快レ目適レ玩。鋪疊如レ市。頗損二雅趣一。其點綴之法。羅羅清疎。方能得レ致。○香令二人幽一。酒令二人遠一。茶令二人爽一。琴令二人寂一。棋令二人閑一。劍令二人俠一。杖令二人輕一。麈令二人雅一。月令二人清一。竹令二人冷一。花令二人韻一。石令二人雋一。雪令二人曠一。僧令二人淡一。蒲團令二人野一。美人令二人憐一。

して爽（一三）ならしめ、琴は人をして寂（一四）ならしめ、棋は人をして閑ならしめ、劍は人をして俠（一五）ならしめ、杖は人をして輕ならしめ、麈は人をして雅ならしめ、月は人をして清ならしめ、竹は人をして冷ならしめ、花は人をして韻（一六）ならしめ、石は人をして雋（一七）ならしめ、雪は人をして曠（一八）ならしめ、僧は人をして淡（一九）ならしめ、蒲團は人をして野ならしめ、美人は人をして憐（二〇）ならしめ、山水は人をして奇ならしめ、書史は人をして博（二一）ならしめ、金石鼎彝（二二）は人をして古（二三）ならしむ。

（一）兀坐は動かずして坐すること　（二）月が木蘭に映ずる景は木蘭に骨ありて其清きこと氷を淩ぐが如く見ゆるをいふ　（三）月の人を照らす色の美しきこと、人を媚ふこと玉の如きなり　（四）此二句は明の高青邱の梅花の詩中の句なり、梅の花の白く雪の如く山中に咲ける氣高き景は高士の臥するが如く、又月の梅に映じて明かに照す美しき景は美人の來るが如きをいふ　（五）文筆に供する種々の器具　（六）文房具をしき並べて置くこと　（七）風雅なる趣をいふ　（八）こゝかしこに點々と並べて置くこと、市中に物品を列ぬるが如くするをいふ　（九）相列ねて清くまばらに置くをいふ　（一〇）方によく面白き風致を得ること　（一一）幽はしづかに奥ゆかしきこと　（一二）遠は人の心を遠く大きくならしむること　（一三）心さつぱりとして清々すること　（一四）心を物寂しくならしむること　（一五）男氣を出さしむること　（一六）面白きおもむきあること　（一七）その心をすぐれて氣高くせしむること　（一八）その心を空しく大ならしむること　（一九）淡は淡泊にして無欲なること　（二〇）憐は愛憐すること　（二一）人の知識を博くならしむること

竹。讀レ史不レ可レ無レ酒。談レ禪不レ可レ無二美人一。○多方分別。是非之竇易レ開。一味圓融。人我之見不レ立。○春雲宜レ山。夏雲宜レ樹。秋雲宜レ水。冬雲宜レ野。清疎暢快。月色最稱二風光一。瀟洒風流。花情何如二柳態一。

き狀を詠ぜる詩句なり　(七) 詩句の文字は悉く秋風が木葉を吹くが如き趣あるをいふ　(八) 史書を讀むに酒を伴ひ禪を談ずるに美人を須ふるは俗氣を離れたる趣味あるなり　(九) 色々と物を區分し辨別すること　(一〇) 人の是を褒め非を貶して批評する道が開け來るをいふ　(一一) 彼と是と同一味になりて少しの圭角なくよく融合するをいふ　(一二) 人と我との區別を立てゝ總和一致せざることなしとなり　(一三) 春の頃の雲は山にたなびける景尤も佳し　(一四) 夏時の雲は樹にかゝれる靄然たる景尤も佳し　(一五) 秋季の雲は水の上にたなびける景尤も佳し　(一六) 冬時の雲は野原にかすめる景尤も佳し　(一七) 清疎は心の潔白にして疎大なること、暢快は心のびのびとして愉快なること　(一八) 明月の色に對して最も風景のよきを稱美するをいふ　(一九) 瀟洒は心のさつぱりとして清きこと　(二〇) 花の開きたる風情と柳のしなやかなるさまとは何れが勝れるか即ち柳態の勝れるをいふ

春夜小窓兀坐。月上二木蘭一。有レ骨凌レ氷。懷レ人如レ玉。因想下雪滿二山中一高士臥。月明林下美人來語上。此際光景頗

春夜小窓に(一)兀坐すれば、(二)月は木蘭に上り、骨ありて氷を凌ぎ、(三)人を懷ひて玉の如し。因りて(四)雪は山中に滿ちて高士臥し、月は明に林下美人來るの語を想ふ、此際光景頗る似たり。(五)○文房供具、借りて以て目を快くし玩ぶに適す、(六)鋪疊すること市の如きは、頗る(七)雅趣を損す。其(八)點綴の法は、(九)雜雜清疎にして、(一〇)方に能く致を得。○香は人をして(一一)幽ならしめ、酒は人をして(一二)遠ならしめ、茶は人を

何異三家村老嫗。動口念阿彌。便云中昇天成佛上也。集韻第七。

陳慥家蓄二數姬一。每二日晚一。藏二花一枝一。使三諸姬射二覆一。中者留宿。時號二花媒一。○閉レ門閱二佛書一。開レ門接二佳客一。出レ門尋二山水一。○雪後尋レ梅。霜前訪レ菊。雨際護レ蘭。風外聽レ竹。○清齋幽閉。時時暮雨打二梨花一。冷句忽來。字字秋風吹二木葉一。○山上須レ泉。徑中須レ

(一)陳慥の家數姬を蓄へ、日晚每に花一枝を藏し、諸姬をして(二)射覆せしめ、中る者は留宿す、時に(三)花媒と號す。○門を閉ぢて佛書を閲し、門を開いて佳客に接し、門を出でて山水を尋ぬ。○雪後梅を尋ね、霜前菊を訪ひ、雨際蘭を護り、(四)風外竹を聽く。○(五)清齋幽閉し、時時暮雨梨花を打ち、(六)冷句忽ち來りて、(七)字字秋風木葉を吹く。○山上は泉を須ち、徑中は竹を須つ。(八)史を讀むには酒無かるべからず。禪を談ずるには美人無かるべからず。○(九)多方分別すれば、(一〇)是非の竇開き易く、(一一)一味圓融なれば、(一二)人我の見立たず。○(一三)春雲は山に宜しく、(一四)夏雲は樹に宜しく、(一五)秋雲は水に宜しく、(一六)冬雲は野に宜し。○(一七)清疎暢快には、(一八)月色最も風光を稱し、(一九)瀟洒風流には、(二〇)花情は柳態に何如ぞや。

㊀陳慥は宋の永嘉の人、字は季常、蘇東坡と同時代なり ㊁射覆は卜を以て遊戲をなすこと、花を匿して如何なる花なるかを言ひ中てしむるをいふ ㊂花が留宿の仲介を爲すを以て花媒といふ ㊃風の吹く聲を聽くの餘竹の風に吹かれて鳴る聲を聽くこと ㊄清らかなる書齋を閉ぢて靜かに居ること ㊅冷句は閑靜にして物寂し

人生二斯世一。不レ能レ讀二盡天下祕書靈笈一。有レ目而眛。有レ口而啞。有レ耳而聾。而面上三斗俗塵。何時掃去。則韻之一字。其世人對症之藥乎。雖レ然今世且有二焚レ香喫レ茗。清涼在レ口。塵俗在レ心。儼然自附二于韻一。亦

卷七

韻

人斯世に生れて、天下の祕書靈笈（一）を讀み盡すと能はず、目有れども眛し、口有れども啞し（三）、耳有れども聾（四）す、而して面上三斗（五）の俗塵、何の時か掃ひ去らん。則ち韻の一字は、其れ世人對症（六）の藥か、然りと雖も今世且つ香を焚き茗を喫り、清涼（七）口に在りて、塵俗心に在り、儼然（八）として自ら韻に附くあり。亦何ぞ三家村（九）の老嫗、口を動かして阿彌（一〇）を念じ、便ち昇天成佛（一一）すと云ふに異ならんや。韻第七を集む。

（一）祕藏の珍書、不思議なる書籍、人の讀まざる書なり　（二）眛は物目中に入りての目見えざること　（三）啞はおしにて口言ふ能はざること　（四）聾はつんぼにて耳聽く能はざること　（五）面の上に三斗の塵埃の積もれること、即ち名利の俗世界に汚れたるをいふ　（六）病氣に適切なる藥　（七）口に言ふ所は清白俗氣なけれども心に思ふ所は名利の俗念なるをいふ　（八）いかめしき莊重なること　（九）人家の極めて少き村落　（一〇）阿彌陀佛を唱ふること　（一一）天に昇りて佛陀となること

○悠揚綠柳。訝ニ合浦之同歸一。繚繞靑霄。環ニ五。星之一氣一。○縟繡起レ于ニ緹紡一。煙霞生レ于ニ灌莽一。

繁くこまかなる刺繡は赤黃色の紗より成るをいふ　（一六）もや霞は灌木草莽の中より起るをいふ

煙霞潤色。荃茅結芳。出硐幽而泉洌。入山戸而松涼。○旭日始煖。蕙草可織。園桃紅點。流水碧色。○玩飛花之度牕、看春風之入柳、命麗人于玉席、陳寶器于紈羅。○忽翔飛而暫隱。時陵空而更颺。竹依牕而庭影。蘭因風而送香。○風暫下而將飄。烟纔高而不瞑。

煙霞色を潤し、(一)荃茅芳を結び、(二)硐幽を出でて泉冽く、(三)山戸に入りて松涼し。(四)○旭日始めて煖にして、蕙草織るべし。(五)園桃は紅點し、(六)流水は碧色なり。○飛花の牕を度るを玩び、春風の柳に入るを看、麗人に玉席に命じ、(七)寶器を紈羅に陳ぬ。(八)○忽ち翔飛して暫く隱れ、(九)時に空を陵ぎて更に颺り、竹は牕に依りて庭に影し、蘭は風に因りて香を送る。(一〇)○風は暫く下りて將に飄らんとし、烟は纔に高くして瞑せず。(一一)○悠揚たる綠柳、(一二)合浦の同歸を訝り、(一三)縹緲せる青霄、(一四)五星の一氣を環る。○縟繡は縟紡より起り、(一五)煙霞は灌莽より生ず。(一六)

(一) もや霞は美しき色をあらはすこと (二) 荃は香草なり、香草の荃と茅とは芳しき花を開くこと (三) 水が凾の奥深き處より出づること、或は云ふ、凾は凹の誤なりと亦通ず (四) 山戸は山の入口の處なり (五) 蕙草俗に佩蘭と名づく、香草なり、織る可しは多く生ずること (六) 桃花の紅色のさし來ること (七) 美麗なる女子に命じて玉の如き美麗なる席に列せしむること (八) 紈は今の絹紗、羅は薄絹、寶の器を絹紗薄絹の上に陳列すること (九) 此は蓋し鳥の飛翔するをいへるなり (一〇) 暗黑とならざること (一一) 悠揚は長遠の貌、遠く長く垂れたる青色の柳 (一二) 合浦は今の廣東省合浦の東北七十五里に在り、合浦の柳とその歸趣を同じうするかと疑はるゝをいふ (一三) 相まとひ連れる大空のこと (一四) 五星は木火土金水の五星なり (一五) 赤黃色の紗なり、紡は紡綢にて絲織物なり、

亦披レ裘而負レ薪。出二芝田一而計レ畝。入二桃源一而問レ津。菊花兩岸。松聲一邱。葉動猿來。花驚鳥去。閲二丘壑之新趣一。縱二江湖之舊心一。◯籬邊杖履送レ僧。花鬟列二于巾角一。石上壺觴坐レ客。松子落二我衣裾一。◯遠山宜レ秋。近山宜レ春。高山宜レ雲。平山宜レ月。◯珠簾蔽レ月。翻窺二窈窕之花一。綺幔藏レ雲。恐擬二扶疎之柳一。◯松子爲レ飡。蒲根可レ服。

巾角に列り、石上の壺觴(一二)客を坐せしむれば、松子(一三)我が衣裾に落つ。◯遠山(一四)は秋に宜しく、近山(一五)は春に宜しく、高山は雲に宜しく、平山は月に宜し。◯珠簾月を蔽へば、翻りて窈窕(一六)の花を窺ふ。綺幔(一七)雲を藏せば、恐くは扶疎(一八)の柳に擬せん。◯松子(一九)を飡と爲し、蒲根(二〇)服すべし。

(一) 方外は世捨て人のこと、瀟灑は自由にして束縛を受けざること (二) 窮束は窮屈にして束縛を受くること (三) 閬苑は仙人の居る所、閬風は閬苑の仙人の様子ある隱者のこと (四) 蓬萊は仙人の居る所、仙人の如き友人に逢ふこと (五) 芝田は崑崙山の第九層に在り、種々の芳草生ず、仙界を出でゝ田畝のことを計營すること (六) 桃源は武陵桃源なり、世を離れたる仙界に入りてその渡場を問ふこと (七) 菊花は水の兩岸に開き松聲は一邱に吼ゆること (八) 花の動くこと (九) 遠く都を離れし地方に世を避け退隱せんとする舊來の心をほしいまゝにす (一〇) 杖と履とを以て僧に供して僧を送ること (一一) 花鬟は花のつるなり花のつるが頭巾にからみつくこと (一二) 瓢と觴とを以て酒を客に供すること (一三) 松子は松かさにて卽ち松の實なり (一四) 遠方に在る山は秋の頃之を望むに宜しきをいふ、遠山の秋景は尤も淸きなり (一五) 近き處に在る山は春時之を看るに宜しきをいふ、下の二句亦此意なり (一六) 奥ゆかしく美はしき花 (一七) あや絹を以て造れる美しき幕 (一八) 枝の廣く弘がりて茂る柳のこと (一九) 松の實を取りて食物となすこと (二〇) 菖蒲の根を以て藥餌となして服用するをいふ

明一。約レ花者。不レ能レ給ニ其聲一。給レ泉者。不レ能レ給ニ其聲一。給レ人者。不レ能レ給ニ其情一。○讀書宜レ樓。其快有レ五。無ニ剝啄之驚一。一快也。可ニ遠眺一。二快也。無ニ濕氣侵一レ床。三快也。木末竹顛。與レ鳥交語。四快也。雲霞宿ニ高簷一。五快也。○山徑幽深。十里長松引レ路。不レ倩ニ金張一。俗態料理。一編殘卷。瘵レ人。非レ關ニ盧扁一。

喜ニ方外之浩蕩一。歎ニ人間之窘束一。逢ニ閬風之逸客一。値ニ蓬萊之故人一。忽據レ梧而杖レ策

(一)樹梢の動くが爲めに月影も隨て動き亂るゝをいふ　(二)翠き色に映ずる月の光の衣服にうつることをいふ　(三)精神も身骨も共に仙人となりたるが如く世俗を離れたる觀あり　(四)蒼き大空の雲より月を吐き出したるが如き觀あるをいふ　(五)素き衣をきたる美女が玉の輪の佩物を送り來りたるが如きこと　(六)此は世俗を洗脱すること、世を退隱せる士の羽を以て作れる衣裳を移し來りたるが如きをいふ　(七)此は形而上の精神は論じと他にはざるをいふ、以下皆同じ　(八)門を叩きて訪問する客の我を驚かすなきこと　(九)木末は木の最上のさき、竹顛は竹の最上の處　(一〇)木末竹顛に鳥來りて交々鳴くは鳥と語るが如きなり　(一一)金張は金日磾と、張安世となり、皆漢の富豪の時の權貴、氏族甚だ盛なり、遂に貴族の首稱となれり　(一二)世俗名利の念の心に相まとひて離れざること　(一三)一部の讀み殘りの書物にてその俗態を治療するを得ること　(一四)扁鵲は古の名醫、盧に家す、故に盧扁といふ

(一)方外の浩蕩を喜び、人間の窘束を(二)歎じ、(三)閬風の逸客に逢ひ、(四)蓬萊の故人に値ふ、忽ち梧に據り策を杖つき、赤裘を披て薪を負ふ、(五)芝田を出でて畝を計り、(七)桃源に入りて津を問ふ、(八)菊花兩岸、松聲一邱、葉動きて猿來り、(六)花驚いて鳥去る、丘壑の新趣を閲し、(九)江湖の舊心を縱まゝにす。○籬邊の杖(一〇)履借を送れば、(一一)花鬚

月江中一。波光千頃。頓令二明月増一レ輝。○樓臺落日。山川出雲。○玉樹之長廊半陌。金陵之倒影猶赤。

小聰偃臥。月影到レ牀。或逗二留于梧桐一。或搖二亂于楊柳一。翠華撲レ被。神骨俱仙。及下從二竹裡一流來上。如下自二蒼雲一吐出上。○清送二素娥之環佩一。逸移二幽士之羽裳一。相思足レ慰二于故人一。清嘯自紆二于良夜一。○給レ雪者。不レ能レ給二其清一。給レ月者。不レ能レ給二其

小聰に偃臥すれば、月影牀に到り、或は梧桐に逗留し、或は楊柳に搖亂す、(一)(二)翠華被を撲てば、(三)神骨俱に仙なり、竹裡より流れ來るに及んで、(四)蒼雲より吐き出すが如し。○清は(五)素娥の環佩を送り、(六)逸は幽士の羽裳を移す。相思は故人を慰むるに足り、清嘯は自ら良夜に紆ふ。○雪を給く者は、其清を給く能はず。(七)月を給く者は、其明を給く能はず。花を給く者は其馨を給く能はず。泉を給く者は、其聲を給く能はず。人を給く者は、其情を給く能はず。○讀書は樓に宜し。其快五あり。(八)剝啄の驚無きは、一の快なり。遠眺すべきは、二の快なり。濕氣床を侵す無きは、三の快なり。(九)木末竹顚、(一〇)鳥と交ゝ語るは、四の快なり。雲霞高簷に宿するは、五の快なり。○山徑の幽深は、十里の長松路に引く、(一一)金張を俏はず。(一二)俗態の糾纏は、(一三)一編の殘卷人を療す、(一四)盧扁に關するに非らず。

身、緇衣絶㆑糧益韻。○杏花疏雨、楊柳輕風。興到欣然獨往。村落烟横。沙鷗月印。歌殘倏爾言旋。○賞㆑花酣㆑酒、酒浮二園菊一凡三盞。睡醒問㆑月、月到二庭梧第二枝一。此時此興、亦復不㆑淺。○幾點飛鴉歸二來綠樹一、一行征雁。界二破青天一。○看二山雨後一、霽色一新。便覺二青山倍秀一、玩二

り醒めて月を問へば、月は(一二)庭梧の第二枝に到る。此時此興亦復た淺からず。○(一三)幾點の飛鴉、綠樹に歸來し、(一四)一行の征雁、青天を界破す。○山を雨後に看れば、(一五)霽色一新、便ち青山倍ゝ秀づるを覺ゆ。月を江中に玩べば、(一六)波光千頃、頓に明月をして輝を増さしむ。○樓臺の落日、山川の出雲。○(一七)玉樹の長廊半は陰し、(一八)金陵の倒影猶ほ赤し。

(一) 清らかな夜の月の皓々として照らす時野鶴の唳きわたるをいふ (二) 風吹きて花落つる時、杜鵑の啼く聲のきれぎれに聞ゆること (三) 青山は僧の住めるありて風致ありとの意 (四) 青き水の流るゝ川は舟なくばその發興ゆかしきなり (五) 朱門は富貴の家 (六) 緇衣は黑き衣を着たる僧なり、僧侶は食糧なく飢餓するときは風雅の趣あり (七) 杏花の咲ける所にばらばらと降る雨のかゝる風情 (八) 楊柳に輕き風の吹きわたりて騷く景色 (九) 沙灘のあたりに在る家に月影のうつること (一〇) 倏爾は忽然に同じ、たちまちの間のこと (一一) 三盞は三杯の酒を飲むこと (一二) 庭園の青桐の第二枝の處まで月の昇り來ること (一三) 點々として飛び行く山烏のこと、幾點は一點ならず、こゝかしこに散在すること (一四) 一列の飛び行く雁は、青天に一區劃をなして境界を立つること (一五) 雨晴れたる景色が一きはきは立ち新なるをいふ (一六) 波にうつれる月光は千頃の廣さにわたるをいふ (一七) 玉の如き美しき樹の長く續けること、長き廊下の如きをいふ (一八) 金陵は今の江寧縣に在り、金陵に倒まにうつれる日影

信是人行ニ圖畫ー。○小憩下。修篁蕭瑟。野鳥悲啼。峭壁間。醇墨淋漓。山靈呵護。○霜林之紅樹。秋水之白蘋。○雲收便悠然共遊。雨滴便冷然俱淸。鳥啼便欣然有ㇾ會。花落便洒然有ㇾ得。○千竿脩竹周遭。半畝方塘。一片白雲遮蔽。五株垂柳。

來る頃には柳は芽を出すこと　(九)　春の頃に至れば黄鳥は梅樹を去りて桃花を罵りて鳴くをいふ　(一〇)　雪の晴れたる時に長松に雪のかゝりたる景色　(一一)　氷を盛りたる壺にて清潔なるに喩ふ　(一二)　夕日の斜に照す時芳香ある草の花咲きたる處　(一三)　しづかに詩を吟ずること　(一四)　長き竹の物寂しく立てること　(一五)　山の險しくして壁を立てたるが如く急なること　(一六)　酒に醉ひて書きし文字の墨の滴らんとするが如きをいふ　(一七)　山の神が不祥を呵りて之を保護すること　(一八)　悠然はゆつたりとして樂しむこと　(一九)　冷然は淸らかなる貌　(二〇)　洒然はさつぱりとして胸中にわだかまりなきこと　(二一)　千本の長き竹は半畝の四角なる堤塘を周ること　(二二)　一片の白雲は五株の垂柳を遮り蔽ふをいふ

山館秋深。野鶴唳殘淸夜月。江園春暮。杜鵑啼斷落花風。○青山非ㇾ僧不ㇾ致。綠水無ㇾ舟更幽。朱門有ㇾ客方

山館秋深く、(一)野鶴唳き殘る清夜の月、江園春暮れて、(二)杜鵑啼き斷ゆ落花の風。○(三)青山は僧に非ずんば致ならず、(四)綠水は舟なくんば更に幽なり。(五)朱門は客ありて方に尊く、(六)緇衣は糧を絶ちて益〻韻なり。○(七)杏花の疎雨、(八)楊柳の輕風、興到れば欣然として獨り往き、村落に烟横たはり、(九)沙廳に月印す、歌ひ殘りて(一〇)倏爾として爰に旋る。○花を賞し酒を酣にす、酒には園菊を浮べて凡そ(一一)三盞す、睡

霞性之所レ適。陰二丹桂一。藉二白茅一。濁酒一杯清琴數弄。誠足レ樂也。○輞水淪漣。與レ月上下。寒山遠火明二滅林外一。深巷小犬。吠聲如レ豹。村墟夜舂。復與二疎鐘一相間。此時獨坐。童僕靜默。○東風開二柳眼一。黄鳥罵二桃花一。○晴雪長松。開レ窓獨坐。恍如三身在二氷壺一。斜陽芳草。携レ杖閑吟。

水淪漣して、月と上下し、寒山の遠火、(六)林外に明滅し、深巷の小犬、吠聲豹の如く、村墟の(七)夜舂、復た疎鐘と相間す、此時獨坐すれば、童僕靜默す。○東風(八)柳眼を開き、(九)黄鳥桃花を罵る。○(一〇)晴雪の長松、窓を開いて獨坐すれば、恍として身は(一一)氷壺に在るが如し。○(一二)斜陽の芳草、杖を携へて(一三)閑吟すれば、信に是れ人は圖畫を行くがごとし。○小窓の下、(一四)修篁蕭瑟として、野鳥悲啼す。(一五)峭壁の間、(一六)醉墨淋漓として、(一七)山靈呵護す。○霜林の紅樹、秋水の白蘋。○雲收まれば便ち(一八)悠然として共に遊び、雨滴れば便ち(一九)冷然として倶に清く、鳥啼けば便ち欣然として會する有り、花落つれば便ち(二〇)洒然として得るあり。○千竿の(二一)脩竹周り遮ふ半畝の方塘。(二二)一片の白雲遮り蔽ふ五株の垂柳。

(一) 山阿は山の曲れる所 (二) 土地の僻かに大なる所をいふ (三) もや霞の景色ありて我が山水を好む性に適宜したる所をいふ (四) 丹桂は木犀の花の色の丹き者、丹桂の蔭に休息すること (五) 輞水は輞川のこと、陝西省藍田縣に在り、淪漣はさゝ波の立つこと (六) 林の外に火の明になり又消え失えてちら〳〵すること (七) 宵づく聲とまばらに鳴る鐘の聲と相まじりて聞ゆること (八) 東風は春風なり、柳眼は柳の芽の形人の眼の如きもの、春風の吹き

南之山。峻峭巧麗。山之形色。不レ同如レ此。○杜レ門避レ影。出レ山一事。不レ到ニ夢寐間一。春晝花陰。猿鶴飽臥。亦五雲之餘蔭。○白雲徘徊終日不レ去。巖泉一支。潺ニ湲齋中一。春之晝。秋之夕。既清且幽。大得ニ隠者之樂一。惟恐ニ一日移去一。○與ニ衲子輩一。坐ニ松林石上一。談ニ因果一。説ニ公案一。久レ之。松際月來。振レ衣而起。踏ニ樹影一而歸。此日便非ニ虚度一。

案を説く、之を久しうして松際に月来れば、衣を振ひて起ち、樹影を踏みて歸る、此日便ち虚度に非ず。(一七)

(一) かすかにぼんやりとして見え隠れすること (二) 嵯しく峭しくして險しく高く聳え立つこと (三) 窈窕は奥ゆかしきこと (四) 塞は要塞にして萬里の長城あたりの山なり (五) 草木なくして赤色にしてうづ高き岡阜をいふ (六) 桂林は今の廣西省に在り (七) 綿衍は長く相連なりて廣がれること、廱博は廣く大きくわたれること (八) 險しく高く聳えて、且山の排置の巧にして美麗なること (九) 門を塞きて外に出でずその身を世より避け隠すこと退隠生活をいふ (一〇) 山を出でゝ世俗の中に入ること (一一) 五色の雲は仙人の御する所なり、依りて此は世を退いて仙人と同じ生活を爲すをいふ (一二) 巖の間より流れ出づる泉の一筋通ずること (一三) 潺湲は水の少しく流るゝ貌 (一四) 衲子は僧侶の輩なり (一五) 佛教の原因結果の理を談ずること (一六) 禪家にて佛祖の機縁を公案といふ、公府の案牘に喩へたる語にして、悟道に關する公法なり (一七) 虚しく時間を費すこと

結ニ廬人境一。植ニ杖山阿一。林壑地之所レ豐。烟

廬を人境に結び、杖を山阿に植て、(一)林壑の地の豐なる所、(二)烟霞の性の適する所、(三)丹桂に蔭し、(四)白茅を藉き、濁酒一杯、清琴數弄、誠に樂むに足れり。○(五)輞

穠濃寒。花之夕也。檀脣烘日。媚體藏風。花之喜也。暈酣神斂。烟色迷離。花之愁也。欹枝困檻。如不勝風。花之夢也。嫣然流眄。光華溢目。花之醒也。

く赤きこと、美人の容貌なり、媚體はこびへつらふが如き身なりをいふ（一〇）暈酣は盛に目まひのする如く花の動くこと、神斂は花心の引きしまること、烟色迷離はもや霞の景色のちら／＼すること（一一）そばだちたる枝は欄檻に困められて枝の垂るゝこと（一二）嫣然はにつこりと少しく笑ふ貌、流眄はながしめにして視ること

春山淡冶而如咲。夏山蒼翠而如滴。秋山明淨而如粧。冬山慘淡而如睡。海山微茫而隱見。江山巖厲而峭卓。溪山窈窕而幽深。塞山童頳而堆阜。桂林之山。綿衍龐博。江

春山は淡冶にして咲ふが如く、夏山は蒼翠にして滴るゝが如く、秋山は明淨にして粧ふが如く、冬山は慘淡にして睡るが如く、海山は微茫（一）にして隱見し、江山は巖厲（二）にして峭卓に、溪山は窈窕（三）にして幽深に、塞山（四）は童頳（五）にして堆阜に、桂（六）林の山は綿衍龐博（七）に、江南の山は峻（八）峭巧麗なり。山の形色同じからざること此の如し。○門を杜いで影を避く、山を出づるの一事は、夢寐の間に到らず、春晝花陰、猿鶴（九）俺臥す、亦（一一）五雲の餘蔭（一〇）なり。○白雲徘徊して、終日去らず、巖泉（一二）一支、齋中に潺湲（一三）たり。春の晝秋の夕、既に清且つ幽なり。大に隱者の樂を得、惟一日の移り去らんことを恐る。○衲子（一四）輩と松林の石上に坐し、因果（一五）を談じ、公（一六）

設不㆑關。簾鈎欲㆑下。横㆑軒有㆓狻猊之鼎㆒。隱㆑几皆龍馬之文。流㆓覽霄端㆒。寓㆓視濠上㆒。○山經㆑秋而鬱淡。秋入㆑山而倍清。○山居有㆓四法㆒。樹無㆓行次㆒。石無㆓位置㆒。屋無㆓宏肆㆒。心無㆓機事㆒。○花有㆓喜怒寤寐曉夕㆒。浴㆑花者得㆓其候㆒。乃爲㆓膏雨㆒。淡雲薄日。夕陽佳月。花之曉也。狂號連雨。烈

（一四）花に浴する者其候を得れば乃ち（一五）膏雨と爲す。（一六）淡雲薄日、夕陽佳月は、花の曉なり。（一七）狂號連雨、烈燄濃寒は、花の夕なり。（一八）檀脣日に烘り、媚體風を藏するは、花の喜なり。（一九）暈酣に神斂まり、烟色迷離なるは、花の愁なり。（二〇）欹枝檻に困み、風に勝へざるが如きは、花の夢なり。（二一）嫣然として流眄し、光華日に溢るゝは、花の醒なり。

（一）梧は梧を以て作りたる脇息なり（二）唐の陸龜蒙姑蘇に在り、其門に巨石あり、遠祖陸績鬱林の守となり罷め歸るとき裝なし、舟輕くして海を越ゆべからず、石を取りて重と爲す、人その廉を稱して鬱林石と號すといふ（三）夕日の照らす林のあたりに芭蕉の葉の落ちてその下に鹿の眠れるあり（四）雪を入れて茶を煮る鐺のあたりには茶を煮る烟のひるがへりて鶴は烟を避けて近かづかずとなり（五）人なくして空虛なる室に風の入り來ること（六）簾鉤は簾をかゝぐる曲りかね（七）狻猊（シゲ）の形を成せる鼎あること（八）几の模樣は皆龍や馬の模樣をなせること（九）大空の端を彼是視廻すこと（一〇）濠の上を目を寄せて濠中の魚を觀つむること、濠濮の樂是なり（一一）順序正しく列なり並ばぬと（一二）大に宏く大ならざること（一三）心中に利害を計る事なきをいふ（一四）花の落ちて身にふりかゝるは花に浴するが如きなり（一五）丁度その時期を得て落花に浴すればつよき雨に濕ひたるが如し、故に膏雨と爲すなり（一六）うすき雲、光薄き太陽、夕日の射すこと、佳き月の景色（一七）狂號は風の吹すさぶこと、連雨は雨の降り續くこと、烈燄は烈しき暑さ、濃寒は強き寒さ（一八）檀脣は紅色の脣は日に烘ぶられたるが如

與㆓湖頭煙水㆒相映帶㆖一派蒼翠之色。或從㆓樹杪㆒流來。或自㆓溪邊㆒吐出。支㆑節散步。覺㆘數年塵土肺腸。俱爲㆗洗淨㆖。○四月有㆓新筍。新茶。新寒豆。新含桃。綠陰一片。黃鳥數聲。乍晴乍雨。不㆑煖不㆑寒。坐間非㆑雅非㆑俗。半醉半醒。于㆓是剛時。如㆘從㆓鶴背㆒飛下來㆖耳。

多くの木の生ひ茂りたること　(四) 嶺の如くなれる雲を掃ふまでに高く聳ゆること　(五) 谷川の水の寒くして身にしむをいふ　(六) 鐘の聲の引き續くこと清らかにして遠く響くをいふ　(七) 咬嚶は聲の淸くして朗らかなること　(八) すぐれて物凄くあはれなるをいふ　(九) 靑々としたる畑に麥が浪の如く高く低く連なること、層々は相かさなり續くをいふ　(一〇) 樹木の末より流るゝが如くあらはれ來ること　(一一) 塵土に汚れたるが如く俗世界の汚濁にけがれたる心腸　(一二) 風雅にもあらず、鄙俗にもあらず、よくその宜しきを得たること

名從㆑刻㆑竹。源分㆓渭畝之雲㆒。倦以據㆑梧。淸夢㆓鬱林之石㆒。夕陽林際。蕉葉墮而鹿眠。點雪爐頭。茶烟飄而鶴避。○高堂客散。虛戶風來。門

名從ひて竹に刻めば、源は渭畝の雲を分ち、倦みて以て(一)梧に據れば、淸に(二)鬱林の石を夢む。夕陽の林際、(三)蕉葉墮ちて鹿眠り、(四)點雪爐頭、茶烟飄りて鶴避く。○高堂客散じ、(五)虛戶風來り、門設けたれども關ぢず、(六)簾鉤下さんと欲す。軒に横たはりて(七)狻猊の鼎あり、(八)几に隱れば皆龍馬の文、(九)霄端を流覽し、(一〇)滾上を寓視す。○山は秋を經て轉ゝ淡く、秋は山に入りて倍ゝ淸し。○山居に四法あり、樹(一一)行次なく、石位置なく、(一二)屋宏肆なく、(一三)心機事なし。○花に喜怒寤寐曉夕あり、

爭棲競啄。宿ㇾ水鳴雲。聲悽ニ夜月一。秋飈蕭瑟。聽ㇾ之黯然。遂使ニ一夜西風。寒生露白一。

萬山深處。一泓澗水。四週削壁。石磴嶄嵓。叢木蓊鬱。老猿充ニ其中一。古松屈曲。高拂ニ雲嶺一。野鶴時棲ニ其頂一。每ニ晴初霜旦一。林寒澗肅。高猿長嘯。屬引淸遠。風聲鶴唳。嘹嚦警ㇾ霜。聞ㇾ之令ニ人凄絕一。○春雨初霽。園林如ㇾ洗。開ㇾ扉閒望。見下綠晴麥浪層層。

萬山深き處、一泓の澗水、四週削壁、(一)石磴嶄嵓、(二)叢木蓊鬱たり。(三)老猿其中に充し、古松屈曲し、高さ雲嶺を拂ふ、(四)野鶴時に其頂に棲み、晴初霜旦毎に、林寒く澗肅として、(五)高猿長嘯し、(六)屬引淸遠、風聲鶴唳、(七)嘹嚦霜を警しむ、之を聞けば人をして凄絕たらしむ。(八)○春雨初めて霽れ、園林洗ふが如し。扉を開いて閒望すれば、(九)綠晴麥浪層層として、湖頭の煙水と相映帶するを見る。一派蒼翠の色、或は樹杪より流れ來り、或は溪邊より吐き出す。節に支へられて散歩すれば、數年塵土の(一〇)肺腸、俱に洗淨を爲すを覺ゆ。(一一)○四月には新筍、新茶、新寒豆、新舍桃あり、綠陰一片、黃鳥數聲、乍ち晴れ乍ち雨ふり、煖ならず寒ならず、坐間雅に非ず、(一二)俗に非ず、半醉半醒、是の爾時に于て、鶴背より飛び下りて來るが如きのみ。

(一) 巖の險しく切り立ちたること削りたる壁の如きをいふ　(二) 石の阪道の險しく立ちたるがごときをいふ　(三)

絮起二風中一下、峰堆レ玉。鵝翻二城角一。瓦墨舗レ銀。無レ樹飄レ花。片片絵二子瞻之壁一。不レ粧散レ粉。點點摻二原憲之羹一。飛霰入レ林。廻風折レ竹。徘徊凝覽。以發二奇思一。畫下冒レ雪出レ雲之勢。呼二松醪一飲之景上。擁レ爐煨レ芋。欣然一飽。隨作二雪景一幅一。以寄レ僧賞。○孤帆落照中。見二青山映帶一。征鴻廻レ渚。

以て僧に寄せて賞せしむ。〇孤帆落照の中、青山の映帯を見る、征鴻渚を廻り、争ひて棲み、競ひて啄む。水に宿する鳴雲、聲夜月より悽し、秋飈蕭瑟、之を聴いて黯然たり。逐に一夜西風をして寒生じ露白からしむ。

(一) 雲の盛んにたなびきわたること (二) 石の磯のあたりを水の流るゝをいふ (三) 珠の如き雨のばら〳〵と降り來ること (四) 一つの燈火のちら〳〵すること (五) 山寺の清らかにして潔しくさつぱりとしたること (六) ゆつたりとして楽しむこと (七) 松風の聲を大風の吹くかと誤りて驚くこと (八) 芭蕉のある庭園にて玉を鳴らすが如く雨の葉に落つる聲あるをいふ (九) 鼓吹は鼓を撃つ聲 (一〇) 或はまばらに或は打ちつゞきて入りまじりて聲の發すること (一一) 閑静なる心情をあらはし出すこと (一二) 絮は綿なり、綿の如き雪が風の吹き来る中に起ること (一三) 多くの山々には玉を堆たかく積みたるが如く、雪の積もれること (一四) 子瞻は蘇東坡の字なり、東坡黄州に在る時、雪中亭を作り四壁に雪の景を描かきしことあり、此は雪の片々降ること東坡の亭壁に雪景を描かきたるが如しとなり (一五) 粉は白粉なり、化粧をせざるに白粉を散らしたるが如く雪の降れること (一六) 粲は米の粉なり、此は米の粉を飯にまぜたるが如く白きこと、顔蒸家貧にして食乏しく飯の中に米の粉を和して之を食ふ (一七) よく注意して雪景を見つむること (一八) 此は恐くは誤字あらん、強ひて解すべからず (一九) 一艘の帆かけ舟の夕陽の照らす中を行くこと (二〇) 飛び行く鴻が水ぎはを廻りて飛ぶをいふ (二一) 秋風の吹く聲の物寂しきこと (二二) 黯然は心の悲しき貌

寒牕。霜夜不レ寐。徘二徊松竹下一。四山月白。霜墮二氷柯一。相與詠二李白靜夜篇一。便覺二冷然寒風一。就レ寢復坐二蒲團一。從二松端一看レ月。煮レ茗佐レ談。竟二此夜樂一。

するをいふ　(八)花の咲き亂れ、又木の生ひ茂れること　(九)襟袖が水に濯はれたるが如く清くなるをいふ　(一〇)寒き窓の下に在りて膝を抱きて坐すること　(一一)氷のかゝれるかた[illegible]　(一二)靜夜思に云ふ、牀前看二月光一、疑是地上霜、擧レ頭望二山月一、低レ頭思二故郷一と

雲晴靉靆。石楚流滋。狂飈忽捲。珠雨淋漓。黃昏孤燈明滅。山房清曠。意自悠然。夜半松濤驚レ颶。蕉園鳴レ琅。窾坎之聲。疎密間發。愁樂交集。足レ寫二幽懷一。〇四林皆雪。登眺時。見三

雲晴れて靉靆たり(一)、石楚流滋く(二)、狂飈忽ち捲き、珠雨淋漓たり(三)。黃昏孤燈(四)明滅し、山房清曠(五)にして、意自ら悠然たり(六)。夜半松濤(七)を颶かと驚き、蕉園琅(八)を鳴らせば、窾坎(九)の聲、疎密間發(一〇)し、愁樂交〻集り、幽懷(一一)を寫すに足る。〇四林皆雪なれば、登眺の時、絮(一二)の風中に起るを見る、千峰は玉を堆くし、鴉は城角に翻へり、萬壑は銀を鋪き、樹なくして花を飄へし(一三)、片片子瞻(一四)の壁に繪す、粧はずして粉(一五)を散じ、點點原憲(一六)の羹に糝す、飛霰林に入り、廻風竹を拆く、徘徊して凝覽(一七)し、以て奇思を發し、雪を冒し雲を出づるの勢、呼松醪飲(一八)の景を畫き、鑪を擁して芋を煨り、欣然として一飽し、隨ひて雪景一幅を作りて、

山房置古琴一枚。質雖非紫瓊綠綺。響不在焦尾號鐘。置之石床。快爲數弄。深山無人。水流花開。淸絶冷絶。○密竹軼雲。長林蔽日。淺翠嬌靑。籠烟惹濕。構數椽其間。竹樹爲籬。不復葺垣。中有一泓流水。淸可漱齒。曲可流觴。放歌其間。離披蒨蔚。神滌意閑。○抱影

山房に古琴一枚(一)を置く、質は紫瓊綠綺(二)に非ず、響は焦尾號鐘(三)に在らずと雖も、之を石床に置き、快く數弄を爲せば、深山人無く、水流れ花開き、淸絶冷絶(四)たり。○密竹雲を軼ぎ、長林日を蔽ひ、淺翠嬌靑(五)、烟(六)を籠め濕を惹く、數椽を其間に構へ、竹樹を籬と爲し、復た垣を葺めず、中に一泓の流水ありて、淸は齒を漱ぐべく、曲(七)は觴を流すべし。其間に放歌すれば、離披蒨蔚(八)、神滌(九)はれ意閑なり。○影を寒窻(一〇)に抱きて、霜夜寐ねず、松竹の下を徘徊すれば、四山月白く、霜は氷柯(一一)に墮つ。相與に李白の靜夜思(一二)を詠ずれば、便ち冷然たる寒風を覺ゆ、寢に就き復た蒲團に坐し、松端より月を看、茗を煮て談を佐け、此の夜樂を竟ふ。

(一) 一枚は一個の如し (二) 紫色の瓊玉と綠色のあや絹 (三) 焦尾は蔡邕の作りし琴、吳人に桐を焚きてかしぐ者あり蔡邕火烈の聲を聞きその良材なるを知り、因りて之を請ひ琴を作る、果して美音あり其尾猶焦げたり、故に焦尾と名づく (四) すぐれて淸く、すぐれて淸閑なること (五) 薄き翠色と、濃くして美しき靑色 (六) 霞の如きもやを立ちこめ、又靄翠の爲めに濕り氣を惹き起す程に見ゆること (七) 水の曲れる所には觴をうかべて曲水の宴し

灌叢簇木。蔦蘿駢縺。亭榭翼然。夜半鶴唳清遠。恍如下宿二花塢一聞中哀猿啼嘯上。嘹嚦驚霜。初不レ辨下其爲二城市一爲中山林上也。○一抹萬家。煙横二樹色一。翠樹欲レ流。淺深間布。心目競觀。神情爽滌。○萬里澄空。千峰開霽。山色如レ黛。風氣如レ秋。濃陰如レ幙。煙如レ縷。笛響如二鶴唳一。經唄如二唔咿聲一。溫言如二春絮一。冷語如二寒氷一。此景不レ應二虛擲一。

心目競ひ觀て、神情爽滌たり。(一三)○萬里澄空、(一四)千峰開霽し、山色黛の如く、(一五)風氣秋の如く、濃陰(一六)は幙の如く、煙は縷の如く、笛響は鶴唳の如く、經唄(一七)は唔咿の聲の如く、溫言は春絮(一八)の如く、冷語は寒氷の如し、此景應に虛しく擲つべからず。

(一) 山のくまに在る小さき家屋、奥深き處まで相連なるしづかなる小路 (二) 綠玉は青々としたる玉の如き竹をいふ (三) 逶迤はうねうねとして長く連なりわたること (四) 木の皮の魚鱗の如く木の葉の鬣を立てたるが如くなれること (五) 灌木の叢がり生じ又色々の入りまじりたる木の生ずること (六) つた、かづらの如き蔓草相並びて纏りたるが如く生ずること (七) 亭はあづまや、榭は臺の上に屋あるもの、あづまやの一種なり、翼然は鳥の翼を張りたるが如く正しくなれること (八) 鶴の唳く聲が淸らかにして遠く響きわたること (九) 花草の植ゑられたる堤のこと (一〇) 嘹嚦は朗らかに淸き聲 (一一) 一帶に相連りて多くの家々の在るをいふ (一二) 青々としたる樹の色は水の流るゝが如き趣あること (一三) 爽滌はさはやかにして水にて滌ひたるが如く淸きをいふ (一四) 萬里の間すみわたりて空澄たること (一五) 眉墨を塗りたるが如く青々としたるをいふ (一六) 濃厚なる木の陰は幕を張りたるが如く相連ること (一七) 經文を讀む聲は讀書の聲の如きをいふ (一八) 春の頃には絮は溫煖なり、故に溫和なる言語に喩ふ

腋生レ風。徐ニ歩草玄亭。芰荷出レ水。風送ニ清香。魚喜ニ冷泉。凌レ波跳躍。因陟ニ東皐之上。四望。渓山罨靄。平野蒼翠。激氣發レ于ニ休濼。好風送ニ之水涯。手揮ニ麈尾。清興洒然。不レ待ニ法雨涼雪。使ニ人火宅之念都冷。

然として、法雨涼雪(一三)(一四)を待たずして、人をして火宅(一五)の念都て冷かならしむ。

(一) 蒲褐は蒲を編みて作りたる衣服、蒲は細き藺の一種にて草の蒲と異なる (二) 屈原の著したる離騷經のこと (三) 風に吹かるゝこと、風にて蹄をかくるが如きをいふ (四) 蘧然は驚く貌 (五) 櫛はクシのこと (六) 雲芽は茶のこと (七) 芰荷は蓮のこと (八) 魚のをどりはねること (九) 東方に在る岡阜のこと (一〇) 畫家に罨畫あり、色の彩色を錯へて畫くこと (一一) 麈尾は拂子のこと (一二) 清らかなる興味のさつぱりとして汚れのなきこと (一三) 法雨は佛家の語、佛法の人を感化すること、時雨の草を被るが如きをいふ (一四) 涼雪は人の欲心の火の如きを消して欲心を起さしめざること雪の寒冷ならしむるが如きをいふ (一五) 火宅は種々の欲心の盛なること火災中の家に居るが如きをいふ

山曲小房。入レ園窈窕幽徑。綠玉萬竿。中匯ニ澗水ー爲ニ曲池。環レ池竹樹雲石。其後平岡逶迤。古樹鱗皴。松下皆

山曲(一)の小房、園に入れば窈窕たる幽徑(二)、綠玉萬竿、中に澗水を滙らして曲池を爲り、池を環りて竹樹雲石あり、其後は平岡逶迤(三)、古樹鱗皴たり(四)。松下は皆灌叢(五)篠木(六)、蔦蘿駢織(七)、亭樹翼然たり、夜半鶴唳淸遠(八)、恍として花塢(九)に宿して哀猿啼嘯し、嘹嚦(一〇)霜に驚くを聞くが如し。初より其城市たると山林たるとを辨ぜざるなり。〇一抹(一一)の萬家、煙は樹色に横はり、翠樹(一二)流れんと欲す、淺深間に布く、

風夜帶秋。○春山豔冶如笑。夏山蒼翠如滴。秋山明淨如粧。冬山慘淡如睡。○眇眇乎春山。瀟冶而欲笑。翔翔乎空絲。綽約而自飛。

れば天が下垂して樹よりも低く見ゆるなり　(一三)江水淸ければ月水に映じて月と人と相近きが如く見ゆるなり　(一四)深き水の淵の淸らかなれば月水に映ずるをいふ　(一五)松風の吼ゆる聲は夜之を聞けば秋の時の趣あるをいふ　(一六)なまめかしくして　(一七)青々としたる色の滴り落つるが如し　(一八)はつきりとして淸らかなること、薄化粧したるが如し　(一九)物すごくして寂しきこと　(二〇)眇々は渺々に同じ、遙かにわたりてぼつとしたること　(二一)あつさりと薄き化粧を爲して飾ること　(二二)翔々は鳥のかけるが如くたなびけること　(二三)かげろふこのと、空中に絲の横はるが如く見ゆるを以て空絲といふ　(二四)綽約はゆつたりとして迫らざること

盛暑持蒲榻。舖竹下。臥讀騷經。樹影篩風。濃陰蔽日。叢竹蟬聲。遠遠相續。蘧然入夢。醒來取櫛髮。汲石澗流水。烹雲芽一啜。覺兩

盛暑(一)蒲榻を持ちて竹下に舖き、臥して騷經(二)を讀めば、樹影(三)風に篩はれ、濃陰日を蔽ひ、叢竹の蟬聲、遠遠として相續き、(四)蘧然夢に入る、醒め來りて(五)櫛を取りて髮を櫛り、石澗の流水を汲み、(六)雲芽を烹て一たび啜れば、兩腋に風を生ずるを覺ゆ。草玄亭を徐歩すれば、(七)芰荷水を出で、風は淸香を送り、魚は冷泉を喜び、波を淩いで(八)跳擲す。因りて(九)東皐の上に陟り四望すれば、溪山は(一〇)罨畫にして、平野は蒼翠、激氣林瀑より發し、好風之を水涯に送る、手に(一一)麈尾を揮へば、(一二)淸興洒

●几分春色、全憑₂狂花疎柳₁安排。一派秋容、總是紅蓼白蘋粧點。○南湖水落。粧臺之明月猶懸。西廊烟銷、繡塔之彩雲不レ散。○中庭蕙草銷レ雪。小院梨花夢レ雲。○秋竹沙中淡。寒山寺裡深。○人冷因₂花寂₁。湖虛受₂雨喧₁。○野曠天低レ樹。江淸月近レ人。○潭水寒生レ月。松

幾分の春色、全く狂花疎柳に憑りて安排し、一派の秋容、總て是れ紅蓼白蘋粧點す。○南湖水落ちて、粧臺の明月猶ほ懸り、西廊烟銷えて、繡塔の彩雲散ぜず。○中庭の蕙草雪を銷し、小院の梨花雲を夢む。○秋竹沙中に淡く、寒山寺裡に深し。○人の冷かなるは花の寂に因り、湖の虛しきは雨喧を受くればなり。○野曠しくして天樹より低し、江淸くして月人に近し。○潭水は寒くして月を生じ、松風は夜秋を帶ぶ。○春山は艷冶笑ふが如く、夏山は蒼翠滴るが如く、秋山は明淨粧ふが如く、冬山は慘淡睡るが如し。○眇眇乎たる春山は、澹冶にして笑はんと欲し、翔翔乎たる空絲は、綽約にして自ら飛ぶ。

(一) 咲き亂れたる花疎にある柳によりてならべ置かるゝと (二) 紅色のたで、白色の水草が秋の景色を美しく裝飾すると (三) 南湖は湖北省鄂城縣に在り、一に五大湖と名づく (四) 粧臺は化粧するに用ふる鏡臺、圓鏡の如き明月の天に懸ること (五) 西廊は蓋し山の名、西廊山のもやの消え失すること (六) 刺繡したる塔の如く立てる美しき雲の散ぜざるをいふ (七) 蕙草一名佩蘭、香草なり、蕙草の花の雪とまがふこと (八) 梨花の白く咲ける處は雲のたなびけるが如きをいふ (九) 秋の頃竹が沙中に淡くあつさりと立てること (一〇) 人の物寂しきは花落ちて寂しきによるをいふ (一一) 湖水の虛くして虛しきは雨の降る喧しき聲を受くるによるをいふ (一二) 原野曠漠として廣け

景。春煖秋涼。負レ杖踊レ躍。逍遙自樂。臨レ池觀レ魚。披レ林聽レ鳥。濁酒一杯。彈琴一曲。求二數刻之樂一。庶幾居常以待レ終。〇築二室數楹一。編レ槿爲レ籬。結レ茅爲レ亭。以二三畝一蔭二竹樹一。栽二花果一。二畝種二蔬菜一。四壁清曠。空二諸所有一。蓄二山童一。灌レ園薙レ草。置二二三胡床一著二亭下一。挾二書劍一。伴二孤寂一。携二琴奕一。以遲二良友一。此亦可二以娛一レ老。〇一徑陰開。勢隱二蜿蜒之致一。雲到成レ迷。半閣孤懸。影廻二縹緲之觀一。星臨可レ摘。

栽ゑ、二畝は蔬菜を種ゑ、四壁淸曠、(九)諸の所有を空しくし、山童を蓄へて、園に灌ぎ草を薙らしめ、二三の胡床を置きて亭下に著け、(一〇)書劍を挾み、孤寂を伴とし、(一一)琴奕を携へ、以て良友を遲つ、此れ亦以て老を娛しむべし。〇一徑陰に開け、(一二)勢蜿蜒の致を隱し、(一三)雲到りて迷を成し、半閣孤り懸りて、(一四)影縹緲の觀を廻し、(一五)星臨みて摘むべし。(一六)

(一) 上方に居る貴人の遊 (二) 談話久しくして茗は寒え、酒も冷えて、賓客と主人とが意氣相合うて賓たり主たるを忘るゝなり (三) 春花秋葉の風景のよき晨と美しき風景 (四) 逍遙は徜徉自適して喜び樂むの意なり (五) 此を以て平生の行爲となすこと (六) 生命の終りて死する時期を待ち安樂に死するをいふ (七) 五六本の柱のある小なる室を築造すること (八) 槿はムクゲなり槿の木を編みて籬垣となすこと (九) 四方の壁をつくる處は淸らかに空しくして開明するをいふ (一〇) 一切の物を置かず空室にすること (一一) 孤立して物寂しき境を吾が朋友とすること (一二) 琴と棋とを携ふること (一三) 一條の小路うねうねとしたる蛇や蟺(ウナギ)の屈曲するが如き趣あること (一四) 半閣は一閣に同じ、一つの高閣は孤立して高く聳ゆること、天にかゝるが如きをいふ (一五) 遙に遠くたなびける眺望あること (一六) 星近くして之を摘み取ることを得べき程なりとの意

吟思忽起。隨歌二一古詩一以適二清興一。○凡靜室。須下前栽二碧梧一。後種二翠竹一。前簷放歩一。北用二暗窓一。春冬閉レ之以避二風雨一。夏秋可下開以通中涼爽上。然碧梧之趣。春冬落レ葉。以舒二負暄融和之樂一。夏秋交レ蔭。以蔽二炎爍蒸烈之威一。四時得レ宜。莫二此爲一レ勝。

ること (八) 心を松竹の枝に寄せて之を樂しむこと (九) 無欲にして心のさつぱりとするをいふ (一〇) 披覽は書物を披いて之を覽ること (一一) 花の香花の色人に追り來ること (一二) 淸らかなる興味 (一三) 前の欄は開け放ちて自由に歩行することを得べからしむるなり (一四) 暗窓は所謂無窓窓にして常時は之を閉ぢて暗くし要あれば之を開きて明くするもの (一五) 涼しくして爽かなる空氣を通ずること (一六) 負暄は背を太陽に向けて暖氣を取ること、融和は春の暖和の氣のこと (一七) 熱くして物を溶かす程の暑氣と蒸すが如く烈しき暑さ

家有二三畝園一。花木蔚蔚。客來煮レ茗。談下上都貴遊。人間可レ喜事上。或茗寒酒冷。賓主相忘。其居與二山谷一相望。暇則歩二草徑一相尋。○良辰美

家に三畝の園あり、花木蔚蔚たり、客來れば茗を煮、(一)上都の貴遊、人間喜ぶべきの事を談じ、或は茗寒え酒冷えて、(二)賓主相忘る、其居山谷と相望み、暇あれば則ち草徑を步して相尋ぬ。(三)○良辰美景、春煖秋涼、杖を負ひ履を躡み、(四)逍遙して自ら樂み、池に臨みて魚を觀、林を披きて鳥を聽き、濁酒一杯、彈琴一曲、數刻の樂を求め、庶幾くは(五)居常にして以て終りを待たん。(六)○(七)室數楹を築き、(八)權を編みて籬と爲し、茅を結びて亭と爲し、三畝を以て竹樹に蔭し、花果を

以二江湖一相期。烟霞相許。付二同心之雅會一。託二意氣之良遊一。或閉レ戸讀レ書。累月不レ出。或登レ山玩レ水。竟日忘レ歸。斯賢達素交。蓋千年之一遇。○蔭二映巖流之際一。偃二息琴書之側一。寄二心松竹一。取二樂魚鳥一。則淡泊之願。于レ是畢矣。○庭前幽花時發。披覽既倦。每レ啜レ茗對レ之。香色掠レ人。

江湖(一)を以て相期し、烟霞(二)相許し、同心(三)の雅會に付し、意氣(四)の良遊に託し、或は戸を閉ぢて書を讀み、累月出でず、或は山に登り水を玩び、竟日歸るを忘れる、斯れ賢達の素交(五)、蓋し千年の一遇なり。○巖流(六)の際に蔭映し、琴書(七)の側に偃息し、心(八)を松竹に寄せ、樂を魚鳥に取れば、則ち淡泊(九)の願、是に于て畢る。○庭前の幽花時に發く、披覽(一〇)既に倦めば、每に茗を啜りて之に對し、香色(一一)人を掠め、吟思忽ち起れば、隨ひて一古詩を歌ひて、以て淸興(一二)に適す。○凡そ靜室には、須らく前に碧梧を栽ゑ、後に翠竹を種ゑ、前檐(一三)放歩すべし。北は暗牕(一四)を用ひ、春冬は之を閉ぢて以て風雨を避け、夏秋は開いて以て涼爽(一五)を通ずべし。然れども碧梧の趣、春冬葉を落せば、以て負暄(一六)融和の樂を舒べ、夏秋蔭を交ふれば、以て炎爍(一七)蒸烈の威を蔽ひ、四時宜しきを得る、此より勝ると爲すは莫し。

(一) 相互に江湖に居りて世を避き隱るゝを相約束すること (二) 煙霞たなびく自然の風景を賞するを以て相許すこと (三) 心を同じうするもの相集りて風雅の會を開くこと (四) 意氣相投合したるもの相伴ひて風景を賞するよき遊びを爲すこと (五) 平素よりの交際 (六) 巖峙ち水流るゝ際の物蔭に休むこと (七) 琴や書物のある側に休息す

量大于斗。布被煖餘。黎羹飽後。氣生胸中。充塞宇宙。筆落人間。輝映瓊玖。人能知止。以退爲茂。我自不出。何退之有。心無妄想。足無妄走。人無妄交。物無妄受。炎炎論之。甘處其腴。綽綽言之。無出其右。羲軒之書。未嘗去手。堯舜之談。未嘗虛口。談中和天。同樂易友。吟自在詩。飲歡喜酒。百年昇平。不爲不偶。七十康強。不爲不壽。

じて、宇宙に充塞す。筆人間に落ちて、(五)瓊玖に輝映す。人は能く止るを知り、(六)退くを以て茂と爲す、我は自ら出でず、何の退くことか之れ有らん。心に忘想無く、足に妄走なく、人に忘交無く、物に妄受無く、(七)炎炎として之を論じて、甘んじて其腴に處り、(八)綽綽として之を言ひ、其右に出づ無し。(九)羲軒の書、未だ嘗て手を去らず、堯舜の談、未だ嘗て口に虛しからず、(一〇)中和の天を談じ、(一一)樂易の友と同じく、自在の詩を吟じ、歡喜の酒を飲む、百年の昇平、偶ならずと爲さず、七十の康強、壽ならずと爲さず。

(一) 盆を用ひて瓶を作り水を蓄へて花紋をなすこと (二) 藜を以て羹に和めて羹となすこと (三) 斗は物を量る器一斗を容る、一斗の斛より大、其小を狀す (四) 布を以て造りたる夜着のこと (五) 瓊玖は美しき玉なり、筆頭の世間にわたりて美しき玉と輝き映る様に光采を發し貴重せらるゝこと (六) 退讓するを以て盛なる行爲と爲すをいふ (七) 勢の盛なる貌、此は言論の勢盛なるをいふ (八) 綽々は餘裕のあること (九) 伏羲氏及び軒轅氏の書、伏羲の書は易經にて軒轅の書は黃庭經の類なり (一〇) 中は偏せず倚せず過不及なきこと、和は乖戾なく能く節を得ること 中和の天理を談論すること (一一) 心の樂しくしてすなほなる友

蒲團可㆓以雙趺㆒。煙島雲林興來時。竹杖何妨㆓獨往㆒。○三徑竹間。日華濟濟。固野客之良辰。一偏窻下。風雨瀟瀟。亦幽人之好景。○喬松十數株。脩竹十餘竿。靑蘿爲㆓牆垣㆒。白石爲㆓橋道㆒。流水周㆓于舍下㆒。飛石落㆓于檐間㆒。綠柳白蓮。羅㆓生池砌㆒。時居㆓其中㆒。無㆑不㆓快心㆒。

流水舍下を周り、（一四）飛石檐間に落つ、綠柳白蓮、（一五）池砌に羅生す、時に其中に居れば、快心ならざる無し。

㊀ 柴折戸の門を閉ざゝこと、扃は關貫きを以て戸を扃づること ㊁ 竹を以て作りたる簾なり ㊂ 呢々喃々は燕の語なり ㊃ 詩を吟嘯して、燕の語を佐くること ㊄ 燕も山人も各々己が適とする所を適とすること ㊅ 兩足を組みてあぐらをかきて坐すること ㊆ もやのかゝれる島、雲のたなびける林 ㊇ 竹の杖をつきて獨り散歩するも亦興味あることとなるをいふ ㊈ 漢の蔣詡三經を開き、友人その徑より往來す、此は竹林の中に在る三筋の小路をいふ ㊉ 太陽の光華の動搖して將に日の暮れんとすること （一一） 一偏は一片に同じ、一個の窓の下といふ意 （一二） 風雨の吹き降りして物寂しきこと （一三） 脩竹は長き竹のこと （一四） 高く危き巖石の檐の間に落ちかからんとすること （一五） 池端の石をたゝめる處に列り生ずるをいふ

有㆓屋數間㆒。有㆓田數畝㆒。用㆑盆爲㆑池。以㆑甕爲㆑牖。牆高㆑于㆑肩。

屋數間あり、田數畝あり、（一）盆を用ひて池と爲し、（二）甕を以て牖と爲す、牆は肩より高く、屋は（三）斗より大なり。（四）布被煖かなるの餘、（五）藜羹飽くの後、氣胸中に生

延留燕坐。見懸崖瀑流。壽木垂蘿。閟邃岑寂之處。終日忘返。○每遇勝日。有好懷。袖手吟古人詩足矣。青山秀水。到眼即可舒嘯。何必居籬落下。然後爲己物。

(三)鍾山は江蘇省江寧縣の東北に在り　(四)黄色をなせる家屋にうつりあふこと　(五)博山爐は香爐にて海中に在る博山に象りて作る故に名づく　(六)沈水香は香の名即ち沈香のことなり　(七)心脾の中まですき透ること　(八)人の精神をして此の清き香の處に凝りかたまりて散らしむるをいふ　(九)奥深き谷　(一〇)暫く逗留して打ちくつろぎ坐すること　(一一)けはしきがけの下を急流の水の流るゝこと　(一二)壽木は古木なり、古木にかづらの相纏ひて垂るゝこと　(一三)閟邃は、靜かにして奥深き處、岑寂は山の高くして寂しく靜かなる處　(一四)勝れてよき日、好懷はよき思想の浮べること　(一五)しづかに吟嘯すること　(一六)籬落は家の周圍に繞らす竹垣のこと、陶淵明東籬の下に在り南山を望みて自然に返り之を樂む

柴門不扃。筠簾半捲。梁間紫燕。呢呢喃喃。飛出飛入。山人以嘯詠佐之。皆各適其適。○風晨月夕客去後。

(一)柴門扃せず、(二)筠簾半ば捲く、梁間の紫燕、(三)呢呢喃喃、飛び出で飛び入る、山人(四)嘯詠を以て之を佐け、皆各〻其適を適とす。(五)○風晨月夕客去りし後、蒲團以て(六)雙跏すべく、(七)烟島雲林興來る時、(八)竹杖何ぞ獨り往くを妨げん。○(九)三徑竹間、日華(一〇)澹澹たるは、固より野客の良辰にして、(一一)一個の牕下、風雨蕭蕭たるは、亦幽人の好景なり。○喬松十數株、(一二)脩竹十餘竿、青蘿を墻垣と爲し、(一三)白石を橋道と爲し、

閲覽數十卷而已。杖ㇾ藜躡ㇾ屐。往來窮谷大川。聽流水。看激湍。鑒澄潭。步危橋。坐茂樹。探幽壑。升高峰。不亦樂乎。

天氣清朗。步出南郊野寺。沽酒飲之。半酣半醒。携僧上雨花臺。看長江一線。風帆搖拽。鍾山紫氣。掩映黃屋。景趣滿前。應接不暇。○淨除一室。用博山爐。爇沈水香。香烟縷縷。直透心竅。最使人精神凝聚。○每登高丘。步邃谷。

天氣清朗、步して南郊の野寺を出で、酒を沽ひて之を飲み、半酣半醒、僧を携へて雨花臺(一)に上り、長江一線、風帆(二)搖拽し、鍾山(三)の紫氣、黃屋(四)に掩映するを看ば、景趣前に滿ち、應接に暇あらず。○一室を淨除し、博山爐(五)を用ひて、沈水香(六)を爇けば、香烟縷縷として直に心竅(七)に透り、最も人の精神(八)をして凝聚せしむ。○高丘に登り邃谷(九)を步む每に、延留燕坐(一〇)し、懸崖瀑(一一)流れ、壽木(一二)蘿を垂るゝを見て、悶邃岑寂(一三)の處、終日返るを忘る。○勝日(一四)に遇ひ好懷ある每に、手を袖にして古人の詩を吟ずれば足る。青山秀水、眼に到れば卽ち舒嘯(一五)すべし。何ぞ必ずしも籬落(一六)の下に居り、然る後己が物と爲さんや。

㊀雨花臺は江蘇省江寧縣に在り、岡阜の最高の處に據り、遙に大江を瞰俯して城市に臨み金陵の要地なり、相傳ふ梁の武帝の時法師あり經を此に講ず、天花を雨らす因りて名づくと ㊁風を孕みたる帆かけ舟の搖らぎ動くこと

長松怪石。去墟落。不下一二十里。鳥徑緣崖。涉水于草莽間數四。左右兩三家相望。雞犬之聲相聞。竹籬草舍。燕息其間。蘭菊藝之。臨水時種桃梅。霜月春風。日自有餘思。兒童婢僕。皆布衣短褐。以給薪水。釀村酒而飮之。案有詩書莊周太玄楚辭黃庭陰符楞嚴

長松怪石、墟落(一)を去ること一二十里に下らず、鳥徑(二)崖に緣り、水を草莽の間に涉ること數四、左右の兩三家相望み(三)、雞犬の聲相聞え、竹籬の草舍(四)、其間に燕處し(五)、蘭菊をば之に藝ゑ、水に臨みて時に桃梅を種う。霜月春風(六)、日に自ら餘思あり、兒童婢僕、皆布衣短褐(七)、以て薪水を給し、村酒を釀して之を飮む。案に(八)詩書・莊周・太玄・楚辭・黃庭・陰符・楞嚴・圓覺數十卷あるのみ、藜(九)を杖つき屐を躡みて、窮谷大川を往來し、流水を聽きて激湍(一〇)を看、澄潭に鑒み、危橋(一一)を歩み、茂樹に坐し、幽壑を探り、高峰に登る、亦樂しからずや。

(一) 家あとのみ存する村落 (二) 鳥の通行する如き細き小路は崖により草むらの間を流る、水を渉ること數四なり (三) 人家の相連なりて接續すること (四) 竹の籬垣を繞らせる草葺の人家 (五) 燕は安なり、相安んじて散在するをいふ (六) 陰暦七月の秋の月と春の風 (七) 短き毛織の服、賤者の服なり (八) 詩經と書經、莊周の著せる莊子、揚雄の著せる太玄經、屈原の著せる楚辭、黃帝の傳說を編せし黃庭經、黃帝の撰と稱する陰符經、楞嚴圓覺共に佛氏の書なり (九) 藜はアカザ、藜を以て作れる杖をつくこと (一〇) 激しく流るゝ水の瀬を看ること (一一) 危くして墜ちんとする橋

不レ却。酒行有レ醉。醉欲レ不レ歸。

淸晨林鳥爭鳴。喚二醒一枕春夢一。獨黃鸝百舌。抑揚高下。最可二人意一。○高峰入レ雲。淸流見レ底。兩岸石壁。五色交レ輝。靑林翠竹。四時俱備。曉霧將レ歇。猿鳥亂鳴。日夕欲レ頽。沈鱗競躍。實欲界之仙都。自二康樂一以來。未レ有下能與二其奇一者上。○曲徑烟深。路接二杏花酒舍一。澄江日落。門通二楊柳漁家一。

淸晨に林鳥爭ひ鳴き、一枕の春夢を喚び醒す。獨り黃鸝(一)百舌、抑揚高下(二)、最も人意に可なり。○高峰雲に入り、淸流底を見る、兩岸の石壁(三)、五色輝を交へ、靑林翠竹、四時俱に備はり、曉霧將に歇まんとし、猿鳥亂鳴し、日夕頽れ(四)んと欲して、沈鱗(五)競ひて躍る、實に欲界(六)の仙都、康樂(七)より以來、未だ能く其奇に與かる者あらず。○曲徑烟深く、路は杏花(八)の酒舍に接す、澄(九)江日落ち、門は楊(一〇)柳の漁家に通ず。

(一) 黃鸝は黃鶯と同じ、羽の色黃にして好音なり、カナリヤに似たり、我邦のウグヒスと同じからず、百舌はモヅなり (二) 抑揚は聲を揚げ下げすること、高下は聲を高くし又は低くすること (三) 岩石の種々の色をなして各互にかゞやきあふこと (四) 夕方太陽の西山に頽れ落ちんとするをいふ (五) 水中に沈める魚のこと (六) 欲界は世俗の社會なり、此景は世俗の中に於ける仙人の都會の如く俗離れしたる所あるをいふ (七) 康樂は謝康樂なり、晉の謝靈運康樂公に封ぜらる、故に康樂といふ、風流の人にて詩を善くせり (八) 杏の花の咲ける所に在る酒屋なり (九) 澄みわたれる江水の邊に日の入れるをいふ (一〇) 門は楊柳のある漁父の家にその路の通ずるをいふ

有レ墻。墻欲レ低。墻内有レ松。松欲レ古。松底有レ石。石欲レ怪。石面有レ亭。亭欲レ朴。亭後有レ竹。竹欲レ疎。竹盡有レ室。室欲レ幽。室旁有レ路。路欲レ分。路合有レ橋。橋欲レ危。橋邊有レ樹。樹欲レ高。樹陰有レ草。草欲レ青。草上有レ渠。渠欲レ細。渠引有レ泉。泉欲レ瀑。泉去有レ山。山欲レ深。山下有レ屋。屋欲レ方。屋角有レ圃。圃欲レ寛。圃中有レ鶴。鶴欲レ舞。鶴報レ有レ客。客欲レ不レ俗。客至有レ酒。酒欲レ

あり、亭は朴ならんことを欲す。亭後に竹あり、竹は疎ならんことを欲す。竹盡きて室あり、室は幽ならんことを欲す。室旁に路あり、路は分れんことを欲す。路合うて橋あり、橋は危からんことを欲す。橋邊に樹あり、樹は高からんことを欲す。樹陰に草あり、草は青ならんことを欲す。草上に渠(三)あり、渠は細からんことを欲す。渠引きて泉あり、泉は瀑(四)ならんことを欲す。泉去りて山あり、山は深からんことを欲す。山下に屋あり、屋は方(五)ならんことを欲す。屋角に圃あり、圃は寛(六)ならんことを欲す。圃中に鶴あり、鶴(七)は舞はんことを欲す。鶴客ありと報ず。客は俗ならざらんことを欲す。客至れば酒あり、酒は卻けざらんことを欲す。酒行れば醉ふあり、醉ひては歸らざらんことを欲す。

(一) 屏は門の前後に設けて以て内外を蔽ふ者なり　(二) 鮮は鮮美　(三) 渠は溝渠　(四) 瀑は水流の急なること　(五) 方は四角　(六) 寛は寛廣なり　(七) 蓋し林逋兩鶴の故事に取る、本叢書世説四七六頁參照

纖嶢準三竺雨。花陰連二野寺一。布帆晴掛二六橋烟一。○閑二步畎畝間一。垂柳飄レ風。新秧翻レ浪。耕夫荷二農器一。長歌相應。牧童稚子。倒騎二牛背一。短笛無レ腔。吹レ之不レ休。大有二野趣一。○夜闌人靜。携二一小童一。立二于清渓之畔一。孤鶴忽唳。魚躍有レ聲。清入二肌骨一。

て來るに譬ふ （七）花咲ける間に通ずる路のうねうねとして折れ曲れるをいふ （八）草の生ずる小路の奥深きをいふ （九）細まやかなる草の上を吹きわたる微弱の風 （一〇）微風曉山の短き棹を以て漕げる舟を迎ふること （一一）枝垂れ楊に殘月の照す景なり （一二）一江の春の水は行く舟を送るに似たり、上文は曉景をいひ、下文は朝景をいへるなり （一三）青々としたる草の色は河に架けたる橋に連なること （一四）浙江省杭縣の上中下三天竺を三竺と稱す、三竺峰のあたり雨降る時曉に舟のとも綱を牽くをいふ （一五）六橋は浙江省杭縣の西湖の蘇堤の上に在り、蘇東坡の架する處なり、六橋のあたり靄たなびく時布帆を晴天に掛けて西湖の上をわたるをいふ （一六）新に植ゑたる稻の苗、風に吹かれて靡くこと浪のひるがへるが如し （一七）うしろ向きに牛の背に乘ること （一八）短き笛の穴のなきもの （一九）田舍びたる趣味 （二〇）夜ふけて人の聲もなく環界の靜なること （二一）その清き氣色が我が身に深くしみ込むこと

門内有レ徑。徑欲レ曲。徑轉有レ屏。屏欲レ小。屏進有レ階。階欲レ平。階畔有レ花。花欲レ鮮。花外

門内に徑あり、徑は曲らんことを欲す。徑轉じて屏あり、（一）屏は小ならんことを欲す。屏より進みて階あり、階は平ならんことを欲す。階畔に花あり、花は鮮（二）ならんことを欲す。花外に墻あり、墻は低からんことを欲す。墻内に松あり、松は古ならんことを欲す。松底に石あり、石は怪ならんことを欲す。石面に亭

謂二之詩一可。則謂二之畫一可。則謂二高人韻士之詩畫一。亦無レ不レ可。集二景第六一。

垂柳小橋。紙窓竹屋。焚レ香燕坐。手握二道書一卷。客來則尋常茶具。本色清言。日暮乃歸。不レ知二馬蹄爲二何物一。花關曲折。雲來不レ認二灣頭一。草徑幽深。落葉但敲二門扇一。○細草微風。兩岸晩山迎二短棹一。垂楊殘月。一江春水送二行舟一。○草色伴二河橋一。錦

垂柳小橋（一）、紙窓竹屋（二）、香を焚きて燕坐（三）し、手に道書（四）一卷を握る、客來れば、則ち尋常の茶具、本色（五）の清言をし、日暮れて乃ち歸り、馬蹄（六）の何物たるを知らず、花關（七）曲折し、雲來りて灣頭を認めず、草徑（八）幽深にして、落葉但門扇を敲くのみ。○細草（九）の微風、兩岸の晩山、短棹（一〇）を迎へ、垂楊（一一）の殘月、一江の春水、行舟（一二）を送る。○草色（一三）河橋に伴ひ、錦纜曉に牽く三竺（一四）の雨、花陰野寺に連り、布帆晴に掛く六橋（一五）の烟。○畎畝の間を閑歩すれば、垂柳風に飄へり、新秧（一六）浪を翻へす。耕夫農器を荷ひ、長歌相應じ、牧童稚子、倒（一七）に牛背に騎り、短笛（一八）腔なく、之を吹いて休まず。大に野趣（一九）あり。○夜闌（二〇）に人靜まるとき、一小童を携へて、清溪の畔に立てば、孤鶴忽ち唳き、魚躍りて聲あり、清肌（二一）骨に入る。

（一）柳の枝の垂るゝあたりに架れる小橋　（二）紙張りの窓、竹を以て柱とせる家屋　（三）打ちくつろぎて坐すること　（四）道書は老子教に關する書籍なり　（五）本來の面目なる老莊の談を爲すをいふ　（六）馬蹄は俗客の馬に騎り

結二廬松竹之間一。閑雲封レ戸。徙二倚青林之下一。花瓣沾レ衣。芳草盈レ階。茶烟幾縷。春光滿レ眼。黄鳥一聲。此時可二以詩一。可二以畫一。而正恐二詩不レ盡言。畫不レ盡レ意。而高人韵士。能以二片言數語一盡レ之者。則

卷六

景

廬を松竹の間に結び、閑雲(一)戸を封じ、青林の下に徙倚(二)し、花瓣衣を沾し、芳草階に盈ち、(三)茶烟幾縷、春光眼に滿ち、黄鳥一聲、此時以て詩す(四)べく、以て畫すべし、而して正に詩は言を盡さず、畫は意を盡さざるを恐る。而して高人韵士、能く(五)片言數語を以て之を盡す者、則ち之を詩と謂ひて可なり。則ち之を畫と謂ひて可なり。則ち高人韻士の詩畫と謂ふも亦不可無し。景第六を集む。

(一) 閑靜なる雲が家の周圍にたなびきわたるをいふ (二) 立ち留まりて去らざること (三) 幾すぢの茶鐺の煙の立ち上ること (四) 此景を詩に作るもよく畫に繪がくもよきをいふ (五) 少しの言語を以て此景を言ひ盡して餘蘊なきをいふ

浸色。空而不著。則物我兩忘。○能於熱地思冷。則一世不受淒涼。能于淡處求濃。則終身不落枯槁。○心事無不可對人語。則夢寐俱清。行事無不可使人見。則飲食俱穩。

（一四）行事人をして見しむべからざる無ければ、則ち飲食倶に穏なり。

(一) 事の緣に隨ひて緣のまゝに行ふはこれやがて緣を消遣するなり (二) 舞ふ蝶と飛ぶ花と共に追ひつ追はれつ相互に忘れて適意なること (三) 盂の中に盛れる水と同じく共に冷きこと (四) 鬆風（ツムジカゼ）の谷中に響きわたるが如く、人の聲の耳に響くのみにして注意して之を聽かざること (五) 人を是とし人を非とする觀念の倶に胸中より去りて留まらざること (六) 月が池の中にその色を浸して池水に映ずること (七) 只空しく水に映ずるのみにして、水の中に附着して離れざるが如きことの無きをいふ (八) 他を我と同體となり一他と我との區別を認めざること (九) 富貴權勢の境に於て貧賤にて權勢なき境遇を念ふこと (一〇) 寂しく悲慘なる境遇 (一一) 淡處は貧賤質素の生活、濃は富貴奢侈の状態 (一二) 落ちぶれて物寂しき境遇をいふ (一三) 人に對して語るべからざることは、不義非道にして恥づべきの事なり (一四) 行事人をして見しむべからざる事は、譎詐陰險にして恥づべきの行事なり

映ニ輕雲一。〇廉所ニ以懲レ貪。我果不レ貪。何必標ニ一廉名一。以來ニ貪夫之側目一。讓所ニ以息レ爭。我果不レ爭。又何必立ニ一讓的一。以致ニ暴客之彎レ弓。〇曲高毎生ニ寡レ和之嫌一。謳唱須レ求ニ同調一。眉修多取ニ入レ宮之妬一。梳洗切莫ニ傾城一。

て高尚なる生活を爲すこと 〔一〇〕廉は角目正しくして欲寡きこと 〔一一〕標は標榜すること、角目正しくして寡欲なりとの名をあらはすをいふ 〔一二〕目を側だてゝ正しく視ざること、恐るゝ狀なり 〔一三〕へり下り讓るといふ。的はまとを立つること、讓を標榜する意 〔一四〕暴客が弓を彎いて反抗するをいふ 〔一五〕曲は歌曲なり、歌曲の高尚なるをいふ 〔一六〕同調は同じ調子なり 〔一七〕眉毛の長くして美きこと、女子の美は眉毛の長きにあり、此は眉毛の長くして美き女子をいふ 〔一八〕髪を梳り面を洗ひて裝飾すること 〔一九〕此は美しく化粧して人の邦國を惑す程の美貌を爲すをいふ、詩に哲婦傾レ城とあり

隨レ緣便是遣レ緣。似下舞蝶與ニ飛花一共適上。順レ事自然無事。若下滿月偕ニ盂水一同圓上。〇耳根似ニ飈谷投レ響。過而不レ留。則是非倶謝。心境如ニ月池

緣(一)に隨ふは便ち是れ緣を遣るなり、舞蝶(二)と飛花と共に適するに似たり。事に順へば自然に無事なり、滿月盂水(三)と偕に同じく圓なるが若し。〇耳根、飈谷(四)の響を投ずるに似て、過ぎて留めざれば、則ち是非(五)倶に謝す。心境、月池(六)色を浸すが如く、空(七)しくして著せざれば、則ち物我(八)兩つながら忘る。〇能く熱地(九)に於て冷を思へば、則ち一世淒涼(一〇)を受けず。能く淡處(一一)に于て濃を求めば、則ち終身枯槁(一二)に落ちず。〇心事(一三)人に對して語るべからざる無ければ、則ち夢寐倶に淸し。

能享者。畢竟是薄福之人。當苦境而反覺甘者。方纔是眞修之士。○半輪新月數竿竹。千帖殘書一盞茶。○偶向水村江郭。放不繫之舟。還泛沙岸草橋。吹無孔之笛。○物情以常無事爲歡顏。世態以善託故爲巧術。○善救時。若和風之消酷暑。能脫俗。似淡月之

甘を覺ゆる者は、方に纔に是れ眞修の士なり。(二)○半輪の新月數竿の竹、千帖の殘書一盞の茶。(三)○偶〻水村江郭に向つて、(四)繫がざるの舟を放ち、還た沙(五)岸の草橋に泛べて、孔無きの笛を吹く。○物(六)情は常に事無きを以て歡顏を爲し、世態は善(七)く故に託するを以て巧術と爲す。○善く(八)時を救ふは、和風の酷暑を消すが若く、能く俗を脫するは、(九)淡月の輕雲に映ずるに似たり。○廉は貪を懲らす所以なり。(一〇)我果して貪ならずんば、何ぞ必ずしも一の廉名を標して、(一一)以て貪夫の側目を來たさん。讓は爭を息むる所以なり。我果して爭はずんば、又何ぞ必ずしも一の讓(一二)(一三)的を立てて、以て暴客の弓を彎くを致さん。(一四)○曲高ければ毎に和すること寡き(一五)の嫌を生ず、謌唱は須らく同調を求むべし。(一六)眉修ければ多くは宮に入るの妬(一七)を取る。(一八)梳洗は切に傾城すること莫れ。(一九)

㊀ 快樂を身に受けて樂む能はざるをいふ ㊁ 眞修は眞に能く道を修むるの士なり ㊂ 隱逸の清趣をいふ ㊃ 水の邊にある村の郭なり ㊄ 沙灘の岸に架けたる土橋 ㊅ 物情は人情に同じ、世間一般の人情をいふ ㊆ よく事故に託して巧に逃れて局に當らざるをいふ ㊇ 當時の社會の弊風習俗を救濟すること ㊈ 俗世界より脫出し

了然一身。蕭然四壁。有識者當レ此。雖レ未レ免下以二冷淡一成上レ愁。斷不下以二寂寞一生上レ悔。〇從二五更枕席上一。參二勘心體一。氣未レ動。情未レ萌。纔見二本來面目一。向二三時飲食中一。諳二練世味一。濃不レ欣。淡不レ厭。方爲二切實工夫一。〇瓦枕石榻得レ趣處。下界有レ仙。木食草衣隨レ緣時。西方無レ佛。

ふのみ、何ぞ能く官に歎千里に羈せられ以て名爵を要せんやと、遂に駕を命じて歸る (二) 心持のさつぱりとしたること (三) 昔の陶淵明は庭前に五柳を植ゑ、自ら五柳先生と稱せり、此は春の季節の回り來りて柳が芽を生ずること (四) 興致は興味のおもむき、鬮々はちら〳〵と起り來ること (五) 薄官は冷官に同じ、賤しき下役人となること (六) 簪は役人の頭髮に插すカンザシなり、此は簪を投げすてゝ官を辭するをいふ (七) 黃花は春の景、紅樹は秋の景 (八) 白雲は夏の景、青松は冬の景 (九) 四時共に良き時節也 (一〇) 牧童の唱ふる歌、樵夫の歌ふ歌にて共に自然の趣あり (一一) 俗世界に行れたる名利等の思想に喩ふ (一二) せはしく煩はしき琴の音笛の聲をいふ (一三) 了然はさらりと事理を悟りたるをいふ (一四) 世俗の濃厚なる味なくして淡泊に過ぐること (一五) 五更は午前四時頃 (一六) 我心の本體をまじへ考へて俗念の雜るとありや否やをしらぶるをいふ (一七) 我が心の本來の樣子を見る、本來の面目は佛教にていへば我が心中に具はれる佛性、王陽明の所謂良知なり (一八) 三時は朝晝晩の食事なり (一九) 世の中に生活する趣味を鍛錬すること (二〇) 濃は富貴にして奢侈の生活を爲すこと (二一) 淡は貧賤にして淡泊素朴の生活を爲すこと (二二) 適切にして實際にかなふ工夫 (二三) 瓦を以て造りたる枕、石にて造りたる寢臺即ち極めて質素なる生活を爲して趣味を得たるときは是れ即ち神仙の境なり (二四) 神仙は天上界に存するのみならずして人間界にも神仙ありとの意 (二五) 佛は西方十萬億土にあらずして此の世界に佛ありとの意にて、木食草衣是れ現世の佛なるをいふ

當二樂境一而不レ

(一)樂境（らくきやう）に當（あた）りて享（う）くる能（あた）はざる者は、畢竟（ひつきやうこ）是れ薄福（はくふく）の人、苦境（くきやう）に當（あた）りて反（かへ）りて

風起思ㇾ蓴。張季鷹之胸懷落落。春回到ㇾ柳。陶淵明之興致翩翩。然此二人者。薄宦投ㇾ釋。吾猶嗟ニ其太晩一。○黃花紅樹。春不ㇾ如ㇾ秋。白雲青松。冬亦勝ㇾ夏。春夏園林。秋冬山谷。一心無ㇾ累。四季良辰。○聽ニ牧唱樵歌一。洗ニ盡五年塵土腸胃一。奏ニ繁絃急管一。何ニ如一派山水清音一。○

風起りて蓴を思ふ。張季鷹の胸懷落落たり。春回りて柳に到れば、陶淵明の興致翩翩たり。然れども此二人の者、薄宦釋を投ずる、吾猶ほ其太だ晩きを嗟く。○黃花紅樹、春は秋に如かず、白雲青松、冬も亦夏に勝る、春夏の園林、秋冬の山谷、一心に累なくんば、四季良辰なり。○牧唱樵歌を聽きて、五年の塵土の腸胃を洗ひ盡す。繁絃急管を奏するは、一派の山水の清音に何如ぞ。○了然たる一身、蕭然たる四壁、有識者此に當れば、未だ冷淡を以て愁を成すを免れずと雖も、斷じて寂寞を以て悔を生せず。○五更枕席の上より、心體を參勘すれば、氣未だ動かず、情未だ萌さざるとき、纔に本來の面目を見る。三時飲食中に向ひ、世味を諳練し、濃も欣ばず、淡も厭はずして、方に切實の工夫と爲す。○瓦枕石榻趣を得る處、下界に仙あり。木食草衣緣に隨ふ時、西方に佛なし。

(一) 張翰字は季鷹、晉代の人、秋風の起るを見て、因りて吳中の菰菜、蓴羹、鱸魚膾を思ひて曰く、人生適意を貴

棋。○秋冬之交。夜靜獨坐。每レ聞ニ風雨瀟瀟一。既淒然可レ愁。亦復悠然可レ喜。至ニ酒醒燈昏之際一。尤難レ爲レ懷。○長亭烟柳。白髮猶勞。奔走可レ憐名利客。野店溪雲。紅塵不レ到。逍遥時有ニ牧樵人一。天之賦レ命實同。人之自取則異。○富貴大是能俗レ人之物。使ニ吾輩當レ之。自可レ不レ俗。然有ニ此不俗胸襟一。自可レ不ニ富貴一矣。

めば、自ら俗ならざるべし。然れども此不俗の胸襟(二三)あれば、自ら富貴ならさるべし。

❶ 春風吹き渡る所幽谷を出でて喬木に遷るの鶯を見て自己の不遇に泣く ❷ 諸處を羈旅して廻りまはること ❸ 雨の降る夜、空しく雁のきれぐに鳴く聲を聞きて悲しむをいふ、他鄉漂泊の身を雁に比して悲むなり ❹ 金壺は酒器なり、霖潤は酒のうるはふこと ❺ 瑤管は管の瑤を以て飾れるもの春容は從容として急迫ならざること ❻ 槃甲は槃の初めて若葉を生ずること ❼ 酥酪は乳製の酪なり、その柔かにして旨きこと、乳製の酪漿に過ぐるをいふ ❽ 清らかにして香氣のよきこと ❾ 柴棘はトゲありて人を刺す、胸中にある惡しき念慮をいふ ❿ 清酒三斛を飲みて胸中の汚れたる俗念を洗ひ去るに喩ふ、酒の釀造には灰を用ふるより清酒を純灰と云ひしなり ⓫ 暖かなる風の吹く春の頃坐に在りて酒を飲みて樂む ⓬ 細やかなる雨、降る夜怨のあたりに在りて棋を打つをいふ ⓭ 瀟々は物寂しき貌 ⓮ 淒然は物のあはれなること ⓯ 悠然はゆつたりとして樂むこと ⓰ 悄悵に堪へられぬ物のあはれを感ずるをいふ ⓱ 長亭は驛路の茶店、もやのかゝりたる柳の景色 ⓲ 名聲利益を得んとして奔走する人は名利の外に高雅の事あるを知らず、故に憐むべきをいふ ⓳ 世俗の汚れたる事の到らざるに喩ふ ⓴ 逍遥はぶらぶらと思ふまゝに散歩すること、牧樵は羊牛を畜ふ人又は木こりの人 ㉑ 天が人に使命を賦與することは、名利に奔走する人も牧樵の人も同一にして異ならざるをいふ ㉒ 人を鄙俗のものにせしむること ㉓ 鄙俗とならざる高尙なる思想を有すること

王長公。癖二杜鵑樓下。雲母都紅。〇坐二茂樹一以終レ日。濯二清流一以自潔。採レ于山。美可レ茹。釣レ于水。鮮可レ食。

蔬菽の類を採れば其の美味食ふべきをいふ　【評】鮮は新鮮なる魚をいふ、或はいふ小魚なりと是に非ず

年年落第。春風。徒泣レ于二遷鶯一。處處羈遊。夜雨空悲レ于二斷雁一。〇金壺霏潤。瑤管春容。〇菜甲初長。過レ于二酥酪一。寒雨之多。呼レ童摘取。佐レ酒夜談。嗅二其清馥之氣一。可レ滌二胸中柴棘一。何必純灰三斛。〇暖風春座酒。細雨夜牕

年年落第し、(一)春風徒らに遷鶯に泣き、(二)處處羈遊し、(三)夜雨空しく斷雁に悲む。〇(四)金壺霏潤し、(五)瑤管春容す。〇(六)菜甲初めて長ずれば、(七)酥酪に過ぐ、寒雨の夕、童を呼んで摘み取り、酒を佐けて夜談じ、(八)其清馥の氣を嗅げば、胸中の(九)柴棘を滌ふべし。何ぞ必ずしも(一〇)純灰三斛ならん。〇(一一)暖風春座の酒、(一二)細雨夜牕の棋。〇秋冬の交、夜靜に獨坐し、風雨の(一三)蕭蕭たるを聞く毎に、既に(一四)淒然として愁ふ可し、亦復た(一五)悠然として喜ぶべし。酒醒め燈昏きの際に至りて尤も(一六)懷を爲し難し。〇(一七)長亭の烟柳、白髮猶ほ努す、奔走憐むべし(一八)名利の客、野店溪雲、(一九)紅塵到らず、(二〇)逍遙すれば時に牧樵の人あり、(二一)天の命を賦する實に同じ、人の自ら取るは則ち異なり。〇富貴は大に是れ能く(二二)人を俗にするの物なれども、吾輩をして之に當らし

風。○蕭齋香爐經卷。酒器俱捐。北牖石枕松風。茶鐺將沸。○明月可人。清風拔座。班荊問水。天涯韻士高人。下筯佐觴品外澗毛溪蔌。主之榮也。高軒寒戸。肥馬嘶門。命酒呼茶。聲勢驚神。震鬼。疊筵累几。珍奇羅地窮天。客之辱也。○賀函伯。坐徑山竹裡。鬚眉皆碧。

杜鵑樓下に龕すれば、雲母都て紅なり。○茂樹に坐して以て日を終へ、清流に濯ひて以て自ら潔くし、山に採りて美茹ふべく、水に釣りて鮮食ふべし。

（二五）（二六）（二七）（二八）

（一）一の水の深き溪川の水が柳樹の爲めに二つに分開せらるゝをいふ（二）清潔にして虚靜なる境をかき亂さるゝこと（三）三月の頃林中の風光種々の花の風に吹かれて散り落つるをいふ（四）花の香の消え衰ふること（五）荊扉は柴折戸のこと、往來する客なく柴折戸を閉づるをいふ（六）閑靜なる庭園に心安んじ樂しむこと（七）空に浮べる雲流るゝ水の如く清白酒落の心持あるをいふ（八）世を隱れ遁るゝも親の意に背かざること（九）その行貞正なるも全く世俗と交を絶たず世人と交ること（一〇）太山高岳の如き巖々として高尚なる氣象あること（一一）椅子を移して月を賞すること（一二）夜月の景を面のあたり見て之を賞すること（一三）時に當り琴を彈ずれば、天風之が爲めて拂はるゝの感あるをいふ（一四）物寂しき書齋（一五）茶を煮る釜は將に茶の沸かんとするをいふ（一六）荊を地に布きて坐すること、水を問ふは水質を吟味すること（一七）筯を下すは食物を食ふこと、酒觴を佐けは酒の肴とすること（一八）澗毛は谷川に生ずる水草、溪蔌も溪川に生ずる水草の類（一九）高軒は高く大なる丈夫の車なり（二〇）饗應するときの聲勢の盛なること鬼神をも驚き怖れしむるの風あるを云ふ（二一）敷物をかさねて敷き几案を並べ列らぬること（二二）珍らしく常にあらざる馳走は五天地に有らゆるものを窮め盡すこと（二三）上文の主之榮は遠き天涯の韻士高人の訪ひ來れるは主人の光榮なりとの意、此の客の辱は非常の饗應に遇ふは此れ俗士を待つの禮にして高士を遇するの禮にあらず、故に客の辱なりといへるなり（二四）徑山は天目山東北の峰なり、中に徑路あり天目に通ず故に徑山といふ、竹の碧色に映じて鬚眉皆靑きをいふ（二五）龕は佛を納るゝ室、杜鵑樓下に居れば杜鵑の紅き花に映じて雲母（キラゝ）がすべて紅色となる（二六）生ひ茂りたる樹木の中に坐すること（二七）山にて

謂三徑を開き、羊仲求仲徑より來り蔣詡を訪ふ　（一二）長林の中に在りて遊息するをいふ　（一三）昌蒲の根にて製餌とすべし

門開二杜徑一。往來惟有二羊裘一。○枕二長林一而披レ史。松子爲レ餐。入二豐草一以投レ閒。蒲根可レ服。

一泓溪水柳分開。盡道清虛攪破。三月林光花帶去。莫レ言香粉消殘。○荊扉盡掩。閒庭宴然。行雲流水襟懷。隱不レ違レ親。貞不レ絶レ俗。太山喬岳氣象。○窻前獨榻頻移。爲レ親二夜月一。壁上一琴常掛。時拂二天

（一）一泓の溪水柳分開し、（二）盡く道ふ清虛攪破すと、（三）三月の林光花帶び去り、言ふ莫れ（四）香粉消殘すと。○（五）荊扉盡く掩ひ、（六）閒庭宴然たるは、（七）行雲流水の襟懷なり。（八）隱るゝも親に違はず、（九）貞なるも俗を絶たざるは、（一〇）太山喬岳の氣象なり。○窻前獨り（一一）榻頻に移し、爲めに（一二）夜月に親しみ、壁上一琴常に掛け、（一三）時に天風を拂ふ。○（一四）蕭齋の香爐經卷、酒器倶に揖て、北牕の石枕松風、（一五）茶鐺將に沸かんとす。○明月人に可く、清風座を披ひ、（一六）荊を班し水を問ひ、天涯の韻士高人、（一七）筋を下し觴を佐け、品外の（一八）澗毛溪蔌あるは主の榮なり。（一九）高軒戸を塞ぎ、肥馬門に嘶き、酒を命じ茶を呼び、（二〇）聲勢神を驚かし鬼を震はしめ、（二一）筵を疊ね几を累ね、珍奇地を溺し天に窮むるは、（二二）客の辱なり。賀鬫伯、（二四）徑山の竹裡に坐すれば、（二三）鬚眉皆碧し、王長公

對レ酒當レ歌。難レ道三便稱二俠士一。○虛堂留レ燭。抄レ書尙存二老眼一。有レ客到レ門。揮レ麈但說二青山一。○千人亦見。百人亦見。斯爲二拔レ萃出レ類之英雄一。三日不レ擧レ火。十年不レ製レ衣。殆是樂レ道安レ貧之賢士。○帝子之望二巫陽一。遠山過レ雨。王孫之別二南浦一。芳艸連レ天。○室距二桃源一晨夕恆滋二蘭茝一。

眼を存す。客ありて門に到れば、麈(六)を揮ひて但青山を說く。○千人も亦見(七)、百人も亦見る、斯を萃(八)を拔き類を出づるの英雄と爲す。三日(九)火を擧げず、十年衣を製せざるは、殆ど是れ道を樂み貧に安んずるの賢士なり。○帝子(一〇)の巫陽を望むや、遠山雨過ぎ、王孫(一一)の南浦に別るゝや、芳艸天に連る。○室(一二)は桃源を距て、晨夕恆に蘭茝(一三)を滋らす。門は杜徑(一四)を開き、往來惟羊裘(一五)あり。○長林(一六)を枕にして史を披き、松子を飡と爲し、豐草に入りて以て閒に投じ、蒲根(一七)服すべし。

(一) 間散の中に在りて同伴の友人を求むること (二) 功名富貴、一切求むる所なきをいふ (三) 閑散無事の人 (四) 男だてを爲す士と稱すべしとはいふべからずとの意 (五) 虛堂は人なきの堂 (六) 麈は拂子のこと、拂子を揮ひてたゞ青山の景を說きて世間の塵事を語らず (七) 千人も百人もその見る所を同じくすること (八) 衆多の人より拔きんで同類のものより拔け出づること、共に人より拔きんですぐれたる人のことをいふ (九) 三日間火を焚きて飯を煮ざること、貧賤にして三日間食事せざるをいふ (一〇) 帝子は屈原を指すか、巫陽は女巫の名なり、楚辭招魂に帝告二巫陽一曰、有レ人在レ下、我欲レ輔レ之云云とあり (一一) 南浦は今の湖北省にあり、王孫は屈原を指すか、屈原は楚の王族故に王孫といふ (一二) 桃源は武陵の桃源なり (一三) 蘭茝は共に香草 (一四) 杜徑は杜陵の小路なり漢の蔣詡杜陵に居り三徑を開く (一五) 羊裘は羊求の誤ならん、羊仲求仲は漢代の人、皆高士なり、杜陵の蔣詡と友とし善し、

野釀。足以消憂。蓴鱸稻蟹。足以適口。又多高僧隱士。佛廬勝地。家有園林。珍花奇石。曲沼高臺。魚鳥流連。不覺日暮。○山中蒔花種草。足以自娛。而地朴人荒。泉石都無。絲竹絕響。奇士雅客。亦不復過。未免寂寞度日。然泉石以水竹代。絲竹以鼃舌蛙吹代。奇士雅客。以蠹簡代。亦略相當。

ら娯むに足る、而も地朴に人荒れ、(七)泉石都て無く、(八)絲竹响を絕ち、(九)奇士雅客、亦復た過らざれば、未だ寂寞日を度るを免れず、然れども泉石は水竹を以て代へ、(一〇)絲竹は鼃舌蛙吹を以て代へ、奇士雅客は、(一一)蠹簡を以て代へば、亦略相當る。

(一) 興味の湧き起ること (二) 煮たる茶と、田舍にて醸したる濁酒と (三) 蓴は蓴菜にて水草なり、鱸と爲すべし、鱸はスヾキの鱠、稻蟹は稻米と蟹となり (四) 佛廬は佛寺なり (五) 屈曲したる沼、高き物見櫓 (六) 流連は樂しみて歸ることを忘れ、永くその所に留まること (七) 土地は質朴にして誇るべき明なく寂しきこと (八) 絲竹は琴瑟及び笛の類なり、响は吹なり、琴笛を吹く聲のなきこと (九) 珍らしき常ならざる士、風雅の客 (一〇) 鼃の鳴く聲と、蛙の鳴く聲と、蛙吹は蛙の鳴く聲の笛を吹くが如くなること (一一) シミ虫の食ひたる札、即ち書籍のこと

閒中覓伴書爲上。身外無求睡最安。○栽花種竹。未必果出閑人。

(一)閒中伴を覓むるは書を上となす。(二)身外求むる無ければ睡ること最も安し。○花を栽ゑ竹を種うるは、未だ必ずしも果して(三)閑人に出でず、酒に對しては當に歌ふべきは、便ち(四)俠士と稱すと道ひ難し。○(五)虛堂燭を留めて、書を抄すは尙ほ老

○竹影入レ簾。蕉陰蔭レ檻。取二蒲團一臥。不レ知三身在二氷壺鮫室一。○萬壑松濤。喬柯飛レ穎。風來鼓レ颶。謖謖有二秋江八月聲一。迢二遞幽巖之下一。披レ襟當レ之。不レ知二是羲皇上人一。○霜降木落時。入二疎林深處一。坐二樹根上一。飄飄葉點二衣袖一。而野鳥從二樹梢一。飛來窺レ人。荒涼之地。殊有二清曠之致一。

の小も金谷と同じく觀ぜらるゝをいふ (三) 桃源は陶淵明の記せる武陵の桃源にして理想の樂天地なり、流水の潺を成せるものも小桃源の如く思はるゝこと (四) 鼓吹は太鼓を撃ち笛を吹くこと、野鳥の聲が鼓吹の如く聞ゆるをいふ (五) すべての念慮が灰の冷かなるが如く滅びなくなること (六) 富貴の樂を享けんと欲するも之を享くるを得ざること (七) 病氣の時の如き思想を持ち、名利の念を絶つこと、(八) 芭蕉の影が欄檻に映じて蔭を爲すこと (九) 氷壺は氷を壺に盛りたるが如く清らかなること、鮫室は鮫人室にて珠玉にて飾れる室の義か (一〇) 松が風に吹かれて種々として聲を發すること濤聲の如きこと (一一) 大木の枝はその木の末を高くあらはすこと (一二) 颶は海中の大風なり、風來れば大風の吹き荒ぶが如く聲を發すること (一三) 松風の聲 (一四) 秋の八月頃江上に於て風の吹き起るが如き聲あるをいふ (一五) 迢遞は招遙に同じ、意のまゝに遊ぶこと (一六) 秋の頃なり (一七) ひらひらとして飄り落つる木の葉 (一八) 荒れはてゝ物寂しき地 (一九) 清かにして曠しくさつぱりとしたる心持

明牕之下。羅二列圖史琴罇一。以自娛。有レ興則泛二小舟一吟嘯。覽三古于二江山之間一。煮茶

明牕の下、圖史琴罇を羅列して以て自ら娛み、興(一)あれば則ち小舟を泛べて吟嘯し、古を江山の間に覽、煮茶野釀、(二)以て憂を消すに足り、蓴鱸(三)稻蟹以て口に適するに足り、又高僧隱士、佛廬(四)勝地多く、家に園林あり、珍花奇石、曲(五)沼高臺、魚鳥流連(六)し、日の暮るゝを覺えず。○山中花を蒔き草を種ゑば、以て自

何地非二眞境一。何物非二眞機一。芳園半畝、便是舊金谷。流水一灣。便是小桃源。林中野鳥數聲、便是一部清鼓吹。溪上閒雲幾片。便是一幅眞畫圖。○人在二病中一百念灰冷。雖レ有二富貴一。欲レ享不レ可。反羨二貧賤而健者一。是故人能于二無事時一。常作二病想一。一切名利之心、自然掃去。

何の地か眞境(一)に非ざる、何物か眞機に非ざる、芳園半畝、便ち是れ舊金谷(二)、流水一灣は、便ち是れ小桃源(三)、林中の野鳥數聲は、便ち是れ一部の清鼓吹(四)、溪上の閒雲幾片は、便ち是れ一幅の眞畫圖なり。○人病中に在れば、百念灰冷(五)す、富貴ありと雖も、享けん(六)と欲して可ならず。反りて貧賤にして健なる者を羨む。是故に人能く無事の時に于て、常に病想(七)を作さば、一切名利の心、自然に掃ひ去らん。○竹影簾に入り、蕉陰檻(八)に蔭す、蒲團を取りて一臥すれば、身の氷壺鮫室に在るを知らず。○萬壑の松濤(一〇)、喬柯穎(一一)を飛し、風來りて颶(一二)を鼓し、謖謖(九)として秋江八月(一四)の聲あり、幽巖の下に迢遞(一五)し、襟を披いて之に當れば、是れ羲皇(一三)上の人なるを知らず。○霜降り(一六)木落つる時、疎林深き處に入り、樹根の上に坐すれば、飄飄(一七)たる葉は衣袖に點じ、而して野鳥樹梢より飛び來りて人を窺ふ、荒涼(一八)の地は、殊に淸曠(一九)の致あり。

(一) 何れの地も眞の境遇にあらざる所なし　(二) 金谷は晉石崇の庭園にして華美を極む、芳花の開ける庭園の半畝

黒甜。輪ニ却分レ香之蝶一。○閒爲ニ水竹雲山主一。静得ニ風花雪月權一。○半幅花箋入レ手。剪ニ裁就臘雪春氷一。一條竹杖隨レ身。收ニ拾盡三燕雲楚水一。○心與レ竹倶空。問ニ是非何處安覺一。貌偕レ松共痩。知ニ憂喜無下由レ上レ眉○芳菲林圃看ニ蜂忙一。覰ニ破幾多塵情世態一。寂寞衡茅觀ニ燕寢一。發ニ起一種冷趣幽思一。

非何の處にか安覺なるを問ふ。貌は松と共に痩せば、憂喜(一三)眉に上るに由なきを知る。○(一四)芳菲の林圃に蜂の忙しきを看て、幾多の塵情(一五)世態を覰破す、寂寞の衡茅(一六)に燕の寢ぬるを觀て、一種の冷趣幽思(一七)を發起す。

(一) 水の流るゝが如く萬事意に任かせて自然のまゝになせばその境遇は常に靜寂にして煩雑ならず (二) 花の落つること頻頻なりと雖も吾が心花の外に超然たれば意は自らしづかにして煩はしからず (三) 夕方の殘れる太陽の微光、白醉は酒を飲まずして醉ふこと、即ち酣睡すること (四) 蛾虫が飛んで燈火の中に入るが如く他の權勢の人に附きて身を亡すこと (五) 黒甜は酣睡すること、一枕を枕として酣睡するをいふ (六) 輪却はまくること、花の香を分つ蝶が營々として勞働するにまくるをいふ (七) その身閒散にして爲すことなく水流竹林雲霞山水の風景を遊覽するをいふ (八) 花箋は紙の小幅にして華貴のもの (九) 臘雪は十二月の雪、剪裁は程よくきりもりして書きて仕上ぐること (一〇) 北方に在る燕國の雲、南方に在る楚國の水、南北の風景を搜ぐること (一一) 竹の中心の空しきが如く、心中に利害得喪の念なきこと (一二) 是非は是を是とし非を非とするの念慮、即ち有我の念なり、此は有我の念の何れの處にかよく覺り得るを知るをいふ (一三) 憂ひも喜も共に眉に上ることなきをいふ (一四) 芳菲は美しき花咲きて香の芳ばしきこと (一五) 世の中の汚れ濁りたる情態をうかゞひて見とはすこと (一六) 衡茅は衡門茅屋にてかぶき門と茅にて葺きたるあばら屋 (一七) 世間離れしたる趣、奥ゆかしき思想

○得ㇾ趣不ㇾ在ㇾ多。盆池拳石間。煙霞具足。會ㇾ景不ㇾ在ㇾ遠。蓬窻竹屋下。風月自賒。○會二得個中趣一。五湖之煙月盡入二寸衷一。破二得眼前機一。千古之英雄。都歸二掌握一。

廣がるにまかするが如く、自然のまゝにまかするをいふ　〔一二〕斗室は狹小なる家屋　〔一三〕其は俗說、如何に同じ、畫棟は畫がきたる美しき家屋、畫棟が高く聳えて南浦の雲を飛ばすなり次項と共に王勃の滕王閣の詩による　〔一四〕珠を以て飾りたる簾を捲けば西山の雨の景を望むべきをいふ、此は斗室も畫棟珠簾の壯美に異ならざるをいふ　〔一五〕一の眞面目を自ら悟り得ること　〔一六〕素琴は紋なき琴のこと　〔一七〕小さき池、小さき石　〔一八〕もや霞の風景が充分に具はること　〔一九〕風景を心に領悟して理會すること　〔二〇〕蓬草の葺ふ廬、竹を以て作りたる家屋、共に荒ばら屋のこと　〔二一〕自ら風月の情趣を備へたり　〔二二〕此の心中の趣味を悟り得とること　〔二三〕五湖は胥湖、蠡湖、洮湖、滆湖、太湖なり、五湖のあたりの煙霞明月の景悉く心の中に入り來るなり　〔二四〕眼前に見ゆる會機を看通して悟り得ること　〔二五〕千古の昔よりの英雄はすべて我が掌握の中に歸す

細雨閑開ㇾ卷。微風獨弄ㇾ琴。○水流任ㇾ意境常靜。花落雖ㇾ頻意自閑。○殘醺供二白醉一。傲二他附ㇾ熱之蛾一。一枕餘二

細雨に閒ゝ卷を開き、微風に獨り琴を弄す。○水流(一)意に任せば境常に靜なり、(二)花の落つるや頻と雖も意自ら閑なり。○殘醺(三)白醉に供して、他の熱(四)に附くの蛾に傲り、一枕黑甜(五)を餘して、香を分つの蝶(六)に輸却す。○閒(七)に水竹雲山の主を爲り、靜に風花雪月の權を得。○半幅の花箋(八)手に入り、臘雪(九)春氷を剪裁して就す。一條の竹杖身に隨ひ、燕雲(一〇)楚水を收拾し盡す。○心(一一)は竹と倶に空しくば、是(一二)

暖水寒魚自知。會心處還期二獨賞一。〇心地上無二風濤一。隨レ在皆靑山綠水。性天中有二化育一。觸處見二魚躍鳶飛一。〇寵辱不レ驚。閑看二庭前花開花落一。去留無レ意。謾隨二天外雲卷雲舒一。〇斗室中萬慮都捐。說二甚畫棟飛レ雲。珠簾捲レ雨。三杯後一眞自得。惟知二素琴橫レ月。短笛吟レ風。

るに隨ひて皆青山綠水なり。性天中（六）化育あれば、觸るゝ處（七）魚躍り鳶飛ぶを見る。〇（八）寵辱に驚かず、閑に（九）庭前の花開き花落つるを看る、（一〇）去留に意なく、謾に（一一）天外の雲卷り雲舒るに隨ふ。〇（一二）斗室の中萬慮都て捐てば、（一三）甚の畫棟雲を飛ばし（一四）珠簾雨を捲くを說かん。三杯の後（一五）一眞自得すれば、惟（一六）素琴月に橫たへ短笛風に吟ずるを知るのみ。〇趣を得るは多きに在らず、（一七）盆池拳石の間、（一八）煙霞具足す。（一九）景を會するは遠きに在らず、（二〇）蓬牕竹屋の下、（二一）風月自ら賒なり。〇（二二）個中の趣を會得すれば、（二三）五湖の烟月盡く寸衷に入る。（二四）眼前の機を破得すれば、（二五）千古の英雄都て掌握に歸す。

㈠人の心に拂りさからふこと　㈡會心は我が心によくかなひ會得すること　㈢己れ自ら獨りにて之を賞美して人と與にせざること　㈣心の上に風吹き浪の起る危險なきこと、心中平穩無事なるをいふ　㈤在る所に隨ひ何處にても青山と綠水とありて樂むを得る如く逢ふ所皆愉快なるをいふ　㈥化育は天地間の萬物を感化して養育すること　㈦魚は淵に躍り鳶は飛んで天に至るが如く生々として活躍するをいふ　㈧君の寵を受くるも驚き喜ばず恥辱を蒙りても驚き忿しまざること　㈨天地自然の狀態を見て世事悉く自然に任かすをいふ　㈩去るべくして去り留るべくして留まり、自然に任かせて意志を[illegible]ざること　⑪天外に在る雲の自然に斂まり又雲ののび

事關ㇾ心。只在ニ花開花謝ㇾ。〇是非場裡出入逍遙。順逆境中。縦横自在。竹密何妨ニ水過ㇾ。山高不ㇾ碍ニ雲飛ㇾ。〇口中不ㇾ設ニ雌黄ㇾ。眉端不ㇾ掛ニ煩惱ㇾ。可ㇾ稱ニ烟火神仙ㇾ。隨ㇾ意而栽ニ花柳ㇾ。適ㇾ性以食ニ禽魚ㇾ。此是山林經濟。〇午睡欲ㇾ來頽然自廢。身世庶幾渾忘。晩炊既收。寂然無ㇾ營。烟火聽ニ其更舉ㇾ。

ば、頽然(一六)として自ら廢し、身世庶幾くは渾べて忘る。晩炊既に收まれば、寂然(一七)として營むなく、烟火其更に舉るに聽かす。

(一) 風雅の心情をいふ (二) 艶を凝らし奢ふこと (三) 熱き湯の沸くが如きものを以て茶を煮ること (四) 奥ゆかしくして静かなるおもむきの雲の如く幽に起ること (五) 酒には兎角失を為すの累相伴ふこと (六) 德の本来具備するをいふ (七) 世間すべての因縁の悉く盡きてなくなること (八) 人の是非などを管理せざること (九) 老人に成れば花を観て楽むが故に花の開くと花の落つるとは心に関するをいふ (一〇) 人の是として褒め非として毀る所に出入して逍遙自ら楽しみ毀誉心に関せざること (一一) 順境に在りても逆境に在りても縦横自在にして憂喜を為さゞるをいふ (一二) 心の自由自在入として自得せざる所なき有様をいふ (一三) 口中に人の批評を為さざること (一四) 眉の端をひそめて憂ひ悲しむこと (一五) 烟火は火を焚き烟を揚げて生活すること、俗世界に在りて心は神仙と同じきをいふ (一六) 頽然は形體の頽れ臥るゝことにて睡眠するをいふ (一七) 寂然は物淋しきさまにて何事もなさずしてあること

花開花落春不ㇾ管。拂意事休ニ對ㇾ人言ㇾ。水

花開き花落つ春管せず、拂意(一)の事は人に對して言ふを休めよ。水暖く水寒き魚自ら知る、會心(二)の處は還りて獨賞(三)を耽せよ。〇心地上風濤(四)無ければ、在(五)

雲於江閣。○幽人清課。詎但啜茗焚香。雅士高盟。不在題詩揮翰。

如き美しき雲を覽るをいふ（一〇）世を退きて隱居せる人の清らかなる課業（一一）風雅の士の高尚なる交際のことをいふ

以養花之情自養。則風情日閑。以調鶴之性自調。則眞情自美。○熱湯如沸。茶不勝酒。幽韻如雲。酒不勝茶。酒累俠。茶類隱。酒固道廣。茶亦德素。○老去自覺萬緣都盡。那管人是人非。春來倘有一

花を養ふの情を以て自ら養へば、則ち（一）風情日に閑なり。（二）鶴を調するの性を以て自ら調すれば、則ち眞情自ら美なり。○（三）熱湯沸くが如くば、茶は酒に勝らず、（四）幽韻雲の如くば、酒は茶に勝らず、（五）酒は俠に累し、茶は隱に類す。酒は固より道廣く、茶も亦（六）德素なり。○老い去りて自ら（七）萬緣都て盡くるを覺ゆ、那ぞ（八）人の是人の非を管せん。春來倘ほ一事の心に關するあり、（九）只花開き花謝するに在り。○（一〇）是非の場裡、出入逍遙し、（一一）順逆の境中、縱横自在なり。（一二）竹密なるも何ぞ水の過ぐるを妨げん。山高きも雲の飛ぶを碍らず。○（一三）口中雌黃を設けず、（一四）眉端煩惱を掛けずんば、（一五）烟火の神仙と稱すべし。意に隨ひて花柳を栽ゑ、性に適して以て禽魚を食ふ、此れは是れ山中の經濟なり。○午睡來らんと欲すれ

邊幽草。若問二清盟誰可レ托。沙上閒鷗。○山童率二草木之性一。與レ鶴同眠。奚奴領二歌詠之情一。撿レ韵而至。○閉レ戶讀レ書。絕勝二入レ山修レ道。逢レ人說レ法。全輸二兀坐捫レ心。○硯田登二大有一。雖二千倉珠粟一。不レ輸二兩稅之征一。文錦運二机抒一。縱萬軸龍文。不レ犯二九重之禁一。○步三明月於二天衢一。覽三錦

全く兀坐して(一三)心を捫るに輸る。○硯田大有に登れば(一五)、千倉の珠粟と雖も、兩税(一六)の征を輸さず。文錦(一四)机抒を運らせば(一七)、縱ひ萬軸の龍文も(一八)、九重の禁を犯さず。○明月に(一九)天衢に歩し、錦雲を江閣に覽る。○幽人の(二〇)清課は、詎但茗を啜り香を焚くのみならん、雅士(二一)の高盟は、詩を題し翰を揮ふに在らず。

㊀ 逆旅は旅人を逆へて宿らしむる旅宿舍のこと、人の此世に在るは、旅宿舍に宿る旅人の如く、天地は旅宿舍の如きなり ㊁ 逆旅に在りては逆境は常にあるべきものなれば順境を求めずとなり ㊂ 世に生存する衆多の人は皆我が眷屬の如きものなりとの意 ㊃ 冤家は仇讐なり、衆生皆眷屬の如き者と觀れば却てその中に危害を加ふるものありて却て仇讐となるなり ㊄ 深く注意すること ㊅ 己が長を露すこと ㊆ 我が名譽の世に揚がるを懼ふること ㊇ 濁間に生ずる幽草の如く、世を避けて人に知られざるべしとならん ㊈ 清白なる交際をいふ ㊉ 沙上に遊べる閑暇なるカモメ世を避けて幽棲すべしと也 (一一) 歌を作り詩を詠ずるの心情をよく領得するをいふ (一二) 詩に作る韻字を檢索するをいふ (一三) 兀坐は動かずして正しく坐すること (一四) 心の修養するよりも劣れるをいふ (一五) 硯田は文章を作ること農夫の田を耕すが如きこと、大有は大豐年のこと、文章の數種の多きをいふ (一六) 兩税は夏秋兩度に納むる税、千倉の珠粟は千倉に藏する珠の如き穀物にて、文章の多きに喩ふ (一七) 文錦は美しき模樣ある錦、机抒は機杼、ハタノヒにて錦を織るに用ふる具、亦美しき文章を作るに喩ふ (一八) 龍文は天子の衣に用ふるもの平民の用ふるを禁ず、多くの龍文を織り成す宮中の禁を犯かさずとして多くの美文を作り成すも紙觸する所なきに喩ふ (一九) 京師輦轂の下にて明月の影を踏みて歩行すること、江水の邊の閣に在りて錦の

兩字。有二以レ趣勝者一。有二以レ味勝者一。然寧饒レ于レ味。而無二寧饒上于レ趣。〇守二恬澹一以養レ道。處二卑下一以養レ德。去二嗔怒一以養レ性。薄二滋味一以養レ氣。〇吾本薄福人。宜レ行二惜福事一。吾本薄德人。宜レ行二厚德事一。

（九）蓮花の如き淸き心は世の汚れに染らざること　（一〇）星の在る所を指して以て客土となす、客はたびの土地なり　（一一）花の咲けるあたり空しく大空を瞻れば月の在る所は是れ故郷なるを知るなり　（一二）趣は興味なり、その心の趣く所の一致して愉快を感ずる義なり　（一三）味は意味なり、その心の向ふ所の心ばへをいふ　（一四）恬澹は心の安らかにして澹泊欲無きをいふ　（一五）身を卑しくしてへり下ること　（一六）滋味は養分の多き旨き食物、氣は身體の氣なり、淡泊の味の食物を食ひて以て身體の氣を養ふをいふ　（一七）吾もと幸福の薄き不仕合せのものならば幸福を大切にする事を爲して幸福を來すべしとなり　（一八）薄德は道德心の薄き生れつきの人をいふ

知二天地皆逆旅一。不三必更求二順境一。視二衆生皆眷屬一。所三以轉成二寃家一。〇只宜下于二著レ意處一寫上レ意。不レ可下向二眞景處一點上レ景。〇只愁三名字有二人知一。澗

天地の皆逆旅(一)なるを知れば、必ずしも更に順境(二)を求めず、衆生(三)の皆眷屬なるを視れば、轉ゝ寃家(四)を成す所以なり。〇只宜しく意(五)を著くる處に于て意を寫すべし。眞景の處に向つて點景(六)すべからず。〇只名字(七)人の知る有るを愁へば、澗邊(八)の幽草のごとし。若し淸盟(九)誰か托すべしと問はば、沙上(一〇)の閒鷗なり。〇山童は草木の性に率ひ、鶴と同じく眠る、奚奴歌詠の情を領し、韻(一二)を撿して至る。〇戸を閉ぢて書を讀むは、絕だ山に入りて道(一一)を修むるに勝る、人に逢ひて法を說くは、

月夜焚レ香。古桐三弄。便覺二萬慮都忘一。妄想盡絕。試思香是何味。烟是何色。穿レ窻之白是何影。指下之餘是何音。恬然樂レ之。而悠然忘レ之者。是何趣。不レ可二思量一處。是何境。○貝葉之歌無レ礙。蓮花之心不レ染。○河邊共指レ星爲レ客。花裏空瞻月是鄉。○人之交友、不レ出二趣味

月夜香を焚き、古桐(一)三たび弄べば、便ち萬慮(二)都て忘れ、妄想盡く絕ゆるを覺ゆ、試に思へ香は是れ何の味ぞ、烟は是れ何の色ぞ、總を穿つの白(三)は是れ何の影ぞ、指下の餘(四)は是れ何の音ぞ、恬然(五)として之を樂み、而して悠然(六)として之を忘るゝ者は是れ何の趣ぞ、思量すべからざる處(七)は、是れ何の境ぞと。○貝葉(八)の歌礙げなく、蓮花(九)の心染まず。○河邊共に星を指して客と爲し(一〇)、花裏空しく瞻れば月是れ鄉(一一)。○人の交友、趣味の兩字を出でず、趣を以て勝る者あり(一二)、味を以て勝る者あり、然れども寧ろ味に饒きも、寧ろ趣に饒きこと無かれ。○恬澹(一三)を守りて以て道を養ひ(一四)、卑下に處りて以て德を養ひ(一五)、嗔怒を去りて以て性を養ひ、滋味を薄くして以て氣を養ふ(一六)。○吾本薄福の人ならば(一七)、宜しく惜福の事を行ふべし。吾本薄德の人ならば(一八)、宜しく厚德の事を行ふべし。

(一) 古き桐を以て作れる琴を彈ずるをいふ (二) 多くの念慮をすべて忘るゝこと (三) 窓を穿ちて來る白き月色なり (四) 指の下に彈ずる琴の餘音をいふ (五) 恬然は心安らかなる貌 (六) 悠然は心のゆつたりとして安き貌 (七) 思ひ量るべからざる面白き趣 (八) 貝葉の歌は佛偈をいふ、印度にては棕櫚の葉に經文を書きたるを以て貝葉といふ

象家。在史爲狂藥。何如但取半酣。與風月爲侶。○家鴛鴦湖濱。饒蒹葭鳧鷖。水月澹蕩之觀。客嘯漁歌。風帆烟艇。虛無出沒。半落几上。呼野衲而泛斜陽。無過此矣。○送春而血淚滿山。悲秋而紅顏慘目。○翠羽欲流。碧雲爲颺。○雨後捲簾看霽色。却疑苔影上花來。

を呼びて斜陽に泛ぶは、此に過ぐる無し。○春を送りて血涙(一二)山に滿ち、秋を悲みて紅顔(一三)目に慘たり。○翠羽(一四)流れんと欲し、碧雲爲めに颺る。○雨後簾を捲いて霽(一五)色を看れば、却つて疑ふ苔影(一六)花に上りて來るかと。

(一) 心の清白なること梅花の色と同じく、心の光明なること月光に近きをいふ (二) 醟は酗醟のこと、酒に沈み溺れること (三) 童羖は角のなき黒色の羊なり、詩に由醉之言、俾出童羖とあり、此は女が醉者に從行するの言 (四) 象は穀を以て畜ふ獸類、その禮を失すること象家の禮を知らざるが如きをいふ (五) 晉書裴楷傳に出づ、楷石崇に謂ひて曰く、足下人に狂藥を飮ましめ人に禮を正すを責むるは亦乖ならずやとあり (六) 半は程酒に醉ひて大醉に至らざること (七) 鴛鴦湖は浙江省の嘉興縣の南三里に在り、湖中鴛鴦多し故に名づく (八) 蒹葭は湖邊に生ずるアシの類、鳧鷖は共にカモメの類 (九) 水中に月の映じて廣々としたる大なるながめ (一〇) 風を孕みたる帆かけ舟、もやの中を行く小舟 (一一) 湖上の景色の大半が几上近くに見ゆること (一二) 血涙は血のなみだ、春と相別るゝを惜む意 (一三) 紅色の顔も色あせて目にはみじめに見ゆること (一四) 翠鳥の羽の如き青々としたる山川の色の流れ滴るが如きをいふ (一五) 空の霽れたる氣色を有ること (一六) 青き苔の影に花に上り來ること、青色の一面にわたれる景なり

刑。徑裡開談。最宜拂石。使雲烟而獨冷。移湖清嘯胡床。藉草木以成幽。撤去莊嚴蓮坐。況乃枕琴夜奏逸韻更揚置局午敲清聲甚遠。洵幽棲之勝事。野客之虛位也。

の如きもの錦の歩障を千里も圍らすこと（一四）氍毹は毛織物にて地毯の類、家の階砌を萬里も蔽ぬること（一五）木の葉を編みてトベリとすること（一六）茵は敷物なり、敷物を集めて之を牀の敷物とすること（一七）香氣の盛に起ること（一八）坐來の來は助語なり、坐すれば天地が一時寂々としたる趣あること（一九）閑放にして萬事打捨て置きて風流遊を爲すこと（二〇）湖の木を以て位次を分つこと（二一）胡床は今の椅子の如きもの、胡床の上に坐して清らかに嘯くこと（二二）おごそかに立派なる蓮華の如き形に作りたる坐牀を取り去ること（二三）秀てすぐれたる琴の韻の更に發揚すること（二四）局は碁局なり、午敲は眞晝頃碁石を敲くこと（二五）碁を打つ聲の清らかなること（二六）奥ゆかしく靜なる住居に於けるすぐれて風流なる事

與梅共色。與月爲隣。○飲酒不可認眞。認眞則大醉。大醉則神魂昏亂。在書爲沈湎。在詩爲童羖。在禮爲

（一）梅と色を共にし、月と隣を爲す。○酒を飲めば眞を認むべからず、眞を認むれば則ち大に醉ふ。大に醉へば則ち神魂昏亂す。（二）書に在りては沈湎と爲し、詩に在りては（三）童羖と爲し、禮に在りては（四）豢豕と爲し、史に在りては（五）狂藥と爲す、（六）但半酣を取り風月と侶たるに何如ぞ。○（七）鷺鷥湖濱に家し、（八）蒹葭兜窟、（九）水月潜蕩の觀に饒り、客嘯き漁歌ひ、（一〇）風帆烟艇、虛無出沒、半ば（一一）几上に落つ、野衲

因ㇾ曠而令ㇾ舒。山以ㇾ靜而不ㇾ晦。○枯魚在ㇾ縣。濁酒已注。朋徒我從。寒盟可ㇾ固。不ㇾ驚下歲暮于二天涯一。即是挾三纊于二孤與一。○步障錦千重。氍毹紫萬疊。何二似編ㇾ葉成ㇾ幃。聚ㇾ茵爲ㇾ褥。○綠陰流ㇾ彩。清入ㇾ神。首氣氤氳。徹二入骨一。坐來天地一時寬。開放風流享二清福一。○郊中野坐。固可ㇾ班ㇾ

(一三)步障の錦千重、(一四)氍毹の紫萬疊は、(一五)葉を編みて幃と成し、(一六)茵を聚めて褥と爲すに何似ぞ。○綠陰影を流して清神に入り、(一七)香氣氤氳人の骨に徹す、(一八)坐來天地一時の寬、(一九)開放風流清福を享く。○郊中野坐すれば、固より(二〇)荊を班すべし、徑裡の閒談には、最も石を排ふべし。雲烟を侵して獨り冷かなれば、清嘯の(二一)胡床を移開し、草木を籍きて以て幽を成せば、(二二)莊嚴の蓮坐を撤去す。況んや乃ち琴を枕にして夜奏すれば、(二三)逸韻更に揚り、(二四)局を置きて午敲けば、(二五)淸聲甚だ遠きは、洵に(二六)幽棲の勝事、野客の虛位なり。

(一) 土鼓は樂器の名 (二) 古代葭の灰を律呂の管に盛り以て氣候を候ふことあり、十二月の冬至の頃に至れば地氣漸く暖なり (三) 氣候の寒くして動物などの潛み匿れて出でざること (四) 蕭索は物寂しきこと (五) 素柯は梅の枝なり、白き花の咲けるを以て素柯といふ、梅が歲の寒さをも凌ぎて花開くをいふ (六) 同雲は一面にたなびける雲は動かずして靜止すること (七) 舞ふが如く飛散する雪は霏々として降ること酒に醉へるが如きさまなり (八) 野原は曠しくして廣大なるを以て人の心をのび〳〵せしむること (九) 枯れたる魚の店に懸けられてあるをいふ (一〇) 背きたる盟約、即ち久しくなりて交際の疎遠になりたるをいふ (一一) 遠き他鄉に在りて歲の暮れたること (一二) 孤與は只一人の友の義か或は孤立の意か、挾ㇾ纊は綿を挾むが如く溫く感ずること (一三) 步障は我が邦の衝立

露晨流。新桐初引、蕭然無事。間掃落花。足散人懷。○浮雲出岫、絶壁天懸。日月清朗。不無微雲點綴。看雲飛軒軒霞擧。踞胡床與友人詠謔。不復滓穢太清。○山房之磬。雖非綠玉。沉明清輕之韻。儘可節清歌。清俗耳。○山居之樂。頗愜冷趣。煨落葉爲紅爐。況負暄于岩戶。

(四) 胸中に滞り止まるものなくして清浄なること (五) 灑々は潔白の貌、清虚は心の清くして無我無心なるをいふ (六) 人の情の汚れを洗ひ去りて開明ならしむること (七) 一往は直に進みて顧みざること (八) 多くの物を飄へし飛ばすこと (九) 桐の葉が新に暢びること (一〇) 蕭然は物寂しきさま (一一) 浮べる雲が山の穴より出で来ること (一二) 壁の如くなれる険しき崖は天に懸れるが如く高く聳ゆること (一三) 少しばかりの雲が諸處にたなびくをいふ (一四) 軒々は高く挙る貌 (一五) 詩を詠じ戯謔をいふこと (一六) 太だ潔白なる心情をけがすことなきをいふ (一七) 緑色の玉にて至つて珍貴なるもの、以て磬を作るべし (一八) 打沈みたる、明かなる、清き、又軽き音響あること (一九) 世俗を遠ざかりて静かに世を送る隠遁 (二〇) 岩の戸の如く峙てるあたりにて陰気を背に受けて暖を取ること、負暄は所謂ヒナタボツコなり

土鼓催梅、荻灰暖地、雖滑凜以蕭索。見素柯之凌歲。○同雲不流。舞雪如醉野

土鼓梅を催し、荻灰地に暖なれば、滑凜以て蕭索なりと雖も、素柯の歳を凌ぐを見る。○同雲流れず、舞雪酔ふが如し、野は曠なるに因りて舒ならしめ、山は静なるを以て喧からず。○枯魚懸に在れば、濁酒已に注ぐ、朋徒我従へば、寒暄問くすべし、歳天涯に暮るゝに驚かずんば、即ち是れ纊を孤興に挟む。○

每于二清晨良宵之下一。用以節レ歌。令三人朝夕薫レ心。動念和平一。李禿謂。有二襍念一一撃遂忘。有二愁思一一撞遂掃。知音哉。○潭淵之間。清流注瀉。千巖競秀。萬壑爭流。却自胸無二宿物一。漱二清流一。令二人濯濯。清虚日來。非三唯使二人情開滌一。可レ謂三一往有二深情一。○林泉之滸。風飄二萬點一。清

て朝夕心を薫し(一)、動念和平ならしむ。李禿謂ふ、襍念(二)あれば、一撃して遂に忘れ、愁思あれば一撞して遂に掃ふと、知音(三)なる哉。○潭淵の間、清流注瀉し、千巖競ひて秀で、萬壑爭ひて流れば、却て自ら胸に宿物(四)無く、清流に漱げば、人をして濯濯(五)として清虚日に來らしむ。唯人情をして開滌(六)せしむるのみに非ず、一往(七)深情ありと謂ふべし。○林泉の滸、風は萬點(八)を飄へし、清露晨に流れ、新桐(九)初めて引く、蕭然(一〇)として無事、閒ゝ落花を掃へば、人の懷を散ずるに足る。○浮雲(一一)岫を出で、絶壁(一二)天に懸り、日月清朗なるも、微雲(一三)の點綴無くんばあらず。雲飛んで軒軒(一四)霞舉するを看て、胡床に踞し、友人と詠謔(一五)すれば、復た太清(一六)を滓穢せず。○山房の磬、綠玉(一七)に非らずと雖も、沈明清輕(一八)の韻、儘清歌を節し、俗耳を清くすべし。○山居の樂、頗る冷趣(一九)に愜ふ。落葉を煨きて紅爐と爲す、況んや岩戸(二〇)に負暄するをや。

(一) 鐘の聲によりて心を感化せしむること (二) 種々雜多の雜念の起り來ること (三) 音のことを能く知れる者

人之風。愧レ無二素屏之賜一。則青山白雲。何在非二我枕屏一。○江山風月本無二常主一。閑者便是主人。○入レ室許二淸風一。對レ飲惟明月。○被レ衲持レ鉢。作二癡俗行徑一。以二鷄盟一當二壇越一。以二枯管一當二筇杖一。以二飯顆一當二祇園一。以二岩雲野鶴一當二伴侶一。以二背錦奚奴一當二行脚頭陀一。往探二六六奇峯。三三曲水一。

(一) 肉の類を食物を葷食といふ (二) 草を以て敷物として臥すること、(三) 重霧は相重ねて布きたるしとねなり (四) 流るゝ水と水中を遊げる魚とは相互に忘れて関知せざるをいふ (五) 天然の妙用なり、機ははたらきをいふ (六) 大空浮雲相互に礙らざる所に自然妙賢の佛性あり、その他には佛性なきをいふ (七) 山色赤く水光碧き郷村 (八) 月の映ずる澗谷、雲のたなびく佛龕、龕は佛を奉ずるづし (九) 芝は靈芝、朮は草の名、皆瑞草なり、共に鶴と侶すべし (一〇) 案屏は書畫等をかゝざる白き屏風なり (一一) 青々したる山、白き雲のたなびける峰、何れも我が枕とし我が屏風とすべからざるなしとて自然の風景我が枕屏とすべきをいふ (一二) 江山風月の四者はもと常の定まれる主人なし、閑散なる者常に江山風月を以て樂となす、故に閑者その主人なるなり (一三) 清風の入り來るまゝに任かすこと (一四) 明月のみ我が飲の對手を爲すこと (一五) 頭髪のある俗の行爲と同じき行爲を爲すこと (一六) 俗人が仲善き人と壇を作り祭るに白犬丹雞を以てし盟ふ故事、友人の仲よき因柄のこと (一七) 枯れたる竹の笠、笛の莖か (一八) 團くしたる飯、我邦の握り飯の類 (一九) 祇園は精舍の名、祇陀給孤獨園、略して祇園といふ、給孤獨の建設せし所なり、今の中印度の舍衛城の南に在り (二〇) 岩のあたりを往來する雲、野に遊べる鶴 (二一) 背に負ふ錦の囊にて詩文を容る、奚奴は下部 (二二) 頭陀は梵語、煩惱の塵垢を抖擻する義、その修行を頭陀の行といひ、之を行ずる僧の頸に掛くる袋を頭陀袋といふ、こゝは即ち頭陀袋の略か (二三) 六六三三は蓋し諸所に散在せる奇峰と曲水とをいふ

山房蓄二一鐘一。

山房に一鐘を蓄へ、毎に清晨良宵の下に于て、用ひて以て歌を節し、人をし

做不レ了。官大錢多心轉勞。落二得自家一頭白盡。請君細看眼前人。年年一分埋二青草一。草裡多多少少墳。一年一半無二人掃一。

饑乃加レ餐。菜食美レ于二珍味一。倦然後臥。草薦勝レ似二重裀一。○流水相二忘遊魚一。遊魚相二忘流水一。即此便是天機。大空不レ礙二浮雲一。浮雲不レ礙二大空一。何處別有二佛性一。○丹山碧水之鄕。月澗雲龕之品。滌レ煩消レ渴。功誠不レ在二芝朮下一。○頗懷二古

饑ゑて乃ち餐を加ふれば、(一)菜食も珍味より美なり、倦みて然る後臥すれば、(二)草薦も重裀よりも勝る。(三)○流水遊魚と相忘れ、遊魚流水と相忘る、即ち此れ便ち(四)天機なり。大空浮雲を礙らず、浮雲大空を礙らず、(五)何の處にか別に佛性ある。(六)○丹山碧水の鄕、(七)月澗雲龕の品、煩を滌ひ渴を消す、功誠に(八)芝朮の下に在らず。○頗る古人の風を懷ひ、(九)素屛の賜無きを愧づれば、則ち(一〇)青山白雲、何こに在るとして我が枕屛に非らざる。(一一)○江山風月、本と常主無し、閒者便ち是れ主人なり。(一二)○室に入りては淸風を許し、飮に對しては(一三)惟明月のみ。○衲を被り鉢を持し、(一四)髮僧の行徑を作し、(一五)鷄盟を以て檀越に當て、(一六)枯管を以て笻杖に當て、(一七)飣餖を以て(一八)祇園に當て、(一九)岩雲野鶴を以て伴侶に當て、(二〇)背錦奚奴を以て行脚の(二一)頭陀に當て、(二二)六六の奇峰、三三の曲水を探る。

挾懷朴素、不レ樂二權榮一、棲遲僻陋、忽二略利名一、葆守恬淡。希二時安寧一、晏然閒居、時撫二瑤琴一。〇人生自レ古七十少。前除二幼年一後除レ老、中間光景不二多時一、又有二陰晴與一レ煩惱一、到二了中秋一月倍明、到二了淸明一、花更好。花前月下、得二高歌一、急須下讓把二金尊一倒上、世上財多嫌レ不レ盡、朝裏官多

（一）挾懷朴素にして、權榮を樂まず、（二）棲遲僻陋にして（三）利名を忽略し、（四）葆守恬淡にして、時の安寧を希み、（五）晏然閒居して、時に（六）瑤琴を撫す。〇人生古より七十少し、前に幼年を除き、後に老を除けば、（七）中間の光景多時ならず、又（八）陰晴と煩惱とあり。中秋に到り了りて月倍〻明かに、（九）晴明に到り了りて花更に好し、花前月下高歌を得ば、急に須らく讓に（一〇）金尊を把りて倒にすべし。世上財多くして賺し盡（一一）さず、（一二）朝裏官多くして做し了らず、官大に錢多ければ心轉〻勞す、（一三）自家に落し得て頭白蚤し、請ふ、君細かに看よ眼前の人、（一四）年年一分は靑草に埋まる。（一五）草裡多多少少の墳、一年一半人の掃ふなし。

（一）心の中に懷きもてる思想の飾りけなく質素なること　（二）世を避けてわび住ひする所は邊鄙の陋しき所なること　（三）利益名譽を忽にして心にかけぬこと　（四）眞心を保ち守りて無心無欲なること　（五）心の安らかにして落ちつけること　（六）瑤玉を以て飾れる琴をかなづるをいふ　（七）中間の光陰歲月の多からざること　（八）陰は心の鬱悶すること、陽は心の快活なること　（九）淸明は今の四月五日或は六日頃に當る　（一〇）酒の入れる金の樽の中の酒を飲み盡すをいふ　（一一）賺は物を賣りて餘利を得ること、世上の人は財多くして之を使用し盡すを得ざるをいふ　（一二）朝裏は朝廷の中なり　（一三）心の勞苦自己に落ち來り勞苦の爲めに頭髮白くなるをいふ　（一四）年々眼前に見ゆる人の一分は死して之を埋め墓上靑草生ずるをいふ　（一五）多々少々は卽ち多少なり、多少は多數のこと

送之禮。一也。終日可觀書鼓琴。二也。睡起隨意無有拘碍。三也。不聞炎涼囂襍。四也。能課子耕讀。五也。○雖無絲竹管絃之盛。一觴一詠亦足以暢叙幽情。○獨臥林泉。曠然自適。無利無營。少思寡慾脩身出世法也。○茅屋三間。木榻一枕。燒清香。啜苦茗。讀數行書。懶倦便高臥松梧之下。或科行吟。日常以苦茗代肉食。以松石代珍奇。以琴書代益友。以著述代功業。此亦樂事。

清香を燒き、苦茗を啜り、數行の書を讀み、懶倦すれば便ち松梧の下に高臥し、或は行吟(二〇)を科し、日常苦茗を以て肉食に代へ、松石を以て珍奇に代へ、琴書を以て益友に代へ、著述を以て功業に代ふ、此れ亦樂事なり。

(一) 溝渠を掘りあけて水を通すこと (二) 嘯吟は詩を吟じ歌を歌ふこと (三) 林浪は林濶に同じ、酒を飲みて酔ひ頽れたるさま (四) 世俗の中の物にあらず、能く世俗外に超越したるものなり (五) 此の人間は世間に同じ、世間の俗事を說かざること (六) 世間に於ける無事閑散の人なり (七) 交接は交際と同じ、人と交はらざるをいふ (八) 人の來たるを拜し、人の往くを送るの禮なきをいふ (九) 睡るも起くるも我が意のまゝにて差しさはりのなきをいふ (一〇) 炎涼の觴前に出づ、囂雜はやかましき雜多のこと (一一) 田を耕し書を讀むことを命じて爲さしむること (一二) 絲は琴のこと、竹は笛のこと (一三) 或は觴にて酒を飲み、或は詩を詠ずること (一四) 心の內の情を充分に發揚すること (一五) 曠然は心豁空しく何物も心に碍らざること (一六) 利益の觀念もなく、經營するの觀念もなきこと (一七) 思慮することも少く慾心も少きこと (一八) その身を修養して世俗より超越して俗氣なき法なり (一九) 茅ぶきの家屋の三室あるもの、小さき家屋なり (二〇) 行吟は散步しながら詩を吟ずること

居然蓮界。學二禪坐一者。達二禪之理一。大地盡作二蒲團一。○衡門之下。有レ琴有レ書。載彈載詠。爰得二我娯一。豈無二他好一。樂二是幽居一。朝爲二灌園一。夕偃二蓬廬一。

く到る處に於て坐禪するを得べきなり　（一八）木を横へて作りたる門にてかぶ木門なり　（一九）然れども我はその他に好む所なきにあらず、下文いふ所の如き是なり　（二〇）蓬のぼう〳〵として生ひ茂れる住家のこと

因葺二舊廬一。疏レ渠引レ泉。周以二花木一。哦二吟於其間一。故人過逢。瀹レ茗奕レ棋。杯酒淋浪。殆非二塵中物一也。○逢レ人不レ説二人間事一。便是人間無事人。○閑居之趣。快活有レ五。不二與交接一。免二拜

因りて舊廬を葺め、(一)渠を疏し泉を引き、(二)周らすに花木を以てし、其間に哦吟す。(三)○故人過逢すれば、茗を瀹で奕棋し、杯酒淋浪す、(四)殆ど塵中の物に非ざるなり。○人に逢ひて(五)人間の事を説かざるは、便ち是れ人間無事の人なり。(六)○閑居の趣、快活五あり。與に交接せず、(七)拜送の禮(八)を免るゝは、一也。終日書を觀琴を鼓すべきは、二なり。睡起意に隨ひ、(九)拘碍あること無きは、三なり。炎涼囂雜(一〇)を聞かざるは、四なり。能く子に耕讀(一一)を課するは、五なり。○絲竹管絃(一二)の盛無しと雖も、一觴一詠、(一三)亦以て幽情(一四)を暢叙するに足る。○林泉に獨臥し、曠然(一五)として自ら適し、利無く營無く、(一六)少思寡慾(一七)なるは、脩身出世の法也。(一八)○茅屋三間、(一九)木榻一枕、

於二九衢奔走一。六時禮佛。清レ于二五夜朝天一。○會意不レ求レ多。數幅晴光摩詰畫。知心能有レ幾。百篇野趣少陵詩。○醇醪百斛。不レ如二一味大和之湯一。良藥千包。不レ如二一服清涼之散一。○閒暇時。取二古人快意文章一。朗朗讀レ之。則心神超逸。鬚眉開張。○修二淨土一者。自淨二其心一。方寸

千包は、一服の清涼散に如かず。○閒暇の時、古人快意の文章を取りて、朗朗として之を讀めば、(一四)心神超逸し、(一五)鬚眉開張す。○淨土を修むる者、自ら其心を淨くすれば、(一六)方寸居然たる蓮界なり。禪坐を學ぶ者、(一七)禪の理に達すれば、大地盡く蒲團作り。○(一八)衡門の下、琴あり書あり、載ち彈じ載ち詠ずれば、爰に我が娯を得、(一九)豈他の好無からんや、是幽居を樂み、朝に灌園を爲し、夕に(二〇)蓬廬に偃す。

(一) 片時は少時なり、清暢は心の清くのんびりとしたること (二) 片時の樂を享くること (三) 半晌も少時なり、幽雅は奥ゆかしくして風雅なること (四) 姑く長く清暢幽雅の時を期待する心を起さゞるをいふ (五) 佛家にて一定の所を遶行すること (六) 九方に通ずる大道なり (七) 六時は晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜のこと (八) 午前四時頃(五夜)の朝のそらより清し (九) 摩詰は唐の王維、字は摩詰のことにて、王維は詩を善くし又畫を善くす、此は王摩詰の畫ける數幅の晴れたる景光の畫は會心のものたり (一〇) 知心は心をよく知れる友人 (一一) 少陵は唐の杜甫のこと、杜甫字は子美、少陵の人、その特に田舍の趣味に富む、杜少陵百篇の野趣の詩はよく心を知れる友の如しとなり (一二) 雜りけなき濁酒 (一三) 大和湯は酒なり (一四) 我が精神の世俗外に超えて逸脱して高尚となること (一五) 顏面の暢び暢びとして快活なること (一六) 方寸は我が心をいふ、居然は依然に同じ、動かざる貌、蓮界は極樂世界のこと、我が心極樂世界と異ならざるをいふ (一七) 禪宗の道理を悟れば大地盡く坐禪の時用ふる蒲團の如

詩文。以其可以兼濟也。心手俱懶則坐。以其不強役于神也。心不甚定。宜看詩及襍短故事。以其易于見意。不滯于久也。心閑無事。宜看長篇文字。或經註。或史傳。或古人文集。此又甚宜于風雨之際。及寒夜也。又曰。手冗心閒則思。心冗手閒則臥。心手俱閒。則著作書字。心手俱冗。則思蚤畢其事。以寧吾神。

經註、或は史傳、或は古人の文集を看るべし。此れ又甚だ風雨の際、及び寒夜に宜しきなり。又曰く、(六)手冗に心閒なれば則ち思ひ、心冗に手閒なれば則ち臥し、心手俱に閒なれば、著作し字を書し、心手俱に冗なれば、蚤く其事を畢へて以て吾が神を寧んぜんことを思ふ。

(一) 心思ふことなくして手に業を爲さゞること (二) 打捨ておくこと (三) 字を寫すと詩文を作るとを兼ねて成すことを得るなり (四) 強ひて之を使役せざるをいふ (五) 色々の閑雅なる故事なり (六) 手冗は手の忙しきこと

片時清暢。即享片時。半景幽雅。即娛半景。不必更起姑待之心。○一室經行。賢

片時の(一)清暢は、即ち(二)片時を享け、(三)半景の幽雅は、即ち半景を娛む、必ずしも更に(四)姑待の心を起さず。○一室の(五)經行は、(六)九衢の奔走に賢り、(七)六時の禮佛は、(八)五夜の朝天より淸し。○會意は多きを求めず、數幅の晴光(九)摩詰の畫、(一〇)知心能く幾ばくある、(一一)百篇の野趣少陵の詩。○(一二)醇醪百斛は、一味の(一三)大和湯に如かず。良藥

有二治世法一。有二傲世法一。有二維世法一。有二出世法一。有二垂世法一。唐虞垂レ衣。商周乗レ鉞。是謂二治世一。巣父洗レ耳。裘公瞑レ目。是謂二傲世一。首陽軽レ周。桐江重レ漢。是謂二維世一。青牛度レ關。白鶴翔レ雲。是謂二出世一。若乃魯儒一人。鄒傳七篇。始謂二垂世一。

武王、殷の紂王を伐ちたるをいふ 一四 巣父は堯の時の人、堯之に位を譲らんとす、巣父汚れたることを聞きたりとて耳を洗ふ 一五 未詳 一六 首陽は伯夷叔齊なり、夷齊周の粟を食ふを恥ぢ、首陽山に餓死す 一七 浙江省嚴縣に在り、東漢嚴子陵の魚を釣りし處にて釣臺あり、子陵名は光、東漢光武帝の時の人、光武召して諫議大夫に拜せしも受けず、桐江の邊に魚を釣りて釣を爲して終れり 一八 老子青牛に乗り關を出でゝ去るその終る所を知らず 一九 周の靈王の太子晉白鶴に乗りて山巓に駐り、時人に謝して飛外す 二〇 魯儒一人は孔子を指す 二一 鄒傳七篇は孟子を指す、孟子は鄒人にして孟子七篇を著す

書室中修行法。心閑手懶。則觀二法帖一。以三其可二逐レ字放置一也。手閑心懶。則治二迂事一。以二其可レ作可レ止一也。心手俱閑。則寫レ字作二

書室の中修行の法は、(一)心閑に手懶ければ、則ち法帖を觀る、其字を逐ひての(二)放置すべきを以てなり。手閑に心懶ければ、則ち迂事を治む、其の作す可く止む可きを以てなり。心手俱に閑なれば、則ち字を寫し詩文を作る、其の以て(三)兼濟すべきを以てなり。心手俱に懶ければ則ち坐睡す、其の神を(四)强役せざるを以てなり。心甚だ定まらざれば、宜しく詩及び(五)襍短の故事を看るべし。其の意を見るに易くして久しきに滯らざるを以てなり。心閑に無事なれば、宜しく長篇の文字、或は

煩惱。○牛鳴一几。遠興閒思。天地何其寥濶也。清晨端起。亭午高眠。胸襟何其洗滌也。○行合二道義一。不レ卜自吉。行悖二道義一。縱卜亦凶。人當二自卜一。不二必問一レ卜。○奔二走于權倖之門一。自視不レ勝二其榮一。人竊以爲レ辱。經二營于利名之場一。操レ心不レ勝二其苦一。己反以爲レ樂。○宇宙以來。

行、道義に悖れば、縱ひ卜するも亦凶なり。人は當に自ら卜すべし。(八)必ずしも卜に問はず。○權倖(九)の門に奔走するは、自ら視ては其榮に勝へず。人は竊に以て辱と爲す。利名の場に經營(一〇)するは、心を操ること其苦に勝へず、己は反りて以て樂と爲す。○宇宙以來、治世の法あり、傲世(一一)の法あり、維世の法あり、出世の法あり、垂世の法あり、唐虞衣を垂れ(一二)、商周鉞を秉る(一三)、是を治世と謂ふ。巢父(一四)耳を洗ひ、裘公(一五)目を瞑らす。是を傲世と謂ふ。首陽(一六)周を輕んじ、桐江(一七)漢を重んず、是を維世と謂ふ。青牛(一八)關を度り、白鶴(一九)雲に翔る、是を出世と謂ふ、若し乃ち魯儒(二〇)一人、鄒傳(二一)七篇。始めて垂世と謂ふ。

(一) 若し人が米なきを憂へて米至らば人はもとより米なきを憂ふべしとなり (二) 貧弱なることをなやみ苦しむこと多きをいふ (三) 遠大なる興味、靜閑なる思想 (四) 廣々として大なること (五) 亭午は正午にて午前十二時頃 (六) 水にて洗ひたるが如く心中のさつぱりとして清らかなるをいふ (七) 筮竹を取りて吉か凶かを卜はずとも自ら吉祥なることを知るべし (八) 自ら吉凶を判定すべし (九) 權勢を有する人の家にかけ廻りてこびへつらふこと (一〇) 自己の利益名譽を求つる場にて、自己の爲めに色々計畫すること (一一) 世の人に對して傲り高ぶること (一二) 堯舜二帝は天下能く治まりて只衣裳を垂れて手を拱き居るのみなり (一三) 殷の湯王、周の武王は斧鉞を取りて夏の

清事不レ可レ著レ跡。若衣冠必求二奇古一。器用必求二精良一。飲食必求二異巧一。此乃清中之濁。吾以爲二清事之一蠹一。○吾之一身。常有下少不レ同レ壯。壯不レ同レ老。吾之身後。焉有下子能肖レ父。孫能肖も祖。如レ此期必。盡屬二妄想一。所レ可レ盡者。惟留二好樣一。與二兒孫一而已。

と 四 おごそかにして厲しく儼しき態度 五 その行の規律正しくして禮法にかなふこと 六 世の艱難辛苦も安樂愉快も共に經驗すること 七 丟は一たび去りて還らざるなり、甜苦共に我より去りて甜苦の境に制せられざること 八 世の貧富苦樂の趣味は心に關せざるをいふ、嚼レ蠟は味なきこと 九 急に頭を回らして過ぎ去りし歲月を顧みること 一〇 歲月の過ぎ去ることの早きこと、彈丸の飛び行くより疾きこと 一一 我が力を以て自由に富貴貧賤を得るときは造物者が人に富貴貧賤を與奪する權利なきこととなるなり 一二 人をそしり人をほめ、又は人の怒り喜ぶこと 一三 人のいふ所の言に隨ひて毀譽嗔喜すれば 一四 世の俗界を離れたる潔白なる所爲 一五 蠹は木を食ふ蟲、此は清事の害を爲すをいふ 一六 子は能く父に似、孫は能く祖に似ることを期待すること 一七 好き模範を後世に殘すこと

若想レ錢而錢來。何故不レ想。若愁レ米而米至。人固當レ愁。曉起依レ舊貧窮。夜來徒多二

若し錢を想うて錢來らば、何が故に想はざらん、(一)若し米を愁へて米至らば、人固より當に愁ふべし。曉に起き舊に依りて貧窮なれば、夜來徒らに煩惱多し。(二)○半窻一几、(三)遠興閒思、天地何ぞ其れ寥濶なるや。(四)清晨端に起き、亭午高く眠る、(五)胸襟何ぞ其れ洗滌なるや。(六)○行、道義に合へば、卜せずして(七)自ら吉なり。

牕前落月。戸外垂蘿。石畔草根。橋頭樹影。可立可臥。可坐可吟。○褻狎易契。日流于放蕩。莊厲難親。日進于規矩。○甜苦備嘗。好丟手。世味渾如嚼蠟。生死事大。急回頭。年光疾于跳丸。○若富貴貧窮。由我力取。則造物無權。若毀譽嗔喜。隨人脚根。則讒夫得志。○

(一)牕前の落月、戸外の垂蘿、石畔の草根、橋頭の樹影、立つ可く臥す可く、坐す可く吟ず可し。○(二)褻狎は契り易くして、日に(三)放蕩に流る、(四)莊厲は親み難くして、日に(五)規矩に進む。○(六)甜苦備に嘗め、(七)好く手を丟れば、(八)世味渾て蠟を嚼むが如し。生死の事大なり、(九)急に頭を回らせば、年光丸を跳らすより疾し。○富貴貧窮の若きは、(一一)我が力取に由れば、則ち(一〇)造物權なし。○(一二)毀譽嗔喜の若きは、(一三)人の脚根に隨へば、則ち讒夫志を得。○(一四)淸事は跡を著く可からず、若し衣冠必ず奇古を求め、器用必ず精良を求め、飲食必ず異巧を求めば、此れ乃ち淸中の濁、吾以て淸事の(一五)一蠹と爲す。○吾の一身、常に少は壯に同じからず、壯は老に同じからざる有り、吾の身後、焉んぞ子能く父に肖、孫能く祖に肖ること有らんや。(一六)此の如く期必せば、盡く忘想に屬す、盡すべき所の者は、惟(一七)好樣を留めて兒孫に與ふるのみ。

(一) 牕の前に月光の墜ちうつること　(二) なれなれしくして親密に交ること　(三) 行を檢束せずしく氣まゝなること

燭。松葉堪燃。石畔欲眠。琴囊可枕。○流年不復記。但見花開爲春。花落爲秋。終歲無所營。惟知日出而作。日入而息。○脫巾露頂。斑文竹籜之冠。倚枕焚香。半臂華山之服。○谷雨前後。爲和凝湯社。雙井白芽。湖州紫筍。掃臼滌鐺。徵泉選火。以王濛爲品司。盧仝爲執權。李贊皇爲博士。陸鴻漸爲都統。聊消渴吻。敢諱水淫。差取嬰湯。以供茗戰。

皇を博士と爲し、陸鴻漸(一九)を都統と爲し、聊か渇吻(二〇)を消し、敢て水淫(二一)を諱み、差ゝ嬰湯(二二)を取り、以て茗戰に供す。

(一) 儉約を以て貧窮に打勝つときは貧窮を忘れて貧窮ならざるをいふ (二) 人に施與するを以て奢侈に代ふれば奢侈の心化して慈愛の心となるをいふ (三) 省は事を省きて少くすると、累は心を累はす厄介物のこと (四) 逆は逆境にて萬事意の如くならざる境遇のこと (五) 松葉を燃やして以て燭に代へ花を照らすをいふ (六) 琴を入るゝ囊を以て枕に代へて眠るをいふ (七) 年月の過ぎ行くこと水の流るゝが如きをいふ、記は記憶すること (八) 何等經營する所なきと (九) 頭巾を脫して頭の頂上をあらはすをいふ (一〇) まだらの模樣ある竹の皮を以て作りたる冠、蓋し隱者の冠なり (一一) 半臂を纏ふ華山の服を着く、華山の服は蓋し隱者の服なり (一二) 谷雨は清明の後十五日なり、湯社は茶を飲む社會を爲ること (一三) 雙井は江西省の義寧縣の西に在り、此の水他處に勝る、土人汲みて以て茶を造る、白芽は蒸し茶の白き芽なり (一四) 茶を磨する臼を掃ひ茶を煮る釜を洗ふをいふ (一五) 泉の水を汲み來ること (一六) 王濛は晉代の人、隸書を善くし又茶を嗜みたり (一七) 盧仝は唐代の人、茶を飲むを好み、茶歌あり (一八) 李贊皇は、唐の李德裕にして太和中宰相となれり、能く水の器質を知れり (一九) 陸羽字は鴻漸、唐代の人、茶を嗜み、茶經三卷あり (二〇) 茶を飲みてかわきたる口を濡すこと (二一) 水淫は蒸し水の吟味にふけるの意か (二二) 嬰湯は湯の加減につきていふ語か、茗戰は茶の味を飲みくらぶること

一菜。永覺ニ腥羶ー。飯ㇾ僧宴ㇾ客。何煩ニ六甲行廚ー。茅屋一楹。僅蔽ニ風雨ー。掃ㇾ地焚ㇾ香。安用ニ數童縛ㇾ帚。

肉をいふ　（一五）六甲は蓋し六夫のこと、多くの人を使ひて行厨を作るの必要なしとの意か　（一六）茅を以て葺きたるあらば屋一棟のこと　（一七）五六人の童子が箒を作りて掃ふの必要なきをいふ

以ㇾ儉勝ㇾ貧貧忘。以ㇾ施代ㇾ侈侈化。以ㇾ省去ㇾ累累消。以ㇾ逆鍊ㇾ心心定。○淨几明牕。一軸畫。一囊琴。一隻鶴。一甌茶。一爐香。一部法帖小園幽逕。幾叢花。幾羣鳥。幾區亭。幾卷石。幾池水。幾片閒雲。○花前無ㇾ

（一）儉を以て貧に勝てば貧忘る。（二）施を以て侈に代ふば侈化す。（三）省を以て累を去れば累消す。（四）逆を以て心を鍊れば心定まる。○淨几明牕、一軸の畫、一囊の琴、一隻の鶴、一甌の茶、一爐の香、一部の法帖、小園の幽逕、幾叢の花、幾羣の鳥、幾區の亭、幾卷の石、幾池の水、幾片の閒雲。○花前に燭無きも、（五）松葉燃すに堪へ、石畔に眠らんと欲すれば、（六）琴囊枕すべし。（七）○流年復た記せず、但見る花開いて春と爲り、花落ちて秋と爲るを、（八）終歲營む所無く、惟日出でて作し、日入りて息ふを知る。○（九）巾を脫し頂を露す、（一〇）斑文竹籜の冠、枕に倚り香を焚く、（一一）半臂華山の服。○（一二）谷雨前後、和凝湯社を爲り、（一三）雙井の白芽、湖州の紫筍、（一四）臼を掃ひ鐺を滌ひ、（一五）泉を徵し火を選び、（一六）王濛を以て品司と爲し、（一七）盧仝を執權と爲し、（一八）李賛

書。拂二几微塵一。洗二硯宿墨一。灌二園中花一。掃二林中葉一。覺二體少倦一。放二身匡牀上一。暫息半晌。可也。○待レ客當レ潔。不レ當レ侈。無レ論レ不レ能レ繼。亦非レ所二以惜一レ福。○葆レ眞莫レ如レ少レ思。寡レ過莫レ如レ省レ事。善應莫レ如レ收レ心。解レ醪莫レ如レ澹レ志。○世味濃。不レ求レ忙而忙自至。世味淡。不レ偸レ閒而閒自來。○盤飧

暫く息ふこと半晌(五)にして可なり。○客を待つには當に潔くすべし。當に侈るべからず。繼ぐ(六)こと能はざるに論なく、亦福(七)を惜む所以に非らず。○眞(八)を葆つには思を少くするに如くは莫く、過を寡くするには事を省くに如くは莫く、善く應ず(九)るには心を收むるに如くは莫く、醪(一〇)を解くには志を澹くするに如くは莫し。○世味(一一)濃なれば、忙を求めずして忙自ら至り、世味淡(一二)なれば、閒を偸まずして閒自ら來る。○盤飧(一三)一菜、永く腥羶(一四)を覺す、僧に飯せしめ客を宴するに、何ぞ六甲(一五)の行廚を煩はさん。茅屋(一六)一楹、僅に風雨を蔽ふ、地を掃ひ香を焚くに、安(一七)んぞ數童箒を縛するを用ひん。

(一) 古人の法帖に臨みて之を模寫すること、字を習ふをいふ (二) 溫は溫習なり、昔年の書を溫習するをいふ (三) 磨りたまりたる古き墨 (四) 匡牀は安らかなる牀なり (五) 晌は一度食事を爲す間の時刻なり、半晌は暫時のこと (六) 奢侈は相繼續して客を待つこと能はざるをいふ (七) 幸福を大切にする所以にもあらざるをいふ (八) 眞は我の眞心をいふ、眞心を保養すること (九) 善く事に應じて處理すること (一〇) 醪は濁酒なり、濁酒の醉を醒ますこと (一一) 世味は、世の富貴利益などの趣味なり、濃は深厚なること (一二) 世俗の趣味淡泊にして富貴利益を求めざること (一三) 盤の上に盛りたる食物なり、一菜は甚だ粗食にして副食なきこと (一四) 腥羶はなまぐさき魚肉獸

若杜門。孫仲益浮白俗談。足當洗耳。○鐵笛吹殘。長嘯數聲。空山答響。胡麻飯罷。高眠一覺。茂樹屯陰。○編茅爲屋。疊石爲堦。何處風塵可到。據梧而吟。烹茶而話。此中幽興偏長。○皂囊白簡。被人描畫半生。黃帽青鞋。任我逍遙一世。

清閑之人。不可惰其四肢。又須以閑人做閑事。臨古人帖。溫昔年

(一) 毛穎は筆のこと、筆の毛は穎の如くその先鋭利なり、故にいふ、枕元にてその詩を筆記すること (二) 屐轉はころがりて安んぜざること、案じ得たる佳句を失ひ去るをいふ (三) 雪と梅花とを取りまぜて食ふこと (四) [illegible]は足の強健にして能く歩行に耐ふること (五) 丹は藥劑の名、藥劑の精錬配合したる者を丹といふ (六) 王思遠名は撮、字は思遠、南北朝時代の人、その人と爲り氷を懐くが如く暑月も亦霜氣ありといふ (七) 門を杜ぢて客を謝絶するをいふ (八) 白は太白にて酒杯のこと、酒を飲みながら世俗の談話をなすこと (九) 巣、許堯帝禪位の言を聽き汚れたることを聞きたりとて耳を洗ひしことあり、それと同一のことなりとの義 (一〇) 鐵[illegible]を以て作りたる笛 (一一) 胡麻の入りたる飯 (一二) 屯は留むなり、生ひ茂りたる樹が陰を留むること (一三) 汚れたる風や塵埃のこと、世の中の汚れたる俗事をいふ (一四) 梧は几のこと、梧を以て作る故に几を梧といふなり (一五) 興ゆかしき興味がひたすらに多きをいふ (一六) 皂は黑色なり、皂色の囊白簡は白色の木の札なり、蓋し白簡に書して之を皂囊に入るるなり (一七) 黃色の帽、青色の草鞋、野人の服する所なり

清閑の人、其四肢を惰る可からず。又須らく閑人を以て閑事を做すべし。古人の帖を臨して、昔年の書を溫め、几の微塵を拂ひ、硯の宿墨を洗ひ、園中の花に灌ぎ、林中の葉を掃ひ、體少しく倦むを覺ゆれば、身を匡牀の上に放き、

耕。諸葛七擒。爭似ニ南陽抱レ膝。○飯後黑甜。日中薄醉。別是洞天。茶鐺酒臼。輕案繩床。尋常福地。○翠竹碧梧。高僧對レ奕。蒼苔紅葉。童子煎レ茶。

久坐神疲。焚レ香仰臥。偶得ニ佳句。即令ニ毛穎君就レ枕掌記。不則展轉失去。○和レ雪嚼ニ梅花。羨ニ道人之鐵脚。燒レ丹染ニ香履。稱ニ先生之醉吟。○燈下玩レ花。簾內看レ月。雨後觀レ景。醉裡題レ詩。夢中聞ニ書聲。皆有ニ別趣。○王思遠掃レ客坐留。不レ

久しく坐して神疲るれば香を焚きて仰臥し、偶々佳句を得れば、即ち毛穎君(一)をして枕に就きて掌記せしむ。不ざれば則ち展轉(二)して失ひ去る。○雪(三)に和して梅花を嚼み、道人(四)の鐵脚を羨み(五)、丹を燒きて香履を染め、先生の醉吟を稱す。○燈下に花を玩び、簾內に月を看、雨後に景を觀、醉裡に詩を題し、夢中に書聲を聞く、皆別趣あり。○王思遠(六)客を掃ひて坐留す(七)、門を杜ぐに若かず。孫仲益白(八)を浮べて俗談す、(九)耳を洗ふに當つるに足る。○鐵笛(一〇)吹き殘りて、長嘯すること數聲、空山響に答ふ、胡麻(一一)飯し罷みて、高眠一たび覺め、茂樹(一二)陰を屯む。○茅を編みて屋と爲し、石を疊みて堦と爲せば、何の處に風塵(一三)の到るべき。梧(一四)に據りて吟じ、茶を烹て話せば、此中(一五)幽興偏に長し。○皂囊白簡(一六)、人に半生を描畫せられ、黃帽青鞋(一七)、我の一世を逍遙するに任す。

忘。○塵緣割斷、煩惱從何處安身。世慮潛消、清虛向此中立脚。○簷前綠蕉黃葵、老少葉、鷄冠花、布滿階砌。移榻對之。或枕石高眠。或提壺清話。門外車馬之塵滾滾、了不相關。○夜寒坐小室中、擁爐閒話、渴則敲冰煮茗、饑則撥火煨芋。○阿衡五就、那如莘野躬

滾滾(一一)たるも、了に相關せず。○夜寒く小室の中に坐し、爐を擁して閒話し、渴すれば則ち氷を敲きて茗を煮、饑うれば則ち火を撥して芋を煨る。○阿衡(一二)の五就は、那ぞ莘野に躬耕する(一三)に如かん。諸葛の七擒(一四)、爭でか南陽に膝を抱く(一五)に似かん。○飯後の黑甜(一六)、日中の薄醉(一七)は、別に是れ洞天(一八)なり。茶鐺酒臼(一九)、經案繩床(二〇)は、尋常の福地なり。○翠竹碧梧、高僧奕に對し、蒼苔紅葉、童子茶を煎る。

(一) 蘚はコケなり、蘚跡はコケの生じたる處 (二) 形骸を忘れて只心のみを以て交はる親密の友 (三) 膝を進めて大に談論すること (四) 世俗の汚れたる因緣を斷ち切りて之に心を奪はされざること (五) 世の中の事を思り憂ふる念を潜かに消滅するをいふ (六) 清くして無我無心なる狀態が此の中に向ひて基礎を作るをいふ (七) 綠色の芭蕉と、黃色の葵となり (八) 老少葉は雁來紅のこと (九) 上り段の石だゝみのあたりに一杯に布き詰つること (一〇) 老莊などの談話を爲すをいふ (一一) 滾滾は盛んなる貌、此は塵の盛に起るをいふ (一二) 阿衡は殷の湯王の宰相伊尹のこと、伊尹阿衡の官となる、故にいふ、五就は五たび官を去り又五たび官に就くこと (一三) 伊尹初め有莘の野に耕す湯王之を聘するに及んで起ちて湯王に事ふ (一四) 諸葛亮南蠻を征し敵將孟獲を得營陣の間を見しめ七縱七擒せり (一五) 諸葛亮初め南陽に在りて官に仕へず膝を抱きて梁父の吟を爲せり、劉備その名を聞き之を三顧し初めて出でて仕ふ (一六) 黑甜は睡眠なり、北方の人は晝寢を黑甜といへり (一七) 少しく酒に醉ふこと (一八) 仙人の境涯をいふ、仙人は好んで洞中に住む、故にいふ (一九) 茶を煮る鐺、酒を入るゝ臼 (二〇) 經書を載する几案、繩にてまとひたる床

田產。不レ問ニ炎涼。不レ聞ニ曲直。不レ徵ニ文逋。不レ談ニ士籍。○筆之壽日。墨之壽月。硯之壽世。○採レ茶欲レ精。藏レ茶欲レ燥。烹レ茶欲レ潔。○茶見レ日而味奪。墨見レ日而色灰。○磨レ墨如ニ病兒。把レ筆如ニ壯夫。

と酒の國に長き春時あるが如きなり（九）還往は消息に同じ、世と如何なる消息をか通ずるぞ（一〇）伏羲は太古の人、超絶出世間の人と也（一一）細まかなる煩雜の禮法（一二）親密に交はらざる客、初めて見たる客のこと（一三）炎は權勢の盛なること涼は權勢の衰ふること（一四）事理の曲直を爭はざるをいふ（一五）文逋は文債なり、人より文章を作ることを賴まれて之を作らざるをいふ（一六）善き葉を擇らんで摘み採るをいふ（一七）茶を日に乾かすときは之が爲めに味を失ふをいふ（一八）墨は日光に乾かすときは灰色となるをいふ（一九）病兒を介抱するが如く之を大切にすること（二〇）雄健に筆勢を振はするをいふ

園中不レ能レ辨ニ奇花異石。惟一片樹陰。半庭蘚跡。差可レ會レ心。忘形友來。或捉レ膝劇論。或鼓レ掌歡咲。或彼談我聽。或彼默我喧。而賓主兩

園中奇花異石を辨ずる能はざるも、惟一片の樹陰、半庭の蘚跡（一）、差〻心を會すべし。（二）忘形の友來り、或は膝を促して劇論し、或は掌を鼓して歡咲し、或は彼談じ我聽き、或は彼默して我喧（三）しくして、賓主兩つながら忘る。○塵緣割斷（四）せば、煩惱何れの處に從ひて身を安んぜん。（五）世慮潛消すれば、淸虛（六）此中に向ひて脚を立つ。○簷前の綠（七）蕉黄葵（八）、老少葉、鷄冠花（九）、階砌に布滿す、榻を移して之に對し、或は石に枕して高く眠り、或は塵を捉りて（一〇）淸話すれば、門外車馬の塵

何感慨而甘栖遯。余倦于對。但拈古句。答曰。得閒多事外。知足少年中。問是何功課。曰。種花春掃雪。看錄夜焚香。問是何利養。曰。硯田無惡歲。酒谷有長春。問是何還往。曰。有客來相訪。通名是伏羲。○山居勝于城市。蓋有八德。不責苛禮。不見生客。不混酒肉。不競

句を拈りて答へて曰く、閒(二)を得る多事の外、足るを知る少年(三)の中、問ふ是れ何の功課(四)ぞと。曰く、花を種ゑて春雪を掃ひ、錄(五)を看て夜香を焚く。問ふ是れ何の利養(六)ぞと。曰く、硯田(七)惡歲無く、酒國長春(八)有り。問ふ是れ何の還往(九)ぞと。曰く、客有り來りて相訪ひ、名を通ずるは是れ伏羲(一〇)と。○山居は城市に勝る。蓋し八德あり。苛禮(一一)を責めず、生客(一二)を見ず、酒肉を混ぜず、田產を競はず、炎涼(一三)を聞かず、曲直(一四)を鬪せず、文逋(一五)を徵せず、士籍を談ぜず。○筆の壽は日、墨の壽は月、硯の壽は世なり。○茶を採るには精ならんことを欲し、茶を藏するには燥かんことを欲し、茶を烹るには潔からん(一六)ことを欲す。○茶は日を見て味奪(一七)はれ、墨(一八)は日を見て色灰となる。○墨を磨するには病兒(一九)の如くし、筆を把るには壯夫(二〇)の如くす。

(一) 世を遯れ隱れて栖むること　(二) 多事の外に於て閒暇を得て樂しむこと　(三) 少年の中に於て分に安じて足ることを知るをいふ　(四) 功課は仕事を爲すこと　(五) 古人の語錄などを看ること　(六) 都合よく我が心を修養すること　(七) 文章を作ること多きこと硯田を耕作して毎年にて收穫の多きが如きこと　(八) 酒を飲みて長く樂しむこと

影參差。所レ見非レ空非レ色。此時雖二名衲敲一レ門。山童且勿レ報也。○會心處不二必在一レ遠。翳然林木。便自有二濠濮間想一。不レ覺鳥獸禽魚自來親レ人。○茶欲レ白。墨欲レ黑。茶欲レ重。墨欲レ輕。茶欲レ新。墨欲レ陳。○馥噴二五木之香一。色冷二氷蠶之錦一。○築二風臺一以思レ避。構二仙閣一而入レ圓。

客過二草堂一問。

（一）木を以て作りたる寢臺　（二）書畫など書かざる屛風　（三）孔子の儒教と老子の道教をいふ　（四）樂天は唐の白樂天にて風流洒落の人なり　（五）辰は午前八時頃、酉は午後六時頃　（六）古琴及儒道佛書等の物が來りて我が心を誘ひ出すをいふ、氣隨は外物の誘ふまゝに心の隨ひて出でゝ樂むこと　（七）我が外貌は愉快にして內心は和らぎて樂しむこと　（八）一宿は一夜なり、再宿は二夜なり　（九）頽然は心樂しみて身體の打頽れたるさま、嗒然は物を忘れてぼんやりとするさまなり、皆無我無心の狀態なり　（一〇）參差は入りまじりて齊一ならざる貌　（一一）空は一物なき無形のこと、色は形相のある有形の物質のこと　（一二）有名なる僧侶なり、衲は僧衣なり、轉じて僧侶のことをいふ　（一三）之を報ぜざるは我の興を損ずるを恐るゝなり　（一四）我が心に會得して悅び樂しむこと　（一五）翳然は生ひ茂りて影を爲すこと　（一六）莊子惠子と濠梁の上に遊ぶ、莊子曰く鯈魚出で遊びて從容たるは是れ魚の樂むなりと惠子曰く、子は魚に非らず安んぞ魚の樂を知らん、莊子曰く、子は我に非らず、安んぞ我が魚の樂を知ざるを知らんやと、又莊子釣して濮水に在り楚王二大夫をして莊子を聘せしむ、莊子顧みずして曰く往け、吾は寧ろ尾を塗中に曳かんと應ぜず、此は優游相樂しむをいふ　（一七）白は淡泊の意なり　（一八）陳は舊く久しきを經ること　（一九）馥は香氣なり、香氣は五木の香氣を噴き出すをいふ　（二〇）水蠶は蠶の一種なり、水蠶の絲を以て織れる錦はその色甚だ美なり、元和八年大軫國より水蠶織る所の錦衾を貢せしことあり　（二一）風當りのよき臺、臺は土を高く築きて物を觀るうてなをいふ　（二二）圓滿なる境に入るをいふ

客草堂に過ぎりて問ふ、何の感慨ありて（二）栖遯に甘んずと。余對へに倦み、但古

天下一共分中秋月上意氣相許。欲下與二天下一共坐中春風上。

堂中設二木榻四。素屏二。古琴一張。儒道佛書各數卷。樂天既來爲レ主。仰觀レ山。俯聽レ水。傍睨二竹樹雲石一。自レ辰及レ酉。應接不レ暇。俄而物誘氣隨。外適內和。一宿體寧。再宿心恬。三宿後。頹然嗒然。不レ知二其然一。而然。○偶坐二蒲團一。紙窓上月光漸滿。樹

堂中に木榻四(一)、素屏二(二)、古琴一張(三)、儒道佛書各々數卷を設け、樂天(四)既に來りて主と爲り、仰いで山を觀、俯して水を聽き、傍ら竹樹雲石を睨し(五)、辰より酉に及ぶまで應接に暇あらずば、俄(六)にして物誘ひ氣隨ひ、外適し內和し、一宿(八)にして體寧く、再宿にして心恬く、三宿の後は、頹然嗒然(七)として其然るを知らずして然り。○偶々蒲團に坐すれば、紙窓の上月光(九)漸く滿ち、樹影參差(一〇)たり。見る所空に非ず色に非ず、此時名衲(一一)門を敲くと雖も、山童(一二)且らく報ずる勿れ。○會心(一三)の處は必ずしも遠に在らず。翳然たる林木、便ち自ら濠濮間の想あり、覺えず鳥獸禽魚自ら來りて人に親む。○茶は白きを欲し、墨は黑きを欲す。茶は重きを欲し、墨は輕きを欲す。茶は新しきを欲し、墨は陳きを欲す。○馥は五木の香を噴き、色は氷蠶の錦より冷かなり。○風臺を築きて以て避けんことを思ひ、仙閣を構へて圓に入る。

愼令二人密一。語怒令二人按レ劍。語激令二人投レ筆。語高令二人入レ雲。語低令二人下レ石。○溪響松聲。淸聽自遠。竹冠蘭佩。物色俱閑。○鄙吝一銷。白雲亦可レ贈レ客。渣滓盡化。明月自來照レ人。○存レ心有意無意之間。微雲淡二河漢一。應レ世不即不離之法。疏雨滴二梧桐一。○肝膽相照。欲下與二

ば人をして石より下らしむ。○溪響松聲(五)は、淸聽自ら遠く、竹冠蘭佩(六)は、物色俱に閑なり。○鄙吝(七)一たび銷すれば、白雲亦客に贈るべし。渣滓(八)盡く化すれば、明月自ら來りて人を照す。○心を存すること有意無意(九)の間なれば、微雲河漢(一〇)より淡し、世に應ずるに不即不離(一一)の法は、疏雨(一二)の梧桐に滴るごとし。○肝膽(一三)相照せば、天下と共に秋月(一四)を分たんと欲し、意氣(一五)相許せば、天下と共に春風(一六)に坐せんと欲す。

(一) 快は快活にして元氣よきこと (二) 幽は奥ゆかしくして靜かなること (三) 劍に手をかけ、將に之を拔きて斬らんとするをいふ (四) その氣高く升りて雲に入るの思あること (五) 淸らかに溪の流るゝ響、松の吼ゆる聲を聽くこと (六) 竹を以て作りたる冠を冠り、香の高き蘭を佩ぶこと (七) 鄙しくして吝嗇なる念が一たび消滅すれば白雲を以て客に贈るも、客は之を喜びて受くべし (八) 渣滓は水のかす依りて心の汚れに喩ふ、心の汚れが盡く變化して淸淨となること (九) 意識のあると意識の無きとの中間にて恍惚たる心境なり (一〇) 河漢は天の河なり、微しの雲も天の河よりも一層淡泊なるが如きをいふ (一一) 不即不離は近づくが如くにして近かず、離るゝが如くにして離れずして世人に接すること (一二) ばらばらと降る雨が梧桐の木に滴るゝが如き趣あるをいふ (一三) 彼我互にその心を能く知り合ふこと (一四) 天下の人と共に秋月を分ちて相賞せんとするが如く心の中を相分ちて披瀝するをいふ (一五) 彼我の意氣相合うて相互に救援すること (一六) 春風の吹き來る中に坐するが如く相愛するの情の藹然たるをいふ

境俱清絶。○親不ㇾ擧ㇾ飯。雖ニ大賓一不ㇾ宰ㇾ牲。匪下直戒ニ奢侈一而可上ㇾ久。亦將下免ニ煩勞一以安上ㇾ身。○燠生ニ陽火一。煉ニ陰精一。食飽傷ㇾ神氣不ㇾ升。○積ㇾ閒以防ㇾ老。○積ニ快活一以防ㇾ死。○心苟無事。則息自調。念苟無欲。則中自守。

字は元亮、その人と爲り清廉にして高致あり (五) 馬少游は後漢の人、馬援の從弟なり、少游常に云ふ、郡の掾史と爲り墳墓を守り郷里の人善人と稱すれば斯れ可なりと (六) 平生爲す動作をいふ、俯するも仰ぐも進むも退るも皆自己の意に思ふがまゝになすをいふ (七) 霜水は清白の水なり、霜は白し、故にいふ (八) 切り立ちたるが如き險しきがけ、壁の如くなれる峭しき處 (九) かづらの垂れ下りたること (一〇) 片われの雲と、細き月 (一一) 我が心もその境地も俱にすぐれて清らかなるをいふ (一二) 親は父母なり、父母飯を擧げて食せざること (一三) 牲は牛羊豕の肉、此は牛羊豕の肉を切りて羞せざること (一四) 牲を宰せざるは只奢侈を戒むるのみにあらずとの意 (一五) 陽氣の火の如き活力を生ずること (一六) 陰氣の精神を鍛錬して修養せしむること (一七) 精神を傷めきずつけて活氣のなきこと (一八) 閒暇無事を樂むこと (一九) 氣分を快活にして元氣を盛にすること (二〇) 呼吸の息自ら調ひて亂れざるをいふ (二一) 中は心なり、心中に自ら守る所ありて亂れざること

文章之妙。語快令ニ人舞一。語悲令ニ人泣一。語幽令ニ人冷一。語憐令ニ人惜一。語險令ニ人危一。語

文章の妙は、語快なれば人をして舞はしめ、語悲めば人をして泣かしめ、語幽なれば人をして冷かならしめ、(二二)語憐なれば人をして惜ましめ、語險なれば人をして危ましめ、語愼めば人をして密ならしめ、語怒れば人をして劍を按ぜしめ、(二三)語激なれば人をして筆を投ぜしめ、語高ければ人をして雲に入らしめ、(二四)語低けれ

眉公居二山中一。有レ客問。山中何景最奇。曰。雨後露前。花朝雪夜。又問。何事最奇。曰。釣因レ鶴守。果遣二猿收一。○古今我愛陶元亮。郷里人稱馬少游。○嗜レ酒好レ睡。往往閉レ門。俯仰進趨。隨二意所一レ在。○霜水澄定。凡懸崕峭壁。古木垂蘿。與二片雲纖月一。一山映在二波中一。策レ杖臨レ之。心

眉公(一)山中に居る。客ありて問ふ山中何の景か最も奇なると。曰く、雨後露前(二)、花朝雪夜なりと。又問ふ、何の事か最も奇なると。曰く、釣は鶴に因りて守らしめ、果は猿をして收めしむと(三)。○古今我は愛す陶元亮(四)、郷里人は稱す馬少游(五)。○酒を嗜み睡を好みて、往往門を閉ぢ、俯仰進趨(六)、意の在る所に隨ふ。○霜水澄定(七)すれば、凡そ懸崕峭壁(八)、古木垂蘿(九)と片雲纖月(一〇)と、一山映じて波中に在り、杖を策きて之に臨めば、心境(一一)倶に清絶せり。○親(一二)、飯を擡げずんば、大賓と雖も牲(一三)を宰せず。直ゝ奢侈(一四)を戒めて久しうす可きのみに匪ず、亦將に煩勞を免れて以て身を安んぜんとす。○饑は陽火(一五)を生じ陰精(一六)を煉る。食飽けば神(一七)を傷りて氣升らず。○閒(一八)を積みて以て老を防ぎ、快活(一九)を積みて以て死を防ぐ。○心苟も無事なれば、則ち息(二〇)自ら調ふ。念苟も無欲なれば、則ち中(二一)自ら守る。

㈠ 眉公は蘇東坡のこと、東坡は蜀の眉山の人、故に眉公といふ ㈡ 雨の降りたる後の景及び夜露の下ちざる前の景なり ㈢ 此は自然のまゝに任かせて之を管せざること ㈣ 陶元亮は即ち陶淵明のこと、陶潜一の名は淵明

秀色粉墮ㇾ盤。幾山泉遶ㇾ聽入廚孤枕夢回驚ㇾ聞二雨聲一也○世上有一種癡人。所ㇾ食閒茶冷飯。何名二高致一。○桑林麥隴。高下競秀。風搖碧浪層層。雨過綠雲繞繞。雉雊二春陽一。鳩呼二朝雨一。竹籬茅舍。閒以二紅桃白李一。燕紫鶯黃。寓二目色相一。自多二村家閒逸之想一。令三人便忘二艶俗一。○雲生二滿谷一。月照二長空一。洗ㇾ足收ㇾ衣。正是宴安時節。

艶俗(二五)を忘れしむ。○雲は滿谷に生じ、月は長空を照し、足を洗ひ衣を收む、正に是れ宴安(二六)の時節なり。

(一) 我が身外更に俗世界を脊懸する身あること (二) 口より出づるまゝに言ふこと (三) 粉に碎きたる餅の如く無用に屬するをいふ (四) 癡は心癡なり、心癡の中に心癡あること、眞心の存するをいふ (五) 心を回らして養修することの徹底に達するをいふ (六) 努力して田地を耕作するが如く修養を力むるをいふ (七) 薜荔はカヅラにて衣服を作りて之を衣るをいふ (八) 刺繡を爲したる衣裳なり (九) 粱は美米なり、粱肉は美食を食ふこと (一〇) 箕踞は兩足を展べて箕の如くして坐すること、散髮は髮を大童にすること (一一) 終南は山の名、終南山窓の前に倚りて見ゆること (一二) 幾峰は山の名、碧筝は青き筍の左にむらがり立つが如し (一三) 役所より退きて食事を爲すこと (一四) 山水の秀てすぐれたる景色の多くありて盤の上に墮ち來りてよく見ゆること (一五) 幾多の山水の景、鳥のあたりを遶り叉料理部屋まで入り來る (一六) 雜用の茶を飲み、冷かなる飯を食ふこと (一七) 高致なる樣子なり (一八) 桑の木の林、麥の畑 (一九) 青々としたる浪の如き桑麥の相かさなりたること (二〇) 綠の雲の如き桑麥の青色の相めぐり遶ること (二一) 竹のまがきをめぐらしたる茅ぶきの家屋 (二二) 燕は紫色を爲し、鶯は黃色なり、故に燕紫鶯黃といふ (二三) 諸種の景色に目をよせて眺矚すること (二四) 閒暇にして安逸なること (二五) 生めかしき習俗を忘れしむること (二六) 心を安んじて喜び樂しむこと

虛。天淵亦受ニ鳶魚之援一。心能會レ境。風塵還結ニ煙霞之娛一。

天、魚躍ニ于淵一とあり、天は鳶の爲めに援され、淵は魚の爲めに援さるゝなり　(二) 心能く境遇を理會して境遇の爲めに束縛せられず、境外に超脫すること　(三) 世俗のうるさき汚れたる所に在りて煙霞風流の娛樂を得べきこと

身外有レ身。捉ニ麈尾一矢レ口開談。眞如ニ畫餅一。竅中有レ竅。向ニ蒲團一回レ心究竟。方是力田。○山中有ニ三樂一。薜荔可レ衣。不レ羨ニ繡裳一。蕨薇可レ食。不レ貪ニ粱肉一。箕踞散髮。可ニ以逍遙一。○終南當レ戶。鷄峯如ニ碧笋左簇一。退食時。

身外に身有れば、麈尾を捉りて、口を矢いて閑談するも、眞に畫餅の如し。竅中に竅有れば、蒲團に向つて、心を回し究竟するも、方に是れ力田なり。○山中に三樂あり、薜荔衣るべく、繡裳を羨まず。蕨薇食ふべく、粱肉を貪らず。箕踞散髮以て逍遙すべし。○終南は戶に當り、鷄峯は碧笋左に簇るが如し、退食の時、秀色紛として盤に墮ち、幾山泉䆓を遶り廚に入る、孤枕夢回り、雨聲を聞くかと驚かる。○世上に一種の癡人有り、食ふ所閒茶冷飯、何ぞ高致と名づけん。○桑林麥隴、高下競ひて秀づ、風搖きて碧浪層層たり、雨過ぎて綠雲繞繞たり、雉は春陽に鴝き、鳩は朝雨に呼び、竹籬茅舍、間ふるに紅桃白李、燕紫鶯黄を以てす、日を色相に寓すれば、自ら村家閒逸の想多く、人をして便ち

非草莽之臣。早輸國課。作泉石烟霞之主。日遠俗情。○覆雨翻雲何險也。論人情。只合杜門。唫風弄月忽頽然。全天眞。且須對酒。○春初玉樹參差。氷花錯落。瓊臺倚望。恍坐玄圃羅浮。若非黃昏月下。携鐏吟賞。則暗香浮動。疎影橫斜之趣。何能眞賞際。○性不堪

に非ずんば、則ち暗香浮動、(一八)疎影横斜の(一九)趣、何ぞ能く眞實の際ならん。○性、(二〇)虛に堪へずんば、天淵も亦鳶魚の擾を受けん。(二一)心能く境を會すれば、風塵も還(二二)た煙霞の娯を結ばん。

(一) 枕を高くして丘中に眠り世を避け俗を去ること (二) 名を逃れて世外に居り世と關係せざること (三) 兩親の喜ばしき顏色を承けてその心を滿足せしむるやうにすること (四) 肥えたる兒羊、狩に生れて五月を經たる兒羊 (五) 桔槹は水を汲む器、はね釣瓶なり (六) 缶は瓦器酒を盛る器、ホトギといふ、秦人之を以て樂器に充てゝ撃つ (七) 市井は市街のこと、市街中に在るを以て市井の臣といふ、草莽は民間に在る臣なり (八) 國家より賦課せられたる税金を納むること (九) 泉石は泉水岩石、烟霞は烟の如き霞靄にて、山水の風景のよき處に世を避けてその景を樂しむこと (一〇) 杜甫の貧交行に翻レ手作レ雲覆レ手雨とあり、俄忽の間に雲作り雨降るが如く今日の親交、明日は仇敵となり、人情の反覆して常ならざるに喩ふ (一一) 風や月を弄び詩に吟ずることにて風流の遊びをなして樂むをいふ (一二) 頽然は老衰した意氣の頽廢すること (一三) 玉樹は美しき樹木、即ち梅樹なり、參差は長短齊しからざること (一四) 氷花は梅の花のこと、錯落は入りまじること (一五) 瓊の如き美しき臺上より物に倚りかゝりて眺望すること (一六) 玄圃は仙人の居る所、崑崙山の上に在りと、羅浮は梅花を以て有名なる所、廣東省の增城縣に在り (一七) 黃昏はたそがれ時、月の照す下に在りて酒樽を携へ詩を吟じ花を賞すること (一八) 何れよりとなく梅花の香の動き來ること (一九) まばらなる梅樹の影の横に斜にうつれる風致、林和靖の詩に疎影横斜水清淺、暗香浮動月黃昏の句あり (二〇) 我が天性の虛靈不昧なるに堪へずして私欲の起りて心を亂すをいふ (二一) 詩に鳶飛戾レ

當レ富。安步以當レ車。晩食以當レ肉。此巧レ于處レ窮矣。○三月茶笋初肥。梅風未レ困。九月蓴鱸正美。秫酒新香。勝客晴窻。出二古人法書名畫一。焚レ香評賞。無レ過二此時一。

こと (一〇)晩く食くして以て之を肉を食に代へ此を以て肉を食ふと同様に思ふこと (一一)梅雨の頃の風、濕氣を帯び快からず (一二)張翰齊王の東曹の掾となり、秋風起るを見て呉中の鱸魚と蓴羹とを思ふ、蓴は蓴菜にて羹と爲すべし、鱸はスヾキにて膾と爲すべし (一三)モチ米を以て釀したる酒 (一四)勝客はすぐれてよき客、晴窻は晴晴したる窻

高二枕郎中一。逃二名世外一。耕稼以輸二王税一。采樵以奉二親顔一。新穀既升。田家大洽。肥羜烹以享レ神。枯魚燔而召レ友。簑笠在レ戸。桔槔空懸。濁醪相命。擊レ缶長歌。野人之樂足矣。○爲二市

(一)枕を邸中に高くし、名を世外に逃れ、耕稼して以て王税を輸し、采樵して以て(三)親の顔を奉じ、(二)新穀既に升り、田家大に洽く、(四)肥羜烹て以て神に享し、枯魚燔きて友を召び、簑笠戸に在り、(五)桔槔空しく懸り、濁醪相命じ、(六)缶を擊ちて長歌す、野人の樂足れり。(七)○市井草莽の臣と爲りて、早く(八)國課を輸し、(九)泉石烟霞の主と作りて、日に俗情に遠ざかる。(一〇)○覆雨飜雲何ぞ險なるや、人情を論ずれば、只合に門を杜づべし。(一一)風に唫じ月を弄ぶ忽ち(一二)頽然たり、天眞を全うせんには、且く須らく酒に對すべし。○春(一三)初玉樹參差たり、(一四)氷花錯落たり、(一五)瓊臺倚望すれば、恍として(一六)玄圃羅浮に坐するがごとし。若し(一七)黄昏月下尊を携へて唫賞する

白雲在レ天。明月在レ地。焚レ香煮レ茗閲レ偈翻レ經。俗念都捐。塵心頓盡。○暑中嘗默坐。澄心閉目。作二水觀一。久レ之覺下肌髮洒洒。几閣間。似レ有二爽氣一。○胸中只擺二脫一戀字一。便十分爽淨。十分自在。人生最苦處。只是此心沾レ泥帶レ水。明是知得。不レ能二割斷一耳。○無事以當レ貴。早寢以

白雲天に在り、明月地に在り。香を焚き茗を煮、偈を閲し經を翻へせば、俗念都て捐てて(一)塵心頓に盡く。○暑中嘗て默坐し、(二)澄心閉目、(三)水觀を作す、之を久うして(四)肌髮洒洒として、几閣の間、爽氣有るに似たるを覺ゆ。○胸中只一の(五)戀の字を擺脫すれば、便ち十分(六)爽淨、十分自在なり。人生最も苦き處は、只是れ此心(七)泥に沾ひ水を帶び、明に是れ知り得て、(八)割斷すること能はざるのみ。○無事は以て(九)貴に當て、早寢は以て富に當て、安步は以て車に當て、(一〇)晩食は以て肉に當つ、此れ窮に處するに巧なるなり。○三月茶筍初めて肥え、(一一)梅風未だ困まず、九月(一二)蓴鱸正に美にして、(一三)醇酒新に香し。(一四)勝客晴窗、古人の(一五)法書名畫を出し、香を焚きて評賞するは、此時に過ぐるなし。

(一) 世俗に汚れたるつまらぬ心が俄に盡く去ること (二) 心を澄まし清らかにし目を閉ぢて物を見ざること (三) 水中に在るが如き觀念を爲すこと (四) 皮膚も頭髮もさつぱりとして清々としたること (五) 物を戀愛し執着することをぬけ出て取り去ること (六) 心身にして清淨なること (七) 物に拘はり泥み或は水に溺れたるが如く超脫すること能はざること (八) 戀愛執着をたち切りて捨つること (九) 無事を以て貴き地位に代へて貴位と同樣に思ふ

開夢穩。○帶レ雨有レ時種レ竹。關レ門無レ事鋤レ花。拈レ筆間刪二舊句一。汲レ泉幾試二新茶一。○余嘗淨二一室一。置二一几一。陳二幾種快意書一。放二一本舊法帖一。古鼎焚レ香。素麈揮レ麈。意思小倦。暫休二竹榻一。餉時而起。則啜二苦茗一。信レ手寫二漢書幾行一。隨意觀二古畫數幅一。心目間。覺二洒洒靈空一。面上俗塵。當三亦撲二去三寸一。○但看二花開落一。不レ言二人是非一。○莫レ戀二浮名一。夢幻泡影有レ限。且尋二樂事一。風花雪月無レ窮。

む。○余嘗て一室を淨めて一几を置き、幾種の快意の書を陳ね、一本の舊法帖を放き、古鼎香を焚き、素麈(六)を揮ふ。意思少しく倦めば、暫く竹榻に休み、餉時(七)にして起れば、苦茗を啜り、手に信せて漢書幾行を寫し、隨意に古書數幅を觀る、心目の間、洒洒(八)靈空(九)を覺え、面上の俗塵、當に亦三寸を撲ち去るべし。○但花の開落を看、人の是非を言はず。○浮名(一〇)を戀ふる莫れ。夢幻泡影(一一)限あり、且く樂事を尋ねよ、風花雪月窮りなし。

(一) 茅にて葺ける荒ばら屋のこと (二) 竹にて造りたる寢臺椅子 (三) 一睡りしたる後には心も靜かになり夢も穩かなるをいふ (四) 庭園が雨を帶びたる時に當りて竹を種うること (五) 舊き詩句の惡しき處を刪り改むるをいふ (六) 白き拂子、佛者の持するもの、古は塵を拂ふに用ふ、麈の尾の毛を以て作る (七) 食事をする間にて少時間のこと (八) 心のさつぱりとして灑々すること (九) 靈空は我が精神の空にして無我無心なること (一〇) 水に浮べるが如く根據なき名譽 (一一) 浮名は夢幻の如く水の泡の如く限りありて長く存在せざること

餘閒、留客坐、殘良夜月、褰白雲。雖無別務、呼童畊破遠山雲。○琴觴自對。鹿豕爲羣。任彼世態之炎涼、從他人情之反覆。○家居苦事物之擾、惟田舍園亭別是一番活計、焚香煮茗。把酒吟詩。不許胸中生冰炭。客寓多風雨之懷。獨尋林道院。轉添幾種生機。染翰揮毫。翻經問偈。肯教眼底逐風塵。

會得して悟ること　(四) 漫然として何の目的もなく遊ぶこと　(五) 世の俗情よりぬけ出でゝ高尙の情を持つこと　(六) 通常の語にて奇趣なきこと　(七) 住居する所は吾が生命を寄するに在るのみ　(八) よき土地を得て住居すれば足れり、高敞にして廣大なる家を必要とせざること　(九) 紈綺はあや絹にて美しき衣服のこと　(一〇) 肥えたる肉と美しき米の飯とをいふ　(一一) 浮羈は誠忘なくしてその氣の浮薄にして奢侈なること　(一二) 餘りたる閒暇のあること　(一三) 久しく坐して良夜の月影を望んで之を樂しむこと　(一四) 遠方の山にかゝれる雲を望んで之を賞すること、畊破は田圃を耕すが如く雲の景を跳穿するをいふ　(一五) 世の有り樣の勢盛なると又物寂しきに任かせて之を顧みざること　(一六) 人情の反覆して常ならざるにまかせて之を責せざること　(一七) 家に在りて事物の亂れ擾ふべきことに苦しむこと　(一八) 氷炭は胸中に相爭ふの念あること　(一九) 風雨の懷を懷いて故郷を思ひ出すこと　(二〇) 生き〳〵として活動する機を添ふること　(二一) 翰は筆なり、筆を揮ひて文字を書すること　(二二) 世の中の俗事の入り亂れて騒々しきことなく心目を淸くすること

茅齋獨坐茶頻煮。七椀後。氣爽神淸。竹榻斜眠書漫擲。一枕餘。心

(一)茅齋獨り坐して茶頻りに煮、七椀の後氣爽かに神淸し。(二)竹榻斜に眠り、書漫に擲ち、(三)一枕の餘、心閒に夢穩かなり。○雨を帶び時ありて竹を種ゑ、門を關ぢて事無く花を鋤く、筆を拈りて閒〻舊句を删り、泉を汲みて幾たびか新茶を試

不ニ瀟灑一終爲ニ忙人一。而讀有ニ眞趣一。不ニ玩味一終爲ニ鄙夫一。山水有ニ眞賞一。不ニ領會一終爲ニ漫遊一。吟詠有ニ眞得一。不ニ解脫一終爲ニ套語一。○居處寄ニ吾生一。但得ニ其地一。不レ在ニ高廣一。衣服被ニ吾體一。但順ニ其時一。不レ在ニ紈綺一。飲食充ニ吾腹一。但適ニ其可一。不レ在ニ膏粱一。讌樂脩ニ吾好一。但致ニ其誠一。不レ在ニ浮靡一。○披レ卷有ニ

ずんば、終に鄙夫と爲る。山水に眞賞あり、(三)領會せずんば、終に(四)漫遊と爲る。吟詠に眞得あり、(五)解脫せずんば、終に(六)套語と爲る。○(七)居處は吾生を寄す。但其地を得て高廣に在らず。衣服は吾體に被る、但其時に順ひ(九)紈綺に在らず。(八)飲食は吾腹に充つ、但其可に適して(一〇)膏粱に在らず。讌樂は吾好を脩む、但其誠を致して(一一)浮靡に在らず。○卷を披きて(一二)餘閒あり。客を留めて(一三)坐殘す良夜の月、帷を褰げて別務無し、童を呼びて(一四)晰破す遠山の雲。○琴觴自ら對し、鹿豕羣を爲す。彼の(一五)世態の炎涼に任せ、他の(一六)人情の反覆に從ふ。○(一七)家居事物の擾に苦むも、惟田舍の園亭のみは、別に是れ一番の活計なり。香を焚き茗を烹、酒を把り詩を吟じ、胸中に(一八)氷炭を生ずるを許さず。客寓(一九)風雨の懷多し、獨り禪林の道場のみは、轉〻幾種の(二〇)生機を添ふ。(二一)翰を染め毫を揮ひ、經を翻へし偈を閱し、肯て眼底をして(二二)風塵を逐はしめんや。

㊀ 心のさつぱりとして高尙なること ㊁ 書物の意味をよく味ひさとるをいふ ㊂ 山水の趣味をば充分によく

袁石公曰。長安風雪夜。古廟冷鋪中。乞兒丐僧。齁齁如ニ雷吼一。而白髭老貴人。擁レ錦下レ帷。求ニ一合レ眼一不レ得。嗚呼松間明月。檻外青山。未ニ嘗拒レ人。而人人自拒者何哉。集ニ素第五一。

巻五

素

袁石公曰く、長安風雪の夜、(一)古廟冷鋪の中、(二)乞兒丐僧、(三)齁齁雷の吼ゆるが如し。而して白髭の老貴人、(四)錦を擁し帷を下し、一たび(五)眼を合せんことを求めて得ずと。嗚呼、松間の明月、(六)檻外の青山、未だ嘗て人を拒まず、而して(七)人人自ら拒むは何ぞ哉。素第五を集む。

(一) 古びたる神社と物寂しき商店 (二) 貧乞や物貰の僧侶 (三) いびきをかく聲 (四) 錦の夜着を抱きトバリを下して其の中に寝ぬること (五) 安樂に睡られんと欲するも心に憂ふる所ありて睡り得ざること (六) 欄檻の外に峙てる青山 (七) 人々自ら世俗の憂苦中に跼蹐して世俗外の清樂を求めず、是れ自ら風雅を拒むなり

田園有ニ眞樂一。

田園に眞樂あり、(一)瀟灑ならずんば、終に忙人と爲る。誦讀に眞趣あり、(二)玩味せ

陶潜臥二北窓下一。自稱中羲皇上人上。此樂過レ半矣。○霜飛レ空而漫レ霧。雁照レ月而猜レ弦。○既景華而稠レ彩。亦密照而疎明。若二春蘂之揚一レ蕤。似二秋漢之含一レ星。○景澄則岩岫開レ鏡。風生則芳林流レ芬。○類二君子之有一レ道。入二暗室一而不レ欺。同二至人之無一レ迹。懷二明義一以應レ時。○一翻一覆兮如レ掌。一死一生兮若レ輪。

の花の蕊の如きもの、飛ぶこと (九) 風景の中に心情あるが如く思はるゝこと (一〇) 五夜は午前四時頃 (一一) 應前の明月煌々として明かに照らすは明月を呼び起し來るに似たるをいふ (一二) 夢に見て居りたる中の當時の事を看透すをいふ (一三) 非非想は我の思想が非想を超越したる境に到ること、非々想は此非想もあるに非らざる心境なり (一四) 茫然として判明ならざること天際にたなびける白雲の如きなり (一五) 心の明は無明のなき心境に到ること、無明は佛語、吾心の中に存する常住の聰明なき心狀態 (一六) 心の全部が渾然として明かなること、暈中の明月に似たるをいふ (一七) 火の燃ゆる家宅、炎の揚る宮室、暑氣の甚しき家屋の中に在るをいふ (一八) 此句は陶淵明の五柳先生傳に出づ (一九) 雁の相列なりたる形が弓づるの如くなれるをいふ (二〇) 景色の華やかにして美しく多く彩色したるが如きをいふ (二一) こまやかに照らして明かなる光のまばらに透ること (二二) 春の原野に於て花しべを揚げあらはすこと (二三) 秋の頃天の河に多くの星を含み容るゝが如きをいふ (二四) 岩穴の所は鏡を開きたるが如く美しき景の映ずるをいふ (二五) 花の林に芳ばしき香の吹き送らるゝをいふ (二六) 人の知らざる暗き室の中に在りても己を欺き人を欺くが如き惡事を爲さゞること (二七) 至人は聖人と同じく其德の至極完全なる人なり至人は事を行ひても其の行爲の痕跡なく、無意識的なること (二八) 正義に明かなる思想を懷抱すること (二九) 一たび手を翻へし又一たび手を覆へすること、交情の反覆常ならざるに喩ふ (三〇) 人の死すると生けるとによりて交情の變ることと車の輪の如きをいふ、史記汲鄭列傳に一死一生知二交情一とあり

各臻二妙境一。○舞蝶遊蜂。忙中之閑。閑中之忙。落花飛絮。景中之情。情中之景。○五夜鷄鳴。喚二起聴前明月一。一覺睡起。看二破夢裡當年一。○想到二非非想一。茫然天際白雲。明到二無無明一。渾奚臺中明月。○逃二暑深林一。南風迎レ樹。脱レ帽露レ頂。浮レ李沈レ瓜。火宅炎宮蓮花忽迸。較二下之

りて、茫然たり天際の白雲、明は無無明に到りて、渾奚たり臺中の明月。○暑を深林に逃れ、南風樹に迎まれば、帽を脱し頂を露はす。李を浮べ瓜を沈めば、火宅炎宮、蓮花忽ち迸る。之を陶潜の北窓の下に臥し、自ら羲皇上の人と稱するに較ぶれば、此樂半ばに過ぐ。○霜、空に飛びて霧かと漫ふ、雁、月に照されて弦かと猜ふ。○既に景華にして彩稠く、亦密に照らし疎明なるは、春陽の藹を揚ぐるが若く、秋漢の星を含むに似たり。○景澄めば則ち岩岫鏡を開き、風生ずれば則ち芳林芬を流す。○君子の道あるに類し、暗室に入りて欺かざ、至人の迹無きに同じく、明義を懐きて以て時に應ず。○一翻一覆は常の如く、一死一生は輪の若し。

● 丹青は繪畫のこと、繪畫は丹色青色を取交へて書く故に丹青といふ ● 無言の詩は繪畫は言語無けれども詩の趣を有すること ● 詩の中には畫にかけるが如き趣味あり故に詩は物言ふ畫の如しとなり ● 繪畫の中に今にも物言はんとするが如き活々したる趣あること ● 詩には之を言語に旁せずして自然の妙趣を存すること ● 空を舞ふ蝶、花に遊ぶ蜂 ● 忙しげの中にひまなる趣あり、ひまなる中に忙しげなる趣あること ● 飛絮は柳

嗜欲場中。喚二不レ醒許多伶俐人一。人對レ之心冷。我對レ之腸熱。○自レ古及レ今。山之勝。多妙レ于二天成一。毎壞レ于二人造一。○畫家之妙。皆在二運筆之先。運思之際一。一經二點染一。便減二機神一。○長レ于レ筆者。文章即如二言語一。長レ于レ舌者。言語即成二文章一。

昔人謂。丹青乃無言之詩。詩句乃有言之畫。余則欲二丹青似レ語。詩句無レ言。方許三

(一)韶光は光陰なり、日月の早く過ぎ去りて眼の前に歳月の多からずして殘り少きを歎ずるをいふ　(二)歳月の過ぎ去ることの早きこと疾く走る爲の如きをいふ　(三)長く聲を引きて嘯き吟じて去り往き來すること　(四)我が姓名を以て牛と呼ぶものあるもその呼ぶに任かせて顧みざること　(五)古の事を存察して之を知り古に反したる事を爲さゞるをいふ　(六)心に世俗の外に超脱して世俗に染まざる思想を守ること　(七)心に世を厭へども未だ全く心に脱すること能はざるをいふ　(八)愚痴にして理に迷へる馬鹿なる男を救濟し濟すことを得ざること　(九)熱中と同じく、心熱して躁急なること　(一〇)深く心に留めざること　(一一)功名富貴等をはしく思ふ情欲の世の中をいふ　(一二)世に在る多くの利巧もの、迷へるを覺醒すること能はざること　(一三)天然に出來たるものは美妙の趣あること　(一四)人の力を以て造りたる風景は自然の風致を損ずること　(一五)思慮を運ぐらして工夫を凝すの際に妙趣あること　(一六)筆を以て墨をつけ染むることにて畫を畫かくをいふ　(一七)不可思議なる機能を減少し妙味のなくなること　(一八)文才あるものは文章流暢にして言語の如し　(一九)辯舌に長ずるものなり

昔人謂ふ丹青は乃ち無言の詩、詩句は乃ち有言の畫なりと。余は則ち丹青語るに似て詩句言無きを欲す。方に各〻妙境に臻るを許す。○舞蝶遊蜂は、忙中の閒、閒中の忙あり。落花飛絮は、景中の情、情中の景あり。○五夜鷄鳴きて、牕前の明月を喚び起す。一覺睡起きて、夢裡の當年を看破す。○想は非非想に到

○問二祖宗之德澤一。吾身所レ享者是。當レ念二其積累之難一。問二子孫之福祉一。吾身所レ貽者是。要レ思二其傾覆之易一。

韶光去矣。歎二眼前歲月無一レ多。可レ惜年華如二疾馬一。長嘯歸與。知二身外功名是假一。好將二姓字一任レ呼牛。○意慕二古先一。存レ古未二敢反一レ古。心持二世外一。厭レ世未レ能離レ心。○苦惱世上。度二不レ盡許多痴迷漢一。人對レ之腸熱。我對レ之心冷。

(一)韶光去り眼前の歲月多きこと無きを歎ず、惜むべし年華疾馬の如きを。(二)長嘯して歸らんか、身外の功名是れ假なるを知る。(三)好し姓字を將つて牛と呼ぶに任す。(四)○意古先を慕へば、古を存して未だ敢て古に反せず。(五)心に世外を持すれば、世を厭ひて未だ心に離るゝこと能はず。(六)○苦惱の世上、許多の痴迷漢を度し盡さず、(七)人は之に對して腸熱するも、我は之に對して心冷かなり。(八)○嗜欲の場中、許多の伶俐人を喚び醒さず。(九)人は之に對して心冷かなるも、我は之に對して腸熱す。(一〇)○古より今に及ぶまで、山の勝多くは天成に妙にして、毎に人造に壞る。(一一)(一二)(一三)(一四)○畫家の妙は、皆運筆の先、運思の際に在り、一たび點染を經ば、便ち機神を滅す。(一五)(一六)(一七)○筆に長ずる者は、文章即ち言語の如し。舌に長ずる者は、言語即ち文章を成す。(一八)(一九)

白者。寛レ之或自明。毋三躁急以速二其忿一。人有レ操レ之不レ從者。□□或自化。毋三操切以益二其頑一。○士君子貧不レ能濟レ物者。遇二人癡迷處一。出二一言一提二醒之一。遇二人急難處一。出二一言一解二救之一。亦是無量功德。○處二父兄骨肉之變一。宜二從容一。不レ宜二激烈一。遇二朋友交遊之失一。宜二剴切一。不レ宜二優游一。

く從容なるべし、宜しく激烈なるべからず、朋友交遊の失に遇ひては、宜しく剴切(一九)なるべし、宜しく優游(二〇)すべからず。○祖宗の德澤(二一)を問はば、吾身享くる所の者是なり、當に其積累(二二)の難を念ふべし。子孫の福祉を問はば、吾身貽す所の者是なり。其傾覆(二三)の易きを思ふを要す。

(一) 詩の思想が枕の外に於て和平にして淩轢するの趣あり (二) 華の如き美しき雲の景色をいふ (三) 冥々の中に踏り上る程の氣勢あること (四) 耳目に見聞する所寛廣なれば天地の廣大も狹く感ずるをいふ (五) 利害などにて相爭ふことの少きときは閑散なるが故に日月の長きを感ずるなり (六) 洞庭のあたりは最早や秋ふけて晩秋の頃となるをいふ (七) 晩秋の頃には彭澤のあたり霜の降りたる景色淸きをいふ (八) 夢中の夢は夢の中にて更に夢見ること、幻境に喩ふ、莊子に方二其夢一也、不レ知二其夢一、夢中又夢二其夢一とあり (九) 水の澄みたる深き淵 (一〇) 我が身の外に一の身體あるが如く感ずることに俗を離れたる淸き身をいふ (一一) 躁急にして之を明かに知らんとしたる爲に明かに知り得ざるものあるをいふ (一二) 之を引きしめたる爲めに我に從はざる者あること (一三) 之をゆるめて置けば或は自然に我に感化されて從ふべしとの意 (一四) 引きしむることのきびしきこと (一五) 愚痴にして物に迷ひ理の明かならざること (一六) その理を提げてその人の迷をさますこと (一七) 骨肉を分ちたる父子兄弟のこと (一八) 父子を愛せず兄弟を愛せず或は子父に從はず弟兄に逆ふが如き常に變りたること (一九) 剴切は能く行き屆きて深切なること (二〇) ゆつたりとして落ちつきて適切ならざること (二一) 德澤は功德恩澤のこと (二二) 德澤を積み累ねたる祖先の困難をいふ (二三) 家の傾きて亡ぶることの甚だ容易なるを思はざるべからざるをいふ

醞藉。終非ニ名飲一。○飛泉數點雨非ㇾ雨。空翠濛重山又山。○夜者日之餘。雨者月之餘。冬者歲之餘。當ニ此三餘一。人事稍疎。政可ニ一意問學一。

樹影橫ㇾ床。詩思平ニ凌枕外一。雲華滿ㇾ紙。字意隱ニ躍筆先一。○耳目寬則天地窄。爭務短則日月長。○秋老ニ洞庭一。霜淸ニ彭澤一。○聽ニ靜夜之鐘一。喚ニ醒夢中之夢一。觀ニ澄潭之月影一。窺ニ見身外之身一。○事有ニ急ㇾ之不ㇾ

すること

〔一〇〕人の爲すべき仕事が稍々閑散となること

樹影床に横はれば、(一)詩思枕外に平凌たり。(二)雲華紙に滿てば、字意筆先に隱躍たり。○(三)耳目寬なれば則ち天地窄く、(四)爭務短かければ則ち日月長し。○(五)秋は洞庭に老いて、(六)霜は彭澤に淸し。(七)○靜夜の鐘聲を聽きて、(八)夢中の夢を喚び醒し、(九)澄潭の月影を觀て、(一〇)身外の身を窺ひ見る。○事には之を急にして白かならざる者有り、之を寬にすれば或は自ら明かなり。(一一)躁急にして以て其忿を速く毋れ。人には之を操りて從はざる者あり、(一二)之を縱てば或は自ら化す。(一三)操切にして以て其頑を益す毋れ。(一四)○士君子貧にして物を濟ふこと能はざる者は、人の(一五)癡迷の處に遇ひて、一言を出して之を提醒し、(一六)人の急難の處に遇ひて、一言を出して之を解救するは、亦是れ無量の功德なり。○(一七)父兄骨肉の(一八)變に處しては、宜し

懷庶幾才好。攪二了一分閑事一。此身永不レ得レ閒。○古人特愛二松風一。庭院皆植レ松。每レ聞二其響一。欣然往二其下一。曰。此可レ浣二盡十年塵胃一。○凡名易レ居。只有二清名一難レ居。凡福易レ享。只有二清福一難レ享。○賀蘭山外虛弓怨。無定河邊破鏡愁。○有二書癖一。而無二剪裁一。徒號二書廚一。推二名飲一。而少二

清名(一一)あるは居り難し。凡そ福は享け易し、只清福あるは享け難し。○賀蘭山外(一二)虛弓怨み、無定河邊(一三)破鏡愁ふ。○書癖(一四)ありて剪裁(一五)なくんば、徒書廚(一六)と號す。名飲(一七)を推して醞藉(一八)少ければ、終に名飲に非ず。○飛泉數點雨にして雨に非ず、空翠(一九)幾重か山又山。○夜は日の餘、雨は月の餘、冬は歳の餘、此三餘に當りて人事(二〇)稍疎なり、政に一意問學すべし。

(一) 六經は詩經、書經、易經、春秋、禮經、樂經なり (二) 庖廚は料理部屋なり、蓋し日常平正の食膳の義なるべし (三) 常に異なりたる食味のこと (四) 三墳は三皇時代の事を書きたる書物 (五) 宗廟にて黍稷を盛る器、玉を以て飾りたる者なり、貴重の書となすこと (六) 鼓吹は太鼓を擊ち笛を吹くことにて興味を助くるもの (七) 少しの間の閑暇の事を取り去ること (八) 松風の音のこと (九) 塵に汚れたる胃にて卽ち世の俗事に汚れたる心を洗ふをいふ (一〇) 名は名譽なり、名譽は之を保有することの容易なるをいふ (一一) 淸白の名譽は之を長く守りて失はざるの難きをいふ (一二) 賀蘭山は甘肅省寧夏縣城の西に在り、漢代匈奴を征せんとして賀蘭山外の匈奴に至り敵と戰ひ矢を射盡して只々弓のみ存すること (一三) 無定河は卽ち桑乾河、陝西省榆林縣邊より發す、匈奴を征する兵士多く此邊にて戰死してかたわれ月の物うげに照すこと (一四) 書癖は書物を好むくせあること (一五) 程よく切りもりして之を應用すること (一六) 本箱のこと、書ありて用をなさざるに喩ふ (一七) 善く酒を飲むこと (一八) 含蓄ありて心廣くおだやかなること (一九) 雨露なくして翠色の濃きこと、翠色が幾重にも相かなさり、山又山と相連續

每ㇾ下ㇾ子安詳。極ㇾ于ニ寬緩一。有ㇾ時躁怒。家人翡則密以ニ棋具一。陳ㇾ于ㇾ前。納覩便欣然改ㇾ容。取ㇾ子布ㇾ算。都忘ニ其恚一。○竹裡登ㇾ樓。遠窺ニ韵士。聆ニ其談ニ名理于坐上一。而人我之相有ㇾ忘。花間掃ㇾ石。時候ニ棋師一。觀ニ其應ニ危劫于枰間一。而勝負之機早決。

を我が思ふ存分にあらはすこと (四) 縱橫自在にきりまはす才能 (五) 簧鼓は巧言を以て人を惑はすこと (六) 月影の映ずる樹、榭は物見臺なり、臺に屋あるを榭といふ (七) 碧空の遠く靄々したること (八) 雲の簾引けるあたりに在る房室に於て戸を開きて眺望すること (九) 霸氣は豪氣の盛に起ること (一〇) 李納は唐代の人、檢校工部尚書となる (一一) 辨急は卞急に通ず、性情の落ちつかずして短氣なること (一二) 子は棋石のこと (一三) 算は算木にして數取りのこと (一四) 韵士は風流の士人なり (一五) 是非同異を辨別してよき理論を爲すこと (一六) 人と我との區別を忘れ無我無心となること (一七) 危劫は棋局の形勢の危險なること、及び敵を劫かすこと (一八) 枰間は棋盤の間なり

六經爲ニ庖廚一。百家爲ニ異饌一。三墳爲ニ瑚璉一。諸子爲ニ鼓吹一。自奉得ㇾ無ニ大嗇一。請ㇾ客未ニ必能享一。○說ニ得一句好言一。此

六經(一)を庖廚(二)と爲し、百家を異饌(三)と爲し、三墳(四)を瑚璉(五)と爲し、諸子を鼓吹(六)と爲せば、自ら奉じ得て大嗇無く、客を請じては未だ必ずしも能く享せず。○一句の好言を說き得て、此懷庶幾くは才に好し、一分の閑事(七)を攬了れば、此身永く閑を得ず。○古人特に松風を愛し、庭院皆松を植う、其響(八)を聞く每に、欣然として其下に往いて曰く、此れ十年の塵胃(九)を浣ひ盡す可しと。○凡そ名(一〇)は居り易し、只

終成二泥塑之人一。○取二涼于箑一。不レ若二清風之徐來一。激二水于桿一。不レ若二甘雨之時降一。

有二快捷之才一。而無レ所二建用一。勢必乘二憤激之處一。一逞二雄風一。有二縱横之論一。而無レ所二發明一。勢必乘二簧鼓之場一。一恣二餘力一。○月榭憑レ欄。飛凌二縹緲一。雲房啓レ戸。坐看二氤氳一。○發端無レ緒。歸結還自支離。入門一差。進步終成二恍惚一。○李納姓辨急。酷尚二奕棋一。

快捷(一)の才有りて、建用(二)する所無ければ、勢必ず憤激の處に乗じて、一たび雄風(三)を逞しくせん。縱横(四)の論有りて、發明する所無ければ、勢必ず簧鼓(五)の場に乗じて、一たび餘力を恣にせん。○月榭(六)に欄に憑れば、飛んで縹緲(七)を凌ぎ、雲房(八)に戸を啓けば、坐して氤氳(九)を看る。○發端緒無くんば、歸結還りて自ら支離、入門一たび差へば、進歩終に恍惚(一〇)を成さん。(重出)○李納姓辨急(一一)にして、酷だ奕棋を尚ぶ、子を下す毎に安詳にして寛緩を極む、時ありて躁怒すれば、家人翟則ち密に棋具を以て前に陳ず、納視て便ち欣然として容を改め、子を取り算(一二)を布き、都て其恚を忘る。○竹裡樓(一三)に登りて遠く韵士(一四)を窺ひ、其の名理(一五)を坐上に談ずれるを聆けば、人我(一六)の相忘るゝあり、花間に石を掃ひ、時に棋師を候ひ、其危劫(一七)に枰間(一八)に應ずるを觀れば、勝負の機早く決す。

(一) 快活にしてすばやき才能あること　(二) 意見を建てゝ之を實際に用ふること　(三) 雄風はすぐれてつよき風氣

蔵二珍奇于筆墨一、得レ時則蔵二于丹府一、不レ得レ時則蔵二于名山一。○讀二一篇軒快之書一、宛見二山青水白一。聽二幾句伶俐之語一、如レ看二岳立川行一。○讀レ書如二竹外溪流一、逍然而往。詠レ詩如二頽末風起一、勃焉而揚。○子弟拝場有二擧止一、而謝二飛揚一、雖レ博二纏頭之錦一、主賓御レ席、務二廉隅一而少二蘊藉一。

然とし往く、詩を詠ずるは、(一二)頽末に風起るが如く、(一三)勃焉として揚る。○子弟(一四)拝場に挙止するありて、(一五)飛揚を謝すれば、(一六)纏頭の錦を博し難し、主賓席に御して(一七)廉隅を務めて(一八)蘊藉少ければ、終に(一九)泥塑の人とならん。○涼を(二〇)箑に取るは、清風の徐に来るに若かず、水を(二一)桿に激するは、(二二)甘雨の時に降るに若かず。

(一) 澄高は何代の人なるを詳にせず (二) 遠きが如く近きが如く縹緲として分明ならざる所に趣あること (三) 錦の如き美麗なる文章思想を心の中に蔵すること (四) 口に發せんとする思想の美なること剪裁したる錦の美の如きこと (五) 口に發する言論の美妙なること珠玉の如きこと (六) 丹府は朝廷の府庫のこと (七) 著はしたる書籍を名山の石室に蔵めて後世に遺すこと (八) 軒は窓なり、涼気来り心情快なること (九) 伶俐はさとくかしこきこと (一〇) 山岳の聳え立ち河川の流れ行くこと (一一) 逍然は心の寛舒なる貌 (一二) 頽末は水の上に浮べる水草のさきのこと (一三) 勃焉は氣の盛に起る貌 (一四) 拝は疑らくは俳の誤、俳場は俳優の居る所、我が芝居小屋の類、挙止は動作をなすこと (一五) 飛び揚りて動作することをことわりて爲さゞること (一六) 纏頭は歌舞の人を賞する物、我が邦のはなをいふ、博は易ふなり、はなとして錦を得ることの難きこと (一七) 廉隅はかどめ正しくしかつめらしくすること (一八) 心に含蓄ありてすべてを外に見さゞること (一九) 泥を以て作りたる人形のこと (二〇) 箑は我が邦の扇の類 (二一) 桿は桔槹にてはね釣瓶を以て水を擧げてその水勢を激しくすること (二二) 甘雨は程よき時に降る雨なり、此は人爲よりも自然のまさる意なり

諂臣媚子。極ニ天下聽纇之人。秉レ道嫉レ邪。作ニ世間忠直之氣ー。○隱遁林中無ニ榮辱ー。道義路上無ニ炎涼ー。○名心未レ化。對ニ妻孥ー亦自矜莊。隱衷釋然。卽夢寐皆成ニ清楚ー。○聞レ謗而怒者。讒之囮。見レ諂而喜者。佞之媒。

るも朽ちずして、猶は新なるの感あり (六) 千載を經ても猶一日の如く朽ち亡ぶるの時なきをいふ (七) 心の打沈みて悲觀したる顏色あること (八) 洞心は心の中まですき透りて明白なること (九) 曖昧はくらくして明かならざること (一〇) 諂は諂諛にしておどけ言をいひて人に媚ぶる臣、媚は人に媚びへつらふ人 (一一) かゝる人は天下のかしこくして悟りのよき人なりとの意 (一二) 道を秉り守りて動かざること (一三) 世の中を隱れのがれて世上に超越したる多くの人は榮辱を度外に置くが故に榮辱なきなり (一四) 道德義理を行ふ人は權勢を顧みず、故に權勢の盛なると衰ふるとなきなり (一五) 囮は他の鳥を誘ふ媒介の鳥なり、此は讒言せらるゝことを招く媒介となること (一六) 人が己に媚びへつらふ媒介となること

灘濁作レ畫。正如ニ隔レ簾看レ月。隔レ水看ヒ花。意在ニ遠近之間ー。亦文章法也。○藏ニ錦于心ー。藏ニ繍于口ー。藏ニ珠玉于咳唾ー。

灘濁(一)の畫を作るや、正に簾を隔てて月を看、水を隔てて花を看るが如し、意遠(二)近の間に在り、亦文章の法なり。○錦(三)を心に藏し、繍(四)を口に藏し、珠玉を咳(五)唾に藏し、珍奇を筆墨に藏し、時を得れば則ち丹府(六)に藏し、時を得ざれば則ち名山(七)に藏す。○一篇軒快(八)の書を讀めば、宛も山青水白を見るがごとく、幾句伶(九)俐の語を聽けば、岳立川行(一〇)を看るが如し。○書を讀むは竹外の溪流の如く、逌(一一)

師德不レ失レ爲二雅量一。睚眦必報。郭象玄未レ爲二禍胎一。○天下可レ愛的人。都是可レ憐人。天下可レ惡的人。都是可レ惜人。○事業文章。隨レ身銷毀。而精神萬古如レ新。功名富貴。逐レ世轉移。而氣節千載一日。○讀書到二快目處一。起二一切沈淪之色一。說話到二洞心處一。破二一切曖昧之私一。○

未だ禍胎を爲さず。○天下の愛す可き的人は、都て是れ憐む可きの人、天下惡む可き的人は、都て是れ惜む可きの人なり。○(四)事業文章は、身に隨ひて銷毀すれども、而して(五)精神は萬古新なるが如し。功名富貴は、世を逐うて轉移すれども而も氣節は(六)千載一日なり。○讀書快目の處に到れば、一切(七)沈淪の色を起し、說話(八)洞心の處に到れば、一切(九)曖昧の私を破る。○(一〇)諧臣媚子は、天下(一一)聰顯の人を極め、道を秉り邪を嫉めば、世間忠直の氣を作す。○(一三)隱逸林中に榮辱無く、(一四)道義路上に(一二)炎涼無し。○名心未だ化せざれば、妻孥に對しても亦自ら矜莊す。隱衷釋然たれば、卽ち夢寐皆淸楚を成す。(重出)○謗を聞いて怒る者は(一五)讒の囮なり。譽を見て喜ぶ者は佞の媒なり。

㊀ 婁師德は唐の則天武后の時の人、其弟人面に唾すれば如何といひしにそのまゝにして之を拭はざれば自ら乾くべしといへり、雅量は正しく大なる度量 ㊁ 睚眦は目を擧げて之を睨みたる少しの怨恨なり ㊂ 郭象は晉の河南の人、字は子玄、老莊を好み莊子を注す、玄は老莊深遠の理なり、郭象の玄理が禍の根本となりたるに非らずとの意 ㊃ 人の事業と文章とはその身の亡ぶると共に銷え燬れて亡びて存せざるをいふ ㊄ 人の精神は萬世の後に傳ふ

寓ニ意奕棋一。雖レ有ニ他樂一。吾不レ易矣。○成レ名每在ニ窮苦日一。敗レ事多因ニ得レ志時一。○寵辱不レ驚。肝木自寧。動靜以敬。心火自定。飲食有レ節。脾土不レ泄。調レ息寡レ言。肺金自全。怡レ神寡レ欲。腎水自足。○讓レ利精レ于レ取レ利。逃レ名巧レ于レ邀レ名。○彩筆描レ空。筆不レ落レ色。而空亦不レ受レ染。利刀割レ水。刀不レ損レ鍔。而水亦不レ留レ痕。

取るより精し。名を逃るゝは名を邀ふるより巧なり。(一三)○彩筆空に描けば、(一四)筆、色を落さずして空も亦染を受けず、(一五)利刀水を割けば、刀、鍔を損せずして水も亦痕を留めず。

(一)一介は一分に同じ、一箇の貧窮なる士なり　(二)古聖賢の理義に關する書を讀むこと　(三)古人の書きし法帖の字を學ぶこと　(四)心を清潔にして靜かに坐して精神修養の工夫をなすこと　(五)清談は老莊虚無の談話を爲すこと　(六)少しづつ酒を酌みて飲み半ば程酒に醉ひ大醉に至らざること　(七)双六を爲し棋を打つことに心を寄すること　(八)困窮苦痛の日には勉勵するを以て成功するなり　(九)志を得たる時は怠慢するが爲めに失敗するなり　(一〇)寵愛を蒙りても恥辱を受けても平然として驚かざるをいふ　(一一)古人人の五臟を五行に配し、肝を以て木と爲し心を以て火と爲し、脾を土と爲し、肺を金と爲し腎を水と爲す　(一二)利を讓りて人に與ふれば人亦利を讓りて吾に與ふ、故に遂には利を得べし、然るに利を爭ふものは却つて利を得ず、故に精しといふなり　(一三)名を邀ふは名譽を求むること　(一四)彩筆を以て空に向つて描けば筆の色を落さずして空も亦彩筆の色を受けず　(一五)銳利の刀を以て水を割けば刀の鋒を損せずして水も切られたる跡なし、是は無心を以て事を爲せば事に害なきをいふ

唾レ面自乾。婁

面に唾せば自ら乾く、(一)婁師德雅量たるを失はず、(二)睚眦必ず報ず、(三)郭象玄

便殿。生二千秋風雅之光一。○清閑無レ事。坐臥隨レ心。雖二粗衣淡食一自有二一段眞趣一。紛擾不レ寧。憂患纏レ身。雖二錦衣厚味一只覺二萬狀愁苦一。

讒を以て江南に放たれ離騷を著はす　一四　淮陰は漢の韓信なり、韓信淮陰侯に封ぜらる、初め貧なりし時淮陰の城下に釣る、漂母あり、信の飢えたるを見て信に飯せしむ　一五　玄宗皇帝李白を召し樂章を作らしむ、李白醉ふ、水を以て面に灑ぎ十餘章を作る　一六　千年の後まで風流雅致の光輝を生じて滅びざるをいふ　一七　坐するも臥するも我が心のまゝにすること　一八　一層の眞成の趣味あること　一九　ごたごたと亂れ騷ぎて心安寧ならざること

我如爲レ善。雖二一介寒士一。有レ人服二其德一。我如爲レ惡。雖三位極二人臣一。有レ人議二其過一。○讀二理義書一。學二法帖字一。澄心靜坐。益友清談。小酌半醺。澆レ花種レ竹。聽レ琴玩レ鶴。焚レ香煮レ茶。泛レ舟觀レ山。

我如し善を爲さば、(一)一介の寒士と雖も、人ありて其德に服せん。我如し惡を爲さば、位人臣を極むと雖も、人ありて其過を議せん。○理義の書を讀み、(二)法帖の字を學び、(三)澄心靜坐し、(四)益友清談し、(五)小酌半醺し、花に澆ぎ竹を種ゑ、琴を聽き鶴を玩び、香を焚き茶を煮、舟を泛べて山を觀、意を(七)奕棊に寓す、他樂ありと雖も、吾は易へず。○名を成すは毎に(八)窮苦の日に在り、事を敗るは多くは(九)志を得るの時に因る。○(一〇)寵辱驚かずんば、(一一)肝木自ら寧し、動靜以て敬すれば、心火自ら定まる。飲食節あれば脾土泄れず。息を調へ言を寡くすれば、肺金自ら全し。神を怡ばし欲を寡くすれば、腎水自ら足る。○(一二)利を讓るは利を

維レ世窮、不レ能レ口書而吁二奇書一。○蒼海日。赤城霞。蛾眉雪。巫峽雲。洞庭月。彭蠡烟。瀟湘雨。廣陵濤。廬山瀑布。合二宇宙奇觀一。繪二吾齋壁一。少陵詩。摩詰畫。左傳文。馬遷史。薛濤牋。右軍帖。南華經。相如賦。屈子離騷。收二古今絕藝一。置二我山牕一。○偶飯二淮陰一。定二萬古英雄之眼一。醉題二

(四)赤城の霞、(五)蛾眉の雪、巫峽の雲、洞庭の月、彭蠡の烟、瀟湘の雨、廣陵の濤、廬山の瀑布は、宇宙の奇觀を合せ、吾が(六)齋壁を繪す。(七)少陵の詩、(八)摩詰の畫、左傳の文、馬遷の史、(九)薛濤の牋、(一〇)右軍の帖、(一一)南華の經、(一二)相如の賦、(一三)屈子の離騷は、古今の絕藝を收めて、我が山牕に置く。○偶〻(一四)淮陰に飯せしめて、萬古英雄の眼を定め、(一五)醉ひて便殿に題して、(一六)千秋風雅の光を生ず。○淸閒事なく、(一七)坐臥心に隨へば、粗衣淡食と雖も、自ら(一八)一段の眞趣あり。(一九)紛擾寧からず、憂患身に纏へば、錦衣厚味と雖も、只萬狀の愁苦を覺ゆ。

(一) 世の爲めに我が一身を犧牲にして世の利益を謀ること (二) 世事に身をつなぐこと (三) 青々としたる海原に出づる太陽の景壯觀なり (四) 赤城は浙江省天台縣の北六里に在り、孫綽の天台賦に赤城霞起而建標とあり (五) 蛾眉山は四川省蛾眉縣西南に在り、兩山相對して蛾眉の如し、故に蛾眉山と名づく (六) 書齋の壁にその景を繪きて揭ぐること (七) 少陵は唐の詩人杜甫のこと、杜甫は少陵の人故に少陵といふ (八) 摩詰は唐の詩人、王維のこと、王維摩詰と字す (九) 薛濤は四川省華陽縣錦江の南岸にあり、古來紙牋を產して有名なり (一〇) 右軍は王羲之にて右軍將軍と爲る、故に右軍といふ最も書を能くし有名なり (一一) 南華は莊子なり、唐の玄宗の時莊子を賦して南華眞人と爲す (一二) 相如は司馬相如にて漢の武帝の時の人賦を能くするを以て名あり (一三) 屈子は楚の屈原にて

百事共忘。肢體皆適。塵勞德消。即黃粱南柯。特餘事已耳。靜修詩云。書外論交睡最賢。旨哉言也。○過分求福。適以速禍。安分遠禍。將自得福。○倚勢而凌人者。勢敗而人凌。恃財而侮人者。財散而人侮。○我爭者。人必爭。雖極力爭之。未必得。我讓者。人必讓。雖極力讓之。未必失。

○我(一三)争へば人必ず争ふ、力を極めて之と争ふと雖も、未だ必ずしも得ず(一四)。我讓れば人必ず讓る、力を極めて之に讓ると雖も、未だ必ずしも失はず。

(一) 人は我に勝ちたるによりて怨恨の心を蓄ふることなし (二) 思ひ掛らざる損害を被ることあるべし、人我に對して怨を蓄ふるが故なり (三) 曲りたる欄干 (四) 四角なる池、月を浸すは月を水中に映ぜしむること (五) まばらなる簾を捲き上げ一鶴を見て楽む (六) 盧生邯鄲の旅舎に於いて一翁に遇ひその貧困を語る翁枕を授けて一睡せしむ、時に主人黄粱を炊く生夢に栄華を極むるを見、醒むるに及んで黄粱飯は未だ熟せず (七) 南柯は南柯の夢なり、淳于棼夢に槐安國に至る王妻すに女を以てす、南柯太守と為り栄を極む、後敵國と戦ひて敗れ公主も亦卒す、王疑る之を疎忌し遣り歸らしむ、既に醒め、槐下の穴を尋ね蟻の其中に在るを見る、所謂南柯郡は槐下南枝の下の蟻穴なり、 (八) 靜修は元の容城の人、劉修と號す、心を性理の學に潜む、元に仕へず、隱居して教授す (九) 自己の身分相應に過ぎて多くの幸福を求むるなり (一〇) 速は招くなり (一一) 己が權勢を有するを以て人を凌ぎ侮るをいふ (一二) 自己が多くの財を有するを恃みて人を侮るをいふ (一三) 我の方より人に向ひて争へば人も必ず我に對して爭ふなり (一四) 未だ必ずしも爭ふ所の物質を得ざること

貧不能享客。而好客。老不能徇世。而好

貧にして客を享すること能はずして客を好み、老いて世に狥ずること能はずして(一)世に維がるを好み、窮して書を買ふこと能はずして奇書を好む。(二)○蒼海の日、(三)

常存。殺二萬命一以養二皮嚢一。罪卒歸二于神識一。佛性無レ邊。經書有レ限。窮二萬巻一。以求二佛性一。得レ不レ關二于經書一。

(一九)皮嚢は我が身體のこと (二〇)萬物の生命あるものをいふ (二一)佛の有する心性は廣大にして限りなきこと (二二)萬巻の經書を窮めて佛性を求めんとするも佛性は經書によらず、故に經書よりて佛性を求むべからず

人勝レ我無レ害。彼無二蓄レ怨之心一。我勝レ人。非レ福。恐有二不測之禍一。◎書屋前列二曲檻一栽レ花。鑿二方池一浸レ月。引二活水一養レ魚。小窓下。焚レ香讀レ易。設二淨几一鼓レ琴。捲二疎簾一看レ鶴。○人人愛レ睡。知二其味一者甚鮮。睡則雙眼一合。

(一)人我に勝るは害無し、彼れ怨を蓄ふるの心無し。我人に勝るは福に非らず、(二)恐くは不測の禍あらん。○書屋の前に曲檻(三)を列ねて花を栽ゑ、(四)方池を鑿ちて月を浸し、活水を引いて魚を養ひ、小窓の下香を焚いて易を讀み、淨几を設けて琴を鼓し、(五)疎簾を捲いて鶴を看る。○人人睡を愛すれども、其味を知る者甚だ鮮し、睡れば雙眼一たび合ひて、百事共に忘れ、肢體皆適し、塵勞盡く消ゆ、卽ち黄粱(六)南柯(七)は、特餘事のみ。(八)靜修の詩に云ふ、書外交を論ずれば睡る最も賢なりと、旨い哉言や。(九)○分に過ぎて福を求むれば、適に以て禍を速く(一〇)、分に安んじて禍に遠ざかれば、將に自ら福を得んとす。○(一一)勢に倚りて人を凌ぐ者は、勢敗れて人凌ぐ。財(一二)を恃みて人を侮る者は、財散じて人侮る。

了也好。○泥二跡塵中一。高二親物外一。閑二情杯酒一。潜二心篇詠一。藏二名一時一。尚二友千古一。○癡矣狂客。酷好二賓朋一。賢哉細君。無レ違二夫子一。醉人盈レ座。簪裾半盡二酒家一。食客滿レ堂。瓶甕不レ離二米肆一。燈燭熒熒。且耽二夜酌一。爨烟寂寂。安問二晨炊一。生來不レ解二攢眉一。老去彌堪二鼓腹一。○皮囊速壞。神識

裾半は酒家に盡き、食客堂に滿つれば、瓶甕米肆を離れず、(一四)燈燭熒熒且つ夜酌に耽る、(一五)爨烟寂寂たり、(一六)安んぞ晨炊を問はん、生來攢眉を解せず、(一七)老い去りて彌ゝ鼓腹に堪へたらん。○皮囊は速に壞れ、神識は常に存す、(一八)萬命を殺して以て皮囊を養へば、罪卒に神識に歸す。(一九)佛性は邊無く、經書は限あり、(二〇)萬卷を窮めて以て佛性を求むるは、經書に屬せざるを得。(二一)(二二)

(一) 飽飫は食にあくこと、榮耀榮華して贅澤に生活すること、宴遊は酒盛りして遊び樂むこと (二) 生死の界を徹底的に悟りて明かなること (三) 生きてもまたそのまゝ變らず、死してもまたそのまゝ變らず、全く生死を念頭に置かざること (四) 名譽利害の場所を考へ悟り得ること (五) 名利を得ても亦好く、名利を失ひても亦好し (六) 世俗の事物の外に超然として高くかまへて居ること (七) 我が心情を酒によりて陶然として樂しましむるもなり (八) 千古の聖賢を友として交ること (九) 狂客は馬鹿物なりとの意 (一〇) 賓客及び朋友を會して酒を飲むを好むこと (一一) 細君は妻をいふ、東方朔が自ら諸侯に擬して其妻を細君(諸侯の妻を小君といふ)と戯れ言へるに出づといふ (一二) 夫子はその夫を指す夫の言ふに違背せざること (一三) 細君の簪や衣服は之を賣り拂ひて之を以て酒を買ふこと (一四) 瓶甕は米を容るゝに用ふ、米肆は米屋なり、常に瓶甕を持ち行きて米屋より米を買ふこと (一五) 燈火の光の光りかゞやきて明かなること、夜中まで酒宴を張ること (一六) 飯を炊く煙も物さみしくして煙の立たざること、煮るもの、無きをいふ (一七) 眉をあつめて憂ふことを知らず陽氣にくらすこと (一八) 腹を鼓ちて樂しくくらすこと

不ㇾ可ㇾ謙。刻薄不ㇾ可ㇾ謂二嚴明一。闒茸不ㇾ可ㇾ謂二寬大一。○作ㇾ詩能把二眼前光景。胸中情趣一。一筆寫出。便是作者。不二必說ㇾ唐說ㇾ宋。○少年休ㇾ笑老年顚。及ㇾ到二老時一顚一般。只怕不下到二顚時一老上。老年何暇ㇾ笑二少年一。

することと俳優の古人に扮するに似たるなり (四) 道理の筋路を充分に通達して知ること (五) 拘束せられなづみ泥りて變通を知らざること (六) 新しき説をこぢ附け加へること (七) 簡傲は簡略にして傲慢なること (八) 諂諛は人にこびへつらふこと (九) 刻薄は、嚴刻にして薄情なること (一〇) 闒茸は鈍くして穎敏ならざること (一一) 眼の前に見ゆる風光景色 (一二) 情趣は面白き趣味 (一三) 唐の詩の句法及び宋の詩の句調のことを云々するを要せざるをいふ (一四) 少年の人々は人の老年に至り事々顚倒することを笑ふべからずとの意 (一五) 老年に至れば顚倒すること、是れ誰も彼れも同様のことなりとなり (一六) 只に顚倒する年頃に至りても老年と思はず少年の氣取をして少年の如き事を爲すを怕るとの意

饑寒困苦。福將ㇾ至已。飽飫宴遊。禍將ㇾ生焉。○打二透生死關一。生來也罷。死來也罷。參二破名利場一。得了也好。失

饑寒困苦は、福將に至らんとするのみ。(一)飽飫宴遊は、禍將に生ぜんとす。○(二)生死の關を打透せば、(三)生來も也た罷み、死來も也た罷む、(四)名利の場を參破せば、(五)得了も也た好し、失了も也た好し。○跡を塵中に混じて(六)物外に高視し、(七)情を杯酒に陶して、心を篇詠に潛め、名を一時に藏して、(八)千古を尙友す。○癡なるかな(九)狂客、酷だ(一〇)貧朋を好む、賢なる哉(一一)細君、(一二)夫子に違ふ無し。醉人座に盈つれば、(一三)簪

秉レ燭遊。不レ當ニ草草看過一。

優人代ニ古人一語。代ニ古人一咲。代ニ古人一憤。今文人爲レ文似レ之。優人登レ臺。肖ニ古人一。下レ臺還優人。今文人爲レ文。又似レ之。假令三古人見ニ今文人一。當ニ何如憤。何如咲。何如語一。〇看レ書只要ニ理路通透一。不レ可レ拘ニ泥舊說一。更不レ可レ附ニ會新說一。〇簡傲不レ可レ謂ニ高。諂諛

優人(一)古人に代りて語り(二)、古人に代りて咲ひ、古人に代りて憤る、今(三)の文人の文を爲るは之に似たり、優人臺に登れば古人に肖たり、臺を下れば還た優人なり。今の文人文を爲るは又之に似たり、假し古人をして今の文人を見しめば、當に何如か憤り、何如か咲ひ、何如か語るべき。〇書を看るには只理路(四)の通透を要す、舊說に拘泥(五)す可からず、更に新說(六)を附會す可からず。〇簡傲(七)は高と謂ふ可からず、諂諛(八)は謙と謂ふ可からず、刻薄(九)は嚴明と謂ふ可からず、闒茸(一〇)は寛大と謂ふべからず。〇詩を作るには能く眼前(一一)の光景、胸中の情趣(一二)を把りて一筆に寫し出す、便ち是れ作者なり。必ずしも唐(一三)を說き宋を說かず。〇少年(一四)笑ふを休めよ老年の顚(一五)、老時に到るに及んで顚一般(一六)。只怕る顚時に到りて老いず、老年何ぞ少年を笑ふに暇あらん。

(一) 優人は俳優の人　(二) 古人の風體をなして古人の語るが如く語る　(三) 今の文人が文を作るは古人の文に摸倣

所以佛國都無寒暑。仙都長似三春。○鳥栖高枝。彈射難加。魚潜深淵。網釣不及。士隱巖穴。禍患焉至。○于射而得揖讓。于碁而得征誅。于忙而得伊周。于閑而得巢許。于醉而得瞿曇。于病而得老莊。于飲食衣服。出作入息。而得孔子。○前人云。晝短苦夜長。何不

醉に于いては瞿曇（一三）を得、病に于いては老莊（一四）を得、飲食衣服（一五）出作入息（一六）に于いては孔子を得。○前人（一七）云ふ、晝短くして夜の長きに苦めば、何ぞ燭を秉りて遊ばざる（一八）と。當に草草（一九）に看過すべからず。

（一）君子は人を信ずるに過ぐることなきも、又人に對して疑ひ過ぐることなしと也　（二）人の我に如かざるものを把りて人と己とをはかり較ぶれば自己の滿足を得べきをいふ　（三）膠を折るは、冬寒くして膠凍りて折るゝに至ること、石を鑠すは夏暑くして石をもとかすに至ること　（四）暑熱の爲めに惱まさるゝと、清涼を感ずるとは、我が心の持方如何に在るのみ　（五）佛陀の住める國にては寒暑なし是は寒暑を感ぜざるなり　（六）三春は春三ケ月の間のこと、仙人の居る都にては日の長きこと三春の如しとなり　（七）彈丸を以て鳥を射撃すること　（八）山中の巖穴の中に隱れ世に出て君に仕へざること　（九）手をこまぬきて人にへり下り讓ることを悟り得ること　（一〇）碁を圍むは敵を征伐して之を誅するの趣あり故に碁に於て征誅の道を悟るなり　（一一）伊尹は殷の湯王を相け、周公は周の武王を相けたる名相にて常に世に活動して多忙なりしなり　（一二）巢許は巢父と許由にて皆堯帝の時の人堯天下を讓らんとせしに皆遁れて受けざりし人なり　（一三）瞿曇は釋迦牟尼なり　（一四）老莊は老子及び莊子なり、皆世上に超脱して無爲の生活を爲せる人なり　（一五）孔子は常に社會に活動し禮法を守り、世を救濟せんとしたる人なり、故に飲食衣服出作入息に於て孔子の道を語るなり　（一六）出てゝは仕事を作し入りて休息すること　（一七）魏武帝短歌行に、生年不滿百、常懷千歳憂、晝短苦夜長、何不秉燭遊とあり　（一八）燭を取りて夜遊びて花を賞し以て夜の長きを消遣するをいふ　（一九）粗略に看て通過すべからず、反覆丁寧に看てその意味を味ふべし

斯言信然矣。奕秋往矣。伯牙往矣。千百世之下、止存遺譜。不能盡有益于人者。唯詩文字畫。足爲傳世之珍、垂名不朽。總之。身後名。不若生前酒耳。

の珍と爲すに足り、名を不朽に垂る、之を總ぶるに身後（六）の名は、生前の酒に若かざるのみ。

（一）晉の陶淵明の語なり（二）琴瑟の中の風雅なる趣味を識ればそれにて足れり、必ずしも瑟の絃をかなで、音聲を發せしむるの要なしとなり（三）奕秋は古の棋を善くするもの、孟子に出づ（四）伯牙は古の琴を善くする人（五）その人の遺したる琴譜を存すること（六）死したる後に名を遺すよりは生前に一杯の酒を飲みて樂しむに如かざるをいふ

君子雖不過信人。君子斷不過疑人。○人只把不如我者。較量。則自知足矣。○折膠鑠石。雖累變于歲時。熱惱清涼。原只在于心境。

（一）君子は人を過信せずと雖も、君子は斷じて人を過疑せず。○（二）人只我れに如かざる者を把りて較量せば、則ち自ら足るを知らん。○（三）膠を折り石を鑠すや、變を歳時に累ぬと雖も、（四）熱惱清涼は、原只心境に在り、所以に（五）佛國都に寒暑無く、仙都は長きこと（六）三春に似たり。○鳥高枝に栖めば、（七）彈射加へ難し。魚深淵に潛めば、網釣及ばず、士（八）巖穴に隱れば、禍患焉んぞ至らん。○射に于いては（九）揖讓を得、碁に于いては（一〇）征誅を得、忙に于いては（一一）伊周を得、閑に于いては（一二）巢許を得、

親二筆硯一。布二景物一有レ趣。種二花木一有レ方。名曰二清致一。紙裹中窺レ錢。瓦瓶中藏レ粟。困二頓于荒野一。擯二棄乎血屬一。名曰二清苦一。指二幽僻之耽一。誇以爲レ高。好二言動之異一。標以爲レ放。名曰二清狂一。博極二今古一。適二情泉石一。文詞帶二煙霞一。行事絕二塵俗一。名曰二清奇一。

の耽を指し、誇りて以て高と爲し、言動の異を好み、(六)標して以て放と爲す、名づけて清狂と曰ふ。博く今古を極め、情を泉石に適し、(七)文詞煙霞を帶び、行事塵(八)俗を絕つ、名づけて清奇と曰ふ。

(一)すぐれたる風致をいふ　(二)俗世界を超出して清高なる生活を爲すこと　(三)紙を以て製し錢を包み入るゝものの即ち財布のこと　(四)くたびれて困しみ難儀すること　(五)深遠にしてかたよりたる景に耽ること　(六)標は標榜の義にてあらはして賞め立つること　(七)文章の中に自然の面白き趣を有すること　(八)世の中の富貴功名の如きいやしき所なきこと

對レ棋不レ若レ觀レ棋。觀レ棋不レ若レ彈レ瑟。彈レ瑟不レ若レ聽レ琴。古云。但識二瑟中趣一。何勞二絃上音一。

棋に對するは、棋を觀るに若かず、棋を觀るは瑟を彈ずるに若かず、瑟を彈ずるは琴を聽くに若かず、(二)古云ふ、但、瑟中の趣を識れば、何ぞ絃上の音を勞せんと。斯言信に然り。(三)奕秋往き、(四)伯牙往けり、千百世の下、止、(五)遺譜を存するのみ、盡くは人に益あること能はざる者に似たり。唯、詩文字畫のみ、博世

緣于薄。盆石不緣于巧。山石不緣于拙。○雨過生涼。境閒情適。鄰家笛韻。與晴雲斷雨逐聽之。聲聲入肺腸。○不惜費。必至于空乏而求人。不受享。無怪乎守財而遺誚。○閒亭若無一段山林景況。只以壯麗相炫。便覺俗氣撲人。○餐霞吸露。聊駐紅顏。弄月嘲風。間銷白日。

清之品有五。睹標致。發厭俗之心。見精潔。動出塵之想。名曰清興。知蓄書史。能

(一)利民濟世にて、人民の利を計り社會の難を救ふこと　(二)その人を缺くべからざる必要なる人物とすること　(三)天命を確立して動かすべからざる堅固のものとすること　(四)我が理性及び氣質を收め引きしめて放縱ならしめざること　(五)人間社會の事柄を振舞ひ行ふこと　(六)清靜經は佛經の名　(七)滋味のなき歡　(八)物に依りかかりたる石　(九)盆上の置き石其技巧を愛す　(一〇)その境遇の閑靜にして心情の愉快なること　(一一)晴れたる空に棚引ける雲時々にしぐれ來る雨　(一二)一聲毎に悉く肺臟や腸の中にしみ込む如く徹するなり　(一三)享は宴享なり、宴享は慇懃を示す所以なり、享を受けずんば慇懃を示すべからず、故に財を守るの誚を遺すなり　(一四)山林の景況は閑靜にして飾り氣なき趣をいふ　(一五)立派におごそかに飾りてかゞやかし誇ること　(一六)山川自然の風光中に起臥して相樂しむこと　(一七)紅顏は青年のこと、青年紅顏の時をとゞめて過ぎしめずとなり　(一八)明月を弄び清風を嘲り、自然の風景を賞するをいふ

清の品五あり、(一)標致を覩て俗を厭ふの心を發し、精潔を見て(二)出塵の想を動かす、名づけて清興と曰ふ。好んで書史を蓄へ、能く筆硯に親しみ、景物を布いて趣あり、花木を種ゑて方あり、名づけて清致と曰ふ。(三)紙裏中錢を窺ひ、瓦瓶中粟を藏し、荒野に(四)困頓し、血屬に揹棄せらる、名づけて清苦と曰ふ。(五)幽僻

惡レ則信レ之。此滿腔殺機也。

士君子盡ニ心利濟一。使ニ海内少レ他不レ得。則天亦自然少レ他不レ得。即此便是立レ命。○讀レ書不三獨變ニ氣質一。且能養ニ精神一。蓋理氣收攝故也。○周ニ旋人事一後。當レ誦ニ一部清靜經一。弔レ喪問レ疾後。當レ念ニ一通扯淡歌一。○臥石不レ嫌レ于レ斜。立石不レ嫌レ于レ細。倚石不レ

士君子心を利濟に盡し、海内をして他を少き得ざらしめば、則ち天も亦自然に他を少き得ず、即ち此れ便ち是れ命を立つるなり。○書を讀めば獨り氣質を變ずるのみならず、且つ能く精神を養ふ、蓋し理氣收攝するが故なり。○人事を周旋して後、當に一部の清靜經を誦すべし、喪を弔ひ疾を問ひて後、當に一通の扯淡歌を念ふべし。○臥石は斜なるを嫌はず、立石は細きを嫌はず、倚石は薄きを嫌はず、盆石は巧なるを嫌はず、山石は拙なるを嫌はず。○雨過ぎて涼を生ずれば、境閒にして情適す。鄰家の笛韻、晴雲斷雨と逐へば、之を聽いて聲聲肺腸に入る。○費を惜まずんば、必ず空乏にして人に求むるに至る。享を受けずんば、財を守りて誚を遺すを怪しむ無し。○園亭若し一段山林の景況無く、只、壯麗を以て相炫すれば、便ち俗氣人を撲つを覺ゆ。○霞を餐ひ露を吸ひ、聊か紅顏を駐め、月を弄び風を嘲り、閒に白日を銷す。

潔淨時觀之。○執筆惟憑于手熟。為文每事于口占。○箕踞于斑竹林中。徙倚于青石几上。所有道笈梵書。或校讐四五字。或參諷一兩章。茶不甚精。壺亦不燥。香不甚良。灰亦不死。短琴無曲而有絃。長謳無腔而有音。激氣發于林樾。好風逆之水涯。若非羲皇以上。定亦嵇阮兄弟之間。○讀書如服藥。藥多力自行。○聞人善則疑之。聞人

兩章、茶は甚だ精ならず、壺も亦燥ならず、香甚だ良からず、灰も亦死せず、短琴(一一)曲無くして絃あり、長謳(一二)腔無くして音あり、激氣(一三)林樾より發し、好風之を水涯に逆ふ、若し羲皇以上に非ずんば、定めて亦嵇阮兄弟(一四)の間なり。○書を讀むは藥を服するが如し、藥(一五)多力なれば自ら行る。○人の善を聞いては則ち之を疑ひ、人の惡を聞いては則ち之を信ず、此れ滿腔殺機(一六)なり。

(一)一々之れを目に見ること人に應接するが如きをいふ　(二)我が心に何とも言へぬよい心持となるをいふ　(三)吾が胸中少しの名利の念なく、潔白清淨なる時之を觀れば聖賢の心を知るを得べきなり　(四)筆を執りて文を作るには手の熟練によるをいふ　(五)文を口ずさみて敢て筆書せず　(六)斑紋ある竹藪の中に在ること　(七)進まずしてためらふこと、その几に見とれて止まること　(八)道は老子敎なり、老子敎の書物及佛敎上の書物のこと　(九)文字を校正すること　(一〇)道笈梵書を參照校讐す　(一一)歌曲なくして只絃上の聲のみあること　(一二)聲を永く引いて歌ふに、樂曲の聲律なくして只音聲のみあり　(一三)はげしき聲の林の木の生ひ茂れる處より起るをいふ　(一四)嵇康阮籍皆晉代の人にして清談を善くし放縱にして檢束せざる人、竹林七賢の一なり　(一五)藥の力が多ければ自然に身體の中を循環するが如く讀書の力多ければ多くの書を讀破してその効力見ゆるなり　(一六)心中一杯に人を害するの心機を帶ぶるをいふ

葉一烹中鮮筍上。○鳥啼花落。欣然有ㇾ會ㇾ于ㇾ心。遣ニ小奴一挈ニ癭樽一。酤ニ白酒一。釂ニ一梨花瓷醆一。急取ニ詩卷一。快讀一過。以曠ㇾ之。蕭然不ㇾ知ㇾ其在ニ塵埃間一也。○閉ㇾ門卽是深山。讀ㇾ書隨處淨土。○千巖競秀。萬壑爭流。草木蒙ニ籠其上一。如ニ雲興霞蔚一。

(一) 琴を彈じ書を讀むことを娛ぶ (二) 時候の變移したるを喜び樂むなり (三) 太昊伏羲氏時代以上の太古の人、即ち簡易清淨一世に超越するの人の意 (四) 何事も意の如くなる得意のこと (五) 人の到らざる寂しき山中に在る所荒れはてたる寺の中にて雨聲を聽くは一段の趣味あり (六) 新鮮なる筍を烹て食ふこと (七) 心に會得して悟る所あること (八) 癭は木の隆起してこぶあること、癭の如く木の隆起したる所ある樽のこと (九) 白酒は濁酒のこと (一〇) 瓷器の酒杯、梨の花の形に作れる酒杯にて酒を飲み盡すこと (一一) 人の往來するものなし故に其閑靜なることと深山中に在るが如し (一二) その愉快なること極樂淨土に在るが如し (一三) 多くの巖石の競ひて秀で聳ゆること (一四) 多くの谷川が爭ひて流れ行くこと (一五) その上に聚り蔽うて閉ぢこむること、草木の生ひ茂れるをいふ (一六) 雲が盛に起り出で霞が盛にたなびけるが如し

從ニ山陰道上一行。山川自相映發。使ニ人應接不ㇾ暇。若ニ秋冬之際一。猶難ㇾ爲ㇾ懷。○欲ㇾ見ニ聖人氣象一。須下于ニ自己胸中

山陰道上より行けば、山川自ら相映發し、人をして(一)應接するに暇あらざらしむ。秋冬の際の若きは、猶ほ(二)懷を爲し難し。○聖人の氣象を見んと欲すれば須らく自己の(三)胸中潔淨の時に于いて之を觀るべし。○(四)筆を執るは惟手の熟するに憑り、文を爲るは每に(五)口占を事とす。○(六)斑竹林の中に箕踞し、青石幾上に(七)徙倚し、有らゆる(八)道笈梵書、或は(九)校讎すること四五字、或は(一〇)參讎すること一

携ㇾ趺。就二松風澗響之間一曰。三者皆自然之聲。正合二類聚一。○高二臥閑窗一。綠陰清晝。天地何其寥廓也。

少學二琴書一。偶愛二清淨一。開ㇾ卷有ㇾ得。便欣然忘ㇾ食。見二樹木交映一。時鳥變ㇾ聲。亦復歡然有ㇾ喜。常言。五六月臥二北窗下一。遇二涼風暫至一。自謂二羲皇上人一。○空山聽ㇾ雨。是人生如意事。聽ㇾ雨必於二空山破寺中一。寒雨圍ㇾ爐。可下以燒二敗

少くして琴書を學び、偶〻清淨を愛す。卷を開きて得るあれば、便ち欣然として食を忘れ、(一)樹木交〻映じ、時鳥聲を變ずるを見ては、亦復歡然として喜(二)ぶあり、常に言ふ五六月北窗の下に臥し、涼風暫く至るに遇へば、自ら羲皇(三)上の人と謂ふと。○空山に雨を聽く、是れ人生如意(四)の事なり。雨を聽くは必ず(五)空山破寺の中に於てし、寒雨爐を圍みては、以て敗葉を燒き鮮筍(六)を烹る可し。○鳥啼き花落ちて、欣然として心に會(七)するあれば、小奴を遣はして瘦樽(八)を挈へて白酒を酤ひ、一梨花の瓷醆を釂し、急に詩卷を取りて快讀一過して以て之を(九)嚥めば、蕭然(一〇)として其塵埃の間に在るを知らざる也。○門を閉づれば即ち(一一)是れ深山、書を讀めば隨處淨土(一二)なり。○千巖(一三)競ひて秀で、萬壑(一四)爭ひて流れ、草木其上に蒙籠(一五)す、雲興り霞蔚(一六)するが如し。

能點化俗情。○醉後輒作草書十數行。便覺酒氣拂拂從十指出也。○書引藤爲架。人將蘚作衣。○從江干溪畔箕踞石上。聽水聲浩浩潺潺粼粼泠泠。恰似一部天然之樂韻。疑有湘靈在水中鼓瑟也。○鴻中疊石。未論高下。但有木陰水氣。便自超絕。○段由夫

けば、恰も一部天然の樂韻に似たり、湘靈(一〇)水中に在りて瑟を鼓する有るかと疑はる。○鴻中石を疊む、(一一)未だ高下を論ぜず、但、木陰水氣(一二)あれば、便ち自ら超絕す。○段由夫(一三)瑟を携へ、松風澗響の間に就きて曰く、三者(一四)皆自然の聲、正に類聚(一五)に合ふと。○閑牕(一六)に高臥すれば、綠陰淸晝、天地何ぞ其れ寥廓(一七)たるや。

(一) 滿足することを知らざる欲の深き心、如何程多くの書を讀みても猶は足らずと思ふ心をいふ (二) 靈丹は仙藥、之を飮めば仙人となり死せずといふ、此は世俗を超脫したる淸き心をいふ (三) 汚れたる世俗の情を變化して、超脫の心を持たしむるをいふ (四) 拂々は盛に起り出づる貌 (五) 藤を以て書を藏する書架を作るをいふ (六) 薜はつたかづらの類其纖維を以て織りて衣を作る (七) 江のほとり溪のほとりに沿うて行くこと (八) 足を伸して坐すること箕の形の如きこと (九) 浩々は水の廣大なること、潺々は水のちろ〳〵流るゝこと、粼々は水の聲、泠々は水の靜かに流るゝ聲 (一〇) 湘君の神靈、湘君は舜の妃、舜の崩を聞き湘水に投じて死すといふ、湘水の神が水中に在りて瑟を鼓するかと疑はるゝなり (一一) 疊める石の高きと低きとを問はず即ち高下何れにしてもそれに拘はらずの意 (一二) 木の蔭を爲す所と水の氣色とあれば便ち自ら世俗よりのりこえ離れて俗氣なきをいふ (一三) 段由夫といへるもの瑟を携へて松に響く風の聲、谷川の水音ある處にて瑟を鼓するをいふ (一四) 三者は瑟の聲、松風の聲及び水の聲なり (一五) 三者類を以て聚ること (一六) 閑靜なる窓の下に世を外にして枕を高くして臥すること (一七) 寥廓は天地の廣くして大なるをいふ

唯欲少。○無事當學白樂天之曠然。有客宜倣李建勳之擊磬。○郊居誅茅結屋。雲霞棲梁之間。竹樹在汀洲之外。與二三之同調。望衡對宇。聯捷巷陌。風天雪夜。買酒相呼。此時覺麴生氣味十倍。市飲。

人情を能くとゝのへて乖戻せざるやうにすること (八) 水を行く時には舟に乗り、陸を行く時には車に乗るが如くその時の自然に従ひて逆はざるをいふ (九) 板は平板にて融通のきかざること (一〇) 趣は趣味にて風流の趣味をいふ (一一) 正義に叶はざる事を以て我を侵害するをいふ (一二) 道理の上より (一三) 世の中を自由自在にわたりて送ること (一四) 白樂天は唐代の人、名は居易、字は樂天、香山と號す、詩を以て有名なり (一五) 曠然は我を忘れてぼんやりとすること、無我無心の狀態なり (一六) 李建勳は唐代の人、蓋し善く磬を撃ちしなり (一七) 雲や霞が家の梁の間まで入り來りて止まるをいふ (一八) 竹樹は水中の島の外に散在すること (一九) 同じ調子の者即ち同趣味の友人をいふ (二〇) 衡は衡門にて木を横へたるかぶき門、字は屋宇なり (二一) 市街の中を相並びて捷く走ること (二二) 麴生は酒のこと、酒は麴を以て醸すを以て麴生といふ

萬事皆易滿足。惟讀書終身無盡。人何不以不知足一念。加之書。○閒非易事。須是胸中有靈丹一粒。方

萬事皆滿足し易し、惟讀書は終身盡くる無し、人何ぞ足る(一)を知らざるの一念を以て之を書に加へざる。○閒は易事に非らず。須らく是れ胸中に靈丹(二)一粒ありて、方に能く俗情(三)を點化すべし。○醉後輒ち草書十數行を作れば、便ち酒氣拂拂(四)十指より出づるを覺ゆるなり。○書は藤(五)を引きて架と爲す、人は薜(六)を將つて衣を作る。○江干(七)溪畔に從ひ、石上に箕踞(八)し、水聲の浩浩(九)潺潺粼粼冷冷を聽

入世ニ者。方能出世。不則空趣難ㇾ持。○調性之法。急則佩ㇾ韋。緩則佩ㇾ絃。諧情之法。水則從ㇾ舟。陸則從ㇾ車。○才人之行多放。當ニ以ㇾ正斂ㇾ之。正人之行多板。當ニ以ㇾ趣通ㇾ之。○人有ㇾ不ㇾ及。可ニ以ㇾ情恕ㇾ。非義相干。可ニ以ㇾ理遣ㇾ。佩ニ此兩言ニ。足ニ以游ㇾ世。○冬起欲ㇾ遲。夏起欲ㇾ早。春睡欲ㇾ足。午

は則ち韋(五)を佩び、緩なるは則ち絃(六)を佩ぶ。諧情(七)の法、水(八)は則ち舟に從り、陸は則ち車に從る。○才人の行は多くは放なり、當に正を以て之を斂むべし。正人の行は多くは板(九)なり、當に趣(一〇)を以て之を通ずべし。○人及ばざる有れば、情を以て恕すべし。非義(一一)相干さば、理(一二)を以て遣るべし。此の兩言を佩べば、以て世(一三)に游ぶに足る。○冬起は遲きを欲し、夏起は早きを欲し、春睡は足るを欲し、午睡は少きを欲す。○事無ければ當に白樂天(一四)の嗒然(一五)を學ぶべし。客あれば宜しく李(一六)建勳の磬を撃つに倣ふべし。○郊居茅を誅りて屋を結び、雲霞(一七)梁の間に棲み、竹樹汀洲(一八)の外に在り、一二三の同調(一九)と衡を望み宇(二〇)に對し、蓬陌(二一)に聯捷し、風天雪夜、酒を買ひて相呼ぶ、此時麹生(二二)の氣味、市飲に十倍するを覺ゆ。

(一) 世俗を超脱して世の濁りを受けざることを期するものにして初めて能く世俗に在りても世俗に染まず能く世に處するを得るをいふ (二) 世俗の汚濁の緣に陥落し易きこと (三) 佛法の出世的趣味を長くたもち守りがたきこと (四) 自己の性質を調和すること (五) 韋はナメシカハにて柔なり性急なるものは柔なる韋を佩びて性質を矯正すること (六) 絃は弓づる、剛堅なるものなり、性緩きものは剛き絃を佩びて性質を矯正して之を鋭敏にすること、(七)

樂也。○人有下一字不レ識。而多ニ詩意ー。一偈不レ參。而多ニ禪意ー。一勺不レ濡。而多ニ酒意ー。一石不レ曉而多中畫意上。淡宕故也。○以下看ニ世人ー青白眼上。轉而看レ我。則聖賢之眞見識。以下議ニ論人ー雌黃口上。轉而論レ我。則左狐之眞是非。○事到ニ全美處ー。怨レ我者不レ能レ開ニ指摘之端ー。行到ニ至汚處ー。愛レ我者。不レ能レ施ニ掩護之法ー。

必ニ出世ー者。方能入世。不則世緣易レ墮。必ニ

ば、我を愛する者も、掩護(一八)の法を施すこと能はず。

(一) 雪の晴りたる時の梅花の景尤も佳し故に之を尋ぬるなり (二) 雨の降る時に蓑りて梅の花を護りて雨に濡さしめざること (三) 風の吹く彼方に竹の風に吹かるゝ聲を聞くこと (四) 支法は支と法蘭にて、支道字は道林、晉代の人、家世々法を奉じて嘗て餘杭山に於て沈思し述行し年二十五にして道に入り洛陽に終る、法蘭は晉代の高僧、長安より流沙を度り凡そ三十餘國を經て、印度に至り法を求めて歸る (五) 沈香の木を以て作りたる床 (六) いびきをかきて熟睡すること (七) 樂しきか樂しからざるか是れは言を俟たずして樂しきをいふ (八) 詩的趣味を多く有すること (九) 世俗を脫離したる禪的趣味を帶ぶこと (一〇) 一石を畫くの法をも知らざるをいふ (一一) 淡泊にし心にさはりなきが故にかくの如く詩意禪意等多きをいふ (一二) 世人を看るに或る青眼を以てして好める人を優遇し、或は白眼を以てして好まざる人を冷遇するをいふ (一三) 古人を批評して善惡を別つをいふ (一四) 雌黃は人を批評すること (一五) 左孤は左丘明及び董狐なり、皆古の良史にして左丘明は左傳を著はせり (一六) 眞に人の是非善惡を判定して誤らざること (一七) その缺點を摘み出して指し示すこと (一八) その惡行を庇ひかばひて保護すること

出世(一)を必とする者、方に能く入世す。不ざれば則ち世緣(二)墮し易し。入世を必とする者、方に能く出世す。不ざれば則ち空趣(三)持し難し。○調性(四)の法、急なる

も甚だ年歎の短きを惱ずること （一九）奥ゆかしき興味の少きの感あること、澹味は物さびしきこと （二〇）本來の面目にて卽ち我生れながらに具ふる佛心のこと （二一）五倫五常の如き人として履むべき常の道 （二二）世俗を超脱して俗事にあづからぬこと

○完ニ得心上之木來一。方可レ言ニ了心一。盡ニ得世間之常道一。纔堪レ論ニ出世一。雪後尋レ梅。霜前訪レ菊。雨際護レ蘭。風外聽レ竹。固野客之閒情。實文人之深趣。○結ニ一草堂一。南洞庭月。北峨眉雪。東泰岱松。西瀟湘竹。中具ニ晉高僧支法八尺沈香牀一。浴ニ罷溫泉一。投レ牀鼾睡。以レ此避レ暑。樂不レ

雪後（一）に梅を尋ね、霜前に菊を訪ひ、雨際（二）に蘭を護り、風外（三）に竹を聽くは、固より野客の閒情、實に文人の深趣なり。○一草堂を結ぶ、南は洞庭の月、北は峨眉の雪、東は泰岱の松、西は瀟湘の竹、中に晉の高僧支法（四）八尺の沈香牀（五）を具へ、溫泉に浴し罷み、牀に投じて鼾睡（六）す、此を以て暑を避けば、樂しきか（七）樂しからざるか。○人には一字識らずして詩意（八）多く、一偈參せずして禪意（九）多く、一勾濡さずして酒意多く（一〇）、一石曉らずして畫意多きあり、淡宕（一一）なるが故なり。○世人を看るの青白眼（一二）を以て、轉じて書を看ば、則ち聖賢の眞見識（一三）なり。人を議論する雌黃（一四）の口を以て、轉じて史を論ずれば、則ち左狐（一五）の眞是非（一六）なり。○事、全美の處に到れば、我を怨むる者も、指摘（一七）の端を開くこと能はず、行、至汚の處に到れ

典ニ茫居一作中小山上。○聰明而修潔ヽ上帝固錄ニ清虚一。文墨而貪殘ヽ冥官不レ受ニ詞賦一。○破ニ除煩惱一。二更山寺木魚聲。見ニ徹性靈一。一點雲堂優鉢影。○興來醉倒落花前。天地卽爲ニ衾枕一。機息坐忘盤石上。古今盡屬ニ蜉蝣一。○老樹著レ花。更覺ニ生機鬱動一。秋禽弄レ舌、轉令ニ幽興蕭疎一。

卽ち衾枕たり。機息坐忘す(一七)盤石の上、古今盡く(一八)蜉蝣に屬す。○老樹花を著けば、更に生機の鬱動するを覺ゆ、秋禽舌を弄すれば、轉た幽興(一九)をして蕭疎ならしむ。○心上の(二〇)本來を完くし得て、方に心を言ひ了る可し。世間の(二一)常道を盡し得て、纔に(二二)出世を論ずるに堪ふ。

(一) 竹の上を吹き來る一陣の風、一陣は一列にして一しきり列りて吹くこと (二) 茶を煮る竈より上るまばらなる烟をひるがへし揚ぐること (三) 梅花を照す月が半圓の如き形を爲せること (四) 野手元にて煮る酒肴の乏しきを以て山の翠色を分ち之を以て酒肴に充つること (五) 高樓をなくして寂しきを以て水上のもやを入れ水盤の風景を賞すること (六) 溜りとゞまれる木葉を取り除きて水を通ずること (七) 周りにある水を通じて流れしむること (八) 窓れはてゝ居る居宅を質に入れて金を借ること (九) 理を見る智識明かにしてその行條まりて潔白なること (一〇) その人の清潔にして慾心欲なきを取り上ぐること (一一) 文章を作れどもその行状深くして人を殘ひ賊すること (一二) 冥官は地獄に居る役人、冥官が文章を受けてその罪を宥すことなしとなり (一三) 二更は夜の十時頃なり、此は夜十時頃の靜かなる時山寺にて打つ木魚の聲は人の煩惱を打ち破り除き去るを得べきをいふ (一四) 優鉢は花の名、毎年四月八日必ず花咲き冬至に至りて實を結ぶ、此は雲堂に在る一點の優鉢羅の花影は人の靈妙の性心を徹底的に見しむるをいふ、雲堂は僧道の居る所の寺をいふ (一五) 落花の前に在りて酒に醉ひて倒るゝこと (一六) 醉倒せし時には天を以て夜着と爲し、地を以て枕として臥すること (一七) 盤石の上にて利害の機心息みて起らず、妄念雜想の境に入ること (一八) 蜉蝣はカゲラウ、朝に生じて夕に死す短命の蟲、依りて命の短きに喩ふ、古今の永遠

也。醉將離。宜擊鉢。壯其神也。醉文人宜謹節奏。畏其侮也。醉俊人。宜益觥盂。如旗幟。助其怒也。醉樓宜暑。資其清也。醉水宜秋。泛其爽也。此皆審其宜。攷其景。反此則失飲矣。

旗幟の如くするに宜し、其怒を助くればなり。樓に醉ふは暑に宜し、其清を資くればなり。水に醉ふは秋に宜し、其爽を泛ぶればなり。此れ皆其宜しきを審にし、其景を攷ふ、此に反すれば則ち飲を失す。

(一) 晝の太陽の光と花の光とを相重ぬること (二) 唱は歌を歌ふこと、その心中の和氣をのべはらすことを得るが故なり (三) 將離は芍藥の別名、將に離れんとする時贈るに芍藥を以てす (四) 緩急抑揚の調子を程よくとゝのふること (五) 觥盂は杯と肴を盛る皿とをいふ、此は杯や皿を並ぶること、恰も旗幟を相列ねたるが如くするをいふ

竹風一陣。飄颺茶竈疎烟。梅月半灣。掩映書牕殘雪。○廚冷分山翠。樓空入水烟。○間疏滯葉通鄰水。擬

(一)竹風一陣、(二)茶竈の疎烟を飄颺し、(三)梅月半灣、書牕の殘雪に掩映す。(五)○廚冷かにして山翠を分ち、(四)樓空しくして水煙を入る。○間〻(六)滯葉を疏し(七)鄰水を通じ、(八)荒居を典して小山を作るに擬す。(九)○聰明にして修潔なれば、上帝固より(一〇)清虛を錄す。(一一)文墨にして貪殘なれば、(一二)冥官詞賦を受けず。○煩惱を破除す、(一三)二更山寺木魚の聲。性靈を見徹す、一點雲堂(一四)優鉢の影。○興來りて(一五)醉倒す落花の前、(一六)天地

新詩。畢竟一個俗氣。○高品人。胸中洒落。如光風霽月。○不作風波於世上。自無冰炭到胸中。○秋月當天。纖雲都淨。露坐空闊去處。清光冷浸。此身如在水晶宮裡。令人心膽澄徹。○遺子黃金滿籯。不如教子一經。

冷に此身を浸し、水晶宮裡に在るが如く、人の心膽をして澄徹せしむ。○子に黃金滿籯(一二)を遺すよりは、子に一經(一三)を教ふるに如かず。

(一)璧の如き圓き美しき月の白くかゞやきわたること　(二)茶を煮る釜のこと　(三)鄙字八個を用ひたる詩にて古詩の類なり　(四)人品の高尚なる人　(五)胸中に懷ける思想のさつぱりとして光明なること　(六)雨後の風、雨後の天霽れたる時の月皆さつぱりとして光明あり、人品の高尚に喩ふ　(七)人事の變籍に喩ふ、風水上をわたれば波を起して舟行危險なり、依りて事變を起すに喩ふなり　(八)冰炭は心の或は昂激し或は煩苦するに喩ふ　(九)少しの雲もなく一天すべて清淨なること　(一〇)去は語の辭、空しくぱつとして廣大なる處　(一一)外にむき出しに坐すること　(一二)黃金をざる一杯に入るること、多額の金を子孫に遺すをいふ　(一三)一部の經書を敎へ學ばしめ有爲有德の人とならしむるをいふ

凡醉各有所宜。醉花宜晝。襲其光也。醉雪宜夜。淸其思也。醉得意宜唱。宜其和也。

凡そ醉には各ゝ宜しき所あり。花に醉ふは晝に宜し、其光(一)を襲ぬればなり。雪に醉ふは夜に宜し、其思を淸くすればなり。得意に醉ふは唱ふ(二)に宜し、其和を宣ぶればなり。將離(三)に醉ふは鉢を擊つに宜し、其神を壯にすればなり。文人に醉ふは節奏を謹むに宜し、其侮(四)を畏るればなり。俊人に醉ふは觥盂(五)を益し

物不ㇾ有。以二法眼一照ㇾ之。奚啻蝎踏二空花一。○上二高山一。入二深林一。窮二廻溪一。幽泉怪石。無二遠不一ㇾ到。到則拂ㇾ草而坐。傾ㇾ壺而醉。醉則更相枕藉以臥。意亦甚適。夢亦同ㇾ趣。○閉ㇾ門閲二佛書一。開ㇾ門接二佳客一。出ㇾ門尋二山水一。此人生三樂。

(一) 諸處の谷間よりそよ〳〵と吹き來る風、疾風の反對 (二) 玉を以て造りたる磬を三聲ばかり敲きて心中の汚れを去りて清くすべしとなり (三) 初心は我が本心なり (四) 金の鐘を百遍撞き下すこと (五) 何の理由ありて此の如く憂へて樂まざるかを知らざるなり (六) 甚麼は俗語にて如何と略ぼ同じ (七) 地獄の中には銅の床、鐵の柱、刀の山、劍の樹ありといふ、此は此世既に活地獄なれば此上更に如何なる地獄の眞相の銅床鐵柱刀山劍樹のことを說く必要なしとの意 (八) 佛法に通じたる見識を以て之を觀るをいふ (九) 蝎はサソリなり、サソリが美しとも思はず空しく花を踏み行くが如く、世俗の功名富貴皆我を動かすに足らざるをいふ (一〇) 廻り曲りたる溪間靜かなる處に在る泉、怪しげなる形を成したる巖石の在る處は遠距に在りても必ず到るをいふ (一一) 相互に相重なり合ひて臥すること (一二) 夢も亦意と同じく、甚だ適して愉快なる夢を見るをいふ

客散門扃。風微日落。壁月皎皎常ㇾ空。花陰徐徐滿ㇾ地。近檐鳥宿。遠寺鐘鳴。茶鐺初熟。酒甕乍開。不ㇾ成二八韵

客散じて門扃ぢ、風微にして日落ち、(一)壁月皎皎として空に當り、花陰徐徐にして地に滿ち、近檐の鳥宿し、遠寺の鐘鳴り、(二)茶鐺初めて熟し、酒甕乍ち開く、(三)八韵の新詩を成さずんば、畢竟一個の俗氣なり。○(四)高品の人は、(五)胸中の洒落たること、(六)光風霽月の如し。○(七)風波を世上に作さずんば、自ら(八)氷炭の胸中に到る無し。○秋月天に當れば、(九)纖雲都て淨し。(一〇)空濶去處に(一一)露坐すれば、清光

留。蕭然不以爲意。○擇地納涼、不若先除熱惱、執鞭求福。何如急遣窮愁。

操の役　一九　貧窮の憂愁を洗り去ること

萬壑疎風、消兩耳聞世語。急須敲玉磬三聲。九天涼月、淨初心而誦其經。勝似撞金鐘百下。○無事而憂、對景不樂。即自家亦不知是何緣故。這便是一座活地獄。更說甚麽銅床鐵柱。刀山劍樹也。○煩惱之場何

萬壑の疎風兩耳を清くす、世語を聞けば、急に須らく玉磬三聲を敲くべし。○九天の涼月初心を淨くす、其經を誦するは、金鐘百下を撞つより勝れり。○無事にして憂へ、景に對して樂まざれば、即ち自家も亦是れ何の緣故たるを知らず、這は便ち是れ一座の活地獄、更に甚麽なる銅床鐵柱、刀山劍樹を說かん。○煩惱の場、何物か有らざらん。法眼を以て之を照せば、奚ぞ啻に蝎の空花を踏むのみならんや。○高山に上り深林に入り廻溪を窮め、幽泉怪石遠として到らざる無く、到れば則ち草を拂ひて坐し、壺を傾けて醉ふ、醉へば更〻相枕藉して以て臥す、意亦甚だ適すれば、夢も亦趣を同じうす。○門を閉ぢて佛書を閲し、門を開いて佳客に接し、門を出でて山水を尋ぬ、此れ人生の三樂なり。

耐二危橋一。閑居耐二俗漢一。看レ花耐中惡酒上。此方得レ力。〇世外交情惟山而已。須レ有二大觀眼一。濟勝具。久住緣一。方許二與レ之莫逆一。〇九山散樵跡二俗間一。徜徉自肆。遇二佳山水處一。盤礴箕踞。四顧無レ人。則劃然長嘯。聲振二林木一。有レ客造レ榻與語。對曰。余方游二華胥一。接二羲皇一。未レ暇レ理二君語一。客去

許す。〇九山の散樵俗間に跡し、(一一)徜徉自ら肆にし、(一二)佳山水の處に遇ひて盤礴箕踞し、(一三)四顧人無ければ、則ち劃然として長嘯し、(一四)聲林木に振ふ、客あれば榻に造りて與に語り、對へて曰く、余方に華胥に遊び、(一五)羲皇に接す、(一六)未だ君の語を理むるに暇あらずと。客の去留蕭然として以て意と爲さず。〇地を擇びて涼を納るよりは、先づ熱惱を除くに若かず、(一七)鞭を執りて福を求むるよりは、(一八)何ぞ急に窮愁を遣るに如かん。(一九)

（一）夢には昨日を以て前世と爲すことあるをいふ（二）然らば今日を以て未來世と爲して看ずべしとの意（三）誤りたる文字あるも之を忍耐して讀むなり（四）路のかたむきて危險なること（五）世のつまらぬ凡俗の男に遇ふを忍耐すること（六）歷史を讀みて力を得ること（七）大に山水の景を觀る眼識（八）風景のすぐれたる所を踏みわたりて歩む健脚のこと（九）久しく風景の佳き處にとゞまりて之を賞すること（一〇）心に逆ひもとる所なく、親密に交る友人、山水を以て友人とするをいふ（一一）散樵は閑散なる山に住む人、九山に居る散樵が世俗の間に交り居るをいふ（一二）ゆつたりとして滿足して樂しむこと（一三）盤礴はあぐらをかくこと、箕踞は足を伸べ出す形の箕の如くなれること（一四）劃然は刀を以て物を破る聲、長嘯は聲を永く引きてうそぶくこと（一五）華胥は安樂の世界、黃帝晝寢ねて華胥の國に遊ぶを夢みたりといふ（一六）羲皇は太昊伏羲氏にて上古の無爲の世に在りて天子たりし人（一七）富貴權勢を得んとする心の煩惱をいふ（一八）鞭を執るは、賤役にて鞭を持ちて人を掃ひ除く先

士未三必在二山澤一。○業淨二六根一成二慧眼一。身無二一物一到二茅菴一。○人生莫レ如レ閒。太閒反生二惡業一。人生莫レ如レ淸。太淸反類二俗情一。○不レ是一番寒徹レ骨。怎得二梅花撲レ鼻香一。念頭稍緩時。便宜二莊誦一遍一。

することは無用の計畫なれば林中に臥すべしとの意 (七) 惟儉にして以て廉を助くべし、奢侈なれば遂に廉潔を缺くに至る (八) 恕は己の心を以て人を忖る也、思やりあること、惟恕にして以て德を完成すべし (九) 山澤は朝廷に對していふ、民間のこと、山澤の地必ずしも常に異りたる立派の士あるものにあらずとの意 (一〇) 六根は佛家の語、眼、耳、鼻、舌、身、意と六根と爲す、眼は視の根となり、耳は聽の根となり、鼻は嗅の根となり、舌は味の根となり、身は觸の根となり、意は念慮の根となる (一一) さとき智識を成すこと (一二) 我心を寄すべきものは一物も我が荒ら屋に到らざるをいふ (一三) 餘り閒散に過ぐること (一四) 餘りに淸白に過ぐること (一五) 寒さが骨に透る程にあらざれば梅花鼻を撲つよき香は得られず、梅は寒中を經て花を開き淸香を發するをいふ、此は人も艱難辛苦して才德長ずるをいふ (一六) 心が稍ゆるみて緊張せざるをいふ (一七) 莊は嚴なり、前の句を嚴かに暗誦すべしとの意

夢以二昨日一爲二前身一。可下以二今日一爲中來世上。○讀レ史要レ耐二訛字一。正如下登レ山耐二仄路一。蹈レ雪

夢に昨日を以て前身と爲す、(一)今日を以て來世と爲す可し。○史を讀みて訛字に(二)耐ふるを要す、正に山に登りて仄路に(三)耐へ、雪を蹈みて危橋に耐へ、閑居俗漢に(四)耐へ、花を看て惡酒に耐ふるが如くんば、此れ方に力を得ん。○世外の交情は(五)惟山のみ、須らく大觀の眼、(六)濟勝の具、(七)久住の緣(八)あるべし、方に之と莫逆を(九)(一〇)

休去。若覓二了時一無二了時一。若能行樂。即今便好快活。身上無レ病。心上無事。春鳥是笙歌。春花是粉黛。閒得二一刻一。即爲二一刻之樂一。何必情欲乃爲レ樂耶。○開レ眼便覺二天地濶一。欃レ鼓。非レ狂。林臥不レ知二寒暑更一。上レ牀空算。○惟儉可二以助一レ廉。惟恕可二以成一レ德。○山澤未三必有二異士一。異

ば、卽今便ち好快活、身上病無ければ、心上無事なり。春鳥は是れ笙歌、(四)春花は是れ粉黛、(五)閒一刻を得れば、卽ち一刻の樂たり。何ぞ必ずしも情欲を乃ち樂と爲さん邪。○眼を開けば便ち天地の濶を覺ゆ、鼓を欃つは狂に非ず、林に臥せば寒暑の更るを知らず、(六)床に上るは空算なり。○惟儉以て廉(七)を助く可く、(八)惟恕以て德を成す可し。(九)○山澤未だ必ずしも異士有らず、異士未だ必ずしも山澤に在らず。(一〇)○業六根を淨くして慧眼を成せば、(一一)身一物の茅菴に到る無し。(一二)○人生は閒に如くは莫し、(一三)太閒は反りて惡業を生ず、人生は淸に如くは莫し、(一四)太淸は反りて俗情に類す。○是の一番の寒、(一五)骨に徹せずんば、怎ぞ梅花鼻を撲つの香を得ん。(一六)念頭稍緩なる時、便ち宜しく莊誦一遍すべし。(一七)

(一) 只今事を休め去らんとすれば便ち休め去るを得べし (二) 事の終了する時期を求むれば終了する時期なきを以て程よき時に之をやむべしとなり (三) 若し能く我が思ふが如く樂しきことを爲せば只今便ち好く心持が快活なりとの意 (四) 笙の笛の聲を聞くが如きこと (五) 白粉をつけ眉墨を塗りて容貌を裝飾すること (六) 床に上りて臥

累月獨處、□室蕭條。取二雲霞一爲二伴侶一。引二青松一爲二心知一。或稚子老翁。閒中來過、濁酒一壺、蹲鴟一盂。相共開二咲口一。所レ談浮生閒話。絕不レ及二市朝一。客去。關レ門。了無二報謝一。如レ是畢二餘生一足矣。○牛塢白雲耕不レ盡。一潭明月釣無レ痕。○茅簷外忽聞二犬吠雞鳴一。恍如二雲中世界一。竹窓下唯有二蟬吟鴉噪一。方知二靜裡乾坤一。

如今休去便、

界の如し、竹窓の下、唯(二一)蟬吟鴉噪あれば、方に(二二)靜裡の乾坤なるを知る。

(一) 丹房は神仙の居る所、此は神仙の居の如き寂靜の室に獨り坐するをいふ (二) 物寂しくして仕事のなきこと (三) くちくして分明ならざること (四) 天地未だ開けざる前の時の如く混沌にして物の分らざる状態をいふ (五) 麻姑は古の女の仙人、東海に居りしなり (六) 艶麗さは、形容のしようもなき麗、妖冶は美しく容貌を飾れる女のこと (七) 黄泉の下に埋められてサレカウベとなること、人世榮枯の常なきをいふ (八) 分は分限なり、功名も分限ありたる功名の意か (九) 莊周が夢に胡蝶となりて栩々然として喜びしが如く、身の分々に適きをいふ (一〇) 蕭條は物寂しきこと (一一) 風景佳きを見て樂しむこと (一二) 青松を以て相互に心を知りあへる親密なる友人の如くすること (一三) 芋を一つの皿に盛ること (一四) 浮世のむだばなし (一五) 市朝は市中のことにて利益を貪るが如き談をいふ、話を交へざること (一六) 相互に謝辭を述ぶることなし (一七) 塢は小陣にて即ち土手のこと、牛塢に映ずる白雲の景を賞すること (一八) 潭は水中の深き處、一潭に映ずる明月の景を賞すること (一九) 茅にて葺ける荒屋のこと (二〇) 恍はぼんやりとして定かならざること (二一) 蟬が鳴き鴉が喚がしく啼くこと (二二) 靜かなる別天地の趣あるをいふ、乾坤は天地なり

(一)如今休め去れば便ち休め去れ。若し(二)了時を覓めば了時無し、若し(三)能く行樂せ

放歌。采ㇾ蓮高醉。晴雲微臭。漁笛滄浪。華句一垂。江山共峙○胸中有二靈丹一粒一。方能點二化俗情一。擺二脱世故一。

出て、高閣となること

獨二坐丹房一。瀟然無ㇾ事。烹二茶一甌一。燒二香一炷一。看二達磨面壁圖一。垂ㇾ簾少頃。不ㇾ覺心淨神清。氣柔息定。濛濛然如二混沌境界一。意者揖二達磨一。與ㇾ之乘ㇾ槎而見二麻姑一也。○無ㇾ端妖冶。終成二泉下骷髏一。有ㇾ分功名。自是夢中胡蝶。○

(一)丹房に獨坐し、(二)瀟然事なく、茶一甌を烹、香一炷を燒き、達磨面壁の圖を看、簾を垂るゝこと少頃なれば、覺えず心淨く神清く、氣柔かに息定まり、(三)濛濛然として混沌境界の如く、意ふに達磨に揖し、之と槎に乘りて(五)麻姑を見ん。○(六)端無き(四)妖冶は、終に(七)泉下の骷髏と成り、分ある(八)功名は、自ら是れ(九)夢中の胡蝶なり。○累月獨處し、一室(一〇)蕭條たり、(一一)雲霞を取りて伴侶と爲し、(一二)青松を引いて心知と爲し、或は稚子老翁、閒中に來り過り、濁酒一壺、(一三)蹲鴟一盂、相共に咲口を開き、談ずる所は(一四)浮生の閒話、絶えて(一五)市朝に及ばず、客去りて門を關ぢ、了に(一六)報謝なし。是の如くにして餘生を畢ふれば足れり。○(一七)半塢の白雲耕して盡きず、(一八)一潭の明月釣りて痕無し。○(一九)茅檐の外、忽ち犬吠雞鳴を聞けば、(二〇)恍として雲中の世

勝槪一登臨時。○竹籬茅舍。石屋花軒。松柏羣吟。藤蘿翳景。流水遶戶。飛泉掛簷。煙霞欲棲。林壑將瞑。中處野叟山翁四五。余以閒身作此中主人。坐沈紅燭。看遍靑山。消我情腸。任他冷眼。○問婦索釀。甕有新芻。呼童煮茶。門臨好客。○花前解佩。湖上停橈。弄月

甕に新芻(一二〇)あり、童を呼びて茶を煮、門に好客に臨む。○花前に佩(一二一)を解き、湖上に橈(一二二)を停め、月を弄びて放歌し、蓮を采りて高酔し、暗雲微裊(一二三)、漁笛滄浪(一二四)、華句一たび垂れ、江山共に峙つ。○胸中に靈丹(一二五)一粒あれば、方に能く俗情(一二六)を點化し、世故(一二七)を擺脱す。

(一) 詩文を好紙に書して後世に垂れ遺すこと (二) 書ける文字の美はしきこと花の如し (三) 光采を光りかゞやかすこと (四) 汚れたる心を洗ひ去りて清むること (五) 淫艶は美色を以て耳目の情を娯ましむること (六) 清淨なる机に依り、明かなる窓の下に佇りて書を讀むこと (七) 一たび坐して息ふ程の時間にて少時間をいふ (八) 有名なる風景よき山、風景のすぐれてよき地に一たび登りて臨み見ること (九) 竹にて作れる籬垣、茅にて葺ける家屋 (一〇) 岩石を積みて家屋とし及び花の開ける軒端 (一一) 松柏の風に吹かれて聲を發すること (一二) 蔦やかづらは生ひ茂りて日の景を翳ふこと (一三) 煙霞は此にとゞまり棲むが如く簷にたなびけること (一四) 閑散なる身 (一五) 紅燭の照らす下に長く止まりて去らざること (一六) 四方の青山の景を盡く看廻すこと (一七) 我が心情の汚れを消し去りて清くすること (一八) 他の人は余が優遊塵世に超脱するを冷眼にて看るも他の看るに任かせて之を顧みざること (一九) 醸したる酒のこと (二〇) 新しく作りたる酒のあるをいふ (二一) 腰に佩びたる珮を解きて之を飲むこと (二二) 橈は舟をこぐ竿、舟を止むるをいふ (二三) 薄暗き雲が少しくたなびきわたること、裊は嫋と通じ嫋嫋の意 (二四) 漁師の吹く笛が海の浪立つあたりに聞ゆること (二五) 靈丹は仙藥、胸中に世外に超遠する思想あるをいふ (二六) 汚れたる世間の情欲を變化して高尚なる情となすこと (二七) 世故は世事なり、世の俗事をぬけ

中之趣。何須三脚到二李侯門一。草書花帖。開窠所レ需。直恁三心遊二揚子宅一。

（一三）竹を種え花に水を灌ぎ清閑にして其業に淫せず　（一四）茅を以て葺きたる家屋、竹にて作りたる牕には貧中の趣あり、故に李侯の門に至るの必要なし、李侯は蓋し李弘度を指すか、李弘度は晉代の人その家貧なり　（一五）草のことを書き花のこと書きたる書帖をいふ　（一六）揚子は漢の揚雄を指す

好香用以薫レ徳。好紙用以垂レ世。好筆用以生レ花。好墨用以煥レ采。好水用以洗レ心。好茶用以滌レ煩。好酒用以消レ憂。○聲色娯レ情。何若二淨几明牕一坐息頃一。利榮馳レ念。何若二名山

好香は用ひて以て徳を薫し、（一）好紙は用ひて以て世に垂れ、（二）好筆は用ひて以て花を生じ、好墨は用ひて以て（三）采を煥にし、好水は用ひて以て（四）心を洗ひ、好茶は用ひて以て煩を滌ひ、好酒は用ひて以て憂を消す。○（五）聲色に情を娯しむるよりは、何ぞ（六）淨几明牕（七）一坐息の頃に若かん。利榮に念を馳するよりは、何ぞ（八）名山勝概一登臨の時に若かん。○（九）竹籬茅舍、（一〇）石屋花軒、（一一）松柏羣吟し、（一二）藤蘿景を翳し、流水戸を遶り、飛泉簷に掛り、（一三）煙霞捿まんと欲し、林壑將に瞑せんとす。中に野叟山翁四五を處らしめ、（一四）余間身を以て此中の主人となり、坐して（一五）紅燭に沈み、（一六）漏く青山を看、（一七）我情腸を清うし、（一八）他の冷眼に任かす。○婦に問ひて（一九）醸を索むれば、

遊。○事遇快意處、當轉。言遇快意處、當住。○儉爲賢德、不可著意求賢。貧是美稱、只是難居其美。○志要高華、趣要淡泊。○眼裡無點灰塵、方可讀書千卷。胸中沒些渣滓、纔能處世一番。○眉上幾分愁、且去觀棋酌酒。心中多少樂、只來種竹澆花。○茅屋竹牕、貧

に住るべし。○儉は賢德たれども、意(六)を著けて賢を求むべからず。貧は是れ美稱なれども、只是れ其美(七)に居り難し。○志は高華(八)なるを要し、趣は淡泊(九)ならんことを要す。○眼裡點の灰塵(一〇)無くして、方に書千卷を讀む可し。胸中些の渣滓(一一)なくして、纔に能く世に處すること一番す。○眉上(一二)幾分の愁には、且らく去りて棋を觀酒を酌む、心中多少の樂には、只來りて竹(一三)を種ゑ花に澆ぐ。○茅屋(一四)竹牕は、貧中の趣、何ぞ脚李侯の門に到るを須ひん。草書(一五)花帖は、閒裏需むる所、直に心揚子(一六)の宅に遊ぶを慊せん。

㊀ 名利を投じて衙台を求め知己を得んとして空しく足を勞すること ㊁ もと用ひられて祿を得以て生を立つるの義計に非らず ㊂ 器を曳きて自らその身を屈するは眞の交游にあらず、眞の交游は自ら絶すべからずとの意 ㊃ 快意に安んずる時は失敗するが故に方向を轉じて他の事柄に移るべしとなり ㊄ 吾は快意を極むべからざるをいふ ㊅ 故意に儉を行ひて賢ならんことを求むべからず ㊆ 人は貧を厭ふがために長くその美德を有し難く殊に貧を脱せんことを求むべしとなり ㊇ 高尚にして立派なること ㊈ さつぱりとして寡欲なること ㊉ 少しばかりも汚れたるものを見る意志なきこと (一一) 渣滓は水のかす、少しばかりも汚れたる念慮なきをいふ (一二) 眉毛の上に見はれたる少しばかりの憂愁には姑く去り一棋を觀る、酒を酌み一飲憂愁を散ずべし

天下有一言之微。而千古如新。一字之義。而百世如見者。安可泯滅之。故風雷雨露天之靈。山川民俗地之靈。語言文字人之靈。畢三才之用。無非一靈以神其間。而又何可泯滅之。集靈第四。

卷四

靈

天下に一言の微にして千古新なるが如く、一字の義にして百世見るが如き者あり。(一)安んぞ之を泯滅す可けんや。故に風雷雨露は天の靈、山川民俗は地の靈、語言文字は人の靈、(二)三才の用を畢くして、一靈の以て其間に神なるに非ざる無し、而して又何ぞ之を泯滅す可けんや。靈第四を集む。

(一) 僅に一言の微小なる者も之を千古に傳へて新らしきが如き感ありて古きを感ぜざるなり (二) 三才は天地人の三なり、一の靈は三才の用を盡すをいふ

投刺空勞。原非生計。曳裾自屈。豈是交

(一)刺を投じ空しく勞するは、(二)原と生計に非ず、(三)裾を曳きて自ら屈するは、豈是れ交游ならんや。○事(四)快意の處に遇へば當に轉ずべし。(五)言快意の處に遇へば當

日月。天地不平之氣。托二之風雷一。○風流易レ瀉。佯狂易レ顯。○書載二茂先三十乘一。便可レ移レ家。囊無二子美一文錢一。儉堪レ結レ客。○有二作用一者。器宇定是不レ凡。有二受用一者。才情決然不レ露。○夫人有レ短。所二以見一レ長。

以なり。

(一) 傲骨はおごり高ぶり下らざる人、俠骨は男立ての氣概ある人、媚骨はこびを呈する美人 (二) 古死馬の骨を千金にて買ひたるが如く枯骨も千金の價ありとの意 (三) 冷語は冷かに諷刺する語、雋語はすぐれたる善き語、韻語は風流なる語 (四) 九鼎は彼土に於ける重寶の器なり、かゝる語は少しの語にても貴重なり (五) 草莽は草の生ひ茂れる原野にて此は民間の議論をいふ (六) 理の正しきと正しからざるとを論ぜざるいふ (七) 不白は明かに言に發せざる眞心は日月の光明なるが如しの意 (八) 茂先は晉人、張華の字なり、張華は藏書多く之を車に載せば三十乘あり、此は張華三十乘の藏書あらば便ち家を移すべしとなり (九) 子美は唐の詩人、杜甫の字、杜甫貧窮にして一文錢なし、此は杜子美の如く一文錢の貯なきも甚だ客と交りを結ぶを得べきをいふ (一〇) 事業を作し出す技倆あるものをいふ (一一) 器字はその人の役に立つはたらき (一二) 人の言を受け容るゝ度量大なるもの (一三) その才と情とを少しも外に見はさずして之を包み隱すをいふ (一四) 人には長處あり短處あり短處あるは是れ長處ある所を見はす所以なり

怒髮一快心之擧。雖二愁人一亦開二笑顏一。○論二官府一。不レ如下論二帝王一。以中傲史臣之不上逮。論二閨闥一。不レ如下談二艶麗一。以中補風人之見上遺。○是技皆可レ成レ名。天下唯無技之人最苦。片技卽足二自立一。天下唯多技之人最レ勞。

㊀表面の假の狀態を認め得れども眞實の形相を認め得ざること ㊁自己の巧みなる術を世に見せびらかして許れども自己の拙き術を藏めかくすを得ず ㊂心を傷むること ㊃臆病の男子も亦怒りを以して髪を逆だつるなり ㊄朝廷の記錄官の記事の行き屆かぬ所を爲すこと ㊅閨闥は女子の居る奧座敷のこと、此は婦女の事を批評するをいふ ㊆風人は詩人なり、詩人のいひ遺して未だ言はざる所を補ふをいふ ㊇少しの技能あれば自ら獨立して生活し得ること ㊈多技多藝の人はその技藝專一ならず、故に最も勞するなり

傲骨俠骨媚骨。卽枯骨可レ致二千金一。冷語雋語韵語。卽片語亦重二九鼎一。○議生二草莽一無二輕重一。論到二家庭一無二是非一。○聖賢不白之哀。托二之

傲骨(一)俠骨媚骨は、卽ち枯骨(二)も千金を致す可し、冷語(三)雋語韵語は、卽ち片語も亦九鼎(四)より重し。○議草莽(五)に生ずれば輕重無し、論家庭に到れば是非(六)少し。○聖賢不白(七)の衷は、之を日月に托し、天地不平の氣は、之を風雷に托す。○風流蕩し易く、佯狂顚じ易し。○書は茂先(八)の三十乘を載せば、便ち家を移す可し。○囊に子美(九)の一文錢なきも、儘客を結ぶに堪へん。○作用(一〇)ある者は、器宇(一一)定めて是れ凡ならず。○受用(一二)ある者は、才情(一三)決然露はさず。○夫れ人短(一四)有るは、長を見はす所

主持。須レ戒二偏執一。○縱二意之顰咲一。成二千古之憂一。游二口之春秋一。中二一生之毒一。○才人經レ世。能人取レ世。曉人逢レ世。名人垂レ世。高人出レ世。達人玩レ世。

如く辞退となくすべて人の意見に従ふこと　(一九)　自己の意見を主張して固持すること　(二〇)　一方にかたよりて自己の意見を守りて變ぜざること　(二一)　自己の氣まゝに故なく或は顰し或は笑ふこと、顰は顔をしわめること　(二二)　口より出づるがまゝに勝手に人物を褒貶すること、春秋は人を褒貶するの義に用ふ

天下無レ不レ好レ諛之人。故諂之術不レ窮。世間盡是善レ毀之輩。故讒之路難レ塞。○任三他極有二見識一。看二得假一。認二不レ得眞一。隨三個極有二聰明一。賣二得巧一。藏二不レ得三拙一。○傷心之事。即懦夫亦動二

天下に諛を好まざるの人無し、故に諂の術窮らず、世間盡く是れ毀を善くするの輩、故に讒の路塞ぎ難し。（重出）○他の極めて見識あるに任せて、(一)假を看得て、眞を認め得ず。個の極めて聰明あるに隨ひて(二)巧を賣り得て、拙を藏し得ず。○(三)傷心の事は、即ち懦夫も亦怒髪を動かし、快心の舉は、愁人と雖も亦笑顔を開く。○(四)官府を論ずるよりは、帝王を論じて以て(五)吏臣の不逮を做すに如かず。(六)閨閫を論ずるよりは、艶麗を談じて以て(七)風人の遺されたるを補ふに如かず。○是技皆名を成す可し、天下唯無技の人最も苦し、(八)片技は即ち自立するに足る、天下唯(九)多技の人最も勞す。

雄未ㇾ轉之雄圖。假ニ糟丘一爲ニ覇業一。風流不ㇾ盡之餘韻。託ニ花谷一爲ニ深山一。○淸襟凝遠。卷ニ松江萬頃之秋一。妙筆縱橫。撹ニ毗崘一峰之秀一。讀ㇾ此可下以遣ニ煩鬱之懷一。潤中枯澁之筆上。○先儒有ニ良心一。在ニ夜氣淸明之侯一。予以眞學問。亦不ㇾ越ニ此時一。○從ㇾ議最宜ニ婉轉一。但忌ニ隨波一。發ㇾ論定以ニ

澁の筆を潤すべし。○先儒(一四)良心有り、夜氣淸明(一五)の侯に在り、予以ふ眞の學問も、亦此時(一六)を越えずと。○議に從ふには最も宜しく婉轉(一七)なるべし、但隨波(一八)を忌む、論を發するには定めて主持(一九)を以てす、須らく偏執(二〇)を戒むべし。○縱意(二一)の嚬咲は、千古の憂を成す、游口(二二)の春秋は、一生の毒に中る。○才人は世を經し、能人は世を取り、曉人は世に逢ひ、名人は世に垂れ、高人は世を出で、達人は世を玩ぶ。（重出）

一 卑劣の情を治療して高尚にすること 二 吾が胸中に籠ける思想を發表して心をはらすこと 三 莽然はぼんやりと分明ならざること 四 戚然は痛み悲しむこと 五 かゝる人は詩書を讀むも益なしとの疑を起すをいふ 六 之を世に運轉して活用せざる雄大の計圖をいふ 七 夏の桀王の爲したるが如く酒の糟を積みて丘と爲すが如き奢侈を爲すを以て霸業をなしたりとするなり 八 風流の當世に盡さずして後世まで殘れるおもしろき樣子 九 花の咲き滿てる山谷を以て深山の趣ありとなすこと 一〇 淸らかなる胸中の遠大にして堅固なること 一一 松江に於て廣大なる秋の波を卷き上ぐるが如く淸くしてさつぱりとしたること 一二 巧妙なる文章は縱橫自由に書かれて崑崙一峰の秀でてすぐれたる景を取り込めること 一三 枯れて生氣なく澁ぶりて流暢ならざる文章をいふ 一四 先儒は孟子を指す 此の事孟子に見ゆ 一五 夜の物靜かにして聲なき時我が氣分の淸く明かにして一點の曇りなき良心が見はれ來ると、 一六 夜氣淸明の時を指す 一七 婉曲にして圓轉滑脫なること 一八 波のまに〳〵にうつれるが

氣色便附不レ同。○滿腹有レ文。雖レ罵レ鬼措レ身無レ地反愛レ天。○居傍ニ鳴珂之里一。生憎肉眼相レ形。時登ニ樹幟之壇一。最忌ニ大言驚レ衆。○名病ニ太高一。才忌ニ太露一。自レ古爲レ然。予レ今爲レ甚。

讀レ書可ニ以醫レ俗。作レ詩可ニ以遣レ懷。有ニ多讀レ書而莽然。多作レ詩而戚然者一。將レ致ニ疑于ニ詩書一。抑致ニ疑于ニ人世一。○英

は一切の外物形式あるものを指す、佛家の語、世界の一切の物に對して物のすがたを認めざること 一一 蓮の花が水の中に咲きながら水を離れて水につかざるが如く一切外物の上に超然たるをいふ 一二 秋に至りて鳥が春の時と同じ聲にて鳴くときは音調に於ては春と秋と異ならざるなり 一三 今人は古人と同じ狀貌を具ふるもその氣色は古人と同からずとなり 一四 文章思想のその胸中に充滿したること 一五 鬼は怪しきもの、奇怪のものといひて罵口しがたきをいふ 一六 我が一身を措くべき所なくして反りて天の惠の至らざるを愛ふること 一七 唐の鄭嘉貞相と爲り、弟嘉訥金吾將軍と爲り朝する毎に軒轅從圖に登つ、居る所の坊を鳴珂里と曰ふ、貴人の居る里をいふ 一八 生憎は惟々憎むと同じ、心眼を以てせず肉眼にて物の形勢を相(ミ)るを憎む 一九 幟を壇上に立てゝ、自家一流の意見を立つること 二〇 今日に於ては一層甚しく名の高きを病み、才の露はるゝを忌む

書を讀めば以て俗を醫すべし。(一一)詩を作れば以て懷を遣るべし。(一二)多く書を讀みて莽然たり、(一三)多く詩を作りて戚然たる者有り、(一四)將に疑を詩書を致さんとす、(一五)抑ゝ疑を人世に致さん。○英雄未だ轉ぜざるの雄圖は、(一六)精丘を假りて霸業を爲し、(一七)風流盡きざるの餘韻は、(一八)花谷に托して深山と爲す。(一九)○淸襟凝遠、(二〇)松江萬頃の秋を卷き、(二一)妙筆縱橫、(二二)崐崙一峰の秀を攙す、此を讀めば以て煩鬱の懷を遣り、(二三)枯

珠一。形如二衆粒一。○舞光分レ曉。出二虚竇一以雙飛。微陰合レ暝。舞二低檐一□並入。○何地無レ塵。但能不レ染。則山河大地。盡爲二清淨道場一。如必離レ境求レ淸。安能三千外。更立二法界一。偈云。對レ色無二色相一。視レ欲無二欲意一。蓮花不レ著レ水。淸淨超二于彼一。秋鳥弄二春聲一。音調未二嘗有一レ異。今人具二有古貌一。

駢び而して並び入る。○何れの地か塵(七)無からん、但能く染まずんば、則ち山河大地、盡く清淨の道場たり。如し必ず境を離れて淸を求めば、安んぞ能く(八)三千外、更に法界を立てん。(九)偈に云く、色に對して色相無く、(一〇)欲を視て欲意無くんば、(一一)蓮花、水に著せず、淸淨彼に超ゆ、(一二)秋鳥春聲を弄して、音調未だ嘗て異なる有らず、(一三)今人古貌を具有し、氣色便ち爾く同じからず。○(一四)滿腹文有れば、鬼(一五)を罵り難し。(一六)身を措くに地無くして反りて天を憂ふ。○(一七)居鳴珂の里に傍へば、生(一八)憎む肉眼形を相するを、時に(一九)樹幟の壇に登れば、最も大言衆を驚かすを忌む。○名は太だ高きを病ひ、才は太だ露はるゝを忌む、古より然りと爲す、(二〇)今に于いて甚しと爲す。

(一) 珠玉の相連屬せるが如く美はしきこと (二) 米粒を聚めたるが如く諸處に散在せること (三) 空霽れて太陽の光の射ること (四) 一物も存せざる空しき穴を出てゝ相並びて飛ぶ (五) かすかなる夕陰が眞暗になること (六) 低き家ののき端に舞ひて家の中へ並び入るをいふ (七) 俗氣に汚るゝこと塵埃の汚れたるが如きこと (八) 三千世界の外に法界を立つべからざること、佛敎に此宇宙間に三千世界ありといふ (九) 佛經に用ふる詩の一種 (一〇) 色

娟于嬋廉末榮岧于帷席。○雲氣蔚于蔽菁金精養于秋菊落葉半牀。狂花滿屋○雨送添硯之水。竹俱掃楄之風。○血三年而藏碧魂一變而成紅。○舉黃花面乘月艷。籠蘚葉而卷雲翹○垂輪簾外疑鉤券之重懸。透影窓中若鏡光之間照。

ば、鏡光の間に照すが若し。

(一) 靜なること淸き夜に星の列なるが如きこと (二) 活動する時には流雲の奔るが如く躊躇せざること (三) すぐれて雄大なる氣象 (四) その勢の盛にして烈しきこと霜をも掃ひ去らしむるが如きこと (五) 鶴の木上に棲みて動かざるが如く動かざること (六) 纓は冠のひも、蕤は冠上の飾 (七) 軒は大夫の乘る車、蓋は車をおほふまくのこと、此は裝飾したる冠を着けて車のまくのあたりに頓へすこと (八) 光り輝く美しき衣服、黼黻は黼文を織りたる衣服なり、此は美しき黼文の衣服に光を發すること (九) 壺は甃瓦 (一〇) 娟は美しきこと、牀は階上の地、屋は家の廡下 (一一) 蕭はめどき草、草の生ひ茂れる庭 (一二) 金精は月のこと (一三) 落ちたる木の葉が牀半分の廣さにわたること (一四) 風に吹かれて散り落ちたる花の屋に滿つるをいふ (一五) 楄はユカ即ち腰かけるユカにて椅子の如きもの (一六) 碧は青き石、血は三年の後に變化して青色の石となる、莊子に萇弘蜀に死す、その血を藏すること三年にして化して碧と爲ることあり (一七) 人の精爽は變じて紅色の光となりて飛ぶをいふ (一八) 月艷は月色の美しきこと (一九) 青黑き木の葉のこと、雲翹は雲の起りあがること (二〇) 輪は月のこと (二一) 鉤は曲りがねにて、月の鏃形にかゝるは曲りがねの重なりて懸るが如きをいふ (二二) 影は月影のこと、月影の窓の中にうつり透るをいふ

疊輕蝶而矜媛布重泥而訝濕跡似連

輕蝶を疊ねて媛を矜り、重泥を布いて濕を訝る、跡は連珠に似て、形は粲粒の如し。(三)○霽光曉を分てば、(四)蟾質を出でて以て雙飛し、(五)微陰暝を合すれば、(六)低檐に

杯一。澆ニ自己之磈礧一。○春至不レ知ニ湘水深一。日暮忘却巴陵道。○奇曲雅樂所ニ以禁一レ淫也。錦繡纈纈所ニ以禦一レ暴也。縟則大過。是以檀卿刺ニ鄭聲一。周人傷ニ北里一。

亞形を刺す　(一九) 裝飾の文章のこまかに過ぐること　(二〇) 檀卿は鄭國の音樂が淫聲なることをそしりたるをいふ　(二一) 北里は殷の時の音樂にて淫聲なり、史記に使ニ師涓作ニ新淫聲一、北里之舞靡々之樂とあり、周人は北里の淫を傷み悲みたるをいふ

靜如ニ清夜之列星一。動若ニ流彗之互奔一。○振ニ駿氣一以擺レ雷。飛ニ雄光一以倒レ電。○停レ之如ニ栖鵠一。揮レ之如ニ驚鴻一。飄ニ纓蕤于軒幌一。發ニ暉曜于羣龍一。○始緣レ甍而冒レ棟。終開レ簾而入レ隙。初便ニ

靜は清夜(一)の列星の如く、動は流彗(二)の互に奔るが若し。○駿氣(三)を振ひて以て雷(四)を擺ひ、雄光を飛ばして以て電を倒す。○之を停むること栖鵠(五)の如く、之を揮ふこと驚鴻の如く、纓蕤(六)を軒幌(七)に飄へし、暉曜(八)を羣龍に發す。○始は甍(九)に緣りて棟を冒ひ、終は簾を開いて隙に入る、初は娟(一〇)を堺蓎に便にし、末は盈を帷席に縈ふ。○雲氣叢著(一一)に蔭し、金精(一二)秋菊を養ふ。○落葉(一三)半牀、狂花(一四)屋に滿つ。○雨は硯に添ふるの水を送り、竹は榻(一五)を掃ふの風に供す。○血は三年(一六)にして碧に藏し、魂(一七)は一變して紅を成す。○黃花を擧げて月艷(一八)に乘じ、黛葉(一九)を籠めて雲翹を卷く。○輪(二〇)を簾外に垂るれば、鉤勢(二一)の重なり懸るかと疑はる。○彩(二二)を窓中に透せ

山之侶。不解嘆上芒鞋。好景無詩。虚携囊中錦字。○遼水無極。雁山参雲。閨中風暖。陌上草薫。○秋露如珠。秋月如珪。明月白露。光陰往來。與子之別。思心徘徊。○聲應氣求之夫。決不在于尋行數墨之士。風行水上之文。決不在于一字一句之奇。○奪他人之酒

文は、決して一字一句の奇に在らず。○他人の酒杯を奪ひて、自己の塊磊(一六)に澆ぐ。○春至りて湘水の深きを知らず、日暮れて忘却す巴陵の道。○奇曲雅樂(一七)は淫を禁ずる所以なり。錦繍黼黻(一八)は褻を禦ぐ所以なり。褥(一九)なれば則ち大に過ぐ。是を以て檀卿鄭聲(二〇)を刺り、周人北里(二一)を傷む。

(一) すぐれたる妙音 (二) 伯牙は春秋の時の人、琴を善くす、鍾子期と友とし善し、子期死するや我が琴音を聴くものなしとて琴糸を切りて琴を鼓せず (三) 楚の卞和璞を得て之を楚王に献ず、王玉人をして之を鑒定せしむ、玉人以て石と爲す、楚王欺くとしてその足を斫る、卞和玉を抱きて山中に泣くこと三日三夜、泣盡きて之に繼ぐに血を以てす (四) 鏖戦は苦戦して多く人を殺すこと、此は解し難き處も攻究して了解することに喩ふ (五) 酷吏はからく嚴しき役人 (六) その罪の次第を推窮め取調ぶるに最後まで徹底して曖昧ならざること、一字一句も見逃さず推究するに喩ふ (七) 名山に遊ぶに共に伴れそふ友の乏しきをいふ (八) 芒鞋はわらじのこと、絶壁の上をわらじにて遊び廻る趣味を解せざること (九) 詩を作りて入る、嚢の中に古人の好詩を携へ持つとにや (一〇) 遼水は河の名、遼東の海に入る、遠く流れて極まる所を知らず (一一) 雁山は雁蕩山、浙江省に在り、名の高きこと雲にまじはる (一二) 珪は圭に同じ、玉なり (一三) 相思ふの情の動きてさまよふこと (一四) 尋常の書法に拘泥せざること (一五) 風水の上を吹き渡るときは美しき波紋を成すが如く、抑揚頓挫ある美はしき文章をいふ (一六) 胸中に鬱勃たる不平の念。酒盃に注ぐは不平の念を癒むると (一七) 常に異なりてめづらしき歌と正しき音樂 (一八) 錦と刺繍したるものと。黼黻は古の刺繍したる美しき模様ある衣服、黼は半黒半白の者にて斧の形を刺す、黻は半青半黒にして兩弓相背く

著㆓阮家無鬼論㆒。炎囂悶㆑世。愁披㆓劉氏北風圖㆒。○氣奪㆓山川㆒。色結㆓煙霞㆒。○詩思在㆓灞陵橋上微吟處㆒。林岫便已浩然。野趣在㆓鏡湖曲邊獨往時㆒。山川自相映發。

至音不㆑合㆓衆聽㆒。故伯牙絕㆑絃。至寶不㆑同㆓衆好㆒。故卞和泣㆑玉。○看㆓文字㆒。須㆑如㆓猛將用㆑兵。直是鏖戰一陣。如㆓酷吏治㆑獄。直是推勘到底。決不㆑恕㆑他。○名

桓帝の時の人、曾て北風圖を畫く、人之を見て涼を覺ゆ、北風圖を披けば涼しくして世を脱したる思あるなり（二七）氣象は山川を奪ふ程に雄大なること（二八）氣色はもや、かすみの棚引けるが如く風流灑脫の趣あること（二九）灞陵橋は長安市外に在り（三〇）岫は山の穴なり、林の洞穴が已にひろ〳〵として廣大なるの感あること（三一）野趣は田舍風の趣味、鏡湖は今の浙江省紹興縣の南に在り一に鑑湖と名づく、曲邊は湖水の岸の屈曲せるあたり（三二）相うつり合ひて光輝を發すること

至音は衆聽に合はず、故に伯牙絃を絶つ、至寶は衆好に同じからず、故に卞和(一)玉に泣く。○文字を看るには須らく猛將兵を用ふるが如くすべし、直ゝ是れ鏖(二)戰一陣す、酷吏獄を治むるが如くせよ、直ゝ是れ推勘到底し、決して他を恕せず。(三)
○名山侶乏しく、壁上の芒鞋を解せず、好景詩無く、虛しく囊中の錦字を携ふ。
○逸水極りなく、雁山雲に參す、閨中風暖にして陌上草薰る。○秋露珠の如く、秋月珪の如し、明月白露、光陰往來し、子との別、思心徘徊す。○聲應じ氣求むるの夫は、決して行を尋ね墨を數ふるの士に在らず、風水上を行くの

來都作二青蚨一。柔玉温香觀想可レ成二白骨一。○旅館題レ蕉。一路留來魂夢譜。客途驚レ雁。半天寄落別離書。○歌兒帶二煙霞之致一、舞女具二丘壑之姿一。生二成世外風姿一。不レ慣二塵中物色一。○今古文章。只在二蘇東坡鼻端一、定二優劣一。一時人品却從二阮嗣宗眼内一、別二雌黄一。○魑魅滿レ前。咲

雌黄（二二）を別つ。○魑魅（二三）前に滿つれば、咲うて阮家（二四）の無鬼論を著はす。炎囂（二五）世を閙すれば、愁へて劉氏（二六）の北風圖を披く。○氣（二七）は山川を奪ひ、色は煙霞（二八）を結ぶ。○詩思、灞陵（二九）橋上微吟の處に在れば、林岫（三〇）便ち已に浩然たり。野趣（三一）、鏡湖曲邊獨往の時に在れば、山川自ら相映發（三二）す。

（一）[illegible]は我が木曾の類　（二）山の八合目のあたり山色鮮しく翠なるを翠微といふ　（三）雪の如く白く立ち昇る波浪　（四）しづかに水に浮べるカモメなり　（五）[illegible]を嫌避すること、士の不羈にして檢束を甘んぜざる跌宕のものに喩ふ　（六）轅の下に在りて車を輓く馬、不才無能に喩ふ　（七）諍臣は強く君を諫むる臣、模稜は分明ならざること　（八）殿上に在りて虎の猛きが如く勇猛にして君を諫むること　（九）荷錢は蓮の葉の初め生ずるとき錢の如き形を爲したるもの　（一〇）楡の木未だ葉を生ぜざる時、枝間先づ莢を生ず、之を楡莢といふ　（一一）青蚨は蟬に似て狀稍大なり　（一二）柔かなる玉温き香は美人に喩ふ、美人もよく觀想すれば遂に白骨たるを免れざるを悟るをいふ　（一三）旅館に在る芭蕉に文をしるすこと　（一四）留來は留むること、來は語辭、夢みたる事を書きたる書を旅館に留むること　（一五）客途に在りて秋の季節に至りたるに驚くこと　（一六）中途より別離の書を友人に寄せ送ること　（一七）もやかすみの風景を樂しむ風流の樣子あること　（一八）丘々たにの風景を樂しむ風流の資あること　（一九）世を離れて俗氣なき樣子　（二〇）世塵の汚れたる樣子　（二一）阮嗣宗は阮籍なり、彼我が好む人には青眼を以てし嫌ふ人には白眼を以て相接せり　（二二）文章を添削するに用ふ、此は轉じて優劣を別つをいふ　（二三）魑魅は山中に居る怪物なり、此は小人に喩ふ　（二四）阮瞻無鬼論を著はし天地間に鬼神なきことを論ぜり　（二五）權勢を好むこと　（二六）劉は劉貢、

紛紛。○嚢無ニ阿堵物一。豈便求レ人。盤有ニ水晶鹽一。猶堪レ留レ客。○種ニ兩頃附郭田一。量レ晴校レ雨。尋ニ幾箇知心友一。弄レ月嘲レ風。

花が雨の如く落ちて入り亂れて飛ぶこと (二二) 阿堵物は、金錢のこと、王衍常に錢を口にせず、その夫人王衍寢ぬるに當り錢を牀邊に繞らす、王衍起くるに當り之を知り婢に命じて曰く阿堵物を擧げよと遂に錢といはず (二三) 鹽の自然結成せるもの (二四) 城郭に近き田地兩頃、一頃は我が二町七段八畝十歩ばかり (二四) 晴雨をはかりて耕作するをいふ (二五) 相互に能く心を知り合へる親密の友を尋ぬること (二六) 明月を弄び清風を嘲り笑ひて風流を樂むをいふ

著レ屐登レ山。翠微中獨逢ニ老衲一。乘レ桴浮レ海。雪浪裡羣傍ニ閑鷗一。○才士不レ妨ニ泛駕一。轅下駒吾弗レ願也。諍臣豈念ニ模稜一。殿上虎君無レ尤焉。○荷錢楡莢飛

(一)屐を著けて山に登れば、(二)翠微中獨り老衲に逢ふ。桴に乘りて海に浮べば、(三)雪浪裡羣く(四)閑鷗に傍ふ。○才士(五)泛駕を妨げざるも、(六)轅下の駒は吾願はざるなり。(七)諍臣豈模稜を念はん、(八)殿上の虎は君尤むる無し。○(九)荷錢(一〇)楡莢、飛び來りて都て(一一)青蚨と作り、(一二)柔玉溫香、觀想すれば白骨と成る可し。○(一三)旅館蕉に題し、一路(一四)留來す魂夢の譜、(一五)客途雁に驚き、(一六)半天寄落す別離の書。○歌兒(一七)煙霞の致を帶び、舞女(一八)丘壑の資を具へ、(一九)世外の風姿を生成し、(二〇)塵中の物色に慣れず。○今古の文章、只蘇東坡の鼻端に在りて優劣を定め、一時の人品、却つて(二一)阮嗣宗の眼內に從ひて

長吟操レ瓢時。千篇白雪。○親兄弟析レ箸。璧合翻作二瓜分一。○士大夫愛レ錢、書香化爲二銅臭一。○心爲二形役一。塵世馬牛、身被二名牽一。○樊籠鷄鶩。○懶見二俗人一。權辭託レ病。怕レ逢二塵事一。詭迹逃レ禪。○人不レ通二古今一、襟裾馬牛。士不レ曉二廉恥一、衣冠狗彘。○道院吹レ笙。松風裊裊。空門洗レ鉢。花雨

世の馬牛、身名に牽かれば、樊籠の鷄鶩なり。○俗人を見るに懶し、權辭病に託す、塵事に逢ふを怕れて、詭迹禪に逃る。○人古今に通ぜざれば、襟裾せる馬牛にして、士廉恥を曉らずんば、衣冠せる狗彘なり。○道院に笙を吹けば、松風裊裊たり。空門に鉢を洗へば、花雨紛紛たり。○甕に阿堵物無きも、豈便ち人に求めん。盤に水晶鹽有れば、猶ほ客を留むるに堪へん。○兩頃附郭の田に種ゑて、晴を量り雨を校ろ、幾箇知心の友を尋ねて、月を弄び風を嘲る。

(一) 獨自の心胸なり (二) 辛苦厭離する志 (三) 世俗のうるさき間に在り、之を厭ひて善く病むなり (四) 世俗を遠ざかりて病に伏するが故に一片の青山の世俗より遠く離れたる處に在るが如し (五) その清白なるをいふ (六) 兄弟たる者を分つは家を分ちて飲食を共にせざること (七) 璧の相合ふ際に住みても、遂には瓜を分つが如く心も分れ隔たるゝをいふ (八) 金錢の臭氣にて俗氣を帶ぶるをいふ (九) 心が身體の欲の爲に使役せらるゝこと (一〇) 馬牛の人に使役せらるゝが如く、世俗の奴隷なり (一一) かごの中に養はれたる鷄及び鶩の如く名に囚はれて超脱するを得ざること (一二) 懶は俗人の見ることをいやに思ふこと (一三) 權辭はその場だけのいつはりの辭令をいふこと、權辭を以て病氣に托して俗人を見ざるをいふ (一四) いつはりて本心ならざる行爲をなすと (一五) 襟や裾のある衣服を着たる馬牛の如く無智蒙昧なること (一六) 狗や彘の衣服を着、冠をつけたる如く人格的價値なきこと (一七) 道院は老子教の寺なり (一八) 裊々は嫋娜の貌、その聲のゆるやかにして細く長く響くこと (一九) 空門は佛寺なり (二〇)

奇觀。○秋風閉ㇾ戸。夜雨挑ㇾ燈。臥讀二離騷一涙下。舞日尋ㇾ芳。春宵載ㇾ酒。開歌二樂府一神怡。○雲水中載ㇾ酒。松篁裡煎ㇾ茶。豈必鑾坡侍ㇾ宴。山林下著ㇾ書。花鳥間得ㇾ句。何須二鳳沼揮ㇾ毫。○人生不ㇾ好ㇾ古。象鼎犧樽。變爲二瓦缶一。世道不ㇾ憐ㇾ才。鳳毛麟角。化爲二灰塵一。

要ㇾ做二男子一。須ㇾ負二剛腸一。欲ㇾ學二古人一。當ㇾ堅二苦志一。○風塵善病伏ㇾ枕處。一片青山。歲月

男子と做らんと要せば、須らく剛腸を負むべし。古人を學ばんと欲せば、當に苦志を堅くすべし。○風塵に善く病み枕に伏する處、一片の青山なり。歲月に長く吟じ觚を操る時、千篇の白雪なり。○親兄弟箸を析てば、壁合翻つて瓜分と作り、士大夫錢を愛せば、書香化して銅臭と爲る。○心形の役を爲せば、塵

吐きて詩を作ること （一〇）鐵笛は鐵を薄くして葉の如くして作りたる笛 （一一）清らかにその曲をめでて樂むこと （一二）離騷は楚の屈原の作る所、屈原讒を以て江南に放たれ作る所愁痛を極む故に涙下る （一三）樂府は古代樂器に合せて歌へる詩、神怡は我が精神の怡び樂しむこと （一四）唐の德宗翰林院を金鑾坡に移す、故に翰林院亦鑾坡と稱す。翰林院にて天子の酒宴に供するを要せざること （一五）鳳沼は即ち鳳凰池なり、禁苑中の池沼にて中書省の所在地なり、唐宋人の詩に、多くは鳳池を以て宰相を目せり、鳳凰池に於て筆を揮ひて文章を書くを要せずとなり （一六）象の形に似せ作りたる鼎、及犧（イケニヘ）牛に象りて作りたる酒樽、皆古代の寶器なり （一七）缶は土を燒きて作りたる瓦器酒を盛るもの、瓦缶共に賤しき物なり （一八）鳳凰の羽毛、麒麟の角皆得がたきの物、依りて得がたきの立派なる人才に喩ふ

塵。萬境之塵緣自息。悟入無懷境界。一輪之心月獨明。○霜天聞鶴唳。雪夜聽雞鳴。得乾坤清絕之氣。晴空看鳥飛。活水觀魚戲。識宇宙活潑之機。○斜陽樹下。閒隨老衲清談。深雪堂中。戲與騷人白戰。○山月江煙。鐵笛數聲。便成清賞。天風海濤扁舟一葉。大是

輪の心月獨り明かなり。○霜天に鶴唳を聞き、雪夜に雞鳴を聽けば、乾坤清絕の氣を得、(五)晴空に鳥の飛ぶを看、活水に魚の戲るゝを觀れば、宇宙活潑の機を識る。(六)○斜陽樹下、(七)閒ゝ老衲に隨ひて清談し、(八)深雪堂中、戲に騷人と白戰す。(九)○山月江煙、鐵笛數聲、(一〇)便ち清賞を成す、(一一)天風海濤、扁舟一葉、大に是れ奇觀なり。○秋風戸を閉ぢ、夜雨に燈を挑げ、臥して離騷を讀めば(一二)涙下る。霽日に芳叢を尋ね、春宵に酒を載せ、閒に樂府を歌へば(一三)神怡ぶ。○雲水中に酒を載せ、松篁裡に茶を煎る、豈必ずしも鑾坡に(一四)宴に侍せん。山林の下に書を著し、花鳥の間に句を得、何ぞ鳳沼に(一五)毫を揮ふを須ひん。○人生古を好まずんば、象鼎犧樽、(一六)變じて瓦缶と(一七)爲る。世道才を憐まずんば、鳳毛麟角、(一八)化して灰塵と爲る。

(一) 此身は永久に存在すること能はずして死して亡くることあるをいふ　(二) 世俗の功名富貴などの因緣なり　(三) 禪僧は無念無想にて世俗の功名富貴などを少しも心に懷はざること　(四) 我が眞心の光明は一輪の明月の明かなるが如し　(五) 天地のすぐれて清らかなる元氣を我身に得ること　(六) 生き〳〵と活動する自然の妙用　(七) 日の西方に傾きて斜なる夕方　(八) 世俗を離れたる佛法等の談話を爲す　(九) 騷人は風流の人、白戰は競爭して奇麗の句を

而留二有餘不盡之智一。可三以隄二防不測之事變一。○無事如二有事時一隄防。可三以彌二意外之變一。有事如二無事時一鎭定。可三以銷二局中之危一。○愛是萬緣之根。當レ知二割捨一。識是衆欲之本。要レ力二掃除一。○舌存常見二齒亡一。剛强終不レ勝二柔弱一。戶朽未レ聞二樞蠹一。偏執豈及二圓融一。○榮寵傍邊辱等待。不二必揚揚一。困窮背後福跟隨。何須二戚戚一。

たず、戸朽つれども未だ樞の蠹するを聞かざれば、(一一)偏執豈圓融に及ばんや。(一二)(一三)○榮寵(一四)の傍邊に辱等しく待つ、必ずしも揚揚たらざれ、(一五)困窮の背後に福跟隨す。(一六)何ぞ戚戚たるを須ひん。(一七)

(一) その事業の上に超然としてぬけ出でゝ、囚はれざること (二) 天下社會をはかり治むること (三) 社會を離れ出でゝ社會に囚はれざる心持ちなり (四) 猶は施すべき恩の餘裕ありて充分恩を與へ盡さゞること (五) 多くの恩を受けても猶滿足せざる欲深き人心をつなぎ留むるなり (六) 防ぎ止むること (七) 彌は彌縫にて意外の變を取りつくらひて間に合はせること (八) その事に當りたる危き事をも銷し滅すべきをいふ (九) すべての因緣の根本となること (一〇) 愛情を割きて取り捨つること (一一) 戸のくるゝを虫の食ふこと (一二) 一方にかたよりて固く執り守りて動かぬ頑固のこと (一三) 圓滿にしてよく融通のきゝて頑固ならざること (一四) 榮華にして寵愛を蒙ること、幸福の境遇なり (一五) 意氣揚々として盛なること (一六) 幸福がその後よりつき隨ひて至るをいふ (一七) 戚々は痛み愁むこと、其困窮をうたみ愁むの要なしと也

看二破有盡身一

有盡の身軀(一)を看破すれば、萬境の塵緣(二)自ら息む。(三)無懐の境界に悟入せば、一(四)

因明而生暗。故君子以恬養智。奮迅以求速者。多因速而致遲。故君子以重持輕。○有面前之譽易。無背後之毀難。有乍交之懽易。無久處之厭難。

權勢ある人に媚びて仰ぎ上るに喩ふ　一四　嚴格なる威風を有するに喩ふ　一五　魚鳥の風水によりて生くるが如く人に貪附すべからざるをいふ　一六　人の内情を伺ひ察して以て自ら明かに情を知ると爲すものをいふ　一七　恬は心安らかにして無欲なること　一八　氣を奮ひて迅く進むこと　一九　重々しくして輕率にせざること　二〇　我の後に在りて我の事をそしりて惡しくいふこと　二一　暫くの間交りて仲よくして歡び合ふこと　二二　久しく同處に在りて深く交りて永久に厭はるゝことなきをいふ

宇宙內事。要力擔當。又要善擺脫。不擔當則無經世之事業。不擺脫則無出世之襟期。○待人而留有餘不盡之恩。可以維繫無厭之人心。御事

宇宙內の事は、力めて擔當するを要す、又善く擺脫するを要す、擔當せざれば、則ち經世（一一）の事業なく、擺脫せざれば、則ち出世の襟期（一二）なし。○人を待つて有餘不盡の恩を留めば、以て饜く（一四）無きの人心を維繫（一三）す可し。事を御するに有餘不盡（一六）の智を留めば、以て不測の事變（一五）を隄防す可し。○無事に有事の時の如く隄防せば、以て意外の變を彌（一七）す可し。有事に無事の時の如く鎭定せば、以て局（一八）中の危を銷す可し。○愛は是れ萬緣（一九）の根、當に割捨（二〇）するを知るべし。識は是れ衆欲の本、力めて掃除するを要す。○舌存すれども常に齒の亡ぶるを見ば、剛強終に柔弱に勝

子不レ言レ命、養レ
性即所二以立一レ
命、亦不レ言レ天。
盡レ人自可二以
回一レ天。〇才智
英敏者、宜下以二
學問一攝中其躁上。
氣節激昂者、
當下以二德性一融中
其偏上。〇蒼蠅
附レ驥、捷則捷
矣。難レ辭二處レ後
之羞一。蘿蔦依レ
松、高則高矣。
未レ免二仰攀之
恥一。所以君子
寧以二風霜一自
挾、毋下爲二魚鳥一
親上レ人。〇伺察
以爲レ明者、常

融らすべし。〇蒼蠅(一〇)驥に附す、捷(一一)なるは則ち捷なり、後に處るの羞を辭し難し。蘿蔦(一二)松に依る、高きは則ち高し、未だ仰攀(一三)の恥を免れず。所以に君子は寧ろ風霜(一四)を以て自ら挾み、魚鳥(一五)と爲りて人に親む毋れ。〇伺察(一六)以て明と爲す者は、常に明に因りて暗を生ず。故に君子は恬(一七)を以て智を養ふ。奮迅(一八)以て速かならんことを求むる者は、多くは速に因りて遲を致す。故に君子は重(一九)を以て輕を持す。〇面前の譽あるは易く、背後(二〇)の毀なきは難し。乍交(二一)の懽あるは易く、久(二二)處の厭なきは難し。

(一) 自己の意見を執り守りてねぢけ心ある人 (二) その心圓滿融合して少しの圭角なき人、祿は幸福なり (三) 事を操りて作すにせつかちにて急ぐ人 (四) その壽命短くして年若くて死すること (五) その精神を修養して發展進歩せしむることは天命を固く信じて動かざる所以なり (六) 人事を盡せば天命を挽回して人意の如く改むるをいふ (七) その輕率の心を抑へて發せざること (八) 事に激してその氣の昂奮し易き性質の人 (九) 一方にかたよりたる處を圓滿融合してやはらげること (一〇) 蒼蠅は千里の馬の尾に附きて千里に達すること、人後に附して功名を建つるに喩ふ (一一) 捷は迅速のこと、迅速なることは迅速なれども、後に處るの羞あるをいふ (一二) つたかづらは松の木に依りかちまりて高き處に上る、此は人に依附して事を爲すに喩ふ (一三) 松の木につきて仰ぎて攀ぢ上ること、

可レ憐如レ此。○士人有二百折不レ回之眞心一。纔有二萬變不レ窮之妙用一。○立レ業建レ功。事事要下從二實地一著上レ脚。若少慕二聲聞一。便爲二僞果一。講レ道修レ德。念念要下從二虛處一立上レ基。若稍計二功效一。便落二塵情一。

送しむ、腹中に尺素の書ありといふ。又蘇武匈奴に在る時雁の足に帛書を結びて之を送れることあり、依りて書札のことを雁足といふ（六）嵇康は手紙を作らず（七）殷先も手紙を書かずして口づから之を宣べ傳ふ（八）汝南先賢傳に葛元大魚を賣る者を見丹書を以て魚の口中に納れ水中に擲つ、頃くありて魚躍りて岸に上り墨書を吐く青黒色にして木葉の如く飛び去れりとあり（九）陳秦は三國時代の魏の人にて他より來りたる書簡を壁に掛けたり（一〇）宛然はためらひてあるさま、宛然として樹を戀ひてしばらく附着して落ちざるをいふ（一一）籠を離れて自由を得るは殺さるゝ時なりの意にて「除」の字或は「際」に作るべきか（一二）百たび挫折しても屈撓せざること（一三）幾多の變化に應じて窮ることなきをいふ（一四）自己の名譽の世に聞ゆること、所謂名譽心なり（一五）その結果は有害偏にして眞實の結果ならざること（一六）虛處は無我無欲の處、功効を計るの念なきこと（一七）俗人の心情なり

執拗者福輕。而圓融之人。其祿必厚。操切者壽夭。而寬厚之士。其年必長。故君

執拗の者は福輕く、而して圓融の人は其祿必ず厚し、操切の者は壽夭し、而して寬厚の士は其年必ず長し。故に君子は命を言はず、性を養ふは即ち命を立つる所以なり。亦天を言はず、人を盡せば自ら以て天を回す可し。○才智英敏の者は、宜しく學問を以て其躁を攝すべし。氣節激昂の者は當に德性を以て其偏を

窮通之境未ㇾ遭。主持之局已定。老病之勢未ㇾ催。生死之關先破。求二之今世一。誰堪ㇾ語ㇾ此。○一紙八行。不ㇾ過二寒溫之句一。魚腹雁足。空有二往來之煩一。是以嵇康不ㇾ作。嚴光口傳。豫章擲二之水中一。陳泰挂二之壁上一。○枝頭秋葉。將ㇾ落。猶然戀ㇾ樹。檐前野鳥。除ㇾ死。方得ㇾ離ㇾ籠。人之處ㇾ世。

窮通（一）の境未だ遭はずして、主持（二）の局已に定まり、老病の勢未だ催さずして、生（三）死の關先づ破る、之を今世に求むるに、誰か此を語るに堪ふる。○一（四）紙八行、寒溫の句に過ぎず、魚腹雁足（五）、空しく往來の煩あり、是を以て嵇康（六）作らず、嚴光（七）口傳し、豫章（八）之を水中に擲ち、陳泰（九）之を壁上に挂く。○枝頭の秋葉將に落ちんとして、猶然（一〇）として樹を戀ひ、檐前の野鳥（一一）死に除して、方に籠を離るゝを得。人の世に處する、憐む可きこと此の如し。○士人百折（一二）回らざるの眞心ありて、纔に萬變（一三）窮らざるの妙用あり。○業を立て功を建つるには、事事實地より脚を著くるを要す、若し少しくも聲聞（一四）を慕へば便ち僞果（一五）と爲す、道を講じ德を修むるには、念念虛處（一六）より基を立つるを要す、若し稍〻功効を計れば、便ち塵情（一七）に落つ。

（一）窮は困窮して通ぜざること、通は通達して意の如くなること　（二）平生主張し抱持する局面の一定して變ぜざること　（三）生死に關する限界を看破して少しも迷ふ所なきをいふ　（四）一紙に八行も認めたる手紙は寒暖の挨拶を爲すの文句を述ぶるに過ぎざること　（五）魚腹雁足は手紙のこと、古人遠方より來り双鯉を遺る、童を呼びて鯉を

要㆑懷㆓廊廟的經綸㆒。○學者有㆓段競業的心思㆒。又要㆑有㆓段瀟洒的趣味㆒。○平民肯種㆑德施㆑惠便是無位的卿相。仕夫徒貪㆑權市㆑寵竟成㆓有爵的乞人㆒。○煩惱場空身住㆓清涼世界㆒。營求念絕心歸㆓自在乾坤㆒。○覷㆓破興衰究竟㆒人我得失氷消。閱㆓盡寂寞繁華㆒豪傑心腸灰冷。○名衲談㆑禪。必執㆑經上㆑座。便滅㆓三分禪理㆒。

竟を覷破せば(一六)、人我の得失氷消せん(一七)、寂寞繁華を閲し盡せば、豪傑の心腸灰冷せん(一八)。○名衲禪を談ずるに(一九)、必ず經を執りて座に上れば、便ち三分の禪理を滅ぜん(二〇)。

(一) 雁塔は唐の玄奘の立つる所、相傳ふ塔を建つる時雁あり過ぎ、墮つ塔に葬む、故に名づく (二) 闕を失ふは失敗すること (三) 軒は大夫の乘る車、冕は禮服の時の冠なり、朝廷に仕へて高官となること (四) 山林に隱遁して一世に超越するが如く俗氣を離るゝこと (五) 山林泉水の中に世を遁れて隱るゝこと (六) 朝廷に仕へて官吏となり天下を治むるの政策を懷き持つこと (七) 段は一段なり、戒め愼み恐懼してまじめに勉勵すること (八) さつぱりとして世を離れて俗氣なき趣味あること (九) 卿相の地位なきも卿相の地位あるものと同じ價値を有すること (一〇) 君の寵を受けたるを人に見せびらかして驕り高ぶること (一一) 爵位を有するもその卑劣なること乞人と同じきをいふ (一二) 煩惱は佛語種々の欲心のこと (一三) 清らかにして涼しき世界に住むが如く心淸々としてさつぱりとしたること (一四) 色色の物を得んとして計畫して求むること (一五) 乾坤は天地なり、自由自在の天地に落ちつきて在るが如し (一六) 人生の或は興り或は衰ふる最後の處を見透して知ること、覷破は看破と同じ (一七) 權勢富貴を得、權勢富貴を失ふを以て憂樂とするの念の消え失するをいふ (一八) 冷かなる灰の如く功名富貴の念の消滅するをいふ (一九) 衲は僧衣、有名なる高僧をいふ (二〇) 禪理は不立文なり、然るに經を執るが故に三分の禪理を減ずるの感あるなり

斂レ色。議論如何。飄颻拂レ渚。○有二大過一。必有二大器一。無二奇遇一。必無二奇窮一。○霧滿二楊溪一。玄豹山間借二日月一。雲飛二翰苑一。紫龍天外借二風雷一。

すつむじ風の渚を吹き拂ふが如く當るべからざるの議論をいふ（一六）思ひがけなく幸福に相遇ふこと（一七）思ひがけなく困窮の境遇に陷ること（一八）楊溪は地名（一九）玄豹は黑色の豹、列女傳に南山に玄豹あり霧雨の時は七月下り食はずその毛を光澤にし其文采を成さんとし藏れて以て害を避くとあり、此は霧が楊溪に滿つる時は玄豹山間に藏れてその文采を成さんとするが如く、名を成さんとすれば先づ德を成さゞるべからざるに喩ふるか（二〇）翰苑は翰林なり

西山霽レ雪。東岳含レ煙。駕二鳳橋一以高飛。登二雁塔一而遠眺。○一失レ脚爲二千古恨一。再回レ頭是百年人。○居二軒冕之中一。不レ可レ無二山林的氣味一。處二林泉之下一。須レ

西山雪霽れて東岳煙を含む、鳳橋に駕して以て高く飛び、雁塔（二一）に登りて遠く眺む。○一たび脚（二二）を失へば千古の恨を爲し、再び頭を回せば是れ百年の人たり。○軒冕（二三）の中に居りて、山林的氣味（二四）無かる可からず、林泉（二五）の下に處りて、須らく廊廟的經綸（二六）を懷くを要すべし。○學者は段（二七）に兢業的心思あり、又段に瀟洒的（二八）趣味有るを要す。○平民肯て德を種ゑ惠を施すは、便ち是れ無位的卿相（二九）、仕夫徒らに權を貪り寵（三〇）を市るは、竟に有爵的乞人（三一）と成らん。○煩惱（三二）の場空しければ、身は淸涼世界（三三）に住す、營求（三四）の念絕えば、心は自在の乾坤（三五）に歸す。○興衰の究

花九品一。鑠金舌上。容二他鸚鵡千言一。○少二言語一以當レ貴。多二著述一以當レ富。載二淸名一以當レ事。咀二英華一以當レ肉。○竹外窺レ鶯。樹外窺レ水。峰外窺レ雲。難レ道二我有意無意一。鳥來窺レ人。月來窺レ酒。雪來窺レ書。却看二他有情無情一。○體裁如何。出月隱レ山。情境如何。落日映レ嶼。氣魄如何。收露

當つ。○竹外に鶯を窺ひ、樹外に水を窺ひ、峰外に雲を窺ふ、我が有意無意を道ひ難し。(一〇)鳥來りて人を窺ひ、月來りて酒を窺ひ、雪來りて書を窺ふ、却つて他の有情無情を看る。(一一)○體裁如何、出月山を隱す、(一二)情境如何、落日嶼に映ず、(一三)氣魄如何、收露色を斂む、(一四)議論如何、迴飈渚を拂ふ。(一五)○大通あれば必ず大塞あり、(一六)奇遇なくんば必ず奇窮なし。(一七)○霧、(一八)楊溪に滿ちて、玄豹山間に日月と偕にす、(一九)雲、輪苑に飛びて、(二〇)紫龍天外に風雷を借る。

(一) 達人は事物の理によく通達せる士、懸崖は切り立ちたる、峭はしきがけにて危險に喩ふ (二) 小人は理に通達せざるつまらぬ人 (三) 銷骨は讒言の害の烈しきことと人の骨までも銷すが如きなり (四) 妙法蓮華經に九品あり、皆佛教の妙理を說けり、讒言者が巧に讒言を作り出すに喩ふ (五) 鑠金は銷骨と同じく讒言のこと、その害の鑠金をも鎔かすよりいふ (六) 鸚鵡よく人の言を眞似す、讒言者がよく人の言を眞似して述ぶるに喩ふ (七) 言語の少きを以て貴き地位の如く貴きことと思ふなり (八) 多くの著述を爲して以て富者が多くの金を有すると同じく思ふなり (九) 英華は花の英ひでて美しきこと、書物のすぐれて美しき所を咀嚼する意か (一〇) 我に意ありて窺ふとも意なくして窺ふとも言ひがたく有意無意の間に在るなり (一一) 他の鳥月等の情ありて窺ふか情なくして窺ふかを看るなり (一二) 東山の上より出でたる月の山を隱すが如きの體裁は尤も妙なる所あるをいふ (一三) 海に落つる月の島嶼にうつるが如き情境尤も妙なり (一四) 露收まりて色亦斂まりて現さゞるが如き氣魄尤も妙なり (一五) 吹き廻は

爲ニ海行狂夫一。不レ作ニ厚顏君子一。○觀ニ人題レ壁。便識ニ文章一。○寧爲ニ眞士夫一。不レ爲ニ假道學一。○寧爲ニ蘭摧玉折一。不レ作ニ蕭敷艾榮一。○隨レ口利レ牙。不レ顧ニ天荒地老一。不レ飜レ腸倒レ肚。那管ニ鬼哭神愁一。

○身世浮名。余以ニ夢蝶一視レ之。斷不下受ニ肉眼一相看上。

優遊する意（三）奇拔なる議論を吐き出して人を驚かすも不可なきをいふ（四）吾が心の本來は戯を作すに在らざるも場處によりては戯を作すも可なりとの意（五）俗人は凡俗の人、つまらぬ俗人風の心を放ち去りて取除けば男子といふを得べきなり（六）道を悟り得て徹底したる人（七）足は過ぐるなり、足恭は恭敬に過ぐること（八）薄行は事を熟知すれども能く之を行はざる薄志の人（九）厚顏は厚かましく恥を知らざる行を爲すること（一〇）道學は道徳義理を修むる學者、表面は道學者にして内實は之に反するもの（一一）蘭の摧け、玉の折れ碎かるゝことにて立派なる人となりて死すること（一二）蕭艾共にヨモギ、蕭艾の廣がり榮えること、つまらぬ劣等の人となり榮ゆるをいふ（一三）牙は齒のこと、口にまかせ齒を利用して言はんと欲する所をいふこと（一四）天荒は劉蛻の故事、進士の試驗に及第せざること、此は我が言論に因りて進士の試驗に及第せざるも顧みざるの意なり（一五）胸中に有する思想を悉く吐き出して文章を作ること（一六）我が文章の妙に驚きて鬼神愁ひて哭することあるも我の關する所にあらずとの意（一七）莊周が夢に胡蝶となりたるが如く實有のものとせざるを云ふ（一八）實際世に存在するものとして看ざるをいふ

達人撒ニ手懸崖一。俗子沈ニ身苦海一。○銷骨口中。生ニ出蓮

(一)達人は手を懸崖に撒し、(二)俗子は身を苦海に沈む。○(五)銷骨の口中、(四)蓮花九品を生出す、(三)鑠金の舌上、他の(六)鸚鵡千言を容る。○(七)言語を少くして以て貴に當て、(八)著述を多くして以て富に當て、淸名を載せて以て事に當て、(九)英華を咀みて以て肉に

忠孝吾家之寶。經史吾家之田。○閒到白頭眞是仙。醉逢靑眼不知狂。○興之所到。不妨嘔出驚人。心故不然。也須隨場作戲。○放得俗人心下。方可爲丈夫。放得丈夫心下。方名爲仙佛。放得仙佛心下。方名爲得道。○吟詩劣於講學。罵座惡於足恭。兩而揆之寧

忠孝は吾家の寶、經史は吾家の田なり。○閒、白頭に到れば眞に是れ仙、醉、靑眼に逢へば狂を知らず。○興の到る所は、嘔き出して人を驚かすを妨げず、心故と然らざるも、也た須く場に隨ひ戲を作すべし。○俗人の心を放ち得て下せば、方に丈夫と爲す可し。丈夫の心を放ち得て下せば、方に名づけて仙佛と爲す。仙佛の心を放ち得て下せば、方に名づけて得道と爲す。○吟詩は講學に劣り、座を罵るは足恭より惡し、兩つにして之を揆るに、寧ろ薄行の狂夫と爲るとも、厚顏の君子と作らず。○人の壁に題するを觀て、便ち文章を識る。○寧ろ眞の士夫と爲るも、假の道學と爲らず。○寧ろ蘭摧玉折爲らんも、蕭敷艾榮と作らず。○口に隨ひ牙を利して、天荒地老を顧みず、腸を翻し肚を倒にす、那ぞ鬼哭神愁を管せん。○身世の浮名は、余夢蝶を以て之を視、斷じて肉眼に受けて相看ず。

㊀ 經書及び歷史は吾家の田地に於けるが如く必要にして缺くべからざるもの　㊁ 靑眼は好意を以て人を迎へて

今天下皆婦人矣。封疆縮二其地一。而中庭之歌舞猶喧。戰血枯二其人一。而滿座之貂貚自若。我輩書生。既無二誅レ亂討レ賊之柄一。而一片報國之忱。惟于二寸楮隻字間一見レ之。使三天下之鬚眉而婦人者。亦聳然有二起色一。集二峭第三一。

卷三

峭

今の天下皆婦人なり。(一)封疆其地を縮め、而して中庭(二)の歌舞猶ほ喧し、戰血其人を枯らし、而して滿座の貂貚(三)自若たり。我輩書生は、既に亂を誅し賊を討つの柄なし。而も一片報國の忱(四)、惟寸楮隻字(五)の間に于いて之を見はし、天下の鬚眉(六)にして婦人なる者をして亦聳然(七)として起色あらしめん。峭第三を集む。

(一) 其國の領土侵略せられてその地を縮小すること (二) 國家を憂ふるの念あることなく庭中に於て歌を倡へ舞を舞ふ聲の喧しきをいふ (三) 貂貚は冠の飾なり、冠に貚を附け挿むに貂の尾を以てす、冠を着けたる貴人の遊蕩故の如くにして國事を憂へざるをいふ (四) 忱は誠心 (五) 小さき紙、少しの文字 (六) 鬚眉ある男子にしてその心は婦人の如く軟弱なるもの (七) ぞつとして懼れ謹み奮ひ起ちて事を爲すをいふ

落涙題㆓愁字㆒
帶㆑痕紅。○無㆑
端飲却相思
水。不㆑信相思
想㆓殺人㆒。○漁
舟唱㆑晩。響窮㆓
彭蠡之濱㆒。雁
陣驚㆑寒。聲斷㆓
衡陽之浦㆒。○
爽籟發而淸
風至。纖歌凝
而白雲遏。○
杏子輕紗初
脫㆑暖、梨花深
院自多㆑風。

しきに過るほどなりとの意、寒香は梅花の香なり 〔三〕 氷肌は梅花に喩ふ、梅花の珠玉の質に蔵せらるゝが如く美しきが上に猶美しきをいふ 〔四〕 紅衣を衣たる美女が美しき男子を待遇するに勝るをいふ、梅花の美女に勝るをいふなり 〔五〕 從教は(サモアラバアレ)と訓ず、さはまゝよ卽ち此の如きことあるも吾は悶せずの意、酒を飲みて春衣の上にこぼれて春衣をけがすともそれは顧みずとなり 〔六〕 飄殺は飄にてながめまはすこと、水殺の流るゝが如きをいふ 〔七〕 風の吹く聲を聽いて風流の思を起し鶴の啼く聲を聞いて風雅の思想を動かすをいふ 〔八〕 莊生は莊周にて莊子逍遙遊の篇を作り一生意のまゝにして愉快に生を送れり 〔九〕 向子は向秀なり、向秀は西晉の人、嵇康呂安と友とし善し莊子を注し奇致を發明す淸白にして曠達の人なり 〔一〇〕 燈火は燃ゆるに隨て細き花の如くなり遂には稻の穗の形なして落つ 〔一一〕 涙の中には愁の字を題す、卽ち愁ひ起しむよりして涙を流し、その涙には愁の痕跡ありて紅色を爲す、此は愁の爲に紅涙を流すをいふ 〔一二〕 相思は、男女相思戀するの情なり、わけもなく男女相思ふの情をいだくこと 〔一三〕 想殺は、深く相思ふの極思ひ死にする意、相思の情が人を想殺することを爲せずとなり 〔一四〕 彭蠡は湖の名、今の江西省の鄱陽湖なり、漁夫が夕方舟歌を歌ひ遠きが如く近きが如くその響は彭蠡湖のほとりに至ること 〔一五〕 雁の列をなして飛ぶこと 〔一六〕 衡陽は今の湖南省衡山縣の北にあり、群れ行く雁は寒さに驚きて或は横に或は斜になり、その聲は衡陽の浦邊に至りて斷ゆること 〔一七〕 爽快なる人の聲卽ち爽なる歌をいふ 〔一八〕 女子の歌ふ歌をいふ、歌が盛んにして空行く白雲も之が爲めに遏まりて動かず 〔一九〕 杏の子は輕くうすき綾紗を衣て初め暖氣を脫したる夏の初に變するをいふ 〔二〇〕 梨花は深き院に在るが自然に風致多し

請來二香帷一。○斜看雨鬢垂。儀似二行雲嫁一。

欲下與二梅花一鬪中寶粧上先開二嬌艷一逼二寒香一。只愁氷骨藏二珠屋一。不レ似三紅衣待二玉郎一。○從教弄レ酒春衫浣別有三風流上二眼波一。○聽二風聲一以興レ思。聞二鴻唳一以動レ懷。企二莊生之逍遙一。慕二向子之清曠一。○燈結二細花一成レ穗

うて離れざるをいふ 一一 蜀にて作れる紙に詩を題して愁を慰めんとするも愁は浣ひ去りがたきをいふ 一二 巴山の話も古くさくして珍しからずの意、巴東三峽の話なり 一三 盈々は美しく形づくると 一四 愁ひ悲しむの情の後より隨ひ起りて已まざること 一五 香しき帷帳にて女子の居る部屋の中をいふ 一六 兩つのまげを垂れたるが如く見ゆること、此は山の形容なるべし

梅花と(一)寶粧を鬪さんと欲し、先づ(二)嬌艷を開いて寒香に逼る。只愁ふ(三)氷骨の珠屋に藏せらるゝを。(四)紅衣の玉郎を待つに似ず。○(五)從教あれ酒を弄し、春衫の浣るゝを。別に風流の(六)眼波に上るあり。○(七)風聲を聽いて以て思を興し、鶴唳を聞いて以て懷を動かし、(八)莊生の逍遙を企て、(九)向子の清曠を慕ふ。○(一〇)燈は細花を結び穗を成して落ち、(一一)淚は愁字を題し痕を帶びて紅なり。○端なく飲却す(一二)相思の水、信せず相思の人を(一三)想殺するを。○漁舟晩に唱へて、響は(一四)彭蠡の濱を窮め、(一五)雁陣寒に驚きて、聲は(一六)衡陽の浦に斷ゆ。○(一七)爽籟發して清風至り、(一八)纖歌凝りて白雲過まる。○(一九)杏子は輕紗初めて煖を脫し、(二〇)梨花は深院自ら風多し。

一 美しく粧飾したるその美は梅花の美と競爭するばかりなりとの意 二 たをやかにして美しき色香は梅花の香

鴛鴦泥レ睡凝。○紅印二山痕一春色微。珊瑚枕上見二花飛一。烟鬟濛亂香雲濕。疑向二襄王夢裡一歸。○零亂如レ珠爲點レ粧。素輝乘レ月濕二衣裳一。只愁天酒傾如レ斗。醉二却環姿一傍二玉牀一。○有三魂隨二落葉一。無三骨鎖二連鬟一。○書題二蜀紙一愁難レ浣。雨歇巴山話亦陳。○盈盈相隔愁追隨。誰爲解レ

して春色微なり。(四)珊瑚枕上花の飛ぶを見る。(五)烟鬟濛亂して香雲濕ふ。疑ふらくは(六)襄王夢裡に向つて歸るかと。○(七)零亂珠の如く爲めに粧を點ず。(八)素輝月に乘じて衣裳を濕し、只愁ふ(九)天酒傾くること斗の如く、(一〇)環姿を醉却せしめて玉牀に傍ふ。○魂の落葉に隨ふあり、骨の連鬟を鎖す無し。○書は(一一)蜀紙に題して愁浣ひ難く、雨歇みて(一二)巴山の話亦陳なり。○(一三)盈盈として相隔つれども愁(一四)追隨し、誰が爲めに語を解して(一五)香帷に來る。○斜に看れば(一六)兩鬟垂れ、翩として行雲の嫁するに似たり。

(一) 香餌を愛して之を損んとするが爲めに人に捕られて死すること (二) 鴛鴦は常に水上に睡りて水を離れず、故に癡にして禍を知らず (三) 紅は紅色の春花なり、紅花山上に咲き亂れて山に痕跡を殘して春の景色も衰へたるをいふ (四) 珊瑚を以て飾れる美人の枕のあたり落花の飛ぶをいふ (五) 烟の如きもやのかゝりたる山の青き色の入り亂れて香しき雲の雨を帶びて濕ふと (六) 楚の襄王のこと、襄王巫山の神女を夢に見たる故事前に出づ、楚の襄王の夢見たる中に向つて雲の巫山に歸るをいふ (七) 花の落ち亂れて飛ぶこと珠玉の如く爲に美しく粧ひ飾りたるが如くなるをいふ (八) 素輝は白く輝ける月をいふ (九) 天酒は美しき甘露なり、此は天より降らする露の斗を傾くるが如く多くあるをいふ (一〇) 環姿は環の如き美しき容貌、美人を醉はしめて玉を以て飾れる牀のあたりにより傍

覺換二得更深一
鳥越催。○花
飛二簾外一憑レ牋
訊。雨到二窓前一
滴レ夢寒。○檣
標遠漢。昔時
魯氏之戈。帆
影寒沙。此夜
姜家之被。○
塡レ愁不レ滿吳
娃井。剪レ紙空
題蜀女祠。○
良緣易レ合。紅
葉亦可レ爲レ媒。
知己難レ投。白
璧未レ能レ獲レ主。
○塡二平、湘岸一
都栽レ竹。截二住
巫山一不レ放レ雲。
鴨爲レ憐レ香死。

て雲を放たず。

(一) 水上に泛べるうき草の上を吹きわたる風未だ冷かならずとは秋に至らざるをいふ、言は秋に至らずして霜露の別るゝを催すなり (二) 沈香檀香を入るゝ合子、合子は物を盛る器、蓋ありて開合すべし故に合子と名づく (三) 愁ふる情の千々に亂るゝこと千絲の亂るゝが如きをいふ、歡闘は絲の闘りは歡闘の大さあること、愁の多きに喩ふ (四) 一片の沈香檀香の香の氣の殘れる痕は終に半節あるのみ (五) 娃は美女なり、重ねて美女の鬟の毛の綠色をなせるを看るに忍びず (六) 衫は單衣なり、黃衫は唐時少年のものゝ着る華服なり、此は黃衫の服を着たる俠客に逍ふを期する意 (七) 金錢をそばに侍べる女兒に賜ひ、暗に侍兒に言ひふくめて話すことを休めしむるなり (八) 薄き霧が幾重も重なりてたなびくこと (九) 風景の好き山が歡を知らず多く江水を渡りて見はれ來るをいふ (一〇) 輪は月なり、月を見れば將に秋にならんとして動ける蟲は先づ秋の來りたるを覺り知るをいふ (一一) 夜の深け行くに從ひ蟲の聲に換へて鳥の鳴く聲の催すをいふ (一二) 牋は手紙のこと、花は簾の外に飛び來り手紙によりてその容子を訊ひ尋ぬるをいふ (一三) 雨は窓前に到りて夢の中に滴りて寒きをいふ (一四) 檣のさきが遠き天河に達する程高く立てること (一五) 魯陽公韓と難を構へ戰酣にして日暮る、戈を援りて之を麾けば日之が爲めに反ること三舍なりといふ (一六) 舟の帆の影の寒沙に映じたる景色なり (一七) 漢の姜肱性孝友にして兄弟被を同じくして寢ぬ (一八) 吳娃は吳地の美女、愁を塡めても吳の美人の投じたる井中に滿たず (一九) 紙を剪りて空しく蜀女を祀れる神祠に題すとなり (二〇) 紅葉に詩を題して結婚の媒酌とせし故事による (二一) 湘水の川岸を塡めて平地とす、湘潭の浸多く竹を蒔す (二二) 巫山に住居して他に移らざるの意永住して巫山の雲を放たず去らしめざるをいふ

鴨(一)は香を憐むが爲めに死し、鴛(二)は睡に泥むに因りて癡なり。○紅(三)は山痕に印

將姉妹叢中避。多愛湖山僻處行。○未知枕上曾逢女。可認眉尖與畫郎。

一對の句意明確ならず、後考を俟つ

蘋風未冷催鴛別。沈檀合子留双結。千縷愁絲只數圍。一片香痕纔半節。○那忍重看娃鬢綠。終期一遇客衫黃。○金錢賜侍兒。暗囑教休話。○薄霧幾層推月出。好山無數渡江來。○輪將秋動蟲先

蘋風未だ冷かならず鴛の別れを催し、沈檀合子双結を留め、千縷の愁絲只數圍、一片の香痕纔に半節。○那ぞ重ねて娃の鬢の綠を看るに忍びん。終に一たび客の衫の黃に遇ふを期す。○金錢は侍兒に賜ひ、暗に囑して話を休めしむ。○薄霧幾層月を推して出で、好山無數江を渡りて來る。○輪は將に秋ならんとして動蟲先づ覺り、更の深くるに換へ得て鳥越催す。○花は簾外に飛びて船に憑りて訊ひ、雨は窓前に到りて夢に滴りて寒し。○檣標遠淡は、昔時魯氏の戈にして、帆影寒沙は、此夜姜家の被なり。○愁を塡めて滿たず吳娃の非、紙を剪りて空しく題す蜀女の祠。○良緣合ひ易く、紅葉亦媒と爲すべし。知己投じ難く、白璧未だ主を遇ること能はず。○湘岸を塡平して都て竹を栽ゑ、巫山に截住し

新製連篇。寧止葡萄之樹。○青牛帳裡、餘曲既終。朱鳥窓前。新粧已竟。○西蜀豪家。託情窮于魯殿。東臺甲館。流詠止于洞簫。○醉把盃酒。可以呑江南吳越之清風。拂劍長嘯、可以吸燕趙秦隴之勁氣。○林花翻酒。乍飄颺于蘭皐。山禽囀響。時弄聲于喬木。○長

嘯すれば、以て燕趙秦隴の勁氣を吸ふべし。○林花翻洒して(一一)、乍ち蘭皐(一二)に飄颺し、山禽(一三)の囀響、時に聲を喬木に弄す。○長へに(一四)姉妹叢中を將ちて避け、多く湖山(一五)の僻處を愛して行く。○未だ枕上嘗て逢ふの女を知らず、眉尖(一六)を認めて與に郞を畫くべし。

(一) 休文は孔顗の字、晉代の人なり、腰痩せたるを以て羅を以て作れる帶の寬やかなるなり (二) 賈女は晉の賈充の女なり、賈女も亦痩せ衰へて蛾眉の如き眉の常に愁に鎖されてしめり勝ちなるを以て鏡に照らすを厭ふなり (三) 瑠璃を以て作れて硯の匣を終日吾が身に隨へて文章を作るをいふ (四) 翡翠は鳥の名雄を翡といひ、雌を翠といふ、その羽を以て裝飾したる筆をかくる文具なり (五) 清新なる文章の篋中に滿つるの樂は惟芍藥の花の美麗なる樂のみならずそれ以上に樂むべきなり (六) 新に作りたる詩文は篇を連ねて多きは、葡萄の實を結びて累々として連れるよりも多きをいふ (七) 西蜀の豪富の家（未詳）は情にかゞけて魯の靈光殿を窮めたるをいふ (八) 東臺は王侯の第宅、甲館は第宅中に甲乙等の館あり、王侯の第宅に於て詩を詠じ之を洞簫の聲に託して止めたるなり (九) 醉ひて盃を擧げて酒を飲めば揚子江の南の吳越の清風を呑むの氣槪あり、吳越の地はその氣清麗なり (一〇) 劍を揮ひて長く嘯き吟ずれば燕趙秦隴の强き氣風を吸ひ込むの氣槪あり、燕趙秦隴の地方其氣豪勇にしてつよし (一一) 花のひるがへり落つること水を洒ぐが如きなり (一二) 蘭の生ずる田圃の中にひるがへること (一三) 山鳥の囀づる聲が時に大木の上に弄せらるゝことあるなり (一四) 長く女子の羣中に入りて世を避け隱るゝをいふ (一五) 多くは湖あり山ある邊鄙の地の風景を愛して行きて世を避け隱るゝをいふ (一六) 眉尖はまゆの先の尖りたる所をいふ、

管遊。○幽賞未已。高談轉淸。開瓊筵以坐花。飛羽觴而醉月。○琵琶新曲。無待石崇。箜篌雜引。非因曹植。得數琴子楊家。得吹簫子秦女。

歌を唱ふをいふ（二〇）二十五郎は多數の男子をいふ、昔は多數の男が笛を吹いて歌曲を謠ふなり（二一）靜かに花の美をめづること未だ已まざるなり（二二）高尚なる談話はいよいよ淸きなり（二三）瓊の如き美しき酒宴の席を開きて花の中に坐すること（二四）鳥の形に摸したる杯なり、杯を飛ばして酒を飲み月の照す處に醉ふをいふ（二五）石崇は晉代の人、家大に富み金谷の別莊を開き奢侈を極む（二六）箜篌は樂器の名、雜引は曹植の作る所なりといふ、我國に謂ふ所の百濟琴なり、箜篌をとりまぜて奏するをいふ（二七）曹植は、魏の曹操の子、もく文學に長じ箜篌引を作る（二八）以下の二句既に前に出づ

休文腰瘦。羞驚羅帶之頽寬。賈女容銷。懶照蛾眉之常鏡。○琉璃硯匣。終日隨身。翡翠筆牀。無時離手。○淸文滿篋。非惟芍藥之花。

（一）休文腰瘦せて、羅帶の頽に寬なるに驚くを羞ぢ、（二）賈女容銷えて蛾眉の常に鏡すを照すに懶し。○（三）琉璃の硯匣、終日身に隨へ、（四）翡翠の筆牀、時として手を離す無し。○（五）淸文滿篋、惟芍藥の花のみに非ず。新製連篇、寧んぞ止だ葡萄の樹のみならん。○靑牛の帳裡、餘曲既に終り、（六）朱鳥の窓前、新粧已に竟る。（重出）○（七）西蜀の豪家、情に託して魯殿を窮め、（八）東臺の甲館、詠を流して洞簫に止む。○醉うて（九）盃酒を把れば、以て江南吳越の淸風を呑むべし。（一〇）劍を掃ひて長

高。巫山低。莫雨瀟瀟郎不レ歸。空房獨守時。○青娥皓齒別二吳倡一。梅粉粧成半額黃。羅屏繡幔圍二寒玉一。帳裏吹レ笙學二鳳皇一。○初彈如レ珠後如レ縷。一聲兩聲花雨。訴盡平生雲口心。盡是春花花月語。○春嬌滿眼睡二紅綃一。掠二削雲鬟一旋粧束。飛上二九天一歌一聲。二十五郎吹レ

一聲。（二〇）二十五郎管を吹いて逐ふ。○幽賞（二一）未だ已まず、高談（二二）轉た淸し。瓊筵（二三）を開いて以て花に坐し。（二四）羽觴を飛ばして月に醉ふ。○琵琶の新曲、（二五）石崇を待つ無く、箜（二六）篌雜引す、（二七）曹植に因るに非ず、（二八）鼓瑟を楊家に傳へられ、吹簫を秦女に得。

（一）多韻は風流のおもむきの多くあること　（二）美人が風雅のおもむきを山水や花月を借りて多韻なるにあらず　（三）山水花月自然の美は美なれども情なし、美人は美にして情あり、故に山水花月美人を借れば多韻なるを覺ゆるなり　（四）花のこみ合ひて多くつける枝を深花の枝といふ、淺花は花の少き枝なり　（五）巫山の神女のこと前に出づ　（六）日暮頃の雨しよぼしよぼとして降りしきる時、夫は歸り來らず、只妻のみ空房を守る　（七）男子あらずして女子のみ閨室にあること、空房を獨り守るの時　（八）青娥は青黑き蛾眉の如き眉をなせる美女のこと　（九）皓齒は白き齒のこと、此は容貌の美なるをいふ　（一〇）吳の國に居る倡婦とは異なる所あるをいふ　（一一）梅花の如く美しく粧ひ飾ること、宋武帝の女壽陽公主、人日簷下に臥す、梅花額上に落ち五色の花を出す、號して梅花粧と爲す　（一二）薄絹を以て作れる屏風、縫ひ模樣のある幔幕、寒玉は淸冷なる玉の如き女子に喩ふ　（一三）一聲兩聲斷續する處は花の雨に逢ひて落つるが如きをいふ　（一四）初め琴を彈ずるときは珠を轉ずるが如く後には餘韻絕えんとして絕えざること縷の如く長く引きつゞくをいふ　（一五）巫山の神女が雲となり雨となりて相思ふが如く平生相思ふの情を訴へ盡すをいふ　（一六）その語る所は盡く是れ春の花秋の月を詠ずる語にして此中無限の趣味あり　（一七）春嬌は、なまめかしき美女をいふ、紅綃は紅色の絹（アヤギヌ）を以て作れる帷帳なり、美女が多く紅綃の中に睡るをいふ　（一八）雲の如き靑黑き髮をくしけづりて裝飾すること　（一九）九天は九重の宮中を指す、美女が宮中に入りて

輕ニ柳絮ノ。閨中寂寞。一窓夜雨痩ニ梨花ノ。芳草歸遲。青驄別易。多情成レ戀。薄命何嗟。要亦人各有心。非レ關ニ女德善惡ノ。

嗟兮嗟兮如汝何と 一五 楊朱岐路を見て哭す、その以て南すべく、以て北すべきを以てなり、岐路は路の分れたるもの 一六 晉の阮籍山に登り水を玩び竟日歸るを忘れ、途窮するに至る每に輒ち慟哭して反る 一七 離世のことを後より追ひて思ひ出づること 一八 なげき痛む心を起すこと 一九 陌は日中往來の道なり 二〇 絮の花の絮の如き白きものを輕く吹き飛ばすこと 二一 閨中はねやの、をいふ 二二 梨花の落ち散りて少くなること 二三 青驄は馬の青白色の者なり 二四 運命の薄きことは嗟くを要せざるなり

山水花月之際。看ニ美人ノ。更覺ニ多韵ノ。非レ美人借ニ韻于山水花月ノ也。山水花月。借ニ美人ニ生レ韻耳。○深花枝。淺花枝。深淺花枝相間時。花枝難レ似レ伊。巫山

山水花月の際美人を看れば、更に多韵(一)を覺ゆ。(二)美人韻を山水花月に借るに非ず。(三)山水花月、美人を借りて韻を生ずるのみ。○深花(四)の枝、淺花の枝、深淺の花枝相間はるの時、花枝伊に似難し。(五)巫山高く、巫山低く、(六)暮雨瀟瀟として郎歸らず。(七)空房獨り守るの時。○青娥(八)皓齒(九)吳倡(一〇)に別ち、梅粉(一一)粧ひ成りて半額黃なり。(一二)羅屏繡幔寒玉を圍み、帳裏笙を吹きて鳳凰(一三)を學ぶ。○初彈は珠の如く後は縷の如く、一聲兩聲落花の雨(一四)、訴へ盡す平生雲雨の心(一五)。盡く是れ春花秋月の語(一六)。○春嬌(一七)滿眼紅綃に睡り、雲鬟(一八)を掠削して旋た粧束す。飛んで九天(一九)に上りて歌ふ

花心。垂レ陰柳耳。客堪レ憐。春亦堪レ憐。○肝膽誰憐。形影自爲ニ管鮑一。脣齒相濟。天涯誰是窮交。興レ言及レ此。輙欲下再廣ニ絶交之論一。重作中署門之句上。○燕市之醉泣。楚帳之悲歌。岐路之涕零。窮途之慟哭。毎ニ一追念及レ此。雖レ在ニ千載以後一。亦感慨而興レ嗟。○陌上繁華。兩岸春風

て署門の句を作らんと欲す。○燕市の醉泣、楚帳の悲歌、岐路の涕零、窮途の慟哭、一の追念此に及ぶ毎に、千載以後に在りと雖も、亦感慨して嗟を興す。○陌上繁華にして、兩岸の春風柳絮を輕くし、閨中寂寞にして、一窓の夜雨梨花を痩せしむ。芳草歸ること遲くして、青驄別るゝこと易し、多情戀を成せば、薄命何ぞ嗟かん。要するに亦人各ゝ心あり、女德の善惡に關するに非ず。

(一) 風に臨みて笛を弄べば欄杆の上に一輪の明月照す (二) 家の周圍にあるまがきのあたりに梅花數點開くをいふ (三) 銀を以て作りたる燭臺の下にて輕く琴を彈ずるをいふ (四) 美しく粧ひ飾りたる美女の咲ひて琴に倚るをいふ (五) 花にも心あること人に心のあるが如しと見たるなり (六) 柳が枝を垂るゝは人の耳を傾けて聞くが如しと見ていふなり (七) 肝と膽とが相互に相憐み愛するが如く肝膽を知りて憐むものなきをいふ (八) 管仲と鮑叔とが少時親しく相交りて相欺かざりしが如く身體と身體より映ずる影とが相依りそうて親密に交ると管仲と鮑叔との交の如し、此は孤立して相憐むものなきをいふ (九) 脣と齒とは共に相助けあひて離るゝことなし、以て相濟ひて親しくするをいふ (一〇) 困窮の交をいふ、遠き他郷に在りては相濟ひ合ひて困窮の交を爲すものなきをいふ (一一) 劉標といへる人廣絶交論を作り交友のことを論ぜり (一二) 翟公その門に署して、一死一生乃知ニ交情ニ一貧一富乃知ニ交態ニ一貴一賤交情乃見といへり (一三) 荊軻高漸離の輩、燕の市上に在りて酒を飲み筑を撃ち悲歌慷慨して泣けり (一四) 楚の項羽垓下に至り漢王の爲めに圍まれ悲歌慷慨して曰く力拔レ山兮氣蓋レ世、時不利兮騅不レ逝、騅不レ逝兮可ニ奈何一

競二新藻一而抽レ英。○手巾還欲レ燥。愁眉卽使レ開。逆想二行人至一。迎前含レ咲來。○透迤洞房。半入二宵夢一。窈窕閑館、方增二客愁一。○懸二蝉子于搔頭一。拭三釵梁于二粉絮一。

臨レ風弄レ笛。欄杆上桂影一輪。掃レ雪烹レ茶。籬落邊梅花數點。○銀燭輕彈。紅粧咲倚レ人堪レ惜情更堪レ惜。困レ雨

を採り取るをいふ（八）臙脂は紅赤色にして女子粧飾に用ふ、膩は之をぬりてつやをつけること（九）墮馬結は髻の結び方の名、墮馬髻のわげの中に翡翠のかんざしを搖かすこと（一〇）此は芙蓉の花をいふ、人の化粧に對すれば花の色常に殊なりて大に美しきをいふ（一一）蘭の香に比すればその香之に越えまさるをいふ（一二）明妹は芙蓉の花の明かにして美しきこと、芙蓉の明かなる美しき花が月に照らされて夜水波に泛ふをいふ（一三）水の澄みたる處に開ける花は明け方の月に照らされて水の上に出づるをいふ（一四）此は松のことを賦するなり、松の若葉は亂れて月の照すを集むるをいふ（一五）新しき文思を凝ひて秀でたる文章を抽きんで作るをいふ（一六）手巾は手拭の類涙を拭ひたる手拭の燥くをいふ（一七）愁ひ悲める人の眉の開きて愁の去るをいふ（一八）行人は使人なり、逆とめ使人の至るべきを想像するをいふ（一九）透迤は長くうねうねと連ると、洞房は閨房卽ち婦人の部屋（二〇）奥ゆかしく靜閑なる部屋に在りて旅の愁を増すをいふ（二一）蝉子は寵愛する所の人、こゝはカンザシの飾をいふか（二二）搔頭はカンザシのこと（二三）股になりたるカンザシのこと（二四）粉絮は粉の如き白き絮のこと

風に臨みて笛を弄すれば、欄杆上に（一）桂影一輪あり。雪を掃ひて茶を烹れば、（二）籬落の邊に梅花數點あり。○（三）銀燭に輕く彈じ、（四）紅粧咲ひて倚るは、人惜むに堪へ、情更に惜むに堪へたり。雨に困む花心、（五）陰に垂るゝ（六）柳耳は、客憐むに堪へ、春亦憐むに堪へたり。○（七）肝膽誰か憐む、形影自ら（八）慚愧を爲す。（九）脣齒相濟ふ、天涯誰か是れ（一〇）窮交なる。言を興して此に及べば、輒ち再び（一一）絶交の論を廣め、重ね

緣之所寄。一往而深。故人恩重。來燕子於雕梁。逸士情深。托鳧雛於春水。好夢難通。吹散巫山雲氣。仙緣未合。空探遊女珠光。桃花水泛。曉粧宮裡膩臙脂。楊柳風多。墮馬結中搖翡翠。○對粧則色殊。比蘭則香越。泛明綵於宵波。飛澄華於曉月。○紛弱葉而凝照。

(一)緣の寄する所、一往にして深く、故人の恩重くして燕子を雕梁(二)に來たし、(三)逸士の情深くして、(四)鳧雛を春水に托す。好夢通じ難く、(五)巫山の雲氣を吹き散ず。(六)仙緣未だ合はず、空しく(七)遊女の珠光を探る。桃花水に泛び、曉粧宮裡に(八)臙脂を膩し、楊柳風多く、(九)墮馬結中に翡翠を搖かす。○(一〇)粧に對すれば則ち色殊なり、(一一)蘭に比すれば則ち香越ゆ。(一二)明綵を宵波に泛べ、(一三)澄華を曉月に飛ばす。○(一四)弱葉を紛して照を凝らし、(一五)新藻を競ひて英を抽く。○(一六)手巾還た燥んと欲して、(一七)愁眉即ち開かむ。(一八)逆じめ行人の至るを想ひ、迎ひ前めば咲を含みて來る。○(一九)透迤の洞房、半ば宵夢に入り、(二〇)窈窕の閒館、方に客愁を增す。○(二一)媚子を搔頭に懸け、(二二)(二三)釵梁を粉(二四)絮に拭ふ。

(一) 因緣の寄する所直に進みて深くして離れざるをいふ　(二) 彫梁は彫刻したる美しき梁に燕子來りて巢を造ること　(三) 逸士は世俗を超逸したる士　(四) 鳧の雛が春の水の上に浮びて遊べるが如きをいふ　(五) 巫山のこと前に出づ、巫山の雲氣を吹き散らしたるが爲めに神女は夢に見はれ來らざりしをいふ　(六) 仙人となる因緣未だ合はずして仙人となるを得ざること　(七) 南都賦に「遊女弄二珠于漢皐之曲一」とあり、遊女は漢水の神なりといふ、水神の珠

幽情化而石立。怨風結而塚青。千古空聞之感。頓令薄倖驚魂。○一片秋山。能掩病容。半聲春鳥。偏喚愁人。○李太白酒聖。蔡文姫書仙。置之一時。絶妙佳耦。○華堂今日綺筵開。誰喚分司御史來。忽發狂言驚滿座。兩行紅粉一時回。

かゝれる柳の枝の緑の如きものが我が衣裾をひきて情を含めるに似たるをいふ (八) 亭前に在る楊柳は到る處の人を送り盡す、是は行人を送るとき楊柳を折りて之を贈るをいふ (九) 離離は草の生ひ茂れること、山下に生ずる離離を見れば何れの時歸り來るか知るべからずとなり (一〇) 遠くひろ〴〵としてはてしなきこと (一一) 流浪してさまよふこと (一二) 劫は災厄のこと、昔漢武帝昆明池底を穿ちて、黒灰を得たり、人之を竺法蘭に問ふ、蘭曰く世界終盡するとき劫火洞燒す、此灰是なりと (一三) 花の香の風に吹かれて伸はること、蝶は香風の來る處に休息して留は芳しき夢を結ぶをいふ (一四) 紅花の落つること雨の如きをいふ (一五) たをやかにして弱き聲にて啼くこと、鳥は花の落つる處にありて嬌聲を發して啼くに任へざる風情あるをいふ (一六) 奥ゆかしき靜なる情緒、佳人才子の死して空しく石碑の立てるをいふ (一七) 怨風は怨み嫉むの情、佳公人才子の死して塚に苔の生ひ茂りて青く怨情の結ばれて青きが如きをいふ、或は云ふ王昭君匈奴の王に嫁して冢を作る、塞草皆白し、惟々此冢のみ青し故に青冢といふと (一八) 夫死して在らずして空閨の關門を守ること (一九) 薄倖は幸福の薄く少きことゝ、幸福の薄き人をして我が身の上の如く魂を驚かさしむるをいふ (二〇) 一片の秋山明媚なれば病める人も之に對すれば、その病を掩するを得べし (二一) 半聲の春の鳥の囀づる聲は悲ひ深き人を喚ぶが如く感ぜらるゝをいふ (二二) 李太白は唐の詩人にして常に酒を嗜み、一斗の酒を飲みて百篇の詩を作る (二三) 蔡文姫は、東漢の蔡邕の女、名は琰、文姫は其字なり、嘗て邕の遺書を寫して曹操に呈す、文遺誤なし (二四) 佳きつれあひ即ち夫婦をいふ (二五) 華堂は立派なる堂、綺筵は美しく立派なる酒宴の席をいふ (二六) 分司御史は官名、朝廷の禮法を紀す、分司御史を呼び來りて席上の非法を察せしむ (二七) 席上忽ち狂言を發して席上の人をして驚かしむ (二八) 兩行は二ならびに並べること、紅粉は或は紅脂或は白粉を以て裝飾したる婦女、二列に並べる美女は一時歸り去るをいふ

石。補ニ不レ就三離恨天一。雖レ令ニ司馬操ㇾ觚。寫ニ不レ盡三相思字一。○多恨賦レ花。風瓣亂ニ侵筆墨一。含レ情問レ柳。雨絲牽ニ惹衣裾一。○亭前楊柳。送ニ盡到處遊人一。山下蘼蕪。知是何時歸路。○天涯浩渺。風飄ニ四海之魂一。塵土流離。灰染ニ半生之劫一。○蝶憩ニ香風一。尚多ニ芳夢一。鳥沾ニ紅雨一。不レ任ニ嬌啼一。○

操らしむと雖も、(四)相思の字を寫し盡さず。○多恨花を賦せば、(五)風瓣筆墨に亂侵し、(六)情を含みて柳を問へば、(七)雨絲衣裾を牽惹す。○亭前の楊柳、(八)到る處の遊人を送り盡し、山下の蘼蕪、(九)知る是れ何の時の歸路なるを。○天涯浩渺として、(一〇)風は四海の魂を飄へし、塵土流離し、(一一)灰は半生の劫を染む。(一二)○蝶は香風に憩ひ、(一三)尚ほ芳夢多く、鳥は紅雨に沾ひ、(一四)嬌啼に任へず。(一五)○幽情化して石立ち、(一六)怨風結びて塚青く、(一七)千古空閨の感、(一八)頓に薄倖をして魂を驚かしむ。(一九)○一片の秋山、能く病容を瘥し、(二〇)半聲の春鳥、偏に愁人を喚ぶ。○李太白は酒聖にして、(二一)蔡文姬は書仙なり。(二二)之を一時に置けば、(二三)絕妙の佳耦なり。(二四)○華堂今日綺筵開く。(二五)誰か分司御史を喚び來る。(二六)忽ち狂言を發して滿座を驚かしむ。(二七)兩行の紅粉一時回る。(二八)

(一) 前に出づ、女媧氏は能く五色の石を煉りて天の缺けたるを補ひしも男女離別の恨を補ひ得ずとの義 (二) 司馬は司馬相如なり、相如は漢の武帝の時の人、辭賦を善くするを以て名あり (三) 觚は木の簡なり、古代紙なき時は木の簡に文字を寫せり、よりて文章を作るを操觚といふ (四) 男女相思慕するの情を充分に寫し出す能はざること (五) 多情多恨を以て花の詩を作ること (六) 風に吹かれて飄へる花びらが我賦する文章に侵入すること (七) 雨の

人。背地風波。誰是意氣中之烈士。○山翠撲簾捲不起。青蔥一片。樹陰流徑掃不開。芳影幾重。○珠簾蔽月飜窺窈窕之花。綺幔藏雲恐礙扶疎之柳。○幽堂晝深。清風忽來好伴。虛窗夜朗。明月不減故人。縱使女媧煉

眞を寫して宮殿の習なし　(六)　韓壽は晉朝の人、賈充召して掾と爲す、充の女見て之を悅び御賜の西域の奇香を盜みて壽に遺る、充卒に女を以て之に妻はす　(七)　閬苑は仙人居る所の地、仙人居る所より霧を致るに多くは閣に附して之を達せしむ　(八)　女墻は城上に在る(ヒメガキ)にて卽ち城上の土塀なり、土塀のあたりに在る樹は宿鳥を棲ましむるを得べきをいふ　(九)　星は海の底に映じ、窓のあたりより之を見るを得べきをいふ　(一〇)　雨は黃河の源、崑崙山のあたりを過ぎ行くを船を隔てゝ看るなり　(一一)　風階は風の吹き來る階段のあたり　(一二)　茶を煮る竈に薪として之を焚くをいふ　(一三)　月逕は月の照す小路のあたり、花の多く簇り咲けるをいふ　(一四)　寒士は寒素の士、卽ち貧窮の士なり　(一五)　詩を吟ずる能を奇貶にするをいふ　(一六)　形骸を外にして人生に超越したる所謂世間ばなれのしたる野人　(一七)　水風に遇へば波を起して舟行するもの危し、依りて風波を以て人事の變端に喩ふ　(一八)　誰か意氣に感ずる烈士となるべきか、意氣中の烈士少きをいふ　(一九)　山の翠色簾に撲ち當りて景色佳けれども簾を捲き上げて見ざるなり　(二〇)　靑々として生ひ茂れる一片の山あるのみ　(二一)　樹の蔭は小路に横たはりたるも之を掃ひ除かざるをいふ　(二二)　美しき木の影の幾重も重なり合ふこと　(二三)　珠を以て飾れる美しき簾は月を蔽うて見えず　(二四)　奥ゆかしく靜かなる美を窺ひ見るをいふ　(二五)　美しき綺幔は雲をかくして見えず木の枝の廣がり布くを碍ぐるをいふ　(二六)　好き伴侶卽ち好き友人のこと　(二七)　人の居らざる虛しき窓は夜色明朗にして月の照すをいふ　(二八)　明月の來り照すは故くより交はれる友人の來り訪ふに劣らざること

縱ひ女媧(一)をして石を煉らしむとも、離恨の天を補ひ就さず。(二)司馬をして(三)孤を

分レ簟。紅葉傷レ時月午レ樓。○但覺夜深花有レ露。不レ知人靜月當レ樓。何郎燭暗誰能詠。韓壽香薰亦任レ偸。○閬苑有レ書多附レ鶴。女墻無ニ樹不レ棲レ鸞。星沉ニ海底一當レ窓見。雨過ニ河源一隔レ座看。○風堦拾レ葉。山人茶竈勞レ薪。月逕聚レ花。素士吟壇綺レ席。○當場咲語。盡如ニ形骸外之好

花に露有るを、知らず人靜にして月樓に當るを。(四)何郎燭暗くして誰か能く詠ずる。(五)韓壽香薰じて亦偸むに任す。(六)○閬苑書有り多くは鶴に附す。(七)女墻樹として鸞を棲ましめざる無し。(八)星は海底に沉みて窓に當りて見え、(九)雨は河源を過ぎ座を隔てて看る。(一〇)○風堦に葉を拾ひ、山人の茶竈に薪を勞す。(一一)月逕に花を聚め、(一二)素士(一三)の(一四)吟壇に席を綺にす。○當場の咲語は、盡く(一五)形骸外の好人の如く、背地の風(一六)波は、誰か是れ意氣(一七)中の烈士なる。○山翠、(一八)簾を撲つも捲き起さず、(一九)青葱一片のみ。(二〇)樹陰、徑に流るゝも掃ひ開かず、(二一)芳影幾重ぞ。(二二)○珠簾月を蔽ひ、翻つて窈窕(二三)の花を窺ひ、(二四)綺幔雲を藏し、恐らくは扶疎の柳を礙らん。○幽堂晝深くして、清風忽ち(二五)好作(二四)を來し、虚窓(二六)夜朗にして、(二七)明月故人に減ぜず。

(一) 綠色の山岳屛風を立てたるが如く並列すること (二) 簟は席也、しき物のこと、秋の頃しき物を分ちて坐するをいふ (三) 午は縱橫相交ること、月影が樓のあたりに縱橫に相交りて照すをいふ、秋の紅葉の時節となりたるを傷み恕みてあれば月は恰も樓のあたりを照すをいふ (四) 何郎は梁の何遜なり、八歲にして詩を賦す、遜の詩能く本

茶香風颺亂
點更聲轉拍
遂姿絃曲破
長。○數移闌
墻頻崖彩自
扶香湯更怕
深初似染花
難抑按移變
沃雪不勝任。
豈知侍女簾
幃外賺取君
王數餅金。○
靜中樓閣深
春雨遠處簾
櫳半夜燈。
綠屏無睡秋

扶風は地名扶風にて鶴を謡る、その勞働を嘲すを笑ふなり 〔一七〕 靑牛帳は蓋し靑牛を畫ける帷帳なり、歌で殘れる歌曲既に終るをいふ 〔一八〕 朱鳥を畫ける窓牖なり 〔一九〕 絡還は引きつゞきて遂にわたること 〔二〇〕 自然をつけ眉ずみを塗りたるが如く山は青く河は白きこと 〔二一〕 越に美女二人あり一は明光と名づけ、一は修姑と名づく、以て吳に貢す、吳宮花の房に處き、猫珠を貫きて簾と爲し、朝は下して以て鏡を照し、夕は捲きて以て月を待つ、抽簾は房室の名待月の簾の空しく掲げられて月を待つ人なきをいふ 〔二二〕 美人の骨今香の中に埋まる 〔二三〕 此香は昔ては兩美人の鬢のごと煥きたなびかしたる所、今香のみのこり其人亡しとの意に〻 〔二四〕 蜀にて製したる紙と墨とをいふ、隃糜は墨の別名、麝は墨の香麝香の如きなり 〔二五〕 越の國にて製したるかめ、眾液は水のかめならん 〔二六〕 亂れて點々として飛ぶ花をひるがへすこと 〔二七〕 更漏は時間を計る器、今の時計なり、時間のうつるをいふ 〔二八〕 拍は音の停頓の處なり、拍送は音調を送ること、掌絃は緊き琴の音なり、風は緊き琴の音を調子よく送り來りて、音曲の調子の高く大にして長く引きつゞくをいふ 〔二九〕 蘭湯は蘭湯のこと、楚辭に蘭湯に浴すとあり、此は酒場を移さしめて之に浴するとき頻にその影の美ならざるを恐づるをいふ 〔三〇〕 香湯は飛燕外傳に后浴七香湯とあれば香物を投じたる酒湯なり、香しき湯にて自ら身體を拭ひ清むること、深きは香湯の中に深きをいふ 〔三一〕 初めは花を染むるが如く盛しき心を抑へとゞめんとするも抑へ難きをいふ 〔三二〕 移にはその變じ雪の降りそゝぐが如く紛然として起り來りて之に勝へ得ざるをいふ 〔三三〕 簾はすだれ、幃はとばりにて湯に浴する時簾幃の外に在りし侍女が王君の數個の金を取りしをいふ、金一餅を一餅金といふ 〔三四〕 靜なる中に在る樓閣のあたり春雨降りしきりて深く閉ぢ込むるをいふ 〔三五〕 遠き所に在る簾をかけたる窓には半夜燈光のちら〳〵見ゆるをいふ

(一)綠屏睡る無く(二)秋燈を分ち、紅葉時を傷みて月樓に午す。(三) ○但覺ゆ夜深くして

鶯鶯冶袖。時飄二韓掾之香一。飛燕長裾。宜レ結二陳王之佩一。○輕身無レ力。怯二南陽之擣衣一。生二長深宮一。咲二扶風之織錦一。○靑牛帳裏。餘曲既終。朱鳥牕前。新妝已竟。○山河綿邈。粉黛如レ新。椒華承レ彩。竟慮二待月之簾一。夸骨埋レ香。誰知二雙鸞之霧一。○蜀紙麝煤添二筆媚一。越甌犀液發二

知らん。○蜀紙(二四)麝煤筆の媚ぶるに添ひ、越甌犀液(二五)茶の香を發し、風は亂點(二六)を飄へし、更籌(二七)轉じ、拍(二八)は繁絃を送りて曲破長し。○蘭燼(二九)を移さしめて頻に影に羞ぢ、自ら香湯(三〇)に拭ひて更に深きを怕る。初め(三一)は花を染むるに似て抑按し難く、終(三二)に憂は雪を沃ぎて任に勝へず。豈知らん侍女簾幃(三三)の外、賸へ君王の數餅の金を取るを。○靜中(三四)の樓閣春雨深く、遠處(三五)の簾櫳半夜の燈。

㊀ 東の隣に居りて巧に笑ふ美人なり ㊁ 衣を着替へる時にそばにはべり居るをいふ ㊂ 西子心を病みて室に顰す、醜人之を見て美となし之に效ふ、莊子に出づ ㊃ 帳はトバリ、帳をかけたる室に甲乙等の名あり、第一室といふが如し、第一室に於て横になりて寢ぬるをいふ ㊄ 纏綣は腰の纏きかよわき美人、結風の意未詳、風を結ぶ、卽ち風通ぜぬ室の内かともいへど明かならず ㊅ 度曲は曲を按じて行く〱歌ふと ㊆ 魏の文帝の宮人莫瓊樹始めて蟬鬢を爲す、之を望むに縹渺として蟬翼の如く然り、鳴蟬の翼の如き薄き鬢を粧ひ飾るをいふ ㊇ 後漢梁冀の妻孫壽能く妖態を爲し墮馬髻を作る、此は墮馬形に髻を爲せる少女をいふ、垂鬟は髮をかむろにせる少女なり ㊈ 婺女は星の名、又須女と名づく、卽ち女宿なり 一〇 竊月は月の一名 一一 美人の容態の美に喩ふ、後遂に美人の意に用ふ、冶袖は衣服をつけて容貌を飾ること 一二 韓掾は韓壽なり、賈充辟して以て掾と爲す、壽姿貌美なり、充の女見て悅び音好を通じ西域貢する所の奇香を遺る 一三 西漢の成帝の時の宮人の名 一四 陳王は陳の後主叔寶のこと 一五 擣衣は衣服に作る反物を砧にてうつこと、擣衣には力を要するが故に之を怯る丶なり 一六

南浦傷。如之何。○玉樹以珊瑚作枝。珠簾以玳瑁爲押。

東鄰巧笑。來侍寢于更衣。西子微顰。將橫陳于甲帳。○騁纖腰于結風。奏新聲于度曲。粧鳴蟬之薄鬢。照墮馬之垂鬟。○金星與婺女爭華。麝月共嫦娥競爽。

纖手は女の手の細くして美しきこと、魏に於ては纖手の女子を好みしなり　(二一) 西漢の楊惲の婦は趙の女にして雅と善く瑟を鼓す、此鼓瑟の法を楊氏の家に傳ふるをいふ　(二二) 秦の穆公の女弄玉善く簫を吹く、此は吹簫の法を秦の女弄玉より學び得たるをいふ　(二三) 春の草は青色にして春の水の波も亦綠色なるをいふ　(二四) 南浦は水の名 今湖北省武昌縣の南三里に在り　(二五) 別るゝことを痛み悲めども如何ともする能はずとて離別の情の悲をいふ　(二六) 樹木を飾るに玉を以てするなり　(二七) 珠を以て飾れる簾は玳瑁を以て簾の木とするをいふ

(一)東鄰の巧笑來りて、寢に(二)更衣に侍し、(三)西子の微顰、將に(四)甲帳に横陳せんとす。○(五)纖腰を結風に騁せ、新聲を(六)度曲に奏し、(七)鳴蟬の薄鬢を粧ひ、(八)墮馬の垂鬟を照す。○金星は(九)婺女と華を爭ひ、(一〇)麝月は嫦娥と共に爽を競ふ。(一一)鶯鸞の冶袖、時に(一二)韓掾の香を飄へし、(一三)飛燕の長裾、宜しく(一四)陳王の佩を結ぶべし。○輕身力無くして、南陽の(一五)擣衣を怯れ、深宮に生長して、(一六)扶風の織錦を咲ふ。○(一七)青牛の帳裏、餘曲既に終り、(一八)朱鳥の窻前、新粧已に竟る。○(一九)山河綿邈として、(二〇)粉黛新なるが如し。(二一)椒華彩を承け、竟に待月の簾を虛しくし、(二二)夸骨香を埋め、誰か(二三)雙鸞の霧を

胡蝶長懸ニ孤
枕夢一。鳳皇不下
上ニ斷絃一鳴上。○
吳妖小玉飛
作レ烟。越艷西
施化爲レ土。○
妙唱非レ關レ舌。
多情豈在レ腰
○孤鳴翱翔
以不レ去。浮雲
靄靄而在苒。
○楚王宮裏。
無レ不レ推ニ其細
腰一。魏國佳人。
俱言訝ニ其纖
手一。○傳三鼓瑟
于ニ楊家一。得三吹
簫于ニ秦女一。○
春草碧色。春
水綠波。送ニ君

に得。○春草碧色、(一二三)春水綠波、君を南浦に送る、(一二四)傷之を如何せん。(一二五)○玉樹(一二六)は珊瑚を以て枝と作し、珠簾は玳瑁(一二七)を以て押と爲す。

(一) その人と情意相投じたる一夕の談話、その益を得ること十年間書を讀むにまさるをいふ (二) 柳の枝の長くして垂るゝと絲の如きこと、柳絲の長きが如く恨を牽くの長きをいふ (三) 楚の宋玉に登徒子好色賦あり、後因りて色を貪る者を謂つて登徒子と爲す (四) 宋玉は楚の襄王の時の人、爲雲爲雨の事は前に出づ (五) 泉刀は錢をいふ、泉はその流行の徧きに取り刀はその形より取る (六) 居然は依然として相變ぜざること、泰然などに同じ (七) 朱家は漢の初の人、任俠を以て名あり (八) 一端引受けて承諾したる事は決して變ぜざること (九) 季布は西漢の人、然諾を重んじて變ずることなし、當時黃金百斤を得るは季布の一諾を得るに如かずといへり、この二句蓋し金錢を輕んずるが如き、又然諾を重んずるが如きは、もとより女子の事に非ずとの意ならん (一〇) 胡蝶は長く獨り寢ねて榮華の夢を見て適となすをいふ (一一) 鳳凰は決して絃の折れたる琴に上りて鳴かず、雌雄相慕ひて離れざるをいふ (一二) 小玉は吳の美人の名、吳王夫差の女なり、吳妖は吳のあやしき迄に媚ぶる美人の意 (一三) 西施は越の美人の名、越艷は越の美色ある人の意、西施は後吳王夫差の夫人となる、此は美人も死して存することなきをいふ (一四) 美妙に歌を唱ふは舌の動かし方に關せず天性の自得に在り (一五) 情愛の多きは細腰のしなやかなるに在らずしてその人の天性の美に在り (一六) 鳥は獨り羣を離れて鳴き天に飛びかけりてその地を去らず (一七) 雲の盛に起ること (一八) 雲のふら〳〵として空に棚引けること (一九) 楚王細腰の女を好む、故に細腰の人を推尊す (二〇)

詣飲。醉則臥其側。○隔簾聞墮釵聲。而不動念者。此人不癡則慧。我幸在不癡不慧中。與君一夕話。勝讀十年書。桃葉題情。柳絲牽恨。胡天胡帝。登徒於焉怡目。爲雲爲雨。宋玉因而蕩心。輕泉刀若土壤。居然翠袖之朱家。重然諾如丘山。不添紅粧之季布。○

花も村に美しく見ゆるをいふ　(九) 村にて釀造する濁酒も人をして醉はしむるをいふ　(一〇) 綠蟻は醇酒の名、必ずしも醇酒を用ふるを要せずとなり　(一一) 三友は琴と酒と詩となり　(一二) 循環は互に相めぐること環の如きをいふ　(一三) 阮籍は西晉の時の人、放縱にして禮節に拘はらず酒を嗜む、竹林七賢の一人なり　(一四) 壚は酒を賣る店の爐場なり、此は阮籍の放縱にして酒を好めども亂淫の行なきをいふ　(一五) 釵は兩股になれるかんざし、女が歌舞して釵をおとすこと　(一六) 癡にして情を解せざる人にあらずんば知識深くして理を悟れる人なり

(一)君と一夕の話は、十年の書を讀むに勝る。○桃葉に情を題し、(二)柳絲に恨を牽く、胡天胡帝、(三)登徒焉に於て目を怡ばす。雲と爲り雨と爲り、(四)宋玉因りて心を蕩す。(五)泉刀を輕んずること土壤の如きは、(六)居然たる翠袖の(七)朱家にして、(八)然諾を重んずること丘山の如きは、(九)紅粧を添へざるの季布なり。○(一〇)胡蝶長く孤枕の夢を懸け、(一一)鳳皇は斷絃に上りて鳴かず。○(一二)吳妖の小玉は飛んで烟と作り、(一三)越艶の西施は化して土と爲る。○(一四)妙唱は舌に關するに非ず、(一五)多情豈腰に在らんや。○(一六)孤鳴翺翔して以て去らず。(一七)浮雲靄靆して(一八)徘徊す。○楚王の宮裏、其(一九)細腰を推さざるなく、魏國の佳人、倶に言ひて(二〇)纖手を誇かる。○(二一)鼓瑟を楊家に傳へられず、(二二)吹簫を秦女

惆悵茜人如レ歩。覺來無レ處二追尋一。○忠臣孝子。無レ非二鍾情之至一。○蛾眉未レ贖。漫勞二桐葉一寄二相思一。潮信難レ通。空向二桃花一尋二往跡一。○野花豔レ目。不二必牡丹一。村酒酬レ人。何須二緑蟻一。○琴罷輙擧レ酒。酒罷輙吟レ詩。三友遞相引。循環無二已時一。○阮籍隣家少婦有二美色一。當レ壚沽レ酒。籍嘗

漫に(五)桐葉を勞して相思を寄す。(六)潮信通じ難く、空しく(七)桃花に向ひて往跡を尋ぬ。○(八)野花も目に豔なり。必ずしも牡丹ならず。(九)村酒も人を酬にす。何ぞ(一〇)緑蟻を須ゐん。○琴罷みて輙ち酒を擧げ、酒罷みて輙ち詩を吟じ、(一一)三友遞に相引き、(一二)循環して已む時無し。○(一三)阮籍の隣家の少婦美色あり。(一四)壚に當りて酒を沽る。籍嘗て詣り飲み、醉へば則ち其側に臥す。○簾を隔てて(一五)墮釵の聲を聞きて、念を動かさざる者は、此人(一六)癡ならずんば則ち慧、我幸に不痴不慧の中に在り。

(一) 搖々は心憂ひてゆら／＼して附著する所なきこと、此はゆら／＼として定めなき心の恨みはたへがたきをいふ (二) 惆悵は心悲しみ恨むこと、舊人は故人に同じく故き朋友なり、故人のことは夢の如く茫然として相思ふも相見るを得ず、之を追ひ尋ねんとするも尋ぬるを得ずとなり (三) 鍾は集なり、愛情の集りて深くなること、忠孝は皆人情より出づ故に人情薄きものは忠孝を盡すを得ず (四) 蛾眉は蛾の眉の如き美しき眉の人、美人をいふ、また美人を贖ひ得ること能はず (五) 昔宮女桐葉に相思の詩を書して宮中の溝より流れ出づる水に流して下流にて之を拾ひ取りしことあり (六) 潮の至る一定の時期あり、依りて時を定めて通信するを潮信といふ、此は音信の通じがたきをいふ (七) 桃花は武陵の桃源のこと、此は桃花に向ひて過去の跡を尋ぬれども尋ぬるに跡なきをいふ (八) 野生の

恨天一。〇費長房縮二不レ盡三相思地一。女媧氏補二不レ完三離恨天一。〇悲火燃二心曲一。愁霜壓二髩根一。〇孤燈夜雨。空把二青年一誤。樓外青山無數。隔二不レ斷三新愁來路一。

黃葉無レ風自舞、秋雲不レ雨長陰。天若有レ情天亦老。搖搖幽恨難レ禁。

晴れること 〔一一〕一天にかゝれる明月は皓々とすれども我が心は怨恨の情によりくもれるをいふ 〔一二〕豆蔻は豆の一種、その花黄白色のものあり、兩人未だ大に開かざるものを取り之を含胎花といふ、轉じて處女に喩ふ、豆蔻は我が心上の恨を消さず恨の存するをいふ 〔一三〕丁香は木の名、常綠の喬木なり、唐宋の詩多く之を用ひ、固結解けざるの意に喩ふ 〔一四〕另は分居也、孤另は孤立して別れ居ること 〔一五〕蛩は（コホロギ）のこと、蟋蟀が叢の中にて泣くをいふ 〔一六〕喞々も虫の泣く聲、（コホロギ）の泣く聲はすべて來りて我が愁ふる思を助けて一層愁へしむるをいふ 〔一七〕慈悲の情を以て人を救ふことと溺の人を救ひ濟すが如きこと 〔一八〕男女相思ひ相纏ひて苦しむこと海中風波に逢ひて苦めるが如し 〔一九〕恩愛の情は人の離恨の心を下すこと、梯を以て人を天より下らしむるが如きこと 〔二〇〕費長房は東漢時代の人、縮地の術を能くす、或は一日の間人長房が千里の外數ケ處に在るを見共に其縮地の術あるに驚くといふ、此は費長房は縮地の術を善くすれども男女相思の情を縮め盡して眼前に相會せしむるを得ざる意 〔二一〕女媧氏は伏羲氏の妹にて嘗て五色の石を錬りて天の缺けたるを補ふ、此は女媧氏の如き天を補ふの術ある人も離別の恨を補ひ得ざるをいふ 〔二二〕愁ふるが爲めに元氣衰弱して、鬢のあたりに霜の降りたるが如く白髮を生ずること 〔二三〕孤燈の下夜雨蕭々として降るときは青年も寂寞に堪へずして、空しく假寐に在るの愁を懷かしむること 〔二四〕新なる愁情の來る路を隔ておはせることは出來ずとなり

黃葉は風無くして自ら舞ひ、秋雲は雨ふらずして長く陰る。天若し情あらば天も亦老いん。(一)搖搖たる幽恨禁へ難く、(二)惆悵たる舊人夢の如く、覺め來りて追尋するに處無し。〇忠臣孝子は、(三)鍾情の至に非らざる無し。〇(四)蛾眉未だ嚬はず

還。○萬里關河。鴻雁來時悲信斷。滿腔愁緒子規啼處憶人歸。○千疊雲山千疊愁。一天明月一天恨。○豆蔻不消心上恨。丁香空結雨中愁。○月色懸空。皎皎明明。偏自照人孤另。蛩聲泣露。啾啾唧唧。都來助我愁思。○慈悲筏。濟人出相思海。恩愛梯。接人下離

て、偏に自ら人の孤另(一四)を照し、蛩聲露(一五)に泣き、啾啾唧唧(一六)として、都て來りて我が愁思を助く。○慈悲(一七)の筏は、人を濟ひて相思(一八)の海を出でしめ、恩愛(一九)の梯は人に接して離恨の天を下らしむ。○費長房(二〇)は相思の地を縮め盡さず、女媧氏(二一)は離恨の天を補ひ完うせず。○悲火は心曲を燃やし、愁霜(二二)は鬢根を壓す。○孤燈夜雨は、空しく(二三)青年を把りて誤らしめ、樓外の青山無數なるも、新愁(二四)の來路を隔て斷たず。

(一) 弱水は水の名、太桑國の西に在り、花や柳が深く生ひ茂りて美人の居を藏して見えず、三千里を隔つる弱水を望むと異ならざるをいふ (二) 楚襄王晝寢ぬ、夢に一婦人を見る曰く妾は巫山の女也、聞く君高唐に游ぶと、願くは枕席を薦めんと、王因りて之を幸す、去るとき辭して曰く妾は巫山の陽、高丘の阻に在り、旦に朝雲と爲り暮に行雨と爲る云々と (三) 巫山に十二峰あり、空しく巫山十二峰を望むのみにして神女見るべからざるをいふ (四) 枕のあたり男女相思の夢去りてその人に往き心も亦往くをいふ (五) 眠醒めて後夢は醒めたれども心はもとの如く相思ふの人より還り來らず、依然としてその人を思ふをいふ (六) 萬里の遠方に在る關所及河水の邊に征伐に行きし時のこと (七) 鴻雁は歸り來れども相思の人よりの音信は斷えて來らざるを以て愁むなり (八) 胸中に滿ちたる心配の情緒あり (九) 子規は（ホト、ギス）夏の初愁しき聲にて啼く、聞く人之が爲に袖を濡す、我が意中の人は未だ歸らず、子規の鳴く聲を聞くにつけても故郷に歸る人を思ひ出すなり (一〇) 雲山の千里に重なるが如く愁情の相重りて

是銷魂之處。○悲火常燒心曲、愁雲頻壓眉尖。○五更三四點、點生一愁、一日十二時、時時寄恨。○燕約鶯期、變作鸞悲鳳泣、蜂媒蝶使、翻成綠慘紅愁。

綺は司馬相如の所持せし琴の名 (一〇) 文君は卓文君にして司馬相如の妻たり (一一) 何遜の詩に、還渡江閣手、衣淚京兆眉とあり (一二) 雲を瞻るも月を望むも皆物のあはれなる聲を聞く如くあはれならざるなきをいふ (一三) 銷魂は心に深く感ずるをいふ (一四) 心中の悲哀の情は火の炎々たるが如く盛なること (一五) 心曲は心中委曲の處をいふ (一六) 心中に愁あり氣の晴れざること愁の空に棚引けるが如きこと (一七) 眉毛の先を顰して眉をひそめしむるをいふ (一八) 五更は午前三四時の頃、水時計の聲三四點を打つこと (一九) 一點毎に愁を生ずること此れ人を思ひ戀ふる情なり (二〇) 燕が相逢ふを約し、鶯が相會するを期するが如く男女相逢ひて親交するを約するに喩ふ (二一) 鸞鳥相離るゝを悲み、鳳凰が相別るゝを泣くが如く、男女相別るの愁をいふ (二二) 蜂が媒介を爲し蝶が使する如く何かの緣にて男女相交るに喩ふ (二三) 綠色の花紅色の花散じてみじめなる如く男女相別るゝの愁をいふ

花柳深藏淑女居、何殊弱水三千、雨雲不入襄王夢、空憶巫山十二。○枕邊夢去、心亦去。醒後夢還心不

花柳深く淑女の居を藏す、何ぞ(一)弱水の三千に殊ならん。(二)雨雲襄王の夢に入らずんば、空しく(三)巫山十二を憶はん。○(四)枕邊夢去りて、心亦去り、(五)醒後夢還りて心還らず。○(六)萬里の關河、(七)鴻雁來る時、信の斷ゆるを悲み、(八)滿腔の愁緒、(九)子規啼く處、人の歸るを憶ふ。○(一〇)千疊の雲山千疊の愁、(一一)一天の明月一天の恨。○(一二)豆蔻は消さず心上の恨、(一三)丁香は空しく結ぶ雨中の愁。○月色空に懸り、皎皎明明とし

徹古今離恨。○世無花月。美人不願生此世界。○荀令君至人家。坐處常三日香。○解南山之竹。寫意無窮。決東海之波。流情不盡。愁如雲而長聚。泪若水以難乾。○弄綠綺之琴。焉得文君之聽。濡彩毫之筆。難描京兆之眉。瞻雲望月。無非悽愴之聲。弄柳拈花。盡

坐する處常に三日香し。○南山の竹は繫せば、意を寫して窮りなし。○東海の波を決するも、情を流して盡きず。愁は雲の如くにして長く聚り、泪は水の若くにして以て乾き難し。○綠綺の琴を弄せば、焉ぞ文君の聽を得ん。彩毫の筆を濡せば、京兆の眉を描き難し。雲を瞻月を望めば、悽愴の聲に非ざる無く、柳を弄び花を拈れば、盡く是れ銷魂の處なり。○悲火常に心曲を燒き、愁雲頻に眉尖を壓す。○五更三四點、點點愁を生じ、一日十二時、時時恨を寄す。○燕約鶯期、變じて鸞悲鳳泣を作し、蜂媒蝶使、翻つて綠慘紅愁を成す。

(一) 長安の東に灞橋あり、水に跨りて橋を作る、漢人客を送りて此橋に至り、柳を折りて別を贈る、故に多くの啼きたる涙の痕を存するなり (二) 王維が送元二使安西の詩に西出陽關無故人の句あり之を誦するとき、三たび重ねて唱ふ依りて三疊の陽關といふ (三) 古より今に至るまで離別の恨みを十分に歌ひとはすをいふ (四) 花と月とは天地間に在りて自然に美なるものなり (五) 美人の此世界に在る花月の天地間に在るが如し、兩美相照して益々美なり、故に美人も花月なくんば此世界に生るゝを願はざるべしとなり (六) 荀彧は東漢の人、尚書令となる故荀令君といふ、荀彧はその人品高く人之を慕ふなり (七) 南山多くの竹を産す、その竹を伐り盡してその葉に我が意を寫せば窮りなく寫し得らるべし (八) 東海の水をきり放せども我が思ふ情を流し盡すを得ざるなり (九) 綠

滴芳衾。錦花長濕。愁隨玉軫、琴鶴恆驚。錦水丹鱗。素書稀遠、玉山青鳥、仙使難通。彩筆試操。香箋遂滿。行雲可託。夢想還勞。九重千日、詎想倡家。單枕一宵、便如蕩子。當令照影雙來。一鸞羞鏡、勿使窺窗獨坐、嫦娥咲人。

幾條楊柳。沾來多少啼痕。三疊陽關、唱

むべし。窓を窺ひて獨坐し、(一五)嫦娥をして人を咲はしむること勿かれ。

(一)幾條の楊柳、多少の啼痕を沾し來り、(二)三疊の陽關、(三)古今の離恨を唱徹す。○

(四)世に花月無くんば、(五)美人此世界に生るゝを願はざらん。○(六)荀令君人の家に至り、

(一) 陽臺は山の名、今の湖北漢川縣の南に在り、巫山の神女の居る所 (二) 蕭史は春秋の時の人、善く簫を吹き鳳鳴を爲す、秦の穆公その女弄玉を以て之に妻す、後弄女は鳳に乘り蕭史は龍に乘り飛昇して去る (三) 笑ふとき顏にエクボをなすこと (四) 啼粧は離別の粧をなすこと、長き眉墨をかきて愁ひながら離別の化粧に對すること (五) 白粉の落ちて殘るものあらんと也 (六) 香をくゆらす香爐のこと、香爐を徙さず、香烟の殘り居るをいふ (七) 涙は芳しき夜着にしたゝりて美しき花も爲に長く濕ひて乾かずとなり (八) 玉を以て作りたる琴柱、軫は琴の下の絃を轉ずる者、愁の心は玉の琴柱の動くに隨ひて起りて已まざること、鶴の啼く聲の琴の音の如きをいふ (九) 錦水は卽ち錦江、四川省に有り、錦水に居る赤き鱗の魚、素書は白き帛に書きたる書なり、古詩に呼兒烹鯉魚中有尺素書とあり、手紙の來ることの稀少なるをいふ (一〇) 仙人西王母來るとき青鳥その旁に侍す、よりて後世借りて使者のことをいふ、漢武故事に七月七日忽ち青鳥あり殿前に飛集す、東方朔曰く此れ西王母來らんと欲するなりと、頃くありて西王母來る、三青鳥その旁に夾侍すとあり (一一) 彩筆をとりて手紙を書けば箋紙に一杯になりたるをいふ (一二) 此の手紙を空行く雲に托して先方に送り屆くべきをいふ (一三) 多日の間心を碎きて心配すること (一四) 罽賓王の一鸞三年鳴かず、夫人曰く聞く此鳥影を見れば鳴くと鏡を懸けて之を照す、鸞影を覩て悲鳴す、中宵一奮して絶ゆ (一五) 嫦娥は月の異名、羿不死の藥を西王母に請ふ、嫦娥といふ仙人之を竊みて月に奔る、よりて月の異名となれり

死。亦非二情之至者一矣。集二情第二一。

家勝二陽臺一。爲ㇾ憔非ㇾ夢。人慙二蕭史相偶成ㇾ僊。輕扇初開。忻看二笑靨一。長眉始畫。愁對二離粧一。廣攝二金屛一。莫ㇾ令二愁擁一。恆開二錦幔一。速望二人歸一。鏡臺新去。應ㇾ餘二落粉一。熏爐未ㇾ徙。定有二餘烟一。涙

餟ぐ、然るに鄭之を思ひて止まず、詩を作りて曰く、侯門一入深如ㇾ海、從ㇾ此蕭郎是路人と連帥詩を見て婢に命じて同じく歸らしむ、路行く人の如く相思の女子に對して何等の關係なき男子となるのみとの意なり　一四　湯若士名は顯祖、明朝の人なり、玉茗堂四夢を著し、小說家として有名なり　一五　道理としては必ず無き所も人情よりいへばある所のことあるなり　一六　生々死々は生くべくして生き死すべくして死するをいふ　一七　靑蛾は靑黑き蛾眉の婦女をいふ、蓋し美人を拋却して死するをいふなり　一八　厭々は閉藏の貌、意氣閉藏して死するをいふ

家陽臺(一)に勝り、憔を爲すも夢に非ず。人蕭史(二)相偶びて僊を成すに慙づ。輕扇初めて開き、忻んで笑靨(三)を看る。長眉始めて畫き、愁へて離粧(四)に對す。廣く金屛を攝して、愁をして擁せしむる莫く、恆に錦幔を開きて、速に人の歸るを望む。鏡臺新に去りて、應に落粉(五)を餘すべし。熏爐(六)未だ徙さず、定めて餘烟あり。涙(七)芳衾に滴りて、錦花長く濕ひ、愁は玉軫(八)に隨ひて、琴鶴恆に驚く、錦水(九)の丹鱗、素書稀遠にして、玉山(一〇)の青鳥、仙使通じ難し、彩筆試に操れば、香箋(一一)遂に滿ち、行雲(一二)托すべく、夢想還た勞す。九重千日(一三)、詎ぞ倡家を想はん。單枕一宵、便ち蕩子の如し。當に影を照して雙び來り、一鸞(一四)をして鏡に羞ぢし

嗟想慕。託之語言。寄之歌詠。而奴無昆崙。客無黃衫。知己無押衙。同志無虞侯。則雖盟在海棠。終是陌路蕭郎耳。湯若士有言。理之所必無。安知非情之所或有。又云。生生死死爲情。多情之極。欲生不得。欲死不得。可以生而死。可以死而生。如竟抛却靑娥。厭厭一

るも得ず、以て生く可くして死し、以て死す可くして生く、如し竟に靑娥を拋(一七)却すれば、厭厭たる一死、亦情の至れる者に非ずと。情第二を集む。(一八)

(一) 人は當に人情の爲めには生命を捨つべし、決して人情の爲めに怨情を生ずべからず (二) 既に人情といへば此の身は既に情の爲めに束縛せられて自由ならざるなり (三) 生命を捨てざれば、その情を貫徹するものにあらず、故に情の爲めに死せざるべからず (四) 韓翃は唐の南陽の人、字は君平、中書舍人に終る、詩を能くす、その詠ずる春城無處不飛花の一絶最も名あり (五) 崔護は唐代の人、詩を能くす、清明の日獨り都城の南に遊び、人の門を叩き飲を求む、女子あり意殊に厚し、明年之を尋ぬれば女死す、老父曰く君我が女を殺すと、崔護哭し入りて哭すれば須臾にして活くといふ (六) 漢宮の宮女が桐葉に詩を書し宮中の溝より流れ出づる水に流し下流にて之を拾ひ取りしことあり、その詩に一入深宮裏、年々不見春、聊題一片葉、寄與有情人といへり (七) 蜀侯韓國一大桐葉の飄るを見る詩あり、拭翠斂双蛾、爲鬱心中事、搦管下庭除、書成相思字、といふ數年の後韓國任氏と婚す、曰く此れ妾の書する所なりと (八) 唐宋の代馬來人種の人を用ひて奴と爲すものを昆崙奴と謂へり (九) 黃衫客は唐の俠客なり、霍王の女小玉李益と通ず、後益に棄てられ小玉憂悶して病む、黃衫を衣たる豪士あり益を挾みて至り相見せしむ、黃衫は黃色の衫衣にして華美なる服なり (一〇) 押衙は官名、禁衞を掌る、唐の劉震の女、名は無双王仙客に許婚す、後掖庭に没入せらる、仙客押衙を訪ひ茅山道士の藥を求め無双の婢采蘋をして、假に中使と爲り無双に死を賜はしむ、三日の後尸を贖ひ押衙仙客と救療し癒ゆるを得、押衙遂に自刎し、仙客無双共に襄鄧の間に老すといふ (一一) 虞侯は官名、山澤の政令を掌る、故事詳ならず (一二) 海棠の花を贈りて男女の契を結ぶをいふならん (一三) 蕭郎は男子のこと、唐人蕭娘を以て女子の泛稱となし蕭郎を以て男子の泛稱となす、崔郊に愛婢あり連帥に

語云。當爲情死。不當爲情怨。明乎情者。原可死。而不可怨者也。雖然既云情矣。此身已爲情有。又何忍死耶。然不死。終不透徹耳。韓翃之柳。崔護之花。漢宮之流葉。蜀女之飄梧。令後世有情之人。咨

卷二

情

語に云ふ、當に情(一)の爲めに死すべし、當に情の爲めに怨む可からずと。情に明かなる者は、原と死す可くして、怨む可からざる者なればなり。然りと雖も既に情と云へば、此身已に(二)情の有と爲る、又何ぞ死するに忍びんや。然れども死せずんば終に(三)透徹せざるのみ。韓翃(四)の柳、崔護(五)の花、漢宮(六)の流葉、蜀女(七)の飄梧、後世有情の人をして咨嗟想慕して、之を語言に托し、之を歌詠に寄せしむ。而して奴に崑崙(八)無く、客に黃衫(九)無く、知己に押衙(一〇)無く、同志に虞候(一一)無からしめば、則ち盟海棠(一二)に在りと雖も、終に是れ陌路の蕭郎(一三)のみ、湯若士(一四)言へる有り、理(一五)の必ず無き所、安んぞ情の或は有る所に非ざるを知らんやと。又云ふ、生生(一六)死死を情と爲す、多情の極、生きんと欲するも得ず、死せんと欲す

不㆑可㆑不㆑忘。○徑路窄處。留㆓一步㆒與㆑人行。滋味濃的。減㆓三分㆒讓㆑人嗜。此是涉㆑世一極安樂法。○己情不㆑可㆑縱。當㆘用㆓逆之法㆒制㆖㆑之。其道在㆓一忍字㆒。人情不㆑可㆑拂。當㆘用㆓順法㆒調㆖㆑之。其道在㆓一恕字㆒。○昨日之非不㆑可㆑留。留㆑之則根燼復萌。而塵情終累㆓乎理趣㆒。今日之是。不㆑可㆑執。執㆑之則渣滓未㆑化。而理趣反轉爲㆓欲根㆒。○文章不㆑療㆓山水癖㆒。身心每被㆓溪山縛㆒。

其道は一の恕の字に在り。(九)○昨日の非は留む可からず、之を留むれば、則ち根燼(一〇)復た萌して、塵情終に(一一)理趣を累はさん、今日の是は執る可からず、之を執れば、(一二)渣滓未だ化せずして、理趣反りて轉じて欲根と爲らん。○文章、(一三)山水の癖を療せずんば、身心(一四)每に溪山に縛せらる。

(一) 節操正義の高きこと、青空にかゝる雲よりも高くして之に對しておごり高ぶること (二) 文章の淸くして高きこと白雪よりも尚一層淸高なるを (三) 鑄型に入れて陶器を作るが如く、德性の型に入れてその文章をきたへかためざれば (四) 節義は血氣の私ごととなり、文章は只一の技藝の末技となるをいふ (五) 甘き味の濃厚なるものは卽ち醇き利益となるものなり (六) 此は人に讓りて自ら利を貪らざる處世法なり (七) 反對の法をいふ、此は放縱と反對なる嚴格の法を用ふること (八) 順當の法をいふ、此は人の情によく順應する法を用ひて人情を調和すること (九) 己を推して人の心を忖ること、よく人を思ひやるなり (一〇) 惡しきことの根本又は火の燃え殘りの如く殘れる惡心 (一一) 塵情は名利などの俗情、理趣は道理正しき趣意 (一二) 渣滓はかすのこと、惡しき心の殘れる汚れたるものが未だ全く醇化せざること (一三) 山水を好む心のくせを治療すること (一四) 山水の風景に我が身も心も束縛せられて山水以外に超越するの自由を有せぬこと

紘冗冗。何異ニ松柏蕭蕭一。非ニ王侯之骨一。能消ニ幾處樓臺一。落ニ壯士之頭一。經ニ得幾番歌舞一。達者統視爲ニ一觀一。愚人妄指爲ニ兩地一。

(一) 高樓瑤臺に在りて奢侈驕傲すれば遂に其身を亡ぼすに至るが故に樓臺こそ墓處なりといふなり (二) 邊鄙に在る要塞 (三) 歌を歌ひ舞を舞ひて奢侈を恣すときは遂にはその身を亡ぼすに至る、猶は刀兵を以て人を殺すが如し (四) うす絹及あや絹の衣服を着たる女子の多きこと (五) 戰場に於て旌旗のこみ合ひて多く立てちるゝこと (六) 笛や琴の聲の煩多なること (七) 墓處に生ずる松柏の寂みしげなる聲を立つること (八) 事物の理に通達せる士 (九) 樓臺も邱墓も又歌舞も刀兵も皆同一のものと觀察すること

節義傲ニ青雲一。文章高ニ白雪一。若不下以ニ德性一陶中鎔之上。終爲ニ血氣之私。技能之末一。○我有レ功于レ人。不レ可レ念。而過則不レ可レ不レ念。○人有レ恩于レ我。不レ可レ忘。而怨則

(一)節義青雲に傲り、(二)文章白雪より高きも、若し德性を以て之を(三)陶鎔せざれば、終に(四)血氣の私、技能の末と爲らん。○我、人に功あれば念ふ可からず、而して過は則ち念はざる可からず、人、我に恩あれば忘る可からず、而して怨は則ち忘れざる可からず。○徑路窄き處は、一歩を留めて人に與へて行かしめ、(五)滋味の濃き的は、三分を減じて人に讓りて嗜ましむ、此れは是れ(六)世を渉る一の極めて安樂の法なり。○己の情は縱にす可からず、當に(七)逆法を用ひて之を制すべし、其道は一の忍の字に在り。人情は拂る可からず、當に(八)順法を用ひて之を調すべし、

季子以二功名一殺レ身、則武安六國印、害レ人亦不レ淺。○名利場中難レ容二伶俐一。生死路上。正要二糊塗一。○一杯酒留二萬世名一、不レ如二生前一杯酒一。身行樂耳、還愼二其他一。百年人做二千年調一、至レ今誰是百年人、一棺戢レ身萬事都已。

郊野非レ葬レ人之處一。樓臺是爲二邱墓一。邊塞非レ殺レ人之場一。歌舞是爲二刀兵一。試觀二羅綺紛紛一、何異二旌旗密密一。聽二管

郊野は人を葬るの處に非らず、(一)樓臺是れ邱墓たり、(二)邊塞は人を殺すの場に非らず、(三)歌舞是れ刀兵たり、試に(四)羅綺の紛紛たるを觀よ、何ぞ(五)旌旗の密密たるに異ならん、(六)管絃の冗冗たるを聽けば、何ぞ(七)松柏の蕭蕭たるに異ならん、王侯の骨を葬るに、能く幾處の樓臺を消したるぞ、壯士の頭を落すに、幾番の歌舞を經得たるぞ、(八)達者は統て視て(九)一觀と爲し、愚人は妄に指して兩地と爲す。

衷は衷心に同じ、人知らずして自己のみ知れる心の中なり 〔一三〕 心のさつぱりとして欲などのなきこと 〔一四〕 蘇秦字は季子、初め貧窮なりしが六國に遊説して大に用ひられ遂に六國に幷せ相となれり 〔一五〕 蘇秦云ふ我をして洛陽負郭の田二頃あらしめば豈能く六國の相印を佩びんやと、負郭は郭の近くに在る畑田なり、一頃は百畝にて我が一町四五段に當るべし、財產を有すれば遊惰に流れ功名を成す能はず故に人を誤るといふ 〔一六〕 蘇秦は功名を得たれども後には齊人の爲めに殺さる 〔一七〕 蘇秦趙に於て武安君に封ぜられ六國の相印を佩ぶ 〔一八〕 伶俐は物にさとくかしこきこと 〔一九〕 糊塗は事を曖昧にして明白にせざること 〔二〇〕 愉快なることをなして樂み暮すこと 〔二一〕 死後千年の名を遺す計を爲すをいふ 〔二二〕 その身百年の齡を享くる人なし、死後千年の事計るに足らざるをいふ 〔二三〕 一棺の中にその身を收むるに至ればすべての事皆終るをいふ

明之人。極是誤レ事。何以故。惟聽明生二意見一。意見一生。便不レ忍二捨割一。往往溺レ于二愛河慾海一者。皆極聽明之人。○是非不レ到二泣レ魚處一。榮辱常隨二騎レ馬人一。○名心未レ化。對二妻孥一亦自矜莊。隱衷釋然。即夢寐皆成二清楚一。○觀下蘇季子以二貧窮一得中志。則負郭二頃田。誤レ人實多。觀下蘇

ず、榮辱(九)は常に馬に騎る人に隨ふ。○名心(一〇)未だ化せざれば、妻孥に對して亦自ら矜(一一)莊す、隱(一二)衷釋然(一三)たらば、即ち夢寐皆清楚を成す。○蘇季子(一四)貧窮を以て志を得るを觀れば、則ち負郭(一五)二頃の田、人を誤ること實に多し、蘇季子功名(一六)を以て身を殺すを觀れば、則ち武安(一七)六國の印、人を害すること亦淺からず。○名利場中に伶俐(一八)を容れ難く、生死路上正に糊塗(一九)を要す。○一杯の酒、萬世の名を留むるよりは、生前一杯の酒に如かず、身行樂(二〇)せんのみ、其他を恤ふるに遑あらんや。百年の人、千年の調を做すも、今に至るまで誰か是れ百年(二二)の人ぞ、一棺(二三)身を戢むれば、萬事都(二一)て已む。

㊀ マボロシの如く變轉常なきをいふ ㊁ 空中に浮べる雲の定めなきもの却つて一層情あるが如く感ぜしむる ㊂ 物の空しきが如く世上の事の一切空虚にして實なきをいふ ㊃ 流るゝ水が却つて深遠の意味あるをいふ ㊄ 聰明なる人は多くは衆人に異なる意見を生ずるなり ㊅ 思ひ切つて意見をたちて捨て去ること ㊆ 愛情の深く、欲心の深きこと河海の廣深なるが如きをいふ ㊇ 泣魚は戰國策に出づ、此は世を避けて魚を釣れる人に對しては之を或は是とし或は非として批評するものなきをいふ ㊈ 騎馬の人は富貴の人なり、富貴の人は光榮のこともあり、恥辱を受くることもあるなり ㊉ 名心は名を好むの心 (一一) おごそかにしてその身を持すること (一二) 隱

果毅。機要ニ縝密一。事要ニ妥當一。○富貴家宜レ學レ寬。聰明人宜レ學レ厚。○休レ委三罪于ニ氣化一。一切責ニ之人事一。休レ過三望于ニ世間一。一切求ニ之我身一。○早知ニ窮達有一レ命。恨不ニ十年讀一レ書。○世人白晝寐語。苟能寐中作ニ白晝語一。可レ謂ニ常惺惺一矣。

常に惺惺(一六)すと謂ふ可し。

(一) 何事をも爲さずしてむだに一生を送ること (二) 天下社會に裨益を爲さゞること (三) 心のしづかにして定まり落ちつくこと (四) 溫和にして正しく上品なること (五) 簡單にしてゆるくしづかにすること (六) 思ひきりてつよく之を成し遂げ果すこと (七) こまかに綿密にして疎略にせぬこと (八) おだやかにして至當なること (九) 萬事寛大にすること、富貴の人は寛容の量缺くる故なり (一〇) 萬事手厚く深切にすること、聰明の人は濃厚の氣乏しければなり (一一) 自然の機運の變化するまゝに任かせて成行次第にすること (一二) 多く望みを屬し過ぐること (一三) 窮は困窮、達は志望を達すること、人の困窮するも、志望を達するも自ら天命あること (一四) 十年書を讀めば此理を知るを得べきをいふ (一五) 寐語は、寢ねたるときの言語、白晝にねごとをいふこと、心の昏くして明瞭ならざるをいふ (一六) 惺々は心の常に明かなること

觀ニ世態之極幻一。則浮雲轉有ニ常情一。咀ニ世味之皆空一。則流水飜多ニ濃旨一。○大凡聰

世態の極めて幻(一)なるを觀れば、則ち浮雲轉(二)常情あり、世味の皆空(三)なるを咀めば、則ち流水飜(四)りて濃旨多し。○大凡聰明の人は、極めて是れ事を誤る、何を以ての故ぞ、惟聰明(五)は意見を生ず、意見一たび生ずれば、便ち捨割(六)に忍びず、往往愛河慾海(七)に溺るゝ者は、皆極めて聰明の人なり。○是非は魚(八)に泣く處に到ら

發之疾、醫以二深沈一。闊大之疾、醫以二充實一。○纔舒放卽當二收斂一。纔言語便思二簡默一。

（一九）おちつくこと（二〇）廣く大なることを好む性癖（二一）のび〳〵として寛のまゝにすること（二二）心を收め引きしめて發散せぬこと

貧不レ足レ羞。可レ羞是貧而無レ志。賤不レ足レ惡。可レ惡是賤而無レ能。老不レ足レ歎。可レ歎是老而虛生。死不レ足レ悲。可レ悲是死而無レ補。○身要二嚴重一。意要二閑定一。色要二溫雅一。氣要二和平一。語要二簡徐一。心要二光明一。量要二闊大一。志要二

貧は羞づるに足らず。羞づ可きは是れ貧にして志無きなり。賤は惡むに足らず。惡む可きは是れ賤にして能無きなり。老は歎ずるに足らず。歎ず可きは、是れ老いて虛生（一）するなり。死は悲むに足らず。悲む可きは、是れ死して補ひ無き（二）なり。○身は嚴重を要し、意は閑定（三）を要し、色は溫雅（四）を要し、氣は和平を要し、語は簡徐（五）を要し、心は光明を要し、量は闊大を要し、志は果毅（六）を要し、機は緘（七）密を要し、事は妥當（八）を要す。○富貴の家は宜しく寛（九）を學ぶべし、聰明の人は宜しく厚（一〇）を學ぶべし。○罪を氣化（一一）に委ぬるを休め、一切之を人事に責めよ、世間に過（一二）望するを休め、一切之を我が身に求めよ。○早く窮達命（一三）あるを知らば、恨むらくは十年（一四）書を讀まざるを。○世人は白晝寐語（一五）す、苟も能く寐中白晝の語を作せば、

緣割斷、煩惱從何處安身。世慮潛消。清高向此中立脚。○市爭利。朝爭名。蓋棺日何物可殉。蒿里。春賞花。秋賞月荷鍤時此身常醉蓬萊。○駟馬難追吾欲三緘其口。隙駒易過。人當寸惜乎陰。○萬分廉潔。止是小善。一點貪汚便爲大惡。○玄奇之疾。醫以平易。英

せば、(八)鍤を荷ふの時、此身常に(九)蓬萊に醉ふ。○(一〇)駟馬追ひ難し、吾其口を(一一)三緘せんと欲す、(一二)隙駒過ぎ易し、人當に陰を(一三)寸惜すべし。○(一四)萬分の廉潔は、止ゝ是れ小善のみ、(一五)一點の貪汚は、便ち大惡と爲す。○(一六)玄奇の疾は、醫するに平易を以てす。○(一七)英發の疾は、醫するに(一八)深沈を以てす、(一九)濶大の疾は、醫するに充實を以てす。○纔に(二〇)舒放すれば、即ち當に(二一)收斂すべし、纔に言語すれば、便ち簡默を思へ。

(一) 世間の利名などの俗氣をはらひて高尚なる品性を持つこと (二) 火炎は事に熱すること、氷鉄は冷々として薄氷を履むが如き思を爲すの意なるべし (三) 鄙劣にして吝嗇なること、つまらぬけちな根性 (四) 胸中光明正大にしてさらりとすること (五) 世俗名利の因緣をさき斷ちて之を滅すること (六) 世俗の名利を絕り計畫するの念を未だ現はれざる前より消滅すること (七) 蒿里は挽歌なり、人死すれば其の魂魄蒿里に歸するをいふ、蒿里は泰山の麓に在り、此は死して魂魄蒿里に歸するとき名も利も之に從はざるをいふ (八) 鍤を荷ふは將に葬らんとすること、晉の劉伶吾死せば其處に葬るべしとて鍤を荷ひて從はしめし故事 (九) 蓬萊は神仙の居住する山にて此は安樂の境遇に在りて滿足するをいふ (一〇) 一度口より發したる言は四頭立ての馬車に乘りて之を追ふも及ぶべからざること (一一) かたくその口を閉ぢて言を發せざるをいふ、三緘は口を封ずること三重の意 (一二) 光陰の過ぎ易きに喩ふ (一三) 少しばかりの光陰にても之を愛惜すること (一四) 多くの寡欲にして潔白なる行 (一五) 少しの欲深くして汚れたる行爲 (一六) 常に異なりて奇を好む性癖をいふ (一七) 秀てすぐれて才の發すること (一八) 深く沈み

匿一。隱匿則心必喩。○丹之所レ藏者赤。墨之所レ藏者黑。○懶可レ臥。不レ可レ風。靜可レ坐。不レ可レ思。悶可レ對。不レ可レ獨。勞可レ酒。不レ可レ食。醉可レ睡。不レ可レ淫。○書生薄命原同レ妾。丞相憐レ才不レ論レ官。○少年靈慧。知レ抱二夙根一。今生冥頑。可レ卜二來世一。

(一) 雲の動かずして靜定し、水の流れずして靜止すること、活動せずして靜止する狀態 (二) 潑々地に活動する狀態に喩ふ (三) 風の吹き荒び雨の驟に降り來ること、非常に活動するに喩ふ (四) 平穩無事の靜止狀態に喩ふ (五) 星半分程の小さき光のある活き〳〵したる火 (六) あら玉を攻め磨きて玉を得んとすること (七) 沙の中より淘汰して金を得んとすること (八) 乍交は交際することの久しからざること (九) 何事も皆心中を悉く傾けあらはして隱さゞること (一〇) 久與は久しく與に交際する朋友 (一一) 赤き色の物の中に藏め貯ふれば丹に化して赤色となる、下句も同意なり (一二) 懶は心物うくして事を爲すを厭ふこと (一三) 心煩悶したる時は、人に對して談話し以て心を慰む (一四) 苦勞したる時は酒を飲みて、勞を慰すべし (一五) 運命の薄きこと、幸福の少きをいふ (一六) 丞相は才を愛憐すれば官を論せず之を拔擢するをいふ (一七) 前世よりの善根を抱き持つこと (一八) 物の理にくらくして頑固なること (一九) かゝる惡德を有する人は未來の世にても惡果を得ることを卜知すべしとなり

撥二開世上塵氣一。胸中自無二火炎氷兢一。消二却心中鄙吝一。眼前時有二月到風來一。○塵

(一)世上の塵氣を撥開すれば、胸中自ら(二)火炎氷兢なし。心中の(三)鄙吝を消却すれば、(四)眼前時に月到り風來るあり。○(五)塵緣割斷すれば、煩惱何の處より身を安ぜん。○(六)世慮潛消すれば、清高此中に向つて脚を立つ。○市に利を爭ひ、朝に名を爭へば、棺を蓋ふの日、何物か(七)蒿里に殉すべき、春は花を賞し、秋は月を賞

有レ失。總不レ如二自得之休休一。

○自日欺レ人。難レ逃二清夜之愧赧一。紅顔失レ意。空遺二皓首之悲傷一。

むことを道すなり

定雲止水中。有二鳶飛魚躍的景象一。風狂雨驟處。有二波恬浪靜的風光一。○寒灰内半星之活火。濁流中一線之清泉。○攻二玉于石一。石盡而玉出。淘二金于砂一。砂盡而金露。○乍交不レ可二傾倒一。傾倒則交不レ終。久與不レ可二隱

(一)定雲止水の中に、(二)鳶飛び魚躍る的景象あり、(三)風狂雨驟の處に(四)波恬く浪靜かなる的風光あり。○寒灰内に(五)半星の活火あり、濁流中に一線の清泉あり。○(六)玉を石に攻むれば、石盡きて玉出づ、(七)金を砂に淘すれば、砂盡きて金露る。○(八)乍交に(九)傾倒す可からず、傾倒すれば則ち交終らず、(一〇)久與に隱匿す可からず、隱匿すれば、則ち心必ず嶮なり。○(一一)丹の藏する所の者は赤く、墨の藏する所の者は黑し。○(一二)嬾は臥す可し、風す可からず、靜は坐す可し、思ふ可からず、(一三)悶は對す可し、獨す可からず、(一四)勞は酒す可し、食ふ可からず、醉は睡る可し、淫す可からず。○書生の(一五)薄命は原と姿に同じ、(一六)丞相才を憐みて官を論ぜず。○少年の顯慧は、(一七)夙根を抱くを知り、(一八)今生の冥頑、(一九)來世を卜す可し。

以二記問一爲二居積一。以二前言往行一爲二師友一。以二忠信篤敬一爲二脩持一。以下作レ善降上レ祥爲二因果一。以下樂レ天知上レ命爲二西方一。○雲煙影裡見二眞身一。姑悟三形骸爲二桎梏一。禽鳥聲中聞二自性一。方知二情識是戈矛一。○事理因二人言一而悟者。有レ悟還有レ迷。總不レ如二自悟之了了一。意興從二外境一而得者。有レ得還

の桎梏たるを悟り、禽鳥聲中に自性(一三)を聞きて、方に情識の是れ戈矛(一四)なるを知る。○事理、人言に因りて悟る者は、悟るあれば還た迷ふあり、總て自ら悟るの了了(一五)たるに如かず、意興、外境よりして得る者は、得るあれば還た失ふあり、總て自得の休休(一六)たるに如かず。○白日(一七)人を欺けば、淸夜の愧赧を逃れ難し、紅顔(一八)意を失へば、空しく皓首(一九)の悲傷を遺す。

(一) 鼓吹は大鼓を打ち笛を吹くこと、之を發動するの意なり (二) 膏粱は肥えたる肉と美はしき米飯なり (三) 刺繍を爲したる文采ある衣服 (四) 畬は已に墾する一年の田、畬は一年の墾田、田地を開墾すること (五) 金錢財物を積み貯ふること (六) 古人の云ひたる言、古人の行ひし行爲 (七) 心の誠を盡すを信といひ、言僞りなく信實なるを篤と爲す (八) 修持は心を修め行を持つことにて修養に同じ (九) 善を爲すの因あれば幸福の果を得、惡を爲すの因あれば禍害の果を得ること (一〇) 西方十萬億土に在る極樂淨土を指す (一一) 雲煙のたなびける自然の佳景の中に在りて、眞の我を認識すること (一二) 我が身體は吾が眞身を束縛する足かせ手かせの如きものなるを悟ること (一三) 自己の本性を認識すること (一四) 我が情欲及び識見は是れ我が眞身を賊害すること戈矛の如きをいふ (一五) 了々は徹底して了悟すること (一六) 休々は容るゝあるの貌、よくゆつたりとして包容の大なること (一七) 白晝に人を欺きたらば氣淸き夜に至りて良心に責められて心に恥ぢ顔色を赤くすることを逃げがたし (一八) 紅顔は少壯の時代のこと、少壯時代に失敗して意氣沮喪するなり (一九) 皓首は白頭の老人のこと、老人に至りて悲しみ傷

嘔一。

〇人生待レ足何時足。未レ老得レ開始是開。〇談レ空反被二空迷一。就レ靜多爲二靜縛一。〇舊無二陶令酒巾一。新撤二張顚書草一。何妨三與レ世昏昏一。只問二吾心了了一。

以二書史一爲二園林一。以二歌詠一爲二鼓吹一。以二理義一爲二膏粱一。以二著述一爲二文繡一。以二誦讀一爲二菑畬一。

りて空しく光陰を費し遂に年老いて白頭を見るに至るをいふ (三) 靑眼は好意を以て人を應遇すること、阮籍人に對して或は靑眼を以て視或は白眼を以て視し故事、風花雪月詩酒琴碁喜びて我を迎ふと也 (四) 螢虫が燈火を撲ちてその身を焚くが如く、慾を貪るが爲めに遂に我が身を滅すをいふ (五) 板本貧に作る今意を以て貧に改む (六) 猩猩の血以て朱に染むべし、其色極めて鮮、その血を絞るには之に酒を加へて醉えしむといふ、本文の意は猩々酒に釣られて遂に血を絞らるゝに至るとならん (七) 水の涌き瀉るが如く大に役立つこと (八) 山路の險阻にして平ならざること、共に世に處する經驗あるものにして世路の崎嶇を知るに喩ふ (九) 人間は足るを知らざるものなり、もし足るの時期を待たば何時まで待つも足る時なし (一〇) 未だ老年に至らずして閒暇を得ば是れ眞に閒暇なり (一一) 空は佛家の空々の理なり、空々は宇宙の本體は聲もなく臭もなく無形無色のものなるをいふ (一二) 靜は寂靜にして無欲恬淡少しの欲心の起らざること (一三) 陶令は陶淵明のこと淵明彭澤の縣令となる故に陶令といふ、陶淵明嘗て巾を以て酒を漉して之を飲む (一四) 張旭は唐代の人、草書を善くす、酒を嗜み、大に醉ふ每に筆を下して書す或は頭を以て墨に濡して書す、世稱して張顚と號す (一五) 撤は捨て去りて顧みざること

書史を以て園林と爲し、歌詠を以て鼓吹(一)と爲し、理義を以て膏粱(二)と爲し、著述を以て文繡(三)と爲し、誦讀を以て菑畬(四)と爲し、記問を以て居積(五)と爲し、前言往行(六)を以て師友と爲し、忠信篤敬(七)を以て脩持(八)と爲し、善を作し祥を降すを以て因果(九)と爲し、天を樂み命を知るを以て西方(一〇)と爲す。〇雲煙影裡(一一)に眞身を見て、始く形骸(一二)

尺霧障㆑矣。○眞放肆不㆑在㆓飲酒高歌㆒。假矜持。偏於㆓大庭廣衆㆒。看㆓明世事㆒透。自然不㆑重㆓功名㆒。認的當下眞。是以常尋㆓樂地㆒。

場處の衆多の人の居る所　(一〇)社會の事を看ることに徹底すること　(一一)識るものを認識して知るその時すぐに眞實にして間違なきこと

富貴功名。榮枯得喪。人間驚㆑見㆓白頭㆒。風花雪月。詩酒琴書。世外喜㆑逢㆓靑眼㆒。○慾不㆑除。似㆓蛾撲㆑燈。焚㆑身乃止。貪無㆑了。如㆓猩嗜㆑酒。鞭㆑血方休。○涉㆓江湖㆒者。然後知㆓波濤之洶湧㆒。登㆓山嶽㆒者。然後知㆓蹊徑之崎

富貴功名、榮枯得喪(一)、人間白頭を見るに驚く、風花雪月、詩酒琴書、世外靑眼(三)に逢ふを喜ぶ。○慾除(二)かずんば、蛾(四)の燈を撲つに似たり、身を焚きて乃ち止む。貪了(五)る無くんば猩の酒を嗜むが如し、血に鞭(六)たれて方に休む。○江湖を渉る者にして、然る後波濤の洶湧(七)を知る、山嶽に登る者にして、然る後蹊徑(八)の崎嶇を知る。○人生(九)足るを待たば何の時か足らん、未だ老いずして閒(一〇)を得ば始めて是れ閒なり。○空(一一)を談ずれば反りて空に迷はさる、靜(一二)に就れば多くは靜に縛せらる。○舊と陶令(一三)の酒巾無く、新に張顚(一四)の書草を撤ふ(一五)、何ぞ世と昏昏たるを妨げん、只吾が心の了了たるを問ふのみ。

(一) 榮はさかえて盛なること、枯は枯れて衰ふこと、得は利を得ること、喪は利を喪ふこと　(二) 榮枯得喪の中に在

斷塵世之板援。澆花種樹。嗜好雖清。亦是道人之魔障。○人常想病時。則塵心便減。人常想死時。則道念自生。○入道場而隨喜。則修行之念勃興。登丘墓而徘徊。則名利之心頓盡。○鑠金玷石。從來不乏乎讒人。洗垢索瘢。尤好求多于佳士。止作秋風過耳。何妨

場に入りて隨喜(一〇)すれば、則ち修行の念勃興(一一)し、丘墓に登りて徘徊(一二)すれば、則ち(一三)名利の心頓に盡く。○(一四)金を鑠し石を玷す、從來讒人に乏しからず。(一五)垢を洗ひ瘢を索む、尤も好く佳士に多きを求む。止ゝ(一六)秋風耳を過ぐると作さば、何ぞ尺霧天(一七)を障ふるを妨げん。○眞の放肆は飲酒高歌に作らず、假の(一八)矜持は偏に大庭(一九)廣衆に於てす。(二〇)世事を看る明に透れば、自然に功名を重んぜず、(二一)認的當下眞なり、是を以て常に樂地を尋ぬ。

(一)草色の靑々たる花香の郁々たる遊ぶ人はその天眞の趣あるを賞美すること (二)梅謝は、梅の花の落ち去ること (三)道理に通達するの士、花の開落によりて人生の無常を悟る (四)客を留めて花を賞美すること (五)俗世界の爲めに引き張らるゝをいふ (六)精神修養の邪魔になること、魔障は佛語 (七)塵心は私利私欲の欲心をいふ (八)道義の心念 (九)道場は佛道を修行する場處卽寺なり (一〇)隨喜は他の善根に隨ひ喜ぶ義、道を有りがたく思ふこと (一一)むつとして盛に興り來ること (一二)徘徊はぶら〳〵として進まず立ち止まること (一三)古人英雄も豪傑も悉く丘墓中の人となるを思へば名譽利益を貪むの念は忽ち消滅するなり (一四)讒言するの人の氣勢は金をもとかし、玉をも疵つくること、玷は玉の疵、立派なる人を傷害するに喩ふ (一五)垢を洗ひ出す如く、又その瘢を捜し出す如く、その人の缺點を捜しもとむるに喩ふ (一六)人の讒言惡口を以て秋風の耳を過ぐるが如く思ふなり (一七)人の眞情を蔽ひかくすこと霧の天を蔽ふが如きなり (一八)矜持は、自ら誇り高ぶりて構へること (一九)大なる

木魚幾撃。龕常關。門常閉。好人放來。惡人廻避。髮不ㇾ除。葷不ㇾ忌。道人心腸。儒者服製。不ㇾ貪ㇾ名。不ㇾ圖ㇾ利。了二淸淨緣一。作二解脫計一。無二罣碍一。無二拘繫一。閑便入來。忙便出去。省二閑非一。省二閑氣一。也不ㇾ遊ㇾ方。也不ㇾ避ㇾ世。在ㇾ家出ㇾ家。在ㇾ世出ㇾ世。佛何人。佛何處。此即上乘。此即三昧。日復日。歲復歲。畢二我這生一。任二他後裔一。

出すこと（四）讀書することが面白くして罷めんとするも罷められぬこと（五）一間は一室なり一室ある小さき家屋（六）立派にいかめしく裝飾すること（七）すぐれて緻密なること（八）蒲を編みて圓き敷物を作ること、僧人の坐禪及び跪拜の時用ふる所なり（九）燈明を一盞、點火し、香木を焚くこと（一〇）石にて作りたる樂器（一一）龕は神佛を納る厨子（一二）臭氣あるもの葱蒜の類、之を忌みきらはず食ふこと（一三）老子教を奉ずるのを道人といふ、此は山中に在りて仙術を修むる人（一四）種々の雜念私欲を解き去りて清淨無垢の心となること（一五）無明煩惱邪に魔せらるゝこと（一六）世の功名利害の爲めに我心を束縛せらるゝこと（一七）無用の惡しきことと不道理のことを省きへらす（一八）方は方内にて世間以外に出でて脫俗すること（一九）家に在りても出家の心もちにて居ること（二〇）佛即ち我に在りの意（二一）上乘は佛語、最上の處をいふなり（二二）三昧は梵語の義、諸緣を屏絶して專一虛寂の意なり、此は奧妙の義なり（二三）後世子孫のことはなるがまゝに任せて如何にならうとも我は關せずとの意

草色花香。遊人賞二其眞趣一。桃開梅謝。達士悟二其無常一。○招ㇾ客留賞。爲ㇾ歡可ㇾ喜。未ㇾ

草色花香（一）は、遊人其の眞趣を賞し、桃開梅謝（二）は、達士（三）其の無常を悟る。○客を招きて留賞（四）するは、歡たること喜ぶべきも、未だ塵世（五）の板援を斷たず。花に澆ぎ樹を種うるは、嗜好淸しと雖も、亦是れ道人の魔障（六）なり。○人常に病時を想へば、則ち塵心（七）便ち滅ず、人常に死時を想へば、則ち道念（八）自ら生ず。○道（九）

作濁事。安得睡時有清身。若欲睡時得清身。須于醒時有清意。○好讀書。非求身後之名。但異見異聞。心之所願。是以孜孜搜討。欲罷不能。豈爲聲名。勞七尺也。○一間屋。六尺地。雖沒莊嚴。却也精緻。蒲作團衣作被。日裡可坐夜間可睡。燈一盞。香一炷。石磬數聲。

を得んと欲せば、須らく醒時に于いて清意有るべし。○讀書を好むは、身後の名を求むるに非らず、但ゞ異見異聞は、心の願ふ所なり、是を以て孜孜として搜討し、罷めんと欲すれども能はざるのみ、豈聲名の爲めに七尺を勞せんや。○一間の屋、六尺の地、莊嚴沒しと雖も、却つて也た精緻なり。蒲を團と作し、衣を被と作せば、日裡坐す可く、夜間睡る可し。燈一盞香一炷、石磬數聲、木魚幾擊、龕常に關し、常に閉ぢば、好人は放に來り、惡人は廻避せん、髮除かず、葷忌まず、道人の心腸、儒者の服製、名を貪らず、利を圖らず、淸淨の緣を了し、解脫の計を作し、罣碍無く、拘繫無くんば、閙便ち入り來り、忙便ち出でて去る。閑非を省き、閑氣を省き、也た方に遊ばず、也た世を避けず、家に在りて家を出で、世に在りて世を出づ、佛何人ぞ、佛何處ぞとは、此れ即ち上乘、此れ即ち三昧、日復た日、歲復た歲、我這の生を畢へ、他の後裔に任かす。

㊀ 私欲より起る濁りたる惡事をいふ　㊁ めづらしきことを見又は聞くこと　㊂ その異見異聞を搜し求め尋ね

卽夢寐神魂。無レ非二和氣一。凶人狼戾。卽聲音咳語。渾是殺機。○天下無二難レ處之事一。只要二兩個如レ之何一。天下無二難レ處之人一。只要二三個必自反一。○能脫レ俗。便是奇。不レ合レ汙便是淸。○處レ巧若レ拙。處レ明若レ晦。處レ動若レ靜。○參レ玄借以見レ性。談レ道借以修レ眞。

よ。○玄に參し(一七)借りて以て性を見、(一八)道を談じ(一九)借りて以て眞を修む。(二〇)

(一) 眉に皺をよすること、不義不道德にして人の眉を皺めしむるをいふ (二) 齒をくひしばること、恨怒するをいふ (三) 闇き部屋の中を照らす一個の燈光と苦海の三老は也、三老は經驗を積みたる老者の意か、上壽、中壽、下壽を三老とし、又舟師を三老といふ事あり、苦海に對する緣語として用ひたりと覺ゆ (四) 疑念の爲めに束縛せらるゝことと網の如きを疑網といふ、疑念の網を斷ち切る寶劍、道理の明かならざるを抉り出す金のへらの如しとなり (五) 攻取せんとする情なくなれば、魚鳥も來り親しむ (六) 道理にさからひもとる惡しき氣分 (七) 安詳は心安らかにして善良なること (八) 狼に作るべきか、ねぢけて人に逆らひもとること (九) 人に害を與ふる惡しき機活のあること (一〇) 熟慮して審に處置するの意 (一一) 自己の心に反省して自己の惡しきこと無きや否やを考ふること (一二) 世俗以上に拔け出でゝ世間放れのすること (一三) 汚れたる世俗に迎合せずその心行を潔白にすること (一四) 事に巧みなりと雖も巧に處することは拙きが如くすること (一五) 理に明かなりと雖も明かなるに處することは晦きが如くすること (一六) 事を爲す活動の場合に處すること無事なるが如くすること、以上は皆事を爲すに常に反面的用意を以てすべきをいふ (一七) 玄は老子の所謂玄之又玄、衆妙之門の玄にして深遠なる哲理を修行すること (一八) 自己の眞の性心狀態を認識悟得すること (一九) 此の道は禪道又は老子敎の道にして宇宙の眞理なり (二〇) 自己本眞の心を修養すること

世人皆醒時

世人皆醒むる時(一)濁事を作さば、安んぞ睡時に淸身有るを得ん。若し睡時に淸身

日月如二驚丸一。可レ謂二浮生一矣。惟靜臥是小延レ年。人事如二飛轆一。可レ謂二勞生一矣。惟靜臥是小自在。

の心厚き人は神仙となるを得べきをいふ　(二〇) 生死老病の世俗のわづらひを通過して能くその理を大悟徹底するをいふ　(二一) 彈丸の早く飛び去ること、日月の經過の早きに喩ふ　(二二) 一生は物の水に浮べるが如く定まりなきをいふ　(二三) 空中に飛べる塵埃の如く、安靜のなきに喩ふ　(二四) 一生涯東奔西走して苦勞すること

平生不レ作二皺眉事一。天下應レ無二切齒人一。○闇室之一燈。苦海之三老。截二疑網一之寶劍。抉二盲眼一之金鎞。○攻取之情化。魚鳥亦來相親。悖戾之氣銷。世途不レ見レ可レ畏。○吉人安祥。

平生皺眉の事を作さざれば、天下應に切齒(一)の人無かるべし。○闇室(二)の一燈、苦海の三老(三)は、疑網(四)を截るの寶劍、盲眼を抉るの金鎞なり。○攻取(五)の情化すれば、魚鳥も亦來りて相親む。悖戾(六)の氣銷ゆれば、世途畏る可きを見ず。○吉人は安祥(七)にして、即ち夢寐神魂、和氣に非ざる無し、凶人は狼戾(八)にして、即ち聲音咲語(九)、渾べて是れ殺機なり。○天下に處し難きの事無し、只兩個の之を如何せん(一〇)といふを要するのみ。天下に處し難きの人無し。只三個(一一)の必ず自ら反するを要するのみ。○能く俗を脫するは便ち是れ奇、汚に合せざる(一二)は便ち是れ淸なり。○巧(一三)に處するや拙の若くし、明(一四)に處するや晦の若くし、動(一五)に處するや靜の若くせ

雌黄月旦之言。吾恐微言將レ絕。提レ筆便驚二繽紛一。綺麗之飾。當二是妙處不一レ傳。○風波肆險。以二虛舟一震撼。浪靜風括。矛盾相殘。以二柔指一解分。兵銷戈倒。○豪傑向二簡淡中一求。神仙從二忠孝上一起。○人不レ得レ道。生死老病四字關。誰能透過。獨美人名將。老病之狀。尤爲レ可レ憐。○

相殘ふや、柔指（一六）を以て解分せば、兵銷え戈倒（一七）なり。○豪傑は簡淡（一八）中に向つて求め、神仙（一九）は忠孝上より起る。○人、道を得ざれば、生死老病四字の關、誰か能く透過（二〇）せん。獨り美人名將、老病の狀、尤も憐むべしと爲す。○日月は驚（二一）丸の如し、游生（二二）と謂ふべし。惟靜臥すれば、是れ小しく年を延べん。人事は飛塵（二三）の如し、勞生（二四）と謂ふ可し、惟靜臥すれば、是れ小しく自在なり。

（一）隽石はすぐれて大なる石、頑として動かざる態度あると（二）その心の容子の高尚にして淡泊なるをいふ（三）なまめきたる聲にて鳴く鶯の如く愛嬌を振りまくと（四）柳のしなやかにして媚びるが如く人に媚びへつらふをいふ（五）君の玩弄に供する臣（六）内に藏して其宜しきを得ざるをいふ（七）外部にあらはして其宜しきを得ざるをいふ（八）雌黄は文章を添削すること、此は轉じて人をそしるをいふ、古人黄紙を用ふ、誤り寫せば雌黄を塗りて文を改むるより出づ（九）月旦は、人物を批評すること、後漢の許劭毎月旦日人物の批評を爲したるより出づ（一〇）微妙の言（一一）繽紛は花の咲き亂れたること、依りて美はしき文章を書くに喩ふ（一二）文章を美しく飾り立てゝ綴ること（一三）風吹き波立ちて大に危險なること、世上の風波危險に喩ふ（一四）虛舟は荷物を載せざる空虛の舟を以て波を震ひ動かして行くこと、虛心にて世を渡るに喩ふ（一五）矛と盾とを以て相殘害すること、人の利害相鬪爭して相害するに喩ふ（一六）溫柔の情を以て鬪爭を引き分くるに喩ふ（一七）兵銷は武器の銷滅すること、戈倒は敵が戈を倒にして降ること、相爭ふ人も自ら爭心去りて我に服するに喩ふ（一八）簡淡は節易淡白なり（一九）忠孝

○發端無レ緒。歸結還自支離。入門一差。進歩終成ニ恍惚一。○打渾隨レ時之妙法。休レ縱ニ終日昏昏一。精明當レ事之禍機。却恨ニ一生了了一。

形同ニ隽石一。致勝ニ冷雲一。決非ニ凡士一。語學ニ嬌鶯一。態摹ニ媚柳一。定是弄臣。○藏不レ得是拙。露不レ得是醜。○開レ口輒生ニ

びたる因縁　(一六) 支那にては鷄又は犬の血を歃りて誓ふ、此は雞犬の血をすゝりて誓はずして親密に交はるは、夙縁あるが故なりとの意　(一七) 中途にてその交の斷絶すること　(一八) 詩に萋兮斐兮、成ニ是貝錦一とあり、讒人がその人の過を集めて罪を成すこと、美しき模様を集めて錦を成すが如きをいふ、此は夙縁の錦きたるを以て交際中斷するものにて讒者の中傷に由るに非らざるをいふ　(一九) 隄防は心の横溢を防ぎ止むる禮法をいふ　(二〇) 移舩は莊子に出づ、化工の知らず識らずの間に移り代りて往くこと、此は人の心の移り代りて發顯するをいふ　(二一) 性を操り心を存することにて、精神を修養すること　(二二) 水の道なき處を流るゝが如く我がまゝ勝手に動く放心をいふ　(二三) 事を爲す初に順序なくして亂雜なること　(二四) 事の歸着する結果　(二五) 事の統一なくして離れ〳〵となること　(二六) ぼんやりとして分明ならざること　(二七) 打渾は圭角なく圓滿なること、打は語の聲　(二八) 昏々はぼんやりとして明白ならざること　(二九) 精明は打渾の反對にて餘り事をはつきりとし過ぎること　(三〇) 了々は事の明白にして事理を曉解すること

形隽石(一)に同じく、致冷雲(二)に勝るは、決して凡士に非らず。語嬌鶯(三)を學び、態媚柳(四)を摹するは、定めて是れ弄臣(五)なり。○藏(六)して得ざるは是れ拙(七)、露はして得ざるは是れ醜。○口を開きて輒ち雌黄(八)を生ずれば、月旦(九)の言、吾恐くは微言(一〇)將に絶えんとするを。○筆を捉りて便ち繽紛(一一)を騖かせば、綺麗(一二)の飾、當に是れ妙處傳はらざるべし。○風波(一三)肆險なる、虛舟(一四)を以て震撼すれば、浪靜に風恬し。矛盾(一五)

仙。孽債爲煩。則芳魂毒于虐祟。○極難處。是書生落魄。最可憐。是浪子白頭。○世路如冥。青天障蚩尤之霧。人情如夢。白日蔽巫女之雲。○密交定有夙緣。非以鷄犬盟也。中斷知其緣盡。寧關萋菲間之○隄防不築。尙難支移壑之虞。操存不嚴。豈能塞横流之性。

雲に蔽はる。○密交定めて夙縁(一五)有り、鷄犬(一六)を以て盟ふに非ざるなり。(一七)中斷其の縁盡くるを知る、寧ぞ萋菲(一八)の之を間するに關せんや。○隄防(一九)築かざれば、尙ほ移壑(二〇)の虞を支へ難し、操存嚴(二一)ならざれば、豈能く横流(二二)の性を塞がんや。○發端緒(二三)なくんば、歸結(二四)還て自ら支離(二五)なり、入門一たび差へば、進歩終に恍惚(二六)を成さん。○打渾(二七)時に隨ふの妙法は、終日の昏昏(二八)を嫌ふを休めよ。精明事(二九)に當るの禍機は、却つて一生の了了(三〇)を恨む。

(一) 和ぎ樂しむ情のおのづと起ること (二) 冲和は温和と同じ、和ぎてやさしきこと (三) 表面のみ、温和柔順、緩舒欵誠を飾り出して見はすにあらずして中心より出づるをいふ (四) 高く抜きん出て立つこと (五) 生れつきよりの驕り高ぶる性質のあること (六) かゝる倨傲のものは、へり下り從順にしてゆつたりとしたる態度を表面のみ飾り立てゝ僞らんとしても爲し得ざるをいふ (七) 才鬼は鬼才に同じ、不思議の才氣あるもの、頑仙は風流を解せざる頑固なる仙人 (八) 孽債は罪禍にかゝること、金を借りて苦めるが如きこと (九) 芳魂は美人の魂魄にて、此は只美人の意のみ (一〇) 殘虐なるたゝりよりも一層害あるをいふ (一一) 落魄は落ぶれること (一二) 浪子は遊蕩の子弟なり、遊蕩の少年が白頭の老翁となりたるは憐むべきなり (一三) 蚩尤は黄帝の時の人、黄帝と戰ひ、白日霧を降らして方向に迷はしむ (一四) 巫女は巫山の女、楚王に夢に見はれていふ、妾は巫山の陽、高丘の阻に在り、旦には雲と爲り暮に雨と爲り朝々暮々陽臺の下に在りと、此は男女の情欲に蔽はるゝをいふ (一五) 夙縁は早くより結

於₂淡處₁求ㇾ濃。則終身不ㇾ落₂枯槁₁。○會心之語。當₃以₂不解₁解₂之。無稽之言。是在₂不聽₁聽耳。○佳思忽來。書能下酒。俠情一往。雲可ㇾ贈ㇾ人。

藹然可ㇾ親。乃自溢之冲和。粧₂不ㇾ出₃温柔緩款₁。翛然難ㇾ下。乃生成之倨傲。假₂不ㇾ得₃遜順從容₁。○風流得ㇾ意則才鬼獨勝₂頑

(六) 養花は、花ぐもりの天、牡丹の開く頃、軽寒微雨あり、之を養花の天といふ　(七) 努力を費して成就する所なきを脱空といふ　(八) 常套を脱して無常識な突飛なることを爲すことの意か　(九) 風致の佳き處に遊び得ず遊逋ものの意　(一〇) 逐日は漸次に同じ、漸々世を超脱して仙人と稱すべし　(一一) 度は濟度すること　(一二) 渡鶯は飛行定まりなき鶯なり、鶯はその形カナリヤに似て我が邦のウグヒスと異なり　(一三) 路のくねり曲りて險阻なること　(一四) 熱地は權勢のある地位、冷は權勢なきこと　(一五) 淒涼は冷遇を受くること　(一六) 淡處は、淡泊にして濃厚ならざる交際、濃は濃厚にして親密なること　(一七) 枯槁は木の枯れたるが如く、物さみしきこと　(一八) 我が心によく會して眞趣を了得し眞に面白く感ぜらるゝ語　(一九) 強ひてその意味を理解せんとせずして、自然に了解すべきをいふ　(二〇) 事理を稽へずしていふ杜撰の言　(二一) 強ひて之を聽かんとせずして自然に聞ゆるまゝに聽きて、深く意に留めざるなり

(一)藹然として親む可きは、乃ち自ら溢るゝの(二)冲和、(三)温柔緩款を粧ひ出さず。(四)翛然として下り難きは、乃ち生成の(五)倨傲、(六)遜順從容を假り得ず。○風流意を得れば、則ち(七)才鬼獨り頑仙に勝る。(八)孽債煩を爲せば、則ち(九)芳魂は(一〇)虐祟より毒なり。○極めて難き處は、是れ書生の(一一)落魄、最も憐むべきは、是れ(一二)浪子の白頭。○世路は冥の如し、青天蚩尤の霧に障へらる。人情は夢の如し、白日(一三)巫女の

兵戈。快去暫同㆓試劍石㆒。○調㆑性之法。須㆑當㆑似㆓養㆑花天㆒。居㆑才之法。切莫㆑如㆓妬㆑花雨㆒。○事忌㆓脱空㆒。人怕㆓落套㆒。○煙雲堆裏浪蕩子。逐日稱㆑仙。歌舞叢中淫慾身。幾時得㆑度。○山窮㆓鳥道㆒。縱藏㆓花谷㆒少㆓流鶯㆒。路曲羊腸。雖㆑覆㆓柳陰㆒難㆑放㆑馬。○能於㆓熱地㆒思㆑冷。則一世不㆑受㆓凄涼㆒。能

切に花を妬む雨の如くする莫かれ。○事は脱空(七)を忌み、人は落套(八)を怕る。○煙雲(九)堆裏の浪蕩子は、逐日(一〇)に仙と稱し、歌舞叢中の淫慾の身は、幾時か度する(一一)を得ん。○山、鳥道を窮むれば、縱ひ花谷を藏するも流鶯(一二)少く、路、曲りて羊腸(一三)なれば、柳陰に覆はると雖も、馬を放ち難し。○能く熱地(一四)に於て冷を思へば、則ち一世凄涼(一五)を受けず。能く淡處(一六)に於て濃を求むれば、則ち終身枯槁(一七)に落ちず。○會心(一八)の語は、當に不解(一九)を以て之を解すべし。無稽(二〇)の言は、是れ不聽(二一)に在りて聽くのみ。○佳思忽ち來れば、書能く酒に下す。俠情一たび往けば、雲も人に贈るべし。

(一) 紅樓は女子居る所の樓 (二) 丘壠は墓場のある丘陵、塚墓のなき丘陵とは、婦女に溺れて遊蕩すれば、遂に身を亡ぼすに至るが故に紅樓はそこに塚墓なきも終には我が身を埋むる丘陵となるべき地なりとの意 (三) 捨身は此の身を捨てゝ佛に供し、佛に隨喜して信仰すること、紅樓は我身を亡ぼすべき恐るべきものなれども之に迷ふときは却てその身を捨てゝ佛に供養するが如く有りがたく思ふをいふ (四) 舞衣は女子の舞ふ時着くる衣裳、歌舞に溺るれば終には我が身を亡ぼすこと兵戈を以て我身を斬るが如し (五) 快去の去は助語にて意義なし、歌舞を愉快に思ふ時には、之を試劍石の如く思ひて慍をなさゞるをいふ、試劍石は今の江蘇省呉縣の虎邱に在り、相傳へて秦王劍を試むる處と爲すといふ、此は己が心の堅否を試むること劍を試むる石の如く思ひ、迷ふことなしと觀ずるをいふ

戯人。一毫著意。便屬桎梏。○士人不當以世事分讀書。當令以讀書通世事。○天下之事。利害常相半。有全利。而無小害者。惟書。○意在筆先。向庖犧細參易畫。慧生牙後。恍顏氏冷坐心齋。

掴みたる半顔をかくること (四) 道心は、道を觀ずる念 (五) 盧生が邯鄲の旅舍に於て一道士呂翁に遇ひ一枕を得て之を枕したるに、大に榮達して幸福を得たるを夢み、忽然夢醒むれば主客黄粱を炊ぎて未だ成らざりしといふ、世上榮華の一時的にして頼むべからざる喩ふ (六) 任境は、サモアラバアレと顧ず、さはまゝよにて、大様なることはありとも我は關せずとの意 (七) 世を出づるは、世上に超越して世事に拘束せられざること (八) 機は機心にて事を巧くむの心なり (九) 柔かなる筆の跡 (一〇) 文を論じ酒を飲むは心の慰び樂む場所なり (一一) 寂寞は物さみしきこと (一二) 桎梏は足かせと、手かせにて罪人を束縛するもの、此は榮利の念に意を著くれば我が精神を束縛せられて自由ならざるをいふ (一三) 世事の爲めに書を讀むといふことを區分とすれば世事主となり、讀書は手段となる、故に不可なり (一四) 書を讀むによりて世事に通達すべし、然れば讀書主となり、世事客となる (一五) 庖犧氏天地の象にかたどりて易の八卦を畫す (一六) 牙は齒なり、人の智慧は言語をいふ頃より生ずるをいふ (一七) 此事莊子に出づ、顏氏は孔子の弟子顏回の事、冷坐は坐忘に同じく形を離れ知を去り、全く思慮する所なく無我無心なること、心齋は、心專一定靜なること齋戒の時外欲を去るが如きなり

明識紅樓爲無塚之丘壠。迷來認作捨身岩。直知舞衣爲暗動之

明かに紅樓は無塚の丘壠たるを識れども、迷ひ來れば認めて捨身の岩と作す。直に舞衣は暗に動くの兵戈たるを知れども、快去れば暫く試劍石に同じうす。○性を調するの法は、須らく當に花を養ふ天に似たるべし。才を居くの法は、

其工巧。何ニ若直陳。棋局以適ㇾ情。與ニ其競ㇾ勝。何ニ若促ㇾ膝。咲談以冷ㇾ情。與ニ其謔浪。何ニ若狂歌。

拙之一字免了。無ニ千罪過。閒之一字討了。無ニ萬便宜。○斑竹半簾。惟我道心清似ㇾ水。黃粱一枕。任他世事冷如ㇾ冰。○欲ニ住ㇾ世出ㇾ世。須ニ知ㇾ機息ㇾ機。○書畫爲ニ柔翰。故開ㇾ卷張ㇾ冊。貴ㇾ于ニ從容。文酒爲ニ權場。故對ㇾ酒論ㇾ文。忌ㇾ于ニ寂寞。○榮利。造化特以

(一)拙の一字免し了れば、千の罪過無し、(二)閒の一字討ね了れば、萬の便宜無し。○(三)斑竹の半簾、惟我が(四)道心清きこと水に似たり。(五)黃粱の一枕、(六)任他世事冷かなること氷の如し。○世に住みて(七)世を出でんと欲せば、須らく機を知り(八)機を息むべし。○書畫は(九)柔翰たり。故に卷を開き冊を張るや、從容を貴ぶ。(一〇)文酒は權場たり。故に酒に對し文を論ずるや、(一一)寂寞を忌む。○榮利は、造化特に以て人に戲る。一毫も意を著くれば、便ち(一二)桎梏に屬す。○士人は當に世事を以て(一三)讀書を分とすべからず。當に(一四)讀書を以て世事に通ぜしむべし。○天下の事、利害常に相半す。全利ありて小害無き者は惟書のみ。○意は筆先に在り。(一五)庖犧に向つて細に易畫を參す。(一六)慧は牙後に生ず。(一七)顏氏の冷坐心齋に恍たり。

㊀ 多くの罪過は拙より生ず、拙の一字を免除し了ればまた罪過とすべきなし ㊁ 多くの便宜は閒ならざるに生ず、閒の一字をきはめ了ればまた便宜なしとの意にや ㊂ 斑竹は、斑紋のある竹にて湘水の邊に生ず、斑竹にて

識。多畏者。必無卓越之見。多欲者。必無慷慨之節。多言者。必無質實之心。多勇者。必無文學之雅。○剔去胸中荊棘。以便人我往來。是天下第一快活世界。○古來大聖大賢。寸鐵相對。世上閑言閑語。一筆勾銷。○揮灑以怡情。與其應酬。何若兀坐。書札以達情。與其

りは、兀坐(一七)するに何若ぞ。書札(一八)は以て情を達せしむ。其工巧ならんよりは、直に陳ぶるに何若ぞ。棋局は以て情を適せしむ。其の勝を競はんよりは、膝(一九)を促すに何若ぞ。咲談は以て情を冷せしむ。其の謔浪(二〇)せんよりは、狂歌するに何若ぞ。

(一) 市肆は市中の物を陳列して賣る店 (二) 瑕はきずのある玉、瑜は美玉、瑕のある玉も美玉も并せて陳列するが如く缺點も長所も并せ隱す所なきをいふ (三) 古き玩弄物を時の相場にて賣ること (四) 凡そ人は功名を求むるに急なるときは自ら德義に缺くる所あるに至るなり (五) 局外は、その事局の外に在りて關係なきこと、此は自己の分限内の事を守るべきをいふ (六) 多躁は心のいら〳〵してあわて落ちつかざるもの (七) 落ちつきて靜くしつかりとしたる見識 (八) 拔け上りてすぐれたる見識 (九) 質は、樸なり、質實は、樸實なり (一〇) 荊棘はいばら、刺ある木なり、胸中に存する陰險にして人を賊害する惡心を取り去るをいふ (一一) 人と我と交際すること (一二) 心の愉快にして活き〳〵すること (一三) 寸鐵は一寸の計にて、その言の精妙を貴びて多言を貴ばざること (一四) 世間の無用の言語は一筆にてかぎをかけて之を打消して言はざること、勾は曲りがね、勾銷は曲りかねの如きものを以て引きかけて取銷すこと (一五) 揮灑は、筆を揮ひ墨を灑ぎて書畫をかくこと (一六) 應酬は應答に同じ書翰をかく爲に立ちはたらく (一七) 動かずして正しく坐すること (一八) 書札は手紙をかくこと (一九) 彼我膝を進めて相對して談論すること (二〇) 謔浪は、ふどけをいふこと

之快。事來然後知無事之樂。故禦病不如却病。完事不如省事。○諱貧者死于貧。勝心使之也。諱病者死于病。畏心蔽之也。諱愚者死于愚。癡心覆之也。

階段を得たるをいふ　(七)　揣は不靜なり、擾なり、功名を求めんとする念と、道を求めんとする念と、相爭ふをいふ　(八)　功名の心全く閉塞して動かざること、死したるが如きなり　(九)　貧窮を諱みきらふこと　(一〇)　貧病に打ち勝たんとする念が心を使役すること　(一一)　病を畏るゝ心　(一二)　愚癡にして物をあきらむる能はざる心なり

古之人、如陳玉石于市肆。瑕瑜不掩。今之人、如貨古玩于時賈。眞僞難知。○士大夫損德處。多由立名心太急。○夫人身在局外。未可輕議局内事。○多謀者。必無沈毅之

古の人は、玉石を市肆に陳するが如し。(一)瑕瑜掩はず。(二)今の人は、古玩を時賈に貨るが如し。(三)眞僞知り難し。○士大夫(四)徳を損する處は、多くは名を立つるの心太だ急なるに由る。○夫れ人は身局(五)外に在りては、未だ輕々しく局内の事を議す可からず。○(六)多謀なる者は、必ず沈毅(七)の識無く、多畏なる者は、必ず卓越の(八)見無く、多欲なる者は、必ず慷慨の節無く、多言なる者は、必ず質實の(九)心なく、多勇なる者は、必ず文學の權無し。○胸中の荆棘(一〇)を剖去して、以て人我の往來(一一)に便ずるは、是れ天下第一の快活世界なり。○古來大聖大賢は、寸心(一三)相對し、(一二)世上の閒言閒語は、一筆勾銷す。(一四)○揮灑(一五)は以て情を怡ばしむ。其の應酬(一六)せんよ

貧賤之人。一無所有。及臨命終時。脫一厭字。富貴之人。無所不有。及臨命終時。帶一戀字。脫一厭字。如釋重負。帶一戀字。如擔枷鎖。○透得名利關。方是小休歇。透得生死關。方是大休歇。○人欲求道。須於功名上鬧一鬧方心死。此是眞實語。○病至然後知無病

貧賤の人は、一も有る所無し。命終る時に臨むに及んで、一の厭(一)の字を脫す。富貴の人は、有らざる所なし。命終る時に臨むに及んで、一の戀(二)の字を帶ぶ。一の厭の字を脫するは、(三)重負を釋くが如く、一の戀の字を帶ぶは、(四)枷鎖を擔ふが如し。○(五)名利の關を透得せば、方に是れ(六)小休歇なり、生死の關を透得せば、方に是れ大休歇なり。○人道を求めんと欲すれば、須らく功名上に於て(七)鬧一鬧して方に(八)心死すべし。此は是れ眞實の語なり。○病至りて然る後無病の快を知り、事來りて然る後無事の樂を知る。故に病を禦ぐは病を却くるに如かず。事を完うするは事を省くに如かず。○(九)貧を諱む者は貧に死す。(一〇)勝心之を使へばなり。病を諱む者は病に死す。(一一)畏心之を蔽へばなり。愚を諱む者は愚に死す。(一二)癡心之を覆へばなり。

(一) 今迄貧賤にて厭ひ來れる其生を脫すとの意ならん (二) 生を戀ひて死を厭ふの念を抱くをいふ (三) 重き荷物を負ひ持つこと (四) 枷は首かせにて首にはむるもの、鎖は罪人を束縛するもの、首かせや鎖にて束縛せられて自由ならざること (五) 名譽利益の慾念を脫出して超然として悟る所あること (六) 少しく休息すること、修養の一

時時檢點。到二得從レ多入レ少從レ有入レ無處一。纔是學問的眞消息。○人生順境難レ得。獨思二從レ順之漢珠一。世間尤物易レ傾。誰執二擧レ人之如意一。○筆之用。以レ月計。墨之用。以レ歲計。硯之用。以レ世計。筆最銳。墨次レ之。硯鈍者也。豈非二鈍者壽一。而銳者夭一耶。筆最動。墨次レ之。硯靜者也。豈非二靜者壽而動者夭一乎。於レ是得二養生一焉。以レ鈍爲レ體。以レ靜爲レ用。唯其然。是以能永年。

月を以て計り、墨の用は歲を以て計り、硯の用は世を以て計る。筆最も銳く、墨之に次ぎ、硯は鈍き者なり。豈鈍き者壽にして銳き者夭する(一〇)に非ず耶。筆最も動き、墨之に次ぎ、硯は靜なる者なり。豈靜なる者壽にして動く者夭するに非ず乎。是に於て養生(一一)を得たり。鈍を以て體(一二)と爲し、靜を以て用と爲す。唯其れ然り、是を以て能く永年なり。

(一) 閑襍は、種々入りまじりたる心にて、私利私欲の雜念をいふ (二) 紛浮は、あちめにしてうか〳〵して落ちつかぬこと (三) 閑襍、紛浮、驕矜等の初め多きもの漸次少くなるをいふ (四) 消息は、增減のこと、此は學問の眞の狀態の意なり (五) 順境は、安樂の境遇をいふ (六) 漢珠は蓋し漢水より生ずる珠なり、我が願によりて漢珠の得らるゝをいふ (七) 尤物は、誘惑され易きすぐれたるもの、多くは女子の美なるものをいふ (八) 如意は、器家の具、如意を以て人を擊ち、之を警戒して誘惑せられざらしむ (九) 筆の用ふべき期間は幾月を以て計ふべし、筆の用期の短きをいふ (一〇) 夭は年少くして死すること、早く廢物となること (一一) 我が身體精神を修養する方法を悟り得たるをいふ (一二) 體は本體なり、鈍くして活動せざるを以て本體となすこと

○人當ニ洞擾一。則心中之境界何堪。人遇ニ清寧一。則眼前之氣象自別。○寂而常惺。寂寂之境不レ擾。惺而常寂。惺惺之念不レ馳。○童子智少。愈少而愈完。成人智多。愈多而愈散。

〔一二〕長物は剩物に同じ、無用の餘り物の義、我が身體の外に存する種々の物質の如き餘計の物は皆我と親しきものにあらずとの意 〔一三〕此の大地も亦マボロシの如く有縁を定むべからず、塵々の幻なるをいふ 〔一四〕大地内に存する微少の塵埃の如きものは、すべて是れ幻にして實有のものにあらずとの意 〔一五〕溷擾は世の溷り亂れたるをいふ 〔一六〕我が心の中の境界は世の溷り亂れたるを忍耐することの出來ざるをいふ 〔一七〕寂は私欲の念起らずして心の寂靜なること 〔一八〕惺は、心の覺惺せること、即ち能く事理を悟りて心の中の明かなること 〔一九〕我が心の寂靜にして私欲の念起らざる心の境界みださるゝことなし 〔二〇〕心惺々して覺醒せる念は外に馳せ出でゝ失ふことなしとなり

無レ事便思。有ニ閑襍念頭一否。有レ事便思。有ニ麤浮意氣一否。得意便思。有ニ驕矜辭色一否。失意便思。有ニ怨望情懷一否。

事無ければ便ち思へ、(一)閑襍の念頭有りや否やと。事有れば便ち思へ、(二)麤浮の意氣有りや否やと。得意便ち思へ、驕矜の辭色有りや否やと。失意便ち思へ、怨望の情懷有りや否やと。時時檢點すれば、(三)多より少に入り、有より無に入る處に到り得て、纔に是れ學問的(四)眞消息なり。○人生(五)順境は得難し、獨り頗に從ふの(六)漢珠を思へ。世間(七)尤物は傾き易し。誰か人を乘つの(八)如意を執る。○(九)筆の用は

貧時悔。濟時悔。不學用時悔。醉時狂言醒時悔。安不將息病時悔。○以理聽言。則中有主。以道窒欲。則心自清。○先淡後濃。先疎後親。先遠後近。交友道也。○苦惱世上。意氣須溫。嗜慾場中。肝腸欲冷。○形骸非親。何況形骸外之長物。大地亦幻。何況大地內之微塵。

ち中(五)に主有り。道を以て欲を窒(六)げば、則ち心自ら清し。○先(七)に淡にして後に濃に、先(八)に疎くして後に親く、先に遠くして後に近きは、交友の道なり。○苦惱(九)の世上、意氣須らく溫なるべし。嗜慾の場中、肝腸(一〇)冷かならんことを欲す。○形骸(一一)親しきに非ず、何ぞ況や形骸外(一二)の長物をや。大地(一三)亦幻なり。何ぞ況や大(一四)地內の微塵をや。○人溷擾(一五)に當りては、則ち心中(一六)の境界何ぞ堪へん。人清寧に遇へば、則ち眼前の氣象自ら別なり。○寂(一七)にして常に惺(一八)なれば、寂寂(一九)の境擾れず。惺にして常に寂なれば、惺惺の念馳せず。○童子は智少し。愈ゝ少くして愈ゝ完し。成人は智多し。愈ゝ(二〇)多くして愈ゝ散ず。

(一) 前は面前なり、目の前に於て人に譽めらるゝよりは背後に於て人の毀りを得ざるに如かず (二) 身の口腹耳目の欲を得て樂むよりは心の中に憂ふることなきに若かざるなり (三) 民間に潛み隱れて居て朝廷に用ひられざる時をいふ (四) 身體安全の時養生をすること、將息は身體を養ふこと (五) 我が心の中に我の主人となるものあること、我が心に根據を得るをいふ (六) 耳目口鼻、利名の欲をふさぎ止めて起らざりしむること (七) 初は淡泊にして後にはその情の濃厚親密なること (八) 初めは疎遠にして後には親密にすること (九) 苦しみ惱みて難儀すること (一〇) 飲食の物を貪り食はざるをいふ (一一) 我が身體も亦我と親しきものにあらずして我と相離れ去ること

愛吾之仇也。富貴身之累也。○馮驩之鋏。彈老無魚。荊軻之筑。擊來有淚。○以患難心居安樂。以貧賤心居富貴。則無往不泰矣。以淵谷視康莊。以疾病視強健。則無往不安矣。

はその成績を考へ調ぶること (八) 凛然はぞつとして寒く感ずる程に恐るゝこと (九) 寒山は唐代の人、唐の貞觀の時二僧あり、寒山と云ひ拾得といふ、著す所寒山子詩集二卷あり (一〇) はつきりとして能く了解して之を知ること (一一) 應對は來りて罵るものに答へざること、我は人の罵るにまかせて此方より應對せざるをいふ (一二) 人の罵れる辭によりて我の惡しきことを知る便宜を得たるをいふ (一三) 妻子等の恩愛の情に牽かれて義理を失へば恩愛却つて吾が身の仇となる (一四) 富貴は却つて吾身を束縛して自由を得ず、故に富貴は吾が身にとりて厄介物なりとの意なり (一五) 馮驩は齊の孟嘗君の客にして孟嘗君之を舍に置く馮驩劍を彈じて曰く、長鋏歸來乎、食に魚なしと、孟嘗君之を代舍に遷す、鋏は劍のつか、彈じ老ゆは彈じ去ると同意 (一六) 荊軻は戰國時代の人、秦王を刺さんとして易水の上に至る、其友高漸離筑を擊ち、荊軻和して歌ふ、筑は樂器、その聲哀し、故に之を聞くもの涙を流す (一七) 何れに在りてもその心安泰ならざるなし (一八) 康莊は諸方へ通ずる大路なり、康莊の大道を視ること深き淵山の谷の險阻寂寞なる地に在るが如く思ふなり (一九) 身體壯健の時に在りても疾病ありし時の如く能く養生すること

有譽于前。不若無毀于後。有樂于身。不若無憂于心。○富時不儉

(二〇)前に譽有るよりは、後に毀り無きに若かず。身に(二一)樂有らんよりは、心に憂無きに若かず。○富時儉せざれば貧時悔ゆ。(二二)濟時學ばざれば用時悔ゆ。醉時狂言すれば醒時悔ゆ。安きに(二三)將息せざれば病時悔ゆ。○理を以て言を聽けば、則

人言。天不レ禁二人富貴一。而禁二人清閒一。人自不レ閒耳。若能隨レ遇而安。不レ圖二將來一。不レ追二既往一。不レ蔽二目前一。何不二清閑一之有。○暗室貞邪誰見。忽而萬口喧傳。自心善惡烱然。凜レ于二四王考校一。○寒山詩云。有レ人來罵レ我。分明了了知。雖三然不二應對一。却是得二便宜一。此言宜二深玩味一。○恩

人言ふ、天人の富貴を禁ぜずして、人の清閒(一)を禁ずと。人自ら閒せざるのみ。若し能く遇(二)に隨ひて安んじ、將來を圖らず、既往(三)を追はず、目前に蔽はれずんば、何の清閑ならざることか之れ有らん。○暗室(四)の貞邪誰か見ん。忽にして萬口喧傳(五)す。自心の善惡烱然(六)として四王(七)の考校よりも凜たり(八)。○寒山(九)の詩に云ふ、人有り來りて我を罵る、分明了了(一〇)として知る。然かく應對(一一)せずと雖も、却つて是れ(一二)便宜を得と。此言宜しく深く玩味すべし。○恩愛(一三)は吾の仇なり。富貴(一四)は身の累なり。○馮驩(一五)の鋏、彈じ老いて魚無し。荊軻(一六)の筑、擊ち來りて涙有り。○患難の心を以て安樂に居り、貧賤の心を以て富貴に居れば、則ち(一七)往くとして泰ならざる無し。淵谷を以て康莊(一八)を視、疾病を以て强健(一九)を視れば、則ち往くとして安からざる無し。

(一) 清閒は俗事に引かれず世上に超越して閑散無事なること (二) 遇はその人の境遇 (三) 既に過ぎ去りたる昔のことを後よりくよくよ思はぬこと (四) 暗き室の中に於ける正しきことも邪なることも外部の人は誰も之を知らざるをいふ (五) やかましく世上に言ひ傳ふること (六) 烱然は光明の貌 (七) 四王は虞夏殷周四代の王なり、考校

儒不可與言道。彼謬于詞。○博覽廣識見。寡交少是非。○明霞可愛。瞬眼而輒空。流水堪聽。過耳而不戀。人能以明霞視美色。則業障自輕。人能以流水聽絃歌。則性靈何害。○休怨我不如人。不如我者常衆。休誇我能勝人。勝如我者更多。○人心好勝。我以勝應必敗。人情好謙。我以謙處反勝。

以て美色を視れば、則ち業障(九)自ら輕し、人能く流水を以て絃歌を聽けば、則ち性靈(一〇)何ぞ害あらん。○我人に如かざるを怨むを休めよ(一一)。我に如かざる者常に衆し。○我能く人に勝るを誇るを休めよ(一二)。我より勝る者更に多し。○人心勝つを好む(一三)。我勝を以て應ずれば必ず敗る。人情謙を好む。我謙を以て處すれば反りて勝つ。

(一) 利益のことにその心はまり込み、利益以外の事を考へざるをいふ (二) その業に片よりたること (三) 俗儒は事理に通ぜざる儒者 (四) 詩歌文章の如き文學的のものに心を奪られたること (五) 善きことは之を是とし惡しきことは之を非として判定する智識なり (六) うらゝかに打ち霽める景色 (七) またゝきする間にして少時間のこと、此は少時間に消滅して全く空しくなるをいふ (八) 流水の音を戀しく思はぬことにて長く心に留まらざるをいふ (九) 業障は佛家の語、過去世に作したる種々の惡事の今世の障碍と成れるもの (一〇) 霊は靈の古字、性靈は靈妙なる我が精神をいふ (一一) 怨むを休めよは怨むこと勿れと同じ人を怨むことをするなの意、我よりも劣れる人常に多ければ怨むの必要なしとなり (一二) 我が能く人より勝れ居るを自ら誇るべからず、世間には我よりも勝れたるもの更に多ければなりとの意 (一三) 世間一般の人の心は人に勝つことを好むものなり、然るに我又勝を好むの心を以て世人の勝を好むのものに應れば必ず失敗を招くべし

又涵㆓養之㆒。如㆓不㆑識㆑字人㆒。是謂㆓善讀㆑書者㆒。享㆓世間清福㆒。未㆑有㆑過㆑于㆑此也。〇世上人事無㆑窮。越幹。越見㆓不了㆒。我輩光陰有㆑限。越閒。越見㆓清高㆒。〇兩刃相迎俱傷。兩强相敵俱敗。

我不㆑害㆑人。人不㆓我害㆒。人之害㆑我。由㆓我害㆑人。〇商賈不㆑可㆓與言㆑義。彼溺㆑于㆑利。農工不㆑可㆓與言㆑學。彼偏㆑于㆑業。俗

料るときは却りて事あるものなりとの意 (六) その人の眞心あり人に對して手厚く深切なるが故に貧窮人が往來するなり (七) 朝市は只市中のこと、朝の時刻に交易賣買す、故に朝市といふ、是は市人にて商賣すること (八) 山林は山林に入り世を避けて隱遁すること、是は朝市は利を求め山林は名を求む、故に俱に事ありといふ (九) 精神を修養すること (一〇) 一字を識らざる者にして能く世味を味ふを得ば書を讀むの煩なくして事理自ら明なり、故に善く書を讀む者といふなり (一一) 世俗の幸福に非ずして純粹至善の幸福なり (一二) 越は發語の辭、「コヽ」と訓ず、幹は能くその事を辨ずること、是は能く事を處置すれば、却てその始末をつけることの出來ざることあるをいふ (一三) 閒は無事閒散にして事を爲さゞるをいふ (一四) 刃物の刃と刃と相迎へて打ち合ふをいふ (一五) 兩人の强き者と强き者と敵對するをいふ

我人を害せざれば、人我を害せず。人の我を害するは、我人を害するに由る。〇商賈は與に義を言ふ可からず。彼れ利に溺(一)るればなり。農工は與に學を言ふ可からず。彼れ業に偏すればなり。〇俗儒(三)は與に道を言ふ可からず。彼れ詞(四)に謬ればなり。〇博覧は識見(二)を廣くし、寡交は是非(五)少し。〇明霞(六)愛す可けれども、瞬(七)眼にして輒ち空し。流水聽くに堪ふれば、耳を過ぎて戀(八)ひせず。人能く明霞を

要知自家是君子小人。只于五更頭。點檢思想的是甚麼。便見得。○平地坦途。車豈無顚。巨浪洪濤。舟亦可渡。料無事必有事。恐有事。必無事。○富貴之家。常有窮親戚來往。便是忠厚。○朝市山林俱有事。今人忙處。古人閑。○人生有書可讀。有暇得讀。有資能讀。

自家是れ君子小人なるかを知らんことを要せば、只五更(一)の頭に于て思想的是れ甚麽(二)なるを點檢せば、便ち見得ん。○平地坦途(三)、車豈顚くこと無からん。巨浪洪濤(四)、舟亦渡るべし。事無きを料れば(五)必ず事あり。事あるを恐るれば必ず事なし。○富貴の家、常に窮せる親戚の來往するあれば、便ち是れ忠厚(六)なり。○朝市(七)山林(八)俱に事あり、今人の忙處、古人閑なり。○人生書ありて讀む可し、暇あれば讀むを得、資あれば能く讀み、又之を涵養(九)す。字を識らざる人の如きは、是を善く(一〇)書を讀む者と謂ふ。世間の清福(一一)を享くること、未だ此に過ぐる有らざるなり。○世上の人事窮りなし。越に幹(一二)すれば越に不了を見る。我輩光陰限り有り。越に閒(一三)なれば、越に清高を見る。○兩刃相迎ふれば(一四)俱に傷つく。兩強相敵すれば(一五)俱に敗る。

(一) 五更は午前四時頃にて、氣分清明なるの時なり (二) 甚麽は俗語なり、如何と同じ、君子なるか小人なるか如何といふことを自ら思ひ浮べて考へたらば便ち自己の小人なるか君子なるかを知るを得べし、私欲あれば小人、天理なれば君子なること自ら明白なりとの意 (三) 平坦なる途 (四) 巨浪も洪濤も皆大なるなみ (五) 事なきやうにと

即是適境。○雖無泉石膏盲。煙霞痼疾。要識山中宰相。天際眞人。○氣收自覺怒平。神斂自覺言簡。容人自覺味和。守靜自覺天寧。○處事不可不斬截。存心不可不寬舒。持己不可不嚴明。與人不可不和氣。○居不必無惡鄰。會不必無損友。惟能自持者。兩得之。

を持するには嚴明ならざる可からず。(二一)人に與みするには和氣ならざる可からず。○居必ずしも惡鄰無くんばあらず。(二二)會、必ずしも損友無くんばあらず。惟能く自ら持する者、(二三)兩つながら之を得。

(一) 好事者は物ずきの人 (二) 高人は人格の高尚なる人、韻士は詩歌など作る風流人 (三) 塵網は俗世界の束縛、網の中にからまれたるが如きをいふ (四) 花の棚を作れる處、即ち花の咲けるあたり、石の升り段のある處 (五) 徴醉は少しく酒に醉ふこと (六) 歌は獨りにて歌ひて衆人と共は歌はざるを樂むなり (七) 頻は頻頻に之を飲むこと (八) 善く默すべき時に默するは、つまり能く語ることとなるなり (九) 瘖ますべき時に瘖ますは、即ち能く明にする場合によく明にする法なり (一〇) 世俗の中に入りまじりて月立だたぬやうにするは即ち我身を世にかくして世を離るゝ法なり (一一) 深く泉水岩石の景色に耽りて好めること疾の膏(ムナサキ)肓(ムナモト)に入りたるが如きをいふ (一二) もや、かすみの棚引ける風景を好み耽ること一の不治の疾となれるが如きをいふ (一三) 山中に隱逸して山水の景を樂める人、陶弘景といへる人は屢々禮を加へて聘せられたれども世に出でず、國家大事ある毎に必ず館みて之に諮詢せざるなし、時人因りて山中の宰相といへり (一四) 天際の眞人はその人格の高尚なること、桓溫云く仁祖脚を北窓の下に企てゝ琵琶を彈ず、自ら天際眞人の想ありと (一五) 氣分收まりて安靜なること (一六) 精神のひきしまりて安泰なること (一七) 情味の不和にしてやさしきこと (一八) 物をきり斷ちたるが如く、きつぱりとして、きは立ちて明切なること (一九) 寛大にして心の舒び〳〵したること (二〇) 自己の品行を守りてくづさぬこと (二一) 人と交際するに溫和の氣象なかるべからず (二二) 會は人の相集合すること (二三) 惡隣に遇ひても損友ありても兩つながら自らよく會得して惡鄰損友に我心を傷けられずと也

底弓蛇。雙眉且展。得失夢中蕉鹿。兩脚且忙。

名茶美酒。自有眞味。好事者投香物佐之。反以爲佳。此與高人韵士。悞墮塵網中何異。〇花棚石磴。小坐微醺。歌欲獨。尤欲細。茗欲頻。尤欲苦。〇善默即是能語。用晦即是處明。混俗即是藏身。安心

あり駆ける鹿に逢ひて之を打ち殺し人の見んことを恐れて、之を隍中にかくし蕉を以て之を覆ふ、その喜びに勝へず、俄にしてそのかくしたる處を忘れ、以て夢と爲したりと列子に見ゆ、是れは得失などは夢中に鹿を得たるが如きものにて喜怒するに足らざるをいふ

名茶美酒自ら眞味あり。(一)好事者香物を投じて之を佐け、反りて以て佳と爲す。此れ高人韻士(二)悞りて塵網(三)中に墮つると何ぞ異ならん。〇花棚石磴(四)、小坐微醺(五)す。(六)歌は獨ならんことを欲し、尤も細ならんことを欲す。茗は頻(七)ならんこと欲し、尤も苦からんことを欲す。〇善默(八)は即ち是れ能語。(九)晦を用ふるは即ち是れ明に處す。俗に混(一〇)ずるは即ち是れ身を藏す。心を安んずるは即ち是れ境に適す。〇(一一)泉石の膏肓(一二)、煙霞の痼疾なしと雖も、(一三)山中の宰相、(一四)天際の眞人を識らんことを要す。〇(一五)氣收まりて自ら怒の平かなるを覺え、(一六)神斂まりて自ら言簡なるを覺え、人を容れて自ら味和(一七)なるを覺え、靜を守りて自ら天寧きを覺ゆ。〇事を處するには斬截(一八)ならざる可からず。心を存するには寬舒(一九)ならざる可からず。己(二〇)

此可三以役二使鬼神一。○出下一箇喪二元氣一進士上。不レ若レ出下一箇積二陰德一平民上。○眉睫纔交。夢裡便不レ能二張主一。眼光落レ地。死去又安得二分明一。○佛只是箇了。仙也是箇了。聖人了了。不レ知レ了。不レ知二了了一。是了了。若知二了了一。便不レ了。○萬事不レ如杯在レ手。百年幾見月當レ空。○憂疑杯

れ箇了す。聖人了了（一五）にして了を知らず、了了たるを知らずして、是れ了了たり。（一六）若し了了たるを知らば、便ち了ならず。○萬事如かず杯手に在るに。（一七）百年幾たび（一八）か見る月空に當るを。○憂疑（一九）杯底の弓蛇、雙眉（二〇）且つ展ぶ。得失夢中の蕉鹿（二一）、兩脚且つ忙し。

（一）眼目は、書中の尤も大切なる處　（二）始めて讀書の效果を得べきをいふ　（三）景色の能く調和すること　（四）昏くしてぼつとしたる氣　（五）土地の雄大にしてすぐれたること　（六）光り輝く程の立派なる會合　（七）吉神はめでたき善き神　（八）厲鬼は、人に災害を與ふる惡しき神　（九）進士は、地方より推擧せられて朝廷にて文官試驗を受くる士　（一〇）陰德は人の知らぬ所にて人に恩德を與ふること、元氣を喪ふの進士は政府の命令に服從するのみにて人民に對して功なし、陰德を積むの平民は人を救濟して世を利すること多し、故に之を取るなり　（一一）眉毛とまつ毛と交るは、睡眠すること　（一二）自己の意見を主張すること　（一三）眼光が地に落ちて死去するをいふ　（一四）了は曉解なり、佛は只々此の語を大悟徹底せるをいふ　（一五）聖人はよくその理を大悟徹底すれども大悟徹底したるを知らずとの義　（一六）聖人は己の大悟徹底したるを知らざれども實は大悟徹底したるなりとの義　（一七）杯手に在るは杯を手にして酒を飲むこと、是は萬事酒中に過ごすに如かざるをいふ　（一八）百年中幾たびも月の空に當りて出づるを見ることなしとて人生の眞樂少きをいふ　（一九）昔の樂廣の家に來りたる客、酒を飲むとき杯中に蛇あるを見て意甚だ之を惡み疾を得たり、後河南聽事堂の壁上に角弓あり漆にて蛇を畫けるが杯中に映じたるを知りて意解け、沈痾頓に愈えたり　（二〇）兩の眉ののび〱として憂の去りて喜ぶこと　（二一）鄙人野に薪を采る者

市人求レ利。寸積銖累。自成二富翁一。○金帛多。只是博二得垂死時子孫眼涙少一。不レ知二其他一。知レ有レ爭而已。金帛少。只是博二得垂死時子孫眼涙多一。亦不レ知二其他一。有レ哀而已。

の言は妄誕にして信ずべからざるをいふ　（一七）陶鎔は、人を教へ導き感化すること、型に入れて陶器を作り鎔鑄の中にて鎔かして器物を鑄るが如きなり　（一八）その人の工夫と力めの徹底せざること　（一九）檢點は、よく取調べ吟味すること　（二〇）一寸づゝ積み貯へ、一銖づゝ積みかさぬること、すこしづつ積みかさねること　（二一）利を積みて富翁となるが如く善く富む人となること　（二二）垂死は、今將に死なんとする臨終の時　（二三）博は易ふるなり、金帛を以て、涙の少きと交易して涙少きを取ること、此は子孫に金帛を多く殘すときは子孫は之に眼くらみて哀悼の涙少く、お互に之を得んとして爭ふあるのみと也

讀レ書。須レ尋二出書中眼目一。始得。○景不レ和。無三以破二昏蒙之氣一。地不レ雄。無三以壯二光華之會一。○一念之善。吉神隨レ之。一念之惡。厲鬼隨レ之。知レ

書を讀むには、須らく書中の眼目を尋ね出して始めて得べし。○景和せざれば、以て昏蒙の氣を破るなし。地雄ならざれば、以て光華の會を壯にするなし。○一念の善、吉神之に隨ひ、一念の惡、厲鬼之に隨ふ。此を知れば以て鬼神を役使す可し。○一箇の元氣を喪ふの進士を出すよりは、一個の陰德を積むの平民を出すに若かず。○眉睫纔に交れば、夢裡便ち張主すること能はず、眼光地に落つれば、死去又安んぞ分明なるを得んや。○佛は只是れ箇了す。仙也た是

消ヤ之。○好ニ譚閨門一。及好ニ讒亂一者。必爲ニ鬼神一所レ忌。非レ有ニ奇禍一。則必有ニ奇窮一。○神人之言微。聖人之言簡。賢人之言明。衆人之言多。小人之言妄。○士君子不レ能レ陶ニ鎔人一。畢竟學問中工力未レ透。○有下一言而傷ニ天地之和一。一事而折ニ終身之福一者上。切須ニ檢點一。○能受ニ善言一。如ニ

て人を陶鎔する能はざるは、畢竟學問中工力未だ透らざるなり。○一言にして(一七)天地の和を傷り、一事にして終身の福を折ぐ者あり。切に須らく檢點すべし。(一八)○能く善言を受くること、市人利を求むるが如く。寸積銖累すれば、(一九)自ら富翁を(二〇)成す。○金帛多ければ、只是れ垂死の時、子孫の眼涙少きを博し得て、其他を(二一)知らず、爭ふことあるを知るのみ。金帛少ければ、只是れ垂死の時子孫の眼涙多(二二)きを博し得て、亦其他を知らず、哀むことあるのみ。

(一) 蒲柳は共に木の名、その木柔弱なり、依りて身體の虚弱なるに喩ふ (二) 蒲柳の秋に至りてその葉落つるが如く、艱難の事に遇ひて、屈折して耐へざるをいふ (三) 松柏亦共に木の名、その木青々として霜雪に逢ひて凋まず、依りてその節操の堅くして變せざるに喩ふ (四) 名節は、名譽と節操なり (五) 遊俠は、男だてを爲し、人の爲に難を冒して輔くること (六) 客氣は、一時の外より來りたる附け元氣にて、眞の元氣にあらざるもの (七) 德性は道德的天性にて、道德を爲し得る天性の人に具有せるもの (八) 閨門は、私室内のこと、閨は小門にて上圓く下方にして圭の形に似たり、內室へ通ずる小門なり (九) 讒亂は、人の事をそしり、又は悖亂のことを爲すこと (一〇) 奇禍は思ひ測らざる禍害 (一一) 奇窮は思ひ測らざる困窮 (一二) 神靈的大德を具ふる人の言ふ所はその微妙にして測るべからず (一三) 聖人はその德凡人に超越したる最上至極の人格者、聖人の言は簡單にして能く事理を悉すなり (一四) 賢人はその德稍聖人より下れる人格者 (一五) 衆人の言は多くしてその要領を得ざること (一六) 小人

謗之術不ㇾ窮。世間盡是善毀之張。故議之路雖ㇾ塞。○進ニ善言一。受ニ善言一。如ニ兩來船一。則相接耳。○淸福上帝所ㇾ吝。而習ㇾ忙可ニ以銷ㇾ福。淸名上帝所ㇾ忌。而得ㇾ謗可ニ以消ㇾ名。○造ㇾ謗者甚忙。受ㇾ謗者甚閑。

の物に執着して離れぬことにあり、戀は戀しくして離れぬが如く物に執着すること（六）その時の宜しきに從ふこと、水の方圓の器に隨ふが如きこと（七）才人は才智のすぐれたる人（八）能人は技能のすぐれたる人（九）世の中の事情に能く能じさとれる人、世に能く用ひらるゝこと（一〇）名人は世に名の著はれたる人（一一）高人は人格の高尚なる人（一二）達人は事物の理に能く通達せる人（一三）諛は、人におもねり諛ふこと（一四）誹毀は、謗く人の短所をそしり惡口すること（一五）人を讒言する路は塞ぎとめること難し（一六）兩方より來る船、例せば、東より來る船と、西より來る船との如し（一七）善言を進むるものと、善言を受くるものと相接近すること（一八）淸くしてけがれなき幸福は上帝容易に之を人に許さずと也（一九）潔白にして汚れなき名譽（二〇）人を謗るの言を造る者はその心甚だ忙しく餘裕のなきこと

蒲柳之姿。望ㇾ秋而零。松柏之質。經ㇾ霜彌茂。○人之嗜ニ名節一。嗜ニ文章一。嗜ニ遊俠一。如ㇾ好ㇾ酒然。易ㇾ動ニ客氣一。當下以ニ德性一

蒲柳の姿は、秋を望んで零ち、松柏の質は、霜を經て彌々茂る。○人の名節を嗜み、文章を嗜み、遊俠を嗜むは、酒を好むが如く然り。客氣を動かし易し。當に德性を以て之を消すべし。○好んで閨門を譚し、及び譏亂を好む者は、必ず鬼神の爲めに忌まる。奇禍あるに非ずんば、則ち必ず奇窮あり。○神人の言は微、聖人の言は簡、賢人の言は明、衆人の言は多、小人の言は妄なり。○士君子にし

不レ耕而食。不レ織而衣。搖レ脣鼓レ舌。妄生二是非一。故知無事之人。好爲レ生レ事。○沾レ泥帶レ水之累。病根在二一戀字一。隨レ方逐レ圓之妙。便宜在二一耐字一。○才人經レ世。能人取レ世。曉人逢レ世。名人垂レ世。高人出レ世。達人玩レ世。寧爲二隨レ世之庸愚一。無レ爲二欺レ世之豪傑一。○天下無二不レ好レ諛之人一。故

（一）耕さずして食ひ、織らずして衣れば、（二）脣を搖かし舌を鼓し、（三）妄に是非を生ず、故に知る無事の人、好んで事を生ずるを爲すを。○（四）泥に沾ひ水を帶ぶの累は、（五）病根、一の戀の字に在り。（六）方に隨ひ圓を逐ふの妙は、便宜、一の耐の字に在り。○（七）才人は世を經し、（八）能人は世を取り、（九）曉人は世に逢ひ、（一〇）名人は世に垂れ、（一一）高人は世を出で、（一二）達人は世を玩ぶ。寧ろ世に隨ふの庸愚となるも、世を欺くの豪傑となること無かれ。○（一三）天下諛を好まざるの人無し。故に諂の術窮らず。世間盡く是れ（一四）善毀の輩、故に（一五）讒の路塞ぎ難し。○善言を進め、善言を受くること、（一六）兩來の船の如くなれば、（一七）則ち相接せんのみ。○（一八）淸福は上帝の吝む所、而して（一九）忙に習へば以て福を銷す可し。淸名は上帝の忌む所、而して謗を得ば名を銷す可し。○（二〇）謗を造る者は甚だ忙しく、謗を受くる者は甚だ閑なり。

（一）職業を爲さずして遊び居るものをいふ　（二）脣を動かして議論を爲し舌を動かして辯舌を弄すること　（三）妄りによいとかわるいとか言ひて批評を加ふること　（四）泥の中に沾ひて脱出するを得ず、水にぬれて自由ならざる如き身の厄介となること、卽ち、或るものに拘泥して超脱することの出來ざるに喩ふ　（五）惡しきことの根本は一

易疑。○積丘山之善、尙未爲君子。貪絲毫之利、便陷于小人。○知者不與命鬪。不與法鬪。不與理鬪。不與勢鬪。○良心在夜氣淸明之候、眞情在簞食豆羹之間。故以我索人。不如使人自反。以我攻人。不如使人自露。○俠之一字。昔以之加意氣。今以之加揮霍。只在氣魄氣骨之分。

むるは、人をして自ら反せしむる(一五)に如かず、我を以て人を攻むるは、人をして自ら露さしむる(一六)に如かず。○俠の一字は昔は之を以て意氣(一七)に加へ、今は之を以て揮霍(一八)に加ふ。只氣魄(一九)氣骨の分に在るのみ。

(一) 熟思は充分によく考へ思ふこと (二) 緩處は急がずして緩やかにして事を處置すること (三) その事情が充分に會得されて分ること (四) 觸忤は吾が心に觸れて忤ふこと、吾が意にさはることをも忍びこらふるなり (五) 輕々しく人に與ふる者は亦必ず取るべかざるものまで濫に取るものなり (六) 善を積むこと丘又は山の如く多きをいふ (七) 一絲一毫程の少しき利益をいふ (八) 命は天命なり、天命に逆ひて惡事を爲すをいふ (九) 法は法律なり、國家の法律を犯すをいふ (一〇) 理は道理なり、道理に反したる不法のことを爲さず (一一) 勢は時のなり行きなり、勢は人力の動かすべからざるものなればその推移にまかすべし、之に反抗して進むべからず (一二) 良心は人の本然の善心なり (一三) 夜氣は人の夜分靜寂の時に至れば其氣分清明にして邪心の亡ぶるをいふ (一四) 簞は竹を以て之を作り飯を盛る器なり、豆は木を以て之を作り、食を盛る器なり、一簞の飯、一豆の羹を與ふる時に人情の露はるゝをいふ (一五) 自ら良心に反省せしむること (一六) 自ら其眞情を外に露はれしむること (一七) 意氣は人に對する心いき也 (一八) 揮霍は金錢を揮りまきて與ふること (一九) 氣魄はその志氣膽力の大なること、氣骨はその志氣のつよく剛き所あること

襟度。臨レ喜臨レ怒看二涵養一。羣行羣止看二識見一。○安詳是處レ事第一法。謙退是保レ身第一法。涵容是處レ人第一法。洒脫是養レ心第一法。

の胸中に懷ける思想を心より放ち出して全く之を打ち忘るゝこと、卽ち無我無心となるをいふ 〔一〇〕すべての境遇皆ひろ〴〵としたる趣あり 〔一一〕大事難事を引き受けて之をよく處置するか否かを看る 〔一二〕逆境は思ふ如くならざる困難の境遇、順境は意の如くなる安樂の境遇 〔一三〕その人の思想と度量 〔一四〕その精神を修養すること 〔一五〕多くの人と共に事を行ふこと 〔一六〕安詳は、その心の落つき安んじて靜かなること 〔一七〕謙退は人にへり下りて控え目にすること 〔一八〕多くの人を我が度量の中につゝみ込み容るゝこと 〔一九〕心さつぱりとして物に囚はれず、物事の上にぬけ出て居ること

處レ事最當二熟思緩處一。熟思則得二其情一。緩處則得二其當一。○必能忍二人不レ能レ忍之觸忤一。斯能爲二人不レ能レ爲之事功一。○輕與必濫取。易レ信必

事を處するには最も當に(一)熟思(二)緩處すべし。熟思すれば則ち其の(三)情を得、緩處すれば其の當を得ん。○必ず能く人の忍ぶ能はざるの(四)觸忤を忍びて、斯に能く人の爲す能はざるの事功を爲す。○(五)輕與すれば必ず濫取す、信じ易ければ必ず疑ひ易し。○(六)丘山の善を積むも、尙ほ未だ君子と爲さず。(七)絲毫の利を貪れば、便ち小人に陷る。○知者は(八)命と鬪はず、(九)法と鬪はず、(一〇)理と鬪はず、(一一)勢と鬪はず。○(一二)良心は夜氣(一三)清明の候に在り、眞情は(一四)簞食豆羹の間に在り、故に我を以て人に索

說得幾句話。○看中人。在大處不走作。看豪傑。在小處不滲漏。○留七分正經以度生。留三分痴呆以防死。○輕財足以聚人。律己足以服人。量寬足以得人。身先足以率人。○從極迷處識迷。則到處醒。將難放懷一放。則萬境寬。○大事難事看擔當。逆境順境看

漏せざるに在り。○(三)七分の正經を留めて以て生を度り、(四)三分の痴呆を留めて以て死を防ぐ。○財を輕んずれば以て人を聚むるに足り、己(五)を律すれば以て人を服せしむるに足り、量寬なれば以て人を得るに足り、(六)身先んずれば以て人を(七)率ゐるに足る。○極めて迷ふ處より迷を識れば、則ち(八)到る處醒む、(九)放ち難き懷を將ちて一たび放てば、則ち(一〇)萬境寬し。○大事難事に(一一)擔當を看、(一二)逆境順境に(一三)襟度を看、喜に臨み怒に臨みて(一四)涵養を看、(一五)羣行羣止に識見を看る。○(一六)安詳は是れ事を處する第一法。(一七)謙退は是れ身を保つ第一法。(一八)涵容は是れ人を處する第一法。(一九)灑脫は是れ心を養ふ第一法。

(一) 走作は本有の規範を逸出して事を爲すをいふ、即ち大なる處に就いてその本來の規範に叶ふか否かを看るべきをいふ (二) 滲漏は水のしみ漏れ出づること、小さき事に處しても手落なく綿密に事を爲すと否とを看るべきをいふ (三) 人の爲す所の中にて十分の中七分だけは正しき筋道を踏みて以て一生を過ごすこと (四) 十分の中三分だけはその氣ゆるみて愚鈍者の如く緊張せざること、その氣常に緊張すれば生命を縮むるをいふ (五) 法度を以てその行爲を檢束して放縱ならざること (六) 己が身、人の先きに立ちて之を行ふをいふ (七) 人を率きつれて己の如く事を行はしむること (八) 何處に至りても一も迷ひたる所なくしてその理の明かなるが如く見ゆるなり (九) 己

之意一則趣多。○待二富貴人一。不レ難レ有レ禮。而難レ有レ體。待二貧賤人一。不レ難レ有レ恩。而難レ有レ禮。○山棲是勝事。稍一縈戀。則亦市朝。書畫賞鑒是雅事。稍一貪痴。則亦商賈。詩酒是樂事。少一狥レ人。則亦地獄。好レ客是豁達事。一爲二俗子一所レ撓。則亦苦海。

いふ　(三)冥心は深く心に想ふこと、清素は潔白にして質素なること　(四)世俗の汚れたるつまらぬ氣をいふ　(五)妍媸は美しきと、醜きとをいふ　(六)雌雄は優劣なり　(七)興味を多く有するもの　(八)去住は去ることと、止まること、此章多情多欲等のものはその思想一定したる所無きが故に妍媸取與等を定めがたきをいふ　(九)破綻は衣服の縫ひ目の破るゝこと、依りて事の破れて纏まらざるをいふ　(一〇)その過失を指し摘みて之を人に擧げ示すこと　(一一)物に執着して之を戀しく思ひて離れざること、此はその初によりてその終の結果を知るべきをいふ　(一二)その情を充分に盡さずして多少の餘地を置くこと、もし充分情を盡すときは意味淺くなるべし　(一三)味は情味なり、情味が露はれずして深しと也　(一四)趣は趣味なり、興味が多くして面白きをいふ　(一五)禮を以て過すことはむつかしきことにあらず　(一六)よく禮の本體を失はざるが難き也　(一七)勝事はすぐれて都雅なる事の意　(一八)山棲に心を繋ひこひしがること、即ち退隱生活に心を取られて超脱せぬの意　(一九)市朝は市町のこと、市中に棲むと同じく俗氣を脱せざるをいふ　(二〇)書畫を貪り戀しく思ひて之に心を取られて馬鹿になること　(二一)詩酒が他人の心に徇ひ之を迎ふる料となりて爲めに心之に囚はるればと也　(二二)その心の開け大きくして理を悟ること　(二三)撓はかき亂さるゝこと

多讀二兩句書一。少說二一句話一。讀二得兩行書一。

多く兩句の書を讀み、少しく一句の話を說けば、兩行の書を讀み得、幾句の話を說き得ん。○中人を看るには、大處走作せざるに在り。(一)豪傑を看るには、小處滲(二)

所レ見轉多二冷淡一。冥心清素。則所レ涉都厭二塵氛一。○多情者。不レ可三與定二妍媸一。多誼者。不レ可三與定二取與一。多氣者。不レ可三與定二雌雄一。多興者。不レ可三與定二去住一。○世人破綻處。多從二周旋處一見。指摘處。多從二愛護處一見。艱難處。多從二貪戀處一見。○凡情留二不盡之意一則味深。凡興留二不盡

て塵氛を厭ふ。○多情の者は、與に妍媸を定む可からず。多誼の者は、與に取與を定むべからず。多氣の者は、與に雌雄を定む可からず。多興の者は、與に去住を定む可からず。○世人の破綻の處は、多くは周旋の處より見る。指摘の處は多くは愛護の處より見る。艱難の處は、多くは貪戀の處より見る。○凡そ情は不盡の意を留むれば、則ち味深し。凡そ興は不盡の意を留むれば、則ち趣多し。○富貴の人を待つには、禮あるに難からずして、體あるに難し。貧賤の人を待つには、恩あるに難からずして、禮あるに難し。○山棲は是れ勝事なり、稍〻一たび繋戀すれば、則ち亦市朝なり。書畫の賞鑒は是れ雅事なり、稍〻一たび貪痴すれば、則ち亦商賈なり。詩酒は是れ樂事なり、少しく一たび人に徇へば則ち亦地獄なり。客を好むは是れ豁達の事なり。一たび俗子の爲めに擾さるれば、則ち亦苦海なり。

(一) その思想のつけ處が奢侈にして華やかにする處に在ること　(二) 何物を見ても冷淡にして華やかに見えざるを

生二歎欷一。○天欲レ禍レ人。必先以二微福一驕レ之。要レ看二他會レ受。天欲レ福レ人。必先以二微禍一儆レ之。要レ看二他會レ救。○書畫受二俗子品題一。三生大劫。鼎彝與二市人一賞鑒。千古異寃。○脱穎之才。處レ嚢而後見。絶塵之足。歷レ塊以方知。○名高忌起。寵極妬生。

結想奢華。則

(三) 心に常に満足して貧しきを憂へず、故に心富むといふ (四) 高位高官に居るものは、身體は常に安樂なれども精神は常に苦勞して安からず (五) その器局度量の寛くして大なること (六) 僅に三軒ある程の小村なり (七) 周圍の狹小なるありさまがその人の局量を束縛すること能はず (八) 漢の時代にては洛陽、邯鄲、臨淄、宛、成都を五都と爲し、唐代にては、長安、洛陽、鳳翔、江陵、太原を五都と爲す (九) 精神性情があくせくとして行きつまりて廣からざること (一〇) 凌ぎこえてその上に出づること、大志をいふ (一一) 一技一藝の微小の才人を愛すること (一二) 豪傑を自由自在に追ひ廻はして之を使役すること (一三) 手舞ひ手蹈みて大に歡喜するさま (一四) 啼きむせぶこと、大に悲しみて泣きむせぶをいふ、歡樂極まりて哀憫の生ずるをいふ (一五) 天がその人の禍を受くることを能く理會するや否やを看んと欲するなり (一六) 儆は警戒を加ふること (一七) 天がその人を救ふ爲めに禍を下したることを理會するや否やを看んと欲するなり (一八) 俗子は物の理の分らぬつまらぬもの (一九) 品題はよいとかわるいとか批評して品等をつけると (二〇) 三生は三世轉生の意、過去、現在、未來の三生 (二一) 大劫は大なる災難なり、佛經に天地の一成一敗を一劫といへり (二二) 鼎は三足あり神を祀る時供物を盛るもの、彝は宗廟に用ふる常器、亦供物を盛るに用ふ (二三) 之を賞美し鑑定すること (二四) 無實の罪を蒙るが如く、無法の鑑定を受け實に當らざるをいふ (二五) 穎は禾の穂先きの尖りたるもの、錐の先きが袋の中より外へぬけ出づること、大に人よりすぐれたる才をいふ (二六) 或る困難の境遇にあひてその才の見はるゝをいふ (二七) 走ることの極めて速にして塵埃の上に超佚すること、千里の名馬、名馬は土塊の上を踰て走りて然る後知らるゝなり (二八) 其の人の名譽高ければ人之を忌みきらふこと (二九) その人の寵愛を受くること極に達すれば人之を妬むをいふ

(一)結想奢華(けつさうしやくわ)なれば、則ち見る所轉(うた)ゝ(二)冷淡(れいたん)多し。(三)冥心淸素(めいしんせいそ)なれば、則ち渉(わた)る所都(す)べ

貪得者。身富而心貧。知足者。身貧而心富。居高者。形逸而神勞。處下者。形勞而神逸。○局量寬大。即住三家村裡。光景不拘。智識卑微。縱居五都市中。神情亦促。○惜寸陰者。乃有凌轢千古之志。憐微才者。乃有驅騙豪傑之心。○感慨之極。轉生嬉咲。舞踏之極。轉

得るを貪る者は身富みて心貧し。足るを知る者は、身貧しくして心富む。高きに居る者は、形逸して神勞す。下きに處る者は形勞して神逸す。○局量寬大なれば、即ち三家村裡に住むも、光景拘せず。智識卑微なれば、縱ひ五都市中に居るも、神情亦促る。○寸陰を惜む者は、乃ち千古を凌轢するの志あり。微才を憐む者は、乃ち豪傑を驅騙せしむるの心あり。○感慨の極は、轉じて嬉咲を生じ、舞踏の極は、轉じて歡欲を生ず。○天、人を禍せんと欲すれば、必ず先づ微福を以て之を驕らし、他の受くるに會するを看るを要す。天、人に福せんと欲すれば、必ず先づ微禍を以て之を儆め、他の救ふを會するを看るを要す。○書畫、俗子の品題を受くるは、三生の大劫。鼎彝、市人に與へて賞鑒せしむるは、千古の異寃なり。○脫穎の才、囊に處りて後見はれ、絕塵の足、塊を歴て以て方に知る。○名高ければ忌起り、寵極まれば妬生ず。

(一) 心に常に足らずと思ひて滿足せず、故にその心貧しといふ　(二) 常その分に安んじて滿足することを知ること

中猶有善念。爲善而急人知。善處即是惡根。○譚山林之樂者。未必眞得山林之趣。厭名利之談者。未必盡忘名利之情。○從冷視熱。然後知熱處之奔馳無益。從冗入閑。然後覺閑中之滋味最長。○貧士肯濟人。纔是性天中惠澤。閙場能篤學。方爲心地上工夫。○伏久者飛必高。開先者謝必早。

閑中の滋味最も長きを覺ゆ。○貧士肯て人を濟ふは、纔に是れ性天中(一二)の惠澤なり。鬧場(一三)能く篤學し、方に心地上の工夫を爲す。(一四)○伏すること久しき者は、飛ぶこと必ず高し。開くこと先なる者は、謝(一五)すること必ず早し。

(一)人を喜ばしむる言語はその事のよしあしを論せず、只人を喜ばしむるを主とするが故に注意すべし　(二)人を激せしむるの言語は其利あると害あるとを顧みず、只人を激せしむるを主とす、故に注意すべし　(三)廉はかどめ正しくして欲寡きこと、眞の廉者はその廉を人に示さず故に廉者なりとの評判なし　(四)廉者といふ名を立てんとする者は、是れ僞者なり、故に此の如き人はつまり欲深き貪者なり　(五)大に巧なるものは巧妙なる方術なくして拙きものゝ如きをいふ　(六)惡の根ざし也、その爲したる善はもと己の名譽を揚げんとする利己心より出でたるものなれば是れ即ち惡の根ざしたる也　(七)世より遠ざかりて山林に入り退隱の生活を爲すこと　(八)山林の生活に囚はれたる處ありて超脫せず故に退隱生活の眞の趣味を知らず　(九)冷は淸閑の境遇、熱はその反對にて權勢の境遇　(一〇)權勢を得んとして處々をかけ廻ること　(一一)冗は繁雜、閑は閑散なり、繁雜にして忙しき處より閑散なる境遇に入ること　(一二)我が天より稟けたる性質の中に具有する人をめぐむ心の現はれたること　(一三)繁盛混雜の場所　(一四)吾が精神を修養するの工夫を爲すことを得、閑靜の地に在りては眞の精神修養は出來ずとの意　(一五)謝は去るなり、花の早く開くものは亦早く散りて落つるをいふ

子安二心草舍一者。足レ登二玉堂一。佳人適二意蓬門一者。堪レ貯二金屋一。○喜レ傳レ語者。不レ可二與語一。好レ議レ事者。不レ可レ圖レ事。

いふ（一一）蚋はぶよといふ蟲、よく臭氣のあるものに集り來る蟲なり（一二）寵愛は久しく保ち難きをいふ（一三）天性のまゝ發露して之を飾らざる人（一四）草葺きのあばら屋にて貧賤の住居をいふ（一五）玉堂は玉を以て飾れる如き立派なる美屋（一六）蓬門は蓬を編みて戸と爲したる門、貧賤のもの、居る家屋なり、金屋は黄金を以て飾れる金殿なり（一七）此は機密を洩らすの恐あるを以て與に語るに足らざるなり（一八）此は己の好む所に從ひ他を議るの恐あるを以て共に事を圖るべからざるなり

甘レ人之語。多不レ論二其是非一。激レ人之語。多不レ顧二其利害一。○眞廉無二廉名一。立レ名者。正所二以爲一レ貪。大巧無二巧術一。用レ術者。乃所二以爲一レ拙。○爲レ惡而畏二人知一。惡

（一）人を甘んぜしむるの語は、多くは其の是非を論ぜず。（二）人を激せしむるの語は、多くは其の利害を顧みず。○（三）眞の廉は廉名なし。（四）名を立つる者は、正に貪と爲る所以なり。（五）大巧は巧術なし。術を用ふる者は、乃ち拙と爲す所以なり。○惡を爲して人の知るを畏るゝは、惡中猶は善念あり。善を爲して人の知るに急なるは、善處即ち是れ（六）惡根なり。○（七）山林の樂を譚ずる者は、未だ必ずしも眞に（八）山林の趣を得ず。名利の談を厭ふ者は、未だ必ずしも盡く名利の情を忘れず。○（九）冷より熱を視て、然る後熱處の（一〇）奔馳益なきを知り、（一一）冗より閑に入りて、然る後

思泉下的光景。則利欲之心自淡。○居盈滿者。如水之將溢未溢。切忌再加一滴。處危急者。如木之將折未折。切忌再加一搦。○了心自了事。猶根拔而草不生。逃世不逃名。似羶存而蚋還集。○情最難久。故多情人。必至寡情。性自有常。故任性人。終不失性。○才

を忌む。危急に處る者は、木の將に折れんとして未だ折れざるが如し。切に再び(七)一搦を加ふるを忌む。(八)○心に了すれば自ら事を了す。猶ほ根拔けて草生ぜざるがごとし、(九)世を逃れて名を逃れざるは、(一〇)羶存して蚋還た集るに似たり。○情(一一)は最も久しうし難し。故に多情の人は、必ず寡情に至る。性は自ら常あり。故に性に任かする人は、終に性を失はず。○才子、心を(一四)草舍に安んずる者は、(一五)玉(一三)堂に登るに足る。佳人、意を(一六)蓬門に適する者は、金屋を貯ふるに堪ふ。○(一七)語を傳ふるを喜ぶ者は、與に語る可からず。(一八)事を議するを好む者は、事を圖る可からず。

(一) 赫奕は、その名聲權威の世に明かに著はれ光り輝くこと (二) 世を避けて林中に遁れて退隱するやうす (三) 紛華は、はなやかなること、地位の立派にして盛なるをいふ (四) 前文の林下と相對して亦隱棲の狀をいふ (五) 盈滿は、物の充分滿足すること、富貴の極を得て滿足するものをいふ (六) 水一滴を加ふれば必ず溢れ出づべし、富貴の境に在るもの、少しにても驕り高ぶれば滅亡するに喩ふ (七) 搦は手に持つこと、一たび手に持てば忽ち折るゝに至るべし、危急の極滅亡に至るに喩ふ (八) 我が心に徹底的に了悟すればその爲す事も徹底的に爲し了るをいふ (九) 世を逃れて退隱して世事に預からざるも、名譽を求むるの念あること (一〇) 羶は羊臭のこと、なま臭き肉を

多レ積。不レ若二省レ事以守一レ倹。逞レ能以受レ妬不レ若二韜レ精以示一レ拙。○費二千金一而結二納賢豪一。孰下若傾二半瓢之粟一以濟中饑餓上。構二千楹一而招二徠賓客一。孰下若葺二數椽之茅一以庇中孤寒上。○恩不レ論二多寡一。當厄的壺漿、得二死力之酬一。怨不レ在二淺深一。傷心的杯羹、召二亡國之禍一。

力の酬を得ん。怨は淺深に在らず、傷心的杯羹も、亡國の禍を召かん。(一八)

(一) 物を好みもしくは物を惡みいやしめる心 (二) 物我へだたりて相親まず (三) 或は賢として或は愚として輕侮する心 (四) 内心はすぐれて明白にして好醜賢愚の分ちのつくこと (五) 外部は圭角なく渾然として物を容るるの度量あること (六) 天地の物を生育完成するが如き德量 (七) 訥默は言を忍びて發せず沈默すること (八) 人と離れて獨り居住すること (九) 晦は昧なり、多く事を諱り韜晦すること (一〇) 己の才能を十分に發揮すること (一一) 自己の精明の才能を包みかくして顯はさぬこと (一二) 賢人豪傑と交を納れて結びあふこと (一三) 瓢は瓠と同じく「ひさご」、瓢箪に半分程ある米粟、即ち小量の米粟をいふ (一四) 楹は大柱なり、千本程も柱の立てる大なる家屋をいふ (一五) 椽はタルキ、五六本椽のある程の小さき家屋 (一六) 孤獨にして貧窮なる生活 (一七) 壺漿は壺漿に入りたる飲物、蓋し趙宣孟桑下の餓人を救へる故事を指す(說苑一八一〇) (一八) 杯羹は一杯のアツモノ、一杯の羹を與へられざりし心の痛み、蓋し亦故事を以ていふ

仕途雖二赫奕一。常思二林下的風味一。則權勢之念自輕。世途雖二紛華一常

仕途は赫奕と雖も、常に林下的風味を思へば、則ち權勢の念自ら輕し。世途は紛華と雖も、常に泉下的光景を思へば、則ち利欲の心自ら淡し。○盈滿に居る者は、水の將に溢れんとして未だ溢れざるが如し。切に再び一滴を加ふる

當レ原二其初心一功成行滿之士。要レ觀二其末路一。

生じて志傲らざるべしと也

好醜心太明。則物不レ契。賢愚心太明。則人不レ親。須二是内精明。而外渾厚。使下好醜兩得二其平一。賢愚共受中其益上。纔是生成的德量。○好レ辯以招レ尤。不レ若二訒默以怡レ性。廣レ交。以延レ譽。不レ若二索居以自全一。厚レ費以

(一)好醜の心太だ明なれば、則ち物契せず。(二)賢愚の心太だ明なれば、則ち人親しまず。(三)須らく是れ内精明にして(四)外渾厚なるべし。(五)好醜兩つながら其の平を得、賢愚共に其の益を受けしめば、纔に是れ生成的德量なり。(六)○辯を好みて以て尤を招くは、訒默して以て性を怡ばするに若かず。(七)交を廣くして以て譽を延くは、索居して以て自ら全うするに若かず。(八)費を厚くして以て營を多くするは、事を省きて以て儉を守るに若かず。(九)能を逞しくして以て妬を受くるは、(一〇)精を韜みて以て拙を示すに若かず。(一一)○千金を費して賢豪に結納するは、(一二)半瓢の粟を傾けて以て饑餓を濟ふに孰若ぞ。(一三)千楹を構へて賓客を招徠するは、(一四)數椽の茅を葺めて以て孤寒を庇ふに孰若ぞ。(一五)(一六)○恩は多寡を論ぜず、當厄的壺漿も、(一七)死

以必忤。○怨因レ德彰。故使二人德一レ我、不レ若下德怨之兩忘上。仇因レ恩立。故使下人知一レ恩、不レ若中恩仇之俱泯上。○天薄二我福一、吾厚二吾德一以迓レ之。天勞二我形一、吾逸二吾心一以補レ之。天阨二我遇一、吾亨二吾道一以通レ之。○澹泊之士。必爲二穠艶者一所レ疑。檢飭之人。必爲二放肆者一所レ忌。○事窮勢蹙之人。

之を通ず。○澹泊の士は、必ず穠艶者の爲めに疑はれ、檢飭(二三)の人は、必ず放肆者(二四)の爲めに忌まる。○事窮り(二五)勢蹙まるの人は、當に其の初心(二六)を原ぬべし。功成り行滿つるの士は、其の末路(二七)を觀るを要す。

(一) 雅吝は、物ををしみ、やさかなるけちのこと (二) 心の卑劣にして物ををしみすること (三) 風雅なる道、いやしからざる上品の道をいふ (四) 美はしき立派なる行爲 (五) 甚欲に過ぐること (六) 謹直に過ぎて、却て正道に副はざるをいふ (七) 機心は機變の心にて巧みに詐る心をいふ (八) 表面は拙く見えて、その中に巧妙の處あること (九) その德その才を晦まし隱して而も却てよくその用を致すこと (一〇) 表面は濁れるやうに見えて内部は清白なること (一一) 外面屈するが如くにして却てこれ伸長するなり (一二) 德は恩德なり (一三) 貧窮の時の安康が長つゞきのすること (一四) 奢は欲奢也、ものを得んと望むこと、奢はぜいたくすること (一五) 饕は食に飽くこと、欲望を滿たし滿足するなり (一六) 利交は利益を得んとして交はること (一七) 怨と德とは相待つものにて、一方に德といふことあり、故に一方に怨といふことも出來るなり、德は恩德なり (一八) 恩も仇も兩つながら忘れて心中に存せざること (一九) 迓は迎なり、天の禍を下すと謂ふ時我は德を厚くして之を迎ふ (二〇) 我が心を安逸ならしめて (二一) 我が境遇を困難ならしむること (二二) 我が行ふ道を圓滿無碍にして塞さふる所なからしむ (二三) 檢飭はその身を檢束し攻防するまじめなる人 (二四) 放肆は我がまゝ勝手の振舞をなすもの (二五) 事の行きつまり、成りゆきのちゞまり逼迫して大に困難の境遇にあるもの (二六) その初め事を爲す時の心にかへりて之を尋ね求むべし必ずや其窮阨につきて亦一路の光明を見出すべしと也 (二七) その最後の必ず失敗に歸するを觀ば、攻循の念

居ニ事中一。當レ忘ニ利害之慮一。

又は趣ること、平常事なき時の面容なり　（一七）謂する事の外に身を置くも宜しく十分に觀察して何れが利にして何れが害なるかの悧を十分知り盡すべしと也　（一八）事を引受けてその事を爲すものは己の身其事の中に在りながらも、常に利害に關する思慮を全く忘れて念頭に置かざるべしと也

儉美德也。過則爲ニ慳吝一。爲ニ鄙嗇一。反傷ニ雅道一。讓懿行也。過則爲ニ足恭一。爲ニ曲謹一。多出ニ機心一。○藏ニ巧于ヒ拙一。用レ晦而明。寓ニ清于ヒ濁一。以レ屈爲レ伸。○彼無レ望レ德。此無レ示レ恩。窮交所ニ以能長一。望不レ勝レ奢。欲不レ勝レ饜。利交所ニ

儉は美德なり。過ぐれば慳吝(一)と爲り、鄙嗇(二)と爲り、反りて雅道(三)を傷る。讓は懿行(四)なり。過ぐれば足恭(五)と爲り、曲謹(六)と爲り、多くは機心(七)を出す。○巧(八)を拙に藏すれば、晦(九)を用ひて明なり。(一〇)淸を濁に寓すれば、屈(一一)を以て伸と爲す。○彼には德を望む無かれ、(一二)此には恩を示す無かれ。窮交(一三)能く長き所以なり。望は奢(一四)に勝たず、欲は饜(一五)に勝たず、利交(一六)必ず忤ふ所以なり。○怨(一七)は德に因りて彰る。故に人をして我を德とせしむるは、德怨の兩つながら忘るゝに若かず。仇は恩に因りて立つ。故に人をして恩を知らしむるは、恩仇(一八)の倶に泯ぶるに若かず。○天我が福を薄くすれば吾は吾が德を厚くして以て之を迓ふ(一九)。天我が形を勞すれば、吾は吾が心(二〇)を逸せしめて以て之を補ふ。(二一)天我が遇を阨(二二)すれば、吾は吾が道を亨らしめて以て

過レ高。當レ原二其可レ從。○不レ近二人情一。擧レ世皆畏途。○不レ察二物情一。一生俱夢境。○遇二沈沈不レ語之士一。切莫レ輸レ心。○見二悻悻自好之徒一。應レ須レ防レ口。○結レ纓整レ冠之態。勿三以施二之焦頭爛額之時一。繩趨尺步之規。勿三以用二之救レ死扶レ傷之日一。○議レ事者。身在二事外一。宜レ悉二利害之情一。任レ事者。身

士に遇ひては、切に心を輸す(一一)莫かれ。悻悻(一二)として自ら好しとするの徒を見ては、應に須らく(一三)口を防ぐべし。○纓(一四)を結び冠を整ふるの態は以て之を焦頭爛額(一五)の時に施す勿かれ。繩趨尺步(一六)の規は、以て之を死を救ひ傷を扶くるの日に用ふる勿かれ。○事を議する者は、身、事外(一七)に在りて、宜しく利害の情を悉すべし。(一八)事に任ずる者は、身、事中に居りて、當に利害の慮を忘るべし。

(一) 目の前にてその人を譽むる　(二) その人の知らざる所にて之を惡口すること、此は凡そ人と交はるにその人を譽めて悦ばしむるは易けれど其人を保護して背後に於て毀りなからしむるは難きなり　(三) 交りて程なく仲善くして狎ぶこと　(四) 久しく交はりても敬するの念薄くなりて厭ふが如きに至らしめずと也　(五) 太は甚に同じ、甚だ嚴格に過ぐること　(六) その叱責を受くることの出來る程にすること　(七) 原はその本原を尋ね求むること、從ふべきや否やを尋ね考ふべきをいふ　(八) 道路の險阻にして畏るべき者、依りて人生に遭する危險にして畏るべきをいふ　(九) 夢の中に居るが如き境遇にして茫々として眞僞の分らぬことをいふ　(一〇) 沈々は沈默して語らざる狀　(一一) 輸は眞心を盡すこと、その心測り難きを以て決して眞心を盡して語るべからずと戒むるなり　(一二) 悻々は憤怒の貌、人言を容るゝ量なき也　(一三) 口を防ぎ止めてその人と語らざること、此は褊狹にして人の好惡を容るゝ量なきを以て口を防ぎて言ふべからざるなり　(一四) 纓は冠の紐なり、此は平常無事なる時の從容をいふ　(一五) 額を火にてこがし、頭をやけどして焦らすこと、火災を救ふ際にて、急變の場合をいふ　(一六) 繩法に循ひて正しく歩み

來鎭定之操。還向紛紜境上勘過。○市恩不如報德之爲厚。要譽不如逃名之爲適。矯情不如直節之爲眞。

景色、人生の安穩平靜に喩ふ (八) 鐙は推しひらくこと (九) 辛苦艱難の如き非常のことに喩ふ (一〇) 脚根は足もと、立脚地といふ如き意 (一一) 澹泊は心のさつぱりとして欲寡きこと (一二) 穠艶は花の多くして美しきこと、轉じて奢侈贅澤をする富貴の境遇をいふ (一三) 如何なる變事ありても鎭まり定まりて動かぬ節操なり (一四) 紛紜は事の入り亂れたること (一五) 經驗考察し來るべし (一六) 恩を人に市り與へて恩をきせること (一七) 人に受けたる恩德を報ゆるは尤も人情厚き行爲なり (一八) 名譽を得んとして求むること (一九) その情を矯正して表面を飾ること

使人有面前之譽。不若使人無背後之毀。使人有乍交之懽。不若使人無久處之厭。○攻人之惡。毋太嚴。要思其堪受。敎人以善。毋

人をして面前(一)の譽有らしむるよりは、人をして背後(二)の毀無からしむるに若かず。人をして乍(三)ち交るの懽有らしむるよりは、人をして久(四)しく處るの厭無からしむるに若かず。○人の惡を攻むるには、太(五)だ嚴なること毋かれ、其の受(六)くるに堪へんことを思ふを要す。人に敎ふるに善を以てするには、高きに過ぐること毋かれ。當に其の從ふ可きを原(七)ぬべし。○人情に近からざれば、世を擧げて皆畏途(八)なり。物情を察せざれば、一生倶に夢(九)境なり。○沈沈(一〇)として語らざるの

倚高才而玩世。背後須防射影之蟲。飾厚貌以欺人。面前恐有照膽之鏡。○怪小人之顛倒豪傑。不知慣顛倒方爲小人。惜吾輩之受世折磨。不知惟折磨乃見吾輩。○花繁柳密處撥得開。纔是手段。風狂雨急時立得定。方見脚根。○澹泊之守。須從穠艶場中試

高才に倚りて世を玩べば、背後須らく影を射るの蟲(一)を防ぐべし。厚貌(二)を飾りて以て人を欺かば、面前に恐らくは膽を照すの鏡(三)有らん。○小人の豪傑(四)を顛倒するを怪むも、顛倒に慣るれば方に小人と爲るを知らず。吾輩の世の折磨(五)を受くるを惜むも、惟〻折磨乃ち吾輩を見るを知らず。(六)○花繁く、柳密なる處、(七)撥し得て開けば、纔に是れ手段なり。(八)風狂ひ雨急なる時、立ち得て定まれば、方に脚根(一〇)を見る。(九)○澹泊(一一)の守は、須らく穠艶場(一二)中より試み來るべし。鎭定(一三)の操は、還つて紛紜境(一四)上に向ひて勘過(一五)せよ。○恩を市る(一六)は、德に報ゆるの厚爲る(一七)に如かず、譽(一八)を要むるは、名を逃るゝの適爲るに如かず、情(一九)を矯むるは、節を直くするの眞爲るに如かず。

(一) 短狐一名蜮とも射工ともいふ、狀鼈の如く、三足あり、水中に在り沙を含みて人を射て害を爲す、此は背後に害を爲すものあるをいふ (二) 厚貌は外貌を厚く立派に飾ること (三) 咸陽宮に方鏡あり、表裏洞明なり、人之を照せば、腸胃五臟を見るべしといふ、此は其人の心中を明かに見透すをいふ (四) 顛倒の語詩經に出づ (五) 折磨は世の中より色々とくじきみがかれて修鍊すること (六) 折磨によりて吾輩の人物の眞價を見ると也 (七) 春の佳き

食二中山之酒一。一酔千日。今世昏昏逐逐。無二一日不一レ酔。無二一人不一レ酔。趨レ名者。酔レ於朝。趨レ利者。酔レ於レ野。豪者酔レ於二聲色車馬一。而天下竟爲二昏迷不醒之天下一矣。安得二一服清涼一。人人解レ醒。集二醒第一一。

酔古堂剣掃 巻一

醒

中山(一)の酒を食ひて、一酔千日、今世昏昏逐逐(二)、一日として酔はざる無く、一人として酔はざる無し。名(三)に趨る者は朝(四)に酔ひ、利に趨る者は野(五)に酔ひ、豪者(六)は聲色車馬に酔ひ、而して天下竟に昏迷不醒(七)の天下と爲る。安にか一服の清涼(八)を得て、人人醒(九)を解かん。醒第一を集む。

(一) 狄希は中山の人、能く千日酒を造る、之を飲めば、千日酔ふといふ。昔晉の劉玄石中山酒家に至り酒を買ふ、酒家千日酒を與へ其の節度を言ふを忘る、歸りて家に至り大に酔ひて死するが如し、家人權りに之を葬る、三年棺中に在り、酒家千日の滿つるを計りて乃ち往いて棺を開けば始めて醒めたりと云ふ　(二) 昏々は、昏くして明かならざること。逐々は、その望む所を得んとして馳せ廻ること　(三) 己が名譽を得んとして汲々たるものは朝廷に在りて酔ふが如し　(五) 野は民間のこと　(六) 豪者は奢侈贅澤をするもの、即ち富豪の者　(七) 理に昏くして迷ひ、酒の醒めざるが如く也　(八) 清涼は清涼散といふ藥にて、之を飲めばその氣を清清せしむるもの　(九) 醒は酒に病むことにて、所謂二日酔なり

刀割。君有筆兮殺無血。可題劍掃。付之剞劂。予曰。一編自手率爾問世。得無爲腹笥武庫者嗤乎。予笥不能盡書。余目不能盡笥。余手不能盡目。安用此戔戔者。友曰。不然。淸史澆腸。伐言洗胃。片語隻字。皆可會心。但莫放過。何以多爲。余唯唯搦管書之以識。予逢世之拙。聊以斯編寄趣云。時甲子重陽陸珩題

自叙

昔人云。一願識盡世間好人。二願讀盡世間好書。三願看盡世間好山水。或曰。盡則安能。但身到處。莫放過耳。旨哉言乎。余性懶。逢世一切炎熱爭逐之場。了不關情。惟是高山流水。任意所如。遇翠叢紫莽。竹林芳徑。偕二三知己。抱膝長嘯。欣然忘歸。加以名姝凝盻。素月入懷。輕謳緩板。遠韻孤簫。青山送黛。小鳥興歌。儕侶忘機。茗酒隨設。余心最歡。樂不可極。若乃閉關却掃。圖史雜陳。古人相對。百城座列。几榻之餘。絕不聞戶外事。則又如桃源人。尚不識漢世。又安論魏晉哉。此其樂更未易一二爲俗人言也。第才非夢鳥。學慚半豹。而一往神來。輿會勃不能已。遂如司馬公。案頭常置數簿。每過嘉言格論。麗詞醒語。不問古今。隨手輒記。卷以部分。趣緣旨合。用澆胸中傀儡。一掃世態俗情。致取自娛。積而成帙。今秋落魄京邸。睹此寂寂。使鄧禹哂人。未免有情。亦復誰能遣此。因共友人。問雨花之址。尋采石之巖。江山歷落。使我懷古之情更深。翻出所手錄。快讀一過。恍覺百年幻泡。世事棋枰。向來傀儡。一時俱化。雖斷蛟剸革之利。亦不過是。友人鼓掌叫絕曰。此眞熱鬧場。一劑清涼散矣。夫鏌邪鈍兮鉛

本書は早く世に出で、陸紹珩が醉古堅劒掃を編するに及び、本書の語を采るもの過半なりき、其影響の少なからざりしを徵すべし。　我邦に傳來せしは、何れの時に在るや知るべからず、文政五年(一八二二)加賀の學者に林瑜といへるものあり、始めて上木して之を同志に公にし、傳寫の勞を省けり。明治年間に至りて更に活版を以て成れるもの兩三種出で頗る世に行はる。

岡田正之識

烈焰成池、一念警覺、船登彼岸。念稍異、境界頓殊、可不愼哉」と、又其書を引かざるも、其說に類したるものには、曰く「一燈螢然、萬籟無聲。此吾人初入宴寂時也。曉夢初醒、群動未起、此吾人初出混沌處也。乘此而一念廻光、炯然返照、始知耳目口鼻皆桎梏、而情欲嗜好悉機械矣」と、此等は最も露骨に佛教思想を見はせるものなり。

之を要するに、著者の思想は、儒教を本として、老佛の二教を加味し、專ら天爵的の人格を造るを以て其の主眼とせり。故に身を持するには圓滿を旨とし、世に處するには退讓を重んじ、俗情は力めて之を脫し、物累は極めて之を絕ち、形に囚はれず、跡に泥まず、窮達死生の爲に志を易へず、最も高尙に、最も澹泊に、最も瀟洒的に、最も光明正大に、自然を樂みて、運命に安んじ、以て自己の天眞を全くせんことを期したるものなり。

第五　流傳

本、待人寛一分是福、利人實利己的根基」と曰ふは、老子の「將欲奪之、必固與之」と相似たり。此の如き効果を豫想しての動作は眞の人格あるものの爲す所にあらず、老子の學派には往々此の弊あり、著者も亦其坑に陷るものなり。

世或は著者が退讓を說きしを以て、進取の精神を喜ばざるものとなせるは誤れり。著者は修養上に對しては、勇往邁進して一路の向上を圖らんとする風あり、「德業毋落人後、修爲毋減分中」と云ひ「子弟者大人之胚胎、秀才者士夫之胚胎、此時若火力不到、陶鑄不純、他日涉世立朝、終難成個令器」と云へるは、警告激勵の言にあらずや。著者の此等の說は老子學の一邊に偏したるものにあらざるを證せるものなり。

●佛教●　著者が佛教思想の影響を受け居りしことは、上文に引ける高僧の詩偈が、既に其一斑を示せるを以て、此に再び擧證する要なきも、尙二三の例を揭げば、其幻を說き、惺惺を口にする如きも固り然り、釋氏の說を明言して引けるものには、曰く、「人生福境禍區、皆念想造成、故釋氏云、利欲熾然、卽是火坑、貪愛沈溺、便爲苦海、一念淸淨、

云ひ「尙奇節不如謹庸行」と云ひ「驚奇喜異者、無遠大之識、苦節獨行者、非恆久之操」と云ふ、務めて平和圓滿の行に歸せしめんとするものにして中庸の主義に外ならず。

貪私嗜慾は其最も擯斥する所なり、故に曰く「人只一念貪私、便銷剛爲柔、塞智爲昏、變恩爲慘、染潔爲汚、壞了一生人品」と、貪慾の害は豈に畏るべきものにあらずや。　若し夫の「靜中靜非眞靜、動處靜得來纔是性天之眞境、樂處樂非眞樂、苦中樂得來纔見心體之眞機」と云ひ「心虛則性現、不息心而求見性、如撥波覓月、意淨則心淸、不了意而求明心如索鏡增塵」と曰ふ如きは、宋明儒學の性理說と其致を一にせるものなり。

老子の說　退讓主義と深藏の態度、卽萬事に控目にして、深く內に藏し外に見はさざるとは、老子の尙ぶ所なり。　著者も處世の方法として盛んに此の主義と態度とを主張せり。　曰く「藏巧於拙、用晦而明、寓淸於濁、以屈爲伸。　眞涉世之一壺藏身之三窟也」と、又曰く「徑路窄處留一步與人行、滋味濃的減三分讓人嗜、此是涉世一極安樂法」と、更に又讓步が進步の本なることを說きて「處世讓一步爲高。　退步卽進步的張

らざるなり。

第四　思想

本書を讀むものは、何人と雖も、直に著者の思想が儒教と老子の說と佛教とを融會化合したるものなるを知るべし。玆に聊か分析を試みん。

儒教　開卷第一に「棲守道德者、寂寞一時。依阿權勢者、淒涼萬古。達人觀物外之物、(道德)思身後之身。(功德名譽)寧受一時之寂寞、毋取萬古之淒涼。」と云へるは著者が儒教思想の本領を表白したるものなり。意思の鍛鍊磨礪を求め、心事の光明正大を重んぜしは、儒教の主旨にあらざるなし。「彼富我仁、彼爵我義、君子固不爲君相所牢籠。人定勝天、志一動氣、君子亦不受造物之陶鑄」といふに至りては特立獨行、俯仰天地に愧ぢざるものにあらざれば及ぶ能はず、是れ全く孟子の學說に承けしものなり。　然れども奇異矯激の言行は、著者の斷じて取らざる所、「神奇卓異非至人、至人只是常。」と

拔」と、又「酒嘗新熟後、花賞半開時」の諸句より出で、其の古詩の四句を引けるものには「昔日所云我、而今却是伊、不知今日我、又屬後來誰。」（擊壤集には昔日を曩日に、而今を如今に、屬を是に作る。）あり著者の擊壤集（邵康節の詩集）を耽讀せしことと想ふべし。

高僧の詩偈　前人の詩句を引けるものとしては、邵康節の外に白樂天あり、曹松あり、晁補之あり、王陽明あり、其高僧の句を取りたるものを擧ぐれば左の如し。

（一）　禪宗曰、饑來喫飯倦來眠。（禪林句集には倦を困に作る、陽明全集は本書に同じ。）

（二）　古德云、竹影掃堦塵不動、月輪穿沼水無痕。（普燈錄・五燈會元に、月輪穿沼を月穿潭底に作る）

（三）　前人云、暴富貪兒休說夢、誰家竈裏火無煙。（貧兒、貞和集には乞兒に作る）

（一）は唐の大明禪師懶瓚の歌中の句なり、王陽明の「答人問道」の詩の首句に同一の句あるは、禪師の句を用ひしものなり。（二）は唐の祖燈禪師志璿の上堂の語中にあり。（三）は無量壽の作りし詩の句なることは、義堂の貞和集に見えたり。此等は著者が眼を禪門の書に注げるを徵すべく、佛教思想の本書中に散見するものは怪むに足

めて少く、二十八字より四十二字に至るもの最も多し。而して皆對偶を以て成る、試に二三の例を擧げんか、「疾風怒雨」は「霽日光風」と對し、「三分俠氣」は「一點素志」と對し或は曰く、「木石的念頭、雲水的趣味」と、或は曰く、「心體光明暗室中有青天、念頭暗昧白日下生厲鬼」と、或は曰く、「日既暮而猶烟霞絢爛、歳將晩而更橙橘芳馨、故末路晩年、君子更宜精神百倍」と。其如何に辭を修め調を諧へしかを觀るべし。

辭句の出處 辭句の出處を求むれば、詩經あり、周易あり、論語・孟子あり、老子・莊子鶡冠子あり、文選あり、世說あり、佛書あり、宋明學者の語錄詩句より來るものの亦少からず。

「鶯花茂而山濃谷艶、總是乾坤之幻境。水木落而石痩崖枯、纔見天地之眞吾。」とある水木以下は、朱子の「木落水盡千崖枯、迥然我亦見眞吾」の句より脱胎したるものなり。邵康節の詩句に取るもの殊に多く、「月到風來」の語は、「清夜吟」の「月到天心處、風來水面時」の句に出で、「花看半開、酒飮微醉、此中大有佳趣。」とは、「飮酒無敎成酩酊、賞花愼勿至離

格言となすべし。著者も亦此に共鳴し、取りて其書に名けしものは、其書が自己の艱苦を嘗めし閲歴上より得來りしを示すと同時に、世の風波に乘り出さんとする人を警醒せんとの意を寓したるものなるべし。

第三　體裁と文辭

體裁　本書は語錄の種類に屬すべきものなり。明代の學者には此の種の著殊に多かりしが、呂坤の呻吟語の如きは旣に之が本を爲ししものならん。然れども彼は卷數多く、且つ部門を設け、文章も長短一ならず。本書は纔に前後の二集にして、部門もなく、得るに隨ひて雅潔なる律語を以て之を綴れり。是れ兩書の異なれる點なり。

文辭　前集は凡そ二百二十四條、後集は凡そ百三十四條あり。毎條の字數は短きは十四字、長きも七十四字に過ぎず、其中四十九字より七十四字に至るものは極

兼ねて佛書及び禪僧の語錄を窺ひ、詩文は其嗜む所なりしならん。固より純粹なる道學者にあらざるべく、さりとて韻事のみを事とせる風流人にもあらざるべし。一生の經歷は順境よりも逆境多く、得意の時代よりも失意の時代の多かりしにあらざるか、書中に述ぶる所の極めて世態人情に痛切なるものあるは此が爲めなるべく、將た著者の名の終に著はれずして、事蹟の傳はらざりしも、亦此に由れるなるべし。但し其分に安んじて身を善くし、自ら慰め自ら警め、又自ら力めしことの歷然として文字の表に見はれしは、著者の多とすべき所以なり。

書名　菜根の書名は、宋の汪信民の「人常咬得菜根、則百事可做」の語に取りしものなり。此の語の大意は、人よく寒苦に耐へ、淡泊に甘んじて、物質の爲めに精神を動かさざれば、總べての事の爲すべきを言ひしなり。胡安國は此の語を聞きて節を擊ちて歎賞し、朱子も小學に之を引き、將た「今人を觀るに菜根を咬む能はざるに因つて、其本心を失ふもの衆し、戒めざるべけんや」といふ。信民の語は誠に不磨の

菜根譚解題

第一　總略

菜根譚は明の洪自誠の著にして、修養上に於ける意見を斷片的に錄したるものなり。自己に對する教訓あり、他人に對する心得あり、世の事物に對する注意あり、其文に至りては、辭藻を修め、聲調を善くせしを以て、宛然詩歌の趣あり。要するに一部の趣味ある修身處世訓の書とも謂ふべし。

第二　著者と書名

●著者●　洪自誠は還初道人と號せり。其鄕貫・生卒・事蹟並に詳ならず。陸紹珩の醉古堂劍掃に本書の語を引ける所に據れば、明の天啓以前の人なることは明なり。今本書に就いて著者其人の性行を推量すれば、著者は經史に通じ、諸子百家に涉り、

以上掲げ來りし如く十二部に分たれたるが、其部中に收められたる語句を觀るに、必ずしも其部に合せざるものあり、寧ろ分類の如何なる點より來りしかを怪まるゝもの極めて多し。故に十二の名目は本と著者の理想とせる處を現したるものにして、其精神は全編に散在分布し、卷を分ち部を別ちしは一時の便宜に出で、深く區別に拘泥するに足らずとなすの適當なるに如かざるなり。

第四　流傳

本書は明の天啓四年（寛永元年二二八四）に上梓せられたるものなるが、我邦に傳はりしは何れの時に在るを詳にせず。天保七年（二四九六）に成れる市河米菴の墨場必携に此の書を引用せしもの尠からざれば、此の頃より文人墨客の間に珍重せられしなるべし。嘉永六年（二五一三）に至りて池内陶所は穎醇と謀りて飜刻せり是より。廣く世に布き學者の愛讀する所となれり。

岡田正之識

才識膽力の人に過ぐるものを豪といふ。世は滔々として守舊の徒、近視の輩を以て充たされ、一人の豪も得て求むべからず。幸に倜儻の士の一言一字を以て不平を寫すものあらば、爭で沒書となすべけんや。豪の部には此の趣の語句を收めたり。

（一一）法　百二十則

法とは一定の法則なり、迂愚の人は法に泥みて出づる所を知らず、超脫の士は法を無みして規律を破る。唯眞の士君子は偏せず倚らず、放佚することなきを期するのみ。法の部には此の趣の語句を收めたり。

（一二）倩　百六十四則

美の人を惱殺する如きものを倩といふ。倩も容易に得べからず、美人に其韻あり、名花に其致あり、靑山綠水に其丰標あり。文士の發する語句の中にも、韻を盡し致を極め丰標を領略するものあり。倩の部には此の趣の語句を收めたり。

（七）韻　　百四十二則

韻とは風雅なり、精神は肉體と共に高く塵俗を脱し、淸く風雅に從ふ、之を士人の韻といふ。韻の部は此等の意味の語句を收めたり。

（八）奇　　七十八則

奇とは奇警なり、奇拔なり、奇怪なり、驚天動地的の語句を奇といふ、而かも其中に動かすべからざる眞理と無量の意味とを含む。奇の部には此等の趣の語句を收めたり。

（九）綺　　百十二則

艶あり、香あり、人をして腸を斷ち魂を銷せしむるものを綺といふ。佳人の情を含みて柳を問ひ、才子の恨に沈みて花を賦する如きは綺の一例なり。綺の部には此等の纒綿たる情緒の語句を收めたり。

（一〇）豪　　百九則

（四）靈　　百七十三則

神妙不可思議の力ありて、萬古滅すべからざるものは靈なり、一言の微にして千歳新なる如く、一字の義にして百世見るが如きものは言語文字の靈なり。靈の部は此の神靈的の語句を收めたり。

（五）素　　二百三則

素とは白なり、質なり、何等の色彩を加へず、何等の人工を施さず、其處に一種の本質的自然の趣致を有したるものを素といふ。自然界と人間界とを問はず、往く所として素あらざるなし。素の部は此の本質的の語句を收めたり。

（六）景　　九十二則

景とは光景なり、詩も或は及ばず、畫も或は盡くすこと能はざる風致の光景なり。若し高人韻士の片言數語を以て此の光景を寫し盡くすものあらんか、高人韻士の一大詩畫とも謂ふべし。景の部は光景の詩畫に當つべき語句を收めたり。

（一）醒　　二百八則

醒とは人を警醒するなり、世を擧げて名に醉ひ利に醉ひ慾に醉ひ聲色車馬に醉ひ昏々曚々として亂醉せざるなし。此等の亂醉者を警醒せんとするには一服の解醒藥を與へざるべからず、醒の部は解醒的の語句を收めたり。

（二）情　　百十三則

情とは心の底より出づる情なり、死生を超絕したる眞情なり、義理を以て爭ふべからざる人情なり。男女の情あり、朋友の情あり、忠臣孝子の情あり、山林風月の自然美に對する情あり。情の部は此等の情趣の語句を收めたり。

（三）峭　　百九則

峭とは峻嚴にして犯すべからざるをいふ、一片報國の誠を以て厲しく嚴しく容赦なく世の軟弱墮落の者を警めんとするに在り。峭の部は此の警告的の語句を收めたり。

●失考● 引用中、時に誤謬なきにあらず、「爲人性僻耽佳句、語不驚人死不休」の句は、杜甫が其本領を歌ひたる名句にして、人口に膾炙せるものなり。 本書は之を引きて李太白の句となすは、失考にして、著者も偶、訂正に及ばざりしものならん。

第四 内容

劒掃の書名は既に奇なり、其十二部の名を命ずる各、一字を以てして更に奇なるものあり、毎巻頭の小序に至りては又更に奇なるものあり、且つ到る處に一世を罵倒して憤悶の情を漏し、曰く「今世昏昏逐逐、無一人不醉、無一日不醉」と、曰く「我輩寂處牕下、視一切人世、俱若蠛蠓嬰蜺、不堪寓目」と、又曰く「今世短視尺歩之輩、與夫守株待兎之徒、是不鉗鎖而囚、不束縛而阱者也」と、 著者は此の書を借りて滿腔の不平を訴へたるものなり。 今十二部の名を掲げ、部中收むる所の語句の數を記し、併せて小序に據りて其名を釋明せば內容の一斑を知らるべし。

書目五十種を擧げたり、此は其大體を擧げたるものにして引用の全部を盡したるものにあらざるべし、現に菜根譚の如きは、著者の最も多く采れる所なるにも拘らず、其の書名を著はさざりき。

刪•改• 書中の語句には、著者の作に係るものもあるべし、然れども區別注記せざりしを以て知るべからず。 市河米菴の墨場必携に剔掃の文を引きて盡く陸紹珩の語となせるは深く考へざるものなり。 採用語中には著者の剪裁を施して原を加刪したるものもあり、試に一例を擧げん。

安詳是處事第一法、謙退是保身第一法、涵容是處人第一法、洒脱是養心第一法。

此の語は呂新吾の呻吟語に取りしものなり、呻吟語には左の如く見ゆ。

寧耐是思事第一法、安詳是處事第一法、謙退是保身第一法、涵容是處人第一法、置富貴貧賤死生常變於度外、是養心第一法。

と、著者の如何に文字を加刪せしかを觀るべし。

を討つの柄なく、而して一片報國の忱、惟寸楮隻字の間に於て之を見はし、天下の鬚眉(男子)にして婦人の如き者をして聳然と起たしめん」と。是れ豈に著者の心血を吐露したるものにあらずや。其交る所には陳繼儒・趙宧光等の諸名士ありき。

書名 著者は此の書を劍に比し、之に由りて世の紛塵汙穢を一掃せんと欲す、故に名けて劍掃といふ。著者の寓意の躍然たるものあり。

第三　體裁と引用

體裁 本書輯むる所は、對語あり、散文あり、詩の句あり、短きは六字、長きは百五六十字に至り、長短錯雜して其の體一ならず。凡そ十二部に分ち、一部を一卷とし、每卷の首に小序を附して其部の趣旨を述べたり。凡例に此の事を叙して「從來選清言者、倶間雜不倫、今以意趣相合者、擬議分類、類各有引、引各導窾、細繹自明」と云へり。

採用書 著者は博く史記漢書世說等より采り輯めたるものなるが、卷首に引用

り、一門文學を好み、著者の兄には文龍・紹璉・汝培・文豹あり、侄には我銘あり、皆文名あり。　著者は幼より他の嗜好なく、唯古人の書を讀むを以て樂とす、才氣あり、詩文を善くし、錦腹繡口の稱あり。　天啓四年（皇紀二二八四）に、其友人何其孝と共に南京に出でて試に應ぜしが志を得ず、劍掃の自序に、「今秋落魄京邸……共友人問雨花之趾、尋采石之巖、江山歷落、使我懷古之情更深」と云ひ、何其孝の劍掃の序にも、「甲子秋偕予襲寸劍走秣陵、振衣鳳臺之巓、濯足燕磯之流、遠眺鍾山氣氳、近挹桃渡笙歌、目飽心醉、此中興致不淺」といふ、二士相携へて名勝舊蹟の間に放浪し、鬱抑不平の情を遣りしものなるべし。　當時明室大に衰へ、士氣振はず、外には胡虜の跳梁するあり、内には宦官の專橫あり、東林・齊・浙の諸黨の爭は日一日より甚し。　著者は志を得ざるを以て、愈々世態・時事の非なるを感じ、手錄の舊鈔を再檢完成し、以て慷慨發憤の情を寓せり。　劍掃は卽ち是なり。　嘗て曰く、「今天下は皆婦人なり、封疆其地を縮むるに、中庭の歌舞猶喧し、戰血其人を枯らせるに、滿座の貂蟬（顯官）自若たり、我輩書生既に亂を誅し賊

醉古堂劍掃解題

第一　總略

醉古堂劍掃は明の陸紹珩が古今の名言麗句を集めたるものなり。修身處世の訓もあれば、風流文雅の事もあり、獨り智德を資け、心膽を壯にするのみならず、頗る趣味性を養ふに足るものあり。菜根譚とはほゞ其性質を同じくせるも、彼は專ら自家の言を錄し、此は主として古人の語句を集めたり、是を兩書の最も異なれる點とす。

第二　著者と書名

著者　陸紹珩は字を湘客といひ、江蘇の松陵（今の蘇州府震澤縣）の人なり。其祖先に天隨先生と稱するものあり、醉古堂と號す、蓋し一鄉の碩學なるべし。著者は其世孫な

目次

醉古堂劍掃

卷一 醒……一
卷二 情……六一
卷三 峭……九一
卷四 靈……一一七
卷五 素……一六四
卷六 景……二一三
卷七 韻……二五六
卷八 奇……二九二
卷九 綺……三一二
卷十 豪……三四〇
卷十一 法……三七二
卷十二 倩……四〇二

菜根譚

前集……四四九
後集……五三八

——(目次終)——

例言

一醉古堂劍掃、菜根譚の各全部を納めて本書一卷とす。

一醉古堂劍掃は流布板本を以て底本とし、明に誤字と認むべきものは之を改めたり。

一醉古堂劍掃に於て、原文中字傍に黑點を附したるは、流布本標註の說によりて改譯せる個處なり。

一醉古堂劍掃の原文譯文ともに文字と同大の○を加へたるは、原本に在りては別行を爲す所と知るべし。

一菜根譚亦流布板本を以て底本とし、而して底本の通り一章一項目の形式による事とせり。

BL
1558
C5L8

LIBRARY
SEP 22 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

醉古堂劍掃　全

菜根譚　全

BJ
1558
C5L8

Lu, Shao-heng
Tsui ku t'ang chien sao

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

有朋堂文庫